日 本 中 国 語 学 会

第 76 回 全国大会 予稿集

2026 年 11 月 14 日（土）・15 日（日）

岡 山 大 学



日 本 中 国 語 学 会

THE CHINESE LINGUISTIC SOCIETY OF JAPAN

2026

日本中国語学会第 76 回全国大会プログラム

2026 年 11 月 14 日（土）、15 日（日）　岡山大学（津島キャンパス）

●日程

1 日目　11 月 14 日（土）

10:15～11:45　評議会（津島地区東キャンパス E4 エリア一般教育棟 B 棟　2 階 B21）

13:00～13:05　開会式・学会奨励賞授与（同一般教育棟 A 棟 2 階 A21）

13:05～15:00　特別講演（同上）

15:15～17:15　ワークショップ（同上）

17:30～18:15　総会（同上）

18:30～20:30　懇親会（生協食堂ピーチカフェテリア）

2 日目 11 月 15 日（日）

9:30～11:10　【午前の部】分科会研究発表

（一般教育棟 A 棟 3 階 A31，A32，A34，A36，A37，B 棟 3 階 B32，B33）

11:20～12:10　ポスター発表（一般教育棟 C 棟 2 階講義室 C24）

12:10～13:00　昼食・休憩（一般教育棟 A 棟 3 階 A35, 同 C 棟 2 階 C25）

13:00～15:55　【午後の部】招待発表＆分科会研究発表

（一般教育棟 A 棟 3 階 A31，A32，A34，A36，A37，B 棟 3 階 B32，B33）

●発表者一覧

第 1 日

13:05-15:00　＜特別講演＞　田窪行則

15:15-17:15　＜ワークショップ＞　内田慶市、奥村佳代子、塩山正純、千葉謙悟

第 2 日

13:00-14:45　＜招待発表＞　クリスティーン・ラマール、佐々木勲人

9:30-15:55　＜分科会発表＞　(筆頭発表者のみ)

	第 1 会場	第 2 会場	第 3 会場	第 4 会場	第 5 会場	第 6 会場	第 7 会場
9:30～10:00	劉驫	時彦卿	楊濬豪	余仁偉	劉陽	孫雪婷	張祁凱
10:05～10:35	望月雄介	張方捷	那宇星	三輪大樹	卞春婷	鄭暁峯	葉瑞娟
10:40～11:10	劉樊艷	李佳樑	鄭好	王品程	藤原優美	徐愷遠	遠藤雅裕
11:20～12:10	ポスター発表： C24　荒木典子／蘇建唐						
13:00～13:30	干野真一	松尾奈奈	張子岳	曾若涵	【招待】	楊文錦	日高知恵実
13:35～14:05	—	閆佳祺	趙川瑩	劉森	C.ラマール	王權云	葉晨傑
14:10～14:40	许挺杰	郭嘉瑋	郭維茹	李云	佐々木勲人	王一萍	王凌志
14:50～15:20	王芸嬛	包新業	宋雨潤	姚尭	潘兪翔	丁秀	—
15:25～15:55	寺倉大智	河原畑希久	孟子敏	鄒王番	—	滕暁程	—

目　次

1 日目　11 月 14 日（土）

13:05～15:00　　特別講演（同上 一般教育棟 A 棟 2 階 A21）

司会　東京外国語大学 三宅登之

・談話管理理論と心の理論

国立国語研究所名誉教授／京都大学名誉教授　田窪行則

15:15～17:15　　ワークショップ（同上 一般教育棟 A 棟 2 階 A21）

テーマ：域外漢語資料の中国語学研究への貢献と可能性―宣教師の中国語研究を中心に

司会　関西大学　　内田慶市

・総論 域外漢語資料研究のこれまでと今後の課題

関西大学　　内田慶市

・宣教師資料の会話文と白話文の中国語史における位置付けの試み

関西大学 奥村佳代子

・漢訳聖書の様々な可能性―どんな分野の研究の資料として役立つのか―

愛知大学　　塩山正純

・音韻史における欧文資料の貢献―近代北京語児化韻の発展を例として―

中央大学　　千葉謙悟

2 日目　11 月 15 日（日）

11:20～12:10 ポスター発表（一般教育棟 C 棟 2 階講義室 C24）

・中国語白話史教材の再構成―太田辰夫『中国歴代口語文』の継承と更新―

東京都立大学　荒木典子

沖縄国際大学　　劉淼

京都産業大学　　今村圭

中央大学　　髙柳浩平

東京都立大学　　川下崇

・從「向」的發展論「一向」的分布特色

國立聯合大學　　蘇建唐

●招待発表 & 分科会研究発表

■第 1 会場（一般教育棟 A 棟 3 階講義室 A31）

9:30〜11:10 司会　関西大学　石崎博志

・日本語と中国語の依頼行為に関する予備的研究－Speech Act Coding Scheme を用いた分析－

大阪大学　劉驫

・中国語自然会話コーパスの構築と言語分析への応用―AI はあいづちの“嗯”が認識できるのか―

松山大学　望月雄介

岐阜聖徳学園大学　山本英子

・“虽然（suīrán）…但是（dànshì）…”複文の談話機能―情報構造との対応関係から

岡山大学　劉樊艷

13:00〜14:40 司会　早稲田大学　張恒悦

・“和”類虚詞を再考する――『北京官話全編』と『官話指南』の考察から

新潟大学　干野真一

・“别再 VP”与“别又 VP”——基于 10 部电视剧语料的考察

大分県立芸術文化短期大学　许挺杰

14:50〜15:55 司会　大阪大学　池田晋

・从周边要素看疑问词连锁句和 Wh1-D 句的照应策略

立命館大学　王芸嬛

・疑問詞“谁”の非人物用法

大阪大学　寺倉大智

■第 2 会場（一般教育棟 A 棟 3 階講義室 A32）

9:30〜11:10 司会　金沢大学　加納希美

・主語に不定名詞句が用いられる存現文の構文特徴と構文役割

名古屋大学　時彦卿

・心理動詞との共起関係から見る名詞述語文の特性

東京大学　張方捷

・量詞“顿”の意味領域およびその文法・表現機能

東京大学　李佳樑

東京大学　小野秀樹

■第 2 会場（一般教育棟 A 棟 3 階講義室 A32）

13:00〜14:40 司会　名古屋大学　丸尾誠

・“等/过”を伴わない“一会儿”の時間副詞的用法について――“一阵（子）”との対比から――

東京大学　松尾奈奈

・“一 V”形式の描写機能について

東京科学大学　閆佳祺

・実例分析に基づく“能 V 得 C”の使用環境と意味機能

東京大学　郭嘉瑋

14:50〜15:55 司会　岐阜大学　橋本永貢子

・“来 VP”と有標ヴォイス構文との共起傾向―ヴォイスの事態構造の観点から

筑波大学　包新業

・対象介詞“对”“对于”“关于”の機能分化―置換条件に基づく一考察―

立命館アジア太平洋大学　河原畑希久

■第 3 会場（一般教育棟 A 棟 3 階講義室 A34）

9:30〜11:10 司会　京都大学　宮島和也

・安大簡《仲尼曰》四例用「堇」為「隠」的句法分析

開南大学　楊濬豪

・浅谈上古汉语的间接回指

京都大学　那宇星

・古代中国語における「睡眠」を表す語彙の意味的差異――内的情態と語彙の機能分布をめぐって

京都大学　鄭好

13:00〜14:40 司会　お茶の水女子大学　張玥

・《根本说一切有部毗奈耶杂事》完毕义动词考察

京都大学　張子岳

・“江”的通名化及汉语地名南“江”北“河”格局的形成

京都大学　趙川瑩

・古漢語致使結構「從綜合到分析」的個案考察：「致」的歷時演變及「以致」的詞彙化

臺灣師範大学　郭維茹

■第 3 会場（一般教育棟 A 棟 3 階講義室 A34）

14:50〜15:55 司会　関西大学　奥村佳代子

・汉语第二人称代词指示对象扩展的历时演变——以“你”的虚构指示用法为中心

九州大学　宋雨潤

・基于说话人与听话人、说事人与听事人角度对汉语人称代词的“单数”与“复数”、包括式与排除式的考察—以《老乞大》、《元朝秘史》、《全元曲杂剧》为例

松山大学　孟子敏

■第 4 会場（一般教育棟 A 棟 3 階講義室 A36）

9:30〜11:10 司会　京都産業大学　澤田達也

・明代北方诗人诗作中支通鱼虞现象的考察

関西大学　余仁偉

・西晋呉方言の寒先真魂部の円唇母音について

富山高等専門学校　三輪大樹

・原始莆仙語入聲韻的重建

京都大学　王品程

13:00〜14:40 司会　岩手大学　鋤田智彦

・唐話資料《南山俗語考》之音韻系統及其音系性質再探

中正大学　曾若涵

・明清白話小説に見られる説話的叙事標識について

沖縄国際大学　劉淼

・『清話問答四十条』における満洲語動詞の希求法形式と漢語表現との対応

立命館大学　李云

14:50〜15:55 司会　大阪大学　王周明

・「自然」の史的変遷と変化のメカニズム

東北大学　姚尭

・ダブズの漢字観と漢字書記法構想——漢字ラテン化批判との関連を中心に——

関西大学　鄒王番

■第 5 会場（一般教育棟 A 棟 3 階講義室 A37）

9:30〜11:10 司会　桜美林大学　雷桂林

・中国語東北方言における“X+了+YZ”構式の容認度と主観的語感

広島市立大学　劉陽

・试论东北方言中表原因的“X 的事儿”结构 ——主要以汉语通河方言为例

神戸市外国語大学　卞春婷

・四川方言“V 不赢”“V 得赢”的构式特征及其不对称性—基于语料库的考察

広島市立大学　藤原優美

13:00〜14:40【招待発表】 司会　中央大学　石村広

・ベルギー淳心会宣教師ルネ・ルヴァのチャハル漢語方言の文法記述

フランス国立東洋言語文化学院／東アジア言語研究所 名誉教授　クリスティーン・ラマール

・東南方言の有標ヴォイス構文と文法化

筑波大学　佐々木勲人

14:50〜15:55 司会　関西大学　小嶋美由紀

・臺灣閩南語「了」、「甲」、與「著」的三種因果關係

國立清華大学　潘兪翔

國立清華大學　申堯燮

■第 6 会場（一般教育棟 B 棟 3 階講義室 B32）

9:30〜11:10 司会　大阪大学　八木堅二

・温泉方言入声舒化的结构机制

同志社大学　孫雪婷

・再論閩南語*tʃ-組聲母的擬測

國立中央大学　鄭曉峯

・吳語裡中古以、云、匣母讀擦音現象再探——兼論吳閩語「類與類」的對應

京都大学　徐愷遠

13:00〜14:40 司会　鹿児島大学　三木夏華

・吳語常州方言における有声破擦音[dz, dʑ]と有声摩擦音[z, ʑ]

大阪大学　楊文錦

・吳語杭州方言における「量詞＋名詞」構造の定性について

東京外国語大学　王槿云

・近代上海方言中的“啥”及其相关形式考察

福岡大学　王一萍

■第 6 会場（一般教育棟 B 棟 3 階講義室 B32）

14:50〜15:55　司会　南山大学　鈴木史己

・漢語泰興方言（河失鎮）の直接疑問文について

神戸市外国語大学　丁秀

・山東半島東部方言における非疑問詞疑問文の地理的概観

大東文化大学　滕暁程

■第 7 会場（一般教育棟 B 棟 3 階講義室 B33）

9:30〜11:10　司会　静岡大学　張盛開

・「様」の様子―客家語山口洋方言における「个様」の文法化―

東京大学　張祁凱
東京大学　Klara Gorgonia

・從客觀條件到主觀評價：客語句末「正得」的語法化

國立清華大学　葉瑞娟
國立清華大學　黃漢君

・論臺灣海陸客語的非完整體標記「nen35 等」與達成情狀動詞

中央大学　遠藤雅裕

13:00〜14:40　司会　松山大学　望月雄介

・台湾華語における「Q」を含む二音節語――アンケート調査と言語景観の分析を中心に

明治学院大学　日高知恵実

・台湾華語における特殊用法の「幫」の意味と統語的特徴

大阪大学　葉晨傑
京都大学　王馨由

・電白地域の黎話・白話・涯話における「了」標識の比較研究

神戸市外国語大学　王凌志

談話管理理論と心の理論[1]

田窪行則
国立国語研究所名誉教授・京都大学名誉教授

1. はじめに　談話管理理論の系譜

本発表では談話管理理論の系譜をたどり、現在までの理論の概観と将来の展望を行う。談話管理理論は 1990 年ごろから田窪と金水敏が展開した談話構築に関する認知科学的理論であり、知識管理モデルとして展開した。統語構造から談話構造を構築するモデルを目指しており、その初期には林四郎(1960)、南不二男(1974)の談話行動論の影響を強く受けている(田窪(1987))。

談話管理理論 (Discourse Management Theory)は、Mental Spaces (Fauconnier(1985, 1994))の流れを汲み、複数の領域を用いて談話構築を記述する動的な談話モデルである(田窪(1990、1992)、田窪・金水 (1996a)、金水・田窪(1998)、Takubo and Kinsui(1997)、Takubo (2020a,b))。この理論では、言語と記憶ベースの間にインターフェイスとして働く表示レベルが存在すると仮定する。このインターフェイスは複数の領域からなる階層的なデータベースであり、知識ベース、および個々の談話セッションについて設定される一時的な記憶ベースへのアクセスを制御するポインタないしインデクスを含む。談話における発話は、このインターフェイスに対する登録、検索、コピー、推論などの操作を指示するものとみなすことができる。

本稿では、談話管理理論と心の理論 (Theory of Mind)との関係を、日本語のいくつかの言語現象を通して考察する。談話管理理論では、言語形式は原則として話し手を唯一の認知主体として特徴づけることができると考える。対話において、話し手が聞き手の知識、意図、信念などを推測しながら発話を行うこと自体を否定するものではない。しかし、そのことから直ちに、個々の言語形式の意味そのものが聞き手の知識状態についての話し手の推測をコードしているということにはならない。

以下では、まず話し手と聞き手の共有知識の更新として言語コミュニケーションを捉えるモデルを検討する。次に談話管理理論の基本的な仮定を示し、日本語の指示詞、終助詞ヨ/ネ、モーダル表現を取り上げる。これらの現象について、従来聞き手の知識状態や共有知識に言及して説明されてきた事実が、話し手自身の情報管理と認知操作を中心とするシステムによって記述できることを示す。

2. 共有知識更新モデルと心の理論

言語コミュニケーションを考える際，通常，話し手が聞き手に対してある共通の前提を想定し，自分の知っていることを相手に知らせ，相手が知っていることを教えてもらうというモデルが想定されている。これを「共有知識更新モデル」とでも名づけよう[2]。これを

---

[1] 本要旨はその多くを Takubo(in print)、田窪(近刊)によっており、一部内容が重なる部分がある。

[2] 同様のモデルは多くの研究者によって提案されている。Clark (1992)の Introduction to Part1 を参照のこと。

非常に単純化して示すと次のようなモデルである(田窪 (1990))。

(1) 共有知識更新モデル

話し手の知識：{p_1, p_2, p_3}

聞き手の知識：{p_1, p_2, p_4}

共有知識：{p_1, p_2}

→ 話し手が発話によってp_3を提示

→ 更新された共有知識：{p_1, p_2, p_3}

日本語の記述においても、このような考え方が用いられることがある。例えば、次の益岡による終助詞ヨとネの記述は、このモデルに従っていると言える(益岡(1991:96))。

(2) すなわち我々は 自分が持っている知識を聞き手に伝えるに際して聞き手が持っていると想定される知識のあり方との異同を判断し，それを表明するということである。そして，話し手の知識と聞き手の知識が基本的に一致すると判断される場合には「ね」が用いられ，両者の間にずれがあり，その意味で両者が対立的な関係にあると判断される場合には「よ」が用いられるわけである.

また久野(1973)は、文脈指示における ソ-NP は話し手と聞き手の共有経験に属さない対象を、ア-NP は両者が個人的に知っている、あるいは経験した対象を指すとする。

このような分析では､話し手はある言語形式を選択する際､自分の知識状態だけでなく、聞き手の知識状態を想定し、その二つを比較することになる。すなわち、聞き手を独立した認知主体として想定し、その心的状態を話し手の側から表象するという意味で、心の理論を言語形式の記述に組み込むことになる[3]。

ここで問題となるのは、対話において話し手が実際に聞き手の知識を推測することがあるかどうかではない。問題は、そのような推測を個々の言語形式の意味的特徴づけの中に組み込む必要があるかどうかである。

さらに、共有知識を相互知識として強く解釈すると別の問題が生じる。話し手が p を知り、聞き手が p を知ることを話し手が知り、聞き手も話し手が p を知ることを知り、さらに話し手がそのことを知る、というように相互の知識を埋め込んでいけば無限後退が生じる (Clark and Marshall(1981)、田窪・金水(1996b)、Takubo and Kinsui(1997))。このような計算を通常の対話でリアルタイムに行っているとは考えにくい。

もう一つの問題は独話である。指示詞も終助詞も独話で使用することができる。聞き手が存在しない独話でも同じ言語形式が使用できるのであれば、聞き手の知識状態への言及がその言語形式の意味に本質的に含まれているとする分析には問題がある。

3. 談話管理理論の基本的な仮定

談話管理理論では、認知主体である話し手が談話構築に際して利用する知識ベースを一種の記憶管理システムとして捉える。談話セッションが始まると、長期記憶のうち現在の談話に関与的な部分が活性化され、一時的な作業記憶に取り込まれる。発話は、ある談話状態を入力として次の談話状態に写像する関数とみなされる。談話終了時には、談話中に

[3] 心の理論に関しては鈴木 貴之(2002),心の理論と終助詞に関しては綿貫(1997)などを参照されたい。

構築された情報が長期記憶に書き戻される。

[談話モデル]
長期記憶ベースの一部を活性化して一時的記憶ベースを作る>D_0（談話の初期値）
1．文$_1$(D_0)=D_1
2．文$_2$(D_1)=D_2
…
3．文$_i$ (D_{i-1})=D_i
…
F.セッションの終点．　文$_f$ (D_{f-1})=D_f
一つのセッションが終了すると，もとの長期記憶ベースにかきもどされる。
F+1.長期記憶ベース＋D_f：アップデートされた長期記憶ベース

一時的記憶ベース内の(認識的)談話領域は、まず次の二つに分けられる。

R 領域：真偽値がすでに確定している命題の集合

Ⅰ領域：真偽値が未確定の命題の集合

R 領域はさらに次の二つに分けられる。

D 領域：話し手の直接経験によって真であると確認され、推論や伝聞を介さずアクセスできる情報

R－D 領域：R 領域から D 領域を除いた部分。推論、伝聞、仮定などを介してアクセスされる確定情報

Ⅰ領域およびR－D 領域の要素には直接アクセスすることができず、推論、伝聞、仮定などの操作を介して導入・アクセスされる。これに対しD 領域は直接アクセス可能な情報からなり、談話における直示的中心、また認識的な基準点として機能する。

本発表ではこれらの領域分割を仮定し、以下の(A－C)の前提をおくことで、日本語の言語形式の談話管理機能を十全に記述することができること、また、他の言語の言語形式の分布の差も記述することができることを示す。

A. 言語形式の定義には心の理論は関わらない。すなわち話し手のみが認知エイジェントであり、言語形式の定義には聞き手（対話相手)との知識の差分を取り入れる必要はない。

B. これまで終助詞、指示詞、条件文など、言語形式に聞き手の共有知識への言及を必要としたものは、共有知識への言及は抱合的視点を取れる場合（直接共有経験をもち、話し手と聞き手が同じ証拠にアクセスできる場合)に限られる[4]。

C. B のケースは話し手が自分の計算を聞き手と同期しているだけであり、心の理

[4] 対立的視点と抱合的視点に関しては木村(1992),田窪(1990b)を参照。抱合的視点というのは木村の用語であり(木村は「包合」と書く),田窪(1990b)では正保(1981)に従って、融合的視点と呼んでいる。木村がこれを包合的視点というのは，融合であると聞き手の視点が独立して存在してそれが対等のものとして話し手の視点と融合するニュアンスがあるからである。この木村の考え方を入れてここでは抱合的視点を採用する。

論のように聞き手の心的状態との差分を話し手が計算しているわけではない。

ここで重要なのは、談話管理理論では、言語形式の意味的特徴づけにおいて話し手だけを認知主体とするという点である。聞き手の発話は話し手にとって外部からの入力であり、まずⅠ領域を経て、話し手自身の直接経験との関係などに従って各領域に配置される。したがって、個々の言語形式の意味を定義するために、聞き手の知識状態を話し手の知識状態の中に埋め込む必要はない。

ただし、これは対話において聞き手が認知主体としてまったく考慮されないということではない。話し手と聞き手が同じ直接的証拠にアクセスしている場合、例えば同じ場所で同じ事態を見たり経験したりしている場合には、話し手は聞き手も同じ認知的能力を持ち、同じ証拠から同じ結論に到達しうるものとして扱うことができる。重要なのは、ここでは話し手が聞き手の独立した知識状態を推定して自分の知識との差分を計算しているのではないということである。同一の経験的基盤へのアクセスが出発点となっている。

4. 指示詞——共有知識から直接経験へ

日本語の指示詞は、現場に存在する対象については、通常、コ系列は話し手に近い対象、ソ系列は聞き手に近い対象、ア系列は双方から遠い対象を指すと記述される。一方、現場に存在しない対象について久野（1973）は、ソ系列とア系列の選択を話し手・聞き手の対象についての知識ないし共有経験によって記述する。

(3) 昨日、山田さんに初めて会いました。
　{あの／＊その} 人、ずいぶん変わった人ですね。

(4) 昨日、山田という人に会いました。
　{＊あの／その} 人、道に迷って困っていたので助けてあげました。

久野によれば、(3)では話し手と聞き手の双方が山田を個人的に知っていることが想定されるためア系列が用いられ、(4)では聞き手が山田を個人的に知らないためソ系列が用いられる。ここで久野が単なる共有知識ではなく共有経験を問題にしていることは重要である。言語によって新たに導入された対象は、発話後にはある意味で共有知識となっているにもかかわらず、ア系列ではなくソ系列で指示されるからである。

しかし、この分析では現場指示と文脈指示が異なる原理によって記述される。前者では空間的距離、後者では話し手と聞き手の知識・経験が指示詞の選択を決める。黒田（1979）が指摘するように、親疎と遠近が対応するのは、話し手が対象を知らず聞き手が知っている場合だけであり、それ以外の場合には両者は対応しない。

黒田はこの問題を、まず独話における指示詞を分析し、その分析を対話に拡張するという方法によって解決しようとする。独話では聞き手が消え、具体的な認知主体として話し手だけが残るからである。また久野の「現場指示」に代えて「独立的用法」を設定し、先行する言語表現を介して対象を指す文脈指示的用法と、言語表現に依存せず対象を直接指す独立的用法を区別する。

黒田の分析で特に重要なのは、ア系列を共有知識によって定義することができないことを示した点である。(5)の例では火事についての直接経験は話し手だけが持ち、聞き手は目撃していない(黒田(1979:55))。この例の示すように話し手が実際に火事を目撃し、そのことを初めて聞き手に知らせる場合でも、話し手はその火事を「あの火事」と呼ぶことがで

きる。したがって、ア系列の使用を久野のように話し手と聞き手の共有知識によって説明することはできない。

(5) 昨日銀座で火事があったよ。{あの火事/*その火事} のことだから人が何人も死んだと思うよ。

談話管理理論はこの黒田の洞察を基本的に受け継ぎ、次のように捉える(田窪・金水(1996),Takubo(2020b))。

(6) 指示詞ア・ソの意味

ア-NP：D 領域の要素を指す。

ソ-NP：I 領域の要素を指す。

ア-NP が指す対象は直接経験に根ざしているため、話し手がアクセスできる属性は原則として限定されない。これに対し、ソ-NP が指す I 領域の要素についてアクセスできる属性は、言語的に導入されたもの、あるいはそこから推論できるものに限定される。

5. 終助詞と心の理論

5.1 ネ

ネはしばしば、話し手と聞き手の共有知識や一致した認識を示す形式として記述される。しかし、ネは聞き手が存在しない独話でも使用できる。また、聞き手が当該の知識を持っていないことが明らかな場合にも使用できる。

(7) A：どこに行けばいいでしょうか。
B：あなたは三番テーブルですネ。

(8) A：いま何時ですか。
B：えーと、4 時ですネ。

A は答えを知らないから質問しているのであり、B のネを話し手と聞き手がすでに共有している知識として記述することはできない。(7)では表などを見て、(8)では時計を見て、その証拠に基づいて結論を出していると考えられる。談話管理理論では、ネを何らかの証拠に基づく検証過程の結果を提示する標識とする。

この分析は、通常、共有知識や共感によって説明される例にも適用できる。

(9) いい天気ですネ。

(10) さびしいネ。

さらに、手品で目の前にあるカードを示して、(11)のように言う場合を考えてみよう。

(11) ここにスペードの 3 がありますネ。

話し手と聞き手は同じカードを見ることができる。したがって、話し手が自分の視覚的証拠から「ここにスペードの 3 がある」という結論を得た場合、聞き手も同じ証拠にアクセスできれば同じ結論に到達すると期待することができる。

このような場合、一見すると話し手は聞き手の心的状態を推測しているように見える。しかし、共有知識更新モデルの場合とは構造が異なる。話し手が「私は p を知っているが、聞き手は p を知っているだろうか」と聞き手の独立した知識状態を計算しているのではない。話し手と聞き手が同じ証拠にアクセスしていることから、同じ認知的処理を行えば同じ結論に到達するとしているのである。

したがって、「共有知識」と呼ばれてきたものの少なくとも一部は、知識状態そのものの

共有としてではなく、直接的な証拠ないし経験への共有アクセスから派生するものとして捉えることができる。話し手のD領域を成立させる直接的な証拠ないし経験に聞き手もアクセスできる典型的な場合である。

5.2 ヨ

ヨ についても、話し手と聞き手の知識の非対称性や対立によって記述することには問題がある。例えば名前を聞かれて、

(12) A：お名前は。
　　B：山田です｛#ヨ｝。

と答える場合、聞き手は答えを知らないにもかかわらず ヨ は通常用いられない。一方、(13)では自然である。

(13) A：三番テーブルに行けばいいでしょうか。
　　B：あなたは四番テーブルですヨ。

また、

(14) A：あれは誰ですか。
　　B：あれは田中さんですヨ。

のように、聞き手が対立する信念を持っていない場合にもヨは使用できる。さらに「寒いヨ」「さびしいヨ」のように独話でも使用できる。したがって、ヨの意味に話し手と聞き手の知識の非対称性を直接組み込む必要はない。

談話管理理論では、ヨは情報をI領域に書き込む指令であるとする。I領域に書き込まれた情報は、その後の推論や行動を開始するための入力となる。

(15) 田中さんですヨ。
　（知らないんですか／今度教授になりました／……）

(16) 雨ですヨ。
　（傘を出した方がいいですよ／喫茶店に入りましょう／……）

ヨは単に新情報を聞き手に伝えるのではなく、その情報を後続する推論、判断、行動のために活性化する。したがって、(17)のように、聞き手が当然知っている情報にも付くことができる。

(17) 君はまだ高校生ですヨ。

この場合、聞き手に新しい知識を与えているのではなく、すでに知られている情報を現在の談話における推論の前提として提示している。

5.3 ヨネ と処理順序

ヨ／ネを共有知識の有無を示す標識ではなく、認知主体による談話管理上の処理を示す標識と考えると、従来パラダイム的な対立関係にあるとされてきた両者が結合でき、しかも(19)のヨネは可能だがネヨは不可能であることを説明できる（田窪・金水(1996a)、金水・田窪(1998)）。

(18) ヨ/ネの操作的機能
　　ヨ：データ更新
　　ネ：検証結果の提示

ヨネ：データ更新 → 計算・検証

(19) 3^6は3^3の二乗ですヨネ／＊ですネヨ。

ヨによって更新されたデータを入力としてさらに検証を行うことは可能である。しかし、ネによって検証が終了し、その結果が提示された後では、その出力はもはや更新されるべきデータではない。その後にヨを適用するとカテゴリー・ミスマッチが生じる。

5.4 命令・依頼と ヨ/ネ

ヨ/ネの分析は平叙文以外にも拡張できる。例えば ヨ は命令形や禁止形に付くことができるが、ネは付かない。

(20) 行けヨ。／行くなヨ。

(21) *行けネ。／*行くなネ。

また、(22)のような対立がある。

(22) 行ってくれヨ。／*行ってくれネ。／行ってくれヨネ。

ヨの付いた命令・依頼では、命令・依頼という行為を遂行すると同時に、その発話を談話管理の対象として明示的に標示するというメタ的な側面が加わると考えることができる。

英語でいえば、単なる Go に対する This is an order や I order you to go との関係に一面では比較できる(Cf. Austin(1962))。ただし、ヨ自体が「命令する」という遂行動詞と同じ意味を持つということではなく、命令・依頼という発話行為を談話管理上明示的なものにするということである。これによってヨの後にネを付けることが可能になると考えられる。

一方、「てください」では ヨ/ネ のいずれも可能である。

(23) 行ってくださいヨ。

(24) 行ってくださいネ。

ネを検証ないし確認に関わる標識とすれば、(24)では依頼そのものを行うというより、依頼したことを確認・再確認するという解釈が生じる。そのため念押しの効果が生じ、目上の相手には使いにくく、子供などに対しては自然であるという分布にもつながると考えられる。この部分については、発話行為のタイプとヨ/ネの結合可能性との関係をさらに検討する必要がある。

6. モーダル表現——D 領域を基準とする推論

領域分割のもう一つの応用としてモーダル表現がある。日本語の推論に関わるモーダルは、推論の方向によって大きく二種類に分けることができる。

ダロウ類：ダロウ、ハズダ、ニチガイナイ、カモシレナイ

ヨウダ類：ヨウダ、ラシイ、動詞連用形＋ソウダ

6.1 ダロウ類

ダロウ類は、条件的知識を前提として、仮定から modus ponens によって導出される帰結を示す。

if p, then q

p
∴ q｛ダロウ，ハズダ，カモシレナイ｝

例えば、(26)では、直接知覚される「今 100 度である」という D 領域の情報を前提として、未来の I 領域に属する帰結を導いている。

(25) 普通、100 度に熱すると物体は燃える。

(26) 今 100 度だから、もうすぐこの物体は燃えるハズダ。

現在・過去についての帰結であれば R－D 領域に属する。前提 p が伝聞や真偽未確定の仮定である場合には、ナラなどの条件形式が用いられる。

前件 p が R－D 領域にあり、後件 q が D 領域にある場合には、反事実的解釈が生じる。

(27) もし 3 時に出ていたなら、間に合っているハズダ。

実際には間に合っていない。

したがって 3 時に出たはずがない。

これは ¬q から ¬p を導く対偶推論である。

さらに、(28)のトコロダは、後件を義務的に D 領域に位置づけ、反事実的解釈を強制する(田窪・笹栗(2010))。

(28) もし 3 時に出ていたなら、間に合っているトコロダ。

6.2 ヨウダ類

ヨウダ類は D 領域の要素を証拠として行われる推論を標示する。

(29) 田中は家にいるヨウダ。

(30) 雨が降ったヨウダ。

(31)(32)では、それぞれ「道や葉が濡れている」「車がある」という直接知覚可能な D 領域の状態から、それをもたらした原因として「雨が降った」「田中が家にいる」という事態を推論する。

(31) 葉っぱが濡れているのを見ると、雨が降ったようだ。

(32) 車があるところを見ると、田中は家にいるようだ。

したがって、ここでの推論の方向は、D 領域にある結果・証拠からその原因を推定する アブダクション(abduction 仮説形成的推論)である。ダロウ類が仮定から帰結への演繹的推論を標示するのに対し、ヨウダ類は D 領域の証拠から原因へ向かう推論を標示する。いずれの場合にも D 領域が認識的推論の基準点として機能する。

7. まとめ――談話管理理論と心の理論

本稿では、日本語の指示詞、終助詞、モーダル表現を通して、談話管理理論と心の理論との関係を考察した。

対話において話し手が聞き手の知識、信念、意図などを推測することは当然ありうる。しかし、そのことと、言語形式の意味そのものが聞き手の知識状態についての推測をコードしていることとは区別する必要がある。談話管理理論では、言語形式を話し手という単一の認知主体の情報処理操作との関係で特徴づける。

この立場から、ア系列とソ系列の対立は、話し手と聞き手の共有知識の有無ではなく、

D 領域と I 領域へのアクセスの違いとして記述できる。ネは共有知識を直接標示するのではなく、認知主体による検証結果を提示する。ヨは話し手と聞き手の知識差を標示するのではなく、情報を I 領域に導入し、後続する推論や行動のために活性化する。さらに、ヨネ/*ネヨ の非対称性も、共有知識の程度ではなく、データ更新と検証という処理の順序から説明することができる。

一方、聞き手の役割がまったく排除されるわけではない。話し手と聞き手が同じ直接経験を持つ場合、あるいは同じ直接的証拠にアクセスできる場合には、話し手は聞き手も同じ認知的処理を行い、同じ結論に到達しうると想定することができる。共有知識と呼ばれてきた現象の少なくとも一部は、聞き手の独立した心的状態の表象によらず、共通の直接経験や同一の証拠へのアクセス(すなわちある種の同調)から導くことができる。

談話管理理論の主張は、言語コミュニケーションに心の理論が関与しないというものではない。むしろ、話し手自身の情報管理システムによって言語形式を選択・解釈することと心の理論を用いて聞き手の知識状態を計算することとを区別することにある。

この区別によって、独話と対話、現場指示と文脈指示、共有知識を伴う場合と伴わない場合を、同一の言語形式について別々の意味を設定することなく記述することが可能になる。また、モーダル表現についても、D 領域を基準点として推論の方向を捉えることによって、談話管理と認識的推論を同一の領域構造の中で扱うことができる。

参照文献

木村英樹 (1992)「中国語指示詞の『遠近対立について一コソアの対照を兼ねて』 大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』pp. 181-212 くろしお出版

金水敏・田窪行則 (1998)「談話管理理論による「よ」「ね」「よね」の研究」 堂下修司他編 『音声による人間と機械の対話』 オーム社, pp.257-270。

久野暲(1973) 『日本語文法研究』大修館

黒田成幸(1979) 「(コ)/ソ/アについて」『英語と日本語と一林栄一教授 還暦記念論文集』 くろしお出版, pp.41-59. (金水敏・田窪行則 (編) (1992)『指示詞』ひつじ書房に再録 pp. 91-104)

正保勇(1981)「『コソア』の体系」国立国語研究所『日本語の指示詞[日本語教育指導参考書 8]』51-122 東京:国立国語研究所

鈴木 貴之(2002)「「心の理論」とは何か」 『科学哲学』35 巻 2 号, pp.83-94

田窪行則 (1987)「統語構造と文脈情報」 『日本語学』 5 月号, pp.37-48, 明治書院

田窪行則 (1990a) 「対話における知識管理について一対話モデルからみた日本語の特性」崎山理・佐藤昭裕(編)『東アジアの諸言語と一般言語学』pp. 837-845, 三省堂

田窪行則(1990b)「談話管理の理論-対話における聞き手領域の役割-」『言語』19(4), pp. 52-58 大修館書店

田窪行則 (1992)「談話管理の標識について」 文化言語学編集委員会編『文化言語学一その提言と

建設―』 pp. 96-106, 三省堂
田窪行則 (2008)「日本語指示詞の意味論と統語論--研究史的概説」 寺村政男・久保智之・福盛貴弘 編『言語の研究：ユーラシア諸言語からの視座 大東文化大学』, pp. 311-338.
田窪行則・笹栗淳子(2010)「日本語条件文と認知的マッピング」 大堀俊夫編 『シリーズ 言語科学３ 認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』pp. 135-162 東大出版
田窪行則(近刊)「終助詞―ヨとネを中心に」 澤田淳編 シリーズ日本語文法『第２巻：談話、言語知識と文法』 くろしお出版
田窪行則・金水敏 (1996a)「複数の心的領域による談話管理」 『認知科学』Vol. 3 No. 3, pp. 59-74.
田窪行則・金水敏(1996b)「対話と共有知識」『月刊言語』Vol. 25, NO. 1. 大修館書店, pp. 30-39.
林四郎(1960)『基本文型の研究』 明治図書
益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
綿貫徹(1997)「自閉症児における共感獲得表現助詞「ね」の使用の欠如：事例研究」 発達障害研究(日本発達障害学会)19 巻 pp. 146-157
https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/other/aichi_col/z01/z01005/z0100501.html
Austin, John, L (1962) *How to do things with words*. Oxford University Press.
Clark, Herbert, H. (1992) *Arenas of language use.* The University of Chicago Press and CSLI.
Clark, H. H. and Catherine R. Marshall.1981 Definite reference and mutual knowledge. A. Joshi, B. L. Webber and I. A. Sag (eds.) *Elements of Discourse Understanding*, Cambridge University Press, pp. 10-63. Also in Clark ed. (1992), pp. 9-59.
Fauconnier, Gilles. 1985. *Mental Spaces*. Chicago: University of Chicago Press. Reprinted as the 2nd edition in 1994 from Cambridge University Press. (坂原茂他訳 (1996)『メンタル・スペース』白水社)
Takubo, Yukinori 2020a. 9. Conditionals in Japanese. In Jacobsen, Wesley M. and Yukinori Takubo (eds.) *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton, pp. 451-494.
Takubo, Yukinori. 2020b. 15. Nominal deixis in Japanese. In Jacobsen, Wesley M. and Yukinori Takubo (eds.) *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton*, pp. 687-732.
Takubo, Yukinori. (to appear) Discourse management theory. In Yoko Hasegawa ed. *The Cambridge Handbook of Usage-Based Approaches to Japanese Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
Takubo, Yukinori and Kinsui, Satoshi. 1997. Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of Pragmatics*. 28(6), pp. 741–758.

域外漢語資料の中国語学研究への貢献と可能性

–宣教師の中国語研究を中心に（趣旨説明）

内田慶市
関西大学名誉教授・関西大学東西学術研究所研究員

漢語研究における域外資料の重要性については日本ではつとに 1950 年代から太田辰夫、香坂順一等によって指摘されてきたが、この 20 年来、特に中国を始めとする諸外国でも広く認知され、大きな成果を挙げてきている。とりわけ、中国におけるこの分野の研究は目覚ましいものがあり、先駆者的な立場にあった日本は今や後れを取っている状況であることは極めて残念なことである。もちろん、学問研究の発展という観点からは世界のこうした研究の流れは大いに歓迎すべきではある。

域外漢語資料（或いは周縁漢語資料）という場合、その中身は多様であり、大雑把に言えば、東アジア資料と欧文資料に大別できる。東アジア資料としては、例えば日本の唐話資料、琉球官話資料、明治以降の各種中国語テキスト類、あるいは、老乞大、朴通事といった朝鮮資料、更には蒙満漢合璧資料等が挙げられるし、欧米の資料としては先ずは宣教師による膨大な資料群、また、バイエル、レミュザ、ジュリアン、クラプロートといった漢学者による資料がある。

特に、宣教師の漢語資料については、中国語総論、中国語史、文法論、文体論、語彙論、音韻論、官話と方言、翻訳論など様々な角度からの研究が可能である。以前に我々は本学会のワークショップにおいて「官話」研究の可能性を取り上げたが、今回は、これまでの研究の成果を踏まえながら、更に、各人がそれぞれの分野から文体論や音韻論などより幅広い領域での中国語学への貢献の可能性について、改めてその意義を考えてみたいと思っている。

総論–域外漢語資料研究のこれまでと今後の課題

内田慶市
関西大学名誉教授・関西大学東西学術研究所研究員

1.現状

趣旨説明でも触れたように、漢語研究における域外資料の重要性については日本ではつとに1950年代から太田辰夫、香坂順一等によって指摘されてきたが、この20年来、特に中国を始めとする諸外国でも広く認知され、とりわけ、中国でのこの分野の研究は目を見張るものがある。中国ではこれまで資料の入手という点で大きなハンディを背負っていたが、今では彼らも世界中の図書館に出向いて資料を収集し、加えてデジタル時代でネット上でも容易に資料が閲覧できる環境が整ったことで加速度的に資料整理や研究が進んできている。

例えば，北京外大の張西平氏によるバチカン図書館所蔵漢籍文献のデジタル化及び影印出版（『梵蒂岡圖書館藏明清文化交流史文獻叢刊』全5輯全158冊、大象出版社）はその最たるものであり、バチカンに所蔵される漢籍はほぼ網羅されている（ただ、出版社との契約で、そのデジタル版のフル公開が未だ実現していないのは極めて残念である)。また、北京大学と対外経済貿易大学による『早期北京話珍本典籍校釋與研究』（北京大學出版社）のシリーズも陸続と出版されており北京官話の重要な資料をほぼこの叢書で見ることが可能となっている。この他、厦門大学の李無未氏を中心とするグループによる日本人の手になる中国語教科書類の影印出版と研究、香港浸會大学の張美蘭氏による『官話指南』を始めとする北京官話、南京官話の研究や『清末民初北京話口語詞詞典』の編纂、北京外国語大学の王継紅氏のグループによる満漢資料研究、復旦大学の盛益民氏による『近代稀见吴文献集成』シリーズなども見逃せないものである。さらに、台湾清華大学の李毓中氏のグループによって精力的に行われている「閩語—西班牙歷史文獻叢刊」シリーズは、彼らの継続したスペインやフィリピンでの現地資料調査の成果であり、現存する世界最古のスペイン語福建語対訳辞書（Dictionario Hispanico Sinicam）の影印を皮切りに、Chirinoの『華語—西班牙辭典』や『漳州話詞彙與語法』『無極天主正教真傳實錄』など現在まですでに８種の資料の影印出版を行っており、特に漢外対訳辞書の研究や福建語、客家語研究に極めて大きな貢献をしている。ヨーロッパに目を向けてみても、ローマ大学のマシーニを中心としたグループが、初期宣教師の漢語研究、とりわけ、Brollo(葉尊孝)の『漢字西譯』のほぼ全ての版本を網羅した研究（*Basilio Broll's Dictionarium sinico-latinum*.2026）やそのデータベース（https://chindictionary.lad-sapienza.it/?fbclid=IwY2xjawUNTElwZG9mAWV4dG4DYWVtAjEwAGJyaWQRMVB4MUtsUnRtSlg4RWRkSEdzcnRjBmFwcF9pZBAyMjIwMzkxNzg4MjAwODkyAAEeUnRhmKmczuBNeijenLSXZ5Xjc7fFR25C1Cmw6pMWnRny8smty3NwHngPHnk_aem_LimpVlxgB9_5pIy_OPasGg）を完成させているし、Maritini（衛匡國）の全集刊行、その文法研究等でも大きな成果を挙げている。彼らは他に、Propaganda Fideの中国関係書目の編纂や、ナポリ東洋大学の中国関係書目の作成も進行中である。

こうした現状に対して、かつては先導的な立場にあった日本が今や後れを取っている状況であることは極めて残念なことである。もちろん、学問研究の発展という観点からは世

界のこうした研究の流れは大いに歓迎すべきではあるが。

２．様々な可能性—文体論研究を例として

さて、趣旨説明にも示したように、域外漢語資料（或いは周縁漢語資料）に対しては、中国語史研究はもちろんのこと、様々な立場、角度からのアプローチが可能であるが、今回は特に「文体論」について簡単に述べておく。（他の領域に関しては他の発表者から報告がある）

中国語にいわゆる「方言（郷談）」と「官話（Mandarin）」の違いがあるだけでなく、中国語の文体にも「書面語」と「口頭語」の違いがあることは、リッチ以降、ヨーロッパの宣教師たちは早くから気づいていた。特に、ドミニコ会宣教師のフランシスコ・ヴァロの「Arte de la lengua Mandarina(华语官话语法)」(1703 年スペイン語版。ラテン語版も 1684 年版と 1835 年版の 2 つの版本がある)に至って３種のモード（modos de hablar）が示された。（これを最初に指摘したのは古屋昭弘氏であり、1991 年のことである）。ヴァロ以降、ヨーロッパではこの考えが定着し、その後、プレマールにおいても 3 種の文体（在中国人中可以区分三种层次的语言：老百姓的语言、体面人的语言和书面的语言）について言及がある。なお、ヴァロやプレーマールの 3 種の文体の中の「中間的なもの」つまり「半文半白」については、フランスの漢学者のレミュザは特に「半文半俗」と呼んでいる。

宣教師たちが何故こうした中国語の文体に拘ったかについては、明らかに「聖書の漢訳」と関係がある。つまり、彼らが、どのような文体で聖書を翻訳したら中国人に受け入れられるか（翻译中文《圣经》时应该采用何种风格最为恰当。=モリソン）にとことん拘泥した結果なのである。これはモリソンの神天聖書の翻訳過程を見れば明らかである。

正如在其他大多数国家的情况一样，中文书籍中也有三种语体风格：文言、白话和折中体。四书和五经中的语体非常简洁，而且极为经典。大多数轻松的小说则是以十分口语的体裁撰写的。《三国演义》，一部在中国深受欢迎的作品，其语体风格折中于二者之间。起初，马礼逊先生倾向于采用折中体；但后来看到一本《圣谕》；使用全然口语的体式，每个月两次在各省的公共场所向百姓宣读，以训诫相关人士并指点他们的政治责任，马礼逊先生决心仿效这本《圣谕》。

但是在重新考虑这件事后，他决定采用折中体：因为这种语体从各方面看都最适合于一本旨在广泛流通的书。一方面，这种语体保有古代经书严谨和尊贵气质的一些成分，而没有过于凝练使其难于理解。另一方面，它对于阅读水平尚可的读者都清晰易懂，而不会陷入口语粗俗的泥沼。这种语体既没有超越目不识丁之人的理解水平，又不会让具有良好教育之人感到鄙俗。每当中国人进行严肃的谈话时，都假装瞧不起口语化的小说作品，但同时，他们又不得不承认古代经书的风格没有普遍适用性。他们对《三国》的体例喜爱若狂。（汉译本，175－176）

ルッジェリーやリッチ以降の宣教師たちの残した膨大な漢語資料ではこうした中国語の 3 種の文体が全て現れている。特に、ルッジェリーの『通俗故事』やリッチによると言われている『拜客訓示』『拜客問答』、或いは『天主聖教啓蒙』や『天主聖教要理問答』といった教義書類、更には、例えば雍正帝教案（ポルトガルのイエズス会宣教師 Joãn Mourão＝穆經遠が雍正帝の 9 番目の兄弟である塞思黒と結託したことの供述書）などを見れば、早期宣教師たちが文言だけを用いていたのではなく、早くから極めて流暢な口語で資料を書

き残していたことがわかり、中国語の文体研究に極めて有益である。ただし、その 3 種の文体を分別する「鑒定語」については、未だ明らかにはされていない。大きな課題の一つである。(これは、北京官話の特徴は明らかにされていても、南京官話の実態は未だ解明されていないのと同じである)

ところで、プロテスタント宣教師の時代では、この 3 種の文体を「文理」、「浅文理」、「官話」と呼ぶようになった。「文理」自体は中国語として古くからあるが，それを文章のスタイルの術語として使い始めたのは恐らくはモリソン以降であり、彼の英華字典には登場する。1890 年に上海で開かれた「第 2 回プロテスタント宣教師大会」では、Wen=li(文理)を更に High/Deep Wen-li、Easy/Simple Wen-li とに区別し、特にこの Easy Wen-li を聖書翻訳やテキストに使用すべきという方針が出されている（A. Willianson. Preliminary Resolutions . *Records of the General Conference of the Protestant　Missionaries of China held at Shanghai*, May 7-20, 1890)。ただ、実際の「浅文理」版の最初は、1885 年のグリフィス・ジョン（楊格非）の漢訳聖書である。

*Catalogue of Scriptures in the language of China and the Republic of China,*compiled by Hubert W. Spillett,1975 という漢訳聖書目録ではモリソン以降の漢訳聖書をこうした文理、浅文理、官話（北京、南京ほか)、方言に分類している。

いずれにせよ、こうした中国語の文体について西洋人は早くから注目しており、中国人が意識し始めるのは五四文学運動以降である。

3. 域外漢語資料の多元的アプローチ[1]

ところで、「域外漢語資料」は、これまでは特に漢語研究を目的とした文脈で語られてきたが、実は、この資料群は単に言語研究だけでなく、色んな領域と複雑に重層的に絡み合っている。

例えば、トーマス・ウェード(Thomas Wade)の『言語自邇集』(1867)について見てみると、これまではその成書過程や近代中国語における「北京官話」の確立、日本への伝播と日本における中国語教育史上の位置づけといった言語面に関する研究が大部分であった。しかしながら、本書は上海のフランス人イエズス会宣教師によって土山湾孤児院印刷所からフランス語版が出版されていて、日本のみならず来華宣教師の間でもこのテキストは利用されていたことが分かる。

また、本書は日本では広部精がそれを底本として、日本最初の北京語教科書『亜細亜言語集』(1879—1880）を出版し、それ以降も多くの『語言自邇集』を元にしたテキストが編纂されその伝播の広がりを見ることが出来るのであるが、この『亜細亜言語集』には『語言自邇集』以外のテキストも取り入れられている。『欧州奇話』という部分であるが、これはドイツ人中国学者アーレント(Carl Arendt)の著した『通俗欧州述古新編』(1875）というテキストから採ったものである。なお、後ろで名前の挙がる何盛三は『北京官話文法』(初版は 1919）を書くに当たってこのアーレントを参考にしている。

このアーレントには、Einführung in die Nordchinesische Umgangssprache(北方官話口語入

[1] 内田庆市「基於域外漢語的多元化視角研究方法」『概念共同體的詞語基礎−沈国威教授七秩紀念論文集』(潘德宝，孫青編，浙江大學出版社，2026 年 3 月、94−125 頁)

門、1894)という中国語テキストもあるが、そこでは日本人の御幡雅文の『華語跬歩』からも多くの例文を採用している。そして、この御幡のテキストをアーレントに紹介したのが、その東方言語学院の中国人教師であった桂林という中国人である。桂林と御幡は御幡が中国に留学した時（1879）に知り合い，その後、東京外国語学校の中国人教習として日本にも滞在し、また日清貿易研究所が開設された時に共に上海で中国語を教えている。

御幡に関しては、留学時代に彼に中国語を教えた旗人、英紹古という人物もまた極めて重要な人物である。英紹古は当時、北京に留学した多くの日本人と関わりのあった人物で、日本人の最初の清国留学生として北京に赴き、渡部温の『通俗伊蘇普物語』を『北京官話伊蘇普喩言』(1878）として北京語に翻訳した中田敬義とも関係があり、その本の序文を書いているし、『語言自邇集』を元に作られた福島安正の『自邇集平仄編四声聯珠』(1886)でもその校訂に携わっている。その第二子の龔恩禄は東京外国語学校の中国人教習として招かれており、これまた日本の近代中国語教育に大きな貢献を果たしている。この英紹古については、更に、彼がキリスト教徒であったこととも関連して、西洋人宣教師エドキンズ（Joseph Edkins，艾约瑟）やマーティン（William Alexander Parsons Martin，丁韙良）との関わりや英紹古を介しての中田敬義などの当時の日本人留学生と西洋人宣教師との交流も今後検討がなされてよい課題である。

なお、アーレントのテキストは『華語跬歩』の他に、『語言自邇集』、呉啓太・鄭永邦『官話指南』(1888)などからも例文を採っており、『官話指南』の存在もまた無視できない。

この他、周知のように、マティア(C.W.Mateer)の『官話類編』(1892)も重要な域外漢語資料であるが、これにもフランス語版が存在する。上の『語言自邇集』のフランス語版と同じ編者、同じ出版機関によるものである。これは、イエズス会宣教師たちが実はプロテスタント宣教師の著作も大いに利用していたことの現れであり、新旧キリスト教間の学術交流という点でも新しい研究テーマになり得る。また、このフランス語版『官話類編』のローマ字表音も注目すべきである。ローマ字表記については、フランス語版のどちらも、基本的には EFEO システムによっている。この EFEO システムは、フランス極東学院（École française d'Extrême-Orient，略称 EFEO）の Arnold Vissière が考案した中国語表音システム[2]であるが、いわゆる北京音ではなく、伝統的な読書音(南京音)を基礎としている。例えば、尖団を区別するし、蟹攝開口二等の韻母は/–iai/となる。例えば、皆/Kiai/、解/Kiai/、界/Kiai/，誡/Kiai/、鞋/Hiai/、蟹/Hiai/のようである。また、“榮”“容”は/yong/と読み“用”“永”“勇”などと同音となる。

更に、『官話類編』には Paul Kranz（安保羅）によるドイツ語版も存在している。

ついでに言えば、この安保羅は『官話指南』の上海語版である『滬語指南』とも関わりのある人物で、『官話類編』のドイツ語版の他にも、『常用四千字録』という常用漢字のレベル分けをしたテキストや四書を「官話」に訳した『四書本義官話』というものも著して

[2] “Norte transcription du Chinois”：*Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* ,1902.ただ、正式に公刊されたのは 1902 年で、本書が作られたのが 1800 年代後半ということは、1902 年以前にすでにフランス人宣教師や上海イエズス会では使われていたということになり、実際には Julien の表記法に近い。西洋人のローマ字表記システムの歴史についても今後更に研究が成されるべきであろう。

いるが、彼に関する研究もほとんど行われてはいない。なお、『官話指南』の上海語版にはもう一冊ある。それは『土話指南』(1898)というもので、こちらはフランス語の注釈付で、出版は上記のカトリック系の「上海土山湾慈母堂」からである。

このように見てくると、こうした域外漢語資料はテキストの継承関係、関わった人物、所属する機構、出版社、活字等々、様々な要素が複雑に絡み合っていることが分かるのであるが、こうした多角的な視点からこれらを総点検し、再評価し、系統立てて整理することは、言語研究のみならず、近代史研究等々、他の分野の研究にも寄与するところ大であると考えている。

4. 見過ごされてきた研究—魚返善雄　岩村忍、何盛三など

域外漢語資料の有効性については、太田，香坂のいわゆる「明清文学言語研究会」のメンバーの貢献が挙げられるが、実は、それ以外にも見過ごされてきた研究者の再評価が必要であると考えている。その代表格が、魚返善雄であり、岩村忍であり、何盛三といった人物であるが、特に魚返善雄の功績はもっと称えられていいだろう。西洋人宣教師が広く利用した『聖諭広訓』(フランスの漢学者バザンなども口語資料として最も重視すべきだとした）を『漢文華語康熙皇帝遺訓』(1943)として影印出版したり、琉球官話研究の必要性、そして、何よりも西洋人の中国語研究に早くから着目していた（「アメリカ人の支那語研究」『中国文学第 68 号』1940)。『日本語と支那語』（1944）では、ヴァロやバイエルまで紹介している。実は文学同人誌である竹内好の『中国文学』にはこうした言語関係の論考も多く掲載されていることももっと知られていい。ついでに言えば、中国語学会はこれまで 3 冊の事典（辞典）を出しているが、その中でも『中国語学事典』（江南書院、1958）の中国語研究史は今こそ読まれるべきであろうと考えている。

5. AI の活用

最後に今更の感はあるが、AI の活用についても触れておきたい。

結論から言えば、これは積極的に活用すべきである。

筆者の場合、扱う資料が中国語や日本語以外に、ラテン語やスペイン語、イタリア語のものも多々ある。例えば、マテオリッチの伝記については、日本語訳以外にも中国語訳があり、これまでは中華書局版の『利玛窦中国札记』（何高济等译，1983）を利用してきたのだが、どうも日本語訳とは齟齬があったりして、イタリア語版（D’elia:*Fonti Ricciane*）を見る必要に迫られた。この時に大いに役に立ったのが AI である。写真を撮って AI に解読させるのであるが、もちろん、点検は必要だが、ある程度は使えるのだ。最近も、カサナテンセ図書館所蔵のラテン語の手書きの資料（雍正帝教案資料）を AI に読ませてみたが、多分、ほぼ正確に読み取ってくれるようだ。活字ならもっと精度は上がるはずである。これまでは、特に手書き資料の解読には OCR でも限界があってなかなか難しかったが、今の AI は相当のものである。これを使わぬ手はない。AI の登場で我々の研究も別の次元に進む可能性を秘めているのだ。

宣教師資料の会話文と白話文の中国語史における位置付けの試み

奥村佳代子
関西大学教授

1　『拝客訓示』について

イエズス会トレド区歴史文書館に所蔵される写本『拝客訓示』は、来華西洋人宣教師のための中国語が問答形式で記述されている。内容から大きく二つの部分に分けられ、前半の「管堂中事」「厨房的事」「買辦的事」「庫房的事」「茶房的事」「衣服帽房的事」「看門的事」「行水路船上的事」は、それぞれの事柄についてどのように行うべきかとの問いかけに対する答えが述べられており、キリスト教の作法が指南されている。後半の「拝客問答」は、中国人と西洋人が様々な事柄について尋ね答えており、話題は多岐にわたる。前半部分は中国での生活やキリスト教宣教に関する実用的な指南書、後半部分は宗教的な事柄に限定されない知識に基づいた教養書的な側面があると言える。

先行研究では『拝客訓示』で触れられている中国の習慣やイエズス会での作法等に対する関心が高く、特に「拝客問答」については複数の写本があり、宣教師から重要視された部分であると考えられることから、書誌的研究が行われている。次に引用する箇所からは、『拝客訓示』に関するいくつかの情報を得ることができる[3]。

a 家裡米恐怕不多，幾日要完了。明日就要去買幾担，只是該問一問價錢看何如。
老爺，如今春天的米雖然不十分貴，也不十分賤的。在北方是種麥子，我們南方是種稻子。北方麥子，有秋麥，有春麥，秋麥到五月就收成，春麥到八九月纔收成。南方稻子，有早稻，有晚稻，早稻六月初間就熟了，晚稻要到八九月纔得熟。早稻只有廣東、江西、福建地方種得多的。我們這杭州地方，只是種晚稻。大槩不論是麥子是稻子，到了未熟的時候，價錢是極貴的。若遇天時又下雨，田地裡面又不結實，就貴得緊。若遇着熟時候，就賤了。若是家裡要買他，免不得照依時價就是。(「買辦的事」)

b 譬如中國有一个人，或是秀才舉人監生或是有職官員，來拜在京的官。初進門，長班手拿一个帖子問，某老爺或某相公在家裡不在？ 這家裏管家若說不在家，這長班又說，往那裡去了？ 管家或說，今早四更皷時便進朝裡去脩理自鳴鐘，後又要去拜多客。(「拝客問答」)
長班說，住在鉄匠衕衚，進東頭過了二門上，遇不着人，把帖子在門縫裏插進去，或亦可將帖子放在西邊香蠟舖亦也罷。(「拝客問答」)

李慶 2015 は b とマテオ・リッチの北京滞在時期との関連から、「拝客問答」の原型はマテオ・リッチによるものだとする。さらに李慶 2015 を踏まえ李毓中 2016 は a に見られるように、後に杭州に滞在した宣教師ラザーロ・カッタネオらが書き足し、複数の宣教師らによって書き継がれ、17 世紀中葉以降に徐々に『拝客訓示』の形になったと指摘している。

先行研究によれば、『拝客訓示』は 16 世紀末から 17 世紀半ばまでの言語資料でもある

[3] 『拝客訓示』は中国、台湾でいち早く注目された資料である。先行研究は口頭発表によるものが多い。本論は、李慶 2015「利瑪竇《拜客問答》及其流變考」『第三屆利瑪竇與中西文化交流國際學術研討會論文集』中山大学出版社、李毓中・張巍譯 2016「「洋老爺」的一天：從拜客訓示看明末耶穌會士在中國」『清華学報』第 46 巻第 1 期、内田慶市 2019『『拝客訓示』の研究―解題と影印』関西大学出版部に基づいている。

と言え、引用 a b のように会話体あるいは口語体で記述されていることから、当時どのような中国語が口頭で用いられていたのかが漢字で示された文献としての一面を持つが、その言語に関して取り上げた先行研究はあまり見られないようである。

２　『拝客訓示』の中国語

『拝客訓示』が一時期に記されたものではなく、数十年書き継がれた結果であると考えられるため、ある程度の時間的な幅を持つ言語資料であることを念頭に、どのような中国語で記述されているのかを見てみたい。また、先に引用した a b から、話者は中国滞在中の西洋人宣教師と現地の中国人であると想定できる。前半（項目ごとに記述された「指南」部分）には 16 世紀末から 17 世紀に入ってからの杭州の状況が記述され、後半（「拝客問答」）には 17 世紀初頭の北京の状況が記述されている。前半と後半とは、話者、時期、内容が異なるため、まずは両者のそれぞれの会話で用いられている中国語とについて、初歩的な調査結果を報告する。

２-１　文体の均質性

２-１-１　「指南」部分

「指南」部分は、“小的”が質問し“老爺”が回答する、あるいは“老爺”から“小的”に対して細かな指示を出す会話文で構成されている。

(1)代名詞:我　我們　你　你們　他　他們　這　這個/箇　這等　這様　這等様　這般　這裡　那　那個　既然如此

“這麼”は用いられず“這等”あるいは“這様”が用いられる。“廣東省城起身到了南雄，要下一個店家，這店家要簡一個好人家，顧轎，寫人夫包管行李過山，沒一毫失落，這等様我們常常往來，就在他家”（行水路船上的事）。

(2)疑問詞：甚麼　那裡　甚様　為甚麼　怎麼　怎麼様　如何　何如

“怎麼様價錢”（買辦的事）という言い方で価格を尋ねている。

(3)介詞：與　對　用　為　跟　把　在　依

それぞれの用例は次のとおりである。“收拾完了，就該用長手巾遮盖”（管堂中事）“若是送出去了，我這裡為他念經就是”“這等你就收拾念經本與白衣服，帶些聖水跟我去”“喫完了飯的時節，你沒有甚麼事，該把廚房的地下打掃一打掃，該把柴劈些”（厨房的事）“或者肉與魚，新買的不彀分，免不得要在庫房裡面取出來湊”（庫房的事）“依他的名字放他的衣服”（衣服帽房的事）。介詞と共に繰り返し用いられる動詞に“說”があり、“與”か“對”のいずれかが用いられている。“我對你說”“你去對他說，畧等一等”（管堂中事）“我有話與他說”“你會不會，與我說”“若是有餘剩得多，待我與買辦的說，叫他少買些”“若是家裡有人私下進去，你來對我說”“若家裡的人說你管庫房的長短，不論是那一個，只管來對我說”“明日他的爺要來與老爺談一談”（庫房的事）。また、“與”“在”は動詞に後置される形がより多い。“你去買麵，該買上白麵，做的時節，不要把灰塵飛在裡面”（管堂中事）“寧可多費幾盆水，洗淨了收拾在廚櫃裡面，該要分別老爺用的放在上層，你們用的放在下層”“大槩飲食，不論魚、肉，都要熟，還該用些香料在裡面更好”“若家裡有人問你要東西，你不要私下把與他，先該問明白，說與我知道，後來我該許不該許”（庫房的事）“既是不曾管過，免不得我該說與你知道”（茶房的事）“我如今說與你”（衣服帽房的事）“你先該說與店主人家知道”（行水路船上的事）。普通話の基準から言えば、後置されるべきものと、後置する必要のないものとが含まれていると言えるだろう。

(4) 語気助詞（疑問を除く）：了　（也罷了　就是了）　罷　的

“若遇着熟時候，就賤了”“買大蝦也罷了”“要買太史連就是了”“我就寫了交付與他去罷”（看門的事）“山東路上有一様燒酒，名字叫做浠熬兒，淡得緊，不好吃的”。ただし語気助詞を伴わない会話文が大半である。

「指南」部分の中国語は、文語との混用はなく、口語文として均質であると言える。

２-１-２「拝客問答」

(1)代名詞：我 我們 我等 你 他 他們 這 這个 這様 這等 這等様 這裡 這裏 這邊 那个 那個 那裡 那裏 那邊

「拝客問答」では人称代詞に代わり、“小的”“學生”“先生”“老先生”“（某）老爺”“（某）相公”などが呼びかけに用いられ、また互いの国について尋ねる内容であるため、“貴國”“貴處”“敝國”“敝處”が多用されている。会話部分以外では“彼此請問大號”“彼此相問”も用いられている。

(2)疑問詞：誰　幾時　幾多　多少　那裡　何處　甚麽　為甚麽　甚麽様　怎麽　怎麽様　怎的　怎　如何　何如

「指南」部分より語彙が豊富である。“多少”の用例を挙げる。“問：貴國亦有用銀子？答：金銀銅都兼用，只是不用厘等秤。金銀銅都做錢，要買萬斤的貨物不過數錢。中士說：這个極便，省好些事。不知錢有多少重？答：金銀極少的有一兩銀子，銀錢極大的有八錢重，有四錢的，有二錢的，到五分就是絕少的。五分以下都用銅錢，都有國王的印。做私下做不得，假不得”。「指南」部分にも、日常生活における物の値段の話題はある。

(3)介詞：在　往　對　從　到　與　替　把　將　打

“替”“將”“打”の例は以下のとおりである。“只是自家兩下選一个好人替他断事”“把帖子在門縫裏插進去，或亦可將帖子放在西邊香蠟舖亦也罷”“打小西洋這一條路，曾前後有人走了二十遍”。 後置される場合もある。“住在鉄匠衚衕”“或亦可將帖子放在西邊香蠟舖亦也罷”“考不在做文章，在論理”等。

(4)語気助詞（疑問を除く）：了　罷（也罷）

“遇着石頭一撞就破了”“不敢領全帖 領古拆柬或單帖罷”“或亦可將帖子放在西邊香蠟舖亦也罷”“不如先差人送去罷”。疑問文を除き、語気助詞を伴わない会話文が大半を占める。

「拝客問答」の中国語は、「指南」部分と比較すると語彙が豊富であると言える。

２-２　語彙の地域性

２-２-１　「指南」部分

(1)動詞“曉得”を用い“知道”は用いられない。ただし“知”は用いられている。“只不曉得印書的紙是那一様”“你會相幇別人做過，也畧畧曉得些”“請問老爺，明日子不知用甚麽臺幃”。

(2)程度の甚だしさ

「形容詞＋“緊”」の形が用いられる。“某人進教的，病重得緊”（管堂中事）“常有的點心，還有幾様的。様數多得緊”“貴得緊”（買辦的事）。副詞では“極是方便”“價錢是極貴的”（管堂中事）“是幾不好的”“其餘各處地方，所有名色甚多”（買辦的事）“拜的時節甚是方便”（看門的事）“也不要取得忒少”（庫房的事）。形容詞の前ではないが、“狠”が 1 箇所で用いられている。“多是狠的”（買辦的事）。

(3)否定詞：不　未　不曽　未曽　沒

“没有”が動詞の否定に用いられることはない。“他說是昨日死，還不曽入棺木，要請老爺

們到他家裡念經”（管堂中事）“未曾擺棹子，先該把地掃得乾淨”（庫房的事)。“沒”は“有”の否定に用いられている。“到了南安主人家 就該先到河下去看一看船有沒有”。“沒一毫失落”（行水路船上的事)。

(4)「～しなくてはならない」「～してはいけない」「～しなくてよい」

指南という内容上、これらの表現は多く見られる。“你去買麵，該買上白麵，做的時節，不要把灰塵飛在裡面”“你每日該怎麼樣做”“凡是白的東西，都不得弄黑了”“若主日，不消掛”“不消把人去到他家裡”（管堂中事）“這個不消說，自然的道理，普天下都是這樣的”（買辦的事）“不消用大船”（行水路船上的事)。「～しなくてよい」は“不消”が用いられ、“不用”は用いられていない。

２-２-２　「拝客問答」

(1) 動詞“曉得”を用い“知道”は用いられない。

(2) 程度の甚だしさ

「形容詞＋“緊”」の形が用いられる。“忙得緊”“愚蠢得緊”“伶俐得緊”。副詞は“為因船載的貨物忒重”“各省城有極齊整，極華麗的宮殿”“在敝處這邊甚遠”“真个是好”。“狠”はない。

(3)否定詞：不　不曾　無　沒有　非

「指南」部分同様に“沒有”が動詞の否定に用いられる例はない。“非”は 1 箇所で用いられている。“問：我們中國學天文，測將來風雨，測將來旱澇之災，測吉凶禍福休咎。答：這个與天文毫厘不相干。問：我們這邊，常常有驗。答：那个是偶然，非天文所能定”。

(4) 「～しなくてはならない」「～してはいけない」「～しなくて良い」

用例は次のとおりである。“若相公十分要會我相公，再不要親自來拜”“或偶然不曾出門或又出了門方好，莫又空走”“請老爺莫出門”“自然是第一个，這不消說”“有軍馬守海邊，年年到春天，若本國裏一些不怕，不用兵守城，不要鎖城門”。“莫”“不用”が用いられている。また「～しなくて良い」という意味に捉えることのできる“不要”が 1 箇所で用いられている。

「拝客問答」と「指南」部分には細部に違いが見られるが、いずれも北京語や北京官話の特徴は見られないと言えるのではないだろうか。

２-３　特徴的な語・気になる点・言葉遣い

(1)“方便”

「指南」部分では“方便”が動詞として用いられている。

“老爺，還有甚麼該當方便的？還有，遇瞻禮的日子 要吊爐、香船。講道，要講道的衣服。這都是該方便的”（管堂中事）“每日清早起來，就要方便老爺們洗臉的水”（厨房的事）“還該方便幾個大碗，為老爺們要吃水的”“恐怕坐的久，若要待他茶，免不得要治整些茶葉，所以先稟，憑老爺吩咐，該是怎麼做，小的好方便”（庫房的事）“如今天時將熱了，棉襖棉褲都脫下了，就該方便夏衣”（衣服帽房的事）“正是你就取一個全帖、一個副啓、一個內函、一個護封、幾條紅簽與印色盒兒，都方便在那裡”“待他好方便轎馬與腳夫”“酒錢在外，買柴、買米、買菜、買肉，都要方便”（行水路船上的事)。次の例は前者が動詞、後者が形容詞として用いられている。“或用全帖活用拆柬，都該方便， 放在幾處，拜的時節甚是方便”（看門的事)。

(2)“～子”“～兒(児)”

「指南」部分でも「拝客問答」でも“～子”という形の語が登場する。同時に「指南」部分では“～兒(児)”の形も登場する

日子　明日子　帳子　廚子　蜆子　【夸瓜】子　茄子　包子　饊子　回子(餅)　果子　棗子　桃子　李子　栗子　松子　麥子　稻子　筷子　棹子　卓子　腰子　籃子　榛子　架子　名字　褲子　裙子　褂子　帖子

瓶兒　小瓶兒　蒜片兒　薑汁兒　甑兒(糕)　棗兒　光頭兒　浠熬兒(山東の酒の名称)　盒兒　樣兒　糊椒末兒　貓兒　小些兒

このように“～子”がより多く登場しているが、“～兒”も用いられている。“柿餅這本地也有麼？ 有是有，只不見多見児，比不得山東地方出得廣。”“這個盒児該是腰子樣兒的”。「拝客問答」では“帖子　房子　筷子　獅子　回子　緞子（打）板子　兔子”が出てくる。

(3)丁寧表現

「拝客問答」には「指南」部分には見られない丁寧な表現が用いられている。「指南」部分は上下関係が明確な話者の会話だが、「拝客問答」の話者には上下関係はない。

“主人說：豈敢，請轉不敢劳/老先生前日賜顧學生，果是不在家，失迎（客或說：）自學生做秀才時，曾見老先生大作或某書，極仰慕老生，今日何幸得見，學生大幸”。次のような表現も見られる。“老先生要曉得，月星自家無光，都借太陽之光”。

「拝客問答」の話者の言葉には互いに丁寧表現、固定的・文言的表現が用いられている。

３ 宣教師と口語体記述

宣教師・西洋資料には中国人が主体となったと考えられる資料がある。例えば、ローマイエズス会文書館（ARSI）所蔵「通俗故事」は中国文献に由来する部分があり、漢籍が土台となっている。ただし、漢籍の中に「通俗故事」と完全に一致するものは見出せてはおらず、同一の故事であっても文体や内容に違いがあり、「通俗故事」は中国由来でありながら宣教師・西洋資料としての独自性を有すると考えられる[4]。口語体や白話で記述するということも独自性のひとつであると言えるが、全くのゼロからの独自性ではない。なぜなら、口語らしく記述するということ自体は、中国人によってすでに実践されていたと考えられるからであり、宣教師は、それをさらに推し進める役割を果たしたと言えるだろう[5]。このように考えると、『拝客訓示』は中国人話者の中国語が土台にあるということになるだろう。

４　まとめ

域外資料は、中国語が周縁から観察されたことによってより客観的で詳細に捉えられていることが優れた点であると評価されるが、これは他者による観察や記述だけでなく、宣教師資料・西洋所蔵の中国由来の資料にも当てはまる。『拝客訓示』は中国人と西洋人による問答であり、両者の共同作業の上に成り立った早期の口語体資料として位置付けられる。

[4] 奥村佳代子 2025「宣教師資料と中国資料における朱買臣物語の比較」『東西学術研究所紀要』第 58 輯。

[5] 西洋所蔵資料の一角を成すものとして、キリスト教案件に関する档案文書があるが、これは中国人によって記述された档案文書が西洋に送られたものである。档案文書には「口供」の記述が含まれるものも多い。奥村佳代子 2021「福安教案における中国人キリスト教徒の尋問と供述の言葉」『東アジア文化交渉研究』第 14 号。

漢訳聖書の様々な可能性

―どんな分野の研究の資料として役立つのか―

塩山正純
愛知大学国際コミュニケーション学部教授

1.はじめに

漢訳聖書はキリスト教の新旧約聖書の中国語訳の総称である。中国における聖書の漢訳は唐代の景教に始まり、16 世紀以降にカトリック宣教師による聖書の部分的な漢訳が蓄積され、18 世紀のバセ抄訳『四史攸編』等を経て、19 世紀初頭のモリソン、マーシュマン以降、メドハースト等の委員会系、バプテスト・正教会系、これらと同時期の口語訳等、主にプロテスタントの宣教師によって様々な漢訳聖書が出版されてきた。また、カトリックのポワロが 19 世紀初頭に漢訳した『古新聖経』も見逃せない。漢訳聖書はキリスト教の欧米人宣教師（以下、宣教師）が宣教の目的のために学んだ中国語をネイティブの協力を得ながらアウトプットした中国語の作品である。非ネイティブである宣教師が著した漢訳聖書は本土資料と同等には扱いにくいが、漢訳聖書にはヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語、英語等の原文があって、漢訳聖書はそれが中国語に翻訳されたものであり、全文にわたって原文と漢訳の比較対照による考察が可能である。また、漢訳聖書は幕末から明治期の日本語訳にも影響があったことが指摘されており、東アジアの聖書翻訳における欧米、中国、日本の言語文化接触の実相を知るための資料としても活用が期待できる。

2.宣教師が学んださまざまな文体の資料として

宣教師は、聖書を文言から口語まで、宣教師自身が定義した文理、浅文理、官話（国語）、方言等の中国語の様々な文体で翻訳した。文理は文言に相当し、官話は口語の通用言語で、北京官話訳、南京官話、漢口の官話訳等の区別があり、方言では広東、福建、客家等が代表的である。浅文理は宣教師が難解な文理から口語に寄せた文体で翻訳されたものとされ、漢口で活動したグリフィス・ジョンが代表的である。また、官話訳、方言訳の一部には、中国語をローマ字で表記したものもあり、発音を辿る手掛かりにもなる。宣教師自身が区別した文体の特徴がそれぞれの漢訳聖書の本文から抽出できれば、宣教師が外国語として学んだ中国語の複数の文体の区別を明確にできる可能性がある。文理、浅文理、官話、方言等の文体の特徴は、永井崇弘、内田慶市、塩山正純等の虚詞を中心とした語彙の用法の比較等によって明らかになりつつあるが、さらに多くの研究者による継続的な考察が必要である。また、漢訳聖書に類する資料として『天路歴程』等のキリスト教読物の漢訳作品群もあり、これらについても、漢訳聖書同様の研究が進展することを期待したい。。

3.どんな漢訳聖書があるのか

方言訳を除く新約聖書の代表的な漢訳を辿ると、17 世紀前半のカトリックでラテン語ヴルガタ訳聖書を文言で抄訳したディアスの『聖経直解』があり、同じくカトリックのバセが 18 世紀初頭に漢訳した稿本の①『四史攸編』（以下、番号を付した聖書で文化翻訳を考察する）がある。『四史攸編』には所在が明らかな稿本が 4 種あり、カサナテンセ図書館、ケンブリッジ大学図書館、大英図書館の蔵本、モリソンが大英図書館蔵本を筆写して中国に持参して自身の漢訳の参考にした稿本（香港大学図書館蔵本）がある。こうしてモリソ

ンが完成したのが②『神天聖書』で、プロテスタントによる聖書全文の漢訳の嚆矢である。同時期にインドでバプテストのマーシュマンが聖書全文を漢訳した所謂③『聖経』（現存する版本に封面が無く、『聖経』と通称される）である。前述の通り、同時期にカトリックのポワロが漢訳した④『古新聖経』がある。早期の漢訳は、モリソンを源流とする主流／委員会系と、マーシュマンを源流とするバプテスト／正教会系の二つの系統で発展する。前者ではモリソンの息子ジョン、メドハースト、ギュツラフ、ブリッジマン等によって 1839 年に⑤『救世主耶穌新遺詔書』（モリソン改訳）が出され、ギュツラフが 1840 年に⑥同名称の改訳を出し、メドハースト等のイギリス系宣教師が 1852 年に『新約全書』（⑦メドハースト（代表）訳）を、ブリッジマン等のアメリカ系宣教師が 1859 年に『新約全書』（⑧ブリッジマン・カルバートソン訳）を出した。メドハーストの系譜は北京委員会による 1872 年改訂の官話訳『新約全書』（⑨北京委員会官話訳）、さらに和合訳本の系譜が 1924 年⑩文理訳、1930 年⑪官話訳等へ連なる。また、宣教師達の間で god を“上帝”とするか“神”とするか、「こちらにあってあちらにはない」概念の翻訳で侃侃諤諤の議論があったことが知られる。後者のバプテスト／正教会系では、ゴダードによる 1853 年の⑫『聖経新遺詔全書』、それをロードが改訳した 1872 年の『新約全書』がある。北京で活動したロシア正教会が 1864 年に刊行した「福音経」「宗徒経」からなる⑬『新遺詔聖経』（は固有名詞の音訳にアクセントを表すためにサイズの小さい漢字を使用しているのが特徴的である。

4.漢訳聖書から早期日本語訳への影響

また、日本語訳に従事した宣教師は漢訳聖書を原語から日本語への媒介として活用し、川島・土岐 2001 が言うように、当時の日本の知識人層に総じて漢文の素養があり、漢文の素養がある日本人が翻訳の助手として果たした役割の大きさを考えると、漢訳聖書の早期日本語訳への影響は見逃せない。幕末期の海外での日本語訳では、1840 年に⑥『救世主耶穌新遺詔書』を出したギュツラフがシンガポールで尾張の漂流民から日本語を学び訳出、刊行した⑭『約翰福音之傳』（本稿は明治学院大学図書館所蔵の天保 11 年版を使用）は、全てカタカナで記述された本文に、中国語の漢字語を日本語読みした例が見られる。これに、ウィリアムズが肥後出身の漂流民から日本語を学んで訳出した『馬太之福音傳』が続く。また、ベッテルハイムによる翻訳が二種類あり、一つは 1855 年の『路加傳福音書』『約翰傳福音書』等の琉球語訳で、もう一つは『路加傳福音書』『馬太傳福音書』等の⑮漢和対訳である。幕末には日本国内でも日本語訳が始まった。紙幅の関係で漢訳聖書からの個別の継承関係は省略するが、⑯ヘボンとブラウンの四福音書の翻訳が、1872 年（『馬可傳福音書』『約翰傳福音書』）から 1873 年（『馬太傳福音書』『路加傳福音書』）に刊行された。さらにヘボン、ブラウンが中心になって翻訳委員会が組織され、⑰『新約全書』が 1880 年に刊行された。バプテスト／正教会系では、バプテストのゴーブルが 1871 年に刊行した⑱『摩太福音書』が国内で刊行された日本語訳の嚆矢となる。同じくバプテストのブラウンは平仮名分かち書きの⑲『志無也久世無志與』（しんやくぜんしよ）を 1879 年に刊行した。正教会による日本語訳では、ニコライが懐徳堂出身の漢学者にして正教徒の中井木菟麻呂との協働で 1901 年に刊行した⑳『我主イイススハリストスノ新約』がある。

5.漢訳聖書はどこで利用できるのか

現在では、漢訳聖書、早期日本語訳聖書の多くがデジタル化公開されている。国内では明治学院大学、関西学院大学、立教大学、愛知大学、早稲田大学、同志社大学、南山大学

等の図書館が公開している。海外でも、ＮＬA、BnFGallica、ハーバード大学等の図書館が多数の資料をデジタル化公開しており、ケンブリッジ大学、香港大学の図書館は所蔵するバセ訳『四史攸編』の稿本を公開している。『四史攸編』で最も古い稿本の所蔵するカサナテンセ図書館はデジタル化こそないものの、全ての資料を手に取って閲覧できる。同館に限らず、欧米の図書館は総じて研究目的の利用に対して親切である。本稿で紹介した聖書のうちバプテストのロードによる 1872 年の漢訳『新約全書』、ウィリアムズの日本語訳『馬太之福音傳』筆写本の二種以外はいずれも比較的容易に利用することができる。

6.異文化翻訳のプロセス研究の資料として

漢訳聖書は、宣教師が学んだ中国語が記述された表現媒体であり、文体、語法、語彙、中国語の欧化等の考察での活用が期待できる資料であるが、何より「あちら（西洋）にあってこちら（東洋）にはないもの」をこちら（東洋）のことばで表現する文化翻訳の語彙研究の一次資料としての価値が高い。打樋 2013 が「キリスト教においても、その初めから集会の中心として守られてきたのは食事であり、共食儀礼であった。つまり、パンとワインをイエス・キリストの体と血として飲食する聖餐である」と述べるように、パンとワイン（ぶどう酒）はキリスト教にとって重要な存在であるが、まさに「あちら（西洋）にあってこちら（東洋）にはないもの」である。本稿ではパンとワイン（ぶどう酒）のうち、パンを漢訳聖書と早期日本語訳聖書がどのように翻訳してきたかに注目してみたい。

7.食事用のパンと儀式用（聖餐）のパン

聖餐のパンと一般的な食事用のパンは、現代日本語でいずれもパンと呼び、語彙を‘区別していない。尾崎 1991 は、近代に中国へパンを持ち込んだ欧米人による翻訳・記述と、受容した側の中国人の記述の両面から、中国における主食用のパンの受容と中国語でパンを表す語彙の創造と定着の過程を検証し、尾崎 1992 で、主食用と儀式用のパンについて「中国でもパンはキリスト教と同時に入ってきた。（中略）カトリックでは主食用のパンを“面头”“馒头”といい儀式用のパンを“面饼”といった。一方のプロテスタントは主食用のパンを“面包”“馒头”といい儀式用のパンを“馒头”“饼”といった。」とまとめている。

8.聖書におけるパン

17 世紀、ディアスの『聖経直解』（『天主教東伝文献三編（四）』1984 年）は抄訳で用例は限られるが、マタイ 4 章 3 節は“乃誘惑者近曰爾倘為天主子命此石變為餅”、マタイ 4 章 4 節は“主答曰經云人生匪獨繫於飲食惟繫於天主口攸發諸命”としており、尾崎 1992 のまとめとは異なる。日本語新共同訳をベースにすると、「パン」は新約聖書でパン種やパン屑を含めて 123 例登場する。一例にルカ 24 章 35 節を見てみると、新共同訳は「二人も、道で起こったことや、**パン**を裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。」とする。ラテン語ヴルガタ訳（*The Vulgata New Testament with The Douay Version of 1582 in Parallel Columns*., 1872）のラテン語は“Et ipsi narrabant quæ gesta errant in via: et quomodo cognoverunt eum in fractione panis.”、英語対訳は“And they told the things that were done in the way; and how they knew him in the breaking of bread.”で、英語欽定訳（*The Bible Authorized King James Version with Apocrypha*. Oxford University Press, 1997）は、“And they told what things were done in the way, and how he was known of them in breaking of bread.”とする。

9.漢訳聖書と早期日本語訳聖書における「パン」の用例

ルカの福音書が翻訳されていない⑭ギュツラフ日本語訳、⑱ゴーブル 1871 年訳を除く、

漢訳、早期日本語訳の用例は以下の通りである。

①バセ訳『四史攸編』大英図書館蔵本、18 世紀初頭

伊等亦述路上之情及若何以擘餅認之

②モリソン訳『神天聖書』1823 年

伊等亦報在路遇何事並擘麵包時如何認之

③マーシュマン訳『聖経』1822 年

伊等亦告在路所遇何事及擘麵頭時如何認之

④ポワロ訳『古新聖経』1800 年前後（『古新聖経残稿』中華書局，2013 年）

二門徒又告訴路上所遇這事如何（在）分饅頭時纔認得

⑤モリソン改訳『救世主耶穌新遺詔書』1839 年

遂將路間所遇併耶穌以劈餅出現之事詳細語衆矣

⑥ギュツラフ（郭實臘）漢訳『新遺詔聖書』1840 年

遂將路間所遇併耶穌以劈餅自表之事悉述矣

⑦メドハースト（代表）南京官話訳『新約全書』1857 年

兩個人也講起路上所遇着的和分餅纔認得耶穌的事

⑧ブリッジマン、カルバートソン訳『新約全書』（1863 年版）

二徒亦以途中所遇及擘餅時識耶穌之事述焉

⑨北京委員会北京官話訳『新約全書』1872 年

兩個人將路上所遇見的和分餅時候認出耶穌的事都述說出來

⑩文理和合訳本 1924 年

二人乃述途中所遇及擘餅識耶穌之事

⑪官話和合訳本 1930 年，プロテスタントで現在も最も使われる漢訳

兩個人就把路上所遇見和擘餅的時候怎麽被他們認出來的事都述說了一遍

⑫バプテスト、ゴダード訳『聖経新遺詔全書』1853 年

伊等亦述路中所遇及如何擘餅而為己所識也

⑬ロシア正教会グーリー訳『新遺詔聖経』1864 年

二人亦述途所遇及以擘餅識主諸蹟

⑮ベッテルハイムの 1855 年漢和対訳の漢訳

二人亦述途中所遇及擘餅識耶穌之事

⑮ベッテルハイムの 1855 年漢和対訳の日本語訳

フタリモマタ途中（ドウチウ）ニアフトコロヲヨビモチヲワルニカレラニ知ラルコトヲノベイフ

⑯ヘボン、ブラウン訳（1872−1873 年）の

二徒（ふたりのもの）も途間（みち）にてありしことと餅（ぱん）を擘（さき）たまひしによりて識（志り）しことを述（かたれ）り

⑰ブラウンが中心の翻訳委員会訳『新約全書』1880 年

二人（ふたり）の者も途間（みち）にて所遇（ありしこと）とパンを挈（さき）たまへるに因（より）て識（志り）たる事を語（かた）れり

⑲バプテストのアメリカ人ブラウン訳『志無也久世無志與』1879 年

かれらもとちうにてありしことまたぱんをわるときゑすを志りしことをのべたり

⑳正教会ニコライ、中井木菟麻呂訳『我主イイススハリストスノ新約』1901 年

二人（ニニン）モ亦（マタ）途中（トチユウ）ニ在（ア）リシ事（コト）及（オヨ）ビ如何（イカ）ニ其（ソノ）餅（パン）ヲ擘（サ）ク時（トキ）彼等（カレラ）ニ識（シ）ラレシ事（コト）ヲ述（ノ）ベタリ

参考までに、現代中国のカトリックで使われる二種類の漢訳の用例を挙げておく。

㉑思高聖経、1968 年に完成した漢訳聖書で、現在もカトリックで広く使われている。

二人就把在路上的事及在分餅時他們怎樣認出了耶穌述說了一遍。

㉒牧霊聖経、1999 年に完成した漢訳聖書で、採用するカトリック教会が漸増している。

這兩人也說了路上遇見的情形以及他們怎樣在分餅時認出了耶穌的經過

10.漢訳聖書と早期日本語訳聖書における「パン」の特徴

上に列挙したルカ 24 章 35 節では早期漢訳に“麵包、麵頭、饅頭”に見られるが、概ね“餅”とするのは儀式用のパンの形状からして合理的であり、用例の大部分が同様に“餅”とする。また、ヨハネ 6 章 51 節では、北京委員会北京官話訳、官話和合訳本、グーリー訳は具体物のパンではなく、抽象的な「生命の糧」の意味で“糧”を用いる。また、カトリックの『古新聖経』が“饅頭”を用いており、尾崎 1992 の内容と一致しないが、現代中国のカトリックの漢訳がプロテスタントと同じく“糧”“食糧”としている。ギュツラフの日本語訳、1840（天保 11）年『約翰福音之傳』（明治学院大学図書館蔵）は全文がカタカナ表記であるが、パンを全て「モチ」とするのは、日本語ネイティブの協力者が漢訳の「餅」を日本語で発音したのをそのまま記述したと考えるのが自然であろう。英語欽定訳はパンを“bread（不可算）、loaf（可算）、crumb(パンくず)、meat（古英語で食物全般を指し、欽定訳では「生命の糧」の意）、fragment(パンの欠片)、sop（古英語で液体に浸したパンの意）、shewbread（供えのパンの意）”など豊富な語彙で表現するが、漢訳聖書、早期日本語訳、さらには日中の現代語訳が概ね“餅”に落ち着いているのが特徴的である。また、尾崎 1992 は「日本語でもパンを「麵包」といったが、これは明治期に英漢字典からとり入れた語彙であった」とするが、マタイ 7 章 9 節でほとんどの漢訳、日本語訳が“餅”を使う中で、カロザース、加藤九郎 1875 年『略解新約聖書』が「汝（ナンチ）ガ中（ウチ）ニ何人（ナンヒト）カ若シ其子ノ麵包（パン）ヲ求（モト）ムルニ之ニ與（アタ）フルニ石（イシ）ヲ以テセンヤ」として“麵包”を用いているのは興味深い事例である。

11.さいごに

本稿ではごく僅かな事例を紹介したに過ぎないが、近代の宣教師による漢訳聖書は、非母語話者である宣教師が外国語として研究、学習した中国語でアウトプットした言語資料として、母語話者に西洋文化を伝達したプロセスを窺う資料として大きな可能性を持っている。漢訳聖書を資料として中国語の変化や文化翻訳に関する共時的・通時的考察を行えば、より複眼的・立体的な研究が可能になると考えられる。

【参考文献・資料一覧】尾崎實 1991「清代末期におけるパンの受容度」『関西大学文学論集』40 巻 3 号／尾崎實 1992「パンと中国人」『関西大学東西学術研究所所報』55 号／内田慶市 2001『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版部）／川島第二郎・土岐健治 2001「初期日本語訳聖書と中国語訳聖書」『聖書の世界総解説』（自由国民社）／打樋啓史 2013「パンとワインが意味するもの」関西学院大学『時計台』83 号 24 頁／塩山正純 2013『初期中国語訳聖書の系譜に関する研究』（白帝社）

音韻史における欧文資料の貢献

——近代北京語兒化韻の発展を例として——[6]

千葉謙悟
中央大学教授

1.はじめに

欧文資料は主として 16 世紀以降に出現する対音資料の一種である[7]。中国語史における欧文資料の価値の 1 つは漢字以外の文字表記による中国語音声の記録にあり、その利点は他の時代・他の言語による対音資料と同様である。一方で、資料が記されている言語への理解や音声表記の詳細な検討といった、欧文資料を取り扱う際の注意点もまた他の対音資料と変わることはない。

本発表では先行研究において推定されてきた近世音の言語現象について、欧文資料というより直接的な根拠から跡づけることにより、欧文資料が中国語史の研究においてなしうる貢献の一端を示したい。今回は 19 世紀北京語における韻母の兒化をとりあげ、フランス語資料『京話指南』によって r 音が前の音節に融合する過程について分析する。

なお以下において、表記の観点から「這兒」「一點兒」のように「兒」を伴う語を「兒綴詞」と称する。そして兒綴詞の音声面に着目し、「兒」が前音節に融合せず独立したままである場合は「兒尾」と呼び、r 音色を伴いつつ一音節化していることを「兒化」と呼ぶ。兒尾の声調については今回はあつかわない。

2.北京語兒化韻の形成過程

現代北京語の兒化韻は単韻母[ɚ]を除くすべての韻母に発生しうるが、歴史的に見ればそれらの韻母が同時期に一斉に兒化したわけではなく、「兒」の直前にある音節の韻尾や主母音を条件とした先後関係が認められる。兒化韻形成史の研究は数多いが、中でも張世方 2010 は河北省保定、満城、定興および北京などの方言から兒化の先後関係を推定している。「兒」の前の音節の韻尾・主母音を筆者が分類した上で、张世方 2010 に基づき 4 つの方言の状況をまとめれば表 1 の通りである。また同書によれば兒化の起こった順序はまず①[ai an uen]などといった i 韻尾や n 韻尾（表 1 の I 系 2 と N 系）、②[ie, e, uo]などゼロ韻尾かつ半高母音の主母音をもつもの（E 系、O 系）、③[i ɿ y]など高母音の主母

表 1　河北方言の兒化韻[8]

	保定	定興	満城	北京
A 系(a, ia, ua)	-	+	+	+
O 系(o, uo)	+	±	+	+
E 系(ɤ, ie, ye)	-	±	+	+
U 系(u, iao, ou)	-	±	-	+
I 系 1(単韻母 i, ɿ, y)	-	-	+	+
I 系 2(韻尾 ai, ei)	+	+	+	+
N 系(an, in, yan)	+	+	+	+
NG 系(aŋ, eŋ, iŋ)	-	-	-	+

[6] 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（25K04048）による研究成果の一部である。
[7] 明代以前の欧文資料の概況については千葉 2013、清代のそれについては千葉 2011a を参照。また資料の性格ごとの分類については千葉 2011b、2015 を参照。
[8] 表中「＋」は兒化韻が存在すること、「−」は存在しないこと、「±」はどちらでも可であることや過渡的な形式であることを示す。また括弧内は該当する韻母を簡略的な IPA で例示したものであり網羅的なリストではない。

音（I 系 1）、④[au eng ung]などといった u 韻尾および ng 韻尾（U 系、NG 系）とされる[9]。

3.『京話指南』における兒化

3.1.欧文資料を用いた兒化の先行研究

近年の研究には黄灵燕 2019 や孙志波 2023 があるが、「兒」のローマ字に深い検討を与えることなく兒綴詞を兒化韻と認定する点に問題がある。例えば黄灵燕 2019 が取り上げる Hemeling1916 は「一些兒」i[1]-hsieh[1]-rh[2]（p.1）、「丑兒」ch'ou[3]-'rh[2]（p.8）のように兒尾がすべて独立した陽平調を伴って rh[2] で示されているがこの事実に対する説明がない（下線は筆者。以下同）。孙志波 2023 は Поповъ1900 を取り上げているが、「石頭子兒」ши-тоу-цзы*ръ*（p.43）のように「兒」のローマ字 *р*ъ が語ストレスを示す斜体で書かれる例を見逃している。また同論文では Stent1871 に兒化韻を認めるが、Stent1871 の「兒」のローマ字には「孩兒」'hai[2]-êrh[2]（p.144）のごとく一律に陽平が与えられているため、黄灵燕 2019 と同じ問題を抱えている。

3.2.『京話指南』の兒綴詞

『京話指南』（1887-89）はフランス人外交官アンボー＝ユアール（Camille Imbault-Huart/于雅楽, 1858-98）による北京語教科書である。その言語特徴については千葉 2025 および千葉 2026 を参照。

『京話指南』の兒綴詞は延べ 1547 語ある。このうちローマ字表記のあるものが 892 語、その中で異なり語数は 297 あった。本稿の分析対象はこの 297 語である。これらに与えられたローマ字表記は 2 種に大別できる。これらを A 類、B 類とすれば、A 類は「ハイフン＋eul」（A_1 類）と「前の音節の介音/主母音＋eul」（A_2 類）、B 類は「前の音節の声母/介音＋eul（発音注記付き）」とまとめられる。

まず A_1 類には 182 語が属するが、A_1 類の「兒」は兒尾とみなすべきだろう。例えば「茶几兒 tch'a-tçi-eul」「取燈兒 ts'iu-deng-eul」はそれぞれ[tʂʰa.tɕi.ɚ][tsʰy.tɤŋ.ɚ]と解釈する（IPA は筆者による推定。以下同）。『京話指南』の表記法はきわめて厳密であり、音声と表記間の対応関係の透明度が高い。したがって例えば「女兒 niu-eul」と「影兒 yng-eul」を比較した場合、少なくともローマ字からは前者の「兒」を独立した音節、後者を兒化韻と認定し分ける積極的な根拠はない。

次いで A_2 類には 101 語が属する。A_2 類では「棍兒 kou^{nn}-eul」「些兒 si^{e}-eul」のように上付きのローマ字が見られる。これは発音されないことを示すが、言い換えれば上付き部分は脱落していることを示す。よって A_2 類の「棍兒 kou^{nn}-eul」「些兒 si^{e}-eul」は [ku.ɚ][si.ɚ]と解釈する。ここでこの形式を兒化とみなさないのは以下に述べる B 類の存在による。

その B 類には 14 語が見いだされる。これらは「解悶兒 tcié-m^{eunn}-eul」「玩兒 ou^{ann}-eul」のように上付きで記されるローマ字がある点で A_2 類に似るが、B 類において重要なのは「（悶兒は）meul[mœl]と発音せよ」「（玩兒は）oueul[uœl]と発音せよ」のように一音節に読む旨の注記が必ず伴う点である。これに基づけば B 類は兒化韻とみなしてよい。本発表では B 類にのみ一音節化を示す注記がある点を重視し、A_2 類を B 類と同程度に融合した兒化韻とはみなさない。

3.3.『京話指南』の A 類と B 類

[9] A 系は表 1 以外の方言によって兒化の速度が異なるため①～④のどこに入るかについて張世方 2010 は明言しない。各方言の/a/が前舌的か後舌的かによるようである。

3.3.1.A_2 類の分析

A_2 類の表記法「前の音節の介音/主母音＋eul」は、言い換えれば「兒」の前の韻尾や主母音が脱落していることを意味する。ここで A_2 類の脱落状況と韻尾・主母音との関係をまとめたものが表 2 である。語ごとの一貫した対応を見るため、脱落率の計算には脱落のある形とない形の双方が見られる語は除いた。

表 2　A_2 類における韻尾/主母音の脱落状況

	脱落あり	脱落なし	脱落率(%)	双方あるもの
A 系	1	31	3.1	2
O 系	0	28	0.0	0
E 系	4	6	40.0	1
U 系	0	85	0.0	2
I 系 1	2	34	5.6	0
I 系 2	13	3	81.3	1
N 系	76	0	100.0	0
NG 系	5	52	8.8	0

表 2 から、A_2 類における韻尾や主母音の脱落状況には大きな偏りが認められる。すなわち N 系の脱落率が最も高く、I 系 2 と E 系がそれに次ぎ、以下 NG 系、I 系 1、A 系の順に脱落率が低くなる[10]。U 系と O 系に至っては脱落する例がない。

3.3.2.B 類の分析

B 類は表 3 の 14 例が見られた。まず N 系が 10 例を占めることが目を引く。次いで E 系が 2 例、U 系と I 系が 1 例ずつあった。これらのうち「這兒」「會兒」は明らかに常用語であり、『京話指南』でも前者は 43 回、後者は 18 回（「一會兒」「多會兒」を含む）出現する。任意の兒綴詞が等確率で出現すると仮定すれば 1 語あたりの期待度数は約 3 回となるが、3.2 節に挙げたローマ字表記を持つ 892 の兒綴詞のうち異なり語数は 297 語であることから、それを大きく上回っていることが分かる。Bybee2019:52-54 は語の使用頻度と言語変化の関連について指摘しているが、兒化の進行についても同様の可能性が想定できるかもしれない。

表 3　B 類一覧と韻尾・主母音のタイプ

	語	ローマ字	タイプ		語	ローマ字	タイプ
01	這兒	tch^{e}-eul > tcheul	E 系	08	門兒	m^{eun}-eul > meul	N 系
02	蝴蝶兒	hou-ti^{é}-eul > ’hou-tieul	E 系	09	解悶兒	tçié-m^{eunn}-eul > tçié-meul	N 系
03	小狗兒	k^{ǒǒ}-eul > keul	U 系	10	城根兒	t'cheng-k^{ennn}-eul	N 系
04	會兒	hou^{ěi}-eul > ’houeul	I 系	11	點兒	ti^{ènn}-eul > tieul	N 系
05	本兒	p^{eunn}-eul > peul	N 系	12	眼兒	y^{ènn}-eul > yeul	N 系
06	人兒	j^{ennn}-eul > jeul	N 系	13	小官兒	kou^{ann}-eul > koueul	N 系
07	仁兒	j^{ennn}-eul > jeul	N 系	14	玩兒	ou^{ann}-eul > oueul	N 系

4.結語

4.1.『京話指南』の検討から見えるもの

『京話指南』に出現する兒綴詞は兒尾である A 類と兒化した B 類に大別されるが、大多数は A 類に属することから、『京話指南』の兒綴詞の多くは兒化がまだ十分に進んでいな

[10] I 系 1 で脱落のある 2 例は「雞子兒」「花子兒」である。『京話指南』では「子孫」は tseu-souenn だが「孫子（まご）」は souenn-tse^{u} となる。アンボー＝ユアール自身も「(名詞接尾辞の「子」は非常に短くなるので)『房子』は fang-ts と言わねばならないほどだ」と述べる（Tome I: 65)。つまり tse^{u} という表記は接尾辞「子」が軽声で発音され音節長が短くなることの反映と考えられる。ここから、「雞子兒」「花子兒」の「子」における u の脱落は兒化とは無関係とみてよい。従って I 系 1 の脱落例 2 例を除外すれば、I 系 1 の脱落率は 0%となって U 系・O 系に並ぶ。

いことが分かる。A 類はさらに主母音や韻尾が脱落しない A_1 類と脱落する A_2 類に細分できるが、A_1 類が過半を占めることから、主母音や韻尾の脱落が全面的に進行している段階とはいえない。それに対して B 類は 14 語と数こそ少ないものの、10 語が N 系に属している一方で U 系が 1 語、NG 系に属する語はないという状況は、张世方 2010 が示す兒化の発展順序におおむね沿うものといえる。したがってこの点において、『京話指南』は当時書かれた文献として、現代方言の調査から推定された兒化の先後関係をより直接的な言語事実から補強したといえるだろう。

A_2 類は兒尾であるにもかかわらず主母音や韻尾が脱落しており、しかもその脱落状況には明確な偏りが見られた。表 2 から看取されるとおり、N 系での脱落が最も進んでいる一方で U 系や NG 系はほぼ脱落していない。つまりまだ兒化していない A_2 類の主母音や韻尾の脱落状況もまた、現代方言や B 類の示す兒化の発展順序とおおむね同様といえる[11]。

この事実から兒化韻の形成過程について 1 つの示唆を得ることができるだろう。つまり「兒」は前の音節の主母音や韻尾を脱落させると同時に兒化したのではなく、脱落後も「兒」自体が兒尾として残る段階が存在した可能性である。例えば「一半兒」は[i.pan.ɔ̯]> [i.pa.ɔ̯]> [i.pa̯]という段階を経た可能性があろう[12]。

また興味深いのは「出花兒 tch'ou houa-eul（疱瘡ができる）」と「花兒 hou^{a}-eul（花）」のように、同一の字であっても語義によって A_1 類と A_2 類に分かれる例が見られる点である。これは陈淑静、许建中 1997:35-41 が報告する定興方言の[ɤ]や[u]といった韻母の兒化の状況と同様である。张世方 2010:131-132 ではこの事実を踏まえて兒尾から兒化への変化は語彙拡散的であることを指摘しているが、『京話指南』の「出花兒」「花兒」もその可能性を示唆するだろう。

4.2. 19 世紀北京語の重層性と欧文資料の重要性

しかし欧文資料は上述の結論が 19 世紀北京で用いられていた言語変種すべてに当てはまるとは限らないことも教えてくれる。例えば Edkins1864:101 は「北部において名詞やその他の語に非常に広く付加される接尾辞『兒』は、しばしばそれが付加された語に吸収される。その際、語尾の n, ng および母音は r に置きかわり、語自体の声調は保たれるが接尾辞の声調は失われる」と指摘し、「人兒 jer」「絲兒 ser」「餅兒 pier」のようなさまざまな韻母にわたる兒化韻を記録している[13]。また Mateer1900:12 は「『兒』は通常、付けられる単語と一体化するように発音される。したがって『錢兒』は Ch'ien-er ではなく Ch'ier と発音される」と述べているのである。

『京話指南』における状況とエドキンスやマティーアの記録の違いは、記述対象である北京語の内部差異として理解できるかもしれない。宣教師であるエドキンスやマティーアが中国語を用いる相手は主として布教対象たる民衆であったのに対し、アンボー＝ユアールのような外交官が公的な場で接する中国人は官僚や宗室・旗人といった上流階級が多か

[11]『京話指南』において A 系は A2 類での脱落率が非常に低く、B 類にも A 系が存在しない。常用語である「那兒 na-eul」も兒綴詞のままである。

[12] 张世方 2010:132 では保定や定興の一部の韻母において“语素‘儿’与前一音节已经合为一体，成为一个音节，具有儿化合音的特征，但它又不只是剩下卷舌动作，而是保留自身的音值，具有儿尾的特征。整个音节的音高也是原来前一音节在儿尾前的变调和原儿尾本身的音高的组合”と述べ、例えば o に対する oər、iɛ に対する iɛər といった過渡的な兒化韻母が存在することを報告している。

[13] ただし北京語を扱う同書 49-52 課では「兒」のローマ字は「今兒 chin rï」のように常に独立して記されている。

ったからである[14]。

さらに言えば、そもそも本土資料に見える兒綴詞を素直に受け取ってよいかという問題があろう。中国人助手が口語的な語や発音を文字に記すことを忌避しがちであることは来華宣教師たちが繰り返し指摘するところであり、例えば Mateer1900:12 では中国人は「兒化韻の存在にほとんど気づいていない」上に「『兒』の字を書くことに反対する」と述べている。同頁によれば「『兒』を過度に用いることは、教養のない人物であることや言葉遣いにだらしのない人物であることを示す」という。

要するに、本土資料であっても当時の言語実態を忠実に記しているとは限らない。少なくとも兒化のように本土資料の文字表記に十分反映されにくい可能性がある音声現象を検討する際には、口語を記録することに意識的な欧文資料の方が当時の言語事実により忠実な情報を提供しうるのであり、まさにその点において欧文資料の本土資料に劣らぬ価値を認めることができるだろう。

【参考文献】

千葉謙悟 2011b「19 世紀音訳語の資料・特徴・交流」『東アジア文化交渉研究別冊』7:95-121/千葉謙悟 2015「官話音研究における欧文資料について」『中国語研究』57:1-19/千葉謙悟 2025「『京話指南』と 19 世紀北京語の内部差異」『中国語学』270:66-84/千葉謙悟 2026「『京話指南』の語法について」『中国文学研究』52（印刷中）/陈淑静、许建中 1997《定兴方言》北京：方志出版社/黄灵燕 2019《官话的儿化韵母的基础音系和儿化词的构词法》《语言研究》4:78-88/林涛、沈炯 1995《北京话儿化韵的语音分歧》《中国语文》3:170-179 /千葉謙悟 2011a《官話、国語資料：研究与動態》遠藤光暁、朴在淵、竹越美奈子編《清代民國漢語研究》首爾：学古房，77-84 頁/千葉謙悟 2013《明代西洋資料概況》《元明漢語歴史研究工作坊》杭州：浙江大学/孙志波 2023《清末北京话的“-儿”缀读音》《语言研究》3:48-52/张世方 2010《北京官话语音研究》北京:北京语言大学出版社/Bybee, Joan, 小川芳樹・柴崎礼士郎監訳 2019『言語はどのように変化するのか』東京:開拓社/Chao, Yuen-ren 1968/2004 *A Grammar of Spoken Chinese.* 北京：商务印书馆/

【一次資料】

Edkins, Joseph1864 *Progressive Lessons*. (2nd. ed.)/Hemeling, Karl 1916 *English-Chinese Dictionary of the Chinese spoken language.* /Imbault-Huart, Camille 1887-89『京話指南』 /Mateer, Calvin Wilson 1900『官話類編』/ Stent, George Carter 1871『漢英合璧相連字彙』/ Поповъ, П. 1900『漢俄合璧增補字彙』

[14] アンボー＝ユアールも『京話指南』の中国語は上流階級のものであると断言している(Tome I: XV)。また満洲族の漢語は漢族のそれよりも兒尾を保つ傾向が強かったようであり、例えば Chao1968/2004:163 は「（辛亥革命以前の）満洲族は指小辞を独立した音節としていた。例えば満洲族は「兔兒爺」を tuh.erl-ye（=tu'erye）と言ったが、彼ら以外は tull-ye（=turye）と言った」と述べる。加えて林涛、沈炯 1995:174 によれば愛新覚羅溥儀の弟溥任（1918-2015）は「一个样儿」を yí ge yàng'er と発音したといい、また同頁によれば 20 世紀末になってもなお“当地（=北京香山）一些满族人依旧把‘这儿、孩儿、院儿、兔儿爷、连儿灶’等词语里的‘儿’说成独立的轻音音节”という状況であった。なお引用内の括弧は筆者が補ったものである。

中国語白話史教材の再構成

―太田辰夫『中国歴代口語文』の継承と更新

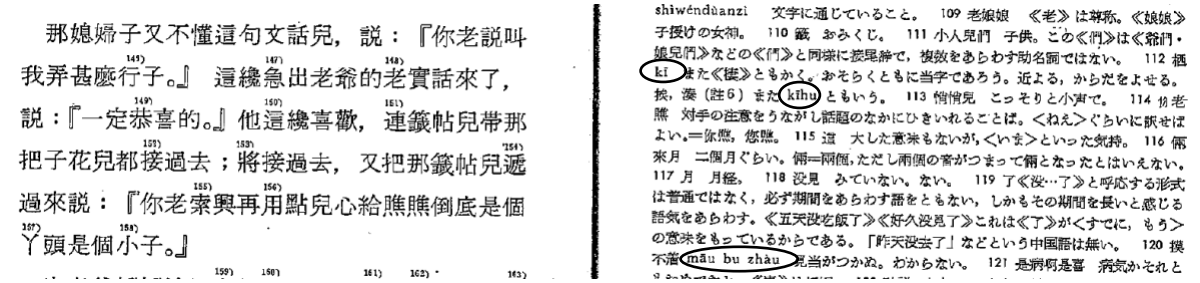
荒木典子 / 劉淼 / 今村圭 / 髙柳浩平 / 川下崇

東京都立大学教授/沖縄国際大学講師/京都産業大学准教授/中央大学非常勤講師/東京都立大学非常勤講師

1.目的

太田辰夫『中国歴代口語文』(以下、太田版とする）をベースに、新たな白話史の教材を作成する。太田版は、唐五代から 20 世紀初頭までの白話資料を詳細な注とともに通時的に提示した、口語史研究の基礎的資料であるが、刊行後既に約 70 年が経過し、白話研究の研究成果は大きく進展した。太田版の長所を受け継ぎ、近年の成果を盛り込んだ新たな教材を作成し、白話史研究の新しいモデルを提案する。

2.太田版の長所



那媳婦子又不懂這句文話兒，說：『你老說叫我弄甚麼行子。』 這纔急出老爺的老實話來了，說：『一定恭喜的。』他這纔喜歡，連籤帖兒帶那把子花兒都接過去；將接過去，又把那籤帖兒遞過來說：『你老索興再用點兒心給瞧瞧倒底是個丫頭是個小子。』

shiwéndùanzi 文字に通じていること。 109 老娘娘 ≪老≫は尊称。≪娘娘≫子授けの女神。 110 籤 おみくじ。 111 小人兒們 子供。この≪們≫は≪爺們・娘兒們≫などの≪們≫と同様に接尾辞で，複数をあらわす助名詞ではない。 112 栖 ki また≪棲≫ともかく。おそらくともに当字であろう。近よる，からだをよせる。 挨，凄（註6）また kihu ともいう。 113 悄悄兒 こっそりと小声で。 114 仍老臍 対手の注意をうながし話題のなかにひきいれることば。<ねえ>ぐらいに訳せばよい。=你瞧，您瞧。 115 這 大した意味もないが，<いま>といった気持。 116 倆來月 二個月ぐらい。倆=兩個，ただし兩個の音がつまって倆となったとはいえない。 117 月 月経。 118 沒見 みていない。ない。 119 了≪沒…了≫と呼応する形式は普通ではなく，必ず期間をあらわす語をともない，しかもその期間を長いと感じる語気をあらわす。≪五天沒吃飯了≫≪好久沒見了≫これは≪了≫が<すでに，もう>の意味をもっているからである。「昨天沒空了」などという中国語は無い。 120 摸不着 māu bu zháu 見当がつかぬ。わからない。 121 是病何是喜 病気かそれと

太田 1957:24-25　○の部分は現行と異なるピンイン。

①白話的要素の拡大と文法機能の変遷を通時的に示す作品選定。六朝の単発的な白話語彙から、唐～宋の白話表現の増加、元曲の意識的な白話使用、元代の言語接触、明清小説の文白の自由自在な使い分けへと展開する。

②作品の言語的特徴が表れる場面。例)『金瓶梅詞話』『品花宝鑑』の“別要”、『紅楼夢』の口語と韻文・典故の対照。

③当時の言語運用の実態が分かる場面。例)『児女英雄伝』第 38 回、性別と識字率。

④文学的鑑賞に堪える場面。例)『金瓶梅詞話』第 21 回、話者の身分を反映した会話。

3.新版のねらい

継承する点…白話語彙の単発的な混入の段階､文白混淆体の段階､時折出現する言語接触、白話文の成熟段階を順に見せる。

更新する点…新出の版本、学説、工具書を利用。

4.新版の構成：

①掲載予定文献　☆は太田版未掲載のもの。

☆賢愚経（漢訳仏典）:仏典の漢訳作品の中でも説話的性格が強い。原典言語からの漢訳でもたらされた新たな語彙･文法は､上古漢語の文言とは明確に区別される特徴を生み出し、口語の変容をも促した。

☆朝野僉載（野史）:唐代前半の漢語の様相を探るうえで突破口になり得る文献。張鷟が当時見聞きした朝野の逸話が雑多に記されている。多様な分野の語彙、アスペクト助詞、動補構造、処置式の萌芽が見られる。
祖堂集（禅語録）:唐五代の俗語の文法、用字が記録されている。
☆大宋宣和遺事（話本小説）:宋元期の資料として追加。後の白話小説への移行過程を補う。
大唐三蔵取経詩話（話本小説）:文白混淆の文体、かつ後の白話小説の先駆けとなる資料。
☆西廂記諸宮調（諸宮調）:金代の口語的表現を含む資料として追加。
☆旧本老乞大（会話書）:太田版は、『奎章閣叢書』第九所収の『老乞大諺解』を収録。1998年に韓国大邱で発見された明代の改訂以前の言語を伝える旧本『老乞大』を採用する。
☆元刊雑劇三十種（雑劇）:（作品未定）
☆水滸伝（白話小説）、金瓶梅詞話（白話小説）:口語成分を豊富に含む。『水滸伝』は太田版未掲載。両者とも明代における白話の語彙・文法を考察するうえで重要な資料。
紅楼夢（白話小説）: 北京語的特徴のほか、同時代の方言要素にも注目。
児女英雄伝（白話小説）:満洲語を含めた北京の社会における言語運用にも注目。
☆小額（小説）:太田版刊行後に広く知られるようになった作品。（太田自身も後に研究）清代末期の旗人語を忠実に反映する資料。
☆正紅旗下（小説）:老舎『離婚』よりも後の作品。民国期以降の北京語資料として。
②本文サンプル　『児女英雄伝』第 40 回

公子此時夢也夢不到老人家叫了來吩咐這麼一段話 [1]，躊躇了會子 [2]，也翻着滿洲話回了一套。一邊向着老爺說，卻又一邊望着太太臉上，看那神情，好像說得是這個人他母親使着得力 [3]，如今自己不能在家侍奉，怎的倒把母親一個得力的人帶去服侍自己呢？倣彿是在那裡心裡不安，口裡苦辭的話。卻又聽不出他說的果是這麼段話不是。只見老爺沉着臉說了句：“阿那他喇博珠窩阿那他喇博（珠窩）(anatara be joo) [4]！”

【注釈】1) 這麼一段話:このような話。2) 會子:しばらくの間。“這會子”“那會兒”という表記も見られる。3) 得力:能力のある人。4) 満洲語を漢字で音訳したもの。最後の二文字は合音。anatara は anatambi「言い逃れをする」の連体形で「言い逃れ（をすること）」。be は対格、joo は joombi（中止する）の命令形で「～をやめろ」。全体の意味は「言い逃れをやめろ」となる。
③文法・語彙コラムのサンプル
掲載した部分だけではわからないことを補足、またはある文法や語彙について他作品と比較して通時的に論じるコラムを設ける。

5.終わりに―口頭語の歴史を学ぶ意義
・語彙・文法の形成過程を理解し、暗記型から思考型の学習へ転換が可能になる。
・漢籍の言葉が現代中国語へ連なることを実感できる。

参考文献　荒木典子 2026.「太田辰夫『中国歴代口語文』の魅力と課題」,『人文学報』522:1-22 頁。太田辰夫 2024［1957］.『中国歴代口語文』京都:朋友書店。太田辰夫 1999［1988］.『中国語史通考』東京:白帝社。日本中国語学会編 2022『中国語学辞典』東京:岩波書店。輿水優・島田亜実 2009『中国語わかる文法』大修館書店。

從「向」的發展論「一向」的分布特色

蘇建唐
國立聯合大學 助理教授

時間副詞「一向」在現代漢語的分布特色大致有以下四點，本文連同相應例句並陳於下：

1. 傾向與習慣性行為結合

(1) 公家一向蹲著小解，不管去到哪都沒變過／*足足半個多小時都沒換過姿勢。
(2) 一向習慣自己以長得醜而讓人難忘的魏爾德，反而因此奇怪地不高興起來。

2. 傾向與靜態語境結合

(3) 他一向吃完飯就去睡覺。
(4) 對跟自己不合的權臣，便不斷／*一向提升他的官位，使他人格崩潰。

3. 傾向與過去和現在時間結合

(5) 選舉熱戰在社區、部落中燃燒，連過去／至今／*未來一向安寧的校區也都被迫干擾。

4. 參考時間傾向為長時

(6) [由小到大]長程參考時間／？[這幾／天／小時／分鐘]短程參考時間，我一向深信這個道理。

事實上，前述分布也符合教育部辭典對於「習慣」的說明：「長期養成，一時不容易改變的行為模式或地方風尚。」[1]同時也因為是既有行為，所以無法動態性改變，也只能存在於過去至說話時間點，故與未來時牴觸。綜此，本文認為可將「一向」的語法意義可理解為：「**從過去到說話時間為止維持的某種習慣性動作或狀況。**」接下來，本文企圖透過「向」的發展探索現代漢語「一向」的分布特色。

根據文獻所記，「一向」最早用以傳達"專心朝某個方向"，用例參後句（13），此中亦著重移動行為的「目標處」；然而，該詞於現代漢語著重「習慣性」的概念則必須建立在「從過去到說話時間為止」的範圍內，顯示須納入「事件起始點」。但這看似相反的兩個概念，又是如何並存於「一向」之中？事實上，類似概念也可見於近義詞「向來」； 對此，本文認為有必要先從兩詞共有的「向」進行觀察。

「向」最早用作名詞，根據《說文》所記：「向，北出牖也」表達"向北開的窗戶"；爾後，「向」還陸續發展出傳達"面向"或"前往"等具有「目標處」的概念，如句（7）-（8），以及具有「始發處」的概念，約等於介詞「從…」，如句（9）。然而，這兩個義項的相反性邏輯上正也對應了前段的問題，同時也可能是影響「向」於日後發展提供重要的參考線索，故有必要進行釐清。

(7) 斗星為天關。戰背天關。向天梁。敵不可當。　《太公金匱》
(8) 使天下之士。退而不敢西向。裹足不入秦。　《諫逐客書》
(9) 一聲似向天上來，月下美人望鄉哭。　《龍夜吟》

不可否認地是，無論是「始發處」或「目標處」其實背後都須建構在「某人移動者從 A 地始發處移動到 B 地目標處」的「意象基模」（image schema）上；而這也可能是影響「向」

[1] 須說明的是，雖不可否認「長期」的確切量和標準恐怕未有定數？這可能會因人而異，或許可以透過調查獲得相對的普遍值，但這部分並非本文重點；這裡僅著重確認「一向」與「習慣性」的關係。

得以發展出相反概念的來源基礎。首先，當觀察者將重心擺在 B 地時，即：站在運動終點等待參照物到來，由於此時眼中只看得到起點，因此「始發處」將會格外被突顯出來；反之，如果觀察者將重心放在移動者身上，即：站在運動起點往某個目標前進，其眼中便會專注於終點，是以「目標處」便可能成為眼光聚焦所在。

除了空間性用法外，「向」也發展出了時間範疇用法，即：表達“從前”的語義，如句（10）與（11）；值得注意的是，此用法不僅著重「事件起始點」，若同樣從前述例句來看，也可包含到「說話時間點」之前的時間段，此概念也與“從來”義接近，因而促使「向」由“從前”往“從來”義發展，[2] 這點在同樣受其影響的「向來」更加明確，如句（12）。至於這部分的發展機制可建構在「空間─時間」的隱喻轉換上，重點在於強調事件起始點（正對「始發處」）與說話時間（正對「目標處」）。

(10) 向也不怒而今也怒，向也虛而今也實。　《莊子·山木》
(11) 向見年少，今則老矣。　《世說新語》
(12) 自稱向來有力，祈錢十萬。　《朝野僉載·卷六》

接下來，回頭看到「一向」的發展。首先在句（13）中，「一＋向」尚為詞組，並在補語位置表示“某一個方向”的空間性概念；反之，在後兩句則已成詞，並用作兼具心智與時間概念的形容詞謂語或定語，如句（14）-（15）。[3]首先看到心智概念，「一向」可理解為“一味”；另者，「一向」也帶有時間性概念，傳達“從未改變”的意思，這部分的發展與前述“從來”義的概念相近，彼此都重視從「事件起始點」到「說話時間點」為止的時間段，儘管此處是起源於「目標處」概念，但兩者殊途同歸，可互為論證。

(13) 故為兵之事，在於順詳敵之意，並敵一向。　《孫子兵法·九地篇》
(14) 君能捐棄邪俗，洗滌塵穢，專心一向，當得痊癒。　《宣驗記》
(15) 十一亦莫易說法者，十二亦莫自易身，十三一向心，十四莫餘意。《普法義經》

隨著使用範圍擴展，「一向」也從句（69）的定語擴大到狀語位置，用例如下：

(16) 一向信如來，其心不退轉。　《大方廣佛華嚴經》
(17) 若尊者一向知世間有常者，世尊當記之；世尊若一向不知世間有常者，但直言我不能知。　《箭喻經》

這部分除了反映該詞已從實詞向功能詞發展外，語義上也更偏向時間概念發展。對此，本文認為這是因為動詞本身便是一種帶有自然時間計量的成分，是以容易觸發使用者往這方面理解，而這也進一步推動了「一向」往時間副詞發展的方向與動力，也反映在文體的擴張上。綜觀來看，這類用法早期多見於相對強調心智的佛教文獻之中，爾後，隨著時間概念的明確化，直至現代漢語已普遍見於日常口語之中，此發展也可視為「一向」成熟的體現。

---

[2] 除正文所舉用例外，也可在以「臣向蒙國恩，刻思圖報。」《三國演義》中看到類似且更清楚的發展，此句除了理解為「臣以前曾經蒙受國恩」，即：“從前”，也可理解為「臣長此以往都蒙受著國恩」，即：“從來”；綜此來看，句中的「向」正具體地表現“從前”與“從來”兩解的過程。對此，本文認為可視為正文發展的重要佐證；另者，或許有人會問：此例晚於句（9）-（11），怎可用做佐證？常理來看，一個語言現象的發生常是漸變的過程，意即：各階段的舊有用法並不會立即消失，因此我們常在後世語料中看到某個詞同時存在幾個用法；事實上，這些用法也常能幫助我們推出可能的變化過程據此，本文認為若將此處《三國演義》的例子視為早期現象的殘留並無不可，特次說明。

[3] 須說明的是，有關「一向」於「心智」與「時間」概念應是同時由「空間」概念發展而來，並無孰先孰後的問題，以上表達順序僅是行文表現，希望不要造成誤會，特此說明。

日本語と中国語の依頼行為に関する予備的研究

－Speech Act Coding Scheme を用いた分析－

劉 驫
大阪大学 准教授

1. 研究目的

本研究では、日本語と中国語の依頼場面における言語データを対象とし、House & Kádár 2021 の Speech Act Coding Scheme（以下、SACS）を修正・拡充した枠組みを援用し、日中両言語における依頼行為の実現パターンの類似点と相違点を明らかにする。

2. 先行研究

日本語と中国語の依頼行為に関する研究は、対人語用論の観点から多くの蓄積がなされてきた。しかし、先行研究（王 2001; 李 2002; 畑中 2012; 趙 2024; 金 2023, 2025 など）を批判的に検討すると、いくつかの課題が残されていることが分かる。

第一に、王 2001 に代表される古典的なアプローチでは、弱化形式、モダリティ副詞、終助詞といった個別の言語形式に着目した記述が中心となり、発話行為の全体の流れや依頼方略の選択原理を捉えきれていない課題が挙げられる。

第二に、Brown & Levinson 1987 のポライトネス・モデルを無批判に踏襲している研究が多いという課題が挙げられる（趙 2024; 金 2023, 2025 など）。Gu 1990 や Ide 1982 が指摘するように、同モデルはアングロ・サクソン文化圏の価値観を基盤として構築されており、その適用には文化的偏りが存在する。すなわち、個人の承認欲求（ポジティブ・フェイス）や行動の自由（ネガティブ・フェイス）という個人主義的概念を中核に据えているため、集団との調和や社会的関係性を重視する日中両言語のポライトネス現象を十分に説明できないと考えられる（詳細については、井出 2006 や劉（印刷中）などを参照されたい）。

第三に、分析カテゴリーの精緻さと体系性の欠如が挙げられる。たとえば趙 2024 は、依頼行為を「直接依頼」「間接依頼」に分類しているが、この二分法では、直接性の程度の違いを十分に捉えることができない。直接性レベルについては、Blum-Kulka et al. 1989 が示した 9 段階や、Aijmer 1996 が提示した 16 段階の区分と比較すると、分析の精緻さの欠如は否めない。また、李 2002 が提案している「予告」「先行発話」といった依頼行為の下位分類は恣意的に設定されており、異文化間語用論研究のための共通基盤（tertium comparationis）としての体系性を欠いている。特に、複数の言語や発話行為に適用可能な「コアコードカテゴリー」と、特定の言語文化に固有の実現形式が含まれる「状況コードカテゴリー」との区別（House & Kádár 2021）が明確でないため、氏の研究結果が普遍的なものか言語文化固有のものかを峻別することが困難である。さらに、畑中 2012 は、サービス・エンカウンター場面における依頼行為の「開始部」に着目し、これを「恐縮表明型」「呼称名詞型」「あいさつ型」「言い淀み型」に分類したうえで、日本語では「恐縮表明型」が選好されるのに対し、中国語では「呼称名詞型」や「あいさつ型」が多用されることを明らかにしている。畑中 2012 の主張は一定程度評価できるものの、氏の研究対象が House

& Kádár 2021 の枠組みにおける「アラーター」というコアコードカテゴリーにとどまっており、依頼行為の全体構造を視野に収めた分析には至っていない。

このように、既存の研究には個別言語形式への偏り、アングロ・サクソン文化圏向けのポライトネス・モデルの無批判な援用、分析カテゴリーの精緻さ・体系性の欠如、などの課題が存在する。次節では、発話行為をより包括的に捉えるための枠組みとして SACS を導入し、日中両言語の分析に適した形へ修正・拡充する。

3. 分析枠組み

House & Kádár 2021 は、Blum-Kulka et al. 1989 の「異文化間発話行為実現パターン」プロジェクトの分析枠組みを発展させ、より多様な発話行為の研究に適用できるよう、その構成要素を取り入れ、修正を加えたうえで、SACS を提案している。SACS の利点としては、第一に Blum-Kulka らの厳密に定義されたカテゴリーに依拠することで発話行為の遂行過程を体系的に記述・比較できる点、第二にコアコードカテゴリーと状況コードカテゴリーを明確に区別できる点が挙げられる（前者が語用論的に比較可能な共通基盤を、後者が言語文化固有の特徴を捉える)。SACS を採用することで、日本語と中国語のような異なる言語体系であっても、普遍的な語用論的カテゴリーを保持しながらそれぞれ固有の特徴を記述する対照研究を実施できると考えられる。SACS のコアコードカテゴリーは、「アラーター」「視点」「(行為主要部の）直接性レベル」「統語的弱化形式」「語彙的・句的弱化形式」「強化形式」「補助的処置」の 7 つから構成される。なお、紙幅の関係上、ここでは依頼行為の記述の中核をなす構成要素である「アラーター」「(行為主要部の）直接性レベル」「補助的処置」（Blum-Kulka et al. 1989）に着目する。また、日中両言語の依頼行為データに基づき、SACS に必要な修正・拡充を行う。

まず、「アラーター」について検討する。House & Kádár 2021: 118 が提案するアラーターの 9 種類の状況コードカテゴリーを日中両言語のデータに適用したところ、既存の枠組みでは分類が困難な例が多数確認された。そこで、「肩書き・役割」「姓」「名前」「ニックネーム」「親愛語」「侮辱語」「代名詞」「注意喚起」「組み合わせ」という House & Kádár 2021 の分類を統合・拡充し、「呼びかけ語」「間投詞・フィラー」「あいさつ」「恐縮・謝罪」「組み合わせ」の 5 種類に分けることで、適用範囲と妥当性の向上を図る。

次に、「直接性レベル」について説明する。House & Kádár 2021 では、発話内行為的意図がどの程度明示されているかによって直接性レベルが 9 種類に分かれている。また、これらは「直接（命令法・明示的遂行・緩和的遂行)」「慣習的間接（義務の陳述・欲求の表明・定型表現・準備条件)」「非慣習的間接（強いヒント・弱いヒント)」の 3 つの上位レベルに統合されるという。この分類を採用することで、趙 2024 による「直接依頼」「間接依頼」では直接性の段階的な違いを捉えきれないという課題を解決し、より精緻な分析が可能となる。なお、House & Kádár 2021 の直接性レベルを用いて日中のデータを分析した結果、新たに追加すべき項目は認められなかったため、原案を維持する。

最後に、「補助的処置」について検討する。補助的処置を用いることで、話し手は発話行為の力を緩和・強化することができるという。なお、強化的な補助的処置（「侮辱」「脅し」など）については、本研究のデータで観察されなかったため、原案を維持し、ここでは緩和的な補助的処置のみ拡充する。具体的には、House & Kádár 2021 の「予告的処置」「事前

関与の取得」「根拠提示」「拡張的説明」「武装解除」「負荷軽減」「前提条件照会」「誘導・懐柔」という 8 種類に加え、「自己紹介」「謝罪」「感謝」「念押し・再確認」「拒絶の許容」の 5 種類の拡張を行い、計 13 種類とする。

4. データと分析

本研究で分析するデータは、2023 年度に談話完成テストによって収集した、日中両言語の母語話者による依頼行為のデータである。提供者は、日本語母語話者 10 名（全員 20 代、男性 4 名、女性 6 名）、中国語母語話者 11 名（20 代から 30 代、男性 2 名、女性 9 名）である。日本語母語話者の出身地は、福岡県 6 名、長崎県 1 名、鹿児島県 1 名、宮崎県 1 名、愛媛県 1 名であり、中国語母語話者の出身地は、吉林省 1 名、河北省 2 名、山東省 1 名、上海市 1 名、浙江省 1 名、広東省 2 名、重慶市 1 名、四川省 1 名、貴州省 1 名である。調査場面は、友人および面識の薄い同級生に依頼する場面、親しい教員と面識の薄い教員に依頼する場面、計 4 種類で設定した。なお、紙幅の制限上、以下では「友人への依頼」と「面識の薄い同級生への依頼」の 2 場面に絞って分析結果を示す。

4.1. 友人への依頼

4.1.1. アラーター

アラーターの出現率は、日本語 80.0%（10 例中 8 例）、中国語 63.6%（11 例中 7 例）であった。両言語ともにアラーターを用いない例が一定数見られた点は共通しているが、その割合は中国語のほうがやや高かった。また、日本語ではアラーターのほとんどが「ごめん」に代表される「恐縮・謝罪」型であったが（8 例中 7 例）、中国語では “哎呀”“啊啊”“那个”など「間投詞・フィラー」型が多数を占めていた（7 例中 6 例）。“抱歉”が現れたのは 1 例のみであり、親愛語の“宝”と複合した“宝，抱歉”という形で用いられた。この結果は、コーヒーショップおよびタクシー場面での依頼行為の開始部を対象とした畑中 2012 の結果とやや異なる。畑中論文では、中国語では「呼称名詞型」や「あいさつ型」が多く観察されたのに対し、本研究が調査した友人への依頼場面では、間投詞が最も多く用いられていた。このことから、中国語母語話者による依頼行為におけるアラーターの選択は、特定の言語文化に固有の傾向だけでなく、話し手と聞き手の関係性をはじめとする具体的な発話状況にも強く依存することが示唆される。

4.1.2. 行為主要部の直接性レベル

直接性レベルについて日中間で顕著な違いが観察された。日本語では、慣習的間接表現である「準備条件」が 80.0%（8 例）を占め、直接性の高い「命令法」は 10.0%（1 例）にとどまった（残り 1 例は「欲求の表明」）。一方、中国語では「命令法」が 54.5%（6 例）と多く、「準備条件」（45.5%、5 例）をやや上回った。また、「命令法」の 6 例のうち 5 例には“一下”や“点”などの弱化形式が付与されていた。このことから、日本語話者は慣習的間接表現を用いて相手に判断を委ね、行為の直接性を緩和する傾向にあるのに対し、中国語話者は友人に対して直接的な方略を選択しつつも、弱化形式を用いて行為の力を内部から緩和することで相手への配慮を示していることが分かる。

4.1.3. 補助的処置

補助的処置の使用回数は日本語 20 回、中国語 23 回であった（1 つの用例に補助的処置が複数回出現することがあるため、用例数と使用回数は一致しない）。前置型・後置型の区

別を見ると、日本語は前置型が 80.0%（16 回）であるのに対し、中国語は前置型が 47.8%（11 回）、後置型が 52.2%（12 回）となっている。内訳を確認すると、中国語の 1 例を除き、「根拠提示」はほぼすべての例に現れており、両言語に共通する方略であることが確認された。前置型の内訳を見ると、日本語では「根拠提示」のほか、「謝罪」と「負荷軽減」の組み合わせや「予告的処置」が観察されたのに対し、中国語では「根拠提示」のほか、「事前関与の取得」や「拡張的説明」が確認された。後置型については、中国語で「負荷軽減」が高頻度で出現したのに対し、日本語では 4 例にとどまった。また、中国語にはユーモアを交えた「誘導・懐柔」が観察されたが、日本語では見られなかった。さらに、日本語では後置型の「謝罪」が観察されたのに対し、中国語では観察されなかった。

4.2. 面識の薄い同級生への依頼

4.2.1. アラーター

まず、両言語とも全例にアラーターが出現した。これは友人への依頼場面（日本語 80.0%・中国語 63.6%）と比べて高く、面識の薄い相手への依頼では、両言語ともアラーターが一定の役割を果たしていることが窺える。一方、実現形式には明確な違いが認められた。日本語では、「すみません」「急にごめん」などの「恐縮・謝罪」が全体の 9 割を占めた。この傾向は友人への依頼場面と共通しており、日本語話者は対等な相手との親密度にかかわらず、一貫して「恐縮・謝罪」型アラーターを用いる傾向が示された。一方、中国語では、“同学”のような「呼びかけ語」が全例に出現し、そのうち「“同学”＋恐縮・謝罪」や「“同学”＋あいさつ」といった「組み合わせ」が多数を占めた。また、友人への依頼場面では間投詞が多く用いられていたのに対し、面識の薄い相手への依頼では一度も現れず、呼びかけ語が全例で用いられたことから、中国語話者は相手との親近性に応じてアラーターを柔軟に使い分けていることが示唆された。

4.2.2. 行為主要部の直接性レベル

行為主要部の直接性レベルを確認すると、日本語では友人への依頼場面と同様に、8 例が「準備条件」であり、残る 2 例は「欲求の表明」であった。一方、中国語では、友人への依頼場面で「命令法」が 54.5%を占めていたのに対し、面識の薄い相手への依頼場面では「命令法」は観察されず、「準備条件」が全例を占めた。すなわち、アラーターと同様に、中国語話者は相手との親密度に応じて、行為主要部の直接性のレベルを調整し、面識の薄い相手に対しては、より間接的な方略を選択していることが判明した。

4.2.3. 補助的処置

補助的処置の使用回数については、日本語が 18 回、中国語が 27 回となっている。前置型と後置型の区別を見ると、日本語では全 18 回のうち前置型が 15 回であるのに対し、中国語では前置型が 14 回、後置型が 13 回と、ほぼ拮抗している。前置型の補助的処置について確認すると、「根拠提示」は日本語の全 10 例および中国語の 7 例に出現しており、理由の明示が両言語に共通する基本的な方略であることが示唆された。一方、後置型については、日本語は「謝罪」（1 例）と「負荷軽減」（2 例）に限られるのに対し、中国語は「負荷軽減」が 5 例で一番多く、「誘導・懐柔（“晚上请你喝奶茶”）」「拒絶の許容（“要是不方便的话，我再想想其他办法”）」などの例も観察された。

以上より、日中の類似点と相違点は次のようにまとめられる。まず、類似点として、両言語とも面識の薄い相手に対してアラーターの出現率が高くなる傾向が見られた。また、

補助的処置として「根拠提示」がほぼ全例にみられたことから、理由の明示が両言語共通の基本方略であることが示唆された。次に、相違点としては、日本語話者が「恐縮・謝罪」と「準備条件」を親密度に関わらず一貫して用いるのに対し、中国語話者は親密度に応じて方略を柔軟に切り替え、友人には「間投詞・フィラー」と「命令法」または「準備条件」を、面識の薄い相手には「呼びかけ語」と「準備条件」を選択する傾向があった。また、補助的処置の違いについては、日本語は前置型の「謝罪」が中心なのに対し、中国語は後置型の「負荷軽減」やユーモアを交えた「誘導・懐柔」「拒絶の許容」など、相手の負担に配慮した多様な方略を用いる傾向が確認できる。つまり、日本語は「方略の一貫性」に、中国語は「方略の柔軟性」にそれぞれの特徴があるといえよう。

5. 今後の課題

本予備研究を踏まえた今後の課題は、3 点に集約される。第一に、データ提供者を増やし、研究結果の一般化を図ることが挙げられる。第二に、依頼内容の「負担度」をはじめとする社会的変数の精緻化である。負担の大きい場面を設定するなど、社会語用論的変異の解明を目指す。第三に、口頭ロールプレイ等の方法を採用し、プロソディーや視線、ジェスチャーなどの音声・視覚情報を対象としたマルチモーダル分析へと拡張していく。

参考文献

Aijmer, K. (1996). *Conversational routines in English: Convention and creativity*. Longman.

Blum-Kulka, S., House, J., and Kasper, G. (Eds.). (1989). *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies*. Ablex Publishing Corporation.

Brown, P., and Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.

Gu, Y. (1990). Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics*, 14 (2), 237–257.

House, J., and Kádár, D. Z. (2021). *Cross-cultural pragmatics.* Cambridge University Press.

Ide, S. (1982). Japanese sociolinguistics: Politeness and women's language. *Lingua*, 57, 357-385.

井出祥子（2006）『わきまえの語用論』大修館書店.

王志英（2001）『命令・依頼表現における中国語と日本語の対照研究』京都大学博士論文.

金倩宇（2023）「中国語の依頼表現に関する語用論的研究」『鹿児島国際大学大学院学術論集』15, pp. 9-16.

金倩宇（2025）「日本語の依頼表現に関する語用論的研究」『鹿児島国際大学大学院学術論集』17, pp. 21-31.

趙丹楠（2024）「中国人日本語学習者の依頼表現における語用論的転移－意味公式に基づくロールプレイデータの分析から」『外国語学研究』26, pp. 19-27.

畑中香乃（2012）「日本語と中国語の依頼談話における『依頼開始』ストラテジーの考察－サービス・エンカウンター場面に焦点を当てて」『ニダバ』41, pp. 41-50.

李善子（2002）「中国語と日本語における談話の構造分析－依頼を中心に」『比較社会文化研究』12, pp. 101-107.

劉驫（印刷中）「ことばが映し出す文化の多様性－現代中国語のポライトネスの本質を考察する」『木津祐子教授退職記念中国学論集』（掲載決定済）.

中国語自然会話コーパスの構築と言語分析への応用

―AI はあいづちの“嗯”が認識できるのか―

望月雄介／山本英子
松山大学　准教授／岐阜聖徳学園大学　教授

1. はじめに

話し言葉による対話は、話し手と聞き手が協働して作り上げる相互行為である。そのため、自然会話を分析する際には、話し手の言語行動だけでなく、聞き手が発話をどのように受け止め、どのような反応を示しているのかを捉えることも重要となる。なかでも「あいづち」は、対話の進行や会話参与者間の相互理解を支える重要な言語行動の一つである。

これまでのあいづち研究は、日本語および日本語教育分野において、頻度、形式、機能、出現位置、発話環境、日本語教育への応用等の観点から分析されている（Clancy et al 1996、水谷 1983; 1988、メイナード 1993、堀口 1997、陳姿菁 2001 等）。しかし、あいづちの定義や分析方法は研究者によって異なっており、統一的な定義や分析方法が確立しているとは言い難い。その結果、頻度、形式、機能、出現位置等の分析結果にも差が生じている。中国語のあいづちに関しても、分析がなされている（劉建華 1987、水野 1988、羅希 2018、小野 2018、村松 2019、望月 2022）。これまでの研究では、あいづちの形式、頻度、機能を中心とするものが多く、自然言語処理や生成 AI を用いて、自然会話データからあいづちを自動的に抽出、判定することについては、十分に蓄積されているとは言えない。

また、あいづちの抽出についても問題点が存在する。自然会話に現れるあいづちは、統語的、意味的な情報のみからその機能を判断することが難しく、コーパス上での自動的な抽出や分類には未だ課題が残されている。

現在利用されている中国語コーパスとしては、例えば北京大学 CCL 语料库や、BCC 语料库がある。これらのコーパスでは、テキストを対象とした検索が可能であり、特に BCC 语料库では品詞情報等を利用した検索も可能である。しかし、あいづち、同時発話、割り込み発話、フィラーなど、自然会話に特徴的な相互行為上の現象を既存のコーパスから直接抽出することは容易ではない。とりわけ“嗯”のような形式は、書かれた言葉を中心とする資料では捉えにくく、また、コーパスにおける会話でも、文字化の方針によってはテキストに反映されない場合もある。さらに、“嗯”はあいづちとして用いられる場合もあれば、同一話者の発話継続に伴うフィラーとして用いられる場合もあり、形式のみを手がかりとして両者を判別することは困難である。

また、生成 AI に自然さを重視した二者間の中国語会話を生成させても、人間の自然会話に見られるようなあいづちが十分に再現されるとは限らない。実際に ChatGPT および Google Gemini に中国語会話を生成させたところ、あいづちの出現は限定的であった。あいづちを含めるよう明示的に指示した場合では、「嗯」などが実際の自然会話と同様の位置に現れる場合もあったが、自然会話では観察されにくい位置に出現する例も認められた。このことは、生成された会話データと実際の自然会話データとの間に、相互行為上の構造という点で差異が存在する可能性を示している。

本発表では、中国語母語話者による自然会話データを対象として、自然言語処理技術を活用した自然会話コーパスの構築方法を検討する。特に、あいづちとして用いられる“嗯”に着目し、人手による判定と生成 AI による判定を比較することによって、AI が文脈に基づいてあいづち機能をどの程度認識できるのかを明らかにすることを試みる。そのうえで、形態素解析、生成 AI、人手によるアノテーションを組み合わせた新たな自然会話コーパス構築モデルを提示し、この方法が今後のコーパス構築および自然会話における言語現象の分析にどのように貢献し得るのかを考察する。

2. 形態素解析

自然会話コーパスを構築する際には、大量の文字化データから分析対象となる形式を効率的に抽出する必要がある。そのための自然言語処理手法の一つが形態素解析である。形態素解析では、文が形態素単位で分かち書きされ、それぞれに品詞情報を付与することができる。本研究では、中国語の分かち書き・品詞タグ付与ツールとして広く利用されている形態素解析器 Jieba（结巴）を用い、自然会話データに含まれる“嗯”、“啊”、“哦”などの形式を抽出する。

Jieba では、品詞タグを付与することが可能であるが、自然会話に現れる形式の機能が、そのまま品詞情報として反映されるわけではない。以下、実際の会話データを形態素解析にかけた例である。

解析例（1）然后现在是我读研嗯 。
然后/c[1] 现在/t 是/v 我/r 读研/n 嗯/e 。/x

解析例（2）我叫【姓名】，是那个国际关系学院大二的学生哦。
我/r 叫/v 【姓名】/n，/x 是/v 那个/r ，/x 国际关系学院/nt[2] 大二/m 的/uj 学生/n 哦/zg 。/x

“嗯”は、データによって感動詞などとして処理される場合があるが、形態素解析の結果のみから、それが相手の発話に対する「あいづち」であるのか、同一話者が発話を継続する際の「フィラー」であるのか、相手の発話に応答した「応答詞」であるのかを判定することはできない。すなわち、あいづちを示す専用のタグが設定されていないため、形態素解析の結果からあいづちを直接抽出することは難しい。形態素解析器は“嗯”などの候補形式を大量の会話データから抽出するうえでは有効であるものの、その相互行為上の機能まで自動的に認識するものではない。

そこで本研究では、Jieba による形態素解析をあいづちの最終的な判定手段としてではなく、あいづち候補を抽出するための第一段階として位置づける。そのうえで、抽出された候補について前後の発話文脈を含めて生成 AI にあいづちであるかどうかを判定させ、人手によるアノテーション結果と比較することで、形態素解析と生成 AI を組み合わせた

[1] c：接続詞　t：時間詞　v：動詞　r：代詞　n：名詞　x：記号、非語彙的要素　e：感動詞
[2] nt：団体名　m：数詞　uj：構造助詞　zg：状態語

自然会話コーパス構築の可能性を検討する。

3. 会話データ

本分析で使用する会話データは、筆者が北京で独自に収集したものであり、1 グループ同性 2 名の大学（院）生から構成されている中国語初対面会話である。協力者は北京にある大学に通っており、協力者同士は初対面の間柄である。1 会話の時間は 30 分に設定し、会話テーマは設けず、協力者には自由に話してもらった。会話グループには年齢差を設定し、上下関係が明確になるようにペアを組んだ。総会話データ数は男性 11 組、女性 12 組の合計 23 組であり、総会話時間は 690 分間である。

4. あいづちの抽出

ここでは、任意の会話 3 つを選択し、生成 AI があいづちをどの程度認識しているかを明らかにすることを試みる。まず、あいづちの定義や判定基準を提示せず、生成 AI にあいづちを抽出させた。下の表 1 に、人手で抽出したあいづちの数を正解数、生成 AI によって抽出されたあいづちの数を抽出数としたときの適合率と再現率を示す。

表 1　生成 AI によるあいづちの抽出（定義の指示なし）

データ番号	正解数	抽出数	適合率	再現率
男性③	196	203	88.7%(180/203)	91.8%(180/196)
男性⑦	62	65	92.3%(60/65)	96.8%(60/62)
男性⑨	63	70	84.3%(59/70)	93.7%(59/63)

あいづち抽出後、生成 AI に判定理由を説明させたところ、以下の 4 点が出力された。

①相手の直前発話に反応しているか
②新しい命題内容をほとんど提示していないか
③理解・同意・受容・評価・驚きなどを示しているか
④発話権を本格的に取得するというより、直前発話への反応として機能しているか

次に、あいづちの定義をプロンプトに入れて、生成 AI にあいづちを抽出してもらう。今回の分析で使用したあいづちの定義は、以下のとおりである。

> あいづちとは、話し手が発話権を行使しているときに、聞き手が話し手に対し、情報を共有している、または理解していることを示す表現であり、話し手の発話権を奪う発話や承諾・拒否といった返答を表す発話はあいづちとしない。
>
> （望月 2022：66）

上の定義で生成 AI にあいづちを抽出してもらったところ、以下表 2 の結果になった。

表 2　生成 AI によるあいづちの抽出（定義の指示あり）

データ番号	正解数	抽出数	適合率	再現率
男性③	196	126	88.1%(111/126)	56.6%(111/196)
男性⑦	62	62	83.9%(58/62)	93.5%(58/62)
男性⑨	63	90	70.0%(63/90)	100%(63/63)

あいづち抽出後、生成 AI が述べた、あいづちを抽出する際の考慮点は以下の 4 つである。これはプロンプトに入力したあいづちの定義に沿って考慮したと考えられる。

①聞き手側の発話であること

話し手がまだ発話権を持っている途中で、聞き手が差し込んでいると判断する。

②情報の共有・理解を示していること

“嗯”、“啊”、“哦”などが、相手の話を聞いている、共有している、という機能を持つ場合に判断する。

③発話権を奪っていないこと

表現の後に聞き手が新しい話題や自分の主張を展開する場合は、原則としてあいづちからは除外する。

④返答ではないこと

質問に対する回答、承諾、拒否などは、プロンプトにあるあいづちの定義に従って、あいづちから排除する。

実際に生成 AI が誤認した点について述べる。実際には以下の 2 点が特徴的であった。

①あいづちをフィラーだと誤認する。

テキストベースのデータを基に生成 AI にあいづちを抽出してもらうため、生成 AI は発話者を特定することができず、あいづちを同一発話者のフィラーだと誤認したことが指摘できる。

例（1）然后现在是我读研嗯。

②独立した応答をあいづちだと誤認する。

定義を指示しなければ、生成 AI は理解や同意を示す短い反応および応答をあいづち抽出の基準の一つにしてしまう。

例（2）你是学生吗？

嗯。

①と②以外にも、発話交替が明確ではない文脈では、生成 AI があいづちを認識しにくい例も認められた。

以上の分析から、生成 AI は前後の文脈を基に、一定程度あいづちを認識できることが分かった。しかし、あいづちの定義をプロンプトに明示した場合でも、人手による抽出との一致が必ずしも高くなるわけではなく、データによって適合率および再現率にばらつきが見られた。とりわけ、あいづちとフィラー、あいづちと応答の区別や、聞き手が発話権

を獲得したかどうかの判断が、誤認識の要因になると考えられる。

5. おわりに

本発表では、中国語母語話者による自然会話データを対象として、AI が文脈に基づいてあいづち機能をどの程度認識できるのかを明らかにすることを試みた。形態素解析器 Jieba を用いることで、“嗯”、“啊”、“哦”などの形式を効率的に抽出することは可能であるが、それらがあいづち、フィラー、応答のいずれとして機能しているのかを品詞情報のみから判定することは困難である。一方、生成 AI は前後の発話文脈を考慮することにより、一定程度あいづちを認識できることが明らかになった。しかし、人手による抽出結果と一致しない例も認められ、とりわけあいづちとフィラー、あいづちと応答との区別、発話交替の特定に課題が残された。

以上から、生成 AI のみを用いて自然会話におけるあいづちを自動的に認定することは現段階では困難であるものの、形態素解析によるあいづちの抽出、生成 AI による文脈に基づく判定、人手による最終確認を組み合わせることによって、自然会話コーパス構築に伴うアノテーション作業を効率化できる可能性が示唆された。今後は分析対象となる会話データを拡大するとともに、AI による誤認識の特徴を詳細に分析する。最終的には、あいづちだけでなく、フィラー、同時発話、割り込み発話など、自然会話に特徴的な相互行為上の言語現象を付与した中国語自然会話コーパスの構築を目指す。

参考文献

小野秀樹 2018.『中国人のこころ　「ことば」からみる思考と感覚』。東京：集英社新書。
陳姿菁 2001.「日本語談話におけるあいづちの類型とその仕組み」,『日本語教育』108 号：24-33 頁。
村松恵子 2019.『現代中国語談話論―その帰納的実証研究―』。東京：好文出版。
メイナード，泉子・K 1993.『会話分析』。東京：くろしお出版。
堀口純子 1997.『日本語教育と会話分析』。東京：くろしお出版。
水谷信子 1983.「あいづちと応答」，水谷修編『話しことばの表現』。筑摩書房，37-44 頁。
水谷信子 1988.「あいづち論」,『日本語学』VOL.7，12 月号，明治書院，4-11 頁。
水野義道 1988.「中国語のあいづち」,『日本語学』VOL.7，12 月号。明治書院，18-23 頁。
望月雄介 2022.『中国語初対面会話の談話分析―発話レベルから相互行為レベルへのポライトネス―』，博士学位論文。
羅希 2018.「中国語天津方言における相づちの特徴―頻度，形式，出現位置そして場面に注目して―」,『社会言語科学』第 21 巻第 1 号：271-285 頁。
劉建華 1987.「電話でのアイヅチ頻度の中日比較」,『言語』Vol.16，No.12。大修館書店，93-97 頁。
Clancy,Patricia M., Sandra A. Thompson, Ryoko Suzuki, and Hongyin Tao. 1996. The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics* 26:355–387.

“虽然（suīrán）…但是（dànshì）…”複文の談話機能

―情報構造との対応関係から―

劉樊艷
岡山大学　大学院生

1．はじめに

中国語の“虽然……，但是……”複文は、一般に逆接や譲歩関係を表す構文として説明される。まず、次の例を見てみよう。

（1）“打雷了。”
“哈哈哈，**虽然**我睡得早，**但是**动静大，我晚上听到了。清明时节雨纷纷。”
「雷が鳴ったよ。」
「ははは、私は早く寝た**けど**、音が大きかったから夜中に聞こえたよ。まるで『清明節の頃、雨がしきりに降る』という詩句のようだった。」

(1) では、早く寝たことから「雷の音を聞いていない」と予測されるが、実際には聞こえていたことが“但是”節で示される。このように、予測される結果が覆される (1) は逆接型に当たる。

（2）“**虽然**《恶作剧之吻》是最喜欢的，**但是**那个妈妈是真的可爱啊。”
“你这个‘虽然……但是……’让人一点转折都没有。”
「『イタズラなKiss』が一番好きなんだ**けど**、あのお母さんは本当にかわいいよね。」
「その“虽然……但是……”、まったく逆接になっていないよ。」

(2) では、話し手は「『イタズラなKiss』が一番好きだ」という評価と、「登場人物の母親がかわいい」という評価を並列的に提示している。一方から予測される内容を他方が覆す関係にはなく、聞き手も逆接になっていないと指摘している。また、“虽然”節と“但是”節の内容はいずれも聞き手にとって新情報である。

これに対し、次の例では、“虽然”節が聞き手の発話ですでに示された情報を受けている。

（3）“都分手了，还能有盼头吗？”
“**虽然**是分手了，**但是**翰的心还在她那里。”
「もう別れたのに、まだ希望があるの？」
「別れた**とはいえ**、ハンの心はまだ彼女のところにあるんだ。」

(3) では、“虽然”節が聞き手の述べた「別れた」という事実を受け止め、“但是”節で新たな見方を提示している。(2) とは異なり、先行する発話を部分的に承認してから主張を述べる例である。

以上のように、話し言葉における“虽然……，但是……”複文には、(1) のように逆接を表すほか、(2) のように二つの評価を並列的に提示する例や、(3) のように聞き手の発話を部分的に承認してから新たな見方を述べる例も見られる。

また、“虽然”節と“但是”節の内容は話し手にとって既知であるが、聞き手にとって新情報か旧情報かは用例によって異なる。(2) では両節が新情報を提示するのに対し、(3) では“虽然”節が既知の事実を受け、“但是”節が新たな見方を提示する。このような聞き手にとっての新旧情報の配置を情報構造と捉える。そこで本発表では、“虽然……，但是……”複文の談話機能と情報構造との関係を検討する。

2. 先行研究と本稿の立場

“虽然……，但是……”複文は、従来、譲歩や逆接の観点から論じられてきた（呂 1990、邢 2001、劉ほか 2019)。邢（2001：303）は、次の例を挙げている。

（4）这种衣料**虽然**很贵，**但**质量是上乘的。（邢 2001：303）

「この生地は値段が高い**けれども**、品質は上等だ。」

邢（2001）は価格と品質を総合し、「値段は高いが、それでも買う価値がある」という判断を補うことで、(4) に逆接関係を認めている。しかし、明示された二つの節に限れば、「品質がよい」ことは、「値段が高い」ことから通常予測される結果を直接覆すものではない。本発表では、“但是”節が“虽然”節から通常予測される結果を直接覆す場合に限って逆接型と判定し、(4) はこれに含めない。

さらに、「はじめに」の (2) では二つの評価が並列的に提示され、(3) では聞き手の発話を部分的に承認したうえで異なる見方が示されている。しかし、話し言葉における“虽然……，但是……”複文には、これら以外にどのような用法があり、それぞれどの程度見られるのか、また、各用法が情報構造とどのように対応するのかは十分に明らかにされていない。本発表では用例の分類と出現数の集計を通して、これらの点を検討する。

3. 研究資料と分析方法

本発表では、北京語言大学 BCC コーパスの会話文から、“虽然……，但是……”型複文を 100 例抽出した。このうち、命令・願望・意志・疑問など、発話行為やモダリティの影響が強い 16 例を除き、両節が平叙文である 84 例を分析対象とする。

分析にあたっては、まず、“虽然”節の内容から通常予測される結果を“但是”節が直接覆す場合に限り、「逆接型」と判定し、それ以外を「非逆接型」とする。

次に、“虽然”節と“但是”節の内容が、発話時点で聞き手にとって新情報か旧情報かを判定する。両節の内容は話し手にとっては既知であるが、聞き手にとって既に共有されているとは限らない。先行文脈で言及された内容、話し手と聞き手の共有知識、社会一般に共有される知識や認識を旧情報とし、聞き手に新たに提示される事実・評価・判断を新情報とする。判定には、BCC コーパスに示された先行文脈と、そこから推定できる共有知識を用いる。

そのうえで、両節を「“虽然”節（新）—“但是”節（新)」、「“虽然”節（旧）—“但是”節（新)」、「“虽然”節（新）—“但是”節（旧)」、「“虽然”節（旧）—“但是”節（旧)」の四類型に分ける。さらに、各類型における両節の内容の関係と談話上の働きに基づいて談話機能を下位分類し、情報構造との対応関係を検討する。

4. 情報構造別に見た談話機能

84 例を情報構造と談話機能によって分類した結果を、表 1 に示す。

表 1　“虽然……，但是……”複文の情報構造と談話機能

情報構造	談話機能	例数
新—新	逆接 11、並列構成 8、評価調整 11、「前置き＋主張」8	38（45.2%）
旧—新	逆接 5、「部分承認＋主張」28	33（39.3%）
新—旧	「限定・調整＋再強調」6	6（7.1%）
旧—旧	情意表出 7	7（8.3%）
合計	—	84（100%）

以下では、各情報構造に属する用例を検討し、新旧情報の配置が構文の働きとどのように関わるかを示す。

4.1 「新—新」型

「新—新」型は 38 例（45.2%）で、四類型の中で最も多い。“虽然”節と“但是”節がともに聞き手に新情報を提示するが、両節の関係と談話機能は一様ではない。内訳は、逆接 11 例、並列構成 8 例、評価調整 11 例、「前置き＋主張」8 例である。

「はじめに」で示した（1）は逆接の例である。「早く寝た」という“虽然”節の内容からは「雷の音を聞いていない」と予測されるが、“但是”節はその予測に反して「聞こえた」という事実を伝えている。

一方、(2) では、好きな作品とその登場人物に対する二つの評価が並列的に提示されており、一方から予測される結果を他方が覆す関係にはない。並列構成に分類される。

さらに、評価調整型では“虽然”節と“但是”節が同一対象の異なる側面を提示し、後続節を受けて対象全体への評価が調整される。この型には「補償関係」と「制約関係」がある。「補償関係」では、“虽然”節に不利なことを示し、“但是”節にそれを補うことを提示することで、評価を肯定的方向へ修正する。一方、「制約関係」では、“虽然”節に肯定的なことを示し、“但是”節に制約条件や阻害要因を提示することで、肯定的評価を限定する。

（5）“**虽然**零件不是很高档，**但是**它的速度是没人追得上的。”
「部品はそれほど高級ではないけれど、その速さには誰も追いつけない。」

（6）“**虽然**有吃有喝，有房有车，**但是**少了你，总是过得不开心。”
「食べるものも飲むものもあり、家も車もある**けれど**、君がいないため、いつも幸せに暮らせない。」

(5) は、車の推薦を求められた話し手が、“虽然”節で示した部品への否定的評価を、“但是”節で示した優れた速度によって補い、車全体を肯定的に評価する補償関係である。一方、(6) では、話し手が自分の生活状況について、“虽然”節で物質的な豊かさを示し、“但是”節で「君がいないため幸せではない」という精神的な充足の欠如を述べている。物質的に恵まれていても幸せとは言えないという点で、生活全体への肯定的評価を限定する制約関係に当たる。いずれの例も先行文脈を持つが、紙幅の都合上、分析対象の発話のみを示した。

「前置き＋主張」型では、“虽然”節で話し手自身の立場や状況などを先に示し、後続する主張の受け取り方を調整したうえで、“但是”節に伝えたい見解を提示する。

（7）“**虽然**我没有不想结婚，**但是**我理解那些不愿意结婚的人。”

「私は結婚したくないわけではないけ**れど**、結婚を望まない人たちの気持ちは理解できる。」

（7）では、結婚を望まない人への見方が話題となっている。話し手は“虽然”節で自分自身は結婚を望まないわけではないと先に断ることで、後続する発言が結婚そのものへの否定と受け取られることを避けている。そのうえで、“但是”節に結婚を望まない人への理解を示している。

以上のように、「新—新」型では両節が新情報を提示するものの、逆接、並列構成、評価調整、「前置き＋主張」という異なる機能が見られる。

4.2 「旧—新」型

「旧—新」型は 33 例（39.3%）確認された。“虽然”節にはすでに共有されている内容が置かれ、“但是”節には新たな評価や見解が提示される。その内訳は逆接 5 例、「部分承認＋主張」28 例である。

（8）“**虽然**当了妈妈，**但是**看起来还是很少女。”

“是的，少女感十足。”

「母親になった**とはいえ**、見た目はまだとても少女らしい。」

「うん、本当に少女らしさにあふれているね。」

（8）では、話し手と聞き手が共通して知る人物について話しており、その人物が母親になったことも両者の間で共有されている。母親になった人物の外見も成熟しているだろうという想定に反して、“但是”節では「少女らしく見える」という新たな評価が示される。「新—新」型の逆接例（1）と同じく、“但是”節が“虽然”節からの予測を覆している。ただし、（1）では両節の内容がともに新情報であったのに対し、（8）では既知の事実を踏まえて新たな評価を提示する点が異なる。

一方、「部分承認＋主張」は28例確認され、「旧—新」型の大部分を占める。「はじめに」で示した（3）では、聞き手が「もう別れたのだから希望はないのではないか」と問いかけている。話し手は“虽然”節で、聞き手の示した「別れた」という事実を部分的に承認する。そのうえで、“但是”節に「ハンの心はまだ彼女のところにある」という聞き手とは異なる見方を提示し、聞き手の問いに応じている。（3）では、「別れた」という事実から生じうる予想よりも、聞き手が直前の発話で示した「もう希望はない」という見方を受け、それに対して別の見方を提示する働きが前面に出ている。このため、本発表では「部分承認＋主張」と捉える。

4.3 「新—旧」型

「新—旧」型は 6 例（7.1%）で、いずれも「限定・調整＋再強調」の機能を担う。“虽然”節で新たな情報を提示し、“但是”節で先行文脈にすでに現れた内容を改めて述べる。

（9）“我好困啊！”

“昨儿几点睡的？”

“**虽然**十二点多，**但是**还是好困。”

「すごく眠いよ。」

「昨日は何時に寝たの？」

「12 時過ぎには寝た**けれど**、それでもやっぱり眠い。」

（9）では、“虽然”節の就寝時刻は、質問に答えて初めて提示される新情報である。一

方、“但是”節の「眠い」は、話し手が最初の発話ですでに述べているため旧情報に当たる。話し手は就寝時刻を提示することで自身の状態に関する説明を加えたうえで、「やはり眠い」と再強調している。

4.4 「旧—旧」型

「旧—旧」型は 7 例（8.3%）確認され、いずれも情意表出の用例である。両節に共有済みの内容が置かれるため、新たな事実を伝えることよりも、それらを改めて述べることによって話し手の感情や態度を示す働きが前面に出る。

（10）“急什么。99 表示半条腿也是 00 后。”

“**虽然** 99，12，16，**但是**还是 99 哦。”

「何を焦っているの。99 年生まれなら、片足はもう 00 後（2000 年代生まれ）に入っているようなものだよ。」

「99 年 12 月 16 日生まれだ**けど**、結局は 99 年生まれなんだよね。」

（10）は友人同士が年齢について冗談を交わしている場面である。聞き手が自分を「半分は 00 後（2000 年代生まれ)」だと主張するのに対し、話し手は“虽然”節で、聞き手の誕生日が 1999 年 12 月 16 日であることをあえて強調する。さらに、“但是”節では、年末生まれであっても 1999 年生まれに変わりはなく、00 後には含まれないことを強調する。両節の内容は聞き手にとって既知の情報である。ここでは新たな事実を伝えることよりも、聞き手自身も知る情報を言い直して相手をからかうことが中心となる。

5. 情報構造と談話機能の対応関係

以上の分析から、“虽然……，但是……”複文の談話機能は、情報構造と関わっていることがわかる。

情報構造別に見ると、「新—新」型には逆接、並列構成、評価調整、「前置き＋主張」など多様な機能が見られる。「旧—新」型には逆接と「部分承認＋主張」の二種類が見られる。「新—旧」型では既出内容の再強調、「旧—旧」型では共有情報を用いた情意表出が見られる。このように、情報構造によって談話機能の現れ方は異なる。

とりわけ、“但是”節が新情報である「新—新」「旧—新」型は計 71 例（84.5%）を占め、後続節で新たな事実・評価・見解を提示する。一方、“但是”節が旧情報である「新—旧」「旧—旧」型では既出内容の再強調や共有情報を用いた情意表出が見られる。ただし、同じ情報構造にも複数の機能が見られるため、両節の意味関係も併せて検討する必要がある。

6. おわりに

本発表では、“虽然……，但是……”型複文 84 例を対象に、談話機能と情報構造との関係を検討した。その結果、逆接型は 16 例（19.0%）、非逆接型は 68 例（81.0%）であり、この構文が逆接以外にも多様な働きを担うことが確認された。今後、書き言葉における“虽然……,但是……”複文の用法を検討し、話し言葉との共通点と相違点を明らかにしたい。

参考文献

吕叔湘（1990）《中国文法要略》（《吕叔湘文集》第 1 卷）. 北京：商务印书馆.

邢福义（2001）《汉语复句研究》. 北京：商务印书馆.

刘月华,潘文娱,故韡（2019）《实用现代汉语语法》（第 3 版）. 北京：商务印书馆.

“和”類虚詞を再考する―『北京官話全編』と『官話指南』の考察から

干野真一
新潟大学　准教授

１．はじめに

1.1 研究対象と背景

本研究は、清末期の北京官話資料である『北京官話全編』（以下『全編』または『全』）および『官話指南』（以下『指南』または『指』）を対象に、一般に「和類虚詞」（以下＜和＞）と称される“與・和・同・跟”の 4 つの虚詞の使用実態と共時的な語用体系を考察するものである。これらの語は共通して“X＜和＞Y Vp。”という構文形式をとり、二つの主体や事象を結びつける（共同・関係・対象を示す）という基本機能を共有している。

1.2 問題意識：通時・文法化研究の限界

従来における＜和＞研究は、前置詞としての初出用法や、動詞から前置詞、さらには接続詞に至る「文法化」を辿る通時的な記述が主流であった。比較可能な用例数が少なく、致し方ない面もあるものの、マクロな視点のみに傾倒すると、例えば「清末期において＜和＞のいずれもが前置詞用法と接続詞用法を有する」といった大づかみな把握に陥りがちである。しかし、実際の『指南』や『全編』を精査すると、“與・和・同・跟”の間には、文脈や感情、関係性に応じた明確で厳密な使い分け（役割分担）が存在している。

1.3 本研究の提唱：「フローラ（語彙体系）」という捉え方

そこで本研究では、これら 4 語を単に独立した類義語として個別評価するのではなく、一定の領域内で相互に機能を分担し合い、全体として一つの調和した生態系を形成している「フローラ（語彙体系）」として捉え直すことを主張する。（※「フローラ」とは、本来一定区域内に自生する植物の種類全体を指す「植物相」のこと）

＜和＞をフローラとして捉えることで、4 語がどのような相互関係のもとで役割を分担し、共時的な語用論的体系を形成しているかを精確に示し出すことが可能となる。

1.4 使用資料と本研究の優位性：『北京官話全編』の価値

これまでにも個別の作品や会話書における使い分けを論じた先行研究は存在したが、用例数が限定的であったことや、南北差・雅俗差・文体差（会話と地の文）等の要因が混在しており、定量的・体系的な実証には至っていなかった。内田ら（2017-2018）による『全編』の公開は、清末北京官話における大部かつ均質な口語資料に基づく考察を可能にした。

本研究では、『全編』の用例考察を主軸として、『指南』（内田・氷野 2016 収録の 1882 年初版テキスト）における分析を補完しつつ、前置詞・接続詞にとどまらず、動詞用法や“了・着”を伴う複合形式（“同着”や“跟着”等）を含めて包括的な検証を行う。これにより、より確度の高い共時的体系（フローラ）の描出が可能となると考える。

２．本研究の位置づけと意義

（紙幅の都合により、通時的、共時的な諸先行研究についてのレビューは割愛する）

本研究で提唱する「フローラ（語彙体系）」という視点の重要性を二つの先行研究から述べる。『中国語学』掲載の任（2025）が指摘する中国語の“大语法”という枠組みに関連するものである。任は“汉语功能词的实际是“用法””であるとして、機能語をどのような場

面でどう用いるかについての知識の重要性を主張する。語釈（釈義）を持たない虚詞の本質はまさにその“用”(文脈に合わせた語用論的適用・共起制約、平たく言えば、「用い方」)にこそ存在する。本研究で取り上げる＜和＞4 語も、後続する述語動詞（Vp）や目的語の有定性（有定／無定）との相性・制約を含めた“用”として解釈されることが適切である。

また、今井（2026）では認知科学の立場から、ことばを十分に使うことが出来るためには「記号接地」(注:ことばを外界に実在する対象に紐づける行為)をするだけでは足らず、「一つのことばの意味はその言葉単体の問題ではなく、それが所属する概念分野全体がいくつの単語でどのように分節されていて、どの単語同士が隣接しているかを知らなければ理解できない」とし、言葉の適用範囲を語彙システム全体の中での相対的位置づけとして把握する必要を指摘している。

任（2025）と今井（2026）は、異なる分野領域でありながら、本質において深く通底していると言える。「玉虫色」の存在である＜和＞に対して本研究が試みる＜和＞のフローラ記述は、中国語史の一事例分析にとどまらないものである。『全編』という豊富かつ均質なデータを用いることで、各語が持つ独自の「色（定量的・定性的な役割分担)」を明らかにし、今後の通時的考察、類義語研究における軸を構築することが本研究の目的である。

３．考察

表 1 および表 2 から、『指南』では、類義語比較における定量的考察に限界があるのに対し、『全編』でそれを補うことが出来ることが示唆される。しかしながら、表 1 のごとき、❶各前置詞の用例総数を挙げた表では、＜和＞4 種のうち、どれがよく使われるのか、という情報しか示さない。

表１『指南』『全編』の＜和＞用例数

	與	和	同	跟	和(連)
『指南』	8	98	11	11	42
『全編』	43	367	49	15	107

表２『官話指南』における各巻での＜和＞用例数

	與	和	同	跟	和(連)
「應對須知」	1	4	0	0	0
「官商吐属」	1	62	10	7	13
「使令通話」	0	7	0	4	26
「官話問答」	6	25	1	0	3

類義語研究において必要なのは、❷一前置詞内での用法の割合（当該前置詞が担う事象の「得手不得手」が明らかになる)、そして、❸ある述語や事象から見た使用前置詞の割合（当該事象を述べる際にどれが使われやすいか)を示した表である。さらに、❹一前置詞がどれだけの用法を備えているかという情報も、当該前置詞の文法化程度を考察する上で重要である。仮に、用法数が少なく、用例数が多い場合、それは「専門職」に特化していると考えられる。

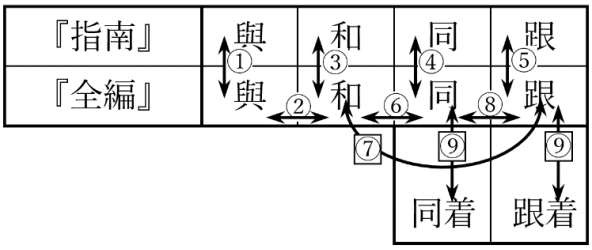


図１：本研究における比較考察の手順

本研究における比較考察のすすめ方は図 1 の通りである。①③④⑤の比較においては、相対的に用例が少ない『指南』に対して、『全編』によって補完する視点が有効であり、当該前置詞への認識の確度を上げることが出来る。②⑥⑦⑧⑨においては、類義表現の使い分けの考察を徹底する。その際、共通する述語動詞・形容

詞からの考察や、一文中・一場面中において、複数の前置詞を使い分けている例を特に精査する。牽強付会に陥らないよう気をつけながら、二者間の使い分けを掘り下げることで、当該表現を選ぶ動機・理由にまでたどり着くことを目指す。

①『指南』“與”（8 例）と『全編』“與”（43 例）

『全』における述語の種類は 4 タイプに分かれる。「同じ／異なる」、「仲の良し悪し」、「関係ない」、「戦う（文言）」。これらは「抽象的な関係性を述べる表現」と一般化できる。

②『全編』の“與”と“和”

(1)他的醫道本是從儒學得來的,與世俗醫家不同。［全 71］（世俗な医者とは異なるのだ）
(2)好在這個醫生和那些江湖醫家不同 ［全 99］（例の巷の［インチキな］医者と違って、）

(1)は「カテゴリー」の違いを述べ、(2)は現実的、具体的な医者たちを指している。

(3)A 您和他現在還有來往嗎?B 我們久矣不過穿往了。～您和他走不走?B 我也是與他絶交了。［全 253］ この例では、「行き来がある」に“和”を用い、関係性に“與”を用いる。
(4)幸兒這個朋友有涵容,算是沒惱我,要是沒涵養的,一定含怒而去,從此就和我絶交了。［全 315］ この例では「仮定」の話において“和”を用いている。
(5)我既與他相好,見他這樣的貧病交集,［全 9］
(6)那個東洋人和我相好,我若是同您去,大概比別人還便宜點兒。［全 39］
(7)外頭的情形與偺們京裡迥乎不同,［全 376］
(8)一切風土人情,全和北方不同。［全 100］

(5)では“既”を、(7)では“迥乎”を用いており、文言的なスタイルで述べて“與”が使われている。(8)は“全”を用いた口語的なスタイルであり“和”を用いる。

③『指南』“和”（98 例）と『全編』“和”（367 例）

共起する述語は多くが共通する。相手への働きかけを表す「ベクトル型」の動詞（“説話、借、打官司、商量、打架”等）が 6 割を占める（特に“説、商量”などの「発話・相談・交渉」を表す動詞が『指』41 例、『全』96 例で最多）。相手を導く「フラット型」の動詞（“会面、交往、至好、交買賣”など）が 4 割を占める。ただし、この分類は便宜的なもので、“和”の本質は、二者を繋ぐ点にあると考える。『指』と『全』で、述語の分布が大きく異なるものに、“打聽”（『指』1 例：『全』47 例）、“差不多”“一樣”“不同”に代表される［比較・異同］を表すものが（『指』0 例：『全』25 例）あり、特徴的である。

④『指南』“同”（11 例）と『全編』“同”（49 例）

高い割合（『指』10 例、『全』44 例）で移動を表す述語と共起する。一・二人称が関わる場合、『指』では［我］“同您（你）去”のパターンのみだが、『全』では“同｛我／他｝去”の形式も見られ、多くは依頼文脈で使われる。つまり、X と Y の語順を入れ替え不可で、X が Y と時空を「同じくし」一緒にというフラットな関係を表すと考えられる。

(9)我還想要同您一塊逛一逛去可以不可以?［全 52］“我”の積極的関与（上記(6)も同様）
(10)求您同我去一盪可以不可以?可以的。［全 134］“您”に一緒に行って欲しい
(11)他找我同他出城買點兒東西去。［全 102］彼は私を訪ねて一緒に来て欲しい

⑤『指南』“跟”（11 例）と『全編』“跟”（15 例）

共起する述語について『指』では“去”9 例、“要”1 例、“説妥”1 例。『全』では“学”4 例、“要”2 例、“打聽”2 例、“討教,尋,謳氣,逛,去,出門,出去”が各 1 例であり、『全』は所謂“逆向义”を表す例が多い。『全』において、“跟”はいずれも「前後」「上下」の関

係を持つ。“学”を述語とする場合の前置詞は“跟”のみである。
(12)我後來一定跟您學，希望赶上您一半兒我就欣喜不盡了。［全 354］

⑥『全編』の“和”と“同”

“和”と“同”は、共起する述語の傾向が基本的に異なる。そのため、共通する述語の場合はどちらかが有標的な使われ方を示す。
(13)昨兒在街上遇見你,和你説話,你也沒聽見,忙忙的跑了。［全 9］
(14)我在駅市胡同南邊兒一個鹼店門口兒站着同人説話兒,見你在甬路上往北直跑［全 158］

「話す」述語の場合は、圧倒的に“和”が優勢である。(13)からは、一方的な指向性、能動性が伺える。一方(14)は“同”が“説話”と共起する唯一の例であるが、その場で居合わせた人と世間話をしていた事を伝えるだけである。

反対に、「移動する」述語の場合には圧倒的に“同”が優勢だが、述語“上”の場合は、“和”2 例:“同”4 例である。“同”に後続するのは、代名詞など既定・特定の存在が多く、修飾語も付かない。「その人（たち）と『一緒に』」という共同行為である点に重点があるのに対して、“和”では「特定性の低い」の相手を導き話題に導入している。
(15)(我)初八同我們舍弟上了一盪白雲觀,熱鬧極了。［全 60］弟と賑わう白雲観に行った
(16)我今兒是和我們親戚上前門給他看一盤朝珠，［全 39］親戚と前門に買い物に行く
(17)您同誰上飯館子来着?同我們舍親。［全 76］誰とだい？
(18)(他)是叫我同他上前門一塊兒到翎子舖,給他瞧一瞧花翎。［全 333］

“同”が一緒に行動する相手を特定して示すのに対して、(16)(19)のように“和”では「ペアリング」する役割として用いている。
(19)趕大前天我一早,和那個姓孫的,到溫子山家裏去的。［指 27］

次の(20)では“同”により一緒に遊戯をする相手を表し（とりわけ“在家”に並ぶ位置づけとして用いており)、“和”ではペアリングする働きで対局相手を指している。
(20)A 這程子也沒竟在家,有時候兒常同朋友下碁。B 和誰下碁？A 和我們街坊下碁。[全 235]

⑦『全編』の“和”と“跟”

両者に共通する述語動詞は“打聽”(和：跟＝47：2)“要”(10：1)“尋”(2：1)“謳氣”(6：1)。⑥の場合と同様に、前置詞の使用には無標・有標の違いが見られる。

“尋”:(21)(22)有用物について“和”を用い「そうではない」(23)では“跟”を用いる。
(21)我想起您府上有七釐散,所以纔到您府上,打算和您尋一點兒。[全 88] 七釐散（漢方薬）
(22)他説現在某宅當更夫每月不過六七吊錢的工錢,和我尋錢。［全 206］お金
(23)你要上木廠子的時候,千萬跟他們尋點鋸末子来。[全 234]「おがくず」を何としても！

“要”:(24)では、甥っ子が「不動産契約書」を盗んだので、家族皆にすっかり話して、ヤツから取り戻そう（“跟”を使う）とする。(25)では「出来の良い宿題」を客に見せるため、子供から受け取る場面で“和”を用いる。
(24)你簡直的和你們令姪説明白了,跟他要出来就得了。［全 94］
(25)您稍侯一侯兒,等我和他要了來。［全 87］

(26)で、A は友達 B が木製台座について店で「ふっかけられた」と聞き、問い詰めて“跟”を使う。B や(27)は回想して“和”を用いる。(27)は王羲之の書を高額提示された場面。
(26)A 他起初跟你要多兒錢?B 他和我要的慌可不小,他要二十吊錢。［全 343］
(27)我問了問價兒，他和我要七百五十兩,我想他是欺生。［全 81］

“謳氣”の場合も“跟”が「誰に」なんだと追及するピンポイントさが際立つ。

(28)您跟誰謳氣来着?因為甚麽?［全 170］“因为”の「前」で追及する口調。

(29)我是因為和人謳了點兒氣,回來就病了。［全 170］“因为”の「中」で回想して言う。

“打聽”:“跟”2 例とも二人称(“老兄”“老二”1 例ずつ)への「呼びかけ」を伴う。“和”47 例のうち「呼びかけ」があるのは“大哥”(“老兄”よりはフォーマル)の 2 例のみ。

(30)老兄,我跟您打聽一件事情。［全 15］「あなたに」聞きたい

(31)大哥,我和您打聽一個人,您認得不認得?［全 53］

以上を踏まえ、“跟”は情動的で直接的、主観性の強い発話場面で使われていると言える。

⑧『全編』の“同”と“跟”

両者に共通する述語に“逛”がある。(同：跟＝6：1)。

近郊への散策には“同”を用いて、遠方の大覚寺での修行に“跟”を使っている。

(32)這一兩天我還想要同您一塊逛一逛去,可以不可以?［全 52］二閘への散策

(33)那時候兒,我抓一天工夫兒,同您逛一盪。［全 271］“野景兒”の散策

(34)多嗐您再去的時候兒,我也跟您逛一盪,可以不可以?[全 19]西山大覺寺への修行体験。

同行依頼は“同”で行い、「やむなく」付いて行くので“跟”で言い換える例もある。

(35)他如今既是約我同他去,碍難退卻,只好是跟他去。［全 25］

⑨『全編』の“同”“跟”と“同着”“跟着”　（紙幅の都合により省略）

４．代表的な述語動詞から見た場合の前置詞の役割のまとめ

A“説話”では“和”が無標、“同”は有標。B“去”では“同”が無標、“和”は有標。C“要／打聽/尋/謳氣”では“和”が無標、“跟”は有標。D“学”では“跟”のみ(無標)。E「関係性」では“與”が無標、“和”は有標。

５．イメージスキーマの試み

本研究で取り上げた“X＜和＞Y Vp。”という構文形式を用いる際、話し手・受け手には瞬間的に「フレーム」が構築されるものと考えられるが、敢えて、一文字ずつの単位で、どのような認識が起きているのか、『全編』における＜和＞4 種のスキーマを検討する。

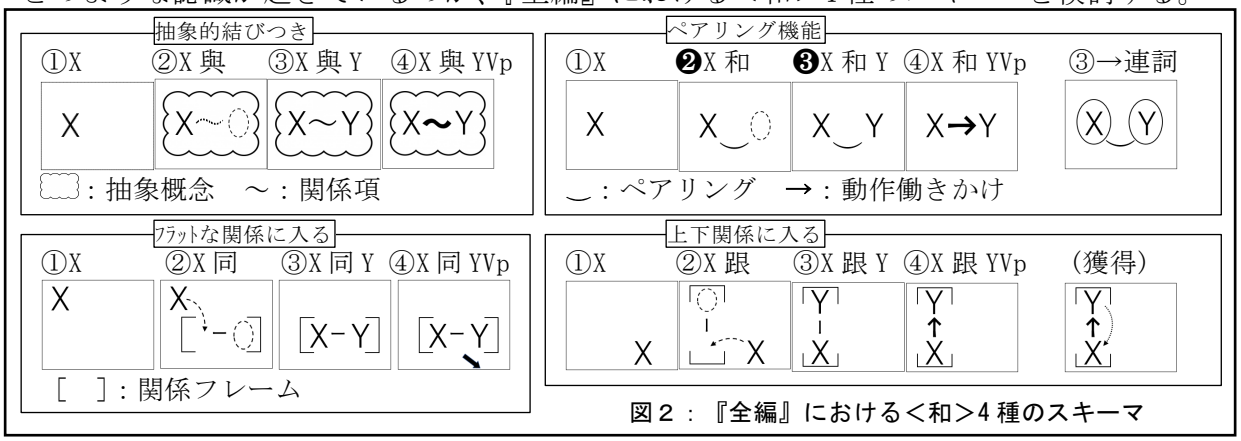


図２：『全編』における＜和＞4 種のスキーマ

『全編』では各章冒頭に重点となる語句が列挙され、本文の上欄にも見出しとして掲げられる。＜和＞では“和別人、和您、和人、和甚麽人、和誰、和他、和我、和我一同”が見られ［全 313-323]、常用フレーズとして「❷❸」を「一まとめ」に扱っていると思われる。

参考文献

任鷹 2025　“大语法”观念与汉语语法教学,『中国語学』272

今井むつみ 2026　生成 AI 時代に求められることばの力と思考力,『三田評論』1311

“别再 VP”与“别又 VP”——基于 10 部电视剧语料的考察

许挺杰
大分县立艺术文化短期大学 副教授

1.研究背景与目的

副词“再”和“又”都是现代汉语中的常用副词，且二者在语义和用法上存在诸多相似之处。二者可以用于多种句式，“别”字否定祈使句也是二者可以进入的句法环境之一。然而，关于“别”字否定祈使句中“再”和“又”区别的研究并不多，且相关论述大多只是作为研究的一部分被提及（蒲喜明 1993、周刚 1994、蒋琪、金立鑫 1997、陈立民、张燕密 2008、张耀宇 2015、张秀花 2023 等），而将“别”字否定祈使句中“再”和“又”的区别作为重要研究对象的仅见马真（2016）。总体而言，既往研究对“别”字否定祈使句中“再”和“又”的考察较为零散，尚缺乏系统而深入的研究。本文以由否定副词“别”与副词“再/又”构成的“别再 VP”和“别又 VP”为考察对象，通过分析由 10 部电视剧语料构成的口语语料库，系统考察二者在“别”字否定祈使句中的异同。

2.既往研究评述

2.1 主要语法著作的释义及其缺陷

关于“再”和“又”的异同，几部主要语法著作的观点基本一致。即，表示动作的重复或持续时，“再”表示未然的重复，“又”表示已然的重复（吕叔湘主编 1999、刘月华，潘文娱，故辩2001、朱德熙 1982、北京大学中文系 1955/1957 级语言班编 1982）。比较：

1）他**又**看了一遍。2）你**再**看一遍。

这一解释难以说明否定祈使句中的情况。祈使句所表示的动作行为原则上都是未然的，但“又”仍可进入否定祈使句。试比较：

3）别**再/又**感冒了。4）请**再**看一遍。5）*请**又**看一遍。

2.2 祈使句中的“再”和“又”

既往研究中关于祈使句中“再”和“又”的相关论述主要涉及以下几个方面。

（1）能否进入祈使句：既往研究一致认为“再”可以进入祈使句（周刚 1994、蒋琪、金立鑫 1997、陈立民、张燕密 2008、祝东平 2010、张耀宇 2015、马真 2016、张秀花 2023）。关于“又”则存在分歧。周刚（1994）、王敏凤（2015）认为“又”不能进入祈使句，但其例句均为肯定祈使句。马真（2016）、张秀花（2023）则指出，“又”在一定条件下可以进入否定祈使句。马真（2016）认为，在表示提醒性劝阻时，“又”可以用于“别/不要＋又＋VP”结构，而且此时“又”和“再”均可以成立，如例 6）。张秀花（2023）也认同这一观点，指出在提醒对方或他人防止再次发生某种不如意事件时，可以使用“又”，如例 7）。

6）明天去姑姑家，你**别又/再**喝醉了。7）多穿点，**别又**冻发烧了。

（2）语用色彩：蒲喜明（1993：112-113）指出，在劝人做某事的祈使语境中，使用“再”往往显得较为客气，可以带有褒义，至少是中性的；在这种语境中是不能用“又”的，若用了“又”则容易隐含询问或追究之意，并表现出埋怨、讨厌、斥责等感情色彩（且句子已非祈使句）。不过，蒲文同时强调，这种褒贬意义并非“再”和“又”本身固有，而是由具体语境形成的语用意义。高林波、张维微（2008：40）也有类似的看法。

（3）与否定词的语序：高林波、张维微（2008：38-39）指出，“再”和“又”都可以与“不、

别、没”等否定词组合，但二者在语序上存在明显差异。“再”与否定词共现时位置较为灵活，可以位于否定词之前或之后，而“又”则受到较强限制。如：

8） a 以后**别再/再别**提他了，我讨厌他。

b 你**别又**这样，叫人看见了多不好。c *你**又别**这样，叫人听见了多不好。

（4）“**别再**”**后** VP/AP **的性质**：张耀宇（2015）指出，“别再”可以修饰自主动词、非自主动词中的变化动词、性质形容词和状态形容词，但未涉及“别又”。

综上，既往研究提供了重要的研究视角，但多基于个别例句，尚未从实际使用频率和分布出发，对“别再 VP”和“别又 VP”进行系统的量化比较。

3.语料与研究方法

为考察“别再 VP”与“别又 VP”的异同，我们构建了一个专用语料库。语料来源于十部电视连续剧，分别是《都挺好》《风吹半夏》《欢迎光临》《欢乐颂 3》《欢乐颂 4》《欢乐颂 5》《罚罪》《三叉戟 1》《三叉戟 2》《大江大河 2》，共计 378 集，总字数约 222.9 万字。选择电视剧对话作为语料，主要基于以下两点考量：第一，语体的适当性。副词“别”主要用于口语交际，电视剧台词作为模拟自然会话的脚本语言，能够在较大程度上还原日常交际的真实场景，是研究口语常用副词的理想材料。第二，语境的可析性。副词的语义解读高度依赖上下文语境。电视剧剧情提供了完整、连贯的会话情境与人物关系，有助于提高分析的精确性。

我们对语料库进行了穷尽性检索，共获有效用例 160 例，其中“别再 VP”148 例，“别又 VP”12 例。另有 3 例“别＋再/又＋VP”表示推测义，不属于本文考察的祈使句范围，故予以排除。本文从以下五个方面对上述 160 例进行标注和统计：（1）“再”和“又”的语法意义；（2）出现在句末的助词“了”的使用及类型；（3）谓词 VP 的“自主性”；（4）“别”字小句的“制止义”和“防止义”；（5）谓语 VP 的褒贬色彩。在此基础上，采用费希尔精确检验对标注结果进行量化分析，以考察上述参数与“再”“又”的选择之间是否存在显著关联，从而从实证角度揭示“别再 VP”和“别又 VP”的异同。下面分别对五项分析视角加以说明。

（1）“**再**”**和**“**又**”**的语法意义**：“再”和“又”均具有多种语法意义。因此，在考察语料库中“别再 VP”和“别又 VP”时，不仅关注二者表示“重复”义的用例，同时对表示其他语法意义的用例也进行了标注和统计。我们认为，对“重复”义以外用法的考察，有助于更全面地把握“再”和“又”在“别”字否定祈使句中的功能范围及其异同。

（2）**出现在句末的助词“了”的使用及类型**：彭可君（1990：9）认为副词“别”在祈使句中有两种意思：（1）劝止，或建议取消计划中的动作行为；（2）叮嘱、告诫。这两类语法意义的不同可以在语音形式和语法上得到验证。关于出现在句末的助词“了”，彭可君（1990：7）指出，“别＋动＋了”在表示劝止或建议取消计划中的动作和表示叮嘱、告诫时的层次构造不同。前者应切分成“[别＋动]＋了”，这里的了是了 $_2$，表示“肯定事态出现了变化或即将出现变化，有成句作用”。后者应切分成“别＋[动＋了]”，这里的“了”是“了 $_1$”，用在动词后，表示“动作完成”。比如：

9）那就**别**通知他们了。[**别**＋通知他们]＋了 $_2$。10）慢点儿，**别**摔了。**别**＋[摔＋了 $_1$]。

本文在考察“别再 VP”和“别又 VP”时，不仅统计句末是否出现“了”，还进一步区分“了$_1$”和“了$_2$”，考察二者与“再”“又”的共现情况。

（3）**谓语 VP 的**“**自主性**”：袁毓林(1993：25-26)把动词分为可控动词和非可控动词。可控动词是指能由动作者控制的动作行为。可控，有两种意思：(1)动作者可以有意识地发出或不发出某个动作行为，例如：“拿、问、搀、骂……”；(2)动作者可以有意识地避免某种通常

在无意识中发出的动作行为，例如：“忘、怕、落(la4)、丢(失)……”。(1)类是[可控自主]动词，(2)类是[可控非自主]动词。“属、姓、懂、昏”这些动词，都是不能由动作者控制的动作行为，这一类可称为[非可控]动词。考虑到本文主要关注谓语 VP 是否具有自主性，并为便于后续统计分析，我们将[可控自主]归为“自主”，将[可控非自主]和[非可控]合并为“非自主”，据此考察“别再 VP”和“别又 VP”在谓语自主性上的分布差异。

（4）“别”字小句的“制止义”与“防止义”：项开喜(2006：49)指出“别＋VP”格式有两个基本类型。在 A 式“别”字句中，VP 表示[已经实施或正准备实施的][有意的][行为]，整个格式表示“制止义”；而在 B 式“别”字句中，VP 表示[未然的][无意的或意外的][结果或事件]，整个格式表示“防止义”。这一分类与彭可君（1990）对“别”字祈使句的分析具有相通之处。本文根据项开喜（2006）的分类标准，将语料中的“别再 VP”和“别又 VP”分别标注为“制止义”和“防止义”，并考察两类语义功能与“再”“又”选择之间的关系。

（5）谓语 VP 的褒贬色彩：袁毓林（1993：122）指出，根据一般的语用规则，说话人对自己要求听话人做的事，不会在祈使句中直接作出否定性评价；对自己阻止听话人做的事，不会在祈使句中直接作出肯定性评价。所以，贬义词一般不能进入肯定式祈使句和双重否定式祈使句，褒义词一般不能进入否定式祈使句。由此可见，谓语本身的感情色彩会对其能否以及如何进入祈使句产生一定影响。本文首先根据 VP 所表达事件的感情色彩，将其分为“褒义”“中性”和“贬义”三类；在统计分析时，为突出“别又 VP”是否更倾向于与具有消极感情色彩的 VP 共现，并避免部分类型样本量过小，将“褒义”和“中性”合并为“非贬义”，最终按照“贬义/非贬义”两类进行统计比较。

4.分析与讨论

五项参数的统计结果见表 1。除语法意义外，其余四项参数与“再”“又”的选择均存在显著关联，且 Bonferroni 校正后仍达到显著水平。

表 1 “别再 VP”与“别又 VP”五项参数的分布及费希尔精确检验结果

参数	分类	别再 VP（n=148）	别又 VP（n=12）	合计	Fisher 精确检验 p	Bonferroni 校正 p
（1）语法	重复	142（95.9%）	12（100%）	154	1.000	1.000
	添加	4（2.7%）	0（0%）	4		
	推延	2（1.4%）	0（0%）	2		
（2）“了”	无“了”	32（21.6%）	8（66.7%）	40	<.001	<.001
	了$_1$	3（2.0%）	4（33.3%）	7		
	了$_2$	113（76.4%）	0（0%）	113		
（3）自/非	自主	120（81.1%）	5（41.7%）	125	.00475	.02375
	非自主	28（18.9%）	7（58.3%）	35		
（4）制/防	制止	127（85.8%）	6（50.0%）	133	.00609	.03045
	防止	21（14.2%）	6（50.0%）	27		
（5）褒/贬	贬义	92（62.2%）	12（100%）	104	.00861	.04305
	非贬义	56（37.8%）	0（0%）	56		

注：第（1）、（2）项采用 Fisher-Freeman-Halton 精确检验，第（3）—（5）项采用双侧 2×2 Fisher 精确检验。共进行 5 项检验，采用 Bonferroni 法进行多重比较校正。原始 p 值以 α =.010

为显著性判断标准，校正后的 p 值以 α =.05 为显著性判断标准。所有统计分析均使用 R（version 4.5.0）完成。

（1）**“再”和“又”的语法意义：**二者的分布差异未达到统计显著水平（p=1.000），均高度集中于重复义。“别再 VP”除重复义 142 例（95.9%）外，还有添加义 4 例和推延义 2 例；“别又 VP”12 例全部表示重复。

（2）**出现在句末的助词“了”的使用及类型：** 二者存在显著差异（p<.001）。“别再 VP”明显倾向于与了$_2$共现（76.4%），而“别又 VP”没有出现了$_2$；后者主要表现为无“了”（66.7%）或使用了$_1$（33.3%）。这说明句末“了”的类型是区分二者的重要形式特征。

（3）**谓语 VP 的“自主性”：**二者的分布差异显著（p=.00475）。“别再 VP”明显以自主 VP 为主（81.1%），非自主 VP 仅占 18.9%；而“别又 VP”中自主 VP 占 41.7%，非自主 VP 占 58.3%，其非自主 VP 的比例明显高于“别再 VP”。

（4）**“别”字小句的“制止义”与“防止义”：**二者的分布差异显著（p=.00609）。“别再 VP”明显以制止义为主（85.8%），防止义仅占 14.2%；而“别又 VP”的制止义和防止义各占 50%，其防止义比例明显高于“别再 VP”。

这一结果可以对马真（2016）、张秀花（2023）的论述作进一步补充。本文的语料表明，“别又 VP”并非仅限于提醒对方避免某种不如意事件再次发生的防止义语境，在制止义语境中也有实际用例。在 6 例表示制止义的“别又 VP”中，有 5 例的 VP 属于自主行为，如例 14）、19）、20）所示。值得注意的是，这 6 例的 VP 均具有贬义色彩，表明“别又 VP”虽然可以用于制止义语境，但其使用可能与 VP 的贬义色彩存在一定关联。这一点也与蒲喜明（1993）、高林波、张维微（2008）关于“又”容易在具体语境中与埋怨、讨厌、斥责等消极评价结合的观察相呼应。

（5）**谓语 VP 的褒贬色彩：**二者差异显著（p=.00861）。“别再 VP”既可与贬义 VP 共现，也可与非贬义 VP 共现；“别又 VP”12 例则全部为贬义 VP，表现出明显的贬义选择倾向。

上述差异可通过以下用例观察：

11）陈宇宙：一会儿吃完饭，我去找一趟我爸妈。
　　许半夏：哎呀，我都跟你说了，**别再**找你爸妈了。（《风吹半夏》第 4 集）

12）林白　：小征不会干那样的事情的。韩亚，你是副市长，这件事儿就得你出面才行。
　　韩亚　：你别着急，你听我说。我的身份在这个时候不方便出面。这样对小征对我都会有影响的，**别**到头来**再**害了孩子。（《罚罪》第 22 集）

13）寻建祥：（对杨巡说）要不然我先进去把菜点了。你**别**一会儿人家来了**再**现点菜。（《大江大河 2》第 14 集）

14）余初晖同学：以后啊，同学聚会你得常来，可**别**像之前一样**又**玩失踪啊！
　　余初晖　　：我之前不是忙着闭关修炼吗？（《欢乐颂 4》第 36 集）

15）常征同事：对，夏宗涛就在那里。这一次**别再**让他跑了。
　　常征　　：明白。（《罚罪》第 28 集）

16) 嫌疑人：我有低血糖，这真不是装的。
　　崔铁军：吃早饭了吗？**别**一会儿**又**晕倒了。（《三叉戟 1》第 9 集）

17）童骁骑：哎，我那车，修好了几辆了，明天开始就找活干。能挣点儿是点儿。
　　许半夏：我再跟你说一遍啊！**别再**找那些不三不四的人。（《风吹半夏》第 4 集）

18）李支　：我觉得你比你那两个哥哥可是强太多了。

彭超　：你就**别再**夸我了。（《罚罪》第 16 集）

19）张华　：这徐蔓有对象没有？

崔铁军：不知道。你打听这干什么？

张华　：我觉得她跟小吕挺般配。

崔铁军：欸欸，你**别又**在这儿乱点鸳鸯谱啊！

张华　：什么叫又啊？我什么时候乱点过？当初我撮合咱们家小斌和静怡，你看，现在小两口一起去深圳发展，过得多好。（《三叉戟 2》第 1 集）

20）崔铁军：我呀，还就坐惯了这个破金杯了。张华，你就坐这个车（楚政委的 SUV）回去，我跟他们聊会儿工作。

潘江海：对对对。

张华　：欸，小潘。你**别**拉着他**又**乱跑啊。

崔铁军：我都这样了，我能跑到哪儿去？（《三叉戟 2》第 15 集）

5.结语

本文基于 10 部电视剧语料，对“别再 VP”和“别又 VP”进行了量化比较。结果表明，二者虽然均以重复义为主，但副词选择与句末“了”的使用及类型、VP 自主性、制止/防止义以及 VP 评价色彩之间均存在显著关联，且经 Bonferroni 校正后仍达到显著水平。“别再 VP”数量较多，句末常带了$_2$，主要与自主 VP 共现，以制止义为主，VP 评价色彩较为多样；“别又 VP”数量较少，句末出现“了”时均为了$_1$，非自主 VP 和防止义的比例相对较高，VP 则全部具有贬义色彩。本文还对马真（2016）和张秀花（2023）的论述作了补充：“别又 VP”并非仅限于防止义，在制止义语境中也有实际用例，且其制止义用法表现出明显的贬义选择倾向。

【参考文献】

[1]北京大学中文系 1955/1957 级语言班编 1982.《现代汉语虚词例释》,商务印书馆。

[2]陈立民，张燕密 2008.释“还、再、又”,《语言研究》28(3),26-36.

[3]高林波，张维微 2008.副词“再”和“又”的多角度分析,《长春大学学报》18(6),38-41.

[4]蒋琪，金立鑫 1997.“再”与“还”重复义的比较研究,《中国语文》258,187-191.

[5]刘月华，潘文娱，故铧2001.《实用现代汉语语法》（增订本）,商务印书馆。

[6]吕叔湘主编 1999.《现代汉语八百词》（增订本）,商务印书馆。

[7]马真 2016.《现代汉语虚词研究方法论》（修订本）,商务印书馆。

[8]彭可君 1990.副词“别”在祈使句里的用法，《汉语学习》2，4-9.

[9]蒲喜明 1993.副词“再”、“又”的语用意义分析，《陕西师大学报（哲学社会科学版）》22(3)，111-114.

[10]王敏凤 2015.频率副词“还”、“再”、“又”重复义之比较,《语文建设》2015(8),76-78.

[11]项开喜 2006.“制止”与“防止”：“别＋VP”格式的句式语义,《语言教学与研究》2,48-56.

[12]袁毓林 1993.《现代汉语祈使句研究》,北京大学出版社。

[13]张秀花 2023.副词“又”的“行、知、言”三域,《现代语文》12,80-84.

[14]张耀宇 2015.浅析时间副词“再”和否定词连用现象,《常州工学院学报（社科版）》33(2),80-84.

[15]周刚 1994.说“再”，《汉语学习》3，28-32.

[16]朱德熙 1982.《语法讲义》，商务印书馆。

[17]祝东平 2010.“再”、“还”重复义与动词性词语的“有界”、“无界”,《汉语学习》5,55-61.

从周边要素看疑问词连锁句和 Wh1-D 句的照应策略

王芸嫚
立命館大学　外国語嘱託講師

1. 引言

（1）和（2）都是汉语中较为典型的回指句式。其中，（1）以同形疑问词 Wh_2 回指前小句先行词 Wh_1，因此被称为“疑问词连锁句”；而（2）则是以代词等定表现（definite description）回指 Wh_1，因此池田 2018:60 称其为 Wh_1-D 句。

（1）上级叫我怎么做我怎么做。（BCC：赵树理《三里湾》）

（2）谁不满意就让他不满意吧。（BCC：魏巍《东方》）

对于上述两种句式在照应策略上的异同及后小句中两种照应要素的互换，先行研究的看法有较大分歧。一种观点将两者视为采取同一照应策略的同义句式，尽管在不同语境下存在使用优先度差异等语用差异，但 Wh_2 和 D 两种照应要素基本允许互换（Pan and Jiang 2015:160 等）。另一种观点则主张将两者视为照应策略上呈现互补关系的不同句式，两种照应要素看似可以互换，其实是形式相近的句式间的混淆（Cheng and Huang 1996:134-144 等）。

本报告收集了 BCC 语料库中以“谁-谁”来照应的疑问词连锁句和以“谁-他”来照应的 Wh_1-D 句各 100 例。通过实例分析我们发现，疑问词连锁句允许完全的无标形式，而 Wh_1-D 句不能。能够使 Wh_1-D 句成立的周边要素除关联词外，还包括一些句末语气词、表义务的能愿动词等。我们认为，Wh_1-D 句之所以需要与这类周边要素共现与焦点差异有关。

2. 照应要素选择的句法、语义及周边要素限制

关于选择 WH 要素或有定指称词作为照应要素时存在句法限制的问题，先行研究中已有提及。Cheng and Huang 1996:149-151 指出，像（3）这样与后小句关联词“就”共现时，两种照应要素都可成立，但（4）这样不与“就”共现的句子，只允许 WH 要素做照应成分。

（3）谁要这破厂，我就让给谁/他。（Cheng and Huang 1996:149）

（4）谁要这破厂，我让给谁/*他。（Cheng and Huang 1996:150）

Pan and Jiang 2015:164 尽管举出反例（5），指出 Wh_1-D 句并不必须与“就”共现，但（5）中新增了句末语气词“好了”。也就是说，（5）的确可以证明 Wh_1-D 句不必须和“就”共现，但仍不能反驳疑问词连锁句和 Wh_1-D 句间存在句法差异这一结论。

（5）谁要这破厂，我让给他好了。（Pan and Jiang2015:164）

杉村 2017:129 主张，当疑问词连锁句中，前后小句结构工整对称且 Wh_1 和 Wh_2 之间横向距离较近时，Wh_2 无法被有定指称词替代，如（6）中，两种照应要素均成立，但（7）中，仅允许 WH 要素做照应成分。

（6）谁技术全面，就让谁/他做中锋。（杉村 2017:130）

（7）谁技术全面谁/*他就上。（杉村 2017:130）

从上述例句可以发现，与“就”共现不仅不是以有定指称词回指 Wh_1 的必要条件，而且也并非充分条件，如（7）虽与“就”共现，但句子仍不成立。而 WH 要素间横向距离远近对照应要素选择的影响也不绝对，如（8），WH 要素间相对位置不变，但两种照应要素均成立。

（8）谁技术全面谁/他就必须得上。

通过对 BCC 中随机抽取的疑问词连锁句和 Wh_1-D 句用例进行分析，我们发现，对照应要素选择产生影响的既有后小句自身的句法形式、语义解释，也有周边要素的作用[1]。

首先，从后小句自身的句法形式来看，照应要素在后小句中的句法成分对照应要素的选择会产生一定影响，具体而言，做照应要素的有定指称词位于受事位置时，比充任主语时更能接受无标句，而 WH 要素无此限制。本次调查的 100 例 Wh_1-D 句中，有 26 例未与“就/（便）”共现。这些用例中“他”均位于受事位置，如（9）中做宾语修饰语，（10）中则做“让”的宾语。

（9）谁揭这春联，我打断他/谁的腿！（BCC：贾平凹《生命是孤独的旅程》）

（10）谁不识趣乱开口，让他/谁脸肿鼻子青。（BCC：《人民日报》）

而“他”做后小句主语的句子在 100 例中仅占 7 例，都必须与“就”共现，如（11）。当不与“就”共现时，位于后小句主语位置的照应要素只能使用 WH 要素，如（12）。

（11）谁不跟我在一起，他就是反对我！（BCC：《人民日报》）

（12）谁背后说我谁/*他断了舌头！（BCC：贾平凹《秦腔》）

其次，从语义来看，在无标句中，后小句无明显排他语义的用例更易允准两种照应要素，而有明显〔＋排他〕或〔＋对比〕语义的，可分为以下两种情况。

其一，照应要素所代表的集合中各项间有〔＋排他〕语义时，只允准 WH 要素，如（13），表仅给“发饷的 x”打仗，而不给不发饷的人打仗。

（13）谁发饷，我们给谁/*他打仗，我们打过多少次仗啊！（BCC：老舍《茶馆》）

其二，当使 x 成立的谓词性成分含〔＋排他〕语义时，只允准有定指称词，如（14）、（15）。以（14）为例，假设照应要素是包含“a、b、c”三项的集合，后小句第一小分句中“不决定于 a 做哪一种工作”和第二小分句中“决定于 a 是不是为人民服务”是排他关系，而非“a”与“b、c”间存在排他关系。

（14）谁不光彩，不决定于他/*谁做哪一种工作，而是决定于他/*谁是不是为人民服务。（BCC：《人民日报》）

（15）谁不生产当下不发给他/*谁土地证，啥时生产了再发给他/*谁！（BCC：《人民日报》）

需补充说明的是，该现象与后小句照应要素的数量并无必然联系。如（16）这样后小句两个小分句间不互相排斥时，两种照应要素均可允准。而（14）即使改为“谁不光彩，不决定于他做哪一种工作，而是决定于是不是为人民服务”，使照应要素为单数，也仍只能用有定指称词。

（16）谁干事创业就提拔谁/他、表彰谁/他、奖励谁/他，彻底解决干好干坏一个样、干多干少一个样、干与不干一个样的问题。（BCC：《人民日报》）

最后，在周边要素的使用上，我们发现以下两种周边要素在 Wh_1-D 句中最为常见，且对能否允准使用有定指称词有很大影响。一类是“好了”、“得了”等句末语气词，如（17）、（18）。尤其（17）如删除“好了”，则只能用 Wh_2 照应 Wh_1，如（19）。

---

[1] 之所以认为前小句的语义解释和其中包含的周边要素未影响照应要素选择，是因为我们发现多例在前小句相同的情况下，因后小句的不同，照应要素选择各异的例子，如（i）和（ii）。

（i）谁不去，开除谁/*他！（BCC：老舍《四世同堂》）

（ii）谁不去就扣谁/他五元钱。（BCC：莫言《蛙》）

（17）谁爱走让他/谁走好了。（BCC：莱蒙特《农民们》）

（18）谁胡来，抓起来杀掉他/谁不就得了，谁还敢胡闹？（BCC：王蒙《老子的帮助》）

（19）谁爱走让*他/谁走。（BCC：莱蒙特《农民们》）

此外，很多像（4）这样只能用 Wh_2 照应 Wh_1 的用例，加上“好了”或“得了”等句末语气词后，也可以允准 D 照应 Wh_1，如（5）。

另一类是“得”、“必须”、“（一定）会”等认识、道义情态的情态动词或副词，如（20）、（21）。而（22a）这样不允准 D 照应 Wh_1 的句子，加入此类成分后，就可以用 D 来照应了。

（20）谁敢说不抖，我都得跟他拼命！（BCC：老舍《赵子曰》）

（21）谁敢这样做，他就会被这股洪流的巨浪吞没掉。（BCC：《人民日报》）

（22）a.谁剥，肉归谁/*他，皮归农会。（BCC：周立波《暴风骤雨》）

b.谁剥，肉必须得归他，皮归农会。

3. 周边要素与焦点移动

以上考察表明，WH 要素和有定指称词做照应要素时，并非仅存在形式上的差异，对二者的选择还受到照应要素的句法位置、后小句的语义解释以及周边要素的共同制约。尤其值得注意的是 2 节中提及的两类周边要素，它们虽不承担照应功能，但对后小句的语义性质和焦点结构产生影响，从而影响有定指称词能否被允准成为照应要素。

首先，祁峰 2014:145 指出，“得”“必须”“会”等表认识、道义情态的情态动词或情态副词是非独立的焦点强迫形式，对焦点成分有约束作用，如（23）和（24）中，句子焦点随情态动词“会”或情态副词“可能”的移动而移动，始终位于这些成分之后。

（23）a.会[明天]$_F$ 下雨。

b.明天会[下雨]$_F$。（祁峰 2014:145）

（24）a.可能[他]$_F$ 明天去。

b.他可能[明天]$_F$ 去。

c.他明天可能[去]$_F$。（祁峰 2014:145）

我们发现，上述成分在 Wh_1-D 句中出现时，也同样有使焦点移动的作用，以下（25）是对（7）稍做修改而成的例句。当不与上述情态表现共现时，句子（25a）不能说，而加入情态动词“会”后，无论是（25b）还是（25c）都成立。其中，（25b）的句子焦点在“在世界杯”或整个谓语成分“在世界杯上场”，因此我们可以增加后续语境如（26a）或（26b）。而（25c）的句子焦点在“上场”，因此可增加后续语境如（26c）。

（25）a.*谁技术全面，他在世界杯上场。

b.谁技术全面，他会在世界杯上场。

c.谁技术全面，他在世界杯会上场。

（26）a.谁技术全面，他会在[世界杯]$_F$ 上场，而非奥运会。

b.谁技术全面，他会[在世界杯上场]$_F$，而非落选国家队。

c.谁技术全面，他在世界杯会[上场]$_F$，而非坐冷板凳。

这些增加的后续语境，与 2 节中（14）、（15）其实是一致的，即〔＋排他〕语义不在 x 本身，而在使 x 成立的谓词条件。反观疑问词连锁句（27a-c），首先无论是否与情态表现共现，句子都成立。其次，情态表现无法移动句子焦点，无论情态表现是否存在，在何种位置，句子焦点都在“谁”。

（27）a.谁技术全面，谁在世界杯上场。

b.谁技术全面，谁会在世界杯上场。

c.谁技术全面，谁在世界杯会上场。

其次，目前尚无研究认为“好了”“得了”等句末语气词与句子的焦点移动有关，而事实上，这类句末语气词也确实难以承担确定或移动焦点的功能，如（28），无论焦点是“他”还是“去”均可成立。且由于这类成分只能位于句末，也无法通过自身的位置移动来改变焦点。

（28）a.让[他]$_F$ 去好了，别让小李去。 b.让他[去]$_F$ 好了，别拦着他。

我们认为，之所以这类句末语气词能够使句子更容易允准有定指称词做照应要素，其本质原因同样是使谓词条件的〔＋排他〕语义占据优势地位。如（29a），由于不与其他成分共现，因此 x 自身的〔＋排他〕语义占据优势地位，使句子无法使用有定指称词做照应要素。而（29b）加入“好了”使后小句带有明显的处置性语义，因此谓词条件的〔＋排他〕语义要优先于 x 自身的〔＋排他〕语义。此外，从（28）也可看出，由于“好了”、“得了”这类句末语气词不具有改变句子焦点的功能，因此句子正常情况下只有句末自然焦点。要使（28a）这样的对比焦点成立，需要“他”重读。而在 Wh$_1$-D 句中，照应要素一般均不重读。因此我们认为，“好了”等句末语气词在 Wh$_1$-D 句中的语义功能是使谓词条件的〔＋排他〕语义更为显著。反观疑问词连锁句，由于 WH 要素本身就是强焦点，因此无论是否与其他影响焦点的成分共现，x 自身的〔＋排他〕语义都会占据优先位置，如（30），是否有“好了”等句末语气词，不会影响句子允准 WH 要素作为照应要素[2]。

（29）a.*谁爱走让他走。（再揭）

b.谁爱走让他走好了，别拦着他。

（30）谁爱走让谁走（好了），别让小李走。

综上所述，我们认为，允准有定指称词做照应要素的重要条件是后小句使 x 成立的谓词条件的〔＋排他〕语义解释大于 x 自身的〔＋排他〕语义解释，而 WH 要素做照应要素成立的条件则刚好相反。

4. 再论“就”的语义功能

2 节中我们提到，本次调查的 100 例 Wh$_1$-D 句中，有定指称词位于后小句主语位置时必须与“就”共现，如（11）。然而（25b-c）这样有情态动词共现的或（31）这样句末有“好了”等语气词的句子，即使不与“就”共现，基本上也能允准有定指称词做照应要素。我们以问卷调查形式询问了 5 位汉语母语者，均认为（25b-c）和（31）有“就”更自然，但没有“就”也可以说。

（31）谁技术全面，他在世界杯上场好了。

基于 3 节的分析，我们有理由提出假说，“就”在 Wh$_1$-D 句中提供的语义功能可能是确定或增强谓词条件的〔＋排他〕语义。

先行研究一般认为，复句中“就”的语义功能是对前小句的排他，如陈立民 2005:23 指出，“就”表事实与说话人或听话人预期的偏离，如（31）中，说话人或听话人预期“用功”外，还需更多条件来达成“学好”这一结果，而事实上只需要“用功”，也就是说，“就”有

[2] 关于疑问焦点强于其他焦点标记，徐杰 2001:443 有具体阐述。而疑问算子的这一特性也是使(iii)这样疑问焦点与其他焦点标记共现的句子不成立的原因。

(iii)*谁是买了什么？

对前小句所述条件外其他可能条件的排他解释。

（31）你用功就能学好。（陈立民 2005:23）

我们认为这的确是“就”所具有的语义功能之一，但同时，“就”同样有强化后小句谓词条件的〔＋排他〕语义解释的功能。如（31）可以解释为“你用功就能学好，而非学坏”。而 Wh_1-D 句中的“就”也有这种功能，如（32）。

（32）谁的创造性劳动愈大，他就愈美丽（，而非愈丑陋）。（BCC:《人民日报》）

此处可对比疑问词连锁句（33）。不与“就”共现的（33a）仅允许 x 自身有〔＋排他〕语义。而有“就”共现的（33b）也可以允许后小句谓词条件有〔＋排他〕语义。因此王艺嫚 2025:95 认为有“就”共现的疑问词连锁句和无标的连锁句可能是不同的句式，我们认为，（33a-b）的对比可作为这一主张的一个佐证。

（33）a.谁爱去谁去，反正我不去/??不用留在这儿。（BCC:梁晓声《人世间》）

b.谁爱去谁就去，反正我不去/不用留在这儿。

5. 结语

本报告以 BCC 语料库中的“谁-谁”疑问词连锁句和“谁-他”Wh_1-D 句为对象，考察了后小句照应要素的选择条件。分析结果表明，疑问词连锁句可以采取完全无标的形式，而 Wh_1-D 句的成立则受到后小句句法位置、语义解释以及周边要素的共同制约。

我们发现两类照应策略的差异不能仅从照应形式本身解释，而应放在〔＋排他〕语义的分布中理解。当〔＋排他〕语义落在 x 自身、即照应集合内部各项之间形成对立时，WH 要素更容易被允准；当〔＋排他〕语义落在使 x 成立的谓词条件上时，有定指称词更容易被允准。“得”“必须”“会”等情态表现可以通过移动焦点凸显谓词条件，“好了”“得了”等句末语气词虽不直接移动焦点，却能使后小句的处置性或结果性语义更加突出，因此同样有助于有定指称词的成立。

在此基础上，本文重新考察了“就”的语义功能，发现“就”可以强化后小句谓词条件的〔＋排他〕语义。由此可见，疑问词连锁句及 Wh_1-D 句之间并非单纯的形式变体关系，而是在焦点结构和语义解释上存在系统差异。今后仍需扩大语料范围，并通过母语者判断调查进一步检验不同疑问词类型、不同句法位置及不同周边要素之间的相互作用。

【参考文献】

池田晋 2018.「多様性の複文:疑問詞連鎖構文の形式と意味」,『立命館法学別冊「ことばとそのひろがり」』:59-83 頁。

陈立民 2005. <也说“就”和“才”>,《当代语言学》2005(1):16-34 页.

祁峰 2014.《现代汉语焦点研究》.上海:中西书局。

王艺嫚 2025.<疑问词连锁句中“就”的共现限制及语义功能>,《中国语文法研究》2025 年卷:84-96 页。

Lisa Cheng, and James Huang.1996. Two Types of Donkey Sentences. Natural Language Semantics Vol. 4, No. 2:121-163.

Pan Haihua, and Jiang Yan.2015. The bound variable hierarchy and donkey anaphora in Mandarin Chinese. International Journal of Chinese Linguistics 2:159–192.

疑問詞“谁”の非人物用法

寺倉大智
大阪大学　大学院生

1. はじめに

木村 2020:67 によれば、疑問詞“谁”の典型的な機能は個別具体の〈人物〉を問うことにある。

(1) 如果元宋和叶鹿鸣都喜欢你，你选谁？（《下一站是幸福》）
(2) 桑延：谁说的？　　温以凡：我说的。（《难哄》）

ただし、“谁”が〈人物〉以外の存在を問いの対象として用いられる例も少なからず観察される。例えば(3)と(4)の例が示すとおり、組織に“谁”を用いることもできる。ちなみに、日本語の「誰」は組織を解として問い求める(5)のような文脈には適さない。

(3) 昨天晚上的足球赛谁赢了？
（盧尤『合格奪取！新 HSK5 級トレーニングブック〈リスニング問題編〉』）
(4) 第 101 回箱根驿传，谁能夺冠？（https://zhuanlan.zhihu.com/p/14997442826）
(5) 来年の箱根駅伝はどこ／*誰が総合優勝するでしょうか？（作例）

“谁”がチームに用いられるという指摘は、夙に中川 1992:17 に見られる。また、姚佳秀 2018:237 は“谁”による擬人化が成り立つことを指摘している。しかしながら、当該現象の具体的な内実に関する観察と考察は未だ十分に行われていない。加えて、“谁”がこのように非〈人物〉的な存在を対象として適切に機能する理由と条件も明らかではない。

以上の観点から、本発表では“谁”の当該用法を「非人物用法」と呼び、その意味的および機能的特徴を考察する。併せて、当該用法の成立に与る要因を明らかにする。

2. 疑問詞“谁”の非人物用法の意味的および機能的特徴

2.1. 非人物用法の“谁”が問いの対象とする存在について

次の 4 例が示すとおり、非人物用法の“谁”は人物以外の様々な存在を対象に機能する。

(6) 争夺冠军的另一支球队是谁？（CCL：人民日报 1983 年）
(7) 老虎和狮子都是兽中之王,但它们谁更有“头脑”？（CCL：光明日报 2009 年）
(8) 男女之间不能成为好朋友啊？谁说的？宪法？（《下一站是幸福》）
(9) 车夫和教师，到底谁了不起？（夏目漱石（著），于雷（译）《我是猫》）

(6)ではバスケットボールチームの指定が求められ、(7)では動物の指定が求められている。また、(8)では“谁说的？”という問い掛けに続けて、解の候補である“宪法”が提示され

ている。(9)では個別具体的な存在としての〈人物〉ではなく、総称的な存在としての“车夫”と“教师”を対象とした指定が求められている。

2.2. 解として想定される候補の数について

疑問詞“谁”は解として想定される候補の数を問わず適切に機能する（木村 2015:18)。この機能的特徴を継承して、非人物用法の“谁”も想定される候補の数には縛られない。

(10) 电脑和人脑，谁更了解疾病？（CCL：人民日报 2019 年）
(11) 目前，中国的服装品牌中，谁更具有影响力？（CCL：人民日报 2006 年）
(12)（サッカーチームの指定を求めて）今天巴萨和谁比赛呢？（CCL：网络语料）

上の 3 例は解として想定される候補の数とその示され方がそれぞれ異なる。(10)では候補が二者択一的に示されており、(11)では三者以上の候補が提示されている。また、(12)の例は候補が未提示の状態で成立している。“谁”は〈人物〉を問う場合であれ、人物以外の存在を問う場合であれ、想定される候補の数的差異に縛られることなく機能する。

2.3. 解として想定される対象の個別性および総称性について

“谁”が用いられた問いに対して、総称表現による応答は通常妥当しない（木村 2015:18)。一方、非人物用法の“谁”が解として想定する対象は個別と総称の別を問わない。

(13) 北大和清华的教育水平，谁的更好？（CCL：陈武志《金融的逻辑》）
(14) 大商场和家电连锁商城在家电销售上谁更有优势?（CCL：新华社 2001 年）

(13)の“谁”は個別的な存在を対象に用いられ、他方、(14)の“谁”は総称的な存在を対象に用いられている。このように、“谁”の非人物用法は個別（individual）と総称（generic）の別を問わないという点で、個別具体の〈人物〉を問う用法とは性質を異にすると言える。

3. 疑問詞“谁”の非人物用法の成立を支える構文的要因

前節では、“谁”が人物以外の様々な存在を対象に機能することを確認した。ただし、“谁”の非人物用法は文脈を選ばずに成立するものではなく、然るべき構文的意味や談話構造の支えを受けて成立するものであると考えられる。具体的に言えば、“谁”は、非人物的な存在が〈人物〉に見立てられる環境、より具体的に言えば「humanity」（Kimura2018:550）が喚起されやすい構文的あるいは談話的環境において、人物以外の存在を対象に機能すると考えられる。

(15) 酸有千差万别，无奇不有，但谁是酸中之王呢？（CCL：人民日报 1987 年）
(16) 此次没有分出最后胜负, 也使人与电脑棋手究竟谁更厉害的争论暂时不能得出最后结论。（CCL：新华社 2002 年）

化合物の“酸”は、客観的には〈人物〉との距離が遠い存在である。ただし、(15)の“酸

中之王”という表現が、人間らしさに関わる「フレーム」（Fillmore1982:117）を喚起させることから、当該構文における“酸”は限りなく〈人物〉に近似する存在として捉えられていることが示唆される。

続く(16)では、人と機械がチェスの対局を行ったという文脈を背景に、“电脑棋手”からは〈人物〉にも匹敵する行為主体性が読み取れる。“谁”の非人物用法は、典型的には以上のように、なにがしかの存在を「事態または行為の参与者（participant in the action or event）」（Kimura2018:550）として捉える構文環境あるいは談話環境で成立し得る。詰まるところ、“谁”の非人物用法とはコンテクスト依存の擬〈人物〉化による産物であり、対象それ自身の語彙的意味によって予め決定されているものではないということである。

Lakoff & Johnson1980:3 に指摘があるように、言語表現は様々なメタファーによって構造化されている。本発表もこのような観点に立ち、疑問詞“谁”が個別の人物以外の存在を対象に機能する用法、すなわち“谁”の非人物用法をメタファーの一種として考える。

以上の観察は、次のような組織の例を考える上でも有効である。

(17)（サッカーチームの指定を求めて）英格兰和巴西谁赢了？（CCL：新华社 2002 年）
(18) 你知道世界上最早保护版权的国家是谁吗？（CCL：人民日报 1995 年）

(17)では勝利を収めた球技チームの指定が求められ、(18)では歴史上早期に著作権保護を行なった国家の指定が求められている。ここでの球技チームは競技に臨む行為主体として捉えられ、また、国家も法執行を担う行為主体として捉えられている。いずれも組織である存在が構文上具体的な行為に参与する主体として捉えられることで humanity が喚起され、それを契機として、メタフォリックな捉え方を反映した“谁”の非人物用法が成立しているものと考えられる。

これに対して、同じように組織を解として問い求める意図があったとしても、問いの対象が「トコロ」（荒川 1992:79）あるいは〈所属先〉として捉えられている文脈においては、“谁”の非人物用法は成立し難い。(19)と(20)の“谁”は明らかに不自然である。

(19)（部署の指定を求めて）您在哪个部门 / *谁那儿？（《理智派生活》）
(20)（球団の指定を求めて）新庄刚志是哪个球队 / *谁的总教练？（作例）

(19)と(20)の例では〈所属先〉としての組織の指定が求められている。(17)(18)と同様に組織を対象とする問いでありながら、(19)と(20)の“谁”がどちらも不自然に感じられるのは、ここでの組織は構文上(17)や(18)のように行為主体として捉えられてはおらず、あくまでも〈場〉として捉えられており、従って、擬〈人物〉化を動機づける humanity が喚起されないためだと考えられる[1]。

[1] 日本語では、語彙的に〈組織〉という意味をもつ「会社」や「球団」は、「新庄はどこの監督ですか？」や「どこが優勝するかな？」のように、構文や談話の如何にかかわらず「どこ」（二者択一の場合は「どっち」）を用いて問われるが、中国語において、“公司”や“球队”を問う際の“谁”の可否は〈組織〉という語彙的意味によってではなく、構文的もしくは談話的環境によって決まる。

4. 疑問詞“谁”の非人物用法の成立を支える談話的要因

“谁”の非人物用法は談話環境の文脈的支えを受けて成立することもある。このことを別の角度から見れば、“谁”が人物以外の存在を対象に用いられる要因を理解するには、構文の単位を越え、談話の脈絡を踏まえた観察が不可欠な場合もあり得るとも言える。事実、次の(21)だけを単独で観察しても、“谁”が“它”を対象に機能する理由は俄かには判然としない。

(21) 您已经猜到它是谁了。

ここで“谁”が用いられる要因を探るには、(21)の一文を取り巻く談話環境に注目する必要がある。

(22) 它既不会说话，又不会走路，既不会制造飞机，也不用买票，却成功地乘坐飞机等交通工具，“畅游”世界多个国家和地区；它自己没有多少能量，却依靠人们的喷嚏，成功地进入数万人的身体；它还具有不断“变异”的看家本领，可以成功躲避人类的进攻和防御……想必不用我说，您已经猜到它是谁了——目前仍在全球肆虐的甲型H1N1 流感病毒。（CCL：人民日报 2009 年）

(22)はインフルエンザウイルスの特性を人間の活動に擬えて語る談話である。このように、談話それ自体が人物以外の存在を〈人物〉として扱う環境であれば、“谁”はその文脈に即して適切に機能し得る。なお、仮に(22)の“谁”を“什么”に置き換えた場合は、複数のインフォマントが談話の流れとして違和感を覚えると言う。すなわち、(22)の談話における“谁”の選好性は“什么”よりも高いということである。

さらに一例を挙げると、次の(23)では“谁”が複数の山を対象に用いられている。

(23) 庐山，您有多少奇峰？在数不清的群峰中，谁又是您的主峰？（中略）是海拔高度冠于全山的大汉阳峰吗？但它却谦逊地守护在您的西南端，并不以主峰自尊。是您的中心地牯岭吗？然而，它却以宽衍的盆地亲切地迎接游客，无意和周围的山峰争奇斗险。（CCL：人民日报 1983 年）

(23)の談話では、廬山や周囲の山々が恰も〈人物〉であるかのように扱われ、呼び掛け表現の“庐山”や、敬称代名詞の“您”、人柄を表す“谦逊”や“亲切”など、敬愛の念を込めた表現が用いられている。このように、呼び掛け表現を用いたり人間の属性を語るような文脈では humanity が喚起され、人間との距離が明らかに遠いと思われる存在に対しても〈人物〉としての概念化の許容度が上がる。また、先の(22)と同様に、“群峰”を〈人物〉として捉える(23)の談話には他でもなく“谁”が妥当し、“哪个”との置き換えは成立し難い。

以上を踏まえると、“谁”の非人物用法は、文脈に与る諸々の要因に動機づけられて成立すると説明できる。当該用法の内実をより的確に特徴づけるには、それがメタファーに基づく現象であるという事実を認識し、なおかつ、“谁”がどのような構文環境や談話環境で

用いられ、どのような語彙や表現と共起しているのかという要素を観察する必要がある。

5. まとめ

以上、本発表は疑問詞“谁”の非人物用法について、その意味と機能を特徴づけ、併せて、当該用法の成立に与る要因を考察した。従来、疑問詞“谁”は典型的機能として個別具体の〈人物〉を解の対象として用いられると説明されてきた（木村 2020:78-80）。しかしながら、本発表の観察結果が示すとおり、“谁”の非人物用法が一定の生産性を以って成立し、加えて、“昨天晚上的足球赛谁赢了？”（昨晩のサッカーの試合はどっちが勝ちましたか？）のような文脈にも“谁”が用いられるという事実を考慮すると、“谁”は〈人物〉という特定の範疇に専従し、その他の範疇との関わりを一切もたないとは言い難いところがある。“谁”は非典型的用法として、然るべき文脈の支えがあれば、想定される候補の数的差異に縛られることなく、また、対象となる存在が個別的であるか、総称的であるかの別を問わず、個別具体の〈人物〉以外の様々な存在を対象に機能し得ると言える。

【参照文献】

荒川清秀 1992.「日本語名詞のトコロ（空間）性 ―中国語との関連で―」,大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』: 71-94 頁。東京：くろしお出版。

木村英樹 2015.「中国語疑問詞の指示特性 ―“什么”（なに），“谁”（だれ），“哪”（どれ）の機能対立―」，『日中言語研究と日本語教育』8：12-23 頁。

木村英樹 2020.「中国語の疑問詞を考える ―その 1―」,立命館孔子学院（編）『「初級中国語文法」とその後の中国語文法』: 57-80 頁。京都：立命館孔子学院。

中川正之 1992.「類型論からみた中国語・日本語・英語」,大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』: 3-21 頁。東京：くろしお出版。

姚佳秀 2018.「中国語の“谁”と日本語の「誰」の意味・機能に関する対照研究」. 博士学位論文. 鹿児島国際大学。

Fillmore, Charles, J. 1982. Frame Semantics. In Linguistics Society of Korea (ed.), Linguistics in the Morning Calm, Seoul: Hanshin. 111-137.

Kimura, Hideki. 2018. ‘Who’, ‘what’, and ‘which’ in Japanese and Chinese, In Prashant, Pardeshi, and Taro, Kageyama (ed.), The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (Handbooks of Japanese Language and Linguistics). Boston: De Gruyter Mouton. 533-555.

Lakoff, George, and Johnson, Mark. 1980. Metaphors We Live By. Chicago: The University of Chicago Press.

【引用例出典】

・ドラマ：《理智派生活》 2021.导演：徐辅军、《难哄》 2025.导演：瞿友宁、《下一站是幸福》 2020.导演：丁梓光。

・書籍：盧尤 2018.『合格奪取！新 HSK5 級トレーニングブック〈リスニング問題編〉』。東京：アスク出版社、夏目漱石（著），于雷（译） 1993.《我是猫》。南京：译林出版社。

・web サイト：詹卫东，郭锐，谌贻荣 2003.北京大学中国语言学研究中心 CCL 语料库，网址：https://corpus.pku.edu.cn、知乎，网址：https://www.zhihu.com（2026/08/21 参照）。

主語に不定名詞句が用いられる存現文の構文特徴と構文役割

時彦卿
名古屋大学　大学院生

1.はじめに

現代中国語において、ある場所における事物の存在・出現・消失を表す文は、一般に存現文と呼ばれる。例（1）のように、典型的な存現文では、主語位置に置かれる場所成分は既知・定であることが多いのに対し、目的語には不定名詞句が用いられることが多く、その典型的な統語形式は「場所成分(定)＋存現動詞＋存現事物（不定)」である。先行研究では、このような存現文は通常、テクストに新たな事物を導入する役割をもつと指摘されている。

(1) a.墙内有个女孩，叫方微，是卜松明一位朋友的女儿。(潘文 2006:135)
b.庄园外面来了一个人，指名道姓要跟努尔哈赤比武。(《努尔哈赤》李文澄)
c.青青的竹林前，“全家福”里少了一张熟悉的脸，叶根土在 1974 年因病去世了。
(人民日报 1994 年 8 月)

しかし、用例を考察すると、例（2）のように場所成分に不定名詞句が用いられる存現文も観察される。

(2) 1929 年 5 月 4 日，比利时布鲁塞尔，一个英国金融家与荷兰贵族后裔联姻的家庭里诞生了奥黛丽・赫本。(人民日报 1993 年 2 月份)

例（2）の意味的中核は「ある家庭にオードリー・ヘップバーンが生まれた」という存現(出現)事象を表している。不定名詞句である“一个…家庭里”が主語位置に現れており、主語に不定名詞句[1]が用いられる存現文である。このような構文は、場所成分が既知・定である典型的な存現文とは形式的に異なるため、本発表ではこれを非典型的な存現文と呼ぶ。

また、先行研究における不定名詞主語文（主語に不定名詞句が用いられる文）の考察は、主として“一个人走进了办公室”のような､不定の動作主を主語とする文に集中している。当該構文については、主語が指す事物そのものを際立たせるのではなく、むしろある場面や状況を直接的に提示することに重点があり、客観的な「白描性」が強いとされている（内田 1989、雷桂林 2010）。一方、典型的な存現文では、文頭の場所成分が、事物の存在・出現・消失が成立する参照領域を設定し、新たな事物をテクストに導入し、後続の叙述を展開させる役割をもつとされている(潘文 2006、张新华 2007、张伯江 2009)。

本発表で扱う非典型的な存現文は、形式上は不定名詞句が主語に用いられる一方、意味的には存現事態を表すという存現文の特徴をもっている。しかし、このような非典型的な存現文については、十分な検討がなされていない。そこで本発表では、非典型的な存現文を対象とし、その構文特徴とテクストにおける役割を考察する。

また、前述したように、典型的な存現文では、場所成分は話し手と聞き手が容易に同定できる既知の空間を表し、存現事物の参照領域として機能する。それに対し、非典型的な存現文では、場所成分が不定名詞句として文内に新たに導入されるにもかかわらず、同様

[1]本発表では、主として「“一”＋(量詞)＋名詞」の形式を不定名詞句として扱う。

に存現事物の定位の参照となる。ここで問題となるには、既知の参照領域を利用する場合と、参照領域を文内で新たに設定される場合とで、場面構築の仕方の違いという点である。

この差異を捉えるため、本発表では「メンタル・スペース理論」(mental spaces theory)の考え方を援用する。Fauconnier 1985 は、メンタル・スペースを、言語構造そのものとは異なり、言語表現によって与えられる手がかりに基づいて談話の中で構築される心的構築物として捉えている。この考え方を踏まえ、本発表では、テクストの進行に伴い、言語表現や文脈を手がかりとして、ある空間を参照領域として設定し、そこに事物およびそれらの関係を定位して一つのまとまりを形成する認知プロセスを「場面構築」と呼ぶ。

以上の「場面構築」の定義に基づけば、典型的な存現文では、前文や共有知識によって話し手と聞き手が同定できる既知の場所成分を参照領域として利用し、その中に存現事物が提示される。これに対し、非典型的な存現文では、場所成分自体が新たに導入されるため、参照領域の設定と存現事物の提示とが同一文内で行われる点に特徴があると考えられる。次章では、非典型な存現文における場面構築のあり方を、主語名詞句、述語動詞、目的語名詞句という三つの側面から検討する。

2.非典型的な存現文の構文特徴

2.1 主語名詞句の不定性と場面構築

前述したように、非典型的な存現文においては、主語である場所成分は、前文に導入されておらず、共有知識からも同定できない不定名詞句である。以下、例（3）（4）を示す。

(3) 只见院子中西边墙上站着贝海石，他身后屋瓦上一列站着八人，东边一株栗子树的树干上坐着一人，却是丁不三，树干一起一伏，缓缓的抖动。（金庸《侠客行》）

(4) 有一次，一家绸缎商店进来了一群新疆来的客人。当服务员把一段放射着金黄色光亮的绸子放在客人面前时，一个客人马上把它装进自己的口袋，伸开两手，在柜台边载歌载舞起来。舞罢，带着极大的喜悦把它买了回去。（人民日报 1959 年 7 月）

例（3）（4）に見られる主語部分の“一株树、一家商店”は、いずれも文脈中に初めて導入された事物であり、新情報と考えられる。これらの不定名詞句が表す空間は、後ろの存現事物“一人、一群客人”を定位する参照領域として把握している。すなわち、非典型的な存現文では、新たな場所が導入された後、そこに関連する存現事物が提示されることによって、一つの場面が構築される。典型的な存現文が既知の参照領域を利用するのに対し、非典型的な存現文では、参照領域の設定と存現事物の提示とが文内で行われる点に、場面構築上の特徴がある。

2.2 述語動詞の特写性

非典型的な存現文における場面構築は、述語の性質とも深く関わっている。雷桂林 2012:29-31 は、不定名詞主語文では場面全体の提示が重視され、述語動詞には複雑な形が求められるのに対し、典型的な存現文では存現事物に注意が向けられ、述語動詞の役割は相対的に弱いと指摘している。また、前者は比較的にマクロかつ非ズームイン的に場面を捉えるのに対し、後者では存現事物へのズームインも可能であるとされる。

しかし、本発表で扱う非典型な存現文では、不定の場所成分によって一つの場面が構築される一方、注意はその内部の存現事物へと局所化される。さらに、述語動詞は、その存現事物の状態や変化が具体的に提示される。このような存現事物の局所的かつ具体的な提

示のあり方を、本発表では「特写性」と呼ぶ。「特写性」とは、構築された場面の内部で、述語動詞を中心として、存現事物の存在・出現・消失のあり方を局所的に切り取り、具体的に提示する性質を指すものである。ただし、特写性は動詞の語彙のみによって決まるものではなく、場所・時間を表す成分や前後文脈などの相互作用の中で現れる。以下、例（5）（6）を示す。

(5) 3月24日早上，春寒料峭。河南郑州黄河公路大桥北头停车站旁，一辆长途汽车上下来一位老年妇女。她叫谷坤一，是郑州畜牧兽医专科学校的教授。

（人民日报 1988 年 5 月份）

(6) 只见院子中西边墙上站着贝海石，他身后屋瓦上一列站着八人，东边一株栗子树的树干上坐着一人，却是丁不三，树干一起一伏，缓缓的抖动。（例(3)再掲）

例（5）の“下来”は、意味的には明確な変化性を有し、“老年妇女”が“汽车上”から移動して現れるプロセスを表している。また、前文では、まず“3月24日早上”によって時間的な範囲が限定され、続いて“河南”から“郑州”、さらに“黄河公路大桥北头停车站旁”へと視点が段階的に進められている。その後、“一辆长途汽车上”に至って観察範囲が局所化され、その中で“下来”が“老年妇女”の出現のあり方を具体的に提示されている。一方、例（6）の“坐着”は、意味的には静止的・持続的である。また、前文の“只见”によって観察範囲が限定され、“院子中”から“一株栗子树的树干上”へと視点も段階的に進められている。その中で、“坐着”は“一人”の姿勢を具体的に提示している。

以上のように、前文の時間・空間表現や視点表現によって観察範囲が徐々に局所化され、存現事物へのズームインが形成されている。その上で、述語動詞が存現事物の状態や変化を具体的に提示している。

2.3 目的語名詞句の定性

前述のように、典型的な存現文は通常、新たな事物を導入することを主要な役割とするため、目的語には不定名詞が現れることが多い。これに対して、非典型的な存現文の目的語部分には、定名詞句が現れる場合も見られる。以下では、例（7）（8）を取り上げる。

(7) 1929年5月4日，比利时布鲁塞尔，一个英国金融家与荷兰贵族后裔联姻的家庭里诞生了奥黛丽・赫本。（例(2)再掲）

(8) 里面的一张床上，躺着汪子琳的白发母亲。（鄂州市人民政府网 2014 年 3 月）

例（7）の“赫本”例（8）の“汪子琳的母亲”はいずれも定名詞句である。これらの用例から、典型的な存現文に比べて、非典型的な存現文では目的語の定性に対する制約が相対的に弱いにことが分かる。すなわち、目的語に必ずしも新たな事物が求められるわけではなく、構築された参照領域の中に、既知または同定可能な事物を提示することもできる。これは、当該構文では、場所成分自体が新たに参照領域として設定され、その中に存現事物が提示されるという場面構築のあり方と関係していると考えられる。

以上、主語名詞句の不定性、述語動詞の特写性、目的語名詞句の定性という三つの側面から、非典型的な存現文の構文特徴を検討した。このような構文特徴を踏まえ、次章では、非典型的な存現文がテクストにおいてどのような役割を果たすのかを考察する。

3.非典型的な存現文の構文役割

非典型的な存現文は、テクストにおいて単に存現事物を導入するだけではない。用例を

観察すると、その構文役割は大きく「全体導入」と「対比列挙」の二つに分けられる。

3.1 全体導入

全体導入とは、存現事物だけではなく、不定の場所成分と存現事物から成る一つの場面全体としてテクストに導入される場合である。典型的な存現文が既知の場所を背景として主に存現事物を導入するのに対し、非典型的な存現文では、場所成分自体も新たに導入される。この場合、導入された存現事物が後文叙述の話題となる場合と、構築された場面全体が後文叙述の背景となる場合が存在する。まず前者について例（9）（10）を挙げる。

(9) 1929 年 5 月 4 日，比利时布鲁塞尔，一个英国金融家与荷兰贵族后裔联姻的家庭里诞生了奥黛丽·赫本。礼仪优雅的欧洲文化名城，父母离异的感伤经历，9 岁即开始的芭蕾、音乐熏陶，造就了赫本発表静羞怯而又浪漫坚毅的品格，古老传统的高贵与现代观念的奇异集于一身。（人民日报 1993 年 2 月份）

(10) 我看到小区里停了很多警车，通过邻居的口中我得知，是对面一栋里死了一位老爷爷，身体已经高度腐烂，都生了虫子。（网络语料）

例（9）（10）では、不定の場所成分と存現事物からなる場面全体が新たに導入された後、存現事物が後文叙述の中心となっている。例（9）では、“1929 年 5 月 4 日”によって時間的な範囲が限定され、続いて“比利时”から“布鲁塞尔”、さらに“一个…家庭里”へと視点が段階的に絞り込まれ、その中に“赫本”が導入される。後文では、“赫本”の経歴や人物像について叙述が続いている。例（10）でも、“小区里”から“对面一栋里”へと視点が局所化され、その中に“一位爷爷”が導入され、後文ではその遺体の状態について叙述が続いている。このように、不定の場所成分は一時的な参照領域として機能し、その中に導入された存現事物が後文叙述の中心と考えられる。

一方、構築された場面全体が後文叙述の背景として機能する例（11）（12）も見られる。

(11) 村中杳无人影，蒋伪乱放了一顿枪炮正准备往回转时，一座高楼里却飞来了一阵排枪弹，蒋伪军慌张的散开，包围高楼，并高喊：“缴枪吧！你们被包围了”。喊了好久，没人答应，伪军提心吊胆，进去搜索才发现民兵早已从地道转移了。（人民日报 1946 年 9 月份）

(12) 任何导体都是有电阻的但导体越长,越细电阻就越大，就像一个又长又窄的小巷子进来了一大堆人,肯定是你挤我挤你大家都不快。（网络语料）

例（11）では、“村中杳无人影”という状況が先に提示された後、“却”によって“一座高楼里飞来了一阵排枪弹”という新たな事態が導入されている。“村中”と“一座高楼里”の間には、例（9）（10）のような段階的な空間限定関係が読み取れにくいため、ここでは空間的な局所化というよりも、新たな事態の提示として捉えられる。この新たな事態は、後続する“蒋伪军慌张散开、包围高楼”という展開の原因となっている。例（12）もこれに類しており、段階的な空間限定関係が読み取れず、文全体として、後続する“你挤我挤你”という叙述を理解するための比喩的な背景を構成している。

以上のように、全体導入では、新たに構築された場面を基礎として、存現事物が後文叙述の中心となる場合と、場面全体が後続する事態の背景となる場合が見られる。また、非典型的な存現文は、すでに提示された全体の内部を分けて述べる場合にも用いられる。

3.2 対比列挙

非典型的な存現文は、新たな場面を導入するだけでなく、前文ですでに提示された全体

を基盤として、その内部の各部分について局所的な場面を構築する場合にも用いられる。以下、例（13）（14）を示す。

(13) 陈国发也强硬地说，“他们还送给他一对绣花枕头，一个上面绣着‘甜蜜之梦’，一个上面绣着‘祝君晚安’。都是商人的女儿亲手绣的。他们还结了干亲。”
（魏巍《东方》）

(14) 山姆注意到有两种制服，一种上面绣着血红眼，另一个(上面)则是有着骷髅面孔的月亮，但他并没有停下脚步更仔细察看。(托尔金《魔戒》)

例（13）（14）では、それぞれ“一对绣花枕头”“两种制服”という全体が前文にすでに提示されている。続く“一个…，一个…”“一种…，另一个…”は、その内部の各部分が順に取り上げ、それぞれを参照領域として、存現事物を対比しながら並列的に提示している。したがって、ここでの不定名詞句主語は、新たな対象を独立して導入するのではなく、すでに提示された全体の内部を取り上げ、各部分について局所的な場面を順次構築する役割を担っている。

4.おわりに

本発表では、主語に不定名詞が用いられる非典型的な存現文を研究対象とし、その構文特徴と構文役割について考察を行った。

構文特徴については、まず、不定の場所成分が新たに導入され、存現事物を定位する参照領域として機能することにより、一つの場面が構築される。また、述語動詞を中心として、場所・時間を表す成分や前後文脈との相互作用の中で、存現事物の状態や変化を局所的かつ具体的に提示する「特写性」が見られる。さらに、典型的な存現文に比べ、目的語に定名詞句も現れうることから、目的語の定性に対する制約が相対的に弱いことを示した。

一方、構文役割については、「全体導入」と「対比列挙」の二つに分けられる。「全体導入」では、存現事物が後続叙述の中心となる場合と、構築された場面全体が背景となる場合が見られる。これに対し、「対比列挙」では、すでに提示された全体の内部から各部分を順に取り上げ、その特徴を対比的・並列的に提示し、テクスト内の情報が展開される。

以上から、非典型的な存現文は、テクストに存現事物を導入するという存現文としての性格を保持しながら、形式上は不定名詞句を主語にもち、先行研究で不定名詞主語文に指摘されてきた場面提示の性格とも共通する特徴を示すことが分かる。すなわち、当該構文は、場面そのものの構築と、その内部における存現事物の導入とが結びついたものとして捉えられる。

参考文献

内田慶市 1989「汉语里的“无定名词主语句”」『福井大学教育学部紀要I』第 37 号: 25-38.

雷桂林 2010「不定名詞主語文の場面描写役割」『中国語学』第 255 号: 137-156.

雷桂林 2012〈存现句与无定名词主语句的感知表达特征〉《漢語与漢語教学研究》第 3 号: 25-33.

潘文 2006《现代汉语存现句的多维研究》南京:南京师范大学出版社.

张伯江 2009《从施受关系到句式义》北京:商务印书馆.

张新华 2007〈与无定名词主语句相关的理论问题〉《北京大学学报（哲学社会科学版）》第 6 期: 103-111.

Fauconnier, Gilles. 1985. *Mental spaces: aspects of meaning construction in natural language*. cambridge, ma: mit press.

心理動詞との共起関係から見る名詞述語文の特性

張方捷
東京大学　大学院生

1. はじめに

中国語では名詞（句）がそのまま述語として使われる名詞述語文が認められる。

(1) a. 今天星期五。
　　b. 这种半导体收音机八个管，两个波段。　　（刘月华ほか 2019: 660-661）

一方、このような名詞述語文の構造全体が動詞の目的語となる場合は、文が成立しないことがある。例えば、例（2）のように、心理動詞“认为”の目的語になる場合、名詞述語文「NP_1＋NP_2」は自然であっても、「认为＋NP_1＋NP_2」は自然ではない。

(2) ??我认为这种半导体收音机八个管，两个波段。

本稿では、名詞性の主述述語が心理動詞の目的語となる構造「$V_{心理}$＋NP_1＋NP_2」をなす場合、どのような共起関係が見られるのかを具体的に検討したうえ、その理論付けを試みる。同時に、名詞述語文そのものの分類についても検討を加える。

2. 先行研究

刘月华ほか（2019）は、主述構造の句が目的語になることについて、以下のように述べている。

(3) 主谓短语作宾语时，动词多表示感觉或表示心理活动，如“说”、“想”、“看”、“听”、“觉得”、“认为”、“以为”、“记得”、“忘”、“忘记”、“知道”、“相信”、“认识”、“希望”、“赞成”、“怕”、“反对”、“同意”、“发现”、“指出”、“建议”等。主谓短语表示的是一件事情。　　（刘月华ほか 2019: 462）

刘月华ほか（2019）により、主述構造の句が目的語になる場合、基本的に感覚や心理活動を表すことがわかる。さらに、例えば“认为”について、以下の指摘がある。

(4) 对人或事物有某种看法，作出某种判断。带动词、形容词、小句作宾语。
（吕叔湘主编 1999: 464）

吕叔湘主编（1999: 619）では“以为”に関してもほぼ同様の記述が行われている。しかし、いずれも名詞性述語の主述構造が心理動詞の目的語になる場合については明確には言及しておらず、挙げられている関連の例文にも該当用法が見当たらない。

以下では、名詞（句）が述語となる主述構造が心理動詞の目的語に使用できるのか、また使用できるなら単独の名詞述語文とどのように異なるのかを考察していく。

3. 「$V_{心理}$＋NP_1＋NP_2」の使用制限

3.1 「NP_1＋NP_2」の範囲

「NP_1＋NP_2」は、単独で名詞述語文になりうる主述構造のものに限定する。

意味的な観点から分析する際、基本的に小野（2002）をもとにする。小野（2002）では、述語が表す意味により名詞述語文を 12 種類に分けており、さらにその中心的な意味特徴には「（非偶有的属性を基準とする）分類」と「存在描写」の二つがある（詳しくは 3.3.2）と主張している。

これらの名詞述語文「NP_1＋NP_2」は、判断文としての“是”構文「NP_1＋是＋NP_2」

から“是”を省略した形だという主張もある。確かにこの種の文の多くは名詞述語の前に“是”を加えることができる。ただし、NP_2の性格等により“是”以外の動詞（“有”等）に復元すべき文があるほか、“是”を省略しにくかったり、例（5b）のように「状態形容詞＋名詞」の場合は“是”を挿入しにくかったりすることがあり、必ずしも“是”の省略ではない（刘月华ほか 2019，朱德熙 1982，小野 2002）。また、述語に副詞が含まれる場合や文末助詞“了”を伴う場合も、“是”や“有”を許容しないこともある。

(5) a. 这孩子｛φ／是｝蓝眼睛。
　　b. 这孩子｛φ／*是｝挺蓝的眼睛。
(6) 我刚刚｛φ／*是／*有｝二十岁。
(7) 这苹果才｛φ／#是／*有｝五斤。
(8) 我（φ／*是）二十五了。

上記のほか、対比的な文脈があれば一時的に成立可能な「臨時的名詞述語文」も存在する。小野（2002）においても、対比的な文脈があれば本来成立不可能な文も問題なく成立する場合があると指摘している。

(9) *这间房子新沙发。
(10) 这间房子新沙发，那间房子旧沙发。

これら対比的な文脈によって成立する名詞述語文は、主語と述語がほぼ非論理的な関係にあり、非論理的な“是”構文と並行すると考えられる。

(11)a. 我们都住在黄河边上，他是上游，我是下游。（刘月华ほか 2019: 673）
　　b. 我们都住在黄河边上，他上游，我下游。

ほかに、“他学生”“他韩国留学生”“他数学老师”のような文は「非偶有的属性を基準に分類」するものではないため、本来名詞述語文としては非文とされている（小野 2002）が、以下のように、聞き手か話し手自身の認識を更新するような「上書き」的な文脈が整っていれば、文は成立する。

(12)A: 你在哪里？
　　B: 东京。
　　A: 额。亲。你留学生？（BCC 口语）
(13)A: 你们家孩子在哪儿上班啊？
　　B: 他学生，还没上班呢。

3.2 $V_{心理}$の範囲

本稿では、心理動詞の中でも述詞性目的語しか伴わないいくつかの動詞に焦点を当てる。叶琼（2024: 23-36 および 53-54）は心理動詞を“状态心理动词”と“行为心理动词”とに分け、後者については、さらに六つの下位分類を設けている。その中に“认为类”という分類がある。“认为、以为、想（认为义）、看（认为义）、觉得、感觉”等がそれに属し、これらの心理動詞は述詞性目的語のみをとり、具体的には“只能带动词、形容词、动词短语、形容词短语或小句作宾语”と述べている。

本発表では、叶琼（2024）の“认为类”から述詞性目的語のみをとる“认为、以为、想（认为义）、觉得、感觉”の五つの心理動詞を考察対象とする。これらの心理動詞は個人的な思考内容や主観的判断を表すのと同時に、述詞性目的語のみをとる一群の心理動詞の中で最も使用頻度の高いものである（刘丽静 2013）。

3.3 「V 心理＋NP1＋NP2」について

以下では「V 心理＋NP1＋NP2」（V 心理は认为、以为、想（认为义）、觉得、感觉で、かつ NP1＋NP2 は単独で名詞述語文になりうる主述構造）を分析する。

3.3.1 コーパスにおける実例：対比的な文脈

以下の（14）から（27）は BCC 口语から収集した実例である。

表 1 コーパスにおける実例数

N 主＋心理動詞	我想	我认为	我感觉	我觉得	我以为
实例数	0	0	1	2	11

(14) A: 那你们学校男生多吗？
B: 怎么说，我感觉男生 4 女生 6。（对比的・臨時名詞述語文）

(15) 给女生打分不太礼貌吧，我觉得女朋友满分，其他的不重要。（对比的・臨時名詞述語文）

(16) A: 虽然你没有艾特我，但是我觉得红色好评，对我说的是后面那台。
B: 原来是后面“那”台啊。（对比的・臨時名詞述語文）

(17) A: 云南的分数为什么这么高？ B: 因为总分是 200 分呀。
A: 哦那 137 不算很高我以为 150 满分。

(18) A: 姐！我才 17 岁！ B: 啊。我以为你 18 了！

(19) A: 你也刚考试？ B: 单位考试。你过了没？
A: 好吧。我以为你科目二。

(20) A: 你紧张什么啊？ B: 高考呀，能不紧张吗。
A: 你是高中生啊。我以为你大学呢。 B: 我就是大学，我替那些高中生紧张嘛。

(21) 我以为罐头妹 20 多岁。

(22) 我以为土狗你才十六的呢。

(23) 生日大快乐!!我以为你 90 后呢。

(24) 我以为大哥左撇子呢。

(25) 看小图我以为奶奶灰的发色呢哈哈哈。

(26) 我以为电脑都这个价格…不敢再高了因为是别人要送我。

(27) 我以为大叔我又文盲了。

“以为”によって表される判断は事実と合わない場合が多く、その際は後続の節で事実を明示するという指摘があるが（吕叔湘主编 1999: 619）、“以为”を用いると（後続節が明示されていなくても）潜在的に対比的な文脈が含まれているから「NP1＋NP2」と非常に共起しやすい。

以上のように、コーパスにおける実例は全て対比性を持つ臨時名詞述語文と言える。

3.3.2 意味的側面

NP2 の意味区分は主に小野（2002）に基づく。名詞述語文を成立させる名詞述語の意味特徴は、［＋非偶有的属性を基準とする分類］と［＋存在描写］の二つを中心的なものとする。以下の表 2 において、(a)～(g)は分類型に、(h)～(l)は存在描写型に属する。本発表では、心理動詞の主語を一人称とし、「NP1＋NP2」の主語 NP1 は一人称以外の主語に設定して、3.2 節で述べた五つの心理動詞と各タイプの名詞述語文との共起関係を調査した。考察の結果を表 2 のように示す。

表 2　意味的分類から行った「（我）+V 心理＋NP1＋NP2」の文法性判断

NP2の意味カテゴリー	「NP1＋NP2」	以为	感觉	觉得	认为	想（认为义）
a 原　籍	他北京人	○	○	○	?	*
b 所　属	他北大的	○	○	○	○	*
c 時系列	明天星期六	○	?	*	*	*
d 天　候	明天晴天	○	○	○	○	?
e 属　性	这孩子急性子	○	○	○	○	*
f デキゴト	昨天夜里大风暴	○	*	*	*	*
g 解　説	他九点到的	○	○	○	○	*
h 様　態	这个人挺高的个子	?	○	○	○	*
	这个人高高的个子	?	*	*	?	*
i 年　齢	他二十五岁	○	○	○	○	*
j 存在事物	窗前一片月光	?	?	*	*	*
k 所有物	他两个儿子，一个女儿	○	○	?	?	?
l 数　量	一个馒头三块钱	○	?	○	○	*
	一年三百六十五天	?	*	*	*	*

表 2 から以下のことが読み取れる。

(28)「分類型」の原籍・所属・天候・属性・解説と「存在描写型」の年齢が心理動詞との共起の許容度が高く、全体的には「分類型」が「存在描写型」よりも当該構文を作りやすい。一方、「分類型」の時系列・デキゴト、「存在描写型」の存在事物・所有物は許容度が低い。

(29)「存在描写型」の様態・数量は文の内容によって許容度に違いがあり、それぞれ少なくとも二つのパターンが存在する。様態は基本的に「状態形容詞＋名詞」で構成されるが、状態形容詞が「副詞＋性質形容詞＋的」の場合は許容度が高く、それ以外の場合は許容されない。数量は、客観的真理を表す場合は許容度が低く、そうでない場合は許容度が高い。

このような傾向を示すことから、次のことが考えられる。

1）名詞述語文の一部は“是”構文に変えることができ判断を表すが、必ずしも全てがそうではなく、状態を表す「描写」や変化・事件を表す「叙述」に属するものも混在している。認識類の心理動詞はそもそも判断を表す際に使われるものであり、構造的には動詞述語文であるが、文の意味機能から見れば判断文と言える。

2）「分類型」が「存在描写型」より遥かに心理動詞と共起しやすいのは、「分類型」の原籍・所属・天候・属性・解説が判断を表し、心理動詞との相性が良いのに対し、「存在描写型」の存在事物・所有物は描写か叙述を表すため、相性が悪いからである。

3）以下の意味カテゴリーは、上記 1）2）に対して例外的な結果を呈していることに鑑み、その分類を再検討する必要があると思われる。

ア）「デキゴト」が心理動詞と共起しにくいのは、それがイベント・事件について説明し叙述を表すからであり、むしろ「存在描写型」に属すと考えるべきである。

イ）「年齢」および「数量」（客観的真理を除く）が心理動詞と共起しやすいのはそもそもこれらが描写ではなく主語の年齢や数量的特徴という属性の判断を表すからであり、むしろ「分類型」に属すと考えるべきである。

ウ）「様態」の場合はやや複雑で、名詞述語が副詞を伴う場合は心理動詞と共起でき、形容詞の重ね型や二音節の状態形容詞からなる場合は共起できない。“挺高的个子”や“挺大的眼睛”のような場合は“高个子”“大眼睛”に近く、属性を述べているため「分類型」に近い。一方、“高高的个子”や“大大的眼睛”のような場合は、眼前のありさまを描写するものであるため心理動詞と共起しにくい。

エ）「数量」が客観的真理を表す場合は、“明天星期六”などの「時系列」と同様に、それを推測する文脈が考えにくい。それゆえ、心理動詞との共起が難しい。

４）「NP_1＋NP_2」と共起する心理動詞の許容度から見れば、

以为＞感觉≒觉得＞认为＞＞想

という明確な差異が確認された。“以为”が最も広範に共起が可能で、次いで“感觉”“觉得”が高い許容度を持つ。“认为”はやや制限があり、“想”は極めて低い許容度にとどまる。これは、コーパスの実例数と一致するものである。

3.3.3 統語的側面

“是”構文や“有”構文への変換、能願動詞“应该”や文末助詞“吧”の付加等、「$V_{心理}$＋NP_1＋NP_2」構文にある操作を加えることで文全体の許容度に違いが生じる。

(30)a. *我想他北京人。　　b. 我想他是北京人。

c. 我想他应该北京人。　　d. 我想他（应该）北京人吧。

また、NP_2に疑問詞が含まれる場合は、表 3 に示すように、二人称を主語とする心理動詞との共起がほぼ成立しない。

表 3　NP_2に疑問詞が含まれる「（你）+$V_{心理}$＋NP_1＋NP_2」

「NP_1＋NP_2」	认为	以为	想（认为义）	觉得	感觉
这什么	?	?	*	?	*
他什么毛病	?	?	*	◯	*
桌子上谁的信	?	*	*	?	*

疑問詞を述語に含む名詞述語文は分類型に属するが、疑問詞は値を持たず、具体的な分類をしていない点において、平叙文の名詞述語文とは異なる面を持つ。

(31)a. 我还以为这什么(呢)。(原来是巧克力。)

b. 我还以为他什么毛病(呢)。(原来是惯的。)

c. 我还以为桌子上谁的信(呢)。(原来是你的。)

参考文献

小野秀樹 2002.「中国語における“分類”と“描写”――“名詞述語文”を成立させる要因から」,『未名』20, pp.66-90.｜刘丽静 2013.心理动词构建“主谓—宾语（主谓短语）”句型的实证研究，华中师范大学博士学位论文.｜刘月华·潘文娱·故韡 2019.《实用现代汉语语法（第三版）》,北京: 商务印书馆.｜吕叔湘主编 1999.《现代汉语八百词（增订本）》,北京: 商务印书馆.｜叶琼 2024.《心理动词》,北京: 北京语言大学出版社.｜朱德熙 1982.《语法讲义》，北京: 商务印书馆.

量詞“顿”の意味領域およびその文法・表現機能

李佳樑・小野秀樹
東京大学 准教授・東京大学 教授

§1 問題の所在

◆ 現代中国語（“普通话”）における“顿”の用法

(1) 他俩吃了一顿丰富的晚餐。（岑凯伦《还你前生缘》）
(2) 如果孩子把玩具拆开，母亲往往会骂他一顿。（网络语料/微信公众号）
(3) 儿子如果不听话了，那就打一顿屁股。（李玲《作家笔下的婚姻生活》）
(4) 顿 〔量〕1．用于饭食。 一天三顿饭 | 这顿饭吃了二十多块钱
2．次。用于斥责、打骂、劝说等动作。 骂了一顿 | 打了两顿
（吕叔湘主编 1999：183-184）

◆〈食事〉〈攻撃〉の各領域における“顿”の振る舞い

(5) 他们还可以两天足不出户，硬是吃了 6 顿{方便面/*饼干}。（报刊精选 1994 年）
(6) a 第二天打电话给儿科专家的姨婆询问，结果给训了一顿！（网络语料/社区问答）
b 结果前几天编辑找我说，她被领导给训了。（网络语料/微博）
(7) 他把眼一瞪，一拳把药碗打翻，把我臭骂了一顿。（姚雪垠《李自成》第 2 卷）
→ *他把眼一瞪，一拳把药碗打翻，把我臭骂了。
(8) 旅馆人员在近百人围观的情况下，又把蔡勤地毒打了一顿，[……]（光明日报 1994 年）
→ *旅馆人员在近百人围观的情况下，又把蔡勤地毒打了，[……]

◆“顿”の意味特徴に関する先行研究の指摘［(9)(10)(11)の下線は発表者による］

(9)“顿”强调动作必须累计到一定的量，行为主要涉及两个方面[発表者註：“两个方面”とは飲食および暴力や罵りを指す]。（邵敬敏 1996 :104）
(10) 而整体量词（遍、顿、场$_1$）以及空间量词（趟、场$_2$）与动词组合时，所表现的行为是封闭性的，它的量是确定的，有一种整体观念。（邵敬敏 1996：105）
(11)“番”、“通”、“顿$_2$”、“场$_2$”。这几个量词客观上并不表达时间量度，但是它们在主观情态上具有长的意味，因此它们和数词组合成的数量结构表达动作的量时具有较强的［+计时］语义特征。“番”、“通”、“顿$_2$”、“场$_2$”这几个词构成的数量结构具有主观量大的情态特征，这有组配上的体现：大干一番 一顿死揍 一通大骂 大哭一场
（刘街生 2003：53）
(12)“顿”は集合読みの動量詞である。「(口で）食べる」「(口で）言う」「(手や拳で）殴る」「(足で）蹴る」など、主に身体部位に関わる動作行為に用いられる。
（王丹楓 2019：51）

◆ 先行研究の指摘に関する問題点

(13) 申报前，姚广芝仔细检查了一{遍/*顿}材料，便提交至线上平台。（人民日报 2023 年）

(14) 我把恐龙身上沾的芥茉洗掉，又往那些宝贝上大喷了一{通/*顿}清凉剂，压掉那股洋葱味儿。（读者 1990 年）

◆ 本発表における問題提起

1）そもそも、“顿”が〈食事〉と〈(広義の）攻撃〉という、一見何の共通点もない別種の行為に均しく用いられるのはなぜか？
2）先行研究の「行為の一定量の蓄積」「主観的に長い時間」「集合読み／身体部位に関わる行為」という指摘は、その由来が不明であり、かつ、それだけでは、“顿”の意味特徴を十全に記述しているとは言い難い。“顿”と共起可能な行為の類型を詳細に考察した上で、その表す「質と量」についてもあらためて精緻に分析する必要がある。
3）たとえば上掲の例(7)(8)のように、文の成立に“顿”の共起が必須である場合、“顿”は計数・計量以外の機能も発揮していると考えられるが、その機能とは何か？
4）従来、例えば“他不分青红皂白就把我骂了一顿。”［彼は有無を言わさず私のことをこっぴどく叱りつけた］(『中日辞典 第 3 版』小学館）のように、“一顿”を「こっぴどく」や「さんざん（に)」と訳してきたが、その妥当性と理由を検証したい。

§２“顿”が用いられる行為事象の「意味的繋がり（Semantic Link)」

◆ 〈食事〉と〈攻撃〉を表す文における“顿”の歴史的用例

(15) 聞卿祠，欲乞一頓食耳。（《世説新語・任誕》）
(16) 乃與杖一頓。（《啟顔錄・昏忘》）

◆ 言語類型論および認知言語学における動詞 EAT の意味拡張に関する分析

(17) The consumer is not only an agent of the activity, but is also invariably affected by the activity, through bodily sensations arising out of contact with the consumed entity. (Newman 2009:VIII)

(18) EAT and DRINK verbs, then, are characterised semantically by having an affected agent participant. Crucially, it is the effect on the agent which is the primary goal of an act of eating or drinking; […] (Næss 2009:34)

◆ 【LINK1】〈食う（eat)〉という意味を表す動詞群から「被害」へのリンク

※〈食う(eat)〉という行為は、上記(17)(18)で示した指摘のように、「影響を受ける主体（agent）を参与者として持つ」という特徴を持ち、同時に「身体への摂取・侵入」という概念を有する。それらが汎言語的に〈被害〉へとリンクする要素となる。このことは中国語にも日本語にも該当する。

(19) 【中】吃鞭子 / 吃耳光 / 吃枪子儿 / 吃教训 / 吃官司
【日】パンチを食う / 鉄砲玉を食う / 説教を食う / 差し押さえを食う
(20) 〈被害〉は「身体（精神）に有害なものを受ける」ことと概念化され得る

＜表 1＞ 〈飲食〉と〈(行為による) 被害〉における各要素の対応関係

起点領域：〈飲食〉	目標領域：〈被害〉
食べる人	被害者
食品	暴力（物理的攻撃）・叱責・法的措置
摂取の行為＝EAT / DRINK	被害を受けとめる行為＝EAT / DRINK

◆ 通時的（初期からの用例）に見る〈食事〉と〈刑罰〉の共通点

(21) 曰“有敕與一頓杖。”大使曰“御史不奉正敕，不合決杖。” （《朝野僉載》）
(22) 制敕，與一頓杖者決四十，重杖一頓者決六十，無文至死。
（《請定杖法奏》《全唐文》巻 437）

※ 初期（隋以降）に確認される“頓”を用いた攻撃事象は、身体刑、中でも杖刑である。〈刑罰〉は〈食事〉との間に密接な関係を有する諸要素を内包している。

(23)“頓”が用いられるのは〈食事〉であり、飲食一般ではない。

＜表 2＞ 〈食事〉と〈刑罰〉の事象構造における各要素間の対応関係

	起点領域：〈食事〉	目標領域：〈刑罰〉
行為発生の時点	定期的（朝・昼・晩）	敕命で定められた時点
身体との関係	身体への進入	身体への接触（と侵入）
閾値（threshold）	一食分	制度で定められた回数
客体の制約	身体に摂取されるもの	身体に接触・侵入するもの

※ 一回の〈食事〉としての「量的・質的充足性」は〈刑罰〉の同種の諸要素と強固な類縁性を有しており、“頓”は〈食事〉から〈刑罰〉へ、さらに時代が降って、より一般的な〈攻撃〉に属する行為へと意味領域を獲得してきたと考えられる。

◆ 【LINK2】〈食事〉というフレームから「攻撃」へのリンク

＜表 3＞ 二種類の〈加害〉文における項の意味的な対応関係の違い

拡張の種類	**動詞 EAT からの直接拡張**	**食事フレームを必要とする拡張**
例	a. 泥石流吞噬了村民。	b. 班长抽了新兵一顿鞭子。
食べる主体	泥石流	新兵（被害者）
食べられるもの	村民（被害者）	鞭子
食べさせる主体	なし	班长

※〈食事〉から＜表 3＞の例文 b のような〈攻撃〉タイプへのリンクは、「被害を受けさせる」というプロセスを介在させて成立していると考えられる。

§ 3 〈食う〉を用いた〈被害〉文から〈加害（＝攻撃)〉文への統語構造構築の仕組み

(24) I **[基底構造(被害)]**

被害者 ＋“吃”＋“一顿”＋ *v*N（*v*N は道具名詞で行為情報を顕在化）
e.g.）他吃了一顿鞭子。

Ⅱ［基底構造の授与／使役構文への埋め込み］

加害者 ＋ GIVE/CAUSE ＋［ 被害者 ＋“吃”＋“一顿”＋ *v*N］

e.g.）孤儿们爬到嬷嬷宿舍房顶上都看见了，您还给她们吃了顿鞭子。

（马里奥·巴尔加斯·略萨《绿房子》）

那个官老爷［……］还要让老朽吃一顿板子。　（杜文和《聊斋先生》）

Ⅲ［動詞“吃”の脱落（剰余成分の削減）］

加害者 ＋ GIVE ＋［ 被害者 ＋“一顿”＋ *v*N］（“顿”は省略・代替不可）

e.g.）那几个妇人恼了，不等他问路，齐齐赶上来，给了他一顿棒槌。

（网络《职场调侃：八戒的家常混沌》）

Ⅳ［（道具 *v*Nに付帯していた）動作行為の再顕在化（具体的な加害動詞への置換）］

加害者 ＋ *V* ＋ 被害者 ＋“一顿”＋ *v*N　（“顿”は省略・代替不可）

e.g.）我抽了她一顿鞭子。　（张恨水《啼笑因缘》）

※ 〈刑罰〉に端を発する〈攻撃〉文における“顿”は、単に回数を標示するものではなく、〈攻撃〉事象の質的・量的充足性を示す様態付与の機能も併せ持つ。さらにその機能は拡散しがちな攻撃的行為（殴る・罵るなど）を質・量の面からひとつのユニットに収める枠組みの働きをする。

※ 〈食う〉と〈被害〉のリンクは、事象要素の類縁性と文の項構造の類似性で担保され得るが、統語的変換や項構造の変化をともなう〈攻撃〉文の構成を成立させるためには、〈食事〉フレーム（提供者を含む）から〈攻撃〉へのリンクが必須である。そのため、“顿”がより強く関与しなければならない（そのため省略や代替ができない）。

※ 例(7)(8)のようなヴォイス構文では *v*Nの介在を必要としないが、“臭骂/毒打”は程度の高さとともに時間の経過性や反復性が強く意識される複合動詞であり、それゆえ質と量の両面からまとまりを持つ行為を単位化する“顿”の共起が必須となる。

§４“顿”を用いる適格事象と使用範囲の広がり

◆“顿”の使用範囲として容認される事象

(25) 他不肯和大家一起种地，偏偏要自己开荒种药材，结果被当做资本主义整了一顿，他骂了一顿娘。　（戴厚英《流泪的淮河》）

(26) 梅丽……到了屋子里，还是不住地喘气。凤举看她脸上青一阵白一阵的，便问为了什么？梅丽说是看到空屋子害怕。凤举倒说她太孩子气。佩芳也笑了一顿。梅丽有些生气，就不和他们说什么了。　（张恨水《金粉世家》）

(27) 燕西道：“去是去，可是花玉仙要向我们敲起竹杠来，那算你的，我可不过问。”鹏振笑道：“你就说得那样不开眼，总共和你见过几回面，何至于和你开口要什么？况且在我当面，她决不会和你要什么的，你放心罢。”一谈到花玉仙，鹏振就足足地夸了一顿好处，舍不得走。　（张恨水《金粉世家》）

(28) 男人紧皱着眉头一声也不啃，几口子抱着头哭了一顿，哭也哭不饱啊！

（人民日报 1949 年）

(29) 前些日子去看电影《早春二月》，还没进放映厅就生了一顿气。　（人民日报 1964 年）
(30) 孙掌柜摸不清老东家的意思，只能在笑上努力：“赔不了，怎能赔呢？”“闲谈；怎就不能赔呢？”又笑了一顿，孙掌柜拿起长烟袋，划着了两棍火柴，都倒插在烟上，而后把老玉的烟嘴放在唇间。　（老舍《蛤藻集》）

※ 広義に〈攻撃（迷惑行為）〉と解される行為、感情の発露にともない一定の閾値が認められる行為は“顿”の使用が許容される。また、“哭”“笑”“生气”などの行為は、行為者の感情の発露の顕れによるものであり、その点において“打”“骂”と共通する。

◆ 不適格な事象および動量詞“下・次”との比較

(31)[=(13)] 申报前，姚广芝仔细检查了一{遍/*顿}材料，便提交至线上平台。
（人民日报 2023 年）
(32)[=(14)] 我把恐龙身上沾的芥茉洗掉，又往那些宝贝上大喷了一{通/*顿}清凉剂，压掉那股洋葱味儿。　（读者 1990 年）

※ 単に主観的な量が多い、あるいは行為の累積や集合性が認められるという状況だけでは“顿”が使えるわけではない。

(33) 在家过节，我们终于又一次仔仔细细地欣赏了一{下/*顿}我们精心装修的新房子。
（新华社 2003 年 5 月份新闻报道）
(34) 在此之后，记者就西欧的环保问题认真做了一{次/*顿}调查。　（人民日报 2001 年）

※ “顿”は、「閾値」が明確な行為に用いられる特質を持つ［(23)の＜表 2＞］。換言すれば「質的・量的に充足したまとまりを持つ行為事象だと社会的に認知されている」ことを表す単位として機能する。「閾値の有無」が“下・次”との違いである。

【参考文献】

储泽祥 2023 “一顿Ｖ”语序带来的句法语义语用特征，《汉语学报》第 4 期，pp.96-106
李建平 2013 也谈量词“顿”产生的时代及其语源 —— 兼与王毅力先生商榷，《语言研究》第 1 期，pp.49-51
刘街生 2003 现代汉语动量词的语义特征分析，《语言研究》第 2 期，pp.51-55
吕叔湘主编 1980 《现代汉语八百词》，商务印书馆（1999 增订版）
王毅力 2011 动量词“顿”的产生及其发展，《语言研究》第 3 期，pp.71-74
吴福祥主编 2015 《近代汉语语法》，中国社会科学出版社
邵敬敏 1996 动量词的语义分析及其与动词的选择关系，《中国语文》第 2 期，pp.100-109
王丹楓 2019 『中日動量詞の意味的比較研究』，神戸大学博士論文
Næss, Åshild 2009 How transitive are EAT and DRINK verbs? In J. Newman (Ed.), *The Linguistics of Eating and Drinking* (pp.27-43), John Benjamins Publishing Company
Newman, John (Ed.) 2009 *The Linguistics of Eating and Drinking,* John Benjamins Publishing Company
Traugott, Elizabeth C. & Dasher, Richard B. 2002 *Regularity in Semantic Change*. Cambridge : Cambridge University Press

“等/过”を伴わない“一会儿”の時間副詞的用法について

——“一阵（子）”との対比から——

松尾奈奈
東京大学　大学院生

1. はじめに

例（1）（2）に見られるように、一定時間の経過を表す場合、“一阵（子）”の前では動詞“等/过”の生起が義務的であるのに対し、“一会儿”の前では任意である。

（1）a. 你｛等/过｝一阵（子）（再）来。[1]　　b. *你一阵（子）（再）来。
（2）你（｛等/过｝）一会儿（再）来。

“一会儿”と“一阵（子）”はいずれも「主観的時間量」(吴春相 2006)を表す数量詞でありながら、「“等/过”＋数量詞＋(再)VP」構文に出現する際に、“一阵（子）”は“等/过”との共起が義務的である。一方で、“一会儿”は“等/过”との共起が義務的ではなく、それのみで VP の前に生起可能であり、副詞のように振る舞う側面を持つ。本稿は、“一会儿”と“一阵（子）”との間にこのような差異が生じる要因について、両者に後続する VP の特徴、それぞれの持つ時間的伸縮性の幅の違いおよび発話時点と VP の実現時点との時間的間隔から考察する。

2. 先行研究

《现代汉语词典》第 7 版（中国社会科学院语言研究所词典编辑室编、商务印书馆、2016 年）では、“一会（儿）”は主に“指很短的时间”、“一阵（子）”は主に“动作或状况持续的一段时间”と記述されている。いずれも「主観的時間量」として機能し、時間の“约量”を表す数量詞である(吴春相 2006)。

しかし、現代中国語において“一会儿”が“等/过”を伴わずに時間副詞的に用いられる一方、“一阵（子）”では同様の用法が成立しにくい要因については、管見の限り十分に論じられていない。

3. 後続する VP の意味的特徴

3.1. VP の意味的特徴から見る“一会儿”の主観的時間量

“(等/过）一会儿（再）VP”に現れる後続 VP には、日常的で即時的に遂行可能な行

[1] 本発表では、“等/过＋数量詞＋再＋VP”を“等/过＋数量詞＋VP”のバリエーションとして扱っている。

為を表すものが多い。具体的には、“一会儿”の後続 VP には、即時的な遂行が容易であり、一定の準備・手続・時間的展開を伴わない、近い未来に開始・成立するものとして把握しやすい行為・事態を表すものが典型的に現れる。そのため、“(等/过) 一会儿 (再) VP”では、多くの場合、発話時点から VP で表される事態が開始・成立すると想定される時点までの時間的間隔が、話し手の主観において短いものとして捉えられる。

(4) (等/过) 一会儿 (再) 来/去/走/回来/回去
(5) (等/过) 一会儿 (再) 玩/写/说/聊/听/想/看/吃/谈/尝/洗
(6) (等/过) 一会儿 (再) 喝水/吃饭/上厕所/睡觉

逆に、VP 位置に即時的に遂行しにくく、一定の準備・手続・時間的展開を伴う行為を表す表現が現れると、構文の意味が不自然になる。このことから、“一会儿”は該当構文において、話し手が主観的に小さいものとして把握する時間量を表していると考えられる。

(7) ?? (等/过) 一会儿 (再) 退休/移民/出差/出家/还俗/回国/旅游
(8) ?? (等/过) 一会儿 (再) 盖栋房子/写本书/完成一项研发/组装十台空调/写一篇博士论文/装修别墅/购置不动产

3.2. VP の意味的特徴から見る“一阵 (子)”の主観的時間量

“一阵 (子)”の持つ主観的時間量は、後続する VP の意味的特徴から観察可能である。“等/过一阵 (子) (再) VP”の VP 位置には、“一会儿 (再) VP”の VP 位置に現れうる (4) (5)のような行為を表す表現だけでなく、(7) (8) のような“一会儿”と共起しにくく、即時的な遂行が困難であり、一定の準備・手続・時間的展開を伴う行為を表す表現も出現しうる。

(4') {等/过}一阵子 (再) 来/去/走/回来/回去
(5') {等/过} 一阵子 (再) 玩/写/说/聊/听/想/看/吃/谈/尝/洗
(7') {等/过} 一阵子 (再) 退休/移民/出差/出家/还俗/回国/旅游
(8') {等/过} 一阵子 (再) 盖栋房子/写本书/完成一项研发/组装十台空调/写一篇博士论文/装修别墅/购置不动产

“一阵 (子)”に後続する VP には、複数の行為・出来事からなる一連の事態を表すものも見られる。このことから、“一阵 (子)”が相対的に大きい時間量を表すと言える。例えば“移民”という行為・事態の場合、その成立に関わる主な手続き的行為および出来事として、“制定移民计划”“开具并整理资产等证明材料”“填写并递交申请材料”“等待审核结果”“获批移民签证”“购买赴外机票”“抵达目标国家”などが挙げられる。つまり“移民”という VP 全体が、複数の下位過程を含む複合的事態として把握される。

一方で、“一阵 (子)”は“一会儿”と共起しうる (6) の VP、つまり生命維持に不可欠であり、相対的に短い時間的間隔での実現が要求される行為との共起性が低い。

（6’）??｛等/过｝一阵子（再）喝水/吃饭/上厕所/睡觉

このことは、“一阵（子）”が“一会儿”に比べて、遂行が即時的に開始可能な後続VPとは結びつきにくいことを表している。

4. “一会儿”“一阵（子）”の持つ時間的伸縮性の幅の違い

4.1. 対人的配慮の文脈における“过一阵（子）（再）VP”

主語が一人称で、VPが話し手自身の意志的行為を表す場合、“等/过＋一会儿/一阵子＋（再）VP”は、該当行為を現在ではなく未来のある時点で遂行することを予告する表現として用いられる。

しかし、“（等/过）＋一会儿（再）VP”と“等/过＋一阵（子）（再）VP”とでは、未来に実現するものとして言及されたVPについて、その実現の可能性や、実現が保証される度合いが異なる。例えば、発話者が「二度と会うことはない」と考えている相手に対しても、別れ際に“过一阵（子）（再）见”と発言するケースが考えられる。後続VPの意味的特徴および“等/过”との共起のあり方を踏まえると、“一会儿”と“一阵（子）”では、時間的伸縮性の幅に違いがあると考えられる。

“过一阵（子）（再）VP”は、VPの実現が必ずしも見込まれない場合にも用いられることから、“一阵（子）”の時間的伸縮性の幅が相対的に広いことが示唆される。これに対し、“（等/过）＋一会儿（再）VP”には、同様の用法は見られにくく、時間的伸縮性の幅が相対的に狭いと考えられる。“一会儿”と“一阵（子）”の時間的伸縮性の幅の違いを踏まえると、両者の用法上の差異を説明することが可能になる。

4.2. 発話時点とVPの実現時点との時間的間隔から見る“一会儿”“一阵（子）”とVP

VPの実現が未来の時点へと持ち越されるという意味的特徴は、“（等/过）＋一会儿（再）VP”および“等/过一阵（子）（再）VP”において共通している。それにもかかわらず、“一会儿”の場合、“一阵（子）”の場合に比べて、VPが実現するか否かを比較的早い時点で確認することができる。本節ではその理由について、発話時点からVPで表される事態・行為が開始・成立すると想定される時点までの時間的間隔を考察し、“一会儿”が近い未来の実現時点を指定する傾向にあることを裏付ける。

“（等/过）＋一会儿（再）VP”および“等/过一阵（子）（再）VP”におけるVPは、いずれも「未来」の行為・事態であり、発話時点で直ちにVPの実現の有無を確認することができない。しかし、“一会儿”の場合、表す時間量が小さく、時間的伸縮性の幅が狭いため、VPの実現時点が「今」から近い未来として設定されやすく、その実現の有無を狭い時間幅で確認可能である。これに対し、“一阵（子）”の場合、表す時間量が大きく、時間的伸縮性の幅が広いため、実現時点の範囲がより広く・曖昧に設定される傾向にあり、VPの実現の有無が確認可能になるまでの時間幅が広がる。言い換えれば、「未来」に起こり得るVPと「今」との時間的間隔が短いほど検証が容易になり、VPの実現の有無が確認しやすくなる。

例えば、“（等/过）一会儿（再）见”という発話において、“见”というVPの遂行は

常に保証されるわけではない。しかし多くの場合、発話者は VP の遂行を確度の高いものとみなし、短い時間的間隔で実際に実現されることを予期したうえで該当表現を使用するため、VP の実現が相対的に見込まれることになる。したがって、“一会儿”の持つ主観的時間量の上限については、VP の現実的な遂行性が相対的に強く見込まれ、確認可能な近い未来の範囲内に設定されると想定される。

一方で、4.1.で述べたように、“等/过一阵（子）（再）VP”では、極端な場合、VP の実現自体が見込まれないケースもあり得る。“移民”を再び例にとれば、“获批移民签证”のような、主観的に時間量のコントロールが及ばない出来事も含まれるため、VP が未来のどの時点で実現するかという見通しが立てにくい。このように、“一阵（子）”を用いる場合、VP の実現時点の範囲は“一会儿”の場合よりも広く・曖昧に設定される傾向にある。

5. 主観的時間量と“等/过”のアスペクト特徴との整合性

“一会儿”“一阵（子）”のような時間量を表す表現において、“等/过”の生起のあり方がどのように異なるかを、“等/过”のアスペクト的特徴（陈平 1988）の観点から検討する。

〈待つ〉を表す“等”および〈過ごす〉を表す“过”は、いずれも［＋持続］という意味特徴を共有する。具体的には、“等”のアスペクト的特徴は[＋持続][＋静的][-完成]であり、“过”は時間詞を目的語にとる場合、“从一个时间移到另一个时间”“经过某个时间”（曾小红 2004:10）を表すことから、[＋持続]の点で“等”と共通している。したがって、時間量を表す NP を目的語にとる場合、主観的時間量が大きく、発話時点から実現時点までの範囲がより広い NP ほど、後続事態の実現時点が「今」から比較的遠い未来として設定されやすく、“等/过”との結びつきが強固になり、そのアスペクト的特徴が顕在化する。これにより、“等/过＋時間量を表す数量詞 NP”という構造における動詞と NP の整合性が高まり、構造の安定性が増し、動詞の生起義務性も高まると言える。その反面、NP の主観的時間量が小さく、後続事態の実現時点が「今」から近い未来であるほど、動詞のアスペクト的特徴は顕在化しにくくなる。ただし、“一秒”や“一分钟”のような客観的時間量の場合は時間の経過が顕在的に意識されるため、極端な短時間であっても“等/过”による持続性の支えを必要とする。

以上の議論から、主観的時間量が大きい NP ほど、動詞“等/过”との結びつきが高まり、生起が義務的になると結論づけられる。一方で、“一会儿”のような主観的短時間を表す NP は、発話時点から後続事態の実現時点までの時間的間隔を短いものとして提示するため、“等/过”が有する［＋持続］という意味特徴とは必ずしも整合しない。その結果、“一会儿”は“等/过”を介さずに後続事態の実現時点を指定する時間副詞的用法を成立させやすいと推測される。

なお、小さい時間量を表す表現であるほど、“等/过”を介さずに後続事態の実現時点を指定しやすいという傾向は、“一会儿”以外の短時間表現にも見られる。例えば、“一瞬间”“一刹那”“眨眼的功夫”のように極めて小さい時間量を表す表現は、“等/过”を伴わずに後続事態の急速な成立を表すことができる。

（9）当敌人掩护炮击和机枪扫射一小时后，指挥所的第一班长，被敌人弹片射入左胸，（*等/*过）一瞬间，班长用手按住流出鲜血的左胸，一跃而起，……
（CCL :《人民日报》1950）

（10）好像有人在船只上纡缓地拨着浆，（*等/*过）一刹那，声息又全归于岑寂了，祥林底阴沉的叫卖声在空间震荡了一会儿，于是自己在水里轻轻移动的脚步声又波波地响了起来。（CCL :《文丛》（创刊号）1937）

（11）水头舔到之处，房屋、堤坝、牲畜……（*等/*过）眨眼的功夫全没了踪影。
（CCL：《人民日报》1991）

例（9）（10）（11）は、時間量が極端に小さい場合、“等/过”によって時間の経過を明示しなくても、後続事態の成立時点を直接指定しうることを表している。この点は、“一会儿”が“等/过”を介さずに時間副詞的に用いられることとも整合的であると考えられる。

コーパス

北京大学中国语言学研究中心コーパス, https://corpus.pku.edu.cn.

参考文献

陈平 1988. 论现代汉语时间系统的三元结构,《中国语文》: 第 6 期:401-422 页.
吴春相 2006. 《现代汉语时量范畴研究》, 上海师范大学博士学位论文.
曾小红 2004.《汉语“过＋宾”结构的多角度分析》,湖南师范大学博士学位论文.

“一 V”形式の描写機能について

閆佳祺
東京科学大学　非常勤講師

０.はじめに

中国語においては、“一 V”形式の意味・機能について、条件関係や時間的な前後関係などといった前後の事態の関係を表す形式と説明することが多い。しかし、実際の用例には、次の（1）（2）のように、後続事態との関係を構成するよりも、動作・変化そのものを描写することに用いられる用例も存在する。

（1）直子在我额头轻轻一吻，身子一滑下床离去。（林少华訳《挪威的森林》）

（2）为更实际的表示自己的快乐，他买了个冻结实了的柿子，一口下去，满嘴都是冰凌！扎牙根的凉，从口中慢慢凉到胸部，使他全身一颤。（老舍《骆驼祥子》）

吴春仙（2001）では“一 V”節に描写機能があることを指摘しているが、その描写機能がどのように生じるのかについては論じられていない。そこで、本稿ではなぜ“一 V”形式にはこのような描写機能を持ち得るのか、アスペクトの観点からその仕組みを考察する。

１.先行研究

動詞に前置する“一”に関する研究において、アスペクト的特徴に着目する記述は王力（1944/2015:262-263）にさかのぼる。同書では、以下のように述べられている。

凡行为之经过时间很短，突然而动，突然而至者，也可用“一”字表示。（行為の経過時間が非常に短く、突然起こり、突然生じるものを「一」で表すことができる（筆者訳））

その後、アスペクトの観点から“一（V)”の特徴を論じる研究として、詹开第（1987)、殷志平（1999)、島津（2006)、陈光(2003)が挙げられる。

・詹开第（1987）：短い動作や変化の完了・出現、および後続する結果や状態の前触れ
・殷志平（1999）：“始点体”（開始点のみを示し、開始後の継続・終了を問題としない）
・島津（2006）：一種の「点」的事象（「事象の開始部分の最小量（＝点）を取り出す」）
・陈光(2003)：“瞬时体”（動作・行為の瞬時の完了と結果の発生可能性）

一方、“一（V）”の文法的・意味的機能に着目した研究として、島津（2011）を取り上げる。

・島津（2011）：事象を個別化する機能を担い、「事柄の生起」を表す

２.本稿の立場

本稿では、先行研究の議論を踏まえ、“一（V)”には、後続する動詞（句）の類型によって、ある具体的な動作を一つのまとまりのある瞬時的動作、またはある動作行為が実現する瞬間を、点的な出来事として切り出して提示する機能があると考える。そして、このような機能が、A.動作・変化そのものを描写する場合と、B.後続する事態との関係を構成する場合とにおいて（以下「A 類」「B 類」と呼ぶ)、文中でどのように働くのかを考察する。

A 類と B 類を区分するには、“一 V”が用いられる前後の文脈を考慮する必要があると考え、人物の動作や身体・心理の変化などが具体的に描かれる小説を分析対象とする。分析資料には老舍の長編小説《骆驼祥子》を用いる。

３.研究方法

３．１ “一 V”形式の用法による分類

本稿では、吴春仙（2001）および閆佳祺（2024）の用法分類[1]をもとに、“一 V”の用例をA類とB類に分類する。また、A類とB類の中間的な性質を持ち、明確に分類できない用例についてはC類（複合）として扱う。吴春仙（2001）、閆佳祺（2024）の分類項目を内容に基づいて大まかに対応させると、次の表１のようになる。

吴春仙（2001）	閆佳祺（2024）	本稿
描写(后续动作的伴随动作) ①	連続する動作の描写	A. 描写類
连续动作中的一个 ②		
致使原因	きっかけ ③	B. 関係構成類
动作（后分句是结果）	発見	
假设	仮定 ④	
	反復・習慣 ⑤	
	時 ⑥	
	起点	
	簡単達成 ⑦	

A類：

①後続動作に伴う動作：（1）

②一つの独立した動作[2]

（３）拉出车来，在固定的“车口”或宅门一放，专等坐快车的主儿；(俥を出すと、所定の駐車場かお郡の門前に置いて、快速なのをご希望の客をじっと待つ。[飯塚]）

B類：

③きっかけ

（4）大家都正看着小文——曹家的小男孩——洗澡呢，一见这个玩艺都憋不住的笑了。(みんなは小文——曹家の小さい男の子——が風呂をつかっているのをみているところだったが、この玩具をひと目みると思わずふき出してしまった。[飯塚])

④仮定

（5）骆驼的价值全在四条腿上；腿一完，全完！（駱駝の値打ちは全くその四本の足にあるので、足がだめならもうおしまいだ。[飯塚])

⑤反復・習慣

（6）每逢战争一来，最着慌的是阔人们。他们一听见风声不好，赶快就想逃命;(戦争になるたびに、一番あわてるのは金持ち連中である。彼らは形勢がわるいとみると、いそいで避難を考える。[飯塚]）

⑥時

（7）他有力气，年纪正轻；所差的是他还没有跑过，与不敢一上手就拉漂亮的车。(彼には力がある、年も若い。ちがいがあるとすれば、走った経験がないということが、はじめから立派な俥を借りてひくことを躊躇させた。[飯塚])

⑦簡単達成

（8）及至把东西作好，她一吃便是两三大碗。(食いものができると、彼女は一ぺんに大きなお碗で二、三杯たいらげる。[飯塚])

C類：⑧複合

（9）(不知道什么工夫，小福子进来了，立在外间屋的菜案前，呆呆的看着他。)
他猛一抬头，看见了她，泪极快的又流下来。(彼はにわかに頭をもたげて彼女を見ると、涙がとめどもなく流れてきた。[飯塚])

---

[1] 閆佳祺(2024)における「発見」と「きっかけ」は、いずれも“一 V”によって後続する事態の発生や発見の契機が提示される用法であり、機能上の差異が小さいため、本稿では「きっかけ」に統合する。また、「起点」と「時」は、いずれも“一 V”によって後続する事態の時間的位置が示される用法として捉えられるため、本稿では「時」に統合する。

[2] ②には、（２）のような動作が連続していない例も含むため、本稿では「一つの独立した動作」とする。

３．２調査手順と調査結果

まず、小説の原文から“一 V”形式をすべて抽出し、考察対象外の用例[3]を除外する。次に、除外後に残った用例を、A 類、B 類、C 類に分類し、それぞれの特徴を考察する。

原文における“一 V”形式は 216 例であった。考察対象外の用例を除外した結果、有効な用例は 187 例となった。A・B・C 類の分類結果を以下の表 2 に示す。

表 2 小説《骆驼祥子》における“一 V”形式の分類結果

A 類	B	C 類	計
27（14.44%）	145(77.54%)	15(8.02%)	187(100%)

４．“一（V)”の文中における働き

４．１“一 V”における“V”の表す事象の類型

４．１．１A 類について

A 類における“一 V”形式に用いられる動詞・形容詞を以下に示す。

（10）一＋動詞：一动/一笑/一惊/一碰/一指/一放/一振/一颤/一摇动/（毛孔）一收缩/一哆嗦/一闭眼/一转身/一拿腰/一努嘴

（11）一＋形容詞：一亮/一软/一静/一痛快

A 類の“一 V”形式は、主に（１）（２）（３）のように人物の身体動作・表情変化・生理反応・心理状態などを描写する場合と、(12）のように環境の変化を表す場合に用いられる。前者は、吴春仙（2001）が描写機能を持つ“一 V”節の“V”について行った観察結果と基本的に一致する。

（10）でみるように、A 類の動詞の一特徴としては、動作の幅が比較的小さく、ごく短い時間で完了する、視覚的に捉えやすい身体動作・表情変化・生理反応などを表すものである。“一”を前置することで、その動作が一つのまとまりのある瞬時的動作として提示され、叙述において、動作や変化をより鮮明に際立たせるとともに、一瞬の動作を切り取って提示する「クローズアップ」のような効果を生じ、文章にメリハリを与え、描写効果がもたされると考えられる。

また、(11）を見ると、これらの形容詞は、視覚・触覚・聴覚・身体感覚を通じて直接知覚することができ、かつ短時間のうちに変化し得る状態を表すものである。“一”を前置することで、状態変化が成立するその瞬間を切り取って提示することができ、叙述における画面感・動態感を高めることができる。(12）(13）を比較してみよう。（12）では、“一”によって、形容詞“静”が表す状態への移行、すなわち状態変化が成立した瞬間が鮮明に提示され、描写効果がもたらされると考えられる。(13）にも“突然”を用いているが、静寂への変化を瞬間的なものとして凝縮して捉えるという点では、(12）に及ばない。

（12）忽然一静，像林中的啼鸟忽然看见一只老鹰。(その場がしいんと静まった。あたかも林でさえずる小鳥の前に、鷹が現われたようだった。[市川・杉本])

（13）树林里突然静了下来，苏樱含笑瞧着小鱼儿，道:“……”。(BCC：古龙《绝代双骄》)

(林の中は突然静かになり、蘇桜は微笑みながら小魚児を見つめ、「……」と言った。(筆者訳))

[3]“肉包子打狗，一去不回头”のような固有表現、“这么/这样一来”、および“一 V”形式が名詞性成分として用いられるものを除外した。

４．１．２B 類について

A 類に対し、B 類における“一 V”形式は多様であるが、特に以下の二つの類型が多く見られる。

（13）感知・認知を表すもの（145 例中 39 例、26.89%）

一想（到/起/起来…）/一思索/一盘算/一看（见/到…）/一瞧/一听（见…）

（14）移動・位置変化を表すもの（145 例中 31 例、21.37%）

一进去/一进…/一出去/一出来/一出…/一回来/一搬回去/一被拉去…/一到…/一拉到…/一上来/一上…/一下…

（13）のように、「見る」「聞く」「考える」「計算する」などは、本来、一定の時間幅を持つ動作行為であるが、“一”を前置することで、感知・認知が成立した瞬間を、一つのまとまりのある点的な出来事として切り出して提示することができる。また、感知・認知を表す事象は、状況の把握を表すものであり、その結果として後続する行動や心理変化が生じる場合には、“一 V”形式は、後続する事象の「きっかけ」を表す用法に用いられやすいと考えられる。

（15）样子早就有点后悔，一听这个，更难过了。（祥子はとっくに後悔していたので、そうきくと一そうたまらなかった。［飯塚］）

また、（14）における“出来”“进去”“到”などのような“点结构”動詞（郭锐 1993）は、“一”を前置することで、位置変化が成立する瞬間を切り出し、一つの時点・きっかけとして提示することができる。それにより、後続する事象をその成立時点に近接して生じるものとして捉え、両者の間に時間的に緊密な関係を構成することができると考えられる。

（16）把骆驼出了手，他可以一进城就买上一辆车。（駱駝を売ることができれば、町に着くなり車を手に入れることができるのだ。［立間］）

４．１．３ C 類について

C 類の動詞・形容詞は A 類と共通する特徴を持ち、描写機能を有する“一 V”には、表される事象に共通性が見られる。

（17）一＋動詞：一动/一笑/一碰/一贴/一拧/一撩/一撩/一撒手/一抬头

（18）一＋形容詞：一亮/一软/一凉/一活便

４．２“一 V”の文中における位置の自由度

4.1 で確認したように、A 類 C 類における動詞は、基本的に身体動作・表情変化などを表す単音節動詞や裸動詞である。陈光（2003）では、このタイプの“一 V”形式が“可结句”という性質を有すると指摘している。一方で、B 類の“一”に後続する述部は、目的語や補語を伴うものが多く見られる（145 例中 91 例、62.75%）。このタイプの“一 V（O/C）”形式は“不可结句”と考えられる。（19）（20）と（21）を比較してみよう。

（19）由镜子中看到祥子进来，她很快的转过身来，向他一笑。（鏡のなかで祥子を見ると、彼女はくるりと向き直り、にっこり笑いかけた。［市川・杉本］）

（20）（及至人们问到，“认识呀？”）他就又像装傻，又像耍俏的那么一笑，使人们不知怎样才好。（彼はやはり少し足りないような、またせせら笑うような格好でにたりとして見せて、むしろお客のほうを途方に暮れさせてしまうのであった。［中山］）

（21）他一跑起来就不顾命，（早晚是得出点岔儿。）（祥子ときたら、駆けだしたがさいご、やみくもなんですもの。［市川・杉本］）

（19）では、“一笑”が文末に置かれ、文が終結しているのに対し、（20）では、“一笑”の後に「,」が置かれ、後続する事態につながっている。つまり、このタイプの“一 V”は必ずしも後続する事態を必要とせず、文中における出現位置の自由度が高く、文中・文末のいずれにも現れ得る。一方で、（21）では、“一跑起来”のような“一 V（O/C）”形式にはこのような“可结句”の性質を持たず、文を終結させることができない。このような特性を持つ節には後続する事態の存在を示唆する機能を持ち[4]、後続する節との間に暗黙の結びつきを形成する。したがって、このタイプの“一 V”は、後続する事態の条件やきっかけ、時などを提示するものとなりやすい。詹开第（1987）の“一 V”の基本的な意味を「後続する結果や状態の前触れを表す」という指摘もこのことを指しているものと考えられる。

５.おわりに

以上では、“一 V”における“V”の表す事象の類型と、文中における位置の自由度の観点から、“一 V”が、A.動作・変化そのものを描写する場合と、B.後続する事態との関係を構成する場合と、C.複合的な場合において、文中でどのように働くのかを考察した。

また、これまで日本語との対照を通じて、A 類・C 類の“一 V”、すなわち描写機能を有する“一 V”を日本語にする際に、擬音語・擬態語などの状態副詞を用いたり、付加したり訳す例も一定数見られた（42 例中 32 例、76.19%）。

（22）走到小店门口他一软就坐在了地上，昏昏沉沉的坐了好大半天，头上见了凉汗。（宿の門口まで歩くと、彼はぐたっと地面に坐ってしまい、眼がまわってながいこと坐ったまま、ひたいにべっとり冷汗をかいた。［飯塚］）

（23）“我看看!”孙侦探笑了，一把将瓦罐接过来，往墙上一碰。（「貸しな」刑事はにやりとしてうけとるなり、バシッと壁に叩きつけた。［立間］）

このことから、描写機能を有する“一 V”は、日本語においてそれに対応する特定な表現がないと考えられる。原文の表現効果を再現するために、擬音語・擬態語などといった描写機能を持つ語句を用いて表現する工夫がなされていることがうかがえる。

参考文献

陈光 2003.〈准形态词“一”和现代汉语的瞬时体〉,《语言教学与研究》第 5 期：17-24。
郭锐 1993.〈汉语动词的过程结构〉,《中国语文》第 6 期：410-419。
王力 1944.《中国语法理论》。北京：中华书局，2015。
吴春仙 2001.〈“一・V”构成的不完全句〉,《世界汉语教学》第 3 期(总第 57 期)：46-52。
殷志平 1999.〈动词前成分“一”的探讨〉,《中国语文》，第 2 期：116-121。
詹开第 1987.〈口语里两种表示动相的格式〉,《句型和动词》，语文出版社。
閆佳祺 2021.「中国語における接続語のゼロ形式について」.東京外国語大学修士論文。DOI：10.15026/117313
閆佳祺 2024.「“一 V”形式が“就”を伴う・伴わない場合の機能・用法―小説の日中対訳を通して―」,『東京医科歯科大学教養部研究紀要』54：55-74。
島津幸子 2006.「“一 A 就 B”形式の構文的意味」,『お茶の水女子大学中国文学会報』25：19-34。
島津幸子 2011.「動詞に前置される“一”の文法機能と意味」,『中国語学』258:194-212。

用例出典（[　] 内は略号）

舒乙选编 1999.老舍《骆驼祥子》,《老舍小说精编》，漓江出版社。
飯塚朗訳 1960.老舍『駱駝のシャンヅ』，平凡社。［飯塚］
市川宏・杉本達夫訳 1969.老舍『駱駝祥子』,『世界文学全集』第 35 巻。［市川・杉本］
立間祥介訳 1980.老舍『駱駝祥子』，岩波書店。［立間］
中山高志訳 1990.老舍『駱駝祥子』，潤文社。［中山］

[4] 閆佳祺（2021:60）では、「言語単位レベルの低い単位が前項として現れたとき、それは一種の「未完結サイン」ともいえる。聞き手（読み手）に後項に合わせて総合的に処理しなければ論理関係がわからないことを意識させる働きがある」と述べている。

実例分析に基づく“能 V 得 C”の使用環境と意味機能

郭嘉瑋
東京大学　大学院生

1、はじめに

現代中国語の可能表現には、能願動詞と可能補語を用いる形式がある。しかし、以下に示すように、実際の言語運用においては、能願動詞“能”と可能補語構造“V 得 C”が共起した“能 V 得 C”[1]構造（V は動詞、C は補語を表す）も観察される。

（1）她懂得用点心思才能拢得住这个急了也会尥蹶子的大人，或是大东西。
（老舍《骆驼祥子》）
（2）假如没有这种勇气，怎么能谈得上改良社会，造福人类。（张清平《林徽因》）
（3）…提什么样的建议都行（中略）…只要能想得出来就行。（2001 年 7 月《人民日报》）
（4）但愿患者都能看得起病，不再受高价医药之苦、之害。（2001 年 3 月《人民日报》）

本発表は、CCL コーパスから収集した実例分析に基づき、現代中国語における“能 V 得 C”構造の分布傾向や使用環境、およびその意味機能について考察する。

2、先行研究

先行研究では“能”や“V 得 C”それぞれの意味機能などを個別に扱った研究が多いが、併用形式の“能 V 得 C”に関する考察はそれほど多くない。

【“V 得 C”について】 否定形との非対称性が大きく、平叙文での出現は稀で、疑問・仮定等の未然文や対挙文に制限される。（刘月华 1980、吴福祥 2002、沈家煊 2005）

【“能”について】能力・条件・推測など多岐にわたり、動的・義務的・認識的モダリティの 3 種類に分類される。（刘月华等 1983、彭利贞 2007）

【“能 VC”と“V 得 C”の相違】“能 VC”は主観的判断や心理を表出しやすく、用いる動詞についての制約が少ない。（杉村 1979、张黎 2003、沈清淮 1998）

【“能 V 得 C”について】

① 余剰形式（刘月华 1980）

我们还发现“V 得 C”，特别是“能 V 得 C”多用于反问（三十五例“V 得 C”中有二十二例，八例“能 V 得 C”中有七例）…

这是“能(可以)VC”与“V 得 C”双管下的混合形式，“能(可以)”是羡余成分(redundant)。从语气的肯定程度来看，“能(可以）V 得 C”介于“能（可以）VC“与”V 得 C”之间。

② 客観的可能性（大内田 1979）

…能願動詞「能」「可以」と可能補語で、動作の可能性を二重に表現している。ただし、

[1] 本発表では“V 得了”を“V 得 C”の一種として見なす。“V 得/不得”は主に心理的不可能や不許可（義務的モダリティ）を表し（福田 2013）、“V 得/不 C”、“V 得/不了”の表す動的モダリティと認識的モダリティの意味と異なるため、本発表では議論の対象としない。

この場合の能願動詞「能」「可以」は、具体的な場合の「客観的な可能性」を表わすものに限られる。それは、客観的な可能性を表わす点で可能補語の意味と共通するためである。この文型の特徴は、反語文と疑問文に多く用いられることである…

③ 話者の判断表明（杉村 1979）

「能 V 得 C」は反語文に多用される。

「能」をかぶせる理由は、話者が自分の思考、論理の展開の結論として、「V 得 C」によって表わされた状態の存在は確かに可能だと強く主張したいがためである。

「能看见」「能看得见」における「能」は、「看见」という出来事の実現、および「看得见」という状態の存在が可能であるとする話者の判断を表明する役割を担っているに過ぎない。

3、コーパス調査から見る出現環境の傾向

CCL コーパスで検索式“能(v)得(X)”を用いて検索を行い、2000～2020 年の期間から 150 例を抽出した。対象外となる 57 例（“能取得”、様態補語など）を除外し、“能 V 得 C”の用例が 93 例得られ、大きく以下のようなパターンに整理できる。

A. 疑問・反語文　39 例　　（cf. うち B の a と同様の定型表現 22 例）

B. 平叙文　54 例　　（a～c には複数のパターンに該当する用例が含まれる）

a、“买得起”のような“V 得 C”は存在するが VC が存在しない定型表現　10 例

b、文中に否定辞が共起する例　14 例

c、複文環境（省略を含む）に出現する例　31 例

只有/唯有…才…　14 例　　只要…就…　6 例

连/就算…也/都…　5 例　　…时/的时候　4 例

如果/要…　3 例　　为了…　3 例

d、その他　4 例（一定能 1、准能 1、希望能 1、必须 1）

まず、疑問・反語文が高い割合を占めている点は、先行研究でも指摘されている通りである。この傾向は、認識的モダリティを表す“能”および“V 得 C”自体の使用の大多数は、疑問・反語文において見られる（刘月华 1980、王伟 2000 など）という特徴と関連している。疑問・反語文が提供する非事実的な文脈環境は、可能の属性を表す“V 得 C”と、その成立の可能性を問題化する“能”の双方にとって親和性の高い環境であると言える。“能 V 得 C”は、疑問文においては状態の成立の可能性を聞き手に問いかけ、反語文においてはその可能性を反問することで実質的な強い否定を表出する役割を果たしている。

しかしながら、本発表の調査に基づけば、平叙文での用例も過半数を占めており、単独の認識的モダリティを表す“能”および単独の“V 得 C”とは異なる傾向を示している。平叙文においての使用は、まず、対応する VC 形式を欠き、“V 得 C”が語彙化したものがある。例えば、例（4）の“能看得起病”のほか、“能说得过去”のようなものが該当する。

次に、文中に否定辞が共起する例は、“不一定”や“不是”、“没”などの否定表現が“能 V 得 C”の外側に位置する文である。以下に示す例では、否定語が“能”だけに作用し、“V 得 C”という可能状態に達することの成立について否定的な判断を行なっている。

（5）虽说月全食是一种常见天象，但不一定地球上所有的人都能看得到。

（2001 年 1 月《人民日报》）

（6）重复打榜的每个“金曲榜”都标榜自己的权威性，而问及哪个最具权威性,却没人能说得清。（新华社 2001 年 9 月份新闻报道）

（7）…头埋在双手中吸泣起来。“他觉得都是他的错。”她摇着头。“我没能帮得上忙，这不是他的错。”（朱学恒《龙枪编年史》）

例（5）は可能性の全否定（“看不到”）を回避し、可能状態の実現について不確定な判断を表す。一方、例（6）の“没人能～”は、否定を伴う主語によって可能状態の存在そのものを全面的に否定している。例（7）の“没能帮得上忙”は、“没能帮上忙”とは異なり、「実際に助けた」ことではなく、“帮得上忙”という潜在的な可能状態を達成目標としている。また、その状態の実現に向けた意志が存在することを前提とし、「能力や条件が許さず、目標状態（“V 得 C”）が実現されなかった」という遺憾の意味を生み出している。

このような文中に否定辞が共起する例は、疑問・反語文の例とも関連している。例えば“没人能说得清”は疑問文の返答となり得ると同時に、意味的には反語文（例:“谁能说得清呢？”）と同様の機能を有している。したがって、b 類と疑問文、反語文はいずれも、“V 得 C”という可能状態を一つの命題として立てた上で、上位の意味層（“能”）から判断を行う構造であると言える。

疑問・反語文や定型表現、文中に否定辞が共起する例を除けば、平叙文における“能 V 得 C”のほとんどが条件節などを伴う複文環境に出現している。この分布傾向は、“能 V 得 C”は条件文など事態の成立条件を提示・強調する語用環境と高い親和性を持つ構造であることを示唆している。次節では、“能 V 得 C”が条件節などを伴う複文環境において担う意味機能について、実例に基づいて具体的に分析する。

4、複文環境における“能 V 得 C”の意味機能

調査で見られた複文環境に出現する“能 V 得 C”の例は、必要条件、充分条件、仮定、時間条件の提示や、極性強調、目的の説明などといった機能を持ち、いずれも事態の成立条件を明示的に提示するという意味特徴を有するものである。

（8）人，就是要经历过满身的创伤才能开得见未来的路。（赖声川《一妇五夫》）

（9)只有守得住清苦,耐得住寂寞,抗得住诱惑,管得住小节,才能站得稳脚跟,立于不败之地。

(新华社 2001 年 9 月份新闻报道)

（10）只要他能跟得上国家队的要求，无论国家青年队还是青岛颐中队，都会受益。

（2001 年 5 月《人民日报》）

（11）各名胜景点都挂有用汉语和英语两种文字写的牌子,让外国人也能看得明白。

(新华社 2001 年 9 月份新闻报道)

（12）好多人在默默无闻地时候能耐得住寂寞去潜心研究，而一旦出了名后便浮躁了起来。

(新华社 2001 年 9 月份新闻报道)

（13）如果我们的牧民和牲畜都能像你们这样定居下来，再大的雪灾也能抗得住。

（2001 年 1 月《人民日报》）

（14）牛志浩虽然常有些小九九，退下来后为了在黄玉芝的女儿面前能站得起来，充当个体户的顾问，上了当，但还不失去正直和倔强…　　（2001 年 8 月《人民日报》）

例（8）（9）の“（只有…）才…”は必要条件を表し、本調査で最も多く見られた複文である。“能 V 得 C”が主節に置かれ、従属節で示された条件が満たされる場合にのみ“V 得 C”で表す望ましい状態が実現可能となることを明示している。例(10)の“只要…(就…)”は充分条件を表し、事態成立に必要な条件のハードルの低さを提示している。従属節で提示される容易な条件を満たしさえすれば“V 得 C”という目標状態が達成できることを示し、聞き手に対する保証を与える機能を持つ。例（11）は極端な例を示す文である。「外国人」という本来成立が困難な対象においてすら“看得明白”（読んで理解できる）という状態が実現可能であることを示すことで、標識読解の容易さを強調している。例（12）は特定の時期や状況（無名の時）を設定し、その環境の下で主体が発揮する恒常的な属性（孤独に耐えられる）を記述し、動作主の研究態度に対する話し手のポジティブな評価を表している。例（13）は、定住するという事態を仮定し、その条件が満たされれば「どんなに大きな雪害が来ても耐え切ることができる」という潜在的な可能状態が成立することを示している。例（14）は目的を表す節に“能 V 得 C”が出現している文である。“站得起来”（尊厳を確立できる）が目標状態として動作主に望まれており、その後に続く行為の心理的背景や動機として提示されている。

以上見てきたように、“能 V 得 C”が出現する複文は、いずれもその従属節が条件、目的、仮定、時間の限定といった未実現の事態や背景状況を提示している。その事態や状況の成立に伴って結果状態の実現可能性が条件付けられることを明示する。“能”を伴うことによって、「その条件が満たされさえすれば」や「きっとこの結果になる」といった判断の意味合いが生じる。したがって、複文環境も疑問・反語文と共通して、事態の成立条件を取り立てて成否を述べるという、同一の発話動機に基づく使用と捉えられる。

なお、今回抽出された平叙文の例は、いずれも“V 得 C”の示す状態が一般的に望ましいとされるもの、あるいはその文脈において動作主が望んでいる結果である点にも着目したい。つまり、“能 V 得 C”は単なる客観的な可能性・能力の提示にとどまらず、その状態に対する話し手の肯定的な評価、あるいは動作主のそれを実現させようとする意図を本質的に帯びていると考えられる。この状態に向かう意志が前提に存在することこそが、条件文や仮定文などの複文環境において、望まれている帰結の成立やその成立条件を明示するという発話意図と強く結びついていると言えよう。

5、モダリティ体系における能願動詞と可能補語の機能分担

本節ではモダリティの階層性に関する理論的研究を参照しつつ、中国語の可能表現体系における能願動詞と可能補語の機能分担について分析を提示したい。

Cinque1999:76–107 の通言語的研究によれば、認識的モダリティは時制より上位に位置するのに対し、根本的モダリティ（Root Modality、本発表の動的モダリティを含む）は時制より下位に配置されるという普遍的な階層構造が指摘されている。中国語のモダリティ体系についても、彭利贞、刘翼斌 2012 は主観性と客観性の視点から、能願動詞の連用順序には「認識的モダリティ＞義務的モダリティ＞動的モダリティ」という固定された階層が存

在することを指摘している。内側に位置するモダリティほど客観的であり、外側に位置するモダリティほど主観性が高くなるという。同じモダリティを表す能願動詞も、主観と客観の度合いが異なるものがあると指摘している。

能願動詞と可能補語はいずれも「可能」を表すものの、異なる階層に位置するモダリティ形式であると考えられる。“能 V 得 C”の文においては、“V 得 C”は内側に位置し、「V の行為や事態によって C の結果状態が実現し得る」という動的モダリティの意味を表し、対象が有する潜在的属性といった客観的側面を示す。一方、“能”は外側に位置し、“V 得 C”という命題の成立に関わるあらゆる条件を総合的に考慮した上で、その成否に対する話し手の判断という認識的モダリティの機能を担う。

このようなモダリティの階層構造を有することには、平叙文における“能 V 得 C”の発話意図が大きく関連してくる。事態の潜在的可能性を示す“V 得 C”にさらに“能”を付加すると、「潜在的属性としての可能状態が、具体的な環境条件の制約において実際に実現し得るか否か」という話し手の主観的判断を明示化する機能を果たすのである。

以上の考察から、“能 V 得 C”は単なる重複ではなく、“能”と“V 得 C”がそれぞれ異なるレベルのモダリティ機能を分担していると解釈できる。「事態に内在する潜在的可能性」と「条件に基づく話し手の判断」を結びつけ、事態達成の条件およびその起こり得る結果に対する話し手の判断を明示的に示すための方法である。単なる「可能」の意味を表すのみであれば、能願動詞や可能補語の単独使用で十分であるが、“能 V 得 C”は疑問文、反語文、条件文など事態の成立条件を取り立てる発話環境によって動機付けられた構造であり、そういった環境に特化して用いられる表現であると言える。

参考文献

▲大内田三郎 1979「中国語の可能補語について」,『中国語学』226, pp. 48-58. ▲杉村博文 1979「能学好・学得好・能学得好」,『日本語と中国語の対照研究』4, pp. 16-37. ▲福田翔 2013『中国語の可能補語〈-得了:-不了〉と〈-得:-不得〉―可能とモダリティ』東京外国語大学博士学位論文. ▲刘月华 1980《可能补语用法的研究》,《中国语文》4, pp. 246-257. ▲刘月华，潘文娱，故韡 2001《实用现代汉语语法》（增订本）北京：商务印书馆. ▲彭利贞 2007《现代汉语情态研究》北京：中国社会科学出版社. ▲彭利贞，刘翼斌 2012《汉语的主观情态和客观情态》, *Chinese as a Second Language Research*, 1(2), pp.243-265. ▲沈家煊 2005《也谈能性述补结构“V 得 C”和“V 不 C”的不对称》沈家煊, 吴福祥, 马贝加主编《语法化与语法研究》北京:北京商务印书馆, pp. 185-207. ▲沈清淮 1998《“V 得 C”与“能 VC”的语义、句法比较》,《四川师范大学学报(社会科学版)》3, pp. 72-77. ▲王伟 2000《情态动词“能”在交际过程中的义项呈现》,《中国语文》3, pp. 238-246+287. ▲吴福祥 2002《汉语能性述补结构“V 得/不 C”的语法化》,《中国语文》1, pp. 29-40. ▲张黎 2003《“有意”和“无意”--汉语“镜像”表达中的意合范畴》,《世界汉语教学》1, pp. 30-39. ▲Cinque, Guglielmo. (1999). *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. New York: Oxford University Press. ▲詹卫东，郭锐，谌贻荣 2003, 北京大学中国语言学研究中心 CCL 语料库. <https://corpus.pku.edu.cn>

“来 VP”と有標ヴォイス構文との共起傾向

―ヴォイスの事態構造の観点から―

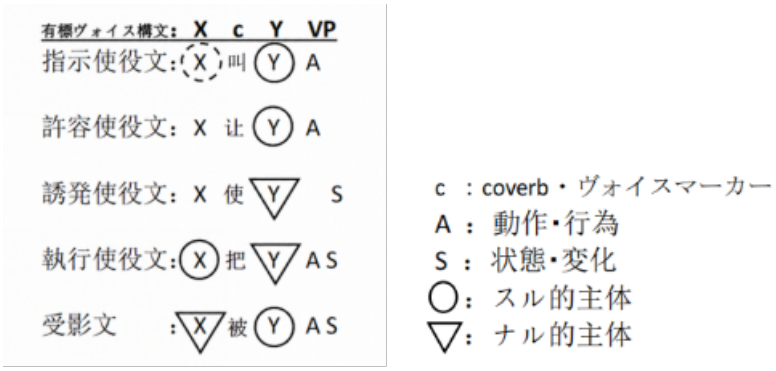
包新業
筑波大学　大学院生

1. はじめに

1.1 有標ヴォイス構文の分類

木村（2000；2012）は意味連鎖の視点から、共通の構文形式〈X c Y VP〉を有する中国語の有標ヴォイス構文を事態構造上のパラメータによって 5 類型に分類した。

表 1　木村（2012）参考



1.2 文法化した“来 VP”

有標ヴォイス構文の動詞句（VP）直前には移動・到着の意味が薄れ、後続 VP を実行する主体の選択、積極性を示す文法化した“来 f”が現れることがある。

(1)a.老师让小明回答问题。　b.老师让小明来回答问题。

1.3 先行研究

佐々木（1996）：

ⅰ．“来 f”は、受影文（被構文）の VP 直前に現れる文法化した“给”（以下“给 f”）と類似する文法成分である。

ⅱ．“来 f”は動作・行為と動作者の間に抽象的な方向性をもたらし、動作・行為に積極的に臨む動作者を前景化するため、動作者は省略（背景化）できない。(2)(3)

（2）a. 衣服被他给晾干了。　b. *衣服被 φ 给晾干了。

（3）a. 衣服被他来晾干了。　b. *衣服被 φ 来晾干了。

神谷（2012）：

ⅰ．“给 f”＋V 構造に対するコーパス調査の結果、全 466 例中 309 例（66.3%）が有標ヴォイス構文と共起し、そのうち執行使役文が 189 例、受影文が 115 例を占める。

ⅱ．已然の“给 f”＋V では動作対象が主題化される語順が典型であることから、動作主を主語に据える前置詞“给”の「起点指向」と対照的に、動作の着点から事態を叙述する「着点指向」を持つとする。

“给 f”と類似する文法的特徴を持ちながら、“来 f”と有標ヴォイス構文全体との共起傾向に関する先行研究は十分に行われてない。本発表は北京語言大学 BCC コーパスを用いて“来 f”と有標ヴォイス構文全体との共起傾向を調査し、事態構造〈X c Y VP〉の視点から考察を行う。

2. コーパス調査

2.1 ヴォイス構文別の共起頻度

コーパスに収録された 1950 年以降の中国語小説を対象とし、“叫・让・把・被”によって標記されたヴォイス構文と共起する“来 f”の用例 379 例を抽出し、木村（2012）の枠組みに参照して分類を行った。（誘発使役文は調査対象外）

【表 1】“来 f”と共起する有標ヴォイス構文の類型

ヴォイス構文タイプ	指示使役文	許容使役文	執行使役文	受影文	合計
用例数	167 例	207 例	4 例	1 例	379 例
割合	44.1%	54.6%	1.1%	0.2%	100%

【指示使役文】：167 例（全体の 44.1%）

（4）齐堆立刻点头，说：“好，刘大顺你去，我让机枪来掩护你!”。　　（魏巍《东方》）

【許容使役文】：207 例（全体の 54.6%）

（5）“…只有让人民来监督政府,政府才不敢松懈 ;只有人人起来负责,才不会人亡政息。”（王火《战争和人》）

【自薦型許容使役文】：109 例（許容使役文の 52.7%）

（6）…有一个年纪大一点的，他看着这个王曲军校的学生，是被“领袖至上”这一套法西斯教育浸透了的家伙，就对另几个同学悄悄说：“叫我来治他！”（李凖《黄河东流去》）

【執行使役文】：4 例（全体の 1.1%）

（7）女人却把脸来对着他的脸，并伸出舌头舔他的嘴。　　（莫言《怀抱鲜花的女人》）

【受影文】：1 例（全体の 0.2%）

（8）我英英是没出息的，几百里路跑了来，饭没吃上，水没喝上，倒叫你来奚落一场了！（贾平凹《浮躁》）

“来 f”は指示・許容使役文に強く偏って共起し、全用例の 98.7%を占める。執行使役文（1.1%）・受影文（0.2%）は極めて少数にとどまり、“给 f”の共起傾向とは相補的である。

2.2 X の明示性

【表 2】X の明示性

ヴォイス事態構造	明示的	割合	非明示的	割合	合計
指示使役	95 例	56.9%	72 例	43.1%	167 例
許容使役	68 例	32.9%	139 例	67.1%	207 例
合計	163 例	43.6%	211 例	56.4%	374 例

2.3 ヴォイスマーカーの選好性

【表 3】ヴォイスマーカー別の使用率

ヴォイス事態構造	“叫”	割合	“让”	割合	合計
指示使役	38 例	22.8%	129 例	77.2%	167 例
許容使役	6 例	2.9%	201 例	97.1%	207 例
合計	44 例	11.8%	330 例	88.2%	374 例

2.4 Y の人称別の共起傾向

【表 4】被使役者 Y の人称

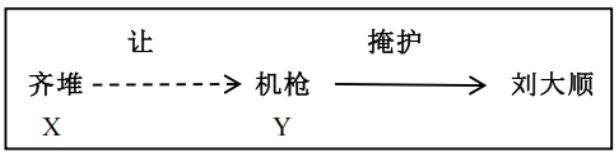
人称区分	指示使役文（167 例）		許容使役文（207 例）	
	例数	割合	例数	割合
一人称（単数・複数）	40 例	24.0%	125 例	60.4%
二人称（単数・複数）	24 例	14.4%	12 例	5.8%
三人称（単数・複数）	56 例	33.5%	35 例	16.9%
その他	47 例	28.1%	35 例	16.9%
合計	167 例	100%	207 例	100%

3. 考察

3.1 X の背景化

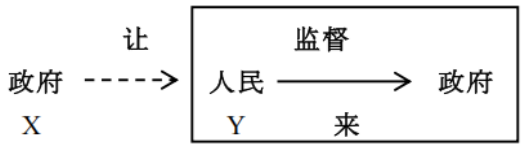
2.2 で見た通り、“来 f”と共起する指示・許容使役のうち、X が明示されない用例は全体の半数を超えて、56.4%を占める。特に許容使役では 67.1%に上る。一方、指示使役では 43.1%にとどまる。このことから、“来 f”と共起する使役文のうち、特に許容使役では X が背景化される傾向が強いと考えられる。

木村（2012）によると、指示使役では X が Y に対して積極的に働きかけ、Y に動作・行為を行わせる。そのため、使役者 X が明示的な場合が多い。【用例（4）参照】

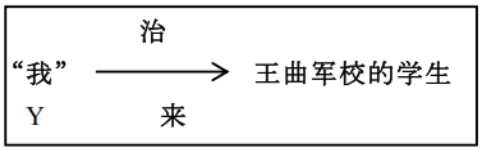


一方、許容使役文では X が Y の自発的な動作・行為を許し、消極的・不干渉的に関与するため、許容使役文の Y が前景化されやすくなり、X が相対的に背景化されやすくなる。この傾向は、動作・行為に積極的に臨む動作者の存在を前景化する文法機能を持つ“来 f”

によってさらに強まる。【用例（5）参照】



X の同定すら難しい自薦型の許容使役は、こうした動作者 Y の前景化と X の背景化の典型的な現れと考えられる。【用例（6）参照】



3.2　ヴォイスマーカーの選好性

2.3 で見た“让”と“叫”の偏りも、実はこの X の背景化と Y の前景化と関わる。木村（2012）により、執行使役以外の準動詞 c には同一形式を用いる「統合系」が存在するため、許容・指示使役文的事態は“叫”でも“让”でも表現されうる。

しかし“叫”はもともと「呼ぶ・呼び寄せる」を意味する動詞であり、“让”は「譲る」を意味する動詞である。ヴォイスマーカーとして文法化した後も、多少本来の語彙的意味の含意が残る。積極的に「呼びかける」“叫”より、消極的に「明け渡す」“让”の方が、動作者（Y）を前景化する“来 f”の文法機能との相性がよいと考えられる。共起例の指示使役と許容使役のどちらも“让”を用いる割合が多いのは、そのためである。

3.3　Y 中心的な事態把握

2.4 で確認した許容使役文における Y の一人称への偏りは、話者が Y の視点から事態を把握する傾向を示唆している。この傾向は、動作者を前景化する“来 f”の文法機能とも一致する。“来 f”が動作者としての Y を前景化する場合、Y は単なる使役の対象ではなく、事態を捉える際の認知的・視点的な中心となる。そのため、前景化された Y は話者の視点の置き所になりやすく、話者自身が Y となる一人称の形式とも結びつきやすい。

3.4　“来 f”の前景化機能と事態構造上の起点・着点

神谷（2012）の“给 f”＋V 構造に対する「着点指向」という分析は、有標ヴォイス構文と共起する“来 f”を考察するには極めて示唆的である。指示・許容使役文における Y は動作者であり、動作・行為の起点として捉えることができる。これを更に前景化する“来 f”（3.1－3.3）はいわゆる動作の起点から事態を捉える「起点指向」のマーカーと考えられる。この見方は、Y が動作・行為の起点であると同時に、その作用の着点にもなる回帰的な指示使役事態では、“来 f”との共起ができないという事実によって支持される。

（9）　妻子让我(来)整理一下明天要穿的衣服。　［不在“我”身上的衣服］

（10）妻子让我(*来)整理一下衣服再见人。　　［“我”身上的衣服］

指示・許容使役文の Y は動作・行為の起点（スル主体）であり、これは「起点指向」の“来 f”と両立するため、“来 f”と共起しやすい。執行使役文の Y は基本的に動作・行為の着点（ナル主体）であり、“来 f”の方向性と衝突するため、両者は共起し難い。

受影文の場合はやや異なり、元々〈ナル〉主体の X（動作・行為の着点）を中心に事態を捉える文であるため、動作者 Y（動作・行為の起点）が背景化されやすく、受事者 X（動作・行為の着点）が前景化される傾向がある。**例：衣服被他晾干了。→衣服被 φ 晾干了。**

この受影文の構文全体が持つ「着点指向」と“来 f”がもたらす「起点指向」の方向性が衝突するため、両者は共起し難い。（【表 5】参照）

【表 5】“来 f”の共起条件と各構文との関係

構文	Y の前景化	Y が動作・行為の起点	“来 f”との共起傾向
執行使役文	○	△	△
指示・許容使役文	○	○	◎
受影文	△	○	△

4. まとめ

以上の考察により、有標ヴォイス構文の VP 直前に共起する“来 f”は、動作・行為の起点から事態を捉える「起点指向」の機能を持つと考える。この見方は、Y が起点であると同時に着点にもなる回帰的な事態で“来 f”が共起できないことからも支持される。指示・許容使役文への強い偏りや、特に自薦型の許容使役文に見られる X の背景化と Y の前景化も、この観点から説明できる。一方、Y が着点である執行使役文や、構文全体が着点指向を持つ受影文とはほぼ共起しない。“来 f”と、同じ統語的位置を持つ“给 f”との共起傾向が相補的であるのは、前者が「起点指向」、後者が「着点指向」であるためだと考える。両者の関係性に関する考察と検証は今後の課題とする。

参考文献

神谷智幸（2012）「現代中国語における“给”構造の意味と機能」,『言語情報科学』第 10 号：1－17

木村英樹（2000）「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」,『中国語学』247 号：19－39

木村英樹（2012）『中国語文法の意味とかたち――「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』白帝社.

佐々木勲人(1996)「“被…给”と“把…给”―強調の“给”再考―」,『中国語学』243 号:65－74

荀恩东，饶高琦，肖晓悦，臧娇娇. 大数据背景下 BCC 语料库的研制[J]. 语料库语言学, 2016, 3(01): 93-109+118.

対象介詞“对”“对于”“关于”の機能分化

―置換条件に基づく一考察―

河原畑希久
立命館アジア太平洋大学　嘱託講師

1．問題提起

現代中国語の対象介詞“对”“对于”“关于”は、いずれも人・事物・事柄などの対象を導入する類義的な形式とされるが、同じ対象名詞と述語を保って介詞を置き換えても、置換の可否は一様ではない（呂叔湘 2010；黄伯荣・廖序东 2017）。

（1a）我们对你完全信任。（私たちはあなたを全面的に信頼している。）（呂叔湘　2010）
（1b）?我们对于你完全信任。
（2a）我对于这个问题了解得不太深。
（私はこの問題についてあまり深く理解しておりません。）
（出典:『シャドウイングで学ぶ中国語』）
（2b）?我对这个问题了解得不太深。

（1）では、対人的態度“信任”の対象“你”を“对”で導く場合に比べ、“对于”への置換が困難となる。一方、（2）の“这个问题”は“了解”の対象としても、発話の話題としても捉えられる。両組とも対象名詞と述語を変えておらず、問題は介詞が後続部分とどのような関係を構成するかにある。

本研究は、“对”“对于”、“对于”“关于”の置換可能条件・置換不可能条件を整理し、その分析を通して三介詞の機能分化を考察することを目的とする。収集例の置換対と中国語母語話者の容認性判断をもとに、①対象と共起述語・後続名詞との意味関係、②介詞句の位置と構造、③双方が容認される場合に残る解釈差の三点から分析する。さらに、日本語との対応を通して、単純な訳語対応では捉えにくい機能差を明らかにし、三介詞の語義的特徴を整理するとともに、「類義虚詞」教育への示唆を提示する。

2．先行研究

呂叔湘（2010）は、“对”と“对于”の用法は概ね共通するが、“对于”は“对”に置換できても、その逆には制限があり、特に人間関係では“对”を用いるとする。また、“关于”は関連する事物、“对于”は対象を示し、両義が重なる場合は双方可能とする。状語の“关于”は主語の前、“对于”は主語の前後に置けると指摘する。

黄伯荣・廖序东（2017）は三形式を「関与する対象を表す介詞」に分類し、“对”が方向づけや対象への態度・対応を表す場合、“对于”への置換が制限されるとする。また、“关于”と“对于”の意味機能・統語的位置の違いも指摘する。

木村（2012：i）は文法的意味と形態・構造との対応を、劉丹青（2013：75-77）は介詞が名詞句に意味役割を付与する機能を論じる。両者の議論は、介詞句の構造上の結合関係

を捉える視点を与える。

従来研究は三形式の差異を記述してきたが、二つの置換関係を共通の観点で比較し、双方容認時の解釈差まで検討する余地がある。本稿では“对－对于”“对于－关于”について、対象の種類、共起述語の意味、介詞句の結合先（述語・節・名詞）と統語的位置に着目し、24 組の容認性判断と自由記述から、置換困難の条件と三形式の語義的特徴を考察する。

3. 置換関係から見た対象介詞の機能分化

3.1 分析資料と調査方法

映画・テレビドラマ・新聞・小説・インタビュー・中国語教材等から収集した三介詞の用例 167 例（重複を除く）を分析資料とした。原例の語彙・語順を原則として保持し、対象介詞のみを替えた置換例を作成した。統語的位置の関与を調べるため、一部では介詞句を移動させた文も比較した。

本調査に先立ち、中国語母語話者 3 名に収集例・置換例の予備的な容認性判断を求め、調査項目を確認した。その後、普通話を主な日常使用言語とする中国語母語話者 10 名（全員女性：20 代 5 名、30 代 3 名、40 代 2 名。出身地・主な成育地域は東北地方 4 名、河北省 2 名、北京市 1 名、山東省 1 名、西南地方 1 名、地域未特定 1 名）を対象に、24 組 48 文の 5 段階容認性判断課題を実施した。4・5 点を容認、3 点を境界、1・2 点を非容認とし、同一回答者が対となる二文の双方に 4・5 点を付けた人数を「双方容認」とした。回答は 240 組分（480 評定）、自由記述は 92 件である。各文の平均点・容認人数・双方容認人数を別々に集計し、自由記述の件数を特定の解釈への賛同人数とはみなさない。

なお、評定対象は収集例 167 例のすべてではなく、比較用に選んだ 24 組である。本調査は 10 名を対象とする探索的調査と位置づけ、原例・筆者作成の置換例・調査回答者による修正例を区別して示す。

3.2 “对”と“对于”の置換条件

対人的態度を表す述語との共起では、“对”と“对于”の容認性には顕著な差が認められた。(1a) の“对你完全信任”は 10 名、(1b) の“对于你完全信任”は 1 名に容認された。“对人很冷淡”“对老师很尊敬”でも“对”は各 10 名、“对于”は各 0 名であった。三組に共通するのは、人物名詞が“信任”“冷淡”“尊敬”という態度の直接的な向け先となる点である。この意味関係が“对于”への置換を制限する要因の一つと考えられる。

他方、置換には介詞句の位置も関与する。呂叔湘（2010：107）は“对于”が助動詞の後に置けないとし、次の例を挙げる。

（3a）我们会对这件事作出安排的。（我々はこの件についてはとりはからうことができます。）（呂叔湘 2010：107）
（3b）我们会对于这件事作出安排的。

（3a）は 10 名に容認されたが、（3b）を容認した回答者はいなかった。また、介詞句を“会”の前に移した“我们对于这件事会作出安排的”でも容認は 1 名にとどまり、同位置の“我们对这件事会作出安排的”は 9 名であった。したがって、今回の置換結果は助動詞

との前後関係だけでは説明できない。自由記述には、次の文頭配置が修正例として示された。

(4) 对于这件事，我们会作出安排的。(調査回答者による修正案)

(4) 自体は評定対象外であり、文頭へ移せば容認されると断定はできない。ただし、助動詞直前への移動と文頭での対象提示を区別する必要性を示す。これに対し、次の文頭配置では、両形式が高く容認された。

(5a) 对于像这种恶意竞争的手段，市场监管部门必须严厉打击。(この種の悪質な競争行為については、市場監督部門が厳正に対処する必要があります。)
(ドラマ《理想之城》)

(5b) 对像这种恶意竞争的手段，市场监管部门必须严厉打击。

(5a) は 10 名、(5b) は 9 名、同一回答者による双方容認は 9 名であった。“恶意竞争的手段”を行為の向け先としても、後続の対応に先立つ対象としても捉え得る環境である。自由記述には、“对于”をより書面語的・正式な表現とする指摘も見られた。

対人的態度を表す (1) に対して、(5) の“严厉打击”では行為の向け先と対処すべき事柄という関係が重なる。したがって、対象介詞の置換には語順と対象と述語間の意味関係がともに関与していると考えられる。

表 1 “对”と“对于”の代表的な容認性判断結果[1]

置換環境	“对”	“对于”	双方容認
対人的態度（冷淡）	4.8［10］	1.2［0］	0
対人的態度（信任）	4.8［10］	1.5［1］	1
助動詞後の介詞句（安排）	4.8［10］	1.5［0］	0
助動詞前の介詞句（安排）	4.8［9］	1.9［1］	1
文頭配置（恶意竞争）	4.4［9］	4.6［10］	9

3.3 “对于”と“关于”の置換条件

“关于”が後続名詞の内容を限定する場合、“对于”への置換には顕著な制限が認められた。

(6a) 我手边有一本关于中国历史的书。(手元に中国の歴史に関する本が一冊ある。)
(ドラマ《觉醒年代》)

(6b) 我手边有一本对于中国历史的书。

(6a) は 10 名全員に容認されたのに対し、(6b) を容認した回答者はいなかった。同様

[1] 数値は平均点［容認人数］を示す。平均点は 5 点満点、人数はいずれも 10 名中の値。双方容認は同一回答者が両形式に 4・5 点を付けた人数を表す。

に、“关于人工智能的报道”“关于勇气的小故事”でも、“关于”は10名全員、“对于”は誰も容認しなかった。三例では対象Xが“中国历史”“人工智能”“勇气”と異なるものの、いずれも［关于X的］が後続名詞の内容を限定する構造をとる。このことから、少なくとも本調査では、“对于”への置換を制限する要因は対象Xの語彙的種類よりも、介詞句が名詞句内部で後続名詞を修飾する構造にあると考えられる。ただし、これをもって“对于”を含む名詞修飾一般の可否を断定することはできない。

これに対し、介詞句が後続節の対象・話題を文頭に提示する場合には、両形式がともに高い容認度を示す例が認められた。

（7a） 对于排名这种事呢，我不是很看重。（順位（ランキング）のようなことには、あまりこだわっていません。）（ドラマ《叛逆者》）
（7b） 关于排名这种事呢，我不是很看重。

（7a）（7b）の容認人数はいずれも9名であったが、同一回答者による双方容認は8名であった。自由記述には、「“关于”はより単純に話題を導入するのに対し、“对于”は『この事柄を対象とする』という指向性を帯び、主観性がより強く感じられる」（筆者訳）との指摘が見られた。この記述からは、“对于”が“看重”という態度の向けられる対象を明示するのに対し、“关于”は話題を導入するという機能差が示唆される。ただし、この判断を回答者全員に共通するものとみなすことはできない。したがって、両形式の容認度が近い場合でも、個々の文の容認、同一回答者による双方容認、さらに置換前後の機能の一致は区別して考える必要がある。

一方、“对于工作，他一向非常认真”/“关于工作，他一向非常认真”では、容認人数はそれぞれ9名/5名、双方容認は4名であった。“认真”が表すのは仕事に関する情報ではなく、主体が仕事に向ける態度であるため、介詞句が文頭に置かれるという条件だけでは“关于”への置換を説明できない。したがって、両形式の置換には、統語的位置だけでなく、後続述語が話題に関する叙述を表すのか、対象への態度を表すのかという意味的条件も関与すると考えられる。ただし、介詞句内部の名詞と後続述語の双方が異なるため、それぞれの寄与については追加調査による切り分けが必要である。

表2　“对于”と“关于”の代表的な容認性判断結果

置換環境	“对于”	“关于”	双方容認
名詞修飾（中国历史的书）	1.1［0］	5.0［10］	0
評価対象・話題（排名）	4.4［9］	4.5［9］	8
意見の対象・話題（这个问题）	4.7［9］	4.8［10］	9
態度の対象・話題（工作）	4.7［9］	3.6［5］	4

4. 日中対照から見た三介詞の機能分化

第3節の結果は、介詞句が導入する対象Xと後続成分との関係から整理できる。“对X”は態度・行為の直接的な向け先を示し、“对于 X”は対象を先行提示して後続節の判断・

評価・対応の枠を設け、“关于 X”は節全体の話題、または“关于 X 的 N”として後続名詞の内容を限定する。したがって、三形式の差は対象 X の属性や文中位置だけでなく、[介詞句―述語／節／名詞]の関係から捉える必要がある。

この観点は、置換困難例と双方容認例の双方を説明する。(3)では介詞句を“会”の直前に移しても容認は 1 名にとどまり、(4)の文頭修正案は、対象を後続節全体の枠として提示する可能性を示す。一方、(5)では行為の向け先と対処対象の解釈が重なる。“对于－关于”でも、(6)の名詞修飾では“对于”が支持されず、(7)と“这个问题－有什么意见”では評価・意見の対象と話題の解釈が重なった。“工作－认真”で“关于”が 5 名にとどまったことからも、文頭位置だけでなく後続成分との意味関係が置換を左右すると考えられる。

日本語との対応も一対一ではない。“对你完全信任”は「あなたを全面的に信頼する」、“对人很冷淡”は「(人に)冷たい」となり、日本語では述語に応じて格形式が異なる。一方、(7)の二形式はいずれも「順位のようなことには」と訳し得るため、“对于”の評価対象提示と“关于”の話題提示の差は訳文に現れにくい。また、「中国史についての本」が(6a)に対応しても、“对于”への置換が認められるわけではない。したがって、日中対照および類義虚詞の指導では、訳語ではなく、対象が述語・節・名詞のいずれと関係づけられるかを示す必要がある。

5. 結論と今後の課題

本稿では、収集例 167 例を参照し、中国語母語話者 10 名による 24 組の置換対の探索的な容認性判断調査から、三介詞の機能分化を検討した。主な結果は三点にまとめられる。第一に、“信任”“冷淡”“尊敬”のように態度が対象へ直接向かう例では“对”の容認度が高く、“对于”への置換は支持されにくい。第二に、“对于”は介詞句を助動詞の直前に移すだけでは容認が高まらず、文頭への修正案が示されたことから、統語的位置と対象提示の働きを分けて検証する必要がある。第三に、“关于 X 的 N”の内容限定では“对于”への単純置換が容認されない一方、節頭で評価対象と話題という二つの解釈が成立し得る(7)では双方容認が認められた。以上は、置換条件を対象の属性だけでなく、[介詞句―述語/節/名詞]の関係から捉える必要性を示す。ただし、本調査は 10 名を対象とする探索的調査であり、(4)の修正例や日本語訳の容認性は評定していない。今後は共起述語・語順・談話文脈をそれぞれ統制した追加調査により、置換の可否と解釈差を検証する。

参考文献

木村英樹(2012)『中国語文法の意味とかたち―「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』白帝社.

黄伯荣・廖序东(2017)《现代汉语》(增订六版)下册, 高等教育出版社.

劉丹青(2013)『語順類型論と介詞理論』(杉村博文ほか訳)日中言語文化出版社.

呂叔湘 主編(2010)『中国語文法用例辞典―《現代漢語八百詞 増訂本》日本語版』東方書店.

安大簡《仲尼曰》四例用「堇」為「隱」的句法分析

楊濬豪
開南大學應用華語學系助理教授

1. 問題起源

《安徽大學藏戰國竹簡》第二輯中的《仲尼曰》是現存最早的《論語》抄本，自該簡出版後即引起出土文獻學界的眾多關注。其中四處「堇」字的釋讀，更是引起了諸多學者的討論。例如：史傑鵬(2022)、孟躍龍(2022)、尚賢(2022)、陳民鎮(2023[2022])、高榮鴻(2024) 、戶內俊介等(2024, 2025)，其它說法可見王悅琮(2023)、勒靜宜(2024)。相關問題分布在以下例句中：

(1) 簡 4-5「回，汝幸，如有過，人不**堇**汝，汝能自改。」

(2) 簡 6「仁而不惠於我，吾不**堇**其仁；不仁不〈而〉惠於我，吾不**堇**其不仁。」

(3) 簡 10-11「見善如弗及，見不善如襲。**堇**以避難，靜處以成其志。」

雖然目前較多學者同意將「堇」字釋讀為「隱」，但是此說尚未成為定論，仍具有研究價值。此外，四處用「堇」為「隱」的詞義及語法內涵其實不同，目前學者們大多未作解釋。特別是「隱」本身屬於句法學中的非賓格(Unaccusative)一元動詞，但是例(1)及例(2)的「堇(隱)」卻出現二元動詞的用法，例(3)的「堇(隱)」依不同學者的解釋仍有所不同。本文的提出即是想填補這部分的論證空缺，採取的研究視角是從形式句法學的角度，對於安大簡《仲尼曰》用「堇」為「隱」的四個例子提供理論上的支持。

關於「堇」字的音讀，《廣韻》收「巨巾切」與「居隱切」二讀，「居隱切」源於徐邈注音。「隱」則收「於謹切」及「於靳切」二讀，「於靳切」是倚靠、憑據義（如：《莊子．齊物論》：「南郭子綦隱機而坐，仰天而噓。」）與本文無關。「堇」與「隱」之間的通假應為見母文部的「居隱切」通影母文部的「於謹切」，屬於聲近韻同的關係。書證的部分，戶內俊介等(2024)則指出《說文解字》心部「慬，謹也。从心𦥑聲」也說明從「堇」之字與從「慬」之字有密切的關係。這應是一個聲訓之例。

2. 「堇」(「隱」) 的三種結構

前輩學者們在將「堇」釋為「隱」時，也注意到了「隱」字其實有不同內涵，例如：例(1)的「隱」是記錄{隱瞞}這個詞，例(2)則是{隱藏}這個詞，例(3)或訓為動詞或訓為副詞。此外，「隱」是不及物動詞，過去認為不及物動詞及物化後會產生使動用法，但是這樣的看法只能用於例(2)並不適用於例(1)。關於以上問題，本文將採用分布構詞學(Distributed Morphology)以及形式句法學的方法進行分析，分布構詞學認為構詞能夠分布在不同的語法節點，形式句法則認為句法具有階層性，在句法中擔任指定語(Specifier)或中心語(Head)者，可以決定詞組性質。本文的目的即是找出分布構詞的節點以及句法中的定性成分。

對於動詞的分類，各家學者根據不同的分析法存在差異，可以從語義角度分為行為動詞、心理動詞、存現動詞、使令動詞等，或者從能否帶受事賓語劃分為及物與不及物動詞，有些也將輔助性的動詞（如：助動詞、能願動詞）獨立為一類。本文的分析法則是根據黃正德(2007)的分類，按照動詞與論元的關係分為非作格(Unergative)與非賓格動詞，論元的數量則有一元、二元等。非作格動詞由外部論元的主語擔任施事者，可以描述動作；非賓格動詞則由內部論元的賓語擔任廣義的受事者，用來描述狀態。除此之外，還有不同的輕動詞(Light Verb)能在句法當中出現，建立各類型的事件關係。

例(1)的「堇」，安大簡原整理者是參考《左傳．昭公二十年》:「無縱詭隨，以謹無良。」的文獻，釋讀為「謹」訓為「謹敕」。例(2)的「堇」，安大簡的原整理者參考了《論語．鄉黨》:「其在宗廟朝廷，便便言，唯謹爾。」的文獻，釋讀為「謹」訓為「恭敬」。例(3)安大簡原整理者的斷句為「堇以避難靜處，以成其志」，「堇」釋讀為「僅」訓為「只」。可以看出原整理者的釋讀與訓解都有所不同，例(1)帶有賓語，所以原整理者訓為及物動詞的「謹敕」，例(2)則是訓為不及物動詞的「恭敬」，但未解釋其後所帶的「其仁」及「其不仁」的性質。例(3)原整理者視作副詞，然此句尚存斷句問題，留待下文討論。其後，尚賢(2022)、陳民鎮(2023[2022])等發現將四處「堇」字釋讀為「隱」都能得到很好的解釋，此說一出，亦獲得許多學者的認同。但是在文意解讀上，學者們則略有不同。此外，參考《說文》的解釋「隱，蔽也。从阜㥯聲。」以及段注:「隱，蔽也。艸部曰。蔽茀、小皃也。小則不可見。故隱之訓曰蔽。」可知「隱」是屬於非賓格一元動詞。學者們對於一元動詞二元化（或及物化）亦較少提及。以下分述本文對例(1)-例(3)的句法內涵分析：

2.1. 人不堇汝，汝能自改

例(1) 參考勒靜宜(2024：49-50)可以看出認同釋讀為「隱」的學者，予一古人(網名)解釋為「別人不會隱瞞/掩蓋你的過錯（會直接指出你的過錯）」，尚賢則是點出「《仲尼曰》幾個『隱』字後面所帶的賓語，有的指人，有的指事。」陳民鎮對於此句的解說是「對於顏回，旁人『不隱』其錯誤，不包庇、不容忍，這樣顏回自然有過必改。」句意分析並無太大問題，但句法分析上比較模糊。例如予一古人及陳民鎮都補上了領屬賓語「過錯」，但是原句的「人不堇（隱）汝」則是保留領屬語省略賓語。王悅琮(2023:19)提出此例與《論語．子路》:「父為子隱，子為父隱，直在其中矣。」的用法類似，認為「人不隱汝，汝能自改」應當是說當顏回犯錯時，他人不會向他隱瞞他的錯誤，他自己也能夠因此改正。本文認為此例應同《論語．子路》的「隱」字用法，只是《論語．子路》是分析型的為動，例(1)是綜合型的為動。上古漢語欲增加一個非核心論元(Non-core Argument)時，可以透過輕動詞增加一個論元位置，這種結構稱為施用結構(Applicative)或稱增價裝置。梅廣(2018:402)指出上古漢語表受益關係時，常將受益論元後置，形如述賓，這樣的現象其實是動詞併合的結果。以輕動詞 FOR 增加論元位置的施用結構即為「為動」，它可以是分析型的顯性輕動詞，即將輕動詞 FOR 顯現為「為」，例如《論語. 學而》:「吾日三省吾身：為人謀而不忠乎？」《莊子. 養生主》:「庖丁為文惠君解牛。」以及《論語．子路》的「父為子隱，子為父隱。」也可是綜合型的隱性輕動詞，即將輕動詞 FOR 隱藏起來吸引下方動詞組進行移位(Movement)，例如《左傳．文公十八年》:「昔帝鴻氏有不才子，掩義隱賊，好行凶德。」《吳越春秋．闔閭內傳》:「群盜攻之，以戈擊王頭，大夫尹固隱王以背受之。」以及例(1)的「人不堇(隱)汝」皆屬此類，句法結構如下：

[$_{vP}$ 人[$_{NegP}$ 不[$_{vAGENT}$ [$_{DP}$ 汝[$_{vFOR}$ [$_{VP}$ **堇(隱)**]]]]]]

在上面這個結構中，真正的施事者是「人」，受事者則是語境中的「過」，「汝」則是由輕動詞 FOR 引介，另外安插進來的非核心論元，它得到的語義角色是受益者(Beneficiary)。動詞組的「堇(隱)」受到上位輕動詞的吸引層層上移，接收了受益者的 FOR，再接收了施事者的 AGENT，最終的位置停留在 IP 內部，所以屬於內輕動詞，移位亦使得一元動詞表現為二元動詞。並且因為「堇(隱)」在移動的節點中接收了受益者的 FOR，需要被解釋為「為你隱」，所以「堇(隱)」在文意解讀時才產生了「隱瞞」義。

2.2. 吾不堇其仁……吾不堇其不仁

例(2)「不仁不〈而〉惠於我」原簡讀法不通，學者指出「不」應為「而」的訛字。關於「隱」的釋讀，參考勒靜宜(2024：59-61)予一古人説明「夫子對『仁』非常推崇，不會因他人對自己的愛憎而執行雙重標準。」史傑鵬認為是「一個人仁厚，即使我没被他的仁厚惠及，我也不會遮蔽他的仁厚;一個人不仁厚，雖然我不是受害者，我也不會隱藏他的不仁厚。」尚賢指出「《逸周書》、《大戴禮記．文王官人》都有『不飾其美，不隱其惡』，『惡』之前有『其』，跟『不仁』前面有『其』一樣，對比就更爲貼切。」學者們的句意解讀並沒有太大問題，只是關於「隱」字的解讀，有時解作遮蔽，有時解作隱藏。本文認為例(2)是非賓格一元動詞轉為二元動詞的致動結構(Causative)。致動結構也能分為分析型與綜合型，主要的輕動詞CAUSE。在分析型結構中作為顯性輕動詞「使」，例如《韓非子．八姦》：「舉兵以聚邊境而制斂於內，薄者數內大使以震其君，使之恐懼，此之謂四方。」《前漢紀．孝成皇帝紀》：「今乃尊寵其位，授以魁柄，使之驕逆。」《齊民要術．種穀》：「雪汁者，五穀之精也，使稼耐旱。」也可是綜合型的隱性輕動詞，即將輕動詞 CAUSE 隱藏起來吸引下方動詞移位，古書中常見不及物動詞轉為及物化用以表現此種結構，例如《左傳．隱公元年》：「莊公寤生，驚姜氏。」《論語．公冶長》：「老者安之，朋友信之，少者懷之。」《荀子．王制》：「近者不隱其能，遠者不疾其勞。」以及史傑鵬指出的「不飾其美，不隱其惡」皆屬此類，例(2)亦屬綜合型的隱性輕動詞，句法結構如下：

[$_{v\text{P}}$ 吾[$_{\text{NegP}}$ 不[$_{v\text{CAUSE}}$[$_{\text{DP}}$ 其仁[$_{v\text{BECOME}}$[$_{\text{VP}}$ **堇(隱)**]]]]]]……

[$_{v\text{P}}$ 吾[$_{\text{NegP}}$ 不[$_{v\text{CAUSE}}$[$_{\text{DP}}$ 其不仁[$_{v\text{BECOME}}$[$_{\text{VP}}$ **堇(隱)**]]]]]]

上面這種結構內含兩種輕動詞，CAUSE 表示因，BECOME 表示果，有因必有果，所以帶 CAUSE 輕動詞的致動結構中必定蘊涵著變化的結果。此處的「吾」得到致使者(Causer)的語義角色，「其仁/其不仁」則得到(Causee)受使者的語義角色。動詞組的「堇(隱)」要移位到 CAUSE 必須經過 BECOME，這是中心語移位(Head-to-head movement)的原則，最終表現出的形式也是二元動詞，不過句子當中的論元屬於核心論元，獲得的語義角色也與為動不同。此外，非賓格一元動詞的所帶的論元都是內部論元，屬於廣義的受事者，能成為受動句的基礎，所以前述的《荀子．王制》：「不隱其能」能解釋為不使其能被隱藏。《逸周書》、《大戴禮記．文王官人》的「不隱其惡」能解釋為不使其惡被隱藏。例(2)同樣能解釋為不使其仁或其不仁被隱藏。

2.3. 堇以避難

例(3)原整理者的標點為「堇以避難靜處，以成其志。」後來學者改為「堇以避難，靜處以成其志。」解讀亦有所不同。原整理者認為「堇」讀為「僅」解作副詞的「只」。讀為「隱」的學者參考勒靜宜(2024：94-97)則略有不同，予一古人認為是「先找个地方隱起来避難，然後再安靜地待着修養自我。」陳民鎮認為「『隱以避難，靜居』猶言『隱居』。有《論語》的文本相比照，『堇』讀作『隱』可得佐證。『隱以避難』義近《列子．黃帝》『隱伏逃竄，以避患害』」。句意解讀並沒有太大問題，只是參考前輩學者的討論，「隱」可能是非賓格一元動詞的「隱藏、隱蔽」，例如《周易．坤》：「天地變化，草木蕃。天地閉，賢人隱。」《左傳．僖公二十四年》：「身將隱，焉用文之？是求顯也。其母曰：『能如是乎？與女偕隱。』遂隱而死。」也可能是副詞，屬於「居處」義動詞的修飾性成分。對照文獻材料來看，例(3)對應的是《論語．季氏》：「隱居以求其志，行義以達其道。」此處的「堇(隱)以避難」筆者認為分析為副詞

較佳，動詞則是從下省略，類似例子可見《論語. 衛靈公》:「躬自厚而薄責於人，則遠怨矣。」這裡的「厚」後面也從下省略了動詞「責」，此處的句法結構如下：

[AP **堇(隱)** [VP e_t 以避難]]，[AP 靜[VP 處 $_t$ 以成其志]]

在上面這個結構中,「堇(隱)」是修飾性的附加語(AP)，主要動詞組從下省略，指向靜處的「處」，所以「堇(隱)」與「靜處」都能解釋為隱居。

3. 結語

就本文的分析來說，安大簡《仲尼曰》用「堇」為「隱」的四個例子都不是「隱」的常態用法，所以皆不表現為非賓格一元動詞。其中例(1)的「堇(隱)」是施用結構，它在句法結構中增加了一個輕動詞 FOR，使得「汝」這個論元得到受益者的語義角色，所以句意的解釋是「人們不為你隱瞞」。其次，例(2)的「堇(隱)」則是致動結構，它在句法當中增加了一個輕動詞 CAUSE，給予使事者語義角色，並且控制下方事件論元的變化。事件論元中如果只有內部論元成為單論元的 VP 結構，那麼這個事件論元的基礎就是受動句，所以例(2)才會產生「我不使他的仁德被隱藏」及「我不使他的不仁被隱藏」的句意解釋。最後，例(3)的「堇(隱)」則是附加語的用法，屬於句法學中的修飾語(Modifier)，修飾從下省略的動詞「處」。

【參考文獻】

戶內俊介、野原將揮、海老根量介、宮島和也、宮內駿 (2024) 〈安徽大學藏戰國竹簡（二）《仲尼曰》譯注(1)〉,《雲漢》2：23-49。

戶內俊介、野原將揮、海老根量介、宮島和也、宮內駿 (2025) 〈安徽大學藏戰國竹簡（二）《仲尼曰》譯注 (2)〉,《雲漢》3：16-35。

王悅琮(2023) 《《安徽大學藏戰國竹簡（二）》集釋及相關問題研究》，武漢大學碩士論文。

史傑鵬(2022) 〈安大簡《仲尼說》中的四個「堇」字試釋〉,「梁惠王的雲夢之澤」微信公眾號，2022.8.24。

安徽大學漢字發展與應用研究中心編 (2022) 《安徽大學藏戰國竹簡(二)》，上海：中西書局。

孟躍龍(2022) 〈安大簡《仲尼曰》簡 5、6「堇」字試釋〉，武漢大學簡帛網。

尚賢(2022) 〈據安大簡《仲尼曰》用「堇」爲「隱」說《周易》的「利艱貞」和《老子》的「勤能行之」〉，復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站。

高榮鴻(2024) 〈《安大簡（二）·仲尼曰》"堇"字再讀〉,《古文字研究》35：489-494。

勒靜宜(2024) 《安大簡《仲尼曰》集釋及相關問題研究》，安徽大學碩士論文。

梅廣(2018) 《上古漢語語法綱要》，上海：上海教育出版社。

陳民鎮(2023[2022]) 〈安大簡《仲尼曰》補說〉，安徽大學漢字發展與應用研究中心編《戰國文字研究》第 7 輯:42-53，合肥:安徽大學出版社（原載於安徽大學漢字發展與應用研究中心網站，2022.09.05）。

黃正德(2007) 〈漢語動詞的題元結構與其句法表現〉,《語言科學》4：3-21。

浅谈上古汉语的间接回指

那宇星
京都大学 人間・環境学研究科 大学院生

1 古汉语间接回指的相关研究

在指示系统研究中，回指(anaphora)是回指词依赖前文出现的先行词确定其指示对象的内指现象，通常分为直接回指与间接回指两类。前者回指词与先行词指向同一对象；后者回指词与先行词并非共指，而是通过语义关联和语境推理建立指称联系，通常表现为“整体—部分”、“主体-属性”等关系，这一区分已广泛应用于现代汉语回指研究。近年来，间接回指现象逐渐受到学界关注，如宋雨润(2025)对现代汉语联想回指的研究等。

然而，在古汉语研究中，间接回指尚未得到系统考察，这或与古汉语回指研究的历程有关——长期以来，古汉语的回指研究以直接回指为中心，尤其是上古汉语(本文所称“上古汉语”主要指先秦至西汉时期)回指相关研究，长久以来聚焦于代词的直接回指功能。

近年来，随着指称研究的不断细化，学界开始从个别语言现象出发，对上古汉语间接回指进行初步探讨。其中，代词“之”的特殊用法成为相关研究的重要切入点。梁银峰(2015:273)通过若干例证指出，“之”的指称并不总是对应句法上可识别的先行词，而是依赖语境中激活的相关知识加以理解，即联想(association)，并举例：

(1)赵太后新用事，秦急攻之。(《战国策・赵策四》)。

梁银峰(2015:273)指出，从语义关系来看，赵太后作为国家权力的代表，在“攻”这一动词的语义制约下，“之”的指称因此由个体扩展至其所代表的国家——赵国。而后，大西克也(2019:270)从认知语义的角度，认为“之”具有“转喻性(metonymy)的替代”功能[1]。

在对上述现象进行系统整理的基础上，曹亚北(2023)进一步指出，“之”在特定语境中可以指向先行词、表达与之相关的事物或属性，明确指出上古汉语的“之”具备间接回指功能，并据此将其功能区分为“事件型”与“事物型”两类，并举例(曹亚北 2023：50-52)：

(3)事件型：食之，舍其半。问之，曰：“宦三年矣，未知母之存否，今近焉，请以遗之。”使尽之。(《左传・宣公二年》)(“尽之”的“之”是指食物，由动词“食”触发。)

(4)事物型：万章曰：“‘父母爱之，喜而不忘;父母恶之，劳而不怨。’然则舜怨乎?”(《孟子・万章上》)(“爱之”“恶之”的“之”指子女，由“父母”触发。)

尽管上述研究对“之”的间接回指用法进行了较为充分的总结，但仍侧重于个别代词的具体功能，对于上古汉语间接回指的整体情况的讨论尚显不足，其运作机制亦有探讨的余地。因此，本文认为有必要在既有成果的基础上，将“之”的间接回指用法置于更广泛的间接回指系统之中加以考察，分析上古汉语间接回指的整体情况。

2 上古汉语的间接回指

2.1 本文调查的文献对象

本文考察上古汉语间接回指的实现方式，所用语料主要包括《左传》“隐公元年～僖公三十三年”(下文简称为《左》)，以及《孟子》“梁惠王上～滕文公下”(下文简称为《孟》)。

[1] 同时该研究也指出上古汉语“其”与“之”的指称功能相同，区别仅在于“其”用作定语。

《左》所呈现的语言具有文学书面语性质，以 Karlgren(1926)为代表研究认为，其语法系统在相当程度上保存了先秦时期、尤其是上古汉语的语言特征。《孟》所载内容以孟子(约前 372～289)及其门人的言行为主，以往研究认为认为该书至迟成于战国中后期(约公元前三世纪)，其语言主要以当时鲁地方言为基础(Karlgren 1926:35)。

2.2 上古汉语间接回指的三种类型

就结论而言，本文通过对上述文献的描写性分析，对上古汉语间接回指现象进行了系统总结，并提出如下假设：从回指词类型来看，上古汉语的间接回指至少涉及三种基本实现方式：其一，以“之”、“其”为代表的代词在特定先行词和句法位置下，可通过语义推理实现间接回指；其二，依赖语境推理的零形式指称可实现间接回指；其三，上古后期出现少量名词间接回指用例。从回指词与先行词的语义关系来看，又可分为三类，具体类型及例句如下。

A 关联扩展型：由前文名词先行词(NP)激活与其存在领属、统辖、组成或其他常规语义关联的名词回指词，即【NP→NP】。关联扩展型是最常见的类型，占本文统计的 81 例间接回指用例中的 54 例。例如：

(5)諸侯救邢。邢人潰，出奔師。師遂逐狄人，具邢器用而遷之，師無私焉。(《左传·僖公元年》P278)(“师”指诸侯的军队。)[2]

B 行为参与型：由前文行为(V)激活参与该行为的施事、受事、工具等参与成分作为回指词。其用例数少于 A 类，仅 20 例。根据行为框架中是否存在与回指词具有语义关联的名词先行词，又可分为两类。

B1 名词参与型：包含与回指词存在语义关联的名词成分，即【V+NP→NP】。例如：

(6)夫晉何厭之有？既東封鄭，又欲肆其西封。若不闕秦，將焉取之。(《左传·僖公三十年》P481)(“之”指土地。)

B2 零参与型：前文行为(V)中不存在与回指词具有直接语义关联的名词先行词，但由于行为动词本身具有特定的语义框架，其后通常隐含固定的参与成分，如“娶(妻)”、“生(子)”等，即【V+φ→NP】，其中 φ 表示零形式。例如：

(7) 初，衛宣公烝於夷薑，生急子，屬諸右公子。為之娶φ於齊，而美，公取之。(《左传·桓公十六年》P146)(“之”指齐国嫁给急子的新娘。)

C 行为结果型：此类回指词并非行为事件的直接参与成分，而是对前文行为所概括的内容进行具体化，即由概括性的行为表达推知其所涉及的具体对象或事件，通常表现为【V→NP】，其用例最少仅 7 例，如：

(8)夏，盟、向求成於鄭，既而背之。秋，鄭人、齊人、衛人伐盟、向。王遷盟、向之民於郟。(《左传·桓公七年》P119)(“求成”是对行为的概括性表达，而回指词“之”则具体指向“三国的和约”，即由“求成”这一行为导致的具体结果，本文认为二者并非同一对象。)

下文将根据其回指词的句法形式为分类依据，对上古汉语各类型间接回指进行详细说明。

2.2.1 “之”的间接回指

“之”的间接回指出现频率最高，且同时涵盖所 ABC 所有间接回指类型。本文统计中“之”的回指用例共 389 例，其中可以分析为间接回指的用例合计 28 例，低有生性先行词占 23 例，非专有人名仅有 5 例，无涉及专有人名的间接回指[3]，受篇幅所限，每类仅各举 1 例：

---

[2] 本文引用文献均以繁体字底本为依据，故例文保留原文繁体字形。“PXX”表示例文在底本中的页码。

[3] 对于“之”的间接回指，曹亚北(2023)已从类型划分与功能分布等方面进行了较为系统的梳理。尽管该文中并未直接指出，但据笔者观察其所举 32 例间接回指例文中，“之”的先行词均为低有生性名词或非专有人词，与

A 关联扩展型：(9)初，鬻拳強諫楚子，楚子弗從，臨之以兵，懼而從之。鬻拳曰：「吾懼君以兵，罪莫大焉。」遂自刖也。楚人以為大閽，謂之大伯，使其後掌之。(《左传·庄公十九年》P211)(“之”指鬻拳之官职，杨伯峻(1990：211)注：“使其子孫常主掌此官。”)

B1 名词参与型：(10)=(6)夫晉何厭之有？既東封鄭，又欲肆其西封。若不闕秦，將焉取之。(《左传·僖公三十年》P481)(“之”指土地。)

B2 零参与型：(11) 成季使以君命命僖叔，待于鍼巫氏，使鍼季酖之。曰飲此則有後於魯國，不然，死且無後，飲之，歸，及逵泉而卒。(《左传·桓公七年》P254)(“之”指毒酒。)

C 行为结果型：(12)梁由靡御韩简, 虢射为右, 辂秦伯, 将止之; 郑以救公误之, 遂失秦伯。(《左传·僖公十五年》P356)(“之”指截停秦伯。)

从整体来看，尽管“之”的间接回指已属频率最高的一类，但其在“之”全部回指用法中所占比例仍然较低(约 5.9%)。这一事实表明，该用法并非常规手段，而是受到上古汉语语用条件的限制，更可能是一种在特定语境中，用以补偿名词回指缺位的替代性策略。

2.2.2 零形式间接回指

从整体数量来看，零形式回指的用例数低于“之”而高于“其”。据本文统计，《左》、《孟》中零形回指用例总数超过 700 例，且与“之”主要见于宾语位置不同，零形式既可用于宾语位置，也可用于主语位置。其中主语间接回指 17 例(如(13) (14))，宾语间接回指仅 6 例(如(15))，主语间接回指如：

A 关联扩展型：(13) 惠公之季年，敗宋師于黃。公立，而ϕ求成焉。(《左传·隐公元年》P18)(“φ”指宋国。)

B1 名词参与型：(14)王好戰，請以戰喻。填然鼓之，兵刃既接，ϕ棄甲曳兵而走。(《孟子·梁惠王上》P56)(“φ”指士兵。)

C 行为结果型：(15)夏，齊侯、鄭伯朝于紀，欲以ϕ襲之。紀人知之。(《左传·桓公五年》P104)(“φ”指此次朝会的机会。)

值得注意的是，本文所考察的零形式间接回指未见于 B2 零参与型。这说明，零形式的使用并非完全自由，而受到一定的语义条件制约。从现有用例来看，零形式所回指的对象均可恢复为具体的名词概念。因此，零形式间接回指或许可以理解为名词回指成分在语境充分条件下的省略形式。

2.2.3 “其”的间接回指

其的间接回指也可分为两类，既定语位置上的“其”承担，及宾语位置上的“其+NP”。据对《左》、《孟》的统计，“其”作定语成分的回指用例共计 316 例，可确认为定语间接回指的用例仅 8 例，均属于 A 关联扩展型，且均存在于国家-国度/国民-国家的特殊语义场中：

(16)故宋公、陳侯、蔡人、衛人伐鄭，圍其東門，五日而還。(《左传·隐公四年》P36)(“其”指郑国国都。)

(17)諸侯之師，敗鄭徒兵，取其禾而還。(《左传·隐公四年》P37) (“其”指郑国。

除了定语这一主要类型外，“其+NP”结构整体用作间接回指的现象，这类回指词均位于宾语位置，共见 5 例，包括：

A 关联扩展型：(18)宋人有閔其苗之不長而揠之者，芒芒然歸。謂其人曰：「今日病矣，予助苗長矣。」(《孟子·公孙丑上》P204)

本文结果相同。

B2 零参与型：(19)晉侯使醫衍酖衛侯。甯俞貨醫，使薄其酖，不死，公為之請，納玉於王，與晉侯，皆十穀，王許之，秋，乃釋衛侯。(《左传·僖公三十年》P478) （“其酖”指“酖衛侯”所用的毒酒。）

由此可见，间接回指依赖语义关联实现指称，其对识别信息的要求高于直接回指，而“其”仅具指向功能，缺乏独立识别能力，因而需通过“其+NP”结构予以补足。

2.2.4 零散的名词间接回指

在《左》、《孟》中，可观察到少量名词间接回指用例，共计 17 例，其中 16 例为 A 关联扩展型。其中尤以“某国/某人军队”相关语义域最为突出，均见于《左》共 9 例。

A 关联扩展型：(20)鄭之入滑也，滑人聽命。師還，又即衛。(《左传·僖公二十四年》P419)(“师”指郑国军队。)

A 关联扩展型：(21)諸侯救邢。邢人潰，出奔師。師遂逐狄人，具邢器用而遷之，師無私焉。(《左传·僖公元年》P278)(“师”指诸侯军队。)

除此类外，“日期”亦构成了相对稳定的语义来源。

C 行为结果型：(22)公與宋公為會，將尋宿之盟。未及期，衛人來告亂。(《左传·隐公四年》P36)(“其”指会面日期。)

3 上古汉语间接回指情况小结

3.1 上古汉语间接回指的句法分布

本文发现，各形式间接回指在句法分布上呈现出一定的互补，具体情况如表 1 所示。

表 1 上古汉语间接回指各类回指词的句法分布情况[4]

先行词类别 / 回指词 句法位置	专有人名			非专有人名			低有生性名词			总计			
	主	宾	定	主	宾	定	主	宾	定	主	宾	定	总
名词	–	1	–	9	2	–	2	2	1	11	5	1	17
之	–	–	–	–	11	–	–	17	–	–	28	–	28
Φ	8*	-	-	3	1	-	5	6	-	16	7	-	23
其	–	–	–	–	3	2	–	2	6	–	5	8	13
总计	9			31			24			27	45	9	81

除*所表示的丧葬语义场外，各类间接回指均以非专有人名 •低有生性名词为主要先行词，即先行词多为非特定人物或无生命的普通名词对象。在句法分布上，各类形式表现出较为明确的分工：名词、零形式间接回指主要用于主语位置，“之”主要用于宾语位置，“其”则主要用于定语位置。

3.2 上古汉语间接回指的推理机制

除了句法位置上，各类间接回指呈现出一定互补关系外，在推理机制上，其也呈现出一定的互补分布，如表 2 所示。

[4] 表中数字为该回指类型在对应先行词、句法位置情况下，《孟》《左》中的例文数，下同。

表 2 上古汉语间接回指的推理机制

回指类型 / 回指词	A 关联扩展	B1 名词参与	B2 零参与	C 行为结果	总计
名词	16	–	–	1	17
之	17	2	5	3	28
Φ	11	10	–	2	23
其	10	–	2	1	13
总计	54	20		7	81

由表 2 可见，A 关联扩展型共 54 例，占全部 81 例的 66.7%，是上古汉语间接回指最主要的推理机制，且各种回指形式均可参与其中。B 行为参与型表现出较为明显的形式限制，尤其是 B2 零参与型仅见于“之”、“其”为代表的代词，显示出明显的集中倾向。C 行为结果型共 7 例，各种回指形式均有分布，但总体数量较少。进一步比较名词与非名词形式可以发现，名词间接回指高度集中于 A 关联扩展型；非名词回指则覆盖 A、B、C 三类推理机制，且 B 类内部呈现出一定的形式互补：B1 名词参与型主要由零形式“Φ”承担，B2 零参与型则主要由“之”“其”实现。这表明，上古汉语不同回指形式的推理机制上可能已经形成一定的分工：名词回指主要依赖先行词与回指对象之间的既有语义关联，而非名词回指除关联扩展外，还可通过行为参与及行为结果等机制建立间接指称关系。

3.3 上古汉语间接回指的整体情况

整体来看，上古汉语间接回指依据回指词形式可分为名词、代词和零形式三类，多用于低有生性·非专有人名先行词的语境，且在句法分布上，各类形式表现出较为明确的分工（见 3.1 节）。整体上看，名词回指的使用频率较低，主要见于名词的关联扩展型；行为型间接回指更多由以“之”、“其”为代表的代词和零形式承担（见 3.2 节）。由此可见，上古汉语间接回指的各类形式并非随机分布，而是在句法位置和推理机制上呈现出一定的功能分化。

参考文献：

曹亚北 2023. 上古汉语代词“之”的间接回指，《中国语文》(1)：46-61。

大西克也 2019.〈上古汉语代词“之”和“其”的替代功能〉，《历史语言学研究》（第十三辑），商务印书馆：269-283。

梁银峰 2015．再论上古汉语指示词“之”的语义属性——基于语篇照应的视角，《语言研究集刊》(15)，上海辞书出版社：269-281。

宋雨润 2025.〈从认知视角论现代汉语联想回指的成立条件〉，《中国语学》(272)：104-123。

Karlgren, Bernhard 1926．On the Authenticity and Nature of the Tso Chuan．Göteborgs Högskolas Årsskrift 32(3)：1-65．

文献底本：

孟子：焦循撰·沈文倬點校《孟子正義》(新編諸子集成第一輯)．北京：中華書局，1987 年

左伝：楊伯峻編著《春秋左傳注》（修訂本）(中国古典名著譯注叢書)．北京：中華書局，1990 年．

古代中国語における「睡眠」を表す語彙の意味的差異

――内的情態と語彙の機能分布をめぐって

鄭好
京都大学大学院人間・環境学研究科 大学院生

古代中国語において、睡眠を表す主要な単音節語には、「寝」「寐」「臥」「眠」「睡」がある。王力（1999［1962］: 812―813）は、これらの語の基本義の違いを論じている。一方、汪維輝（2017［2000］: 161）は、語彙史の観点から、睡眠を表す中心的な語が「寝」（戦国以前）→「臥」（戦国・両漢）→「眠」（魏晋南北朝）→「睡」（近現代中国語）という順に三度交替したことを指摘している。しかし、このような交替は、後続語が先行語に直ちに全面的に取って代わることを意味しない。複数の語が併存する時期には、各語の用法はどの程度重なり、そこには比較的安定した機能分担が存在したのだろうか。さらに、そうした分担は、中心的な語の交替に伴ってどのように継承され、再編されていったのだろうか。

本稿では、先秦期から魏晋南北朝期までを対象に、上述の各語の具体的な用例とその分布に基づいて、複数の語が睡眠事態のどの局面をどのように表していたのかを分析する。以下では、まず「寝」と「寐」を中心に、睡眠を表す語彙の機能分化と、具体的な文脈における各語の働きを考察する。次いで、考察対象を「臥」「眠」「睡」へと広げ、この分担関係が通時的にどのように変化したのかをたどる。

一、意味特徴の設定と「寝」「寐」の機能分化

1.1 行為連鎖モデルと意味特徴

影山（2008：244、257）は、語彙概念構造の観点から、〈活動〉→〈変化〉→〈状態〉という行為連鎖によって事態の内部構造を表すことを提案している。本稿では、このモデルを基本的な枠組みとして、睡眠を表す語彙の機能分担を考察する。ただし、このモデルが示すのは事態の一般的な構造にすぎず、睡眠事態が具体的にどのような局面を持つのかは、実際の用例に基づいて明らかにする必要がある。そこで、各語の用法を対照しつつ意味上の差異を［内的睡眠状態］と［睡眠意図］という二つの意味特徴として整理し、各語の意味上の重点を捉えることとした。［内的睡眠状態］[1]は、語が主体内部の睡眠状態を直接的な意味内容とするか否かを示す。否定構文における各語の振る舞いは、その語が直接表す内容を判断するための比較的明確な手がかりとなる。例えば、次のような例がある。

（1）子曰：“吾尝终日不食，终夜不寝，以思，无益，不如学也。”（『論語』衛霊公）
（2）孟子曰：“吾闻之，喜而不寐。”（『孟子』告子下）

例（1）の「寝」は就寝行為を表し、「不寝」はその行為の実施を否定する。「寝」自体は、睡眠状態が成立したか否かを直接には指定しない。例（2）の「喜而不寐」は、主体が喜びのあまり入眠できなかったことを表し、「不寐」は睡眠状態の成立を明示的に否定している。

［睡眠意図］は、睡眠が主体の意図に基づくか否かについて、語の意味内容としてどの

[1] この特徴は、工藤真由美（1995：70、89―96）の「内的情態動詞」という概念から着想を得たものである。ただし、両者では定義および適用される分析レベルが異なる。

ように指定されているかを示す。例えば、次のような例がある。

（3）昭侯闻堂溪公之言，自此之后，欲发天下之大事，未尝不独寝，恐梦言而使人知其谋也。（『韓非子』外儲説右上）

（4）孝公既见卫鞅，语事良久，孝公时时睡，弗听。（『史記』商君列伝）

例（3）の「独寝」は、主体が意図的に就寝することを表す。これに対し、例（4）の「睡」は、会話中に意図せずに生じた居眠りを表している。

1.2 「寝」「寐」の機能分化と睡眠事態における行為連鎖

本稿では、先秦から魏晋南北朝までの伝世文献21種を基礎資料とし[2]、そこに見られる「寝」「寐」「臥」「眠」「睡」の用例を網羅的に収集した。このうち、単音節語として用いられ、睡眠事態に関わる用例は383例である[3]。その内訳は、睡眠事態を表す用例が212例、横になることなどの関連事態を表す用例が171例である。

まず、西周から戦国中期における機能分担を検討する。この時期の対象資料には、睡眠事態を表す用例が21例見られる。二つの意味特徴による分類結果を表1に示す。

［表1］西周から戦国中期における各語と意味特徴の組み合わせ

意味特徴の組み合わせ	寝	寐	臥	眠	睡	計
［＋睡眠意図、±内的睡眠状態］	12	0	1	0	0	13
［±睡眠意図、＋内的睡眠状態］	0	6	0	0	2	8
計	12	6	1	0	2	21

この時期の睡眠事態を表す用例は「寝」と「寐」に集中している（表1）。

「寝」は睡眠意図を意味内容に含む一方、内的睡眠状態が成立するか否かは指定しない。これに対し、「寐」は内的睡眠状態を直接的な意味内容とする一方、睡眠意図の有無は指定しない。この機能分担は、両者が同一文中に共起する例において明瞭に現れる。

（5）王揖而入，馈不食，寝不寐，数日，不能自克，以及于难。（『左伝』昭公十二年）

さらに、考察範囲を全時期に広げると、睡眠事態を表す用例には三つの意味特徴の組み合わせが認められる。［＋睡眠意図、±内的睡眠状態］は106例、［±睡眠意図、＋内的睡眠状態］は94例、［－睡眠意図、±内的睡眠状態］は12例である。前二者は、それぞれ睡眠を目的とする就寝行為と主体内部の睡眠状態に意味上の重点を置く。両者で200例となり、全体の94.3%を占めることから、この二つが睡眠事態を表す主要な型をなしていると考えられる。第三の組み合わせは、意図せずに生じる居眠りを表し、12例中10例を「睡」が占める。これらの用例では、睡眠状態そのものよりも、主体が他の活動をしている間に覚醒状態から睡眠へと移行する過程に、意味上の重点が置かれる。以上の意味特徴の分布と具体的な用法を踏まえると、睡眠事態に関する行為連鎖は、次のように具体化できる。

〈就寝行為〉→〈入眠変化〉→〈睡眠状態〉

この行為連鎖に基づき、「寝」「寐」「睡」の意味構造を各段階との関係から整理すると、

---

[2] 本稿が基礎資料とする文献は以下のとおりである。西周から戦国中期：『左伝』『論語』『孟子』『荘子』、戦国末期：『荀子』『韓非子』『呂氏春秋』、前漢：『淮南子』『史記』『塩鉄論』、後漢：『論衡』『風俗通義』、魏晋：『三国志』『抱朴子内篇』『抱朴子外篇』『捜神記』、南朝：『世説新語』『南斉書』、北朝：『洛陽伽藍記』『顔氏家訓』『魏書』。

[3] 対象五語を構成要素として含み、かつ『漢語大詞典』に複音節語の見出し語として収録されている形式は、すべて除外した。この基準は本稿における分析単位を画定するためのものであり、当該形式が語をなすか否かを判定するものではない。また、「休止」「宮室」など睡眠事態と関係のない意味を表す用例、原文の意味を確定しがたい用例、および「死亡」などの派生義を表す用例も統計から除外した。

表 2 のようになる。

［表 2］行為連鎖における「寝」「寐」「睡」の意味構造

語・用法	〈就寝行為〉	〈入眠変化〉	〈睡眠状態〉
寝	＋	±	±
寐	±	±	＋
睡（居眠り義）	－	＋	±

二、「寝」「寐」と睡眠事態の全体把握

2.1　全体把握の定義と現れ方

ある語の意味構造が睡眠事態の一部のみを含む場合でも、具体的な文脈では睡眠事態全体を表すことがある。本稿では、このように睡眠事態全体を表現の単位とする用法を「睡眠事態の全体把握」（以下「全体把握」）と呼ぶ。

全体把握には、主に二つの現れ方がある。一つは、睡眠が相対的に独立した一つの事態として構成され、叙述・評価の対象、出来事の連鎖の一環、あるいは他の出来事を叙述する際の背景となる場合である（(6) ～ (8)）。もう一つは、睡眠が夢、知覚、身体的現象などの生じる時間的範囲として構成される場合、または覚醒や起床などと対置され、一つの時間的段階として位置づけられる場合である (9) (10)。

（6）“吾闻时难得而易失。客寝甚安，殆非就国者也。”（『史記』斉太公世家）

（7）阳虎说甲如公宫，取宝玉、大弓以出，舍于五父之衢，寝而为食。（『左伝』定公八年）

（8）王寝，盗攻之，以戈击王，王孙由于以背受之，中肩。（『左伝』定公四年）

（9）当人之卧也，置食物其旁，不能知也。（『論衡』祀義篇）

（10）其寐也魂交，其觉也形开，与接为构，日以心斗。（『荘子』斉物論）

2.2　「寝」「寐」の全体把握の傾向

本稿の考察対象とする全時期について、睡眠事態を表す「寝」「寐」の用例のうち、全体把握に該当する用例数と割合を集計すると、「寝」は 60 例中 45 例（75.0%）、「寐」は 37 例中 8 例（21.6%）となる。「寝」「寐」のいずれにも睡眠事態を表す用例が見られる各時期においても、「寝」の割合は一貫して「寐」を上回り、その差は 44.2～80.0 パーセントポイントである。

この差は、両語の行為連鎖上の構成の違いと関連している可能性がある。「寝」は〈就寝行為〉を意味構造に含む一方、〈入眠変化〉と〈睡眠状態〉については指定しない。そのため、就寝したものの眠りに至らなかった場合にも、すでに睡眠状態にある場合にも用いることができる。就寝行為からは通常、その後の入眠が予期されるため、具体的な文脈では、行為連鎖に沿って後続する〈入眠変化〉と〈睡眠状態〉までが解釈に取り込まれうる。また、就寝行為は相対的に独立した事態として捉えられやすく、飲食や移動などの活動とともに出来事の連鎖に組み込まれやすい。これに対し、「寐」は〈睡眠状態〉を直接表し、〈就寝行為〉と〈入眠変化〉については指定しない。睡眠状態は、意図的な就寝の後に成立する場合もあれば、意図によらず生じる場合もある。したがって、〈睡眠状態〉のみから、それに先行する〈就寝行為〉の有無や〈入眠変化〉の具体的なあり方を特定することはできない。また、「寐」の用例には、「不寐」など、睡眠状態が成立するか否かを表現の焦点とするものが多く、文脈において睡眠事態全体として構成される例は相対的に少ない。

以上から、語ごとの行為連鎖上の構成の違いは、全体把握の傾向に意味的な基盤を与え

ると考える。ただし、この違いだけによって、個々の用例が全体把握として解釈されるか否かが直接決定されるわけではない。具体的な用例において睡眠事態がどのように構成されるかは、共起成分、統語構造、文脈などにも左右される。

三、睡眠を表す語彙体系の通時的再編

3.1　中心的な語の交替に伴う機能の再配分

前節までに見た初期の機能分担を踏まえ、本稿では、睡眠事態を表す中心的な語の交替過程の初期段階を「寝」と「寐」の並立と捉え直す。すなわち、「寝」「寐」（西周～戦国中期）→「臥」（戦国末期～両漢）→「眠」（魏晋南北朝）→「睡」（近現代中国語）である。

中心的な語の交替は、それまで用いられていた語とその機能が直ちに消失することを意味するものではなく、新たに台頭する語による既存の機能の継承と組み替えを伴う。この過程を検討するため、行為連鎖上の構成ごとに用例を時期別に集計し、各構成に見られる語の内訳を比較した。結果を表 3 に示す。

［表 3］各時期における睡眠事態を表す用例の行為連鎖上の局面

時期	＋〈就寝行為〉	＋〈入眠変化〉	＋〈睡眠状態〉
西周～戦国中期	**寝 12**、臥 1	0	**寐 6**、睡 2
戦国末期	**臥 5**、寝 3	**睡 2**	**寝 2、寐 2**、臥 1
前漢	**寝 8**、臥 3、寐 2	**睡 1、臥 1**	**寐 8**、臥 7
後漢	**臥 6**、寝 3	0	**臥 23**
魏晋	**寝 13**、臥 6、眠 2、寐 1	**睡 5**	**寐 8**、眠 6、臥 3、寝 2、睡 2
南朝	**眠 14**、寝 4、臥 2	**睡 2**	**眠 6**、寐 2、臥 1、睡 1
北朝	**寝 13**、臥 4、眠 3、寐 1	**寐 1**	**寐 6**、睡 4、眠 2

（注：同一欄内では、最多の語（同数の場合は複数）を太字で示した。）

表 3 に示すように、西周から戦国中期にかけて、「寝」の用例はすべて＋〈就寝行為〉の構成を示し、「寐」の用例はすべて＋〈睡眠状態〉の構成を示しており、両語の機能分担は比較的明確である。戦国末期から両漢にかけて、睡眠事態を表す「臥」の用例はこの二つの構成の双方に見られ、初期には「寝」と「寐」が分担していた機能を兼ねるようになる。魏晋南北朝期には、「眠」も両方の構成に用いられ、同様に初期の機能区分を越えて使用範囲を広げている。同時期には、「寝」「寐」にも、初期の主要な構成とは異なる用例が少数ながら見られる。したがって、初期に見られた機能差そのものは失われていないが、機能と語との対応関係は、比較的集中した分布から、複数の語が重なり合う分布へと変化したといえる。本稿の資料では、「睡」には居眠りを表す用法と睡眠状態を表す用法の双方が見られる。ただし、考察対象は南北朝までに限られるため、「睡」が近現代に中心的な語となるまでの過程全体を示すことはできない。

以上から、睡眠を表す語彙体系の通時的変化は、新たな語が既存の機能領域に徐々に加わり、関連する機能が新旧の語の間で再配分されていく過程として捉えられる。

3.2　文集資料における「寐」の相対的集中

通時的な変化に加え、語の選択は文体的要因の影響も受け得る。こうした文体による差異を検討するため、本稿では魏晋および南朝の文集資料を別途取り上げて考察する [4]。対象資料は詩歌を中心とし、少数の賦・教・表を含む。そこから得られた用例は、前述の基

[4] 対象とした文集は以下のとおりである。魏晋：『陶淵明集』『魏武帝詩注』『曹子建詩注』『王粲集』『阮籍集校注・詩』『陸機詩全集』、南朝：『謝朓集校注』『鮑照集校注』『江文通集校注』。

礎資料とは別に集計した。「寐」の分布を表 4 に示す。

［表 4］基礎資料と文集資料における「寐」の分布

時期	基礎資料における「寐」	文集資料における「寐」	文集資料中の「寐」のうち睡眠状態を表す用例
魏晋	9／48（18.8%）	13／23（56.5%）	12／13（92.3%）
南朝	2／32（6.3%）	4／8（50.0%）	4／4（100.0%）

（注：数値はすべて「用例数／総数（割合）」の形式で示す。第 2 列と第 3 列の分母は、それぞれの資料において対象五語が睡眠事態を表す用例の総数である。第 4 列の分母は、文集資料において「寐」が睡眠事態を表す用例の総数である。）

表 4 から、魏晋・南朝のいずれにおいても、文集資料における「寐」の割合が、同時期の基礎資料における割合を上回ることがわかる。また、文集資料における「寐」の用例は、その大部分が主体内部の睡眠状態を表している。これらの用例には「不寐」「不能寐」「安得寐」などの形が多く、憂思や惆悵など、主体の内的経験を表す表現としばしば共起する。

（11）夜夜安得寐，惆怅以自怜。（曹操「秋胡行」其一）

（12）夜中不能寐，起坐弹鸣琴。（阮籍「詠懐」其一）

この分布は、文集作品において主体の内的経験が比較的集中的に表現されることと関係しており、文学的表現の伝統の影響を受けた可能性もある。したがって、文集資料における「寐」の相対的集中は、〈睡眠状態〉を意味構造に含む「寐」が、その表義特性に適合する特定の文体において選択的に用いられ続けたことを示唆する。

四、まとめ

睡眠を表す各語は、同一の事態に対する異なる名称にすぎないのではなく、意図的に行われる就寝行為、入眠変化、主体内部の睡眠状態のうち、どの局面を意味構造に含むかという点で異なり、それぞれ異なる仕方で睡眠事態を組織している。語が行為連鎖の一部のみを意味構造に含む場合でも、具体的な文脈では、その語彙的意味を基盤として睡眠事態全体を表すことがある。「寝」と「寐」の比較からは、こうした全体把握の成立しやすさと各語の行為連鎖上の構成との関連が示唆された。

通時的に見ると、新たに加わった「臥」「眠」は、それまで「寝」「寐」が分担していた機能を継承し、複数の機能領域にまたがって用いられるようになった。一方、中心的な位置から退いた「寐」も、基礎資料において従来の機能を保持しつつ、文集資料では相対的に集中して用いられていた。言い換えれば、語彙史は、個々の語が消長する過程であると同時に、表現機能が複数の語の間で再配置される過程でもある。

参考文献

羅竹風（主編）、漢語大詞典編集委員会、漢語大詞典編纂処（編纂）（1986—1994）『漢語大詞典』. 上海：上海辞書出版社、漢語大詞典出版社.

王力（主編）（1999［1962］）『古代漢語』（校訂重排本、第 3 版）第 3 冊. 北京：中華書局.

汪維輝（2017［2000］）『東漢—隋常用詞演変研究』（修訂本）. 北京：商務印書館.

影山太郎（2008）「語彙概念構造（LCS）入門」，影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No. 4』，239—264 頁. 東京：ひつじ書房.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト：現代日本語の時間の表現』. 東京：ひつじ書房.

《根本说一切有部毗奈耶杂事》完毕义动词考察

张子岳
京都大学人间・环境学研究科 研究生

1. 引言

初唐至中唐时期位于中古汉语向近代汉语转变的过渡时期，“过渡阶段”的定位与口语材料的相对缺乏，导致了学界对这一时期的语言研究有所忽视。这一时期本土的口语文献不多，但佛经文献却非常丰富，其中义净所译的数量庞大的律部佛典十分引人注目。《根本说一切有部毗奈耶杂事》（以下简称《杂事》）译于景龙四年（公元 710 年）长安大荐福寺，共四十卷，译场的人员分工有明确记录，翻译风格忠实于原文，叙事性与口语性强，具备专书研究的语料价值。

汉语完毕义动词及其相关完成貌表达一直是汉语语法史研究的重要课题，已有研究多从其来源及语法化过程入手，对“毕”“竟”“讫”“已”“了”等完毕义成分的产生、演变及其由实义动词向补语、体标记发展的路径进行了较为深入的讨论。但总体而言，研究的关注点多集中于形成机制、发展过程，时段多为东汉至魏晋南北朝佛经材料，对初唐至中唐这一新旧语法形式交替的重要阶段关注相对不足。

《杂事》中有丰富的完毕义动词用例，其中“已”不仅具有受原典语言影响形成的翻译特征，也表现出进入汉语系统之后进一步调整和发展的倾向。本文以《杂事》中表示动作完成、结束的完毕义动词为研究对象，对《杂事》中的完毕义动词“已”“了”“讫”“竟”“毕”进行穷尽性调查，考察其具体语义与所接续成分的性质。本文试图通过描写调查以补充这一时期完毕义表达的共时发展面貌，并探究“已”等受原典语言影响形成的结构进入汉语之后的适应、调整与内部演变情况，为考察中古汉语向近代汉语过渡过程中完毕义动词体的发展变化提供一些具体的语料和参考。

2. 《杂事》中的完毕义动词 “竟”“毕”“讫”“了”

2.1 竟

《杂事》中完毕义动词“竟”共有 25 例，出现在以下几种结构中：

1. V+竟 “竟”接续在动词之后表达动作完毕义，如：

（1） 大众食竟嚼齿木洗手已屏收钵器，便取小席于佛前坐……。（第三十五卷）

表示吃饭的过程结束，另外还有“说竟”“洗浴竟”等搭配，都是具有持续特征的动作行为[1]。表示完毕义的“竟”等动词标志动作过程的结束，这样的语义特点要求其前的V为持续性动词，但《杂事》中有 1 例“V+竟”中V为非持续性动词的情况：

（2） 行雨白言：“我于何时得见胜鬘？”王言：“汝已见竟。”（第七卷）

2. V+O+竟 《杂事》中完毕义动词“竟”以出现在“V+O+竟”格式中为主，共 16 例。绝大部分“V+O”为一个具有持续性的动作或过程，仅有 2 处V是非持续性的动词的用例：

（3） 了僧伽已许苾刍某甲作掌器物人竟，由其默然故，我今如是持。（第十卷）

[1] 接续在具有持续性特征动词之后表示完毕义是“竟”“毕”“讫”“了”“已”的固有的典型用法，予稿中不烦举例。
本文所称持续性动词，是指其所表示的动作或行为在时间上具有一定延续过程的动词，如“食”“行”“读”等；非持续性动词则指其所表示的动作通常在较短时间内完成，或本身带有明确终结点的动词，如“至”“得”“见”等。本文主要依据动词在具体语境中所表现出的时间结构，对二者加以区分。

（4） 世尊即令闭一户竟，更闭余户彼户便开，遂生忧恼。（第十一卷）

“V(+O)+竟”结构中“V(+O)”可能是好几个连续的动作，如：

（5） ……入村乞食，食已收衣钵洗足竟，于重阁中宴坐而住。（第三十七卷）

3. NP+竟 “竟”位于名词性词组之后，《杂事》中见 1 例：

（6） 告言：“此是初羯磨竟。”（第三十二卷）

2.2 毕

《杂事》中表示动作、事件完成的“毕”共 11 例，出现在以下结构中：

1. V+毕 《杂事》中“V+毕”结构共有 9 例，其中V都为持续性动词。

2. V+O+毕 《杂事》中“V+O+毕”共有 2 例。

3. NP+毕 “毕”位于名词性词组之后表示事件的完结，《杂事》中有 10 处用例，如：

（7） 时此国王广施大礼，婚媾已毕，即策妙药为大夫人。（第二十八卷）

“NP+毕”在《杂事》中“毕”作为完毕义动词的使用中占比较高，达到 45%。

同例（5），“V(+O)+毕”结构中“V(+O)”可能是好几个连续的动作，如：

（8） 饭食讫收衣钵澡漱毕洗足已，佛即往诣取弓制底树下而坐。（第三十六卷）

2.3 讫

《杂事》中表示完毕义的动词“讫”共 54 例，具体搭配如下：

1. V+讫 “V+讫”在《杂事》中“讫”的用法里占多数，共有 34 例，其中仅有 3 例“讫”接续的是具有[-持续性]语义特征的动词：

（9） 我今落讫，何处安置？（第三十一卷）

（10） 王唤臣来问言：“婆罗门何不斩手？”答言：“斩讫。”（第十六卷）

（11） 长者好施，知欲命终悉皆舍讫，唯有一铺。（第三十三卷）

2. V+O+讫 在《杂事》中共 8 例，V都是具有[+持续性]语义特征的动词，如：

（12） 此若闻声兼解义者且不应食，待说两三颂讫，后食无过。（第三十五卷）

值得注意的是，此例中“讫”前的“V+O”为未然事件，在完毕义动词多标志已然事件的情况下相对少见，在《杂事》中仅 2 例（另：大德！若水滤讫，不观得用不？（第四卷））。

3. NP+讫 “迄”位于名词性词组之后表示事件已经完成，在《杂事》中有 10 处用例。

如上述的其它完毕义动词一样，“讫”接续的也可能是时间上连续的好几个动作，如：

（13） 食了嚼齿木澡漱讫屏除钵已，取一小席坐听说法。（第二十一卷）

2.4 了

《杂事》中完毕义的“了”出现在以下几种结构中：

1. V+了 “了”接续在动词之后表达动作完毕义，在《杂事》中共有 41 处用例。其中，V也可以是表示某种状态的动词，如：

（14） 世界中间黑暗之处，日月不照悉皆明了，所有众生皆得相见。（第二十卷）

（15） 绀色内彻犹如电光，照王夫人悉皆明了。（第二十四卷）

《杂事》中还有另一例“明了”：“汝等应知！具寿邬波离，于毗奈耶悉皆明了（第三十九卷）”，若将此例“了”理解为完毕义动词，则此结构是比较特殊的“$V_{[-持续性]}$+了”。

《杂事》中仅有 2 例“$V_{[-持续性]}$+了”：

（16） 大钵见了报言：“为我更作小者入斯钵内。”（第三十三卷）

（17） 欲见自手尚不能睹，因光照了互得相见。（第三十六卷）

2. V+O+了“了”位于“V+O”之后，标志动作事件的完成，如“扫地了”“诵经既了”

等。在 14 处用例中，有 3 例是“$V_{[-持续性]}$+O+了”，都是“得正解了”，试举 1 例：

（18） 得正解了，我生已尽、梵行已立、不受后有、所作已办。（第三十六卷）

3. NP+了 “了”也可以位于名词性词组之后，共有 14 处用例。

《杂事》中标记完成、结束的完毕义动词“了”共 73 例，其中“V+了”41 例、“V+O+了”14 例，绝大多数情况下 V 为持续性动词，仅有 5 例为[-持续性]动词。

3.《杂事》中的 “已”

《杂事》中的“已”不仅是汉语中原有的完毕义动词，还用以对译梵语的绝对分词，有大量的接续在[-持续性]特征动词后的用例。在吸纳了梵语绝对分词连接同一动作发出者时间上先后发出的动作这一用法后，“已”的用法也得到了扩展。

3.1 《杂事》中的完毕义动词“已”

我们首先讨论汉语本身有的完毕义动词“已”，它用于具有[+持续性]特征的事件、动词或者动词词组之后，在《杂事》中共有 480 处用例，出现在以下结构中：

1. V +已 《杂事》中此结构共 152 例，“已”直接跟在动词之后，表示该动作的完成。

2. V+O+已 《杂事》中此结构共有 328 处用例，表示“V+O”这一动作过程的完成或结束。

3. 其他 除了附在动词或动宾结构之后，“已”还有许多表示复杂的动作过程的用例，其接续的可能是一个表示动作行为的小句、连续的动作过程或事件，如：

（19） 我为乔答摩办清净食已载至此，唯愿慈悲哀怜纳受。（第三十五卷）

（20） 尔时世尊复为庵没罗女随机说法示教利喜已，从座而去。（第三十六卷）

“竟”“毕”等完毕义动词较少接续在复杂小句之后，表示复杂的动作过程完毕多用“已”。

这种位于[+持续性]特征的事件、动词或者动词词组之后表示完成、结束义的“已”是汉语本身就有的，和“竟”“讫”“毕”“了”性质相同。

3.2 《杂事》中接续在非持续性动词后的“已”

学界已经基本认同佛经中表示动作完成、结束的“已”的大量使用与梵语的影响有关。相对于“竟、毕、讫、了”，《杂事》中表示动作完成或结束的“已”在使用次数和频率上具有压倒性优势。同时，“已”有大量用于[-持续性]特征动词或动词词组之后的用例，其性质与 2.1 节讨论的完毕义动词有显著区别，这与译经中用“V（O）+已+VP”对译梵文绝对分词来表示做完某事之后接着做另一件事有关。以下是对《杂事》中“$V_{[-持续性]}$（+O）+已”使用情况的具体调查：

3.2.1 $V_{[-持续性]}$+已

《杂事》中“$V_{[-持续性]}$+已”共有 393 处用例，接续的动词中用例最多的是“见”和“闻”，表达“看到某事”“听到某事”的瞬间实现，是持续性动词“看”和“听”的结果。典型用例如下：

（21） 佛言：“苾刍应持网络。”六众闻已以五色线而为网络。（第六卷）

（22） 时诸苾……或放光明或现奇相，二童见已告阿难陀曰：“此是何物？”（第十四卷）

《杂事》中此类“已”其接续的还有与认知相关的“知”“了$_{明白、了解}$”“觉$_{发觉}$”“观知”“识知”“闻知”等，描述的是认识上从未知到已知的瞬间变化，或是表达某种结果，如：

（23） 身心泰然即便睡着，须臾觉已作如是语：“观斯婢女身形美触……”（第七卷）

（24） 于三月中以上妙饮食，……，期限满已将诸器具施与众僧。（第十卷）

3.2.2 $V_{[-持续性]}$+O+已

“已”接续在动宾短语之后，动词在时间上不具有持续性，接续的[-持续性]动词以“闻”“见”最多。《杂事》中该结构一共有 371 例。

3.2.3 《杂事》中对译绝对分词“已”的扩展

“$V_{[-持续性]}$（+O）+已”中的“已”可以理解为“……了之后”，前一动作发生或结果实现后加上“已”，后接相继发生的动作事件，相当于梵文中的绝对分词连接同一动作发出者前后的动作。汉语中原有的“已”用来对译绝对分词后，可以跟在[-持续性]的动词之后，这是受到了语言接触的影响。这样的“已”在汉译佛经中大量使用后也发展出了新的用法，《杂事》中一些“已”的用例已经不能视为是对译梵文的绝对分词。

《杂事》中“已”有接续的成分不为动词的用例，它可以接续在形容词之后，如：

（25） 地既净已欲除粪扫，佛神力故令粪无尽。（第十四卷）

（26） 乳糜熟已盛铜盘中。（第三十卷）

可以接续在动补结构之后，如：

（27） 乞得食已还逝多林。（第九卷）

（28） 大医闻已，以酥合膏……。既合成已，选择良晨陈设嘉瑞。（第二十一卷）

（29） 既长大已父遂身亡，自为家主。（第三十一卷）

还有接续在被动式之后的用例：

（30） 被佛诃已便诣一边。（第二十九卷）

《杂事》中有些“已”用在未然情况之下，动作实际未发生，“已”连接两个有条件的或是因果关系的小句，如：

（31） 佛言：“受得香已涂在房中。”彼便用涂住房门扇。（第一卷）

（32） 佛言：“不得即披……待风日吹晒已，然后浣染方可披着。”（第十七卷）

（33） 佛言：“汝先许……，应先往彼为其说已然后出家。”（第二十一卷）

这与《杂事》的律典性质有关，这样的“已”常出现在佛的教诲中来传达一些规制和劝诫。

有些“已”连续的两个动作对应的是不同的动作行为发出者，如：

（34） 若僧伽为作仰钵羯磨已，时诸苾刍应往其舍就座而坐，受其饮食…（第四卷）

（35） 尔时增养说如是等诸要义已，猛光大王默然无答。（第二十四卷）

（36） 说是语已，诸阿罗汉俱入边际定，以愿力故观察世间还从定起。（第四十卷）

这与绝对分词连接同一行为者的先后动作的用法有所差异。

译者选用汉语中原有的完毕义动词“已”来对译梵文的绝对分词，这种新的语言成分进入汉语之后用法有了一定的扩展。“已” 从具体动作的完成扩展到状态达成或结果实现；从连接同一动作行为者先后发出的两个动作，泛化到可表示一种情况发生或结果、状态达成后出现另一种情况；连接功能从时序关系扩展到因果、条件等多种逻辑关系。

4. 小结

本文以《杂事》中完毕义动词为研究对象，调查其在《杂事》中的出现的情境与具体用法，以下是《杂事》中完毕义动词接续动词情况的统计：

	$V+V_{完}$		$V+O+V_{完}$		$V_{[+持续性]}$（+O）+$V_{完}$
	[+持续性]	[-持续性]	[+持续性]	[-持续性]	所占百分比
竟	7	1	12	2	86.4%

毕	9	0	2	0	100%
讫	31	3	8	0	92.8%
了	39	2	11	3	90.9%
已	152	393	328	371	**38.6%**

在语料调查的基础上我们可以得出以下结论：

1.“已”是《杂事》中使用频率最高的完毕义动词，相对“竟”“毕”“讫”“了”具有压倒性的优势。《杂事》中的“已”一部分是汉语原有的接续在持续动词后的完毕义动词，但接续在具有[-持续性]特征动词后的“已”用例数量已经大大超过前者，这一现象与佛经翻译中用“V（O）+已+VP”对译梵文绝对分词有关（“已”相当于“…了以后”，用以接续两个动作事件）。这类“已”在佛经文献中的使用非常广泛，并且以此对译绝对分词已经成为了译经语言的一种规范，在义净所组织的译场的翻译活动中也得以贯彻。

2.《杂事》中“竟”“讫”也有少数接续在[-持续性]动词后的用例。考虑到《杂事》中“已”大量用于[-持续性]动词之后，并已形成较为稳定的“V（O）+已+VP”格式，这些汉语固有完毕义动词的非典型用法很可能是在“已”的高频使用及其句法模式影响下，通过类推而产生的扩展。

3. 完毕义动词一般较多用于描述已经发生的已然事件，但《杂事》中有一定数量的用于未然事件的用例。动作实际未发生，完毕义动词连接两个有条件的或是因果关系的小句。这可能与《杂事》作为律典的性质有关，在描述佛的制戒和说法时常常会用条件性和假设性的表述，为完毕义动词进入未然语境提供了较为集中的语用环境。

4.《杂事》中有一部分“已”已经超出了对译梵文绝对分词的范畴，“已”所接续的成分不再局限于典型的动作动词，其作用对象有由具体动作向整个事态扩展的趋势；“已”连接的成分之间的关系也不限于单纯的时间先后顺序，而可用于因果、条件等更复杂的语义关系表达。这些新用法反映出“V（O）+已+VP”进入汉语之后，在汉语内部发生了进一步的功能扩展。

5. 整体上看，《杂事》中的完毕义动词系统呈现出明显的过渡性特征。一方面，“竟”“毕”“讫”等完毕义动词仍在继续使用，“已”也保留有接续持续性动词、表示动作完成的汉语固有的用法；另一方面，受佛经翻译影响的“$V_{[-持续性]}$（O）+已+VP”格式已经十分成熟，并进一步引发了“已”自身的功能扩展以及对其他完毕义动词的影响。不同来源、不同发展阶段的完毕义表达在同一文本中并存，反映出过渡时期汉语完毕义表达系统尚处于发展与调整之中。中古汉语向近代汉语过渡并非旧形式被新形式简单取代，而更可能表现为旧表达的继续保留、新的句法格式不断扩展、不同形式之间重新分工的渐进过程。

参考文献：

蒋绍愚 2007《语言接触的一个案例——再谈“V（O）已”》，《语言学论丛》第 36 辑，商务印书馆。

辛岛静志 2000《汉译佛典的语言研究》，北京大学传统文化研究中心编《文化的馈赠——汉学研究国际会议论文集（语言文学卷）》，北京大学出版社。

曾昱夫 2012《中古佛经完成动词之研究》（上下两册），《中国语言文字研究辑刊》二编第十二册、第十三册，许锬辉主编，花木兰文化出版社。

朱冠明 2019《再谈近指代词“這”的来源》，《中国语文》第六期。

“江”的通名化及汉语地名南“江”北“河”格局的形成

趙　川瑩
京都大学人間・環境学研究科　外国人共同研究者

1. 引言

现代汉语大型河川的通名，整体上呈现出北“河”南“江”的地理差异。“河”原本是黄河专名，而后词义扩大至可用于指称其他河流，进而变成河流通名。与“河”相对的“江”，是否也经历了类似的过程？围绕这个话题有几个问题需要探讨。①“江”是否一开始就是长江的专名？②“江”是汉语固有词还是借词？③如果“江”经历了从长江专名到河流通名的变化，那么这个变化如何开始，又在何时完成？④与北方地区大小水道皆称“河”不同，现代南方河流名称整体上呈现大水称“江”、小水称“河”或其他方言特色通名的状态，这种情况始于何时，如何推进？

本文在前人研究基础上，进一步系统梳理《水经注》《元和郡县志》《太平寰宇记》等全国性地理史料，及其他古代地志文献，结合汉译佛经等其他语料，考察“江”的通名化过程，及现代汉语地名南“江”北“河”格局的形成。

2. 汉语“江”的早期用例及语源问题

2.1 汉语水名“江”的语源之争

对汉语“江”语源的探讨，始于 Norman-Mei（1976），提出汉语“江”是来自孟－高棉语的借词，借入时间大致在 BC. 500-1000 之间，因长江以南本非汉人聚居地，商周时期中原文化南下触及长江流域的楚地，汉语借入南亚语的河流通名“江”作为长江专名使用。Zhang（1998）反对借词说，认为“江”是汉语固有词，从产生之初就是长江的专名，并指出先秦至西汉时期百越居住地的河流名没有“X 江”，而中国南方大型河流称“X 江”的时间也很晚，称江的先后顺序也取决于距长江的远近。刘振前、庄会彬（2011）不同意汉语本源说，而认为“江”来自古越语，通名“江”是汉语与古越语接触融合的结果。梅祖麟（2018）又列举新的语言和考古材料，重申“江”借自南亚语的观点，又把《国语》“泝江”“江北”“三江”的“江”作通名解，结合《鄂君启节》的“庐江”，认为用“江”为通名始于长江下游的吴越地区，再传入战国时期的楚国。

2.2 汉语文献中“江”的早期用例

上述关于“江”语源的讨论，从语言材料和历史考古证据来看，借词说的可能性似乎较高。不过，对于先秦至西汉的部分“X 江”是否属于“江”的通名用法，仍有讨论余地。本节简单探讨一下汉语文献“江”的早期用例。

首先是上古汉语单音节词“江”，无论是单独使用，还是构成并列复合结构“江河”“江海”“江淮河汉”之类，均指长江，前人研究已多次梳理辨正，不待赘言。其次是前面加数字的“九江”“三江”，及加上方位词的“北江”：

(1)江汉朝宗于海，九江孔殷。（《尚书・禹贡》）

(2)三江既入，震泽底定。（《禹贡》）

(3)又东为沧浪之水……南入于江，东汇泽为彭蠡，东为北江入于海。（《禹贡》）

《禹贡》“九江”是长江下游冲积扇上分流而成的诸多汊道的合称，与黄河下游冲积扇分流的“九河”一样。邹逸麟（1993/2005：50）认为“九江”是长江出武穴口后形成大冲积扇

分流汇入古彭蠡泽的多条支派。“三江”则是从太湖分泄出的三条大型入海河流，但唐以前太湖也承接部分长江来水（邹逸麟 1993/2005：53），故而“三江”称“江”，究竟是也被算在长江水系之内，还是当地民族语言的遗留，尚可再讨论。“北江”则是沧浪之水汇入长江后，又经彭蠡泽出而入海，此时已经可以看作长江的一部分，因而称“江”。

另一些不属于长江水系的早期称“江”地名，出现在吴越和西南地区：

(4)浙江出三天子都。（《山海经·海内东经》）

(5)岷三江：首大江，出汶山；北江，出曼山；南江，出高山。（《山海经·海内东经》）

(6)延江水出犍为南广县，东至牂柯鳖县，又东屈北流。（《水经·延江水》）

(7)渐江水出三天子都。（《水经·渐江水》）

(8)斤江水出交阯龙编县，东北至郁林领方县，东注于郁。（《水经·斤江水》）

(9)又东北至犍为朱提县西，为泸江水。（《水经·若水》）

《山海经》3 例除“大江”指长江外，“浙江（渐江）”、“南江”、“北江”都与不属于长江的一部分。《水经》4 例虽然都加上了通名“水”，但却是书中除“江水”外仅有的 4 条“X 江水”，其中斤江水还在交趾境内，是说南亚语的地方。这些地名透露出“江”可能具有非汉语来源的可能性。

从早期汉语文献“江”的用例来看，可以得出以下认识：①上古汉语单音节词“江”都指长江；②“九江”、“北江”都因与长江有关而称“江”，是长江的支脉或某一部分；③值得注意的是不属于长江水系却称“江”的早期地名。

3. “江”的通名化进程

3.1 “江”从长江专名变为通名的时间

“江”在汉语中什么时候从长江专名变为河流通名？目前各家断限不一。王力（1958/1980：565－566，1982b）举《史记》“浙江则南越”“于是项王乃欲东渡乌江”作为“江”用于南方河流通称之例，似认为西汉初年“江”已作通名使用。但正如本文 2.2 节所论，“浙江”水系虽与长江无涉，却在越地，未必得名于汉语“江”通名化之后，有可能来自当地民族语言；而项羽欲渡之“乌江”，实为长江边一渡口兼基层行政区划“亭”名，故《史记》下文曰“乌江亭长檥船待”。吴宝安（2015）主要据《论衡·书虚》“且投于江中，何江也？”认为“当时‘江’的泛称义已普遍使用”，又以《释名》“江，公也”推出“‘江’在刘熙所处的时代泛称用法已很常见”，得出“江”的词义泛化开始于西汉、完成于东汉的结论。似可再商。Zhang（1998）举东晋张僧鉴《浔阳记》和张须缘《缘江图》所载诸多“X 江”之例，认为从晋代开始“江”变为通名，南方河流也逐渐更名为“X 江”。本文补充《水经注》引书及汉译佛经材料，重点关注与长江无涉而称“江”的水道，认为“江”变成通名的时间应不晚于三国时期：

(10)从迦那调洲西南入大湾，可七八百里，乃到枝扈黎大江口，度江迳西行，极大秦也。（《水经注》卷一引三国吴康泰《扶南传》）

(11)昔者波罗榇国王太子名迦兰，兄弟二人，父王丧身，以国相让，无适立者。兄将妻遁迈入山学道，止临江水。(三国吴康僧会译《六度集经》卷二，CBETA 2026.R2, T03, no. 152)

(12)昔者拘深国王名抑迦达，……罟师得龟，……王使投之江中。(《六度集经》卷五，CBETA 2026.R2, T03, no. 152)

(13)九江直作圆水，水中作圆坛三破之，夹水得相迳通。（《水经注》卷十六引西晋陆

机《洛阳记》）

(14)景初元年，明帝……起景阳山于芳林园，……山之东，旧有九江。（《水经注》卷十六引东晋孙盛《魏春秋》）

(15)第四精进者，转诣他国。到一江边，见一栴檀树，随流来下。(西晋竺法护译《生经》卷三，CBETA 2026.R2, T03, no. 154)

(16)东有大流江，下行一江，有五百部河，绕阿耨达龙王，东流入大海。阿耨达龙王南有大江，名和叉，有五百部河，绕阿耨达龙王，流入大南海。阿耨达龙王西有大江，名信陀，有五百部河流，绕阿耨达龙王，入大西海。阿耨达龙王北有大江名斯头，有五百部河流，绕阿耨达龙王，入北海。(西晋法炬、法立译《大楼炭经》卷一，CBETA 2026.R2, T01, no. 23)

“枝扈黎大江”，即今印度恒河，与长江绝无干涉，而康泰称为“江”；《六度集经》两例称“江”也都在域外；《魏春秋》及《洛阳记》所载魏明帝在洛阳造园为“九江”，也与长江无关，但或许取自《禹贡》“九江”之名；《生经》用不定指的“一江”，也是通名用法的证据；《大楼炭经》阿耨達池所出四江，《长阿含经》称为河，亦可证用为通名。从这些用例来看，至晚在三国时期“江”用为通名已不罕见。

3.2 通名“江”替换“水”：南“江”北“河”格局逐步形成

两汉以来汉语趋于双音化，单音节河流专名往往加“水”构成双音形式“X 水”，此时也正是“河”词义扩大、发展为通名的阶段。众多与长江有关而称“X 江”的水名也重新分析为“专名+类名”格式，“江”渐变为河流通名。新的通名“江”“河”分别在南北方开始替换旧的通名“水”，逐步形成南“江”北“河”的格局。《水经注》所引诸书及郦注中，就已经有大量“X 江”之名。尤其值得注意的是，一些旧称或又称“X 水”的河流，郦道元记载了“X 江”的时称，反映出河流通名的替换：

(17)洛水又南迳新都县，……与绵水合，水西出绵竹县，又与湔水合，亦谓之郪江也，又言是涪水。（《水经注・江水》）

(18)县有夷溪，即佷山清江也，《经》所谓夷水出焉。（《水经注・江水》）

(19)青衣水迳平乡，谓之平乡江。（《水经注・江水》）

(20)若水东南流，鲜水注之，一名州江。（《水经注・江水》）

(21)孙水一名白沙江，南流迳邛都县。（《水经注・江水》）

(22)绳水又迳越巂郡之马湖县，谓之马湖江。（《水经注・若水》）

(23)若水至焚道，又谓之马湖江。（《水经注・若水》）

(24)澧水流注于洞庭湖，俗谓之曰澧江口也。（《水经注・澧水》）

(25)湘水左会清水口，资水也，世谓之益阳江。（《水经注・湘水》）

(26)湘水左则澧水注之，世謂之武陵江。（《水经注・湘水》）

“亦谓之”“一名”“俗谓之”“世谓之”，可见这些“江”都是当地口头所称，与逐渐书面化的旧称“水”形成对比，足见北魏时通名“江”已在南方十分活跃。唐孔颖达《尚书正义》注禹贡“九江孔殷”曰：“然则江以南，水无大小，俗人皆呼为江，或从江分出，或从外合来。”“俗人皆呼”，可知唐初通名“江”虽然已经在口语中十分流行，但仍被经学家鄙夷。而到了北宋初年的《太平寰宇记》，已经有大量“X 江”名称被这本官修地理总志收录，反映出通名“江”从俗人口语逐渐被通语书面语接受。

4. “河”的南下：南方地区水名“江”大“河”小的竞争共存

南方地区大型河川称“江”的同时，在北方已成为大小河流通名的“河”也逐渐南下，开始与南方固有的“塘”、“港”、“溪”等河流通名竞争，共同占据比“江”小的河流名称。这个渗透的过程或许唐代已经开始。唐僧一行《山河两戒图》认为天下山河之象存乎两戒，所附文字说明曰：“河源自北纪之首，……谓之北河。江源自南纪之首，……谓之南河。”南宋景定《建康志·疆域志二》：“今芜湖县有支江，俗称为县河。”元至顺《镇江志》：“简渎在丹阳县以南五里，……俗呼渎河。”这些“俗呼”也反映出“河”在南方的推进。

5. 结语

本文探讨了“江”的通名化进程，认为“江”可能有非汉语来源，但在汉语中一开始就是长江专名，至晚在三国时期已成为通名，并逐渐形成南“江”北“河”的格局。

参考文献：

刘振前、庄会彬 2011 汉语“江”的语源辨正，《山东大学学报（哲学社会科学版）》第 5 期。

马孟龙 2025 重谈“庐江”地望及相关问题，《湖南大学学报（社会科学版）》第 3 期。

梅祖麟 2018 再论南亚民族在远古中国东南沿海地区的分布——以“黄浦江”的“浦”和“江”为例，《语言研究集刊》第二十一辑：第 450-464 页。

王力 1958/1980 《汉语史稿》，科学出版社/中华书局（修订本）

—— 1982a 《关于“江”“河”释义的通信》，原载《天津师专学报》第 2 期，此据《王力文集》，山东教育出版社，1990 年，第 206-216 页。

—— 1982b 《说“江”“河”》，原载《中学语文教学》第 6 期，此据《王力文集》，山东教育出版社，1990 年，第 203-205 页。

吴宝安 2015 《小议“江、河”词义泛化的年代》，《现代语文（语言研究版）》第 9 期。

邹逸麟编著 1993/2005 《中国历史地理概述》，福建人民出版社/上海教育出版社（修订版）。

Norman, Jerry & Tsu-lin Mei 1976 "The Austroasiatics in Ancient South China: Some Lexical Evidence", *Monumenta Serica,* Vol. 32: 274–301.

Zhang, Hongming (张洪明) 1998 "Chinese Etyma for River"(汉语河流词源考), *Journal of Chinese Linguistics* Vol. 26, No. 1: 1–47.

古漢語致使結構「從綜合到分析」的個案考察：

「致」的歷時演變及「以致」的詞彙化

郭維茹
臺灣師範大學國文系教授

1、前言

就類型學而言，從綜合(synthetic)到分析(analytic)是漢語的歷時演變大勢，關乎詞彙和句法層面的系統性變化。「至（致）」是上古漢語的作格動詞(ergative verb)，兼具不及物（自動）與及物（致動）的句法表現，如：「眾至」（《左傳．昭 13》）與「文子致眾」（《左傳．哀 26》）。「文子致眾」為綜合型致使結構，僅用一個致動詞「致」編碼「使至」之義。有鑑於前人析論古漢語「增價作格化」而導致使動式產生，卻忽略了「至」與「致」這組同源詞（宋亞雲 2026），並且少有人關注「致」在東漢以後變成分析型致使結構中的使役動詞，故本文聚焦於動詞「致」從綜合到分析的性質變化，剖析其語義和句法演變，兼論「以致」一詞如何形成。

形式語法學者認為致動詞「致」是動詞「至」跟輕動詞小 v_{causer} 併合而產生的新形式（梅廣 2019:359），這一點可從語音的形態變化得到佐證。龔煌城(2002:170)透過漢藏語比較，推斷「致*r-tjits」的音讀係在詞根「至*tjits」上添加一個表致事的詞頭*r-（*s-的方言變體），顯示此為派生構詞手段。此外，在字形方面，根據目前的可靠資料，得推源至西周金文，「致」從「人」從「至」，「人」形下或加「止」（象腳）（季旭昇 2010:479-480），亦凸顯致事者(causer)「人」的作用致使某物至某處。因此，「致」的語音、語義及字形皆由「至」分化而得。

2、「致」的詞義引申

《說文解字》：「致，送詣也。從夂，從至。」其注云：「送詣者，送而必至其處也。」藉此可知，古書裡的「致」常表「送達、致送」之義，不過，這恐非「致」原始的義位(sememe)（梅廣 2019:278）。「致」的上位義位(hypernym)表「使至」之義，其範圍較大，詞義抽象，可以析分出範圍較小，詞義具體的下位義位(hyponym)，「致送」義即屬之。綜觀漢語辭典所列「致」的義項往往多達十餘至二十餘種，有必要從語言學角度加以歸納。

「致」的詞義既本於「至」，以屬人致事主語為準，大體可依受致(causee)賓語的位移終點（所至）分出兩組下位義位：一為「使去至」，即主語致使賓語去至他者身上；一為「使來到」，即主語致使賓語來到自身所在。「致」的這兩種義位實有「施」與「受」兩種方向之別，故王力(1965[2015:774])說：「使人物來都叫『致』；把東西送到別人那裡去也叫『致』」。[1]

自西周以降，「施」組與「受」組皆有其例，然以前者為多，如下列用例依序表示「施與」、「傳達」、「交還」、「奉獻」、「致贈」之義：

(1)a.爾不克敬，爾不啻不有爾土，予亦致天之罰于爾躬。（《今文尚書．多士》）

b.孝孫徂位，工祝致告。（《毛詩．小雅．楚茨》）

c.公冶致其邑於季氏，而終不入焉。（《左傳．襄公二十九年》）

[1] 裘錫圭(1992:592)也說：「『致』既可以表示送給、給與，也可以表示來到、送來。所以在漢簡裏，送東西和領東西用的文書都可以叫做『致』」。方稚松(2007:45)進一步指出「致」具有施受同辭的特點。

d.事父母能竭其力，事君能致其身。(《論語．學而》)

e.侯伯致禮，地主歸餼，以相辭也。(《左傳．哀公十二年》)

「施」組的「致」可概括為廣義的「致送、給與」義，如「致天之罰于爾躬」、「致其邑於季氏」，動詞「致」帶直接賓語，再用與格介詞「于、於」引介間接賓語。這組義位的「致」自主控制性強，其致事主語帶有[+human]（屬人）和[+volition]（意志）的語意徵性，因此「致」容易轉化為行為動詞，連帶地，其主語也就變成施事(agent)主語，(1e)「侯伯致禮」即是顯明的例子。另外，有些用例則在致動與施動之間遊移，「致」難用現代話對譯，如：「今夫弈之為數，小數也；不專心致志，則不得也」(《孟子．告子上》)，「致」亦涵蓋在「使至」的本義之下，意指把心意傾注在棋藝上，即「致志於弈」，這也是屬人主語可以自主操控的心理活動。

相對而言，「受」組之例的「致」施動性弱，許多時候賓語的「到來」並不是主語得以自主操控。底下例句依序表「招納」、「召集」、「獲得」、「招致」之義：

(2)a.執訊連連，攸馘安安。是類是禡，是致是附，四方以無侮。(《毛詩．大雅．皇矣》)

b.文子致眾而問焉。(《左傳．哀公二十六年》)

c.百工居肆以成其事，君子學以致其道。(《論語．子張》)

d.自我致戎，又誰咎也？(《周易．解》)

如(2c)「君子學以致其道」用的是表「方式-目的」的連動結構，「致」表獲得義；(2d)表示自己招致戎禍，怪不得他人，像這兩種義類的「致」，其屬人主語與致事賓語之間並沒有直接操控性。

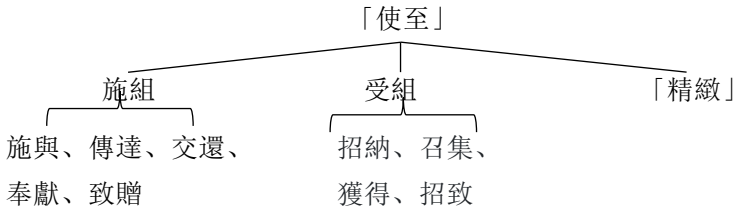
以上「施」與「受」兩組下位義位皆含攝在「使至」義之下。「致」另有相當於「至」和「緻」的用例，分別表示「到達」和「精緻」義：

(3)a.籩籩竹竿，以釣于淇。豈不爾思，遠莫致之。(《毛詩．衛．竹竿》)

b.是以清廟茅屋，大路越席，大羹不致，粢食不鑿，昭其儉也。(《左傳．桓公二年》)

(3a)的「致」當為「至」的通假字，透過此例得以推判「致」通假為「至」當不晚於西周末葉，而春秋戰國所見「任重致遠」亦屬同類。(3b)「大羹不致」的「致」則表示使達到調味的極致，自「使至（極點）」義引申而得，漢以後又可加上系部書寫成「緻」。考量精緻義的「致」是個狀態動詞，其後不帶賓語，應與例(1)施組和例(2)受組的及物動詞「致」分別開來，獨立為一個義位。

綜上所述，茲將「致」詞義的上下位關係圖示如下，「致」借作「至」則姑置不論：



3、使役動詞「致」

3.1「致使」義的產生

「致」的「致使」義可能萌芽於戰國時期，而後逐漸轉化為使役動詞。我們可以注意到「致」的賓語改由子句或謂詞性短語充當，而非原本的名詞或名詞短語；連帶地，賓語論元的語義角色已非受致者而是表結果的事件(event)。「致」朝使役動詞發展，語法化和分析化為

只表致使(causative)義，而另以其他語詞編碼致使的相關結果，體現古漢語由綜合到分析的類型學演化特點。例如：

(4)a.六三：負且乘，致寇至，貞吝。(《周易．解》)

b.良馬難乘，然可以任重致遠；良才難令，然可以致君見尊。(《墨子．親士》)

(4a)形容人因為「負且乘」(能力與地位不相稱）而引發「寇至」(敵寇到來）的後果。在「致寇至」中，「至」的結果已清楚呈現在「致」所帶的子句裡，顯示原表「使至」的「致」朝向只表「使」義淡化。(4b)由於「可以」容許分析為短語或詞，「可以致君見尊」得理解為「可[以（良才）致君見尊]」或「(令良才，）可以[致君見尊]」,無論如何解讀，使君王受天下人尊敬都是任用良才的結果。這兩例的「致」皆以主謂句為賓語，關聯前因與後果兩個事件,具備了使役動詞的雛形。

使役動詞「致」晚至東漢才趨於成熟，對比於先秦常用的使役動詞「使」，馬建忠(1988:274-275)注意到「使」有兩種用法：一類作為動詞；另一類作為連詞，連接兩個句子，形成雙事件結構:

「使」字後有承讀，以記所使為之事，常語也。然「使」、「令」諸字，用以名事勢之使然者，則當視為連字而非動字也。

書中所舉的例句包括：

(5)a.欒枝使輿曳柴而偽遁，楚師馳之。(《左傳．僖公二十八年》)

b.彼奪其民時，使不得耕耨以養其父母。(《孟子．梁惠王上》)

針對(5a)，其解釋道：「輿曳柴而偽遁」者承讀，即欒枝所使之事也。針對(5b)，其說解是：「使不得耕耨」者非「彼」也，乃「彼奪民時」之事勢使然者也，故「使」字當作連字觀。本文認為這兩類例句的「使」都是使役動詞，一表命令，一表致事。(5a)為主謂結構，「使」表使遣義，所帶賓語子句「輿曳柴而偽遁」為其命令之事。(5b)是具有因果關係的兩個句子 A 與 B，「使」所帶賓語子句 B 為前面句 A 所表事勢之後效。[2]

反觀使役動詞「致」皆不表命令，只表致事，見於兩個句子所表達的雙事件結構，如：

(6)a.聖人之精思賢人(A)，致賢人之神來祐之(B)；思邪(A)，致愚人之鬼來惑之(B)。（《太平經．乙部》）

b.巫覡云：「後湖水頭經過宮內(A)，致帝有疾(B)。」(《南齊書．本紀．明帝》)

c.若諦超越眾惡之瑕(A)，致眾開士來相化導(B)，是曰精進報。(西晉竺法護《賢劫經》卷 3)

d.所以然者，由其曩昔鬪亂聖眾，壞和合僧故(A)，致鐵輪轢斷其頭(B)。(東晉僧伽提婆《增壹阿含經》卷 48)

即使(6a)、(6c)「致」所帶句 B 屬於活動(activity)類的事件類型(situation type),亦非表達「所使為之事」，而是跟(6b)、(6d)一樣，皆表「事勢之使然」，為前因所引發的後果。

新興使役動詞「致」在中古時期便與既有的使役動詞「使」、「令」複合成詞，例如：

(7)a.汝不助我故，致使陀婆苦我如是。(東晉竺道生《彌沙塞部和醯五分律》卷 3)

b.前出二門，未到園所，中路而反，致令大王深見瞋責；今者豈敢復如此耶？（劉宋求那跋陀羅《過去現在因果經》卷 2）

由此，亦可見得「致」使役動詞身分之確立。

[2] 梅廣(2019:358)表示，結構上帶使役動詞的 B 句是一種無主語句，它沒有致事論元，只隱含一個致事語義角色，可藉由一個獨立的 A 句表達出來。

3.2「致」如何發展為使役動詞

「致」如何由「使至」義演化為只表致使義？張伊茹(2022:15)表示：「送到、送往」的過程蘊含一種可視的結果，即實物由甲方轉移到了乙方。後來「致」詞義引申，「送到、送往」擴展為因某種原因引起的事情發展的結局。此說表明「致」的「致使」義發源於施組「送到、送往」義，但語料顯示，使役動詞「致」所引出的「後效」都是作用於主語本身，而非施及他者。本文研判當是因為受組招致義的主語對於招引來的結果無法掌控，故容易語法化為表「事勢之使然」；相對地，施組「致」的主語操控性高，未見虛化跡象，且其句構常作「致＋直賓＋於＋間賓」，用「於」引介所止(goal)，也不易發生語法化。

試比較上述《周易》解卦的「致戎」與「致寇至」。「致」皆為招致義動詞，「致戎」帶的是體詞性賓語「戎」，「致寇至」帶的是謂詞性賓語「寇至」，惟後者有重新分析的可能：

(8)六三：負且乘，致寇至，貞吝。象曰：「負且乘」，亦可醜也。自我致戎，又誰咎也？（《周易．解》）

無論「戎」的到來，抑或「寇至」的發生，都是主語無法操縱且不樂遇見的結果。「致寇至」屬橋接語境(bridging context)，「致」分析為招致義動詞或使役動詞兩可，意指「招致敵寇到來的結果」，或「致使敵寇到來」，顯見自控性低的招致義容易引發致事的理解方式。

再看一例。凡招致義動詞帶的是謂詞性賓語，便容易被重新分析為使役動詞，表達起因事件與結果事件的因果關係：

(9)賢者有小惡以致大惡。褒姒之敗，乃令幽王好小說以致大滅。（《呂氏春秋．慎行》）

可比較「賢者有小惡以致大惡」與「幽王好小說以致大滅」，「致」的賓語「大惡」、「大滅」分別是體詞與謂詞性成分。前句表示賢者若放任小過失就會因此招致巨大的災難，後句表示幽王愛好巧言偽說而導致國家徹底覆亡。由於招致義非主語所能自控，事物的到來往往依循其前因，是故可以推判「致」應是在「S＋VP，致＋NP」的基礎上，因類推機制而產生「S＋VP，致＋VP/IP」，「致」進而在此構式中被重新分析為使役動詞。

4、「以致」的詞彙化

如上文例(7)所見，東漢以後，使役動詞「致」漸與「使、令」連用成詞。除此之外，「致」也跟原因介詞「以」共現，朝詞彙化為結果連詞「以致」邁進。目前，針對「以致」來源的問題仍舊聚訟紛紜，缺乏共識。張誼生(2006:119)認為「以致」的源式應是「介詞『以』＋動詞『致』」，不過，其成詞之例取自《呂氏春秋》和《史記》，其中「致」或表「給與」或表「招集」義，恐不可靠。李晉霞(2010)、席嘉(2010:325-326)和張伊茹(2022:13-14)皆表示「以致」來源於連詞「以」和動詞「致」的跨層組合，但是，有關結果連詞「以致」的出現時間則見解不一，依序推定於宋代以後、唐代或南北朝時期。

就語料看來，自東漢以降，即有「以」、「致」連用，出現於後句之例。「以致」前有謂詞組或句子表示原因，後帶謂詞組或句子表示結果，看似為結果連詞，然而中古時期的「以」恐怕仍可分析為引介原因的介詞，「致」為表致使、導致義的使役動詞，如：

(10)a.女小有頭痛，日月增甚，今朝發作，尤甚於常，以致絕命。(東漢安世高《佛說棕女祇域因緣經》)

b.由妄語故，眾生口氣醜弊，致不鮮潔：……由嫉妒故，以致穀不豐熟。(《增壹阿含經》卷 43)

(10b)排比行文，似透露「以致」融合成詞，僅表「致」義。實際上，在這些「以」的後頭都可補出回指代詞「是」或「此」，指示前面所述的事由。再看下例：

(11)梵志復以手擊之，白世尊言：「此女人身，氣力虛竭，又復飢餓以致命終。」佛告梵志：「如汝所言，此女實以是因緣致命終。」(《增壹阿含經》卷 20)

「飢餓」為因，「命終」為果，「以致」似為結果連詞，但佛陀答言「以是因緣致命終」，顯然「以」和「致」仍應分析為二詞。我們還注意到「致」所接謂詞性成分通常較為簡短，即使是子句，終究與「以（＋賓語）」共同說明同一主語，如例(11)「命終」指的是「此女」因飢餓而命終；(10b)「穀不豐熟」指的是「眾生」因嫉妒之故，招致穀不豐熟的惡果。「命」與「穀」皆為主語所領有的事物，「以＋致 IP」可能仍屬連動結構。

無可否認的是，導因於介詞「以」的賓語經常省略，使得「以」、「致」相連，融合為雙音詞；復因「以致」長期介乎表因果關係的前後語境，自然被重新分析為結果連詞。到了唐五代以後，「以致」所接子句的主語未必與前句一致，且句子明顯變長，趨於複雜，始與現代漢語結果連詞的用法相符。例如：

(12)a.官僚該詳蓋寡，所以凡給文解，莫曉規程。以致選人自詣京都，親求解樣。（唐王易簡〈請頒示文解板樣奏〉）

b.山僧素乏知見，復寡聞持，頃雖侍立於國師，不蒙一句開示，以致今日與諸仁者聚會，更無一法可相助發。（《五燈會元》卷 10）

c.若謂佛法果無付囑,則今日王舍城中,君聖臣賢,遞相欽奉,以致海內生靈,無不同瞻麗正之光。（《虛堂和尚語錄》卷 3）

相關例證直至南宋語錄才大量湧現，因此「以致」成詞的時間下限應落在宋代。

張誼生(2006)表示，「以致」因為動詞「致」的語義積澱，所引導的句子一般都帶有不如意的語用傾向，直到近年「以致」向「以至」靠攏，才突破了以往的限制。據(12)諸例可見，「以致」成詞之後，確實以連接負面結果句居多，然而卻不以此為限，即使到明清時期都還有用於中性或正面事例，如：

(13)a.我當初本是窮人，只為得了寶鏡，以致日遇橫財，如此富厚。(《二刻拍案驚奇》卷 36)

b.此番外國兵船到來，他如何竭力聯絡，竭力保護，以致那兵船上的提督，如何感激他，想報答他。（《官場現形記》55 回）

足見「以致」的「致」來自無法自控的受組義位，並非用於負面事例不可。

5、結論

本文指明上古漢語的致動詞「致」具綜合型性格，是「使至」義的作格動詞。導源於此，「致」可析分為「施」與「受」兩組下位義位，其中又各涵蓋幾個不同的義位。由於「致」所帶賓語成分的改變，中古以後，「致」變成使役動詞，表事勢之後效，致使的結果改由其他語詞加以編碼，呈現分析型特性。到了近代漢語，結果連詞「以致」應運而生，當源自原因介詞「以」與使役動詞「致」的複合。

主要參考文獻：王力 1965，〈古漢語自動詞和使動詞的配對〉，《王力全集》第 19 卷，北京：中華書局，2015。宋亞雲，〈動詞變價與作格化視野下漢語致使表達的演變〉，《當代語言學》28(2026.2):92-108。馬建忠著，章錫琛校注《馬氏文通校注》，北京：中華書局，1988。梅廣，《上古漢語語法綱要》，臺北：三民，2019。張伊茹《連接詞「以致」、「以至」的形成與偏誤分析》，南京師範大學漢語國際教育碩士學位論文，2022。龔煌城〈從漢藏語的比較看上古漢語的詞頭問題〉，《漢藏語研究論文集》（臺北：中研院語言所，2002）頁 161-182。

汉语第二人称代词指示对象扩展的历时演变——以“你”的虚构指示用法为中心

宋 雨润
九州大学言語文化研究院　特別研究者

一、引言

现代汉语中，以“你”为代表的第二人称代词通常用于指称言语交际中的听话人，是建立说话人与听话人之间人称关系的重要语言形式。然而，在实际语言使用中，“你”的指称对象并不总是现实交际中的特定听话人。吕叔湘（1985）等研究指出，在特定语境下，“你”不仅可以泛指一般人，还可以用于指称说话人自身。这表明，第二人称代词的指示功能并非固定不变，而是能够超越听话人的范围，指向更广泛、更复杂的话语对象。其典型用例如下：

（1）魏一平：我觉得最主要的，还是它那个地方形成那种相对封闭的那种村庄的那种，人与人之间的关系，完全打不进去。就是话也听不懂。然后你走到村里，走在街道上完全你就是一个外来人。哈，没有一个人开口，问路都问不到。
《圆桌派・第四季第八集“熟人”》

（2）尹烨：所以人是时代的产物，人创造不了时代，归根结底，你只是把握了时代的脉搏。《圆桌派・第五季第十一集“基因”》

例（1）基于说话人自身所经历的情境体验，“你”指向说话人“魏一平”；例（2）中的“你”则泛指成功了的这么一类人[1]。上述用例中“你”均超出了现实听话人的指示范围，而是通过话语构建出一种假想受话人或概括性受话人。对此，既有研究通常称之为第二人称代词的“移指”现象，本文沿用宋雨润（2024）的处理方式，将这类现象称为第二人称代词的“虚构指示（virtual reference）”。

这样的虚构指示现象，引出了一个历时性问题：这种超越现实听话人的用法究竟出现于何时？它是现代汉语“你”的新近发展，还是汉语第二人称代词长期以来即已具备的语用潜能？换言之，现代汉语中“你”的虚构指示是否能够在历史文献中找到其发展的线索与来源？为回答这一问题，有必要将现代汉语“你”的虚构指示现象置于汉语第二人称代词发展的历史过程中加以考察，从历时角度重新认识第二人称代词指示对象及其语用功能的发展轨迹。

基于此，本文以现代汉语“你”的虚构指示现象为切入点，结合上古至近代汉语的历时文献材料，对汉语第二人称代词指示对象及其语用功能的发展进行考察。重点分析《诗经》等上古文献中“尔”“汝”[2]的指示特征，并结合后世文献中第二人称代词的相关用例，探讨现代汉语“你”的虚构指示与汉语第二人称代词历时发展的关系。本文拟回答以下三个问题：①在汉语第二人称代词由古代多形式系统向现代“你”系统收束的过程中，其指示对象何时开始突破现实受话人的范围而指向非现实受话人？②在这一过程中，第二人称代词形成

[1] 需要说明的是，本文所称“泛指”并非指代多个现实的具体听话人，而是指第二人称代词脱离具体交际场景，对任意可能进入相关情境的对象进行概括性指称，其指示对象具有非特定性和开放性。宋雨润（2024）将此类用法称为“非特定虚构指示”。

[2] 本文以“尔”“汝”“你”为主要考察对象。考虑到历时演变过程中存在字形更替现象，上古文献中的“爾”“女”分别视为后世“尔”“汝”的对应形式，纳入统一考察范围。为保持文献原貌，语料引述时均保留原文字形。

了哪些不同的指示类型，其语用功能经历了怎样的发展与丰富？③第二人称代词超越现实受话人的指示功能的形成机制是什么，其发展过程中受到哪些语用和认知因素的推动？

二、先行研究

关于汉语第二人称代词的研究，既有成果主要集中于形式系统的历时演变。学者们围绕上古汉语“尔”“汝”“若”等第二人称代词的功能分工，以及近代汉语“你”的形成及其与其他第二人称形式的竞争替代过程进行了较为充分的讨论，基本勾勒出汉语第二人称代词由多形式并存逐步向现代“你”系统收束的发展轨迹。王力（1958）、吕叔湘（1985）、太田辰夫（1991）等根据字形演变及语音关联，认为“你”源于古代的“尔”。对于“你”的产生时间，学界普遍认为其出现最迟不晚于初唐。

（3）（前略）然后释而急问之曰：“你能作幾年可汗？”《周书·卷五十》

随着语言的发展，“你”在元明以来的白话作品中使用频率持续上升，并逐渐取代“尔”“汝”等传统第二人称形式，成为最主要的第二人称代词。

在共时研究层面，相关成果多以断代描写为主。洪波（2002）、张慧英（2025）、曹玮、李璐（2017）、郭婉晴（2026）等分别考察了以《左传》《论语》为代表的先秦汉语、以《世说新语》为代表的魏晋南北朝汉语以及唐宋时期第二人称代词的使用情况。这些研究主要从语义特征，句法功能与社会语用分布的角度展开，关注第二人称代词使用双方的身份关系、立场态度以及尊卑褒贬等语用意义。例如：

（4）初，卫侯游於郊，子南仆。公曰：“余无子，将立女。”《左传·哀公二年》

洪波（2002:32）指出，在《左传》中，“尔”的使用范围最广，适应性最强；“女”则主要用于身份较高者对身份较低者的称谓。曹玮、李璐（2017:149）认为，魏晋南北朝时期“汝”多用于表达告诫、责备或轻视等负面态度，并常见于亲属关系之间；“尔”则更多见于君臣、上下级等等级关系之中。此外，这一时期还出现了“汝辈”“汝等”等复数第二人称代词形式。

总体来看，既有研究已经较为充分地揭示了汉语第二人称代词的形式演变过程及其在不同历史时期的社会语用分布特征。然而，相较于形式系统和社会语用的研究，对于第二人称代词指示对象及其历时发展的关注仍相对有限。尤其是现代汉语“你”的虚构指示用法，相关研究多从共时角度分析其指示功能和认知机制，而较少将其置于汉语第二人称代词发展的长时段历史背景中进行考察。具体而言，不同历史时期的第二人称代词是否仅指向现实交际中的听话人，抑或已经能够进一步指向说话人自身、概括性受话人以及虚构受话人等非现实受话对象，以及这些用法的形成过程与发展机制为何，尚缺乏系统的历时研究。基于此，本文拟从历时视角出发，以现代汉语“你”的虚构指示用法为切入点，重新考察汉语第二人称代词指示功能的发展轨迹。

三、研究方法

本文采用历时考察与个案分析相结合的方法，本文的语料检索主要依托北京大学中国语言学研究中心（CCL）语料库（https://cclcorpus.pku.edu.cn/），以第二人称代词“尔（爾）”“汝（女）”和“你”为检索词，对不同时期汉语文献中的相关用例进行分析。对于重要个案，则进一步参照相关文献原本或整理本进行核对，以保证语料使用的准确性。在此基础上，结合具体语境，对第二人称代词的指示对象及其语用功能进行分析。

鉴于现代汉语中“你”的虚构指示多见于口语交际和会话场景，本文在语料选择上尽可能选取具有较强口语色彩或包含较多对话内容的文献，以考察三类第二人称代词在不同历史时期指示对象分布情况。具体文献来源如下表所示。

表 1 本文考察语料及其历史时期分布

历史时期	文献资料
先秦	《诗经》《论语》
魏晋南北朝	《搜神记》
隋唐五代	《启颜录》《敦煌变文选》
宋元	《朴通事》《朱子语录》
明清	《红楼梦》

在具体分析过程中，本文以现代汉语“你”的虚构指示现象为参照，根据第二人称代词指示对象的不同，将历史文献中的相关用例划分为现实受话人、概括性受话人和虚构受话人三种类型，并结合具体语境考察其指示功能及语用特点。其中，现实受话人指现实交际中的特定听话人；概括性受话人指在当前话语所构建的情境中，任意可进入该情境的对象；虚构受话人则指通过角色模拟、拟人化等方式建构的非现实特定对象，既可能指向说话人自身，也可能指向现实交际中不存在的假想对象，或未实际参与当前交际的第三方对象。

对于存在版本差异的语料，则通过异文比较的方法，对不同版本的用字及其话语功能进行分析，以观察第二人称代词在实际使用过程中的功能差异及演变趋势。

最后，在以上考察的基础上，进一步梳理第二人称代词虚构指示用法在历史文献中的发展脉络，并探讨其形成机制与演变动因。

四、考察

表 2 先秦至唐宋五代时期二人称代词指示对象分布[3]

	诗经		论语		搜神记		启颜录			敦煌变文选		
	爾	女	爾	女	尔	汝	尔	汝	你	尔	汝	你
现实受话人	189	46	20	17	22	78	2	19	19	0	88	31
概括性受话人	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
虚构受话人	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

4.1 现实受话人

（5）子謂子貢曰：“女與回也孰愈？”《论语・公冶长》

（6）子貢欲去告朔之餼羊。子曰：“賜也，爾愛其羊，我愛其禮。”《论语・八佾》

（7）問曰：“**汝鄰比何人也？**”曰：“康七。”《搜神记》

（8）果毅問云：“是誰教你？”青奴云：“是阿兄教。”《启颜录》

从表 2 的统计结果来看，自上古时期以来，第二人称代词主要用于指向现实交际中的听话人。无论是上古汉语中的“尔（爾）”“汝（女）”，还是后起的“你”，均广泛用于指

[3] 宋元以后“你”已经兴起，作为主要第二人称代词用例显著增多，其指示对象类型较难准确统计。鉴于本文旨在考察古代汉语中是否已存在类似“你”虚构指示的用法，统计暂以先秦至隋唐五代时期语料为主，后续时期语料主要作为个案参证。相关分类依据语境判断，或存在一定误差。

称现实会话场景中的特定受话人。例如，例（5）中的“女”明确指向与孔子对话的子贡。就各时期的语料而言，现实受话人用法均占据主导地位，并贯穿不同历史时期和不同类型的语料，表现出较强的稳定性。与此同时，表 2 还显示，至唐宋五代时期，“尔”的第二人称代词用法已明显减少，其使用功能逐渐向虚词用法转变。

4.2 概括性受话人

（9）嗟爾君子，無恒安處。靖拱爾位，正直是與。《论语・小雅・小明》

（10）凡百君子，各敬爾身。胡不相畏？不畏于天！《诗经・小雅・雨无正》

（11）如一江水，你將杓去取，只得一杓；將碗去取，只得一碗。《朱子语录》

（12）天教你「父子有親」，你便用「父子有親」；天教你「君臣有義」，你便用「君臣有義」。《朱子语录》

从统计结果来看，至唐五代时期，以第二人称代词指称概括性受话人的用法仍较为零星，相关例证主要见于《诗经》中的“尔”。与此同时，“汝（女）”基本用于指称具有明确所指的现实受话人。随着隋唐以后“你”的出现及其使用范围的扩大，“你”也开始承担概括性受话人的指示功能。由此可见，指示概括性受话人的“泛指”这一用法在古代汉语中并非始于“你”，而可能与“尔”的相关功能存在一定延续关系。由此，从语用功能的延续这一角度看，或可为“你”由“尔”演变而来这一观点提供新的旁证。

从目前收集的语料来看，宋元以前的概括性受话人用法主要集中见于《诗经》。而在宋元以后，《朱子语类》[4]中相关用例明显增多，表明“你”用于指称概括性受话人的现象已逐渐发展。值得注意的是，同一时期具有较强口语色彩的《朴通事》中却基本未见此类用法，说明第二人称代词的特殊指示功能未必与口语性强弱直接相关，而可能更多受到文本体裁及交际目的的影响。《诗经》中大量存在“呼告”“劝诫”的表达，《朱子语类》则包含大量讲学说理、伦理训诫和抽象论证。在此类语篇中，说话者往往并非面向某一特定听话人，而是借助第二人称代词将话语推广至符合某种条件的一般对象，从而使其获得概括性受话人的指示功能。因此，概括性受话人的形成与说理、劝诫等泛化表达需求之间存在着密切联系。这一特点也与现代汉语中“你”的相关用法主要出现在劝告、说理等会话场景中的情况相一致。

4.3 虚构受话人

从统计结果来看，宋元以前的语料中，指称虚构受话人的用例几乎未见，目前仅《诗经》中发现一例，但其是否属于虚构受话人的用法仍存在一定的讨论空间。具体如下：

（13）碩鼠碩鼠，無食我黍！三歲貫女，莫我肯顧。《诗经・魏风・硕鼠》

例（13）中，“女”并非指向现实交际中的听话人，也非指向“硕鼠”，而是指向借助比喻和拟人化手法所建构的虚构受话人，即当时的“统治者”。

宋元以后，在《朱子语类》和《朴通事》中也尚未发现明确指示虚构受话人的实际用例。不过，《朱子语类》中有如下记载：

（14）“如幕中之辨，人反以汝為叛；台中之評，人反以汝為倾等類，亦是自谓。古人此樣多。”《朱子语录》

[4] 《朱子语类》中“你”共出现约 229 例，主要见于朱熹与门人的讲学对话，具有较强的口语性质。其中指代概括性受话人约 153 例，现实受话人约 71 例，另有 5 例暂难归类。“汝”的使用则主要来源于对《论语》等经典文献的引用和解释，较少出现于真实对话场景中。

朱熹指出，“尔”“汝”在特定语境下可以用于“自谓”，即以第二人称形式指称自身。同时，他还认为“古人此样多”，说明该现象并非个别特例，而是古代汉语中较为常见的一种表达方式。由此可见，南宋学者已经意识到第二人称代词可以突破现实受话人的限制而产生自指用法。虽然现存语料尚不足以证明这种用法已广泛进入当时口语系统，但至少说明第二人称代词向自指领域扩展的现象，至迟在南宋时期已经进入学者的语言认知范围。

（15）又自己問着自己说：“以后可再顧三不顧四的混管闲事了？以后還单听叔叔的話不听婶子的話了？”（《红楼梦庚辰本》）

（16）又自己问着自己说：“以后可还再顾三不顾四的不了？……婶娘是怎么样待你？你这么没天理，没良心的！”（《红楼梦程甲本》）

《红楼梦》版本异文也反映了虚构受话人用法的发展。（16）中新增的“你”并非指向现实听话人，而是通过模拟凤姐训斥贾蓉的话语，构建出一个虚拟的受话人位置，使人物得以从他者视角对自身进行谴责，增强了场景的戏剧性。也反映出清代后期第二人称代词已经能够较为自然地用于构建虚构受话人，通过模拟他者话语实现自我观照与自我谴责。

五、结论

①本文以现代汉语“你”的虚构指示现象为切入点，对上古至近代汉语第二人称代词的指示对象进行了初步考察。调查发现，第二人称代词超越现实受话人的用法并非现代汉语“你”的新近现象，而是在先秦《诗经》时期便已存在。②本文将第二人称代词的指示对象大致分为现实受话人、概括性受话人和虚构受话人三类。考察结果表明，三种指示方式并非前后相继的历时发展链条，而是围绕现实受话人这一核心长期共存，并随具体语境不同发挥不同的语用功能。因此，第二人称代词的历史发展并不表现为指示对象的持续转移，而是逐渐形成了以现实受话人为核心、概括性受话人与虚构受话人为补充的功能网络。③现代汉语“你”的虚构指示同样并未产生新的人称意义，而是在长期的语言发展过程中，受话人泛化与视角投射机制共同作用下形成的一种语用扩展。说话人通过构建虚拟受话人，将经验共享、角色模拟等纳入当前话语空间，从而增强话语的戏剧性和代入感。因此，“你”的虚构指示并非现代汉语中孤立出现的新现象，而是汉语第二人称代词功能网络长期发展完善，适用范围不断扩大的结果，是其历时发展在现代汉语中的具体体现，具有明显的历史连续性。

参考文献

曹玮、李璐（2018）《從《世説新語》看魏晉南北朝時期第一人稱代詞的句法、語義、語用特徵》《文献语言学》1:127-139.

郭婉晴（2026）《唐宋时期人称代词“尔”“汝”的使用特征与差异》,《嘉兴大学学报》1-9.

洪波（2002）《先秦汉语对称代词“尔”“女（汝）”“而”“乃”的分别》,《语言研究》2:30-37.

吕叔湘（1985）《近代汉语指代词》上海：学林出版社.

宋雨润（2024）《第二人称代词“你”的虚构指示用法》,《現代中国語研究》26:87-100.

太田辰夫（1991）《汉语史通考》（江蓝生、白维国译）重庆：重庆出版社

王力（1958）《汉语史稿》北京：科学出版社

张慧英（2025）《《论语》中的第二人称“子”“女”“尔”》,《郑州大学学报（哲学社会科学版）》58(6):131-135.

基于说话人与听话人、说事人与听事人角度对汉语人称代词的“单数”与“复数”、包括式与排除式的考察
—以《老乞大》、《元朝秘史》、《全元曲杂剧》为例

孟子敏
松山大学 教授

1 前言

现代汉语[①]的人称代词数量有限，屈指可数。但它已经成为语言学领域的热门课题。目前，人称代词的研究成果可谓是汗牛充栋。这里任何程序性的先行研究成果的罗列、描述，都无疑是挂一漏万。所以，本文只在讨论某一具体语案时，笔者再行引述相关成果。

汉语的人称代词主要有第一、第二、第三人称代词三类。本文主要讨论的对象是第一、第二人称代词，基本上以第一人称代词的“俺”和“咱”、第二人称代词的“您（恁）”为主。

“俺”、“您”、“咱”，今天的汉语中仍是常用的人称代词。就地域来看，河南省、山东省、安徽省北部，河北省石家庄等地使用 “您”，基本上连成一片；使用“俺”的地区范围又有扩大，加上了河北省大部和辽宁省。使用“咱”的范围就更广了[②]。格外显眼的是，北京只有“咱”在用，不使用“俺”和“您”。其实，至晚在蒙元之前，北京也是使用“俺”、“您”、“咱”的。这样，历史上使用“俺”、“您”、“咱”的地区就比现在还要广，甚至可以说连山西省也囊括进来了[③]。

关于“俺”、“您”、“咱”讨论甚至争论的焦点主要集中在单数与复数、包括式与排除式等方面。比如，关于“俺”、“恁”（“您”）是表达单数还是复数的问题，故佐藤晴彦有以下观点：1.“恁” 没有单复数的区别，“俺”与“恁”相同，也没有单复数的区别[④]。2.《老乞大》“咱这高丽言语”中的“咱”与“俺”相同[⑤]。有学者对这些观点提出了反对意见[⑥]。关于“俺”，也有学者指出它也可以是包括式，即包括说话人和听话人双方[⑦]

2 问题的提出

2.1 说话人与听话人

即直接参与交际对话的双方，这是考察“俺”、 “您” 、“咱”等人称代词的使用状况时，唯一使用的一对概念，似乎学界主要考虑到的因素甚至说是唯一因素是说话与听话。这一点是学术共识，自不待言。笔者在检视近代汉语史上的语料时发现，只考虑这一直接参与交际的双方是不够的。比如以下两个例句。

---

① 本文用“现代汉语”指汉语普通话，用“汉语”指汉语地区包括北京地区在内的汉语方言。
② 曹志耘主编 《汉语方言地图集·语法卷》，第 1、2、4 页，2008 年 11 月，商务印书馆，北京。
③ 竹越孝，在《“俺”是山西话，“恁”是官话—从《老乞大》的修订看人称代词复数的单数化》中分析崔世珍（1473 年-1542 年）《老乞大集览》所引《音义》中的“那个‘俺’字是山西人说的”时指出，山西地区说“俺”。《清华语言学》 第 5 辑，第 79 页，張赦主編，中西書局，2024 年 8 月。
④ 金文京、玄幸子、佐藤晴彦、鄭光 《〈老乞大〉朝鮮中世の中国語会話読本》，金文京、玄幸子、佐藤晴彦訳注、鄭光解説，第 22 页，注 (2) 恁、注 (3) 俺。平凡社，2002 年 2 月 25 日，初版第 1 刷，東京。
⑤ 同上，第 34 页，注 5.
⑥ 栗林均 《〈元朝秘史〉におけるモンゴル語と漢語の人称代名詞の対応》，《東北アジア研究》，2003 年，7 号，1-32.
⑦ 川澄哲也 《〈元朝秘史〉漢訳部分 における 第 1 人称“複数”代名詞 をめぐって—“佐藤・栗林 論争”の一側面—》，日本中国語学会 2025 年度第 5 回研究例会

（1）（张千上，云）自家张千是也。奉*俺*老爷命，着干事回来，如今见老爷去咱。(《钱大尹智宠谢天香·第二折》)

（2）那篾儿乞惕的百姓。连夜顺薛凉格河。荒忙走的其间。*咱*的军每也紧随着。就夜里掳掠。 行间。帖木真于那走的百姓内。唤*他*的妻孛儿帖。孛儿帖名字。孛儿帖在那百姓内听着。认得是帖木真的声音。(《元朝秘史》[8]卷三 十六页下 总一百十六页下)

例（1）中，是一人在说，没有人参与交际，即没有听话人，那说话人用“俺”是排除是谁呢？例（2）中，没有听话人，甚至连明确的说话人也不存在。那用“咱”又包括谁呢？

2.2 说事人与听事人

说事人、听事人不是直接参与交际对话的双方，但这一因素也会直接影响到“俺”、“咱”、“您”等人称代词的使用，或者说影响到人们对人称代词的解释。上述例（1）中，张千是在向观众自报家门 ，他是作为说事人，排除了作为听事人的观众，所以，他用了“俺”。例（2）是《元朝秘史》总译中的句子。《元朝秘史》是古代蒙古史的基本史料之一，它记述了蒙古民族500多年形成、发展、壮大的历史。作者（汉语翻译者）是面向读者描述（据说一开始是讲述）元朝的历史。作者理所当然是站在蒙古民族的立场上，向蒙古民族讲史。双方同为一方，作者是说事人，蒙古民族是听事人。所以，从这个角度就不难理解作者之所以用“咱”了。

在元杂剧、近代白话小说（含历史故事等）等语料中，随时都有说事人和听事人的影子存在。比如人称代词排除式的“俺”，有些用法从说话人和听话人的角度来看，有学者分析为包括式。不过，如果从说事人和听事人的角度出发去分析，“俺”无疑是排除式。

有鉴于此，在研究、考察汉语的人称代词时，说事人与听事人这一因素是不可或缺的。笔者首次提出并导入这一对概念。

2.3 单数与复数

这是一对司空见惯的现代汉语的语法概念。在谈到人称代词等时使用这一概念，但它真正的意义究竟在哪里，我们根本找不到。包括笔者本人，也曾明确地使用这一概念[9]，但随着认知的深化，笔者认为有必要对此重新进行解释。请看以下两个例子（罗马字母编号的例句为笔者自拟）。

a. 这是我买的铅笔。

b. 这都是我买的铅笔。

a中的“这”、“铅笔”表示单数，b中的“这”、“铅笔”表示复数。推测没有人会这么理解。所以，本文题目中特意将“单数”、“复数”加了引号，为了讨论的方便，笔者只能沿袭“单数”、“复数”的概念，但最后笔者摈弃汉语中的这对概念。关于“俺”、“您”、“咱”的单数、复数问题，容后详细讨论。

2.4 包括式与排除式

“俺”是排除式、“咱”是包括式，这是学界达成的基本共识。在语用环节，特别是“咱”到底指向谁，确实有变例，需要具体的分析。古屋昭弘敏锐地捕捉到了这一点。他针对上文提到的《老乞大》“咱这高丽言语”中的“咱”与“俺”相同这一点，指出那种语用环境下只能那么理解，是一种例外[10]。为什么会发生这中例外，本文将在3.4中进行

[8] 本文使用的版本为《元朝秘史》(校勘本)，乌兰 校勘，中华书局，2012年7月第1版，北京。
[9] 孟子敏 《现代汉语普通话人称代词复数形式的形成》,《语言教学与研究》，2010年第6期，第54-61页。
[10] 古屋昭弘《〈老乞大〉朝鮮中世の中国語会話読本 2002年 2月，平凡社 東洋文庫 》『開篇』Vol.21

分析。

关于排除式，一般认为只限“俺”。本文认为 “俺”是将对方排除，“您”是将己方排除，二者都是排除式。

有鉴于此，本文选取了《老乞大》、《元朝秘史》、《全元曲杂剧》，基于说话人与听话人、说事人与听事人的角度对汉语人称代词进行考察。

3 诸作品中的“俺”、“您”、“咱”

《老乞大》、《元朝秘史》、《全元曲杂剧》是学界耳熟能详的语料。这里不再做详细的介绍。《全元曲杂剧》，包含了 51 名有名有姓的作家和十数名乃至数十名无名氏的 167 部杂剧作品。拿“俺”为例，在 166 部元杂剧中都大量地使用了“俺”，只有 1 部作品中没有出现“俺”，即詹时雨（生平不详）的《对弈》（仅存一折，且有争议）。由此可见，“俺”在当时普遍使用的状况。元杂剧中，本文暂选关汉卿（约 1234 年以前－约 1300 年，元大都人）的 18 部作品来进行考察。

3.1 《老乞大》中的“俺”、“您”、“咱”

《老乞大》中人称代词的使用情况，李泰洙[11]、远藤雅裕[12]、竹越孝[13]等已经向学界展示了优秀的研究成果。限于篇幅，本文暂不详细引用。这里分享的是笔者关于《老乞大》中“俺”、“您”（写为“恁”）、“咱”的分析[14]。《老乞大》中，还有“俺每”、“咱每”的说法，具体参见下表 1。

《老乞大》全书为会话形式，是高丽商人至元境内，结识王姓商人，一起结伴到大都（北京）做买卖的口语会话，是当时的汉语教科书，有些地方语言粗糙。文中没有旁白，没有说明文字，只有直接参与交际对话的双方。所以，笔者从说话人与听话人的角度来统计“俺”、“恁”、“咱”的使用。统计时暂且分为单数、复数与包括式、排除式（表中记为“包”、“排”）各两项。

表 1 《老乞大》中的“俺”、“咱”、“恁”

俺				俺每				恁				咱每				咱			
单数 53		复数 128		单数 0		复数 1		单数 38		复数 84		单数 0		复数 83		单数 0		复数 8	
包 0	排 53	包 0	排 128	包 0	排 0	包 0	排 1	包 0	排 38	包 0	排 84	包 0	排 0	包 82	排 1	包 0	排 0	包 7	排 1

“俺”表单数约为 53 次、表复数约为 128 次；“俺每”表单数 0 次，表复数 1 次。“恁”表单数约为 38 次、表复数约为 84 次。“咱每”表单数约为 0 次、表复数约为 83 次；“咱”表单数约为 0 次、表复数约为 8 次。

就包括式、排除式而言，“俺”、“俺每”全数为排除式，二者共计 181 次。“恁”全为排除式，计 122 次。“咱每”82 次为包括式，1 次为排除式；“咱”7 次为包括式，1 次为排除式。

3.2 《元朝秘史》中的“俺”、“您”、“咱”

268-272.

[11] 李泰洙 《<老乞大>四种版本语言研究》, 2003 年 9 月,语文出版社,北京。

[12] 远藤雅裕 《<老乞大>四种版本里所见的人称代词系统以及复数词尾》，载《韩国的中国语言学资料研究》，203-233 页严翼相、远藤光晓编，2005 年，学古房，首尔。

[13] 竹越孝，参见前注③.

[14] 竹越孝 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ《<老乞大>四種版本対照テキスト》, 神戸市外国語大学外国学研究所, 2021 年 8 月。

本文使用的《元朝秘史》语料，是总译部分。它的语言构成比较复杂，有对话，也有叙事。有的看似对话，但不知道是谁说，读起来又像叙事。在分析语案时，无疑会增加不少困难。本文首先从说话人与听话人、说事人与听事人（表中分别记为“说话”、“说事”）的角度进行统计、分析（参见表 2），然后再就单数与复数、包括式与排除式进行统计、分析（参见表 3）。

本文统计分析的《元朝秘史》相关人称代词主要有“俺”、“俺每”、“您”、“咱”、“咱每”、“我们”、“你们”。

表 2 《元朝秘史》中说话人与听话人、说事人与听事人中的“俺”等的分布表

俺		俺每		您		咱		咱每		我们		你们	
说话	说事	说话	说事	说话	说事	说话	说事	说话	说事	说话	说事	说话	说事
36	2	1	0	59	0	17	1	39	3	8	0	13	0

表中人称代词在说话·听话中使用的总次数为 173 次，说事·听事中使用的次数为 6 次。说事·听事中使用的次数虽然少，但为我们准确地解释某些人称代词提供了新的视点。请看例（3）。

（3）朵奔篾儿干在时生的别古讷台、不古讷台两个儿子，背雾共说，俺这母亲。无房亲兄弟，又无丈夫。生了这三个儿子。家内独有马阿里黑伯牙。兀歹家人。莫不是他生的么道。说间。他母亲知觉了。（《元朝秘史》[15]卷三 十六页下 总一百十六页下）

两个儿子是谁再说，其中的“俺”难道是指两个人吗？很费解。其实，这是说事人在说，是面向听事人在讲故事。这里的“俺”仍然是排除式，排除的是听事人。

表 3 《元朝秘史》中的“俺”、“俺每”、“您”等

俺				俺每				您				咱			
单数		复数		单数		复数		单数		复数		单数		复数	
18		20		0		1		16		43		0		18	
包	排	包	排	包	排	包	排	包	排	包	排	包	排	包	排
0	18	0	20	0	0	0	1	0	16	43	43	0	0	0	18
咱每				我们				你们							
单数		复数		单数		复数		单数		复数					
0		42		0		8		0		13					
包	排	包	排	包	排	包	排	包	排	包	排				
0	0	42	0	0	0	5	3	0	0	0	13				

表中的“俺”、“咱”仍以表复数者居多，但“俺”表达单数 18 次、表复数为 20 次，二者非常接近。这应该是跟参与故事的角色人数有着直接关系。

3.1 关汉卿杂剧中的“俺”、“咱”、“您”

关汉卿杂剧中，频繁使用“俺”、“咱”、“您”。虽然是戏曲作品，但出自说事人·听事人角度的人称代词用法随处可见。具体统计见表 4.

表 4 《元朝秘史》中说话人与听话人、说事人与听事人中的“俺”等的分布表

俺		俺们		您		咱		咱们		我们(每)		你们(每)	
说话	说事	说话	说事	说话	说事	说话	说事	说话	说事	说话	说事	说话	说事
455	140	5	0	205	0	152	7	1	0	2	0	5	0

用于说事的“俺”出现 140 次，“咱”出现 7 次，应该还是很可观。这是因为在杂剧的道白、唱词中需要自报家门，自己讲述自己的故事。当然，用于说话的次数还是压倒性的。

[15] 本文使用的版本为《元朝秘史》（校勘本），乌兰 校勘，中华书局，2012 年 7 月第 1 版，北京。

表单数、复数的情况，统计为表 5.表中“咱”暂时全列为表复数，实际上有表单数者。

表 5 关汉卿杂剧中的“俺”、“俺们”、“您”等

俺				俺每				您				咱	
单数 492		复数 103		单数 0		复数 5		单数 191		复数 24		复数 159	
包 0	排 492	包 0	排 103	包 0	排 0	包 0	排 5	包 0	排 191	包 0	排 24	包 159？	排 0
咱们				我们(每)				你们(每)					
单数 0		复数 1		单数 0		复数 2		单数 0		复数 5			
包 0	排 0	包 0	排 1	包 0	排 0	包 0	排 2	包 0	排 0	包 0	排 5		

不难看出，“俺”、“您”表达单数的次数上升为绝对优势。

3.4 考察

对于上述 “俺”、“您”、“咱“等，从说话人与听话人、说事人与听事人的角度去理解，包括式、排除式等都能得到合理的解释。至于表达单数和复数，完全是由语用环境决定的。语料中的真实语案证明了这一点。举例从略。在现实的语案中，例子比比皆是。如：

c. A：您打哪里来的？ B：俺打山东来的。（对一个人说话）

d. A：您打哪里来的？ B：俺打山东来的。（对两个以上的人说话）

完全一样的对话，可以判定 c 中“您”、“俺”是单数，d 中“您”、“俺”是单数。这是学者的观点。其实。对于对话者来说，根本不会意识到单数、复数的问题。“俺”、“您”并不存在单数、复数的区别，或者说区别单数、复数是没有语法意义的。“俺”、“您”只是表达我方、你方，“咱”表达你我双方。所以，这就有了以下的格式：

俺：排除式 我方 — 咱：包括式 你、我双方

您：排除式 你方— 〇

咱：主要指你我双方，也可指你方，也可指我方。

4 结语

概括上述讨论和数据，初步总结如下：

1. “俺”、“您”、“咱”并不存在单数、复数的区别。在汉语中，单数、复数是没有意义的一对概念。

2.从说话人与听话人、说事人与听事人角度出发，对于“俺”、“您”、“咱”等的使用均可以做出合理的解释。

明代北方诗人诗作中支通鱼虞现象的考察

余仁偉
関西大学 大学院生

1.前言

《列朝诗集》丙集中出现数例北方籍诗人用支韵与鱼虞韵相押的诗作。用例虽极少，然此类支通鱼虞的现象在《列朝诗集》甲乙二集所录北方诗人作品中未曾得见，颇有“凭空出现”之感。《列朝诗集》六集中，甲乙丙丁四集大体依时代为序：甲集（含前篇）所当为龙凤至建文（1355—1402），乙集所当为永乐至天顺（1403—1464），丙集所当为成化至正德（1465—1521），丁集所当为嘉靖至崇祯（1522—1644）。据此或可推断，明代北方诗人用支韵通押鱼虞应起始于明代中叶。考虑到《列朝诗集》收诗存在局限，本文另考察了《明诗综》与《石仓十二代诗选》两部明诗总集，又发现数例北方诗人用支韵通押鱼虞诗作。巧合的是，各诗集中所录北方诗人的此类用韵，均始见于明代中叶的诗作中。这一“突然出现”的通韵现象成因为何，值得进一步考察。

2.明代北方诗人支通鱼虞诗作一览

本文所收集明代北方诗人以支鱼通押的诗作共 10 例，《列朝诗集》中见 5 例，《石仓十二代诗选》中见 4 例，《明诗综》中见 1 例，诗作名及韵字如下：

表 1.明代北方支通鱼虞诗目及韵字

诗人	籍贯	诗目（韵段）	韵字[1)]	出处
石珗	藁城	苦熱行（韵二）	纸韵-市；御韵-箸；寘韵-翅	《列朝诗集》丙集第五
		涼風曲	纸韵-耳裏綺爾；麕韵-縷	《列朝诗集》丙集第五
王廷相	仪封	西京篇（韵八）	纸韵-裏市鄙似；麕韵-主	《列朝诗集》丙集第十一
何景明	信阳	平埧城南村三首其一	纸韵-杞裏；荠韵-啟；语韵-語黍	《列朝诗集》丙集第十二
		畫馬行（韵二）	麕韵-雨；纸韵-水綺子	《明诗综》卷三十五
		明月篇（韵四）	纸韵-起水裏；语韵-舉	《石仓十二代诗选》明诗次集卷九十二
韩邦靖	朝邑	長安宮女行（韵三十一）	麕韵-取；纸韵-旨此	《列朝诗集》丙集第十六
李梦阳	庆阳	馮御史允中書	支韵-欺為；鱼韵-魚書予	《石仓十二代诗选》明诗次集卷八十一
左国玑	祥符	芳洲吟	纸韵-芷；语韵-許佇；麕韵-雨	《石仓十二代诗选》明诗次集卷八十三
张凤翔	洵阳	江頭老人歌（韵一）	纸韵-子；麕韵-雨；语韵-纻	《石仓十二代诗选》明诗次集卷一百五

关于明代北方诗人使用支鱼通押这一用韵方式的原因，本文提出三种推测：①唐五代时

西北音的影响。②南方诗人用韵对北方诗人的影响。③明代北方音系的语音演变映射到了诗人的用韵上。本文将围绕这三种推测进行讨论。

3.唐五代时西北音影响之推测

唐五代的西北方音中存有“鱼入支微”这一语音现象，这一发现来自对敦煌文献的研究。罗常培（1933）以敦煌汉藏对音写本为材料，将唐五代的西北方音分为 23 摄 55 韵；其中 i 摄 i 韵含脂、之、支开口、微及鱼半。除了对音资料外，敦煌文献中的互注现象也反映了唐五代西北音中的鱼虞读同支微这一情况，如李华斌（2022）揭示的《敦煌佛经音义》、《开蒙要训》等资料中的支鱼互注。“鱼入支微”的现象在现代陕西、甘肃、山西等地的方言中也存在，如：山西“鱼”“驴”读之有 i 的痕迹[2]，陕西渭南“去”读作 ts^hi，甘肃敦煌“去”白读 $tɕ^hi$[3]。

既然“鱼入支微”这一现象自晚唐五代已存在于西北方音中，而现代方言也有留存，那么明代北方诗人诗作中的支通鱼虞，是否缘于这种五代方音对整个北音的渗透？答案应是否定的，理由有两点。

一是支通鱼虞的现象在北方诗人作品中的出现极为突兀，具有断代性。若其缘于唐五代西北方音的存续与渗透，那么就不该在成化年以前北方诗作中全无踪迹。

二是“鱼入支微”这一语音现象在地域上具有局限性，现代北方话中的“鱼入支微”现象多集中在陕甘晋方言中。明代用支鱼通押的北方诗人籍贯有河北藁城，河南仪封、信阳、祥符，而这些地区的方音中不存在“鱼入支微”的现象，若是支通鱼虞这一现象来由为西北方音的渗透，那么上述几个地区的方言中应也存在这类“鱼入支微”的现象。另外，徐朝东（2019）提及唐五代时山东、河北、河南等地文人的用韵中都没有支鱼相押的例子。可见“鱼入支微”的现象具有较强的地域性。

所以,明代北方诗人作品中的支通鱼虞并非缘于唐五代时西北方音中存在的“鱼入支微”这一古老的语音特征。

4.南方诗人用韵对北方诗人的影响之推测

支鱼通韵这一现象并非只见于北方诗人的作品中，南方诗人诗作中也存在大量支通鱼虞之例。南方诗人诗作中的支通鱼虞不仅为数众多，而且起源较早，其间未曾出现断层。据钱毅（2008）的研究，宋代江浙诗人用支微通押鱼模的次数高达 253 次。明代的吴地诗人作品中的支通鱼虞亦不乏见，仅《列朝诗集》甲集中所录就有 18 例，数量不可谓不多。而明代文风南盛于北，那么，是否有可能北方诗人作品中出现的支通鱼虞现象是受到了南方诗人用韵的影响？

南方诗人作品中的支通鱼虞，与普遍存在于南方系方言如吴方言、赣方言、江淮官话、闽北方言中的“支微入鱼”这一语音现象密切相关。以吴方言为例，列举几例明初吴人所作以支鱼通押的诗作，平上去声各举一例如下：

①王逢《贈李宣使》：虞韵-艫孤夫，支韻-咨。

②许继《中夜聞風雨蒲林明旦即為重九情之所至輒見一辭》：麌韵-雨，语韵-語序與緒宇侶，纸韵-委。

③戴良《渡黑水洋》：遇韵-渡怒步訴素霧遇懼，御韵-處據馭慮，寘韻-墜。

将所列诗作中的鱼虞韵字依照等类区分则可得出如表 2 所示结果。

表 2.吴语区诗人支鱼通押诗作鱼虞韵字等类

韵摄	声调	一等	三等
遇摄	平声	艫孤	夫
	上声		雨語序與绪宇侶
	去声	渡怒步訴	霧遇懼處據馭慮

可以看出，吴地诗人以支鱼通押时，对鱼虞韵字的选择不存在限制，一、三等均可与支韵字押韵，这说明了吴语区诗作中的支通鱼虞，关键在于支押入鱼虞，即支韵字发生音变，读之近似鱼虞，这点与“支微入鱼”这一语音现象完全贴合。

明代北方诗人的支鱼通押与吴语区诗人则明显不同，吴语区诗人以支鱼通押时对鱼虞韵之韵字的选择局限较小，一、三等字均可，但北方诗人所用鱼虞韵字却均为三等字，无一例外，限制较大。现将北方诗人作品中鱼虞韵字的等类展示如表 3 所示。

表 3.北方诗人支鱼通押诗作鱼虞韵字等类

韵摄	声调	一等	三等
遇摄	平声		魚書予
	上声		縷主語黍雨舉取許佇竚
	去声		箸

北方诗人与吴地诗人在鱼虞韵字使用上存在的较大差异，意味着南北诗人作品中支通鱼虞的机制应当并不相同,若是北人用韵的确受了南人影响,则在韵字取舍上应更加趋于一致。基于这点，基本可以否定北方诗人作品中的支通鱼虞是受到南方诗人用韵影响从而产生的这一推测。

另外，北方诗人作品中支通鱼虞的出现要远晚于南方诗作，如果北方诗作中的这种通韵现象真是受了南方诗人用韵的影响，那么便无法解释为何中间存在如此之久的时间断层。这点也能说明北方诗作中支通鱼虞的产生原因并非是受到南人用韵的影响。

5.明代北方音系语音演变影响用韵之推测

既然唐五代西北方音留存与南方诗人用韵影响北方诗人这两点均不是支通鱼虞产生的原因，那么这一现象就需要从北方音系自身的语音演变来寻找原因。明代的北方音系中发生了许多变化，如全浊声母清化、入声韵尾消变、阳声韵尾-m 变-n 及撮口呼的形成等。但在北方音系发生的诸多音变中，能作为支通鱼虞这一现象语音基础的，应当只有鱼虞韵的撮口化。

鱼虞韵的撮口化，指的是遇摄三等字韵母由 iu 转化为单元音 y 的过程。从明代北方诗人作品中对鱼虞韵字的选用来看，恰好都是三等字。王力（1987）根据徐孝《等韵图经》拟定了一套明清时期的韵母体系,将居鱼韵拟音为 y,其论述为:“元代鱼模撮口呼必须拟测为[iu],然后能和合口呼[u]押韵；明代居鱼部正相反，它和衣期同属《等韵图经》的止摄，必须是转化为[y]，[y]与[i]才能押韵。”[4)] 王力认为鱼虞韵撮口化彻底完成、产生单元音 y 后，仍可与支韵的 i 押韵，也以十三辙中 i、y 同属衣期辙作为旁证。

然十三辙多为北方戏曲服务，戏曲是用来唱的，有了曲乐的搭配，在唱中 i、y 谐调就十分正常；而诗是用来读的，诗中 i 与 y 是否谐调，则需另作考量。民国时期编纂的诗韵《中华新韵》中鱼不与支微相混，这至少说明在诗韵传统中，[y]与[i]能否通押是值得怀疑的。据此或可推断，鱼虞韵撮口化彻底完成、变为 y 之后，在诗韵中已难以与 i 构成通押。

若此推断成立，那么支通鱼虞这一现象出现的原因就应是鱼虞韵的撮口化尚未完成，处于一个中间阶段，此时撮口韵母 y 尚未成形。若要使支鱼能够通押，则撮口化形成过程中 u 音的特点应发生弱化，读之近似 i 音，如此才可以形成支通鱼虞这一现象。《列朝诗集》丁集所收录的嘉靖至崇祯年间北方诗人诗作中支通鱼虞这一现象逐渐消失，这点也可以说明遇摄三等字在单元音 y 愈发稳固后，就不能与 i 相押韵了。

综上，明代北方诗人作品中出现支通鱼虞的现象，原因在于遇摄三等字的撮口化所导致的 u 音特点的弱化，从支通鱼虞的通韵现象来看，撮口呼 y 音的形成应是 u 音先弱化，其特点被 i 音逐渐吸收，最后形成了 iu 到 y 的这一转变。王力先生所观察的《等韵图经》中 i、y 同摄，或许并非是真正的 y，而是 u 音特点逐渐弱化，i 音特点占据主导的过渡音值。

6. 小结

本文对明代北方诗人诗作中支通鱼虞现象进行了系统考察，主要结论如下。

支通鱼虞现象在明代北方诗人作品中确有存在，共辑得 10 例，分别见于《列朝诗集》《石仓十二代诗选》《明诗综》三部明诗总集。从时间分布来看，此类用例在成化年以前未见踪影，至明代中叶始集中出现，具有明显的断代性与“突然出现”的特征。

本文提出三种可能的成因推测，并逐一检验。其一，唐五代西北方音中虽存有“鱼入支微”现象，但该现象地域性强，集中于陕甘晋一带，而明代使用支通鱼虞的北方诗人籍贯多为河北、河南等地，且成化以前北方诗作中全无踪迹，不具备传承性，反而存在断层，故西北方音留存之说难以成立。其二，南方诗人支通鱼虞数量众多、源远流长，明代文风又南盛于北，但南北诗人在鱼虞韵字的等类选择上存在整齐差异，吴地诗人一、三等并用，北方诗人则仅用三等，若北方确受南方影响，韵字取舍不应如此泾渭分明，故南方影响之说亦难成立。

排除外部来源后，本文将成因归于明代北方音系自身的语音演变。明代正值鱼虞韵撮口化的关键时期，遇摄三等鱼、虞韵字韵母由 iu 向单元音 y 过渡。撮口化彻底完成，y 音成形之后，[y]与[i]在诗韵中已难以通押，故支通鱼虞只能发生于撮口化尚未完成的中间阶段。在此阶段，iu 韵母中 u 音成分不断弱化，i 音成分逐渐占据主导，听感上近似于 i 音，诗人以之与支韵字通押，自然谐适。这一推断与北方诗人所用鱼虞韵字均为三等字的现象相合，也得到《列朝诗集》丁集中通押现象逐渐消失这一事实的印证。

最后，关于撮口呼 y 音的形成时期，学界说法不一。本文通过对这 10 例明代北方诗人支通鱼虞诗作的观察，认为撮口呼 y 音的彻底形成最早也应是在明代后期，即 16-17 世纪以后。

附注：

1) 诗作中各韵字所属韵目均以平水韵韵目为基准。

2) 引乔全生（2004）的论述。

3) 引张盛裕（1985）的调查。

4) 见王力 1987《汉语语音史》499 页。

参考文献：

李华斌 2022<甘陕晋方言的“鱼入支微”与唐五代西北方音>,《语言科学》21（2）：200-209.

罗常培 1933《唐五代西北方音》,国立中央研究院历史语言研究所单刊甲种之十二.

钱毅 2008《宋代江浙诗韵研究》，扬州大学博士学位论文.
乔全生 2004<现代晋方言与唐五代西北方言的亲缘关系>,《中国语文》2004（3）：262-266.
王建领 2019《陕西方言集成（渭南卷）》,商务印书馆.
王力 1987《汉语语音史》,《王力文集》10,山东教育出版社.
徐朝东 2019<敦煌世俗文书所见之语音现象>《语言研究》39（1）：58-62
张盛裕 1985<敦煌音系记略>,《方言》1985（2）：134-139.

西晋呉方言の寒先真魂部の円唇母音について

三輪大樹
富山高等専門学校・助教

1. はじめに

一般に『切韻』音系において主母音音素は純粋に舌の位置のみが弁別に関与するとされる。平山(2006)では/ɑ a @ e ʌ/の５母音音素が再建されている。虞韻の[yu]など、現実には円唇主母音の実現があるものの、音素としては/yʌ･/のように円唇介音+非円唇主母音(+韻尾)の配列とされ、主母音の円唇性は介音によりもたらされたものと共時的には説明される。

一方、上古音では Jaxontox(1960)以降、/*o *u/の２種類の円唇主母音音素を再建することが定説となっている。つまり、上中古の段階において、主母音・介音音素の間に以下のような円唇性の弁別特徴の組み換えが発生したことになる。

上古: *V1 > 中古: MV2
上古主母音 V1 [+round]
中古介音 M [+round]
中古主母音 V2 [±round] (円唇性は弁別に無価値)

発表者の問題意識は、このような弁別特徴の組み換えが上中古間のどの時期に生じたかを明らかにすることにある。本発表では、西晋呉方言の寒先真魂部字、すなわちｎ韻尾を有する字の分析を通じて、円唇性の特徴の所在を論じる。これまで、西晋呉方言話者は北方文人に比べて、寒先真魂部の各韻を比較的自由に同用させているとされてきた(木津1994: 42)。このような同用の多さは、円唇性や狭母音性といった異なる韻の間で共通する弁別特徴を探る上で有利であると考えられる。

三輪(2024)でも論じたように、年代の古い呉地文人の方が往々にして北方的な押韻傾向を示すなど、呉方言と言っても年代によって押韻傾向に大きな違いが見られる。本稿では比較的多量の作品が残っている陸機・陸雲兄弟の韻文を題材とし、西晋期の呉方言の寒先真魂部字における円唇性の特徴の所在を考察する。韻字は全て Ting(1975)、周祖謨(1996)、及び鈴木慎吾氏「諸家先秦兩漢魏晉南北朝韻譜韻讀」より収集した。

2. 韻目ごとの押韻状況の検討

本発表では周祖謨(1996)の以下の韻部・韻目の分類を用いる(平声で上去声を兼ねる)。

寒部：寒韻(開)・桓韻(合)・刪韻(開合)
先部：先韻(開合)・仙韻(開合)・山韻(開合)・元韻(開合)
真部：真韻(開)・臻韻(開)・諄韻(合)・文韻(合)・欣韻(開)
魂部：魂韻(合)・痕韻(開)

韻目	開合	押韻する韻目ごとの字数の合計	開合の合計
寒	開	寒開337, 桓合263, 刪開64, 元合61, 元開57, 仙開42, 山開27, 先開12, 仙B開10, 刪合8, 仙B合5, 魂合5, 諄合3, 仙合2, 先合1, 諄A合1, 眞開1	開550, 合349
桓	合	寒開260, 桓合144, 刪開48, 元合44, 元開34, 仙開24, 山開18, 先開13, 仙B開7, 魂合7, 刪合4, 諄合3, 仙合1, 欣開1, 先合1	開405, 合204
刪	開	寒開64, 桓合50, 元合12, 元開9, 仙開9, 山開7, 先開4, 刪開4, 刪合2, 仙合2, 諄合2, 魂合2, 欣開1	開98, 合70
刪	合	寒開8, 桓合4, 仙開4, 刪開2, 先開2, 仙合1, 先合1, 山開1	開17, 合6
元	開	寒開57, 桓合35, 元合15, 仙開13, 元開10, 刪開9, 山開6, 仙B開5, 眞開5, 仙B合3, 文合2, 諄合1, 先開1, 欣開1, 眞A開1, 仙A開1, 眞B開1	開110, 合56
元	合	寒開61, 桓合45, 元合26, 文合17, 元開15, 刪開12, 眞開9, 先開8, 山開7, 仙開6, 諄合5, 魂合5, 仙合3, 仙B合3, 先合1, 仙B開1	開119, 合105
先	開	先開180, 眞開57, 先合53, 仙開50, 仙合37, 仙A開26, 山開18, 桓合13, 寒開12, 眞A開12, 元合8, 諄合6, 魂合5, 臻開5, 山合5, 文合4, 刪開4, 仙A合3, 諄A合2, 刪合2, 仙B合2, 元開1, 青開1, 欣開1	開367, 合140
先	合	先開53, 眞開28, 先合10, 仙合6, 仙開6, 諄合6, 文合6, 仙A開4, 山開3, 眞A開2, 臻開2, 仙A合1, 魂合1, 諄A合1, 桓合1, 元合1, 寒開1, 刪合1, 仙B開1	開100, 合34
仙全	開	先開76, 寒開53, 仙合46, 仙開40, 桓合32, 眞開32, 元開19, 山開17, 先合13, 仙A開12, 刪開9, 諄合9, 元合7, 文合5, 刪合4, 魂合4, 眞A開3, 仙B合3, 欣開2, 仙B開2, 諄A合2, 眞B開1, 山合1	開266, 合126
仙全	合	仙合52, 先開42, 仙開38, 眞開26, 山開17, 仙A開8, 先合8, 寒開7, 文合6, 諄合6, 元合6, 眞A開4, 仙B開3, 元開3, 刪開2, 諄A合1, 魂合1, 刪合1, 桓合1	開150, 合82
仙	開	先開50, 寒開42, 仙合36, 仙開26, 桓合25, 眞開17, 山開14, 元開13, 仙A開12, 刪開9, 先合8, 元合6, 刪合4, 諄合4, 魂合4, 文合4, 眞A開3, 欣開2, 仙B合2, 仙B開2, 眞B開1, 諄A合1, 山合1	開191, 合95
仙	合	仙合52, 先開37, 仙開36, 眞開25, 山開17, 仙A開8, 先合7, 文合6, 諄合6, 眞A開4, 元合3, 寒開2, 仙B開2, 刪開2, 諄A合1, 魂合1, 刪合1, 桓合1	開133, 合78
仙A	開	先開26, 仙開12, 仙合8, 眞開6, 先合4, 山開2, 諄合1, 元開1, 諄A合1	開47, 合14
仙A	合	先開3, 先合1	開3, 合1
仙B	開	寒開11, 眞開9, 桓合7, 元開5, 諄合4, 仙開2, 仙合2, 仙B合1, 元合1, 先合1, 文合1, 山開1	開28, 合17
仙B	合	寒開5, 元開3, 元合3, 先開2, 仙開2, 眞開1, 仙B開1	開14, 合3
山	開	寒開27, 桓合18, 先開18, 仙合17, 仙開14, 眞開12, 刪開7, 元合7, 元開6, 文合6, 先合4, 山開2, 眞A開2, 諄合2, 魂合2, 仙A開2, 欣開1, 刪合1, 仙B開1, 臻開1	開93, 合57
山	合	先開5, 仙開1	開6
眞全	開	眞開500, 諄合110, 眞A開99, 先開69, 文合67, 先合33, 仙合28, 仙開19, 魂合14, 青開14, 山開13, 臻開11, 仙B開9, 元合9, 侵開8, 元開7, 仙A開6, 欣開6, 諄A合2, 寒開1, 眞B開1, 仙B合1	開763, 合264,
臻	開	眞開8, 先開5, 眞A開3, 先合2, 諄合2, 山開1	開17, 合4
諄全	合	眞開100, 諄合32, 文合25, 眞A開12, 先開8, 先合8, 仙合7, 侵開6, 元合5, 仙開5, 魂合4, 桓合4, 寒開4, 仙B開4, 仙A開2, 臻開2, 刪開2, 山開2, 眞B開1, 元開1, 欣開1, 青開1	開151, 合85
眞	開	眞開416, 諄合98, 眞A開83, 文合60, 先開57, 先合31, 仙合24, 仙開15, 魂合14, 山開11, 青開11, 仙B開9, 元合9, 臻開8, 侵開8, 仙A開6, 元開5, 欣開4, 諄A合1, 寒開1, 眞B開1, 仙B合1	開635, 合238
諄	合	眞開99, 諄合32, 文合25, 眞A開11, 先合7, 先開6, 仙合6, 侵開6, 元合5, 仙開4, 桓合4, 仙B開4, 魂合3, 寒開3, 臻開2, 刪開2, 山開2, 仙A開1, 眞B開1, 元開1, 欣開1, 青開1	開144, 合82
眞A	開	眞開83, 眞A開16, 先開12, 諄合11, 仙合4, 仙開3, 青開3, 臻開3, 山開2, 先合2, 欣開2, 文合2, 諄A合1, 元開1	開125, 合20
諄A	合	先開2, 眞開1, 寒開1, 仙合1, 魂合1, 仙開1, 眞A開1, 仙A開1, 先合1	開7, 合3
眞B	開	文合5, 眞開1, 仙開1, 元開1, 諄合1	合6, 開3
諄B	合	(無)	(無)
文	合	文合148, 眞開63, 諄合25, 元合17, 魂合17, 先合8, 山開6, 仙合6, 眞B開5, 仙開4, 先開4, 微合3, 元開2, 侵開2, 眞A開2, 仙B開1, 青開1	合224, 開90
魂	合	魂合22, 文合17, 眞開14, 桓合7, 元合5, 先開5, 寒開5, 仙開4, 諄合3, 山開2, 刪開2, 微合1, 欣開1, 諄A合1, 仙合1, 先合1	合58, 開33
欣	開	眞開4, 仙開2, 眞A開2, 欣開2, 元開1, 桓合1, 諄合1, 刪開1, 山開1, 魂合1, 青開1, 先開1	開15, 合3
痕	開	(無)	(無)

表 ： 各韻目の字と押韻する字の韻目と開合の合計

表は、『広韻』の各韻目に属する字が押韻する字の韻目及び開合の総計を集計したものである。仙韻と真韻は、全体の総数、非重紐韻(注記の無いもの)、重紐A類、B類字を載せている。例えば「端酸難」(前2者は桓韻、後者は寒韻)という押韻があった場合、端は桓韻(酸)1字と寒韻(難)1字、酸は桓韻(端)1字と寒韻(難)1字となり、足し合わせると桓韻字は桓韻合口2字と寒韻開口2字と押韻することになる。この表の合口韻に注目すると、開口韻と多く押韻する韻目と合口韻と多く押韻する韻目に分かれることが確認できる。前者には桓韻・刪韻・先韻・仙韻・山韻・諄韻が、後者には文韻・魂韻が含まれる。元韻合口はその中間に位置し、仙韻非重紐字合口も中間的である可能性がある。

2.1. 開口韻と多く押韻する韻目

寒部桓韻合口は寒韻開口と最も多く260字押韻し、次いで桓韻合口と144字押韻する。寒韻開口も同様に寒韻開口と最も多く337字押韻し、次いで桓韻合口と263字押韻する。同じく寒部の刪韻も開合ともに寒桓韻と最も多く押韻し、特に合口は桓韻を除くと合口字は2字としか押韻しない。以上から、これらの韻は『切韻』音系と同じく、開合で主母音は等しく、円唇性はすでに介音で実現されていたと考えられる。また、寒桓韻と刪韻の主母音も等しいか非常に近い音価であったと考えられる。

先部元韻も開口・合口ともに寒・桓韻と押韻する。ただし、元韻合口は開口字119字、合口字105字と押韻しており、拮抗していることが注目される。陸機「大暮賦」の「反遠」等、元韻合口字は元韻開口字よりも元韻合口字と押韻しようとする傾向が見られる。寒桓韻と自由に通押する以上、主母音も寒桓韻に近く、また円唇性は介音により担われていた可能性が高いものの、元韻合口字は主母音が円唇母音の異音を有していた可能性があるだろう。

先部先韻も、開口・合口ともに先韻開口と最も押韻し(開口は180字、合口は53字)、円唇性は介音に担われていたと考えられる。どちらもその次は先韻合口ではなく、真韻開口と押韻することが特徴的であり、先韻と真韻の音声的類似を伺わせる。

仙韻もこれらと同様に開合ともに開口字と多く通押するが、非重紐字の合口のみ、仙韻非重紐合口同士で通押する傾向がある(52字/211字)。開口とも多く押韻するため、弁別特徴としての円唇性はすでに介音に移動していたと考えられるが、主母音に円唇化の異音があった可能性がある。なお、B類はA類字や非重紐字と異なり先韻や仙韻よりも寒桓韻と比較的多く押韻し、主母音の音価が異なっていた可能性がある。

山韻合口は「幻」一字のみであるが、開口字としか押韻しない。やはり、円唇性は介音で実現していたと考えられる。

真韻と諄韻は互いによく通押し、主母音は等しかったと考えられる。B類合口のみ文韻と5字通押するが、これは唇音字「彬」である(陸機「文賦」の「<u>墳紛</u>春<u>雲芬</u>彬<u>文</u>」)。B類唇音は、主母音音価が文韻に近かった可能性がある。

2.2. 合口韻と多く押韻する韻目

文韻は、明らかに独用される傾向がある。全用例を挙げる。

陸機:「百年歌」聞雲熏文紛、「演連珠」雲君

陸雲:「九愍感逝」聞芬羣芸 、「九愍失題」文芬分雲、「従事中郎張彦明爲中護軍」聞勳雲芬

特に「演連珠」を除くといずれも4字以上の文韻字が独用されていることが注目される。また、同用例を含めても文韻字は文韻字と最も多く押韻しており(148字/314字)、全体の半数近くを占める。このことから、西晋呉方言において文韻字は真部の他韻字と音価の面で顕著な違いがあったと考えられる。

魂韻も文韻と同様、魂韻字と最も多く押韻する(22字/91字)。また、魂韻は魂韻字に次いで文韻と、文韻は文韻字と真・諄韻字に次いで魂韻と押韻し、両者は密接な関係であることが分かる。

さらに、文韻も魂韻も真韻開口字を除くとほとんど開口字と押韻しないことが注目される(文韻は20字/314字、魂韻は19字/91字)。これらの事実から、文韻と魂韻は主母音に強い円唇性を有していた可能性が高いと推定される。

2.3. 欣韻・痕韻

欣韻字は少ないものの、陸雲「晉故豫章內史夏府君誄」勤欣の独用例がある。劉凱(2013: 47)は魏晋宋期の呉方言では欣韻は真部のみならず寒・刪韻などとも多く通押することから、欣韻を独立して欣部としている。発表者もこの見解に従う。

痕韻字は押韻例が皆無であり、寒先真魂部のいずれの韻目とも関係が遠かったと考えられる。

3. 音価の検討

以上のように、寒桓韻、刪韻、元韻、先韻、仙韻、山韻、真臻諄韻はそれぞれの韻目について開合が自由に押韻するため、開合で主母音は等しく、円唇性の特徴は主母音ではなく既に介音によって担われていたと考えられる。すなわち、以下のような音節構造が再建される。

開口 CVn 合口 CMVn (介音Mは[+round])

上古音及び『切韻』音系を考慮すると、主母音については寒桓韻、刪韻、元韻には[a]や[ɑ]に類する広母音、先韻、仙韻、山韻には[e]や[ɛ]に類する中段母音、真臻諄韻には[i]に類する狭母音が想定されるが、具体的な音価の特定は今後の課題とする。元韻合口及び仙韻非重紐字合口については、音韻論的には介音が円唇性を担っていたものの、音声としては主母音も円唇化を伴う異音が存在した考えられる。

一方、文韻、魂韻は明確に円唇母音を有していたと考えられる。文韻、魂韻は他韻の合口韻と頻繁に通押するが、真韻開口字とも多く押韻する。このことから、主母音は円唇性[+round]に加えて真韻と同じ狭母音性[+high]を有していたと考えられる。『切韻』音系及び類型論的妥当性を考慮し、ここでは円唇後舌狭母音音素/u/を再建する。この主母音/u/は、三輪(2023)で再建した虞韻の主母音音素/u/と等しい可能性が高い。再建した音節構造を以下に示す。三等介音の発生状況が不明であるためNorman(1994)の上古音節の分類で表記している(タイプAは一四等韻、タイプCは三等韻相当)。

魂韻 ^{A}Cun (> 中古 CʌN) 文韻 ^{C}Cun (> 中古 CyʌN)

欣韻・痕韻については他の韻目とは独立した、[i]や[ə]に類する中立的な音価であったと考えられる。少なくとも、西晋呉方言において、欣韻と文韻、痕韻と魂韻の間に密接な関係性は見られない。

4. 結論

以上の考察により、西晋呉方言においては文韻と魂韻に円唇母音/u/を再建できる可能性が高いことが示された。韻部としては、文韻を真部から、魂韻を魂部から独立させて、文部とすべきであろう。馮蒸(1991)では『切韻』の痕魂韻と欣文韻が開合の対立では無かった可能性を論じているが、少なくとも西晋呉方言についてはこの見立ては正しいものと考えられる。

また、元韻と仙韻非重紐字の合口についても、円唇介音が存在していた可能性は高いものの、音声実現としては円唇主母音の異音が存在していた可能性があるだろう。

西晋呉方言における寒先真魂部間の通押は必ずしも無秩序ではなく、弁別特徴の類似に基づき相当程度は規則的に行われたものであると考えられる。今後は同時代の他方言の資料や魏晋南北朝全体の音韻資料との通時的考察を行い、音価の推定を更に精緻なものとしていきたい。

参考文献

馮蒸 1991.《《切韻》“痕魂”、“欣文”、“咍灰”非開合對立韻說—兼論“覃談”二韻的主元音》, 程湘清（編）《隋唐五代漢語研究》：472-509 頁。濟南：山東教育出版社。(《漢語音韻學論文集》, 北京：首都師範大學出版社, 1997 所収)

鈴木慎吾「諸家先秦兩漢魏晉南北朝韻譜韻讀」, https://suzukish.sakura.ne.jp/search/xianqin/index.php (2026 年 9 月 30 日閲覧)

劉凱 2013.《魏晉南北朝吳語研究》. 碩士學位論文. 西南交通大學。

木津祐子 1996.「陸機と「楚」: 聲律意識の形成について」,『中國文學報』1996(53): 32-51 頁。

三輪大樹 2023.「六朝文人における虞韻唇音・云母字と魚韻の通押現象」,『雲漢』1: 51-70 頁。

三輪大樹 2024.《魏晉南北朝的魚虞分合時序地圖》,《中国语言历史地理研究》1: 265-287 頁。

周祖謨 1996.《魏晉南北朝韻部之演變》。臺北：東大圖書公司。

Jaxontov, Sergej E. 1960. Fonetika kitajskogo jazyka 1 tsysjačeletija do n. e. (labializovannye glasnye). Problemy Vostokovedenija 1960(6): 102-115.

Norman, Jerry. 1994. Pharyngealization in Early Chinese. Journal of the American Oriental Society 114: 397-408.

Ting, Pang-hsin. 1975. Chinese Phonology of the Wei-Chin Period: Reconstruction of the Finals as Reflected in Poetry. Taipei: Institute of History and Philology, Academia Sinica.

原始莆仙語入聲韻的重建 *

王品程
京都大学文学研究科研究生

一、前言

莆仙語主要分布在福建省莆田市，南鄰泉州，北接福州，和鄰近的閩南語、閩東語同屬沿海閩語。絕大多數的現代莆仙方言僅有[-ŋ]、[-ʔ]兩個輔音韻尾，很可能經歷大規模的韻尾合流。張裕宏（Chang 1972: 197-205）早在半世紀前便曾以楓亭、靈川、仙遊、莆田、江口等五個方言重建原始莆仙語，然而其音系中僅有一個入聲韻尾*-k，且未交代原始音值是*[-k]還是*[-ʔ]。本研究運用比較重建（comparative reconstruction）、內部重建（internal reconstruction）、顛倒重建（inverted reconstruction）三種方法，觀察約 20 個莆仙方言，並於必要時參考閩南語、閩東語寧德方言的韻尾，重建原始莆仙語入聲韻 27 個，包含*-p 尾韻 4 個、*-k 尾韻 9 個、*-ʔ尾韻 14 個，現有的內部證據無法支持*-t 尾的重建。

囿於篇幅，本文僅列出 1890 年設計的興化羅馬字（陳浩淼 2020，以下簡稱為「興化」）和 4 個莆仙方言：莆田（李如龍等 2019，莆田市政協文化文史和學習委員會編 2021）、江口（李如龍等 2019，黃碧玉 2013）、仙遊（李如龍 2001，莆田市政協文化文史和學習委員會編 2021）、澳腰（李如龍 1985）。聲母類化的語料取自李如龍等（2019）。「閩南」、「寧德」的欄位中，星號表示原始閩南語（Kwok 2018）、原始寧德方言（秋谷裕幸 2018，代表尚未完全重建的原始閩東語），方括號則表示廈門（Douglas 1873，馬重奇 2014）、虎洋（秋谷裕幸 2018）。部分方言點資料較不齊全，只能呈現部分音段或從缺。圓括號表示晚近的借詞。原始韻尾加方括號表示仰賴外部證據進行顛倒重建，在表格中另以灰底表示。上標數字表示調號：1 陰平、2 陽平、3 陰上、5 陰去、6 陽去、7 陰入、8 陽入、0 輕聲。方框□表示本字不明。

二、研究方法

本節以*ek 為例，說明本文如何綜合運用比較重建、內部重建、顛倒重建三種方法來重建原始莆仙語入聲韻，後兩種只用於韻尾的重建。首先，比較重建是指，同時比較若干方言，根據規律的音韻對應建立原始音類，並考量自然音變、音系平衡等原則指派原始音值，如此透過比較方法（Comparative Method）由下而上重建原始語。例如：「熱」等字例支持「興化 ɛʔ：莆田 ɛʔ：江口 ɛʔ：仙遊 ɛʔ：澳腰 ɛk」的對應，可以據此重建*ek 韻。由於原始莆仙語沒有中高元音*e、*o、*ø 和中低元音*ɛ、*ɔ、*œ 的對立，本文一律處理為前者。

內部重建則根據單一方言內部的形態交替，推測其早期形式。莆仙語和閩東語一樣，具有「聲母類化」的語流音變，亦即在多音節的詞彙中，後字聲母可能受到前字尾音同化。值得注意的是，少數多音節詞彙因聲母類化而保留存古音值（李如龍等 2019：33ff；陳浩淼 2019），本文據此為原始莆仙語重建多個部位的塞音韻尾。例如：莆田「滴」讀[tɛʔ⁷]，助詞「阿」讀[a⁰]，但「滴阿滴」說成[tɛʔ⁷ (0-)ka⁰ tɛʔ⁷]（李如龍等 2019：118），後字「阿」增生[k]聲母，亦即零聲母受到前字「滴」早期尾音影響而完全同化，可以據此重建前莆田方言「滴」*tɛk⁷，進而追溯至原始莆仙語。事實上，日語的「連声」異曲同工，例如：「雪隠」（settin）的「隠」

* 本文的基礎為筆者碩士論文 *Pú-Xiān: Comparative Phonology and Historical Development* 第 4.4~4.7 節的部分內容，在此改以中文發表，並大幅增補近日整理的語料以及最近的想法。

之所以有/t/聲母（又因元音/i/而進一步顎化），是因為保留了前字「雪」早期的*-t 尾而留下痕跡。比較重建和內部重建都仰賴莆仙語的材料作為內部證據，是相對可靠的方法。

此外，由於存古方言的資料和聲母類化的證據都相當有限，能重建出*-p、*-k 尾的語素極少，因此本文也使用顛倒重建作為補充手段，亦即輔以和莆仙語具有親緣關係的閩南語、閩東語充當外部證據，為內部證據不足的語素重建其原始形式。例如：「色」剛好缺乏澳腰方言的語料和聲母類化的例子，不像上述的「熱、滴」一樣有*-k 尾的內部證據，因此原本難以決定韻尾的發音部位，但參照原始閩南語*sik^{7}和原始寧德方言*θɛk^{7}，可以據此重建原始莆仙語*θe[k]^{7}。顛倒重建通常不是歷史語言學家優先考量的方法，但對於原始莆仙語的重建而言，顛倒重建能在內部證據不足的困境中，幫助我們選擇比較合理的重建方案。

三、*-p 尾韻母的重建

本文為原始莆仙語重建 4 個*-p 尾入聲韻：*i[p]、*a[p]、*ɒ[p]、*iap，如表 1。首先，現代沒有莆仙方言保有*-p 尾，無法直接執行比較重建，因此必須利用聲母類化的線索進行內部重建，唯一的例子為：無遘「十」个$_{不到十個}$，後字的[p]聲母實為前字韻尾*-p 的遺跡。*-p 尾在絕大多數方言都反映為[-ʔ]，澳腰有[-k]和[-ʔ]兩種反映，暗示*-p 可能先與*-k 合流才發生去口音化，而「十」則進一步舒聲化，高頻詞音變進程迅速。至於介音和主要元音，可以使用比較重建。*i[p]、*a[p]、*ɒ[p]的主要元音在所有方言都存古。*iap 的元音部分在不同方言反映各異：興化[ia]、莆田[ia]、江口[ɛ]、仙遊[ie]、澳腰[ɛ]，常例如「汁」。數字「十」為特例，在興化與莆田反映為[ɛ]。考量到原始莆仙語有*a[p]而無*e[p]，本文重建*iap 而非*iep。

表 1　原始莆仙語*-p 尾入聲韻

	原始莆仙	興化	莆田	江口	仙遊	澳腰	聲母類化	閩南	寧德
急	*ki[p]^{7}	*gih* [kiʔ^{7}]	kiʔ^{7}	kiʔ^{7}	kiʔ^{7}	kik^{7}	–	*kip^{7}	*kip^{7}
雜	*tsa[p]^{8}	*cȧh* [tsaʔ^{8}]	tsaʔ^{8}	tsaʔ	tsaʔ^{8}	tsaʔ	–	*tsap^{8}	*tʃap^{8}
法	*ha[p]^{7}	*hah* [haʔ^{7}]	haʔ^{7}	haʔ^{7}	haʔ^{7}	(huak)	–	*huap^{7}	*huat^{7}
盒	*ɒ[p]^{8}	*o̤h* [ɒʔ^{8}]	ɒʔ^{8}	ɒʔ^{8}	ɒʔ^{8}	–	–	*ȧh* [aʔ^{8}] ~ *ȧp* [ap^{8}]	*ap^{8}
十	*θiap^{8}	*sėh* [ɬɛʔ^{8}]	ɬɛʔ^{8}	ɬɛʔ^{8}	ɬieʔ^{8}	sɛ	無遘十个$_{不到十個}$ [po^{2} kau^{5} ɬieʔ^{8} (k-)pe^{2}]	*tsap^{8}	*θɛp^{8}
汁	*tsia[p]^{7}	*ciah* [tsiaʔ^{7}]	tsiaʔ^{7}	tsɛʔ^{7}	tsieʔ^{7}	tsɛʔ	–	*tsiap^{7} ~ *tsap^{7}	*tʃɛp^{7}

接著，參考外部證據進行顛倒重建，找出更多可能收*-p 尾的語素。觀察前段討論的「十」，會發現原始莆仙語的*-p 尾規律地對應閩南語、閩東語寧德方言的雙唇塞音韻尾，由此可以假設「急、雜、盒、汁」等字在原始莆仙語也收*-p 尾。若僅仰賴比較重建，「急」必須重建為*-k 尾，暗示原始閩語的*-p 尾在原始莆仙語無條件地反映為*-p 或*-k。如果*-p、*-k 合流尚未遍及所有語素，這種情況確實可能發生，本文的*-[p]尾可視為保留*-p 與*-k 兩種可能。

「法」的情況比較複雜，原始閩南語收*-p 尾，原始寧德方言則收*-t 尾。這和各個語言如何處理唇音限制有關，此指中古咸攝合口非組字文讀層如何避免音節內部出現兩個唇音。王品程（2025）指出，原始莆仙語面對唇音限制的策略是，丟失合口介音而保留雙唇韻尾，陽聲韻的「泛、犯」可以分別重建為*ham^{5}、*ha[m]^{6}。考量陽聲韻和入聲韻的平行關係，且已知原始莆仙語尚有*-p 尾，本文認為可以將「法」重建為*ha[p]^{7}。

四、*-k 尾韻母的重建

本文為原始莆仙語重建 9 個*-k 尾入聲韻：*ik、*ek、*ok、*øk、*ak、*ɒk、*ia[k]、*uak、*yɒk，*-k 尾在多數方言發生去口音化而反映為[-ʔ]尾，僅澳腰大致存古，可以執行比較重建，少數聲母類化的短語亦保留*-k 尾的痕跡，可以執行內部重建，如：「滴」阿滴、秀「玉」阿，如表 2。至於各韻母元音的反映，*ik 的主要元音在所有方言都存古，如：直。*ek 的主要元音在所有方言都反映為[ɛ]，如：熱、滴。*ok 的元音部分呈現「興化、莆田、江口[ɔ]：仙遊、澳腰[uo]」的對應，如：骨。*øk 的元音部分呈現「興化、莆田、江口[œ]：仙遊[yø]：澳腰[iɔ]」的對應，如：竹、玉。本文之所以不為*ok、*øk 重建介音，乃考量與*ek 韻保持音系平衡。*ak 的主要元音在所有方言都存古，如：北。*ɒk 的主要元音在多數方言存古，澳腰反映為[ɔ]，如：粟。*uak 的元音部分呈現「興化、莆田[ua]：江口[ɔ]：仙遊[uo]：澳腰[ua]」的對應，部分方言的主要元音發生高化，如：罰。*yɒk 的元音部分呈現「興化、莆田[yɒ]：江口[œ]：仙遊[yø]：澳腰[iɔ]」的對應，後三個方言與*øk 合流，如：略。

表 2　原始莆仙語*-k 尾入聲韻

	原始莆仙	興化	莆田	江口	仙遊	澳腰	聲母類化	閩南	寧德
直	*tik^{8}	*dih* [tiʔ^{8}]	tiʔ^{8}	tiʔ^{8}	tiʔ^{8}	tik	–	*tit^{8}	*tit^{8}
一第~	*i[k]^{7}	*ih* [iʔ^{7}]	iʔ^{7}	iʔ^{7}	iʔ^{7}	–	–	*it^{7}	*it^{7}
熱	*dzek^{8}	*cėh* [tsɛʔ^{8}]	tsɛʔ^{8}	tsɛʔ^{8}	tsɛʔ^{8}	tsɛk	–	*diat^{8}	*iɛt^{8}
滴	*tek^{7}	*deh* [tɛʔ^{7}]	tɛʔ^{7}	tɛʔ^{7}	tɛʔ^{7}	(tik^{7})	滴阿滴 [tɛʔ^{7} (0-)ka^{0} tɛʔ^{7}]	*tih* [tiʔ^{7}]	*tik^{7}
結	*ke[k]^{7}	*geh* [kɛʔ^{7}]	kɛʔ^{7}	kɛʔ^{7}	kɛʔ^{7}	–	–	*kat^{7}	*kɛt^{7}
色	*θe[k]^{7}	*seh* [ɬɛʔ^{7}]	ɬɛʔ^{7}	ɬɛʔ^{7}	ɬɛʔ^{7}	–	–	*sik^{7}	*θɛk^{7}
骨	*kok^{7}	*geoh* [koʔ^{7}]	kɔʔ^{7}	kɔʔ^{7}	kuoʔ^{7}	kuok^{7}	–	*kut^{7}	*kɔt^{7}
熨	*o[k]^{7}	–	ɔʔ^{7}	ɔʔ^{7}	uoʔ^{7}	–	–	*ut^{7}	*ut^{7}
竹	*tøk^{7}	–	tœʔ^{7}	tœʔ^{7}	tyøʔ^{7}	tiɔk	–	*tɯk^{7}	*tyk^{7}
玉	*gøk^{8}	*gėh* [kœʔ^{8}]	kœʔ^{8}	kœʔ^{8}	kyøʔ^{8}	(ŋyʔ^{8})	秀玉阿 [ɬiu^{5} kœʔ^{8} (0-)ka^{0}]	*guk^{8}	*ŋuɔʔ^{8}
叔	*tsø[k]^{7}	–	tsœʔ^{7}	tsœʔ^{7}	tsyøʔ^{7}	–	–	*tsɯk^{7}	*tʃyk^{7}
北	*pak^{7}	*bah* [paʔ^{7}]	paʔ^{7}	paʔ^{7}	paʔ^{7}	pak	–	*pak^{7}	*pœk^{7}
六	*la[k]^{8}	*lah* [laʔ^{8}]	laʔ^{8}	laʔ^{8}	laʔ^{8}	–	–	*lak^{8}~*lɯk^{8}(?)	*lœk^{8}
粟	*ts^{h}ɒk^{7}	*chọh* [ts^{h}ɒʔ^{7}]	ts^{h}ɒʔ^{7}	ts^{h}ɒʔ^{7}	ts^{h}ɒʔ^{7}	ts^{h}ɔk^{7}	–	*ts^{h}ɯk^{7}	*tʃ^{h}uɔʔ^{7}
國	*kɒ[k]^{7}	*gọh* [kɒʔ^{7}]	kɒʔ^{7}	kɒʔ^{7}	kɒʔ^{7}	–	–	*kok^{7}	*kuɔk^{7}
口裂開	*pia[k]^{7}	–	piaʔ^{7}	piɛʔ^{7}	pieʔ^{7}	–	–	*piak* [piak^{7}]	–
罰	*huak^{8}	*huȧh* [huaʔ^{8}]	huaʔ^{8}	hɔʔ^{8}	huoʔ^{8}	huak	–	*huat^{8}	*huat^{8}
刷	*θua[k]^{7}	–	ɬuaʔ^{7}	ɬɔʔ^{7}	ɬuoʔ^{7}	–	–	*suøʔ^{7}	*θɔt^{7}
略	*lyɒk^{8}	*liọ̇h* [lyɒʔ^{8}]	lyɒʔ^{8}	lœʔ^{8}	lyøʔ^{8}	liɔk	–	*liȯk* [liɔk^{8}]	[lok^{8}]
約	*yɒ[k]^{7}	*iọh* [yɒʔ^{7}]	yɒʔ^{7}	œʔ^{7}	yøʔ^{7}	–	–	*iok* [iɔk^{7}]	[iɔk^{7}]

接著，參考外部證據進行顛倒重建，找出更多可能收*-k 尾的語素。運用比較重建或內部重建的「滴」*ek、「竹玉」*øk、「北」*ak、「粟」*ɒk、「略」*yɒk 在閩南語和閩東語寧德方言也都收舌根塞音韻尾，包括原始寧德方言的*uɔʔ也源自*-k 尾（曾南逸、沈瑞清 2025），呈現規律對應。因此，在缺乏內部證據的情況下，這些韻母可以參照外部證據而重建*k 尾，如：

色、叔、六、國、約。另外，顛倒重建也使原始莆仙語增加*ia[k]韻，如：□裂開，對應閩南語廈門方言的[-k]尾。其主要元音反映為莆田[ia]、江口[iɛ]、仙遊[ie]，考量有介音的*-k 尾韻*uak、*yɒk 都以低元音為韻腹，且各個莆仙方言之間的對應類似*iap（詳上節），因此重建為*ia[k]而非*ie[k]。*ia[k]韻例字雖少，但由於是口語詞彙，應該可以重建至原始莆仙語。

與上開諸韻相異，運用比較重建或內部重建的「直」*ik、「熱」*ek、「骨」*ok、「罰」*uak在閩南語和閩東語寧德方言都收舌尖塞音韻尾，呈現不同的規律對應。已知比較重建和內部重建均不支持原始莆仙語*-t 尾，因此在缺乏內部證據的情況下，這些韻母都可以參照外部證據的舌尖韻尾而重建原始莆仙語舌根韻尾，如：一、結、熨、刷。這顯示早期階段的*-t 尾和*-k 尾，到了原始莆仙語的階段已經合流為*-k，使得原先收*-t 尾的「熱結」，在原始莆仙語和*-k 尾的「滴色」合流，而同讀*ek 韻。

五、*-ʔ尾韻母的重建

本文為原始莆仙語重建 14 個*-ʔ尾入聲韻：*iʔ、*uʔ、*eʔ、*oʔ、*øʔ、*aʔ、*ɒʔ、*aiʔ、*auʔ、*iaʔ、*uaʔ、*yɒʔ、*ieuʔ、*uoiʔ，如表 3。韻尾的對應規律為：興化保留喉塞尾（陳浩淼（2020）認為元音較長），現代方言基本上舒聲化，唯獨莆田*uʔ、*iaʔ、*uaʔ、*yɒʔ四保留新舊兩讀，江口「乞食乞丐」的「食」*iaʔ也保留喉塞尾。所有*-ʔ尾入聲韻都有相應的陰聲韻，且兩者在各方言間的語音對應極為相近。限於篇幅，本文省略有關元音部分重建的說明。

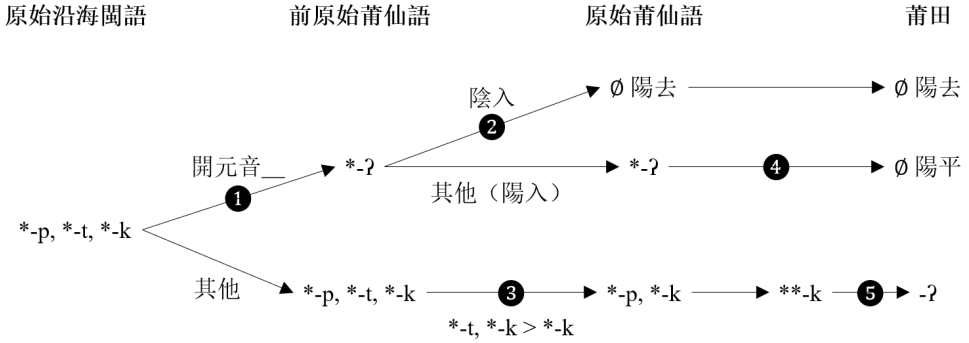
表 3　原始莆仙語*-ʔ尾入聲韻

	原始莆仙	興化	莆田	江口	仙遊	澳腰	閩南	寧德
舌	*θiʔ⁸	*siḥ* [ɬi:ʔ⁸]	ɬi²	ɬi³	ɬi¹	si²	*tsiʔ⁸	*θiɛt⁸
□親吻	*tsuʔ⁸	–	tsu² ~ tsuʔ⁸	tsu³	tsu²	–	–	–
□拿	*tʰeʔ⁸	*tạḥ* [tʰe:ʔ⁸]	tʰe²	tʰɛ³	tʰe²	tʰe²	*thėh* [tʰeʔ⁸]	–
薄	*poʔ⁸	*beo̍h* [po:ʔ⁸]	po²	po³	po²	pɔ	*poʔ⁸	*pɔʔ⁸
絕	*tsøʔ⁸	–	tsø²	tsœ³	tsø²	–	*tsøʔ⁸	*tʃuɔt⁸
白	*paʔ⁸	*bȧh* [pa:ʔ⁸]	pa²	pa³	pa²	pa²	*peʔ⁸	*paʔ⁸
疊	*tʰɒʔ⁸	*tọ̍h* [tʰɒ:ʔ⁸]	tʰɒ²	tʰɒ³	tʰɒ²	–	*tʰaʔ⁸	*tʰɛp⁸
□熄滅	*maiʔ⁸	–	mai²	mai³	–	–	–	–
□隔水蒸煮	*kʰauʔ⁸	–	kʰau²	kʰau³	kʰau²	–	–	–
食	*θiaʔ⁸	*siȧh* [ɬia:ʔ⁸~ɬiaʔ⁸]	ɬia²~ɬiaʔ⁸	ɬiɛ³~ɬiɛʔ⁸	ɬia²	sia²	*tsiaʔ⁸	*θiaʔ⁸
跋跌倒	*puaʔ⁸	*buȧh* [pua:ʔ⁸]	puaʔ⁸	puo³	pua²	–	*puaʔ⁸	*puat⁸
揭舉	*kyɒʔ⁸	*giọ̍h* [kyɒʔ⁸]	kyɒ²~kyɒʔ⁸	kœ³	kyɒ²	–	*giaʔ⁷ (?) *kiȧh* [kiaʔ⁸]	
著	*tieuʔ⁸	*dạ̍uh* [teu:ʔ⁸]	tiau²	tiau³	tieu²	tieu²	*tioʔ⁸	*tiɔʔ⁸
月	*guoiʔ⁸	*go̍ih* [koi:ʔ⁸]	kuai²	kuɛ³	kuoi²	gue²	*guøʔ⁸	*ŋuɔt⁸

值得注意的是，原始莆仙語*-ʔ尾僅搭配陽入調，而且與*-ʔ尾共現的陽入調有特殊的聲調對應：興化存古，江口反映為陰上，其他方言反映為陽平，因此只要能確認此一聲調對應，即便缺乏保存喉塞尾的興化語料，亦可重建原始莆仙語*-ʔ尾入聲韻，如：□親吻、絕、□熄滅、□隔水蒸煮。這個聲調對應是重新歸調所產生的結果，莆田老派的高升調[35]代表早期形式，江口選擇併入前半段為高升的陰上[453]，多數方言則選擇併入同為升調的陽平[13]或[24]。

六、結語

絕大多數莆仙方言僅有一個入聲韻尾[-ʔ]，而本文利用存古方言和聲母類化等內部證據，重建原始莆仙語三個入聲韻尾*-p、*-k、*-ʔ。為了方便說明莆仙語入聲韻尾的歷史音變，本文假設在原始沿海閩語和原始莆仙語之間有一個前原始莆仙語的階段。相關音變如下圖。



參照 Norman (1981, 1991)、曾南逸、沈瑞清（2025）對沿海閩語音韻史的研究，可以釐清原始莆仙語入聲韻尾的來歷。原始沿海閩語的*-p、*-t、*-k 搭配開元音，在莆仙語和閩南語弱化為*-ʔ（音變❶），因此表 3 所有語素在閩南語也同樣收喉塞尾。由於原始莆仙語缺乏搭配陰入調的*-ʔ，其脫落理當早於原始莆仙語的階段（音變❷），而聲調併入同為低調的陽去[21]或[11]。而根據現有材料重建的原始莆仙語缺乏*-t，是故我們應該假設當初沒有弱化為*-ʔ的*-t 都在原始莆仙語與*-k 合流（音變❸）。

從原始莆仙語到現代莆田方言，入聲韻尾經歷大規模弱化：僅搭配陽入調的*-ʔ發生脫落，造成音節舒化與重新歸調（音變❹），不過至今仍有部分韻母兼具新舊兩讀。至於*-p、*-k，可能先合流為**-k，後來去口音化而演變為[-ʔ]（音變❺），只有澳腰方言和部分聲母類化的詞彙程度不一地保存古音。這兩個音變的相對年代在各方言不一，1890 年發明的興化羅馬字已發生音變❺，尚未發生音變❹。19 世紀中葉遷離莆田縣的澳腰方言已完成音變❹，而音變❺仍在發展中。音變❹、❺發生得晚，卻遍及多數莆仙方言，地理分布極廣。這個現象提醒我們，同一個方言區展現的共性，可能是晚近才發生的音變。若要避免誤判早期的共同創新和晚期的平行演變，須仰賴充足的方言調查和豐富的歷史文獻，才比較容易釐清音變的先後關係或年代，這是歷史語言學的重要工作。

參考文獻

●Chang, Yü-hung. 1972. *The Hinghwa Dialects of Fukien: A Descriptive Linguistic Study*. Cornell University dissertation. ●Douglas, Carstairs. 1873. *Chinese-English Dictionary of the Vernacular or Spoken Language of Amoy, with the Principal Variations of the Chang-Chew and Chin-Chew Dialects*. London: Trübner & Co. (Supplemented by Thomas Barclay in 1923.) ●Kwok, Bit-Chee. 2018. *Southern Mǐn: Comparative phonology and subgrouping*. London and New York: Routledge. ●Norman, Jerry. 1981. The Proto-Min Finals. In Academia Sinica (ed). *Proceedings of the International Conference on Sinology (Section on Linguistics and Paleography)*, 35–73. Taipei: Academia Sinica. ●Norman, Jerry. 1991. The Mǐn dialects in historical perspective. *JCLMS* 3: 323–358. ●王品程. 2025.〈原始莆仙語陽聲韻的重建〉。日本中国語学会第 75 回全国大会。2025 年 11 月。仙台：東北大学。 ●李如龍. 1985.〈澳腰莆田方言島記略〉。《福建師範大學學報（哲學社會科學版）》1985.2: 75-83。 ●李如龍. 2001. 《福建縣市方言志 12 種》。福州：福建教育出版社。 ●李如龍、劉福鑄、吳華英、黃國城. 2019. 《莆仙方言調查報告》。廈門：廈門大學出版社。 ●秋谷裕幸. 2018. 《閩東區寧德方言音韻史研究》。臺北：中研院語言所。 ●馬重奇. 2014.〈英國杜嘉德編撰《廈英大辭典》（1873）音系研究〉,《勵耘語言學刊》2014.2: 1–35。 ●莆田市政協文化文史和學習委員會編. 2021. 《莆仙方言大辭典》。廈門：廈門大學出版社。 ●陳浩淼. 2019.〈莆仙方言連讀音變中-n、-m 韻尾的殘留〉,《莆田學院學報》26.3: 48–53。 ●陳浩淼. 2020. 《莆仙方言語音比較研究》。福建師大碩論。 ●曾南逸、沈瑞清. 2025.〈沿海閩語*-eŋ、*-ek 的構擬及其相關問題〉,《語言科學》24.2: 179–192。 ●黃碧玉. 2013. 《莆田江口方言音系研究》。福建師大碩論。

唐話資料《南山俗語考》之音韻系統及其音系性質再探

曾若涵
國立中正大學中國文學系副教授

一、前言

江戶唐話教材《南山俗語考》(1812)，乃薩摩藩主島津重豪（號南山）下令編纂，並由仕臣石塚崔高標記華音、福建裔歸化人曾槃擔當和譯，費時五十年所完成。(中田喜勝 1970：50)全書正文五卷，另有附錄〈長短雜話〉一卷。《南山俗語考》的初稿為《南山考講記》(1767)，仍有存本，可供版本比較及唐話互勘之用。

前人研究中，中田喜勝（1970）透過唐話資料交互比對，指出《俗語考》「華音」(或稱唐音）基礎方音為當時南京音，南京音又指當時南京省、浙江省，及江南地方的方言總稱。學界多肯定此說，少數認為來自杭州音。音韻方面，岩本真理（1991、1992、1993）製作了唐音對照表，將書中「華音」納入《方言調查字表》(1982）進行比較，但未擬音。岩本真理（2017）又為《俗語考》製作翻字與索引，提供詞彙檢索之便。

然而，欲建構完整的音韻系統，除了採用中古音格局的《方言調查字表》進行歷時比較之外，也可以利用近代音的共時材料進行對照，畢竟近代音文獻還算豐富。在共時觀點的基礎上，本文先對《俗語考》書中使用的標記符號進行直接理解與判讀，其次利用江戶唐音的框架，整理《俗語考》之音系。如此，待確認了標記符號（包括假名、非假名符號）之性質與分配狀況後，而後比對其他材料，亦可進入歷時的討論。

關於《俗語考》中的符號，歷來少有學者提及。中田喜勝（1970：51）曾云：

> 『南山俗語考』は長年月をかけて作られただけに、片仮名の表記の仕方も、……、より緻密である。例えば、「丨」・「|　」・「丶」・「◦」・「゜」などの記号を併用しているが、これらはそれぞれ促音・延音・重音・区切音・強短を示す記号であって、このような表記は、仮名の有する語尾音に表われる母音や、音幅のあいまいさ、強弱の不正確さなどの欠点をある程度補うことができる。

中田注意到書中符號涉及唐音音節中的音段界線、長短、重音等音韻相關的問題。中田雖肯定《南山俗語考》的符號能夠補足假名標示唐音之不足，但未說明特定符號具備的功能。筆者對此已有先行研究，針對書中符號：如「頭テ〇ウ」、「色スヱ」、「地ヂイ」等漢字旁之「圈」與「線」進行探索，除了非假名符號，也有以半濁點標在假名右上，如「ゲ、デ、ド」等。據觀察，這些符號是《俗語考》用以調節日語與漢語的音節差異，或用以確立「音位對比」(phonemic contract）而設；至少在《俗語考》的初稿《考講記》中，尚未見到連音線段。扼要歸納筆者之先行研究：1.圓圈有兩種，一是隔音符號，一種是標示日語所無的唐音特殊音段。2.連音線段的範圍受限於特定韻律長度，但盡可能追求與漢語接近。3.連音線段的功能，分別為：區別「四呼」、凸顯聲母性質、反映音節長短；可以補充假名不足之處。4.「ヱ/エ」之標音功能有別，在書中有所區別。

本文在前述基礎上，欲達以下研究目的：一、透過《俗語考》中符號重新確認唐音音節、建構書中唐音音系。二、將建構出的音系與方言資料、其他唐話資料，檢驗其基礎音系性質

是南京音或杭州音，或者兼具。總言之，本文採取與前人不同的切入方式，先透過對標音符號的理解以建構音系，其次進行跨材料音系比較，期能對前人紛紜之說進行檢證。

二、《南山俗語考》增加符號以描寫實際唐音

為了瞭解《俗語考》共時音系之初步樣貌，本文依循以下步驟進行資料梳理：

1、在確認了假名、非假名等「標音符號」的基礎上，認識《俗語考》的音節韻律。

從筆者的先行研究可知，《俗語考》所標註的唐音仍是當時唐人進行貿易、文化交流時所使用的中國語，尚未成為純粹的日本漢字音。因此，《俗語考》標記唐音時所使用的符號，並不能直接當作日語來理解，而是需要將這些符號理解為一種獨立的系統，畢竟這些符號當中尚有許多日語所無的額外記號。《俗語考》的目標讀者是日本人，必須以日語既有的假名符號為基礎，以及漢文訓讀的基本知識（例如「音合符」），建構能夠入門的窗口；並在此種考慮日本讀者理解狀態的前提上，增加其他的標音符號。這些增加的符號，能夠提升唐音標記的精確性，但也保留了模糊空間，就算無法正確理解這些額外的符號，也能藉著假名來讀出相近的發音。因此，《俗語考》中即使是同一個字音，有時標上特殊符號，有時則省略。

《俗語考》的音節韻律盡可能配合當時的唐話，試圖用符號「描述」不同於日語音拍的部分，以「頭」字為例，在《俗語考》及《考講記》中有以下標音：

頭：《俗語考》 デ○ウ｜**デ**○ウ｜テ○ウ

頭：《考講記》 デ○ウ｜デ○ウ｜デ○ウ

可發現，《考講記》中統一標為「デ○ウ」，而《俗語考》卻共有三種變體。「デ○ウ」中的「○」類似岡嶋冠山《唐話纂要》（1718）的用法。林慶勳（2012：173）舉「豪 ア。ウ [au]」字為例，說明ア與ウ之間有個小圈，表示此字讀為複元音。林慶勳所謂複元音，即強調ア與ウ兩假名之間的小圓圈是作為分隔元音之用，乃是為了阻止連音的產生。亦即加上「○」的漢字，不能以日語的習慣連音。舉例來說，如江戶時期的「カウ」讀為[kɔ:]而非[kau]，「ハウ」讀為[hɔ:]而非[hau]。（謝育新 2016：13-14）《磨光韻鏡》（釋文雄撰，1744）也使用了這種區隔元音的圓圈，如「袍ピヤ○ウ」、「毛マ○ウ」、「豪ア○ウ」（外轉第 25 開）。本文將此種圓圈稱作「隔音符號」；也以此例說明《俗語考》中的符號遵守的是漢字音節韻律，而非日語音拍韻律。

其次，《俗語考》「頭」字對應「デ、**デ**、テ」三種符號，三種符號各有數例，並非孤證，亦非訛誤所致。「頭」字在中古是定母侯韻字（一開），聲母原為全濁*d-，此處展現了近代全濁聲母清化的過程，如「デ de > テ $t^{(h)}e$」；或者進一步展現過渡元音的央化過程，如「デ de > **デ** $t^{(h)}ə$」（先行研究）。因此《俗語考》中的符號，也展現了試圖描寫漢字音韻的努力。

比較「頭」字鄰近音韻地位的字，如「偷」（透母侯韻）、「斗」（端母厚韻），即可看出這些符號具有系統脈絡，而且是在江戶唐話的標記傳統上加以調整，為了描寫實際的語音。

《俗語考》頭 デ○ウ｜**デ**○ウ｜テ○ウ　偷テ○ウ　斗テ○ウ

《考講記》頭 デ○ウ　偷テ○ウ　斗テ○ウ

在 17、18 世紀的域外漢語辭典中，配合外國母語者而針對漢語設計特殊標音的例子很多，如拉丁語系的漢語辭典，有時將送氣符號與聲調一同視為超音段特徵，如 Francisco Varo（1682/1703）對清初南方官話的標音。（W. South Coblin 1998：262）Varo 延續利瑪竇、金尼閣等人的標記法，為方便西班牙語、法語讀者學習，而進行符號微調。類似的符號系統，在 Benjamin Brueyre（1857）的《拉丁語南京話詞典》中也能見到。（陳暘智 2024）

江戸唐話材料也有共時面上的繼承，上述關於「頭、偷、斗」等例子的標音，能在《唐話纂要》（1718）及《磨光韻鏡》（1744）看到顯著的繼承關係。因此，需要從江戸人所知道的音韻格局出發，觀察唐話標音的特殊之處，避免因現代眼光而漏掉應有的音節。

三、《南山俗語考》共時音系框架整理流程

根據筆者之先行研究，已知《俗語考》之標音與文雄《磨光韻鏡》（1744）有所相似，後者為唐音韻圖，正好可以做為檢視《俗語考》的系統框架。以下將《磨光》稱為「框架 A」。所謂有所相似，是根據先行研究中所知，《磨光》唐音與《俗語考》有部分落差，主要是出自二者對符號使用的不同；其次，需要假設二者基礎音系可能不盡相同。

表 1 《磨光韻鏡》中的唐音：通攝部分、中古音框架（框架 A）

			幫	滂	並	明	非	敷	奉	微	端	透	定	泥	知	徹	澄	娘	見	溪	群	疑
通	內轉第一合	東董送(舒)合口呼	ポン	ポン徉	ポン蓬	モン蒙					トン東董凍	トン通桶痛	ドン同動洞	ノン𪜈					コン公貢	コン孔孔控	ゴン	ヲン
		屋(入)合口呼	ポト	ポ扑撲穆	ポ暴	モ木					ト	ト禿	ド獨	ノ					コ穀谷	コ哭	ゴ	ヲ
		東董送(舒)撮口呼					フホン風諷	フホン豐	ウヲン馮風	モン瞢夢					チヨン中	チヨン忡蟲	ヂヨン蟲仲	ニヨン	キヨン弓宮	キヨン穹	ギヨン窮	ヨン
		屋(入)撮口呼					フホ福	フホ蝮	ウヲ伏	モ目					チヨ竹	チヨ蓄	ヂヨ逐	ニヨ肭	キヨ菊匊	キヨ麴	ギヨ鞠	ヨ
通	內轉第二合	冬腫宋(舒)撮口	ポン	ポン	ポン	モン					トン冬	トン統	ドン彤	ノン農癑					コン攻	コン	ー	ヲン
		沃(入)合口	ポ	ポ	ポ僕	モ瑁					ト篤竺督	ト	ド毒	ノ褥					コ	コ酷	ー	ヲ擢
		鍾腫用(舒)撮口					フホン封	フホン峯	ウヲン逢奉俸	モン					チヨン家	チヨン傭龐種	ヂヨン重	ニヨン醲穠	キヨン恭拱供	キヨン恐	ギヨン蛩共	ヨン顒
		燭(入)撮口錄辱合口					フホ	フホ	ウヲ	モ媚					チヨ	チヨ	ヂヨ躅	ニヨ	キヨ	キヨ曲	ギヨ局	ヨ玉

			精	清	從	心	邪	照	穿	牀	審	禪	影	曉	匣	喻	來	日
通	內轉第一合	東董送(舒)合口呼	ツヲン總	ツヲン怱	ヅヲン叢	スヲン嵩送	-						ウヲン翁蓊甕	フホン烘	ヲン洪紅閧	ー	ロン籠弄	ー
		屋(入)合口呼	ツヲ鏃	ツヲ	ヅヲ族	スヲ速肅宿	-						ウヲ屋	フホ	ヲ	ー	ロ祿	ー
		東董送(舒)撮口呼						チヨン終眾	チヨン充銃	ヂヨン崇	シヨン	ジヨン	ヨン	ヒヨン	ー	ヨン雄融	ロン隆	ジヨン戎
		屋(入)撮口呼						チヨ粥	チヨ		ヂヨ	シヨ縮	ジヨ塾	ヨ郁	ヒヨ畜	ー	ヨ囿育	ロ六	ジヨ肉
通	內轉第二合	冬腫宋(舒)撮口	ツヲン宗縱綜	ツヲン樅	ヅヲン從	スヲン聳淞悚竦宋	ズヲン松頌						ウヲン	フホン	ヲン	ー	ロン	ー
		沃(入)合口	ツヲ傶足	ツヲ促	ヅヲ	スヲ粟	ズヲ續						ウヲ沃	フホ	ヲ鵠	ー	ロ瀑	ー
		鍾腫用(舒)撮口						チヨン鍾腫種	チヨン	ヂヨン	シヨン舂	ジヨン	ヨン凾擁雍	ヒヨン匈洶	ー	ヨン庸容勇用	ロン龍隴壟	ジヨン茸冗
		燭(入)撮口錄辱合口						チヨ燭	チヨ觸	ヂヨ贖	シヨ數束	ジヨ蜀	ヨ	ヒヨ旭	ー	ヨ欲	ロ錄	ジヨ辱

以通攝為例，可以發現《磨光韻鏡》中有不少可合併之處（表 1），首先：第一轉圖與第二轉圖之標音完全相同，可以合併轉圖。合併之後，可將中古音框架轉換成近代音初步框架，本文稱為「框架 B」（表 2）。此步驟僅合併了韻類，在聲類部分尚未整併，之所以分段處理，是為了避免掩蓋《俗語考》的音變特徵。

表 2 《磨光韻鏡》中的唐音：通攝部分、近代音框架（框架 B）

			幫	滂	並	明	非	敷	奉	微	端	透	定	泥	知	徹	澄	娘	見	溪	群	疑
通	內轉第一二合.1等	東董送(舒)合口呼/冬腫宋(舒)撮口	ポン	ポン徉	ポン蓬	モン蒙					トン東董凍/冬	トン通桶痛/統	ドン同動洞/彤	ノン𪜈/農癑					コン公貢/攻	コン孔孔控	ゴン	ヲン
		屋(入)合口呼/屋(入)撮口呼	ポト	ポ扑撲穆	ポ暴/僕	モ木/瑁					ト/篤竺督	ト禿	ド獨/毒	ノ/褥					コ穀谷	コ哭/酷	ゴ	ヲ/擢
	內轉第一二合.3等	東董送(舒)撮口呼/鍾腫用(舒)撮口					フホン風諷/封	フホン豐/峯	ウヲン馮/逢奉俸	モン瞢夢					チヨン中/冢	チヨン忡蟲/傭龐種	ヂヨン蟲仲/重	ニヨン/醲穠	キヨン弓宮/恭拱供	キヨン穹/恐	ギヨン窮/蛩共	ヨン/顒
		屋(入)撮口呼/燭(入)撮口錄辱合口					フホ福	フホ蝮	ウヲ伏	モ目/媚					チヨ竹	チヨ蓄	ヂヨ逐/躅	ニヨ肭	キヨ菊匊	キヨ麴/曲	ギヨ鞠/局	ヨ/玉

			精	清	從	心	邪	照	穿	牀	審	禪	影	曉	匣	喻	來	日
通	內轉第一二合.1等	東董送(舒)合口呼/冬腫宋(舒)撮口	ツヲン總/宗縱綜	ツヲン怱/樅	ヅヲン叢/從	スヲン嵩送/慫淞悚竦宋	ズヲン松頌						ウヲン翁蓊甕	フホン烘	ヲン洪紅閧	ー	ロン籠弄	ー
		屋(入)合口呼/沃(入)合口	ツヲ鏃/傶足	ツヲ/促	ヅヲ族	スヲ速肅宿/粟	ズヲ續						ウヲ屋/沃	フホ	ヲ/鵠	ー	ロ祿/瀑	ー
	內轉第一二合.3等	東董送(舒)撮口呼/鍾腫用(舒)撮口						チヨン終眾/鍾腫種	チヨン充/銃	ヂヨン崇	シヨン/舂	ジヨン	ヨン/凾擁雍	ヒヨン/匈洶	ー	ヨン雄融/庸容勇用	ロン隆/龍隴壟	ジヨン戎/茸冗
		屋(入)撮口呼/燭(入)撮口錄辱合口						チヨ粥/燭	チヨ/觸	ヂヨ/贖	シヨ縮/數束	ジヨ塾/蜀	ヨ郁	ヒヨ畜/旭	ー	ヨ囿育/欲	ロ六/錄	ジヨ肉/辱

其次，以框架 B 為基礎，將其中各音韻地位的例字與《俗語考》所收讀音進行對照，得出部分音韻不同之處。表 3 中灰底部分，即是與表 2（《磨光》）標音相異之處。

表 3 將《俗語考》納入上述框架中比較

			幫	滂	並	明	非	敷	奉	微	端	透	定	泥	知	徹	澄	娘	見	溪	群	疑
通	內轉第一二合1等	東董送(舒)合口呼/冬腫宋(舒)撮口	ポン	ポン倣	ポン蓬	モン夢					トン東董凍/冬	トン通桶痛/統	ドン＞トン同動洞/彤	ノン耳＞農膿					コン公貢/攻	コン孔孔控	ゴン	ヲン
		屋(入)合口呼/屋(入)撮口呼	ポト	ポ扑撲穆	ボ暴/僕	モ木/瞐					ト/篤竺督	ト禿	ド＞トン獨/毒	ノ/褥					コ穀谷	コ哭/酷	ゴ	ヲ/擢
	內轉第一二合3等	東董送(舒)撮口呼/鍾腫用(舒)撮口					ホン風諷/封	ホン豐/峯	ウヲンorヲン馮鳳/逢奉俸	モン晉夢					チヨン中/冢	チヨン忡蟲/傭踵	チヨンorチヨン蟲仲/重	ニヨン/醲	コン弓宮/恭拱供	キヨン穹/恐	ギヨン窮/コン＞ゴン共	ヨン/顒
		屋(入)撮口呼/燭(入)撮口錄尊合口					ホ福	ホ蝮	ウヲ伏	モ目/瞐					チヨ竹	チヨ蓄	チヨorチヨ逐/國	ニヨ肭	キヨ菊匊	キヨ麴/曲	ギヨ鞫/局	ヨ/玉
			精	清	從	心	邪	照	穿	牀	審	禪	影	曉	匣	喻	來	日				
通	內轉第一二合1等	東董送(舒)合口呼/冬腫宋(舒)撮口	ツヲン總/宗綴綜	ツヲン愡/悰	ツヲン叢/從	ソン嵩送/竦淞悚踪宋	ソン松頌						ウヲン翁蓊甕(ヨン)	ホン烘	ホン洪紅閧	ー	ロン蘿弄	ー				
		屋(入)合口呼/沃(入)合口	ツヲ鏃/鏃足	ツヲ/促	ツヲ族	ソ速肅宿/ツヲ粟	スヲ續						ヲ屋/沃	フホ	ヲ/コ鵠	ー	ロ祿/漉	ー				
	內轉第一二合3等	東董送(舒)撮口呼/鍾腫用(舒)撮口						チヨン終眾/鍾腫種	チヨン充銃	ヂヨン崇	チヨン/吞	ジヨン	ヨン/嵱癰	ヒヨン/匈洶	ー	ヨン雄融/庸容勇用	ロン隆/龍隴壟	ジヨン戎/茸冗				
		屋(入)撮口呼/燭(入)撮口錄尊合口						チヨ粥/燭	チヨ/觸	ヂヨ/贖	縮/ソ數束	チヨ塾/蜀	ヨ郁	ヒヨ畜/旭	ー	ヨ圓育/欲	ロ六/錄	ジヨ肉/辱				

最後，進行音韻歸併，觀察「同音假名組合」及「音位對比」，尋求大致的聲韻系統。

四、《南山俗語考》的共時音系：以通攝為例

唐話材料大多是以對話集、詞彙集的形式呈現，便於入門學習，但缺少系統性的脈絡。透過同時代的音韻文獻，特別是「韻鏡學」以圖表為主的形式，得以提供音系參照的框架。在此基礎上，試自表 3 歸納以下音韻內容；為避免單攝造成誤判，輔以《磨光》全圖為參：

1、幫滂、端透、見溪、精清，兩兩有相同的假名組合，但是例字的對應完全不混，且因同發音部位之濁音有清化的趨勢，因此送氣對立應相當明確。擬音如下：

幫 p　滂 p^h　端 t　透 t^h

見洪．見細 k　溪洪．溪細 k^h　——細音不顎化，無尖團對立

精洪．精細 ts　清洪．清細 ts^h　——細音不顎化，無尖團對立

2、非敷、曉匣部分：非敷都標為ホ（或ハフ），而「曉匣」洪音標為ハホフ，「曉匣」細音多對應ヒ，亦即「非敷」與「曉匣」有合流傾向。其次，非敷部分《磨光》有比《俗語考》更明確的フ聲母，如「方放フワン｜ハン」（《磨光》在前《俗語考》在後）；曉母部分，二書大體一致，如「花ハア｜ハアー」、「虎フウ｜フウ」；匣母部分，《磨光》有比《俗語考》更明確的聲母弱化，如「學ヤ｜ヒョ」、「戶ウヽ｜フ」，也有兩書匣母皆弱化之例，如「胡ウヽ｜ウヽ」但相對較少。據此，推測為「非敷」合流為 f~x 之間的自由變體。「曉匣」亦合流為 x，少數匣母弱化零聲母。

3、知徹、照穿部分：知徹、照穿在《磨光》中明顯合流，在《俗語考》也相同，在同轉圖上的「知徹照穿」字，往往有相同的假名組合。考慮見精組字皆不會顎化，本文認為「知徹照穿」合流後為舌面塞擦音 tɕ（知照）、$tɕ^h$（徹穿）。

4、明微、影喻部分：微母有的與明母合流為 m，但在輕唇韻中微母則走向零聲母化與影喻合流，如「微尾未ウイ｜ウイ」、「無ウヽ｜ウヽ」（同圖影母「烏」同音）、「文吻問ウヲン｜ウエン」、「萬晚ウワン｜ワン」、「亡ウワン｜ワン」等。

5、泥娘、來母部分：泥娘合流為 n 聲母；來母不變，仍為 l 聲母。

6、並、奉、定、群、澄、疑的清化：

1）　並母字《俗語考》中有時產生清化變體，如「避ビイ｜ピ、ピイ」；「被ビイ｜ビイ、ピイ、ヒイ」，並母仍在清化過程，或已清化但因接觸保留了濁音。

2) 定母、群母、澄母也有同並母的狀況。

3) 奉母也有清化跡象，有時發音像非敷，如「符ウヽ｜フウ」，有的像微影喻母一樣零聲母化，如「肥ウイ｜ウイー」;「飯煩ワン｜ワン」、「房ウワン｜ワン」，可知奉母有往 f 或 Ø 兩種方向，但看不出有維持 v 母的跡象。

4) 疑母也展現了明顯的零聲母化。

7、心邪：《俗語考》中邪母有清化現象，與心母合流為 s，但細音時不產生顎化。

8、從、日、牀、審、禪：

1) 從母有清化跡象，如「自ヅウイ｜ヅウ、ツウ」;「在ヅアイ｜ヅアイ、ツアイ」;「齊ヅイ｜ヅイ、ツイ」，若保留濁音則為 dz，清化則為 ts、ts^h。

2) 日母字部分與禪母合流，維持濁音 ʒ，部分音變為 l 音，如「如ジユイ｜ジユイ」;「兒ズウイ｜ルウ」;「二ズウイ｜ルウ」。

3) 禪母可與日母合流，或者清化與審母合流為ɕ。部分審母字多保留 ɕ，如「水シユイ｜シユイ」；部分變為 s，如「師スウイ｜スウ」。

4) 牀母有清化跡象，如「示ヅウイ｜スウ」，但在《俗語考》中多保留濁音。

五、代結語

據上述步驟，可大致理出《俗語考》的聲系約是「p, ph, f , (b), m / t, th, n, l, (d) / k, kh, x / tɕ, $tɕ^h$, dʑ, ɕ, ʒ / ts, tsh, s / Ø」等 22 類聲母，因為其中有明顯的語言接觸特徵，使得音系雜揉了江淮官話，乃至部分福州話的特徵。雖然前人研究中多指出《俗語考》是南京一帶的語音，但其細節應當還有值得細究之處。

參考文献

W. South Coblin (Apr.-Jun., 1998). Francisco Varo and the Sound System of Early Qīng Mandarin, Journal of the American Oriental Society, 118(2): 262-267.

中田喜勝(1970)〈南山俗語考の音韻について〉,《中国文学論集》1:50-59。

岩本真理（1991）〈《南山俗語考》の唐音について(1)〉,《人文研究》43.11：945-971。

岩本真理編（2017.3）《《南山俗語考》翻字と索引》，福岡：中国書店。

林慶勳（2021）〈岡嶋冠山《唐話纂要》標記假名的音韻探討——以陰聲韻止攝為例〉,《聲韻論叢》27：1-66。

陳暘智（2024）「《按照主題排列的拉丁語南京話詞典》再校及音韻相關問題探討」。國立中大學中國文學研究所碩士論文。臺灣博碩士論文知識加值系統：https://hdl.handle.net/11296/gw4eg3。

釋文雄（1744/1981）《磨光韻鏡》，東京：勉誠社，延享元年金屋三良兵衛刊本。

明清白話小説に見られる説話的叙事標識について

劉淼
沖縄国際大学　講師

1．はじめに

明清白話小説には、「看官」「話說」「且說」「閑話休題」「欲知後事如何」など、説話的語りとの関連が指摘されてきた定型的表現が散見される。これらの形式は、単なる物語構成上の慣用表現としてではなく、語り手が聞き手に働きかけ、物語の展開を調整し、話題や場面を切り替え、あるいは叙述過程そのものに介入するための談話的資源として機能している。したがって、これらの表現の歴史的用法を検討することは、明清期白話における語り手と聞き手の関係、談話構造の形成、さらに口承的語りと書面テキストとの相互作用を明らかにする上で重要である。しかし、これらの定型表現は、先行研究において、「説書人用語」「講釈用語」など、説話・講釈との関係に着目した名称のほか、中国語では「引导性程式」「启行之辞」などの名称で論じられてきた。しかし、これらの研究で対象とされる形式やその範囲には一定の幅があり、これらの定型表現を包括的に捉えるための統一的な枠組みは、必ずしも明確ではない。そこで本研究では、説話的な語りと関連し、叙事の展開において一定の標識的機能を担う定型表現を「説話的叙事標識」と定義する。本研究では、このような定型表現の諸形式とその分布、および通時的変化を検討する。

2．先行研究

寺村（1976）は、これらの表現に早くから着目した研究の一つであり、『金瓶梅詞話』を対象として、同作品に見られる「看官聽說」を、作者が読者に直接語りかける叙述形式と位置づけ、作者介入の一形式として論じている。また、岡崎（1992）は、「看官」「説話的」を中心に、説話性に基づく叙述主体の形成と物語授受の自叙機能について考察している。卢惠惠（2007）は、古代白話小説の言語形式の運用には定型化された特徴が見られると指摘し、その特徴として、①定型化された描写的な語段、②単調で画一的な「導入型」の導入文、③固定化された「启行之辞」の三つを挙げている。また、栗原（2008）は、説書人が「説書人用語」に続けて本文に対する自らの意見を聴衆に語りかけることについて、眼前の聴衆の反応を見ながら、聴衆を物語に引き込み、共感を得たり感情を喚起したりするための手段であったと指摘している。そして、こうした説書人による聴衆への働きかけに対し、章回小説では眼前に読者が存在しないため、作者がどのような意見を本文のどの箇所で述べるかは、創作段階で判断されることになると論じている。荒木（2015）は、二十回本『平妖伝』から四十回本『平妖伝』への増補における「看官」「説話的」の変化を分析し、新本『平妖伝』の叙述形式がより話本に近づいていると論じている。その上で、複雑なストーリーを読者に理解してもらうために、読者に馴染みのある形式を活用したと指摘し、こうした「看官」「説話的」の用法は『金瓶梅詞話』とは異なり、幅広い読者に受け入れられるための工夫の一環であったと結論づけている。しかし、従来の研究は、「看官」など個別の表現を対象とした文学的・叙事論的分析が中心であり、また、特定の作品に焦点を当てた研究が多い。一方、明清期の白話小説における説話的叙事標識について、その諸形式、分布および通時的変化を、言語学的な観点から体系的に分析した研究は、管見の限り少ない。

そこで本研究では、先行研究で取り上げられてきた説話的叙事標識を可能な限り網羅的に調査し、対象とする白話小説におけるこれらの表現の諸形式と分布を明らかにするとともに、その通時的変化を考察する。

3．調査対象

本研究では、明清期の白話小説における説話的叙事標識の通時的変化を明らかにするため、明代の四大奇書である『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『金瓶梅詞話』に加え、清代の『紅楼夢』『児女英雄伝』を調査対象とし、これら六作品を主な分析資料とする。この六作品のうち、井波（2008）によれば、『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』は、宋元代に講釈師が聴衆を前にして語った「三国志語り」「西遊記語り」「水滸伝語り」をそれぞれ母胎として成立した長篇小説である。また、『三国志演義』を嚆矢として、同じく語り物を母胎とする『西遊記』『水滸伝』のみならず、その後に成立した『金瓶梅』や『紅楼夢』に至るまで、章回小説の形式が踏襲されているとされる。一方、『児女英雄伝』については、太田（1995）が、講談の語り口調で描かれた生き生きとした言葉遣いなどをその特徴として挙げ、清代北京語の最重要資料の一つに位置づけている。以上のように、本研究で対象とする六作品には、語り物を母胎として成立した作品から、講談の語り口調や口語性を特徴とする清代の作品まで、説話的な語りとの関係を考察するうえで重要な特徴が認められる。したがって、これら六作品を対象とすることで、明清期の白話小説における説話的叙事標識の諸形式、分布および通時的変化を検討することが可能である。

4．調査結果と分析

本研究では、先行研究で言及されている説話的叙事標識に限定せず、対象とする六作品に見られる説話的叙事標識を可能な限り網羅的に調査した。これらの説話的叙事標識の分類、諸形式および使用数を、以下の表 1、表 2 に示す。

表 1　説話的叙事標識の一覧

受容者指示型	呼称	看官、列公、說話的
	聴取要求	看官聽説
叙事開始・転換型	開始	話說
	継続・転換	且說、卻說
叙述抑制・本筋復帰型	本筋復帰	閑（閒）話休題、言歸正傳、閑言少叙、話休絮煩、話休煩瑣、話休饒舌、剪斷殘言言歸正傳
	叙述留保	這且不表、這且不言、暫且休提、閒話休提、按下不表、這邊不提、按下不提、按下休提
後続情報予告型	後事予告	欲知後事如何、不知後事如何、要知後事如何、未知後事如何、畢竟未知後來何如
	未知情報提示	未知如何、未知何事、未知還是如何、要知端的
次回送り型	次回予告	且聽下回分解、再看下回分解、且看下回分解、下回書交代
叙事線切替型	二重化・分岐	話分兩頭
	一方の保留	按下這邊不表、按下這頭不題單表

韻文導入型	韻文の導入・引用	詩曰、詩云、歌曰、有詩為證、偈曰

表 2 説話的叙事標識の作品別使用数

標識＼作品	三	西	水	金	紅	児
看官	0	0	11	0	3	0
列公	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**113**
說話的	0	0	7	3	0	0
看官聽説	0	0	12	52	3	0
話說	**1**	**24**	**139**	**103**	**134**	**0**
且說	**64**	**4**	**320**	**96**	**155**	**5**
卻說	**748**	**245**	**197**	**71**	**72**	**189**
閑（閒）話休題	0	0	1	1	0	1
言歸正傳	0	0	0	0	0	16
剪斷殘言言歸正傳	0	0	0	0	0	3
閑言少叙	0	0	0	0	2	5
話休絮煩	0	0	12	3	0	18
話休煩瑣	0	0	0	0	0	2
話休饒舌	0	0	0	17	0	3
這且不表	0	0	0	0	1	3
這且不言	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**1**
暫且休提	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**1**
閒（閑）話休提	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**24**
按下不表	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**7**
按下不提	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**2**
按下休提	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**1**
這邊不提	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**1**
欲知後事如何	0	0	0	0	0	0
不知後事如何	0	0	0	0	1	0
要知後事如何	0	0	0	0	1	6
未知後事如何	0	0	0	0	2	0
畢竟未知後來何如	0	0	0	**40**	0	0
未知如何	35	0	1	3	4	0
未知何事	0	0	0	0	7	0
未知還是如何	6	0	0	0	0	0
要知端的	0	0	0	0	**25**	0
且聽下回分解	**121**	**94**	**99**	**99**	**35**	**0**
再看下回分解	**1**	**0**	**0**	**0**	**1**	**0**
下回書交代	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**39**

話分兩頭	0	1	10	10	0	4
按下這邊不表	0	0	0	0	0	1
按下這頭不題單表	0	0	0	1	0	1
詩曰	**230**	**90**	**95**	**10**	**0**	**0**
詩云	**5**	**4**	**0**	**1**	**5**	**0**
歌曰	**11**	**1**	**0**	**0**	**4**	**0**
有詩為證	**2**	**47**	**285**	**128**	**0**	**0**
偈曰	**0**	**0**	**4**	**4**	**1**	**0**

（太字は筆者による）

表 1 と表 2 から、以下のことがわかる。

⑴ まず、全体として、説話的叙事標識には多様な形式が存在するが、その多くは、既存の形式を基盤として形成された変種形式である。すなわち、語句の一部を置き換えたり、構成要素を付加・省略したりすることによって、相互に類似した形式が派生している。したがって、説話的叙事標識は、形式上比較的多様である一方、その内部には一定の共通する構造や形式的パターンが認められる（例：“說”“曰”“不言”“下回”“後事如何”など)。特に清末になると、既存の説話的叙事標識を基盤として構成要素を加えた表現が見られるようになり、説話的叙事標識は表現自体が長くなる傾向を示す。

（例①：智深道：“既然如此，也有出身時。洒家明日便去。”**話休絮煩**，清長老見智深肯去，就留在方丈裡歇了。水滸伝・第六回）

（例②：只是可憐他。只知感激二位奶奶，老爺太太，甚至感激烏大人，感激萬歲爺。如今**剪斷殘言言歸正傳**。却說安公子這日離了莊園。児女英雄伝・第四十回）

⑵ 一方、時代や作品を問わず、比較的広く用いられている形式として、“且說”、“卻說”が挙げられる。また、明代の作品に広く見られる説話的叙事標識の中には、清代、特に清末の『児女英雄伝』では使用が少なくなるものが見られる一方、逆に、『児女英雄伝』にのみ見られる形式も少なくない。特に、“閒（閑）話休提”類の表現は、今回の調査対象とした他の作品には一例も見られず、『児女英雄伝』にのみ使用されている。

（例③：分兵兩隊，只留孫乾守小沛。**且說**張飛自以為神妙之計，領輕騎在前突入操寨。三国演義・巻五第二十四回）

⑶ さらに、説話的叙事標識の交代と見られる傾向も見られた。例えば、『児女英雄伝』では、“看官”、“看官聽說”、“說話的”といった表現は見られず、代わりに“列公”が用いられている。

（例④：**說話的**世上有三等人怕熱，有三等人不怕熱。金瓶梅詞話・第二十七回）

⑷ また、韻文導入型の表現も『児女英雄伝』には見られない。このことは、同作品の作品性と関連している可能性がある。前述したように、『児女英雄伝』は講談の語り口調を特徴の一つとする作品であり、こうした語り口調との関係から、従来の章回小説に見られる説話的叙事標識の一部（文言的な用法）が用いられなくなったものと考えられる。

（例⑤：靈根育孕源流出，心性修持大道生。**詩曰**:混沌未分天地亂，茫々渺々無人見。西遊記・第一回）

⑸ そして、“且聽下回分解”は講釈的な語り口を想起させる表現であり、明代の作品では

比較的多く見られる。一方、清代になると、“且聽下回分解”に代わって“下回書交代”が用いられるようになる。

（例⑥：那人棚鎗下馬來見曹操。畢竟是何人，**且聽下回分解**。三国演義・巻四）

（例⑦：安公子性命如何**下回書交代**。児女英雄伝・第九回）

⑹ さらに、すでに論じたように、作品ごとに特徴的な説話的叙事標識が見られる。例えば、『金瓶梅詞話』では“畢竟未知後來何如”、『紅楼夢』では“要知端的”が用いられるほか、先述した『児女英雄伝』にも複数の特徴的な形式が認められる。

（例⑧：眼看着他上車去了，大家方纔進來。**要知端的**，且看下回分解。紅楼夢・第三十八回）

⑺ 最後に、『水滸伝』と『金瓶梅詞話』では、説話的叙事標識の使用数および分布に類似した傾向が見られる。一方、個々の作品内における分布については、顕著な傾向は認められない。例えば、紙幅の関係から詳細な分析は省略するが、『紅楼夢』では、前八十回と後四十回との間で、説話的叙事標識の使用にある程度の使い分けが見られるものの、前八十回に用いられる形式が後四十回には全く見られないといった、明確な区別は認められなかった。以上のことから、作品内部で明確な分布上の偏りは確認できない。

5．まとめ

以上、表 1 および表 2 の分析から、明清期の白話小説における説話的叙事標識には、多様な形式が存在するとともに、同一の基本形式から派生した類似形式も多く見られることが明らかになった。一方で、“卻說”のように時代や作品を越えて広く使用される形式がある一方、特定の作品にのみ見られる形式も存在する。また、時代の推移に伴って、使用される形式そのものが変化する例も確認された。特に清末の『児女英雄伝』では、他の作品には見られない形式が複数確認されるとともに、既存の形式をもとにした、表現自体が長い説話的叙事標識も見られた。このように、説話的叙事標識は、明清期を通じて一貫して使用される固定的な表現群ではなく、基本的な形式を共有しながら、時代や作品に応じて多様な形式へと展開していることがわかる。

【参考文献】

荒木典子（2015）「新本『平妖伝』における「看官」、「說話的」の増補」『水門－言葉と歴史－第 26 号、77–91 頁

井波律子（2008）『中国の五大小説』岩波書店

岡崎由美（1992）「看官・說話的・開場戯－書かれた物語のプレゼンテーションをめぐって―」『中國文學研究』第 18 号、1–15 頁

太田辰夫（1995）『中国語文論集文学篇』汲古書院

栗原順子（2008）「中国古典章回小説の回首・回尾に関する一考察」『人間科学研究』第 5 号、日本大学生物資源科学部、316–337 頁

寺村政男（1976）「『金瓶梅詞話』における作者介入文－「看官聽說」考－」『中國文學研究』第 2 号、19–31 頁

日本中国語学会編（2022）『中国語学辞典』東京：岩波書店

『清話問答四十条』における満洲語動詞の希求法形式と漢語表現との対応

李　云
立命館大学　外国語嘱託講師

1.はじめに

清代には、満洲語と中国語を対訳した満漢合璧資料が数多く作られた。これらの資料は満洲語教材であると同時に、当時の中国語口語を知るための資料としても重要である。ただし、中国語部分を考察する際には、中国語だけを見るのではなく、それに対応する満洲語の形式もあわせて見る必要がある。

満洲語の希求法について、津曲（2002：54）は、-ki を話し手の意志「～したい」や相手への勧誘「～しよう」を表す形式とし、-kini を、相手や第三者に対する希望「～するがいい」や許容「～させておけ」を表す形式としている。河内（1996：101–103）も、-ki は話者の希望・計画などを表し、後ろに sembi が続くことが多いこと、-kini は相手に対する希望・要望のほか、放任・許容を表すことを指摘している。

また、『清文助語虚字』では、ki について「欲」「要」の意を持つとした上で、単独でも用いられるが、下に se がある場合には「欲」「要」の意味がより明確になると説明している（12b2–3）。kini については、「由其罷」「任憑他罷」などの意味が挙げられている（30b2）。

なお、竹越（2012）は、希求法として命令形-ø、希望形-ki、許容形-kini、願望形-cina を取り上げている。本稿では、このうち-ki・-kini を中心に、中国語表現との対応を見る。命令形（-ø）は全用例を数える対象とはせず、「罷」など-ki・-kini と共通する中国語表現が現れる場合に、比較のため参照する。

こうした記述を踏まえ、竹越（2012）は『兼漢滿洲套話』を対象として、満洲語動詞の希求法形式と中国語表現との対応を調べている。同資料では、-ki が 70 例あり、そのうち 39 例が-ki se-の形を取る。この 39 例中 33 例では、中国語に「要」が用いられている。これに対して、単独の-ki には特定の中国語虚詞が対応しない例が多い。また、-kini は 12 例あり、そのうち 9 例では中国語文末に「罷」が現れる。

そこで本稿では、『清話問答四十條』に見られる-ki・-kini の用法と中国語表現との対応を考察する。また、中国語の「要」「想」「願」「肯」「該」「罷」などからも満洲語側を確認し、それぞれがどのような満洲語表現に対応するかを見る。

『清話問答四十條』本文から-ki・-kini の全用例を抽出したところ、-ki が 27 例、-kini が 6 例、計 33 例であった。各例について、se-との結合の有無、中国語の対応形式、発話場面での使われ方を確認した。さらに、上記の中国語表現からも逆方向に検索した。以下では、まず満洲語側から-ki・-kini の用法を見た後、中国語側から対応関係を確認し、最後に竹越（2012）の『兼漢滿洲套話』の結果と比較する。

2.『清話問答四十條』における-ki・-kini

2.1　-ki

『清話問答四十條』には-ki が 27 例見られる。このうち、se-と結合するものは 10 例で、

そのうち9例では中国語に「要」が用いられている。例えば、次のような例がある。

（1）age si gungge gebu be gai-ki se-ci, bithe-de kice-ra-kū oci,

阿哥 你 功勞 名號 **賓** 要-**祈** 助-**條** 書-**位** 勤奮-**未**-**否** 若是

阿哥你要取功名，不在書上發奮，（14a1-2）

hafan jergi sinde isina-ra aibi,

官職 品銜 你.**與** 到達-**未** 怎能

官職如何到的了你身上呢？（14a2）

（2）bi tere fucihiyala-ha-ngge be je-ki se-mbi,

我 那 燎毛-**完**-**名** **賓** 吃-**祈** 助-**現**

我要吃那燎毛的。（24a2）

（3）gūwa o-ci ai hala isi-ka-bi,

別人 成爲-**條** 什麽 姓 到達-**完**-**現**

若是別人肯嗎？（43a1）

i hono dalbaki-ci injekuše-me tuwa-ki se-re ba-de, jombu-re ai-bi.

他 還 旁邊-**從** 恥笑-**并** 看-**祈** 助-**未** 處-**位** 提醒-**未** 什麽-有

他還要從傍看笑聲兒呢，提白甚嗎？（43a1-2）

（4）si ai baita dule-mbu-he-kū, cohome fonji-re-ngge,

你 什麽 事情 過去-**使**-**完**-**否** 特意 問-**未**-**名**

你何等事没有經過，這個問法，（55b2）

mini ere jugūn de donji-fi giyai de gisure-re be donji-ki se-mbi-o,

我.**屬** 這 路 **位** 聽-**順** 街 **位** 説話-**未** **賓** 聽-**祈** 説-**現**-**疑**

是要聽我的道聽途説嗎？（55b3-4）

これらの例では、主体がある行為をしようとする意志や欲求を表している。中国語では、その意味が「要」によって明示される。主語は話者自身に限らず、第三者の意図を述べる場合や、聞き手の意志を尋ねる場合にも用いられる。

では、se-を伴わない単独の-kiはどうであろうか。単独の-kiは17例あり、話者がこれから行うことを決める場合、相手に提案する場合、自らある行為を引き受ける場合などに用いられている。中国語には「要」が現れない例が多く、動詞句そのものや、「先」「且」「罷」などで表される。

両者の違いを考える上で、同じje-「食べる」を用いた例（2）の *je-ki sembi*「我要吃那燎毛的」と次の例（5）の *beye faitame je-ki*「自己割着吃」がわかりやすい。

（5）je-tera-kū-ngge waka, huwesi gaju, beye faita-me je-ki,

吃-**未**-**否**-**名** 不是 小刀 拿來.**祈** 自己 割-**并** 吃-**祈**

不是不吃，拿刀子来，自己割着吃。（23b5）

例（5）では、話者が「自分で切って食べる」という行為を直接述べる。中国語には「要」

が現れない。これに対して、例 (2) では sembi が加わり、主体の意志・欲求が中国語の「要」によって明示される。両者を比べると、本資料では、おおむね「-ki se-：主体の意志・欲求を述べる」「単独-ki：主体の意向を具体的な行為として示す」という傾向が見られる。

ただし、これは絶対的な区別ではない。例えば、dacila-ki「倒要問問」では、単独の-ki にも「要」が対応している。-ki se-と「要」との結びつきは強いが、「要」が必ず-ki se-に対応するわけではない。

2.2 -kini

次に-kini を見る。『清話問答四十條』には 6 例あり、そのうち 4 例は単独で用いられ、2 例は seme／sere jalin を伴う構造に現れる。6 例をまとめると、次の表 1 のようになる。

表 1.

満洲語	中国語	主な機能
baha-kini	就得個官職	仮定・譲歩
je-kini	先來的先吃罷	許容
omi-kini	儘着量飲就是了	放任・自由処置
gai-kini	憑他怎樣搶白	放任・譲歩
ehere-kini seme	並非挑唆你與人打鬥	埋め込み
baitala-kini sere jalin	不過暫爲零碎使用	用途・目的

例えば、je-kini「先來的先吃罷」では先に来た人が先に食べることを認め、omi-kini「儘着量飲就是了」では飲める人には好きなだけ飲ませるという意味になる。また、gai-kini「憑他怎樣搶白」では、相手がどのように言っても構わないという意味になっている。これらの例から、単独の-kini には「許容→放任→譲歩」というつながりが見られる。

これに対して、ehere-kini seme、baitala-kini sere jalin の 2 例では、-kini は独立した発話として用いられるのではなく、別の構造の中に組み込まれている。前者では意図された事態、後者では用途・目的に関わる内容を表している。このように、-ki が主として主体自身の意志や行為と関わるのに対し、-kini は、他者の行為やある事態の実現を認めたり、それに任せたりする場合を中心に用いられる。

3.中国語側から見た対応

以上では、満洲語の-ki・-kini から出発して、それぞれが中国語でどのように表されるかを見てきた。しかし、中国語の一つの形式が、いつも同じ満洲語形式に対応するとは限らない。そこで次に、中国語側からも対応関係を確認する。主な結果は次の表 2 の通りである。

表 2.

中国語	満洲語側の主な対応	特徴
要	-ki se-、単独-ki、buye-、V-ci＋aca-、条件構文等	意志・欲求・当為など
想	gūni-、ainci／aise 等	主に推測・思考・回想
願・願意	buye-、cihangga／cihakū	語彙的な願望・意向
肯	条件構文・文脈による表現等	-ki／-kini との直接対応なし
該	主に V-ci＋aca-	6 例中 5 例が aca-系列
罷	-ki、-kini、命令形（-ø）	提案・勧め・許容など

このうち、-ki・-kini との関係を考える上で特に重要なのは「要」と「罷」である。まず「要」について見る。前節で述べたように、-ki se-10 例中 9 例には「要」が対応している。しかし、中国語の「要」から逆に満洲語を見ると、-ki se-以外の形式も現れる。

（6）jancuhūn be buye-ci, neneme gosihon be baisu,

甜的 **賓** 喜歡-**條** 首先 苦的 **賓** 要求.**祈**

“要吃甜的，先嘗苦的，(6b4)

（7）gucu gucule-re de, labdu olhošo-ci aca-mbi,

朋友 交朋友-**未** **與** 非常 慎重-**條** 應該-**現**

相與朋友，着實要慎重。（18a2-3）

例（6）では「要」は欲求を表すが、満洲語では-ki ではなく、動詞 buye-「好む、欲する」が用いられている。例（7）では「要」は意志ではなく「～する必要がある」という意味に近く、満洲語では V-ci＋aca-の構造が用いられている。この二例からも、-ki se-から中国語を見ると「要」が多いが、中国語の「要」から満洲語を見ると、-ki se-以外の形式も現れることが確認できる。

「罷」についても同様である。

（8）je, nure darabu-ki,

嘻 燒酒 敬酒-**祈**

啊，敬酒罷。（23a3-4）

（9）neneme ji-he-ngge neneme je-kini,

首先 來-**完**-**名** 首先 吃-**祈**

先来的先吃罷。（23a3）

（10）je-tere cihakū oci, buda jefu,

吃-**未** 不願意 若是 飯 吃.**祈**

若不愛吃，用些飯罷。（23b3）

このように、「罷」は単独の-ki にも-kini にも、さらに命令形（-ø）にも現れる。このため、「罷」を-ki または-kini の固定した訳語と見ることはできない。ここでは、提案・勧め・許容など、発話全体の働きに応じて「罷」が用いられている。

このほか、「想」は本資料では主に推測・思考・回想を表し、gūni-ci、ainci／aise などに対応する。「願・願意」は buye-、cihangga／cihakū などの語彙形式によって表される。また、今回確認した「肯」の例には-ki／-kini との直接的な対応は見られず、「該」は 6 例中 5 例が V-ci＋aca-系列に対応する。この結果からも、満洲語と中国語の対応は一対一ではない。同じ満洲語形式が複数の中国語表現に対応し、逆に同じ中国語形式が複数の満洲語表現に対応する場合がある。

4.『兼漢滿洲套話』との比較とまとめ

最後に、本稿の結果を竹越（2012）の『兼漢滿洲套話』と比較する。本稿で取り上げる形式について、主な分布を比較すると次の表 3 の通りである。

表 3.

	『兼漢滿洲套話』	『清話問答四十條』
-ki	70	27
-ki se-	39（「要」33）	10（「要」9）
-kini	12（「罷」9）	6（「罷」1）
-cina	20	0

まず、-ki se-と中国語「要」との対応は、両資料に共通している。『兼漢滿洲套話』では-ki se-39 例中 33 例に「要」が対応し、『清話問答四十條』でも 10 例中 9 例に「要」が対応する。この強い結びつきは、二つの資料に共通して認められる。

これに対して、-kini の中国語対応には違いが見られる。『兼漢滿洲套話』では 12 例中 9 例に文末の「罷」が現れるのに対し、『清話問答四十條』では 6 例中「罷」が現れるのは 1 例である。後者では、「儘着……就是了」「憑……」なども用いられる。許容・放任・譲歩といった意味が、それぞれ異なる中国語表現によって表されている。

また、『兼漢滿洲套話』には-cina が 20 例あり、そのうち 12 例が secina の形を取る。これに対して、『清話問答四十條』では-cina は確認されなかった。ただし、この違いだけから歴史的な変化を考えることはできない。ここでは、両資料における希求法形式の分布の違いとして捉えておきたい。

以上の結果は、三点にまとめられる。第一に、-ki se-と中国語「要」には強い対応関係があり、この傾向は『兼漢滿洲套話』にも共通している。第二に、単独の-ki と-kini は、中国語では一つの決まった形式では表されない。第三に、満洲語から中国語を見る場合と、中国語から満洲語を見る場合では、対応の仕方が同じではない。満漢合璧資料の中国語表現を考える際には、中国語側の形式だけでなく、対応する満洲語形式と、その表現が用いられる文脈もあわせて見る必要がある。

資料

常鈞『清話問答四十條』乾隆二十三年（1758）刊。
陸晨・劉雲校注（2018）『清話問答四十條』北京大学出版社。

参考文献

河内良弘（1996）『満洲語文語文典』京都大学学術出版会。
竹越孝（2007）『清代満洲語文法書三種』KOTONOHA 単刊 1、古代文字資料館。
竹越孝（2012）「『兼漢滿洲套話』における満洲語動詞の希求法・終止法語尾と中国語との対応」『中国語研究』54：1–17。
津曲敏郎（2002）『満洲語入門 20 講』大学書林。

「自然」の史的変遷と変化のメカニズム

姚　尭
東北大学 高度教養教育・学生支援機構　講師

1. はじめに

現代中国語の「自然」は、名詞・形容詞として用いられるほか、以下の用法も見られる。

（1）a 到了春天，樱花自然会开。
　　b 到了春天樱花自然会开，但每年时间有早晚。
　　c 自然，到了春天樱花会开，但每年时间有早晚。
　　d 到了春天樱花会开，自然，每年时间有早晚。

従来の研究では、（1a）～（1c）の「自然」を〈当然〉を表す語気副詞、（1d）の「自然」を逆接関係を示す接続詞として扱っている（北京大学中文系 1982:565、张斌 2002:761 など）。これら 4 つの用法は、それぞれどのような意味的・統語的特徴を有し、相互にいかなる派生関係にあるのか。また、歴史上の諸用法とはどのように結びついているのか。これらの問いに答えるには、現代語の共時的記述だけでは不十分であり、通時的観点から「自然」の変遷を追跡する必要がある。

先行研究を概観すると、接尾辞「～然」の発展を論じる中で「自然」に言及した研究は見られるものの（王 2009、丁 2011、曹・王 2015、余 2017）、「自然」の語史そのものを扱う論考は管見の限り劉（2011）のみであり、体系的な語史研究は未だ十分に行われていない。そこで本稿では、「自然」の諸用法の成立過程および相互間の派生関係に着目し、通時的観点から「自然」の史的変遷と変化のメカニズムを考察する。その考察を通じて、現代語における「自然」の各用法を歴史的展開の中に位置づけることを試みる。

2. 主述構造から名詞・様態副詞・形容詞へ

「自然」の最古例は、春秋時代の『老子』に遡る。

（2）成功遂事，而百姓謂我自然。　（帛書老子甲本 17［《帛書老子校注》中華書局 1996:450］）

「我自然」は「我々自身がそうなる」と解釈される。ここでの「自」は〈自己・自身〉を指す再帰代名詞、「然」は〈そうである、そうなる〉を意味する述語性指示代名詞である。「自然」は「主語＋述語」構造をなし、〈自ら然る〉、すなわち、物事が外力や人為的な働きかけによらず存在・変化することを示す。本稿では、この用法を「自然 $_1$」とする。

「自然」が名詞として用いられる例も、同じく『老子』に見出される。

（3）人法地，地法天，天法道，道法自然。（帛書老子甲本 25［《帛書老子校注》中華書局 1996:451］）

（3）の「自然」は動詞「法（＝模範とする）」の目的語として用いられ、「地」「天」「道」と同格の名詞として位置づけられる。こうした「自然」は、外力や人為的な働きかけによらず存在・変化する物事や現象を指す。以下、これを「自然 $_2$」とする。

連用修飾語としての「自然」は、東漢時代の資料に確認される。

（4）又作九層博山香爐，鏤為奇禽怪獣，窮諸靈異，皆自然運動。

（西京雜記・卷一［《西京雜記校注》上海古籍出版社 1991:59］）

（4）の「自然」は動詞「運動」を修飾し、物事が〈おのずから〉発生・進行するという動作の様態を描写しており、様態副詞と位置づけられる。以下、これを「自然 $_3$」とする。

東漢の資料には、形容詞として用いられる「自然」も見られる。

（5）臣伏見光祿大夫江夏黃瓊，耽道樂術，清亮自然，被褐懷寶，含味經籍。

（後漢書・郎顗襄楷列傳［《後漢書》中華書局 1965:1070］）

（5）の「自然」は述語として用いられ、〈作為的・人工的ではない、何ものにも拘束されない〉という人や物の性質・状態を描写している。以下、これを「自然$_4$」とする。

3. 語気副詞用法の出現と定着

三国魏晋時代に入ると、「自然」は様態副詞として引き続き用いられる一方、推測・確信といった話者の主観を反映する語気副詞用法も見られるようになる。

（6）將軍躬殺董卓，威震夷狄，端坐顧盼，遠近自然畏服。

（三國志・魏書・呂布臧洪傳/裴松之注［《三國志》中華書局 1982:226］）

「自然畏服」は様態的意味として「おのずから畏服する」と解釈できる一方、「当然畏服するはずだ」とも理解できる。すなわち、本例の「自然」は単に動作の自発性だけでなく、「ある前提から特定の結論が当然導かれる」という話者の判断も表し、主観性の萌芽を示している。そもそも〈おのずから〉という意味には「外力が介入する余地がない」という含意がある。物理的領域における〈事態が外力によらず、おのずから成立する〉という意味合いが論理的領域へと拡張されると、〈前提や論理から、結論命題が疑う余地なく導かれる〉という論理的必然性へと読み替えられる。この意味拡張を経て、「自然」は〈当然、あたりまえ、間違いなく〉という話者の推測・確信を示す語気副詞へと展開いていく。

（6）の「自然」は様態的意味と語気的意味の中間に位置する過渡的な用法である。隋代以降、より典型的な語気副詞の用例が広く見られるようになる。

（7）請命各家養狗，令吠驚，自然賊盜止息。（啟顏錄・下［《啟顏錄箋注》中華書局 2014:117］）

意味面から見ると、「盗賊が収まる」ことは盗賊自身の自発的行動とは考えにくいため、従来の様態副詞としての解釈は成立しにくい。統語面から見ると、「自然」は動詞の直前ではなく、主語を含んだ文の先頭に位置し、その作用域は文全体に及んでいる。この 2 点を踏まえると、本例の「自然」は語気副詞として捉えるのが妥当である。

さらに注目すべきは、こうした「自然」が通常、条件複文の後件に生起する点である。すなわち、「自然」は「C（condition/条件）、自然 R（result/帰結）」構文において、「条件 C のもとで R が当然の帰結として導かれる」ことを示している。以下、こうした条件複文の後件に生起する語気副詞用法を「自然$_5$」とする。「自然$_5$」は後世に展開する諸用法の基盤となり、「自然」の変遷経路における要をなす用法である。

4. 語気副詞用法の発展

「自然」は語気副詞として長らく「C、自然 R」という複文構造の中で用いられていたが、明代に入ると、単文内にも生起するようになる。

（8）a 雪景自然幽靜。一則遊賞，二來與師父寬懷。（西遊記・四十八回［中華書局 2014:638］）

b 看見你在前面背囊而走，心裏道：“自然是了。”（初刻拍案驚奇・卷十二［中華書局 2009:123］）

この変化が可能となったのは、「条件−帰結」という論理関係が必ずしも複文という固定化された統語形式に依存せず、より広い文脈の中でも成立し得るためである。（8a）はこの点を示す好例である。本例を「雪景色であれば（それは）当然幽静である」と理解すれば、「条件−帰結」複文が成立し、「自然」は従来型の語気副詞と捉えられる。一方、実際の文面上には明示的な条件複文の標識が存在せず、「雪景色は当然幽静である」という単文とし

ての解釈も成立する。また、(8b) では、「あなたが前方で袋を背負って歩いているのを見た」という先行文脈を根拠とし、話者が「間違いなくそれだ」と推論を導き出している。すなわち、明示的な条件節を伴わずとも、直前の発話や叙述の流れ、発話場面、あるいは社会常識などが推論の根拠となり得る。この場合、「自然」は形式上「自然 R」という単文構造をとるものの、意味上は従来通り、先行文脈を条件としつつ、〈当然〉という話者の確信を表している。以下、こうした単文に生起する語気副詞用法を「自然 $_6$」とする。

以上の分析から、「自然 $_6$」は「自然 $_5$」と連続性を持つことが明らかである。ただし、「自然 $_5$」の作用域が複文の後件に限られるのに対し、「自然 $_6$」は単文全体をその作用域に収めている。複文から脱却した「自然 $_6$」は、より高い統語的自立性を獲得したと言える。

5. 語気副詞から談話標識へ

明代後期以降、「自然」にはさらなる用法の展開が見られる。

(9) a 憐你孤兒寡婦，自然該替你說法。但聞得善繼執得有亡父親筆分關，這怎麼處？
（喻世明言・卷十［中華書局 2009:101］）

b “（略）小薛與蕉客今日落第，要受罰的。”寶琴笑道：“我們自然受罰，但不知付白卷子的又怎麼罰？”
（紅樓夢・七十回［中華書局 2009:479］）

(9a) の「自然」は「C、自然 R」構文において〈当然〉の意を表し、「自然 $_5$」と捉えられる。ただし、通常の「自然 $_5$」の例と異なり、「C、自然 R」複文の後には「但」に導かれる逆接節 A（adversative/逆接）が後続している。(9b) はこの構造変化がさらに進んだ段階を示す。本例では、R 節「受罰」の成立条件を示す C 節「落第」が直前の発話を受けて省略される一方、「自然 R」の後には A 節が後続している。その結果、「自然 R」は形式上、条件複文の後件ではなく、逆接複文の前件として現れる。すなわち、「自然」は「(C、) 自然 R、但 A」構文において、R を当然のこととして一旦承認し、反論・修正・補足の A を談話に導入する機能を担っている。以下、こうした複文の前件に生起する用法を「自然 $_7$」とする。

「自然 $_7$」は「自然 $_5$」構文における C 節の潜在と A 節の付加によって成立した。そのため、「自然 $_5$」との連続性が認められ、確信を表す語気副詞の延長線上に位置づけられる。一方、「自然 $_7$」は、①「ここまでの内容は認めるが、主眼は次に述べる内容にある」という談話の展開方向を示すこと、②相手の見解などの先行内容を一旦肯定的に受け止め、反論を和らげるという対人配慮を示すこと、の 2 点において談話標識（日本中国語学会 2022:404）としての性格を帯び、高度な主観性・間主観性を示している。特に①の機能は、「直後の命題 R を承認済みの既知情報として背景化し、焦点命題 A へと繋ぐ」ものとも解釈でき、現代語における「自然」のさらなる用法発展を支える重要な基盤となる。

6. 談話標識用法の定着と発展

現代語に至ると、「自然」が複文の冒頭に独立して生起する例が多く見られるようになる。

(10) 自然，因為自己的嗜好，文學書是也時常看看的，不過並無心得，能說出於諸君有用的東西來。（魯迅 而已集・革命時代的文學［《新版魯迅雜文集》浙江人民出版社 2002:357］）

主観性・間主観性の高い成分ほど、文の外側へ移動する傾向にある（Traugott 2010）。「自然 $_7$」の文頭への移動によって、(10) のような「自然、R、但 A」構文が成立した。こうした文頭配置と読点による韻律上の独立性から、「自然」は R 節の内部に組み込まれた副詞ではないことがわかる。その作用域は R から R と A の関係性全体へと拡張し、談話の展開を方向づける談話標識としての性格が一層前面化している。以下、こうした先行文の文頭

に独立して生起する談話標識用法を「自然$_8$」とする。「自然$_8$」は「自然$_7$」の延長線上にあり、同様に「直後の命題を背景化し、焦点命題へと繋ぐ」機能を担っている。

20 世紀後半の現代語には、2 つの文の間に生起する「自然」も多く確認される。

（11）我们不能过分强调条件，自然，也不能不讲条件。（北京大学中文系 1982：566）

（11）の「自然」は「P（prior/先行）、自然、R」構文において、P を主たる主張としつつ、補足・追加の R を談話に導入する機能を担っている。このような「自然」は統語面から見ると従来の用法と大きく異なるため、一般に接続詞と見なされている。しかし、従来の接続詞説では、この用法の成立機構および既存用法との連続性が十分に説明されていない。

本稿では、この用法を「自然$_9$」とし、談話標識「自然$_8$」と連続するものとして捉える。

（12）a 自然$_8$，我们不能过分强调条件【命题 1】，但是也不能不讲条件【命题 2】。

b 我们不能过分强调条件【命题 1】，自然$_9$，也不能不讲条件【命题 2】。

（12a）では、命題$_1$が背景命題として承認され、「但是」に続く命題$_2$が焦点として提示される。これに対し（12b）では、命題$_1$が焦点となり、命題$_2$が補足的な背景命題として導入される。2 つの「自然」は一見すると統語位置と情報構造を異にするが、いずれも背景命題の直前に位置し、その命題の〈当然性〉を示している。すなわち、「直後の命題を背景化して、焦点命題との関係を組織する」という機能を共有している。

談話標識としての「自然」は、韻律的に独立し、統語的にも節の内部に組み込まれていないため、談話単位の境界に比較的自由に生起できる。この性質ゆえに、背景命題を焦点命題に先行させる「譲歩型」と、後続させる「補足型」の二通りの情報構造が可能となる。文頭型の「自然$_8$」と文中型の「自然$_9$」の相違は、こうした背景命題と焦点命題の配列の相違に対応する。したがって、「自然$_9$」は接続詞というより、先行する焦点命題を受け、補足的な背景命題を導入する文中型の談話標識と捉えるほうが適切であると考えられる。

7.「自然」の 9 種類の用法

以上の考察に基づき、「自然」の 9 種類の用法を表 1 に整理する。

表1 「自然」の意味用法分類

分類	品詞	主要な語義	意味的特徴	統語的特徴	典型的な構文	成立時代
自然$_1$	再帰代名詞+指示代名詞	自ら然る、それ自身がそうである	物事が外力や人為によらず存在・変化する	述語		先秦
自然$_2$	名詞	自ら然る物事、物事自身のあり方	外力や人為によらず存在・変化する物事や現象	主語、目的語		先秦
自然$_3$	様態副詞	おのずから	物事が自発的に発生・進行する様態	連用修飾語		東漢
自然$_4$	形容詞	作為的でない	作為的・人工的でない性質や状態	述語、連体修飾語		東漢
自然$_5$	語気副詞(複文後件型)	当然、あたりまえ、間違いなく	「条件Cのもとで**R**が当然の帰結として導かれる」という話者の**推測・確信**を表す	**複文の後件**の述語前または節頭に生起し、述語／後節を修飾する	C，自然R。	魏晋
自然$_6$	語気副詞(単文型)		「Rは当然成立する」という話者の**確信**を表す	**単文**の述語前または文頭に生起し、述語／文を修飾する	自然R。	明代
自然$_7$	語気副詞(複文前件型)→談話標識	当然、もちろん	**R**を**承認**済みの既知情報として**背景化**し、**反論・修正・補足**を表す**焦点A**へと繋ぐ	**複文の前件**の述語前に生起し、述語を修飾する	自然R，但A。	明代後期
自然$_8$	談話標識(文頭型)			**先行文の文頭**に生起し、談話全体を導く	自然，R，但A。	20世紀前半
自然$_9$	談話標識(文中型)		**焦点P**を受け、**補足・追加**を表す**背景R**を導入する	**後続文の文頭**に生起し、談話全体を繋ぐ	P，自然，R。	20世紀後半

「自然」は先秦時代に〈自ら然る〉を表す主述構造（自然$_1$）として現れ、同時期に名詞用法（自然$_2$）も成立した。東漢には〈おのずから〉を表す様態副詞用法（自然$_3$）と〈作

為的でない〉を表す形容詞用法（自然$_4$）へと展開した。魏晋時代には〈当然、間違いなく〉を表す語気副詞用法（自然$_5$）が生じた。語気副詞「自然」は長らく条件複文の後件に用いられていたが、明代には単文内（自然$_6$）、さらに逆接複文の前件（自然$_7$）へと使用環境を広げ、後者が談話標識へと発展した。現代語に至ると、文頭型の談話標識用法（自然$_8$）が成立し、そこ後文中型用法（自然$_9$）も生じた。この分類に照らすと、冒頭で提示した（1a）~（1d）は、それぞれ「自然$_5$」「自然$_7$」「自然$_8$」「自然$_9$」に該当すると考えられる。

8.「自然」の変遷経路とそのメカニズム

以上で検討した各用法の成立時期および意味的・構文的連続性を踏まえると、「自然」の変遷経路は図1のように整理できる。この一連の変化を駆動したメカニズムは、「自然」に内在する2つの意味特徴から説明できる。

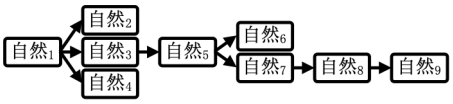


図1 「自然」の変遷経路

第一は、本義〈自ら然る〉に内包される〈外部からの介入の排除〉という意味要素の抽象化・主観化である。まず、〈事態が外力や人為によらず、おのずから成立する〉という物理的領域における様態的意味（自然$_3$）が、〈結論命題が疑い・反論の余地なく成立する〉という認識的意味（自然$_5$、自然$_6$、自然$_7$）へと展開する。さらに、逆接・譲歩・補足の文脈において、〈前後の命題を矛盾や断絶なく結びつけ、談話を不整合なく進める〉という談話的意味（自然$_7$、自然$_8$、自然$_9$）へと発展する。すなわち、排除の対象が「外力・人為」から「疑い・反論」、さらに「談話上の矛盾・不整合」へと次第に抽象化していく。それに伴い、話者の主観や談話構成上の意図がより強く反映されるようになる。

第二は、本義に内包される〈当然性〉がもたらす命題の背景化である。「自然」は本来、物事が〈自然の摂理にかなう〉ことを表し、そこから〈論理の筋道にかなう〉（自然$_5$、自然$_6$、自然$_7$）、さらに〈一般常識や発話当事者間の共通認識にかなう〉（自然$_7$、自然$_8$、自然$_9$）へと拡張する。自然の摂理・論理の筋道または一般常識にかなう物事や命題は、いずれも〈当然性〉を帯びるため、話者と聞き手の間で承認済みの非争点的な情報として提示されやすい。その結果、当該命題は新情報としての顕著性が低下し、談話上の背景として解釈されやすくなる。この背景化機能が確立すると、「自然」は単一命題の成立を確認する語気副詞から、背景命題を導入して、焦点命題との関係を組織する談話標識へと発展を遂げる。〈当然性〉に基づく命題の背景化は、「自然」の機能を様態・語気表示から談話構成へと拡張させ、談話標識用法を生み出した重要なメカニズムと言える。

このように、「自然」の変遷は、概念的機能（自然$_3$）から認知的機能（自然$_5$、自然$_6$、自然$_7$）を経て、談話的機能（自然$_8$、自然$_9$）へと発展する過程として捉えられる。この過程において、「自然」の本義に根ざす〈外部からの介入の排除〉と〈当然性〉という2つの意味要素が変化のメカニズムの基盤をなし、多様な意味・機能の展開を可能にした。

参考文献　北京大学中文系 1982.《现代汉语虚词例释》，商务印书馆。/ 曹秀玲・王清华 2015.《从基本话语到元话语−以汉语让传义“X 然”类词语为例》,《中国语文》(6)。/ 丁健 2011.《“X 然”的连词化−兼谈从代词结构到连词的演化模式》,《南开语言学刊》(2)。/ 刘金波 2011.《自然的词汇化和语法化》,《绥化学院学报》(1)。/ 王兴才 2009.《“然”的词尾化考察》,《汉语学报》(3)。/ 余珩 2017.《表肯定判断“X 然”语气副词的语法化》,《语言研究集刊》(19)。/ 张斌 2001.《现代汉语虚词词典》，商务印书馆。/ 日本中国語学会 2022.『中国語学辞典』，岩波書店。/ Traugott, E. C. (2010). (Inter)subjectivity and (Inter)subjectification: A Reassessment. In: Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization, pp. 29-71, Mouton de Gruyter.

ダブズの漢字観と漢字書記法構想

――漢字ラテン化批判との関連を中心に――

鄒　王番
関西大学ほか　非常勤講師

一、はじめに

漢字のラテン化運動（文字改革）は、清末以降の中国言語文字史における重要な思潮であり、白話文運動（書面語改革）、新国音運動（国語運動）とともに「三大語文運動」を構成した。こうした運動のなかで、中国人知識人だけでなく、中国語学習の必要に迫られた来華西洋人が、漢字改革をどのように捉え、いかなる試みを行い、どのような構想を提示したのかも検討すべき課題である。

全体としてみれば、来華西洋人の相当数は漢字のラテン化を支持し、ウェード式、ジャイルズ式、ウィリアムズ式など多様なローマ字表記法を考案した。20 世紀初頭には中国教育会（Educational Association of China）が設立され、その後数年のうちに *Primer of the Standard System of Mandarin Romanization* などが編纂された[1]。

しかし、漢字の全面的なラテン化には賛成せず、従来の漢字をそのまま受け入れることにも否定的で、既存の漢字を基礎に改革を図ろうとする立場もあった。ホーマー・ハーゼンプフルーク・ダブズ（Homer Hasenpflug Dubs, 1892-1969）はその代表である。本稿では、彼が構想した新たな漢字書記法を検討し、その背後にある漢字観を明らかにする。

David B. Honey（2001）は、ダブズが独自のラテン化表記体系を考案していたと指摘する。その体系では、漢字がアルファベットと数字からなる記号によって置き換えられ、それらによって発音、声調、構成要素までが表示されたという[2]。このことから、ダブズがラテン化による書記体系も試みていたことがわかる。ただし、1928 年の「部首＋表音記号」案とこうしたラテン化の試みとの関係は、なお資料を補って検討する必要がある。

二、ダブズの経歴

ダブズは 1892 年、アメリカ合衆国イリノイ州に生まれた。父チャールズ・ニュートン・ダブズ（Charles Newton Dubs, 1862-1936）は米国福音教会（United Evangelical Church）の宣教師であった。1900 年、8 歳で両親と中国へ渡り、湖南省湘潭で少年期を過ごした。この意味で、ダブズは「宣教師二世」[3]と位置づけることができる。1902 年に帰国して正規教育を受け、1914 年にイェール大学で哲学学士、1916 年にコロンビア大学で哲学修士、1917 年にユニオン神学校で神学修士を取得した。

1918 年、ダブズは妻とともに再び中国へ渡った。南京の語学学校（南京華言学堂）で中国語を学ぶなかで中国哲学の研究を始め、とりわけ『荀子』への関心を深めていった[4]。そ

---

[1] 詳しくは、鄒王番「近代來華傳教士與漢字拉丁化―以英文期刊『教務雜誌』為資料」『中国語研究』2023 年 11 月、49-68 頁を参照。

[2] David B. Honey, *Incense at the Altar: Pioneering Sinologists and the Development of Classical Chinese Philology*, American Oriental Series, vol. 86 (New Haven, Conn.: American Oriental Society, 2001), pp. 261–265.

[3] 中国社会科学院近代史研究所翻訳室編『近代来華外国人名辞典』北京：中国社会科学出版社、1981 年。

[4] 李哲賢「美國漢學家德孝騫之荀子研究析論」『文与哲』2013 年 6 月、463-498 頁。

の後、湘潭に赴いて父と合流し、宣教活動に従事した。

中国滞在 6 年を経た 1924 年、ダブズは帰国し、翌 1925 年、『荀子』に関する研究で哲学博士号を取得した。1925 年から 1959 年にかけて、ミネソタ大学、マーシャル・カレッジなどで教鞭を執った。1947 年には William Edward Soothill（1861-1935）の後任としてオックスフォード大学中国学教授に就任し、1959 年に退職した。1969 年 8 月、オックスフォードで死去した。

ダブズの主要業績の一つは班固『漢書』の英訳であり、その最初の二巻は 1947 年にジュリアン賞（Julien Prize）を受賞した。また、西洋中国学界において『荀子』を体系的に研究した初期の研究者の一人とみなされている。

三、なぜ純粋な表音方式では中国語の書記問題を解決できないのか

ダブズの漢字書記法構想は、字形をいかに簡略化するかという問題からではなく、まず中国語口語の性質に対する認識から出発する。当時、漢字のラテン化を主張する議論が少なくなかったが、ダブズは、アルファベットや音節記号だけでは漢字を代替できないと考えた。彼は「アルファベットも音節文字も、中国語を適切に表記することはできない」と述べ、その理由として中国語の音節構造と多数の同音現象を挙げた[5]。

ダブズによれば、中国語口語は「単音節的であり、声調をもち、屈折変化をもたない」。多音節言語では複数の音節を組み合わせて多数の語を形成できるのに対し、単音節言語では異なる音形の数が限られる。したがって、ダブズが反対したのは「記号によって中国語を書くこと」そのものではなく、音声情報だけを表す記号で中国語を書くことであった。音のみを記録すれば、一つの記号が複数の異なる字・語に対応し、意味の区別が困難になる。この認識が、全面的な表音化に反対しつつ、表音要素そのものは残そうとする彼の立場の出発点となった[6]。

このように、ダブズが直面していた核心的問題は「漢字を表音化すべきか否か」という二者択一ではなく、意味の区別を保ちながら、書記形式をいかに規則的で、学習しやすく、読みやすいものにするかという点にあった。この問題意識が「声符＋部首」という二重構造の再設計へとつながる。

四、ダブズの新書記体系の基本原理

前節でみたように、ダブズは純粋な表音体系を中国語に適用することは困難だと考えた。本節では、彼が提案した、アルファベットまたは音節記号と「部首」を組み合わせる新たな書記法を検討する。この書記法は既存の漢字の傍らに単に注音記号を付すものではなく、漢字内部の音と意味の対応関係そのものを再編成する試みであった。その基本原理は以下の四点にまとめられる。

以下では、議論の便宜上、ダブズの体系において音声情報の符号化を担う部分を「声符」と総称し、意味分類の機能を担う“radical”を「義符」と呼ぶこととする。ただし、ダブズ自身の原文表現、あるいは伝統的な部首体系について述べる場合には、「部首」という語を用いる。

第一に、「表音＋表意」の二重構造を維持することである。音声情報だけを残せば、多数の同音字が同一形式に収斂し、意味の区別も失われる。したがって、彼の構想は表音文字

[5] Homer H. Dubs, “Reform the Chinese Written Language!,” *The Chinese Recorder*, vol. 59, no. 4 (1928), p. 651.
[6] *Ibid.*, p. 651.

で漢字を置き換えるのではなく、形声構造にみられる音と意味の双方を示す機能を維持しようとするものであった。第二に、声符を徹底して規則化する。伝統的な形声字では、同一の声符が異なる漢字で必ずしも同じ発音を示さない。ダブズは、この歴史的に形成された不規則性が学習負担を増すと考え、アルファベットまたは音節記号によって、同一記号が一貫して同一の音声情報を示す体系を求めた。つまり、声符に安定的で予測可能な表音機能を与えようとしたのである。第三に、部首ないし義符を意味カテゴリーに基づいて規則化することである。ダブズは、既存の部首体系もまた十分な体系性を欠いており、そのまま踏襲することはできないと考えた。とりわけ彼は、ある字をどのように分類するかを決定する基準は、その歴史的由来ではなく、「現在の使用」と「基本的意味」であるべきだと強調している[7]。したがって、彼が構想した部首体系は、伝統的な字書の部首分類を単純に継承するのではなく、現代的な意味に基づいて再編するものであった。同一の意味カテゴリーに属する字には、可能な限り同一の義符を用いる。これにより、学習者は「字を見て音を知る」だけでなく、義符を手がかりとして、その字がどのような意味カテゴリーに属するかも推測できる。第四に、書記形式を統一しつつ、一定の方言適応性を保持することである。ダブズは、中国各地で発音に差異があることを認識しており、一つの表音記号を特定地域の実際の発音に厳密に対応させるだけでは、全国的な書記体系として機能しにくいと考えていた。そこで彼は、バートランド・ラッセルのいう“systematic ambiguity”（「体系的曖昧性」）という概念を援用し、同一の記号であっても、地域ごとの安定した音韻対応関係に基づいて異なる音価を与えることができるとした。たとえば、同一の記号がある地域では hu、別の地域では規則的に fu と読まれる、といった対応である。この設計からわかるように、彼が目指していたのは、全国で完全に同一の実際の発音を実現することではなく、全国的に統一された「綴り」の形式を確立することであった。

以上を総合すると、ダブズの理想は漢字を全面的に廃止することではなく、伝統的な漢字にありながら十分に規則化されていなかった「声符が発音を示し、部首が意味を示す」仕組みを規則化し、発音と意味の双方について予測可能性を高めることにあった。

五、新書記体系の具体的構造とその想定される効果

以上の原理に基づき、ダブズは同音または近似した発音をもつ漢字を例に、新体系の具体的構造を説明する。この部分は彼の構想を理解するうえで重要である。彼は「部首＋表音記号」という原理だけでなく、表音部分の分解、義符の配置、両者を組み合わせた新たな字形まで具体的に示している。

「禮」を例にとると、ダブズは一字を表意部分と表音部分に分ける。表意部分には意味カテゴリーを示す「示」を用い、表音部分には伝統的な漢字の声旁ではなく注音記号を用いて、声母、韻母、声調をそれぞれ表す。まず声母 l と韻母 i の記号を組み合わせて li を構成し、必要に応じて上声の記号を加える。これにより、各字の発音を一字ずつ記憶するのではなく、固定された表音要素から直接読み取ることが可能になる。

原文の字形例では、多くの場合、声調記号を省き、「義符＋共通の表音要素」という組み合わせを示している。たとえば「禮」には「示」、「豊」には「缶」、「醴」には「酉」、「履」には「革」、「蠡」には「虫」、「李」には「木」を義符として用いる[8]。各字は意味カテゴリ

[7] *Ibid.*, p. 653.
[8] *Ibid.*, p. 652.

ーが異なるため異なる義符を用いる一方、表音部分は共通する。つまり、同音字は共通の声符を用い、意味カテゴリーの違いを異なる義符で区別するのである。

以上から明らかなように、ダブズの構想は、伝統的な漢字の傍らに単に注音を付す方法ではない。字形内部の各要素の機能を改めて規定し、声符には発音を安定して示す機能を、義符には意味カテゴリーを示す機能を担わせる。これにより、一字ずつ個別に覚える必要のあった漢字を「有限の声符＋有限の義符」の組み合わせとして捉え直すことができる。この点に、一般的な漢字注音方式との重要な相違がある。

ダブズによれば、この体系の最大の学習上の利点は、未知の字に出会った際、声符から発音、部首ないし義符から意味カテゴリーという二つの手がかりを同時に得られる点にあった。すなわち、「字を見て音を知る」と「字を見て類を知る」を同時に可能にし、一字ずつ機械的に記憶する負担を軽減しようとしたのである[9]。

学習効率の面でも、ダブズはこの方式に大きな期待を寄せた。彼は、この書記法を採用すれば、従来 500 字を学ぶのに必要な時間で 5000 字を習得でき、学習効率は約 10 倍になるとした。さらに、識字率の向上だけでなく、中国の児童が漢字の記憶に費やす時間を減らし、その分を他の学習に充てられると考えた。形式面では、筆画数を減らす副次的効果もある。たとえば「禮」「醴」「蠡」は画数が多いが、「義符＋注音要素」によって一定程度簡略化できる。しかし、論文全体をみれば、ダブズが重視したのは画数削減そのものではなく、音と意味の対応を固定し、識読と記憶の負担を軽減することであった。したがって、その核心は「簡略化」というより「規則化」と「予測可能性」にある。

六、考察――規則化志向の意義・背景・限界

ダブズの書記体系で最も注目すべき点は、それが漢字を全面的に廃止するラテン化案とも、伝統的な漢字をそのまま維持する立場とも異なることである。彼は、形声構造にみられる「音によって発音を示し、形によって意味を示す」仕組み自体には価値を認め、改めるべきなのは歴史的に形成された不規則性だと考えた。したがって、その構想は形声構造の原理を人為的に規則化する試みと理解できる。声符を安定した音声符号、義符を安定した意味分類標識とし、有限の構成要素の組み合わせによって逐字暗記に代えようとしたのである。

来華西洋人による漢字書記法の歴史からみても、この「部首＋注音記号」には一定の特殊性がある。本稿で確認した資料の範囲では、多くの構想がラテン化、記号化、あるいは複数の表音記号の組み合わせを中心とするのに対し、ダブズは漢字の意味的要素を残しつつ、表音改革の成果を漢字構造の内部に組み込もうとした。彼は漢字を単に置き換えるべき旧来の文字とみなすのではなく、その構形原理自体を改革の資源としたのである。この意味で、「漢字を残す／表音文字へ移行する」という二者択一ではなく、表音改革の規則性を漢字内部へ導入しようとしたといえる。

では、なぜダブズはこれほどまでに「徹底した規則化」を重視したのであろうか。この点については、彼の知的背景からさらに考えることができる。第一に、長年にわたるアルファベット文字の使用経験によって、書記体系を、有限の記号が比較的安定した規則に従って組み合わされる体系として捉える傾向が強められていた可能性がある。第二に、ダブ

[9] *Ibid.*, p. 652.

ズ自身が長期にわたる中国語学習および中国の学校教育に関する経験を有していた点も重要である。彼は論文の冒頭で、自身の判断が長年の中国語研究と中国の学校における経験に基づくものであると述べている。そのため、彼が文字を考察する際には、「学習に要する時間」「識字の効率」「一般の人々が習得可能か」といった問題が一貫して中心に置かれていた。この観点からみれば、規則化は単なる形式上の美学ではなく、識字教育と教育効率に資する技術的選択であったといえる。

もっとも、この構想には明らかな限界もある。第一に、強い「形声字中心」の傾向がみられる。「部首＋声符」は形声字の説明・改造には適するが、ダブズはこれを文字全体の基本原理に拡張しようとした。象形・指事・会意など非形声的な構形をどう組み込むか、転注・仮借をどう扱うかは十分に説明されていない。したがって、漢字のあらゆる構形方式を包括的に処理したというより、形声字から「音と意味の二重の手がかり」という原理を抽出し、それを一般化した構想とみるべきである。第二に、ダブズは漢字学習の困難を主として記号と音・意味との対応の不規則性に求めたため、解決策も書記体系の透明性と予測可能性の向上に集中した。しかし、漢字は長い歴史的変化のなかで形成された書記体系であり、その使用は符号化効率だけでなく、語彙構造、読書習慣、社会的慣行、書記伝統とも密接に関わる。こうした点は、彼の議論では十分に扱われていない。第三に、純粋な表音体系は同音現象ゆえに必然的に失敗するという判断には、当時の言語観が反映されている。その後の言語・文字実践からみれば、口語の同音が多音節語、統語構造、文脈によってどこまで解消されるかは、単字・単音節の数量だけでは判断できない。したがって、この議論は 1920 年代の中国語観・文字観を示す史料として捉えるのが適切であり、中国語の表音化可能性に関する最終的結論として受け取るべきではない。

総じて、ダブズ案の意義は具体的な字形設計だけでなく、そこに示された思考の筋道にある。漢字ラテン化の潮流に直面した彼は、表音化が追求する規則性と学習効率を受け入れる一方、漢字が形によって意味を区別する機能を捨てなかった。その結果、両者の間に一種の「規則化された形声文字」を構築しようとしたのである。その独創性と限界はいずれも、この基本的選択に由来する。

七、結論

ダブズによる新たな漢字書記法は、20 世紀前半の来華西洋人による中国の言語・文字改革論における一つの特徴的立場を示す。彼は全面的なラテン化にも伝統漢字の単純な維持にも与せず、中国語の同音現象と漢字構形の特徴を踏まえ、「規則化された声符＋規則化された義符」によって書記体系を再編しようとした。この構想の核心は、単なる筆画削減ではなく、安定した音義対応の構築にある。声符が発音を、義符が意味カテゴリーを示し、統一した書記形式のもとで一定の方言差にも対応する。こうしてダブズは、伝統的な形声字に内在する構形原理を、予測可能で規則から導出できる文字設計へ転換しようとした。

ただし、その構想は形声字を主なモデルとし、規則性と学習効率の重視には、当時の言語観・教育観、西洋文字の使用経験が反映されている。したがって、この構想は単なる孤立した文字設計ではなく、来華西洋人が漢字をどのように理解し、ラテン化と漢字伝統の間で折衷を模索したのかを示す重要な事例といえる。

中国語東北方言における“X＋了＋YZ”構式の容認度と主観的語感

劉陽
広島市立大学国際学研究科博士後期 2 年生

1. はじめに

中国語東北方言には、“水了巴叉”のように、単音節の X に“了”と二音節の YZ が続く四音節の状態描写表現がみられる。本稿では、この形式を“X＋了＋YZ”構式と呼ぶ。この構式が東北方言母語話者にどの程度受け入れられ、また、どのような主観的語感を喚起するかを明らかにするためには、母語話者による共時的判断を検討する必要がある。

筆者は 4 冊の東北方言辞典から本構式を持つ表現を抽出し、表記異形を整理した結果、異なり 122 語を得た。本稿では、複数の辞典に収録された語と 1 冊のみに収録された語を区別し、辞典への収録の広がりが母語話者の容認度と対応するかを検討する。さらに、話者が各語から読み取る感情の有無、カテゴリーおよび強度を分析し、本構式に関わる主観的語感の分布を明らかにする。

具体的には、東北方言母語話者 22 名に対する質問紙調査に基づき、①核心語彙と周辺語彙の容認度、②年齢群による感情カテゴリーの選択傾向、③カテゴリーの選択頻度と感情強度の関係を検討する。

2. 調査設計と分析方法

2.1 対象語彙と調査協力者

対象資料は『簡明東北方言辞典』(1988)、『東北方言辞典』(2005)、『東北方言大辞典』(2012)、『東北話辞典』(2013) の 4 冊である。“X＋了＋YZ”の形式を持ち、すなわち X と分割しない YZ が“了”を介して結びつくものであり、全体として状態・様態を表す語を抽出した。資料収集の過程で、“了”に相当する部分が辞典によって“拉”“啦”などと表記される例が確認された。本稿では、X および YZ の発音が同一であり、少なくとも 1 冊の辞典で当該部分が“了”と表記されているものを同一語として扱った。また、X の漢字表記が異なっていても、発音が同一であり、かつ辞典の語釈から同一の表現と判断できるものは、表記異形として同一語にまとめ、X の漢字表記をすべて併記した。一方、発音が同じである YZ は辞典によって漢字表記が多様であるため、漢字表記ではなく発音に基づいて同定し、すべて拼音で統一して示した。

調査は 2026 年 5 月 1 日から 10 日にかけて実施した。調査協力者は、出身地および長期居住地がいずれも中国東北地方である東北方言母語話者 22 名（男女各 11 名、10 代〜70 代）であり、青年層（10〜30 代）15 名と中高年層（40 代以上）7 名に分けた。全員が 122 語の全項目に回答しており、欠損値はなかった。122 語のうち、2 冊以上に収録された 56 語を核心語彙、1 冊のみに収録された 66 語を周辺語彙とした。

2.2 調査項目

本稿でいう「容認度」とは、文法的な容認可能性を直接測定したものではなく、質問紙における認知・使用頻度の評定を操作的に指す。調査票は中国語で作成し、各語について、

第一に、容認度を 5 段階で評定させた。

1. 从不（全くない）2. 几乎不（ほとんどない）3. 有时（時々）4. 经常（よく）5. 频繁（頻繁にある）

第二に、当該表現から感じる主観的感情を 1 つ選択させた。

1. 生气（怒り）2. 开玩笑（冗談）3. 厌恶（嫌悪）4. 讥讽（皮肉）5. 不包含（いずれの感情も含まない）

第三に、主観的感情強度を 5 段階で評定させた。

1. 无主观情绪（主観的感情なし）2. 轻微（弱い）3. 中等（中程度）4 较强（やや強い）5. 强烈（強い）

2.3　集計単位と検定

記述統計では、各話者について全 122 語、核心 56 語、周辺 66 語の平均値をそれぞれ算出し、その話者平均値に基づいて群別の平均（*M*）と標準偏差（*SD*）を求めた。したがって、本稿の群別の *SD* は話者間のばらつきを表す。語別の分析では、各語に対する 22 名の評定から平均値と *SD* を算出した。

年齢群の比較には、各話者の平均値を用いた Welch の独立標本 *t* 検定を用いた。核心語彙と周辺語彙の比較には、同一話者の二つの平均値を比較する対応のある *t* 検定を用いた。さらに、各話者について「核心語彙－周辺語彙」の差を算出し、その差を年齢群間で比較することにより、年齢群と語彙層の交互作用に相当する探索的検討を行った。効果量と 95%信頼区間を併記し、有意水準は 5%とした。

3. 分析結果と考察

本稿では、質問紙における認知・使用頻度の評定を、各表現が母語話者にどの程度認知・使用されているかを示す指標として分析する。以下、この指標を「容認度」と呼ぶ。

3.1　語彙層別の容認度

表 1 に、年齢群および語彙層別の容認度、感情あり割合、感情強度を示す。

表 1：年齢群・語彙層別の記述統計

指標	年齢群	*n*	全体 *M*（*SD*）	核心 *M*（*SD*）	周辺 *M*（*SD*）
容認度	青年群	15	2.73（0.77）	2.87（0.80）	2.61（0.77）
	中高年群	7	2.46（0.41）	2.65（0.44）	2.30（0.41）
感情あり割合	青年群	15	0.59（0.40）	0.55（0.40）	0.62（0.40）
	中高年群	7	0.28（0.20）	0.31（0.22）	0.26（0.19）
感情強度	青年群	15	2.49（1.13）	2.47（1.17）	2.51（1.10）
	中高年群	7	1.59（0.40）	1.64（0.44）	1.55（0.38）

注：*M*・*SD* は各話者について算出した平均値に基づく。感情あり割合は 0〜1 である。

容認度は、核心語彙（*M*＝2.80）が周辺語彙（*M*＝2.51）より高く、その差は有意であった（平均差＝0.29，95%CI［0.15，0.42］，*t*(21)＝4.35，*p*＜.001，Cohen's *dz*＝0.93）。この結果は、複数の辞典に収録される語ほど、話者にも相対的に受け入れられやすいことを示している。

ただし、辞典の収録冊数は実際の使用頻度そのものではなく、各辞典の編纂方針や採録地域の影響も受ける。そのため、辞典収録の広がりが母語話者の評定を完全に予測するわけではない。一方、周辺語彙も平均 2.51 を示したことから、辞典への収録が限定的な語であっても、母語話者に一定程度認知・使用されていることが推測される。

年齢群別の容認度は、青年層 2.73、中高年層 2.46 であり、記述統計上は青年層が高かった。しかし、年齢群間差は有意ではなかった（平均差＝0.27，95%CI［−0.26，0.79］，Welch の $t(19.41) = 1.07$，$p = .296$，Hedges' $g = 0.38$）。また、核心語彙と周辺語彙の差が年齢群によって異なるという明確な証拠も得られなかった（$p = .423$）。したがって、青年層の方が本構式を多く認知・使用しているとは、容認度の結果のみから断定できない。

一方、感情強度は、核心語彙、周辺語彙ともに 2.21 であり、語彙層による差は認められなかった（$p = .969$）。すなわち、周辺語彙は核心語彙より認知度が低いものの、そこから読み取られる感情の強さは核心語彙とほぼ同程度であった。これは、“X＋了＋YZ”が主観的語感を読み取る手掛かりとなり、本構式の共時的生産性を支えている可能性を示唆する。

3.2　年齢群による主観的語感の相違

表 1 に示したように、各話者の「感情あり」回答の割合は、青年層 58.80%、中高年層 28.22%であり、青年層の方が有意に高かった（平均差＝0.31，95%CI［0.04，0.57］，Welch の $t(19.68) = 2.39$，$p = .027$，Hedges' $g = 0.84$）。

感情強度についても、青年層（$M = 2.49$）が中高年層（$M = 1.59$）より有意に高かった（平均差＝0.90，95%CI［0.22，1.59］，Welch の $t(19.29) = 2.75$，$p = .013$，Hedges' $g = 0.90$）。以上から、青年層は本構式を中高年層より明確に多く認知・使用しているとは言えないものの、各表現から何らかの感情を読み取り、その感情をより強く評定する傾向があると考えられる。

さらに、感情あり割合について、年齢群と語彙層の相互作用に相当する差が認められた（平均差＝−0.11，95%CI［−0.18，−0.05］，Welch の $t(18.51) = -3.57$，$p = .002$）。青年層では、周辺語彙の感情あり割合（0.62）が核心語彙（0.55）より高かったのに対し、中高年層では、核心語彙（0.31）が周辺語彙（0.26）よりわずかに高かった。

この結果は、青年層では認知・使用頻度が十分でない周辺語彙についても、形式全体から感情的な語感が喚起されやすい可能性を示している。ただし、中高年層は 7 名と少なく、この交互作用も探索的に検討したものであるため、年齢差を一般化するには、より多くの話者を対象とした追加調査が必要である。

表 2 に、全体の容認度が高い語、年齢群間の容認度差が大きい語、および両群の容認度は近いが感情カテゴリーの分布が異なる語を示す。

表 2：代表的な個別語

選定理由	該当語彙（調査番号）	収録冊数	青年層容認度 *M*	中高年層容認度 *M*	青年層の感情分類 怒・冗・嫌・皮・無	中高年層層の感情分類 怒・冗・嫌・皮・無
全体の容認度が最高	傻了 *bājī*（*No.* 6）	3	4.07	3.43	1・3・3・1・7	0・3・1・0・3
年齢差が最大	齐/七了 *kūchī*（*No.* 65）	4	2.67	1.29	0・3・5・2・5	1・0・2・0・4
容認度は近いが感情分類が異なる	穷了 *bājī*（*No.* 34）	1	3.00	3.00	0・4・4・1・6	0・0・0・0・7

注：感情分類は「怒り・冗談・嫌悪・皮肉・感情なし」の順に回答数を示す。青年層 *n*＝15、中高年層 *n*＝7。

“傻了 *bājī*”は青年層、中高年層のいずれにおいても容認度が 3 点を上回り、全 122 語の中で最も高い評定値を示した。一方、“齐/七了 *kūchī*”では、青年層の容認度が中高年層を 1.38 点上回っており、個別語によって年齢差の現れ方が異なることが分かる。

また、“穷了 *bājī*”は、両群の容認度がともに 3.00 であったが、中高年層 7 名が全員「感情なし」を選択したのに対し、青年層では 9 名が冗談・嫌悪・皮肉のいずれかを選択した。すなわち、同程度に受け入れられる語であっても、読み取られる主観的語感が年齢群によって異なる場合があることを示している。

3.3　感情カテゴリー分布と強度

表 3 に、各感情カテゴリーの選択頻度と感情強度を示す。

表 3：感情カテゴリーの選択頻度と感情強度

カテゴリー	回答数	全回答中%	感情あり中%	強度 *M*	強度 *SD*
怒り	63	2.35	4.78	3.11	1.44
冗談	502	18.70	38.12	2.23	0.96
嫌悪	511	19.04	38.80	3.01	0.91
皮肉	241	8.98	18.30	3.15	1.13
いずれの感情も含まない	1367	50.93	−	1.69	1.29
合計	2684	100.00	100.00	−	−

注：各回答を単位として算出した。頻度は質問紙上の選択回数であり、実際の会話における出現頻度ではない。

全 2684 回答のうち、「いずれの感情も含まない」は 1,367 件（50.93%）で最も多く、感情を伴う回答は 1,317 件（49.07%）であった。感情を伴う回答に限ると、嫌悪 38.80%、冗談 38.12%が多く、両者で 76.92%を占めた。嫌悪、皮肉、怒りを合わせた批判的・否定的態度に関わる回答は 61.88%であった。したがって、本構式から何らかの感情が喚起される場合には、嫌悪を中心とする否定的評価と冗談的解釈が主要な位置を占めると考えられる。

ただし、冗談は必ずしも否定的評価を表すものではないため、本構式の語感全体を一律にマイナス評価とみなすことはできない。

カテゴリー別の平均強度は、皮肉 3.15、怒り 3.11、嫌悪 3.01、冗談 2.23 の順であった。嫌悪と冗談は選択数がほぼ同じであったが、嫌悪の平均強度は冗談より 0.78 点高かった。また、怒りは 63 件と選択数が最も少なかった一方、平均強度は 3.11 比較的高かった。したがって、ある感情カテゴリーが選択される頻度と、その感情が知覚された際の強度は、区別して捉える必要がある。一方、皮肉、怒り、嫌悪の強度は冗談より高く、批判的態度と冗談的解釈とでは語感の強さが異なる。冗談的用法が対人的な摩擦を緩和する可能性はあるものの、本調査では具体的な会話場面や聞き手の反応を測定していないため、今後の仮説として位置付ける。

なお、感情カテゴリーで「いずれの感情も含まない」を選択した回答の強度平均は 1.69 であり、「主観的感情なし」に相当する 1 に近かった。ただし、「いずれの感情も含まない」を選択しながら 2 以上の強度と回答した例も含まれている。このような回答については、怒り、冗談、嫌悪、皮肉のいずれにも分類されない別の主観的語感が知覚されていた可能性があるが、本調査の選択肢のみからその内容を特定することはできない。

以上から、本構式は客観的な状態を表すだけでなく、嫌悪などの否定的評価や冗談的な語感を伴う状態描写形式として機能することがわかる。

4. おわりに

本稿は、東北方言母語話者 22 名による 122 語の評定から、“X＋了＋YZ”構式の容認度と主観的語感を検討した。その結果、第一に、周辺語彙にも一定の認知・使用および感情的解釈が認められ、本構式の共時的な生産性を示唆する結果が得られた。第二に、感情を伴う回答では嫌悪と冗談が中心を占め、批判的・否定的態度に関わる回答が一定の割合を占めた。したがって、本構式は客観的な状態描写にとどまらず、話者の評価的・戯画的な語感を伴う情態描写構式として機能している。第三に、本調査は“了”単独の意味を直接尋ねたものではないが、周辺語彙にも構式全体から主観的語感が読み取られたことから、“了”を含む構式全体が単なるアスペクト形式とは異なる評価的機能を担う可能性が示唆された。

青年層は中高年層より感情あり割合と感情強度が高く、特に周辺語彙から感情を読み取る傾向を示した。ただし、中高年層は 7 名と少なく、年齢群による違いについては、話者数を増やした追加調査が必要である。また、「いずれの感情も含まない」を選択しながら、感情強度を 2 以上と評定した回答もみられた。今後は調査協力者数を増やすとともに、インタビュー調査を実施し、こうした回答が生じた理由と、回答者による各選択肢の解釈を明らかにする必要がある。

調査対象辞典

《简明东北方言词典》（1988）许皓光・张大鸣编. 辽宁人民出版社.
《东北方言词典》（2005）马思周・姜光辉编. 吉林文史出版社.
《东北方言大词典》（2012）唐聿文编. 长春出版社.
《东北话词典》（2013）高永龙编. 中华书局.
《现代中国語辞典（第 7 版）》(2016) 中国社会科学院语言研究所词典编辑室编. 商务印书馆.

试论东北方言中表原因的“X 的事儿”结构

——主要以汉语通河方言为例

卞春婷
神户市外国语大学 博士研究生

1 引言

在东北方言中，“X 的事儿”结构常常出现在对话中。此处的句末成分“事儿”通常与下文(1)中出现的作为一般名词的“事情”不同，其具有表明原因的功能。例如当说话人提起“最近不太出汗了”的话题的时候，听话人回答“天冷的事儿”。如下文(2)所示，这里“事儿”的语义不是“事情”，而是表示“原因”。“天冷的事儿”可以理解为“因为天气冷”。

(1) xiɤ^{212} tsan^{24}mən^{0} xəi^{44}luŋ^{24}kiaŋ^{44} xɐ^{44}ər^{212}pin^{44} tɤ^{0} ʂi^{51}.
写 咱们 黑龙江 哈尔滨 的 事。

(2) tʰian^{44} ləŋ^{212} tɤ^{0} ʂi^{51}ər.
天 冷 的 事儿。

东北方言的“X 的事儿”结构可用来解释原因，“事儿”对应其前面“X”的部分，视作其原因为“X”。本研究主要以东北方言的次方言通河方言[1]为例，对“X 的事儿”结构进行分析。

2 “X 的事儿”与一般名词“事（儿）”的区别

“事（儿）”作为名词可被指示词或数量词修饰构成名词短语。在句子当中可充当话题或受事等成分。例如在(3)中“事儿”作为动词“说”的宾语，同时可以受量词“件”的修饰。在(4)中“事儿”出现在句首位置，充当话题。

(3) uɤ^{212} kən^{44} ni^{212} ʂuɤ^{44} kian^{51} ʂi^{51}ər.
我 跟 你 说 件 事儿。

(4) ʂi^{51}ər pan^{51} uan^{24} lɤ^{0} mɐ^{0}?
事儿 办 完 了 吗？

在名词短语“定语+的+中心语”结构中，中心语“事儿”位于“的”后。而表原因的“事儿”只出现在“的”后面。此时，表原因的“X 的事儿”和“定语+的+中心语”在结构上是相同的，但二者在功能和语义上有区别。如上文(1)“黑龙江哈尔滨的事”和下文(5b)“平盘儿的事儿”，二者在结构上相同。(1)的“黑龙江哈尔滨的事”作为名词短语，定语位置的“黑龙江哈尔滨”也能被其他成分替代。例如“她的事”、“张三的事”等人称代词或专有名词也可出现在相同位置。(5b)“平盘儿的事儿”中，“平盘儿”虽然也是名词，与上文“黑龙江哈尔滨”、“她”、“张三”等专有名词、代名词的语法地位接近，但是在语义逻辑关系上，“平盘儿”和“事儿”的搭配使用情况很少见，二者很难共现，或者说无法构成领有关系。对话(5)发生于就餐时，对于(5a)所提出的“你的面看起来更多”的疑问，(5b)回答“平盘儿的事儿”，此处可以理解为“因为是平盘儿，所以面看起来更多”。

(5) a.[说话人 A] tʂʰɤ^{51} mian^{51}, uɤ^{212} tsɐ^{212} tʂʰəu^{212} tʂɤ^{0} pi^{212} ni^{212} nɐ^{51} mian^{51} tuɤ^{44} nɤ^{0}!

[1] 汉语通河方言，按照《中国语言地图集（第 2 版）汉语方言卷》（中国社会科学院语言研究所・中国社会科学院民族学与人类学研究所・香港城市大学语言资讯科学研究中心(2012)《中国语言地图集（第 2 版）汉语方言卷》商务印书馆）的分类，属于东北官话黑松片嫩克小片。本研究的语料来源主要是通河方言母语者的日常对话。

这 面， 我 咋 瞅 着 比 你 那 面 多 呢！

b.[说话人 B] pʰiŋ²⁴pʰan²⁴ər tɤ⁰ ʂi⁵¹ər.

平盘儿 的 事儿。

“X 的事儿”的“X”部分的实际情况也可能更加复杂。(2)的“天冷”是主谓结构，“天冷”既不能作为定语修饰一般名词“事（儿）”，也很难与其构成领有关系。(6)的“X”部分“管道远（因为管道远）”也是主谓结构。(7)中“穿得太窝囊”可以理解为“穿得太多”，是动补结构。

(6) kuan²¹²tau⁵¹ yan²¹² tɤ⁰ ʂi⁵¹ər.

管道 远 的 事儿。

(7) ni²¹² tʂɤ⁵¹ pu⁵¹ ʂi⁵¹ tʂʰuan⁴⁴ tɤ⁰ tʰai⁵¹ uɤ⁴⁴naŋ⁰ tɤ⁰ ʂi⁵¹ər mɐ⁰?

你 这 不 是 穿 得 太 窝囊多 的 事儿 吗？

综上，表原因的“事儿”与一般名词“事（儿）”一般情况下在结构上有区别，在语境中也能进行区分。表原因的“X 的事儿”用于口语，一般名词“事（儿）”既可以用于口语，也可以在书面语中使用。在形式上，一般名词“事（儿）”的“儿”可以省略，但表原因的“X 的事儿”的“事儿”则是固定形式，“儿”是必要成分，且整个“X 的事儿”结构在句子当中后置。

3 “X 的事儿”的分布情况

“X 的事儿”可以在对话中使用，用于听话人对说话人所说内容的应答。如(8)是发生在列车上的对话，(8b)的“有雪的事儿”是对(8a)的“（列车）降速”的回应，可以理解为(8b)说话人认为“因为有雪，所以列车减速”。

(8) a.[说话人 A] kiaŋ⁵¹ su⁵¹ lɤ⁰.

降 速 了。

b.[说话人 B] iəu²¹² xyɤ²¹² tɤ⁰ ʂi⁵¹ər pəi⁰.

有 雪 的 事儿 呗。

“X 的事儿”除了在问答情况中出现，还可以用于说话人对自己所讲述内容的补充说明情境。下文(9)中说话人先提出“天气冷”的话题，随后自己补充道“海边儿的事儿”。“海边儿的事儿”是“因为在海边儿”的意思，隐含了“海边儿的风更比城市里更大，温度也比城市里更低”的语义。

(9) kin⁴⁴tʰian⁴⁴ tʂən⁴⁴ ləŋ²¹², xai²¹²pian⁴⁴ər tɤ⁰ ʂi⁵¹ər.

今天 真 冷， 海边儿 的 事儿。

“X 的事儿”也可以用于正反问句。(10b)是对(10a)说话人谈论“表慢”的情况进行的原因推测，并且使用“是不是”这类疑问句征询对方的意见。(10b)的“天太冷”能够作为原因出现，隐含“在对话发生时天气寒冷”的信息。或者说是在天气寒冷的情况下发生了此对话。“天气寒冷可能影响表的快慢”是谈话双方的共享信息。

(10) a.[说话人 A] tʂɤ⁵¹ piau²¹² man⁵¹ i⁴⁴ fən⁴⁴tʂuŋ⁴⁴ ɐ⁰.

这 表 慢 一 分钟 啊。

b.[说话人 B] ʂi⁵¹ pu⁵¹ ʂi⁵¹ tʰian⁴⁴ tʰai⁵¹ ləŋ²¹² ti⁰ ʂi⁵¹ər ɐ⁰.

是 不 是 天 太 冷 的 事儿 啊？

4 “X 的事儿”的语义特征

吕叔湘(1982)[2]将因果关系句分为释因句和纪效句两类。“X 的事儿”作为句子中的后置成

[2] 吕叔湘 (1982)《中国文法要略》商务印书馆

分，且是对话语中提及的内容所做出的解释说明，属于释因句。梁晓玲(2013)[3]认为“的事儿”是东北、华北方言中的现象，作为原因助词主要用于句子末尾，“的事儿”前面的成分可以是非表人的名词性词语、谓词性词语及小句，用于已然发生的事实。另外，在其他方言中也有用后置成分表原因的用法。宗守云(2011)[4]对晋冀方言后置原因标记“的过”进行分析，指出“的过”是后置原因助词，多用于消极结果。辛永芬(2018)[5]对河南方言表原因的后置成分“嘞/哩事儿”进行研究，将“嘞/哩事儿”视为后置连词，并指出其使用有一定的语义限制，主要表现在结果的消极性和事件的已然性方面。梁晓玲(2013)和辛永芬(2018)的分析均提到，已然性是后置成分表示原因的结构的一个特征。东北方言的“X 的事儿”的情况相对不同。“X 的事儿”的关联内容为通常为常识性内容或者是听说双方共享的信息（旧信息）。

(11) a.[说话人 A] kan^{212} ʂaŋ^{51} lɤ^{0}.
赶 上 了。
b.[说话人 B] nɐ^{51} tʰɐ^{44} kiəu^{51} ʂi^{51} lai^{24} tɤ^{0} man^{51} lɤ^{0}.
那 它 就 是 来 的 慢 了。
c.[说话人 A] xiɐ^{51} y^{212} tɤ^{0} ʂi^{51}ər?
下 雨 的 事儿？
d.[说话人 B] ən.
嗯。

对话(11)发生在车站。对于(11b)列车晚点的事实，(11c)说话人做出的推测是“因为下雨，所以列车晚点”。天气作为影响列车行驶的因素，是谈话双方默认的常识性内容。或者可以说说话人 A 和 B 均认为“雨雪天气影响列车运行”是共识，所以用“X 的事儿”结构来阐释原因。

(12) a.[说话人 A] tsɐ^{212} xai^{24} tʂɤ^{51}mɤ^{0} rɤ^{51} nɤ^{0}.
咋 还 这么 热 呢。
b.[说话人 B] ni^{212} kɤ^{212} tʂʰu^{24}faŋ^{24} maŋ^{24}xuɤ^{0} tɤ^{0} ʂi^{51}ər.
你 搁在 厨房 忙活 的 事儿。

(12b)说话人用“你搁厨房忙活”来解释(12a)说话人觉得“热”的原因。“你搁厨房忙活”可以理解为“因为你在厨房忙”。“在厨房忙”和“热”存在因果关系，可以被(12b)听话人认为是常识性内容并默认是谈话双方已知的信息。

5 “X 的事儿”与“因为”的关系

“X 的事儿”结构基本可以转换成“因为”句式，语义不变。例如，上文(2)“天冷的事儿”可以换成“因为天气冷”，(5b)“平盘儿的事儿”可以替换为“因为是平盘儿”。但是，并非所有的带“因为”的释因句都可以替换为“X 的事儿”结构。“X 的事儿”与“因为”不能完全互换。当说话人用“为什么”等疑问词提问时，听话人一般会使用“因为”来回答，此处的“因为”不能换成“X 的事儿”。或者回答内容是新信息时，也不使用“X 的事儿”。

(13) a.[说话人 A] ni^{212} uəi^{51}ʂən^{24}mɤ^{0} tʂʰi^{24}tau^{51}?
你 为什么 迟到？
b.[说话人 B] (in^{44}uəi^{24}) lu^{51} ʂaŋ^{51} tu^{212}tʂʰɤ^{44} lɤ^{0}.
（因为） 路 上 堵车 了。

[3] 梁晓玲 (2013)〈东北、华北方言中后置原因标记“的事儿”〉《语文教学通讯》9:76-78
[4] 宗守云 (2011)〈晋冀方言后置原因标记“的过”及其词汇化〉《中国语文》6:527-231
[5] 辛永芬 (2018)〈河南方言表原因的后置成分“嘞/哩事儿”〉《河南大学学报（社会科学版）》2:118-123

*b’. lu^{51} ʂaŋ^{51} tu^{212}tʂ^{h}ɤ^{44} tɤ^{0} ʂi^{51}ər.
路 上 堵车 的 事儿。

(14) a.[说话人 A] tsuəi^{51}kin^{51} tsən^{212}mɤ^{0} məi^{24} k^{h}an^{51} tau^{51} ni^{212}?
最近 怎么 没 看 到 你？

b.[说话人 B] uɤ^{212} ʂəŋ^{44}piŋ^{51} lɤ^{0}. tsai^{51} kiɐ^{44} xiəu^{44}xi^{0} lɤ^{0}.
我 生病 了。在 家 休息 了。

*b’. uɤ^{212} ʂəŋ^{44}piŋ^{51} tɤ^{0} ʂi^{51}ər. tsai^{51} kiɐ^{44} xiəu^{44}xi^{0} lɤ^{0}.
我 生病 的 事儿。在 家 休息 了。

在对话(13)中，(13b)包含的信息对于(13a)的提问者来说属于新信息，所以只能用“因为”来回答（省略“因为”的形式也成立）。对话(14)同样，(14b)的“生病”也是新信息。在这样的场景中，不能用“X 的事儿”来回答（13b’和 14b’）。如果说明原因的部分为旧信息（即共享信息或常识）时，“X 的事儿”则成立。例如同样是“生病”(15b)，可以用于对(15a)“没有胃口”的原因的说明。因为“生病导致食欲不振”可以被认为是常识性内容。

(15) a. tsuəi^{51}kin^{51} məi^{24} ʂɐ^{24} uəi^{51}k^{h}əu^{212}, ʂɐ^{24} iɤ^{212} pu^{51} xiaŋ^{212} tʂ^{h}i^{44}.
最近 没 啥 胃口， 啥 也 不 想 吃。

b. nɐ^{51} ʂi^{51} ʂəŋ^{44}piŋ^{51} tɤ^{0} ʂi^{51}ər, xau^{212} lɤ^{0} kiəu^{51} iəu^{212} uəi^{51}k^{h}əu^{212} lɤ^{0}.
那 是 生病 的 事儿，好 了 就 有 胃口 了。

“X 的事儿”的 X 部分传递的信息一般较为简洁，这一点可能是在“X 的事儿”和“因为”可以互换的语境下，更倾向于使用“X 的事儿”的原因。

6 “事儿”的表述功能：从“非原因”到“原因”

关于表原因的“X 的事儿”的演变，目前在历时层面上缺乏相关证据，因此，本研究首先从共時角度进行分析。由于表原因的“X 的事儿”在句子当中后置，所以主要分析一般名词“事儿”作宾语的情况。在由一般名词“事儿”构成的“X+的+事儿”结构中，X 既可以是人称代词或者专有名词与“事儿”构成领有结构（例如“我的事儿”），也可以是修饰“事儿”的“过去”、“昨天”等修饰成分（例如“过去的事儿”、“现在的事儿”）。当整个“X+的+事儿”结构充当宾语，前面出现谓词性成分时，大致可以归纳为两种情况。一是谓词性成分为一般动词（“是”以外的动词）的情况，如下文(16)和(17)。二是谓词性成分为动词“是”的情况，如下文(18)和(19)。

(16) tʂi^{24}tau^{51} kau^{212}ʂi^{51} tɤ^{0} ʂi^{51}ər mɐ^{0}?
知道 考试 的 事儿 吗？

(17) lian^{24} tʂ^{h}i^{44} fan^{51} təu^{44} kɤ^{212} nɐ^{51}ər xin^{24}si^{0} tian^{51} tɤ^{0} ʂi^{51}ər.
连 吃 饭 都 搁在 那儿 寻思想;思考;考虑 店 的 事儿。

(18) tʂɤ^{51} pu^{24} ʂi^{51} uɤ^{212} i^{24} kɤ^{0} rən^{24} nəŋ^{24} kyɤ^{24}tiŋ^{51} tɤ^{0} ʂi^{51}ər.
这 不 是 我 一 个 人 能 决定 的 事儿。

(19) pu^{51} ʂi^{51} k^{h}ian^{24} tɤ^{0} ʂi^{51}ər.
不 是 钱 的 事儿。

(19)是在日常生活中使用频率较高的一句话。与(19)类似的结构还有(20)。(20)的语境是当用钥匙打不开门锁时，说话人和对方确认“锁”是否有问题，提出的疑问。

(20) ʂi^{51} suɤ^{212} tɤ^{0} ʂi^{51}ər mɐ^{0}?
是 锁 的 事儿 吗？

当“X+的+事儿”前的动词为“是”时，“X+的+事儿”传递的信息一般为旧信息，且整句话不

能作为始发句。但是当谓词性成分为一般动词时，则没有此类限制。既可以作为始发句传递新信息，如(16)。也可以传递旧信息，如(17)。将上述例句与表原因的“X 的事儿”整理后（表1）进行比较，我们发现当表非原因的“X+的+事儿”前的谓词性成分为“是”时，其语法特征与表原因的“X 的事儿”有相似之处，即二者都传递旧信息。

表 1：“X 的事儿”表非原因与表原因的使用情况

X 的事儿		
非原因		原因
一般动词	动词“是”	a.降速了。 b.有雪的事儿呗。（例 8）→旧信息&常识性内容
知道考试的事儿吗？（例 16）→新信息&始发句	不是钱的事儿。（例 19）→旧信息	
连吃饭都搁那儿寻思店的事儿。（例 17）→旧信息	是锁的事儿吗？（例 20）→旧信息	*我生病的事儿。在家休息了。（例 14b’）→新信息

在表非原因的“X+的+事儿”句子中，(19)和(20)的“事儿”的语义变得更加抽象。比起(16)(17)(18)，很难理解成实际的“事情”、“事件”。虽然不能表示原因，但是在语义上可以将(19)的“不是钱的事儿”理解为“不是钱的问题”、“不是因为钱”，(20)也类似。因此，(19)和(20)的“事儿”很可能处于由具有实际意义的名词虚化成表现某种语法功能的过渡阶段。也就是说，表原因的“X 的事儿”结构可能是由表非原因的(19)和(20)的“事儿”演化而来。我们暂且将表原因的“X 的事儿”结构的演变与一般名词“事儿”关联，得到下图 1。

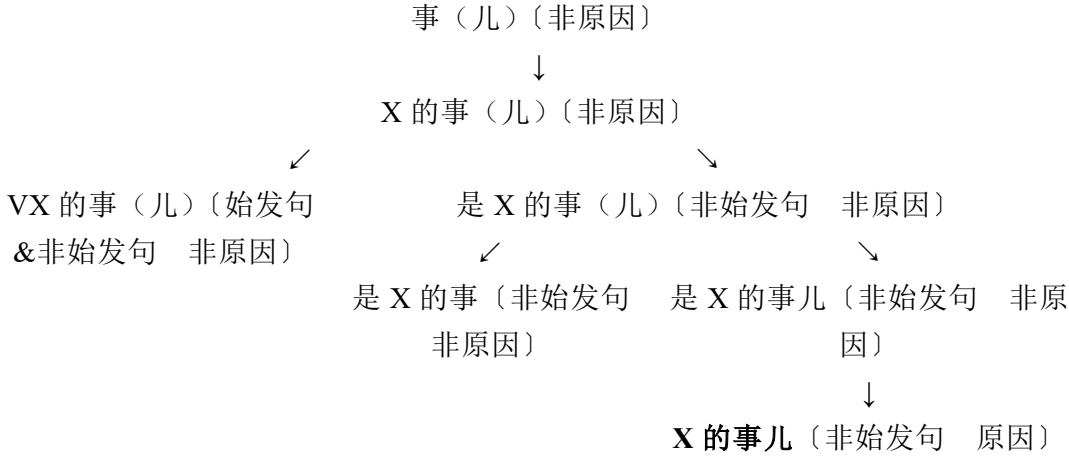


图 1：表原因的“X 的事儿”的演变

7　小结

本研究初步对东北方言表原因的“X 的事儿”结构进行分析。主要总结出以下几点：第一，“X 的事儿”既可以用于听话人对说话人所说内容的应答，也可以用于对自己所讲述内容的补充说明。二者共同的特点是，都是出现在句末或者对话的后续话轮；第二，谈话内容为常识性内容或者听说双方所共享情报的情况下，可以使用“X 的事儿”；第三，大部分“X 的事儿”结构可以替换为“因为”。反之，在使用“因为”的释因句中，当“因为”后面的内容为新信息时，不能替换为“X 的事儿”结构；第四，基于表原因的“X 的事儿”与表非原因的“是 X 的事儿”的语法共性，推测“X 的事儿”可能来源于“是 X 的事儿”。

本研究对东北方言中表原因的“X 的事儿”结构的语法特点与语法化路径进行了简略分析，今后将继续收集其他方言点的语料，进行更加深入全面的研究。

四川方言“V 不赢”“V 得赢”的构式特征及其不对称性

-基于语料库的考察-

藤原 优美
广岛市立大学 准教授

1 引言

“赢”在四川方言中可以位于其他动词之后充当补语。例如，《中国民间方言词典》（1994：626）指出，“赢【官话·西南四川】”可“用在某些动词之后作结果的补语，相当于普通话中“了（liǎo）”的意思”。同时例举“鄢国培《沧海浮云》一：民成公司的轮船连顶篷上载客也运不赢。”由此可见，“赢”用在动词之后作补语，并非近年来产生的用法，而是四川方言中具有一定历史基础的语言现象。

还有先行研究表明，“赢”作补语时具有多种语义功能，并不局限于普通话“胜”的意义。蒋宗福（2001：772）将其用法概括为两类：“①胜。常用在部分动词之后作结果补语。”如“《喻世明言》卷六：申徒泰只身独臂，打赢了三班教师，手提死鹿，到令公面前告罪。”“②过来。”如“《跻春台》卷一《节寿坊》：我家原来巨富，讨亲何患无人，不把三全难他，那就讨之不赢。谓讨不胜讨，讨不过来。”此外，蒋宗福（2014:135）中还提到了“搞不赢”的释义为“措办不急”，并引“清万清涪《南广竹枝词》：取当三分减一分，祷牙过后旧期程。从今月半便宜当，依旧想方搞不赢。（原注：设法曰想方，措办不急曰搞不赢，皆是市井口语。）”为例，说明“赢”在“搞不赢”中表示事情来不及办理、难以应付的意义。

《四川方言词典》（2014：439）同样收录了“赢”作结果补语的用法，将其释义为“胜”。如“这场球我们打赢了”“你哪回整赢了我的？”。值得注意的是，该词典（2014:118）还专门收录了“搞得赢”这一形式，指出为“搞不赢”的肯定式。同时列举了三种不同意义：“①可能获胜，赢得了：我们六个人对付那个提手枪的家伙时搞得赢的。②来得及，赶得上：还有一个钟头，赶二路电车去火车站，肯定搞得赢。③忙得过来：这几天忙是忙一点，但还搞得赢。”由此可见，“赢”作为补语时，其意义已经具有一定的扩展性。

现有研究主要以方言词典和个别文献中的例句为基础，对“赢”的词义及基本用法进行释义和描写，而对于“V 不赢”“V 得赢”在真实语言材料中的使用频率、前接动词的分布及语义类型，以及二者在具体构式上的差异，尚缺乏系统考察。

基于此，本文以 WenetSpeech-Chuan 四川话语料库为基础，在对语音转写文本进行提取、清洗和规范化处理的基础上，考察“V 不赢”“V 得赢”两种形式的实际使用情况，并从使用频率、前接动词及构式特征等方面进行分析。

2 语料来源与数据处理

本文所使用的语料来源于 WenetSpeech-Chuan，该语料库包含超过 1 万小时四川方言语音数据，并涵盖短视频、综艺、直播等多种真实使用场景。

首先，对下载的音频数据进行语音识别，将其转换为 TXT 格式的文本。在此基础上，利

用 Python 程序对转写文本进行检索和筛选，提取包含“V 不赢”“V 得赢”相关语言实例。

考虑到“不赢”“得赢”前接成分的词类及长度存在差异，为尽可能全面地提取相关语言实例，本文分别对“不赢”“得赢”前接一个字、两个字、三个字和四个字的情况进行检索，并对不同检索范围所得结果进行比较。在此基础上，结合上下文判断前接成分的性质及其与“赢”的句法关系，排除不符合要求的实例、语音识别错误、断句不当以及与研究无关的用例，最终建立用于分析的语料集。

3 “V 不赢”与“V 得赢”的使用情况

统计结果显示，“V 不赢”的使用频率明显高于“V 得赢”。“V 不赢”共出现 2645 例，占两类有效用例总数的 83.9%；“V 得赢”共出现 509 例，占 16.1%。

这一结果表明，“V 不赢”和“V 得赢”虽然形式上构成否定与肯定的对应关系，但在真实语言使用中具有明显的不对称性。特别是“V 不赢”的高频使用，说明否定形式在四川方言这一结构中具有较强的使用倾向。

这种不对称性可能与“V 不赢”在实际交际中的表达有关。许多语境所要表达的并不是单纯的“不能 V”，而是事情太多、时间不足、能力有限等条件下“无法完成”“应付不过来”的状态。因此，“V 不赢”不仅可以表达客观的动作不能实现，还常用于表达说话人对动作完成难度或结果的判断。

3.1 前接动词的特点

从前接动词来看，“V 不赢”和“V 得赢”均以动作性较强的动词为主。其中，“搞”的搭配频率最高，其次为“打”等。

表 前接动词搭配频率最高的 10 个

前接动词		V 不赢	V 得赢	合计
1	搞	736	115	851
2	打	351	107	458
3	吃	195	11	206
4	干	74	10	84
5	忙	76	2	78
6	来	54	6	60
7	整	45	12	57
8	走	31	13	44
9	弄	32	5	37
10	比	25	5	30

“搞”具有较强的动作性和较宽的语义范围，可以表示处理、进行、完成某项事情等多种动作。因此，“搞不赢”具有很强的搭配能力。例如：

（3-1）旁边堆了很多碗，大叔一个人搞不赢。

（3-2）平时上班搞不赢炒菜。

（3-3）你看这种好可惜啊，就是啊，搞也搞不赢嘛。

（3-4）他说他还没搞得赢打电话跟我说。

在这类用例中，“搞不赢”或“搞得赢”并不表示“胜负”，而主要表示事情能否完成、能否应付。这进一步说明“赢”在该结构中的意义并非完全等同于一般意义上的“胜”，而是在与不同动词结合时表现出较为明显的功能扩展。

除“搞”“打”等高频动词外，语料中还发现“忙”“比”等不同语义类型的动词。例如：

（3-5）你忙不赢的时候

（3-6）等到哪哈忙得赢来这里卖菜。

（3-7）无论是你比空间还是比油耗都比不赢它。

（3-8）人比人啷个比得赢嘛。

这些例子表明，“赢”的前接成分并不局限于表示具体操作动作的动词，而可以与具有不同语义特征的动词结合。这说明“赢”具有一定程度的词汇兼容性。

此外，语料中还出现了“PK 不赢”等与字母词结合的形式，以及“招呼不赢”“竞争不赢”等与双音节动词结合的例子。例如：

（3-9）怎么样都 PK 不赢他。

（3-10）你没看到招都招呼不赢。

（3-11）像这种情况下人家肯定就竞争不赢你。

（3-12）你咋个竞争得赢呢？

这些用例说明，“V 不赢”的前接成分并没有严格限定为传统的单音节动作动词。随着现代词汇和表达方式的发展，“赢”仍具有一定的构式扩展能力。不过，从总体分布来看，该结构仍明显倾向于与动作性较强的动词共现。

3.2 “V 不赢”的重复构式

与基本形式相比，语料中“V 不赢”还表现出较为明显的构式扩展，其中尤其值得注意的是“V 都 V 不赢”“V 也 V 不赢”等重复形式。例如：

（3-13）卡车送货搞都搞不赢。

（3-14）每天中午老板忙都忙不赢。

（3-15）我打也打不赢骂也骂不赢。

“V 都 V 不赢”在“V 不赢”之前添加副词“都”，而形成了“V＋都＋V 不赢”的相对固定形式。动词的重复使动作本身得到凸显，“都”则进一步强调在相关情况下难以完成的程度。例如“搞都搞不赢”不仅表示“不能搞”，还强调即使已经投入行动，仍然无法完成相关事项，因而具有较强的主观评价色彩。

“V 也 V 不赢”常用于并列或让步性的语境。例如“打也打不赢”“骂也骂不赢”分别表示即使采取相应行动，也无法达到预期效果。同时，“打也打不赢”“骂也骂不赢”的并列结构进一步强化否定意义。

从构式形式来看，这两类均是在“V 不赢”基本结构的基础上进一步扩展形成的。其整体意义并非简单的词汇意义相加，而是通过动词重复以及“都”“也”的加入，进一步凸显对动作难以完成或难以达到预期效果的程度。

值得注意的是，在本文目前调查的语料中，尚未发现与上述形式相对应的“V 都 V 得赢”“V 也 V 得赢”等构式。这说明“V 不赢”在目前所调查的语料中表现出更为明显的构式扩展倾向，其形式和意义之间已经表现出一定程度的固定化。

此外，在表达“V 得赢 V 不赢”正反疑问时，四川方言有专门的构式，为“V 不 V 得赢”。例如：

（3-16）这把牌弄不弄得赢？

（3-17）你打不打得赢？

上述例句表明，四川方言中存在“V 不 V 得赢”的正反疑问形式，即在“V 得赢”的基础上通过重复前接动词并插入“不”构成正反疑问。

4．结语

本文以 WenetSpeech-Chuan 四川话语料库为基础，通过对语音转写文本进行提取、清洗和规范化处理，对四川方言“V 不赢”“V 得赢”的使用情况进行了初步考察。研究主要得到以下结论。

第一，“赢”作补语在四川方言中具有较长的使用历史。已有文献和文学作品中早已出现“打赢”“运不赢”“讨之不赢”等形式。相关研究表明，“赢”作补语时不仅可以表示“胜”，还可以表示“过来”“来得及”“赶得上”“忙得过来”等意义。

第二，在现代四川方言中，“V 不赢”“V 得赢”均可用于表示动作或事件能否实现，但两者的使用频率存在明显差异，“V 不赢”的使用频率远高于“V 得赢”。

第三，两种形式的前接动词均以动作性较强的动词为主，其中“搞”“打”等搭配较为突出。同时，“V 不赢”还可以与不同语义类型的动词、字母词以及双音节动词结合，说明“赢”具有一定的词汇兼容性和构式扩展能力。

第四，“V 不赢”表现出较为明显的构式化倾向。“V 都 V 不赢”“V 也 V 不赢”等重复构式在所调查语料中较为常见，并通过动词重复以及“都”“也”的使用，进一步强化动作难以完成或难以达到预期结果的意义。而在“V 得赢”中尚未发现与之相对应的构式。此外，四川方言中还存在“V 不 V 得赢”的正反疑问构式。

综上，“V 不赢”和“V 得赢”虽然同属由“V+赢”构成的可能性表达形式，但二者在使用频率、词汇搭配和构式特征等方面均表现出明显的不对称性。其中，“V 不赢”不仅使用频率较高，而且已经与部分高频动词及特定句式形成较为稳定的搭配，呈现出较为明显的构式扩展倾向。

本文的考察有助于进一步认识四川方言中“赢”类补语形式的使用特点及其构式特征，也为四川方言可能补语系统的描写研究提供了新的语料依据。今后还需要扩大语料范围，并结合具体语境进一步考察“V 不赢”的不同语义类型及其与普通话、其他汉语方言可能补语结构之间的异同。

【参考文献】

蒋宗福（2001）《四川方言词语考释》巴蜀书馆

蒋宗福（2014）《四川方言词源》巴蜀书馆

《中国民间方言词典》（1994）南海出版公司

《四川方言词典》（2014）四川人民出版社

Dai, Yuhang, Ziyu Zhang, Shuai Wang, Longhao Li, Zhao Guo, Tianlun Zuo, Shuiyuan Wang, Hongfei Xue, Chengyou Wang, Qing Wang, Xin Xu, Hui Bu, Jie Li, Jian Kang,

Binbin Zhang, Lei Xie. 2026. WenetSpeech-Chuan: A Large-Scale Sichuanese Corpus with Rich Annotation for Dialectal Speech Processing. *Proceedings of the 2026 IEEE International Conference on Acoustics, Speech and Signal Processing (ICASSP)*. 2026: 19507–19511.

ベルギー淳心会宣教師ルネ・ルヴァのチャハル漢語方言の文法記述

ラマール・クリスティーン（Christine LAMARRE）
フランス国立東洋言語文化学院（Inalco）名誉教授、東アジア言語研究所（CRLAO）

はじめに

本稿はベルギー淳心会（スクート会[1]）宣教師ルネ・ルヴァ（René Leva[2], 1880-1958）の著した 2 冊の晋方言記述関係の著書のうち、ほとんど知られていない『チャハル方言の助詞』という文法書に焦点を当てる。ルネ・ルヴァ神父は 1880 年にベルギーのアントウェルペン市（Antwerpen）の生まれで、1898 年の初誓願（first vows）を経て、スクートで 5 年間哲学と神学を勉強したのち、1903 年に司祭の叙階（ordination）を受けた後に中国に赴任した。ルヴァ神父は同じ淳心会の所属で日本語方言学の分野で有名なグロータースよりは一世代前の宣教師である（グロータース神父は 1911 年生まれで 1939 年に中国に渡った）。ルヴァ神父は宣教師番号 194 で、中国名は「杜維禮」となっている。

本稿は以下の構成となっている。第一節ではルヴァ神父が現在の河北省張家口地区の晋方言を記述した二部の著書を紹介する。第二節では文法記述に特化した方の一部のタイトルの異同と対象とした方言の特定をめぐる問題を取り上げ、第三節ではこの文献の構成と内容を簡単に紹介、第四節ではルヴァ神父の文法分析の腕を示す事例を幾つか取り上げる。そして終わりに、ルヴァ神父の中国語観を窺わせる記述に触れる。

（一）注目されていないルヴァ神父の晋方言研究

ルヴァ神父が著した二冊の方言記述のうちの一冊は半世紀前に日本の中国語学界にすでに紹介されている。これは中表紙に「Dialecte Chanxi Nord. Liste alphabétique d'expressions avec traduction française par le P. R. LEVA, C.I.C.M.（『晋北方言表現集——アルファベット順配列仏語訳付き』、マリアの御心修道会ル・ネレヴァ神父著）と記載された、643 ページにわたる語彙集である（以下、『語彙集』と略称）。『語彙集』は Wright（1947）によれば 1944-1945 年に刊行されている。橋本萬太郎先生は 1975 年に『アジア・アフリカ研究言語文化研究』に発表した論文で、この文献を以下のように紹介している：「本書は René Leva C.I.C.M. の蒐集になる 20,000 余にのぼる河北省（旧チャハル省）崇礼県の崇礼（旧西湾子）と尚義（旧南壕塹）の方言句を整理し、その音声組織を分析して音素標記を確立し、1932 年教育部公布になる『国音常用字彙』の体裁にならいつつ、この 20,000 余句にあらわれるすべての漢字を発音順に配列したものである。長城外の中国語方言の記録としては、最初にして唯一のまとまった資料である。」。橋本先生はさらにルヴァ神父が 45 年の歳月を費やして

[1] 淳心会は CICM（*Congregatio Immaculati Cordis Mariae* つまりマリアのけがれなき御心修道会）、またはスクート会（Scheut）とも呼ばれる。中国語では「天主教聖母聖心會」と呼ばれる。

[2] 資料館のいくつかのファイルが Léva（つまり「レヴァ」）となっている以外、ほとんどの関係資料が Leva（ルヴァ）と記されている。本人の書物の手書きサインも René のみにアクサンが付いている。また、Leva 神父に会ったことがある Verbist 学院創立者 Jeroom Heyndrickx 神父から「ルヴァ」が正しいであろうとの御教示を得た。

編んだこの崇礼県方言語句集は残念なことに「かろうじて仙花の粗紙に油印した未装本のコピーを有志のあいだにわかつにとどまってしまった」と指摘し、自分がその辞書を 1954 年の夏、中国西北方言の調査中に、グロータース神父の好意でその存在を知ったと述べている。

その後遠藤光暁氏は 1992 年にブリュッセルの高等中国学研究所を訪れた際に、「図書室で Leva 師の山西方言辞典を見いだし、コピーさせてもらう。これはタイプで打ったものをガリ版刷りした二冊本で、橋本萬太郎「中国語崇礼・尚義方言音字彙」(『アジア・アフリカ言語文化研究』十、一九七五年）に同音字表が纏められているが、原本は数冊しか存在しないものと思われる」と『中国図書』の連載で語っている（遠藤 1995: 9)。筆者は幸いにも、ルヴァ神父の晋方言研究に興味を持ち始めた段階で、遠藤氏が太田斎氏に渡した再コピーを目にする機会を得た。その後、この『語彙集』をコレージュ・ド・フランスの中国学研究図書館とルーヴェンのカドック資料館で目睹し得た。

本稿の対象である、同著者の『チャハル方言の助詞』（以下、『助詞』と略称）の方はあまり知られていないようである。筆者はこちらについても、コレージュ・ド・フランスの中国学研究図書館、ルーヴェン大学図書館とカドック資料館[3]の所蔵本を閲覧することができた。低い知名度の背景にはおそらく、橋本先生が論文で示唆するように、ルヴァ神父が 1943 年に山東と北京で収容され、1946 年にベルギーに戻ったという事情がある。

（二）ルヴァ神父の『助詞』が記述したことば

『助詞』は Wright（1947 : 353）では「*Particules du dialecte du Chahar*, quarto, 343 pp., lithographed, Siwantze, 1941」という記載になっている。その紹介記事によると、『チャハル方言の助詞』は 1941 年にリトグラフ版の形で刊行されて、上記の語彙集と合わせて北京のスクート学校で販売されているという[4]。そのほかに、『通報』（T'oung Pao ）1950 年版の「新刊書籍」（Livres reçus, p. 382）の欄にも、Lévi-Strauss の Les structures élémentaires de la parenté の直前に見られ、同じく「*Particules du dialecte du Chahar*, Siwantze, in-4°, 1941 [polycopie] p. 1-2, 343」という記載がある。刊行地の Siwantze（西灣子）とは張家口市区の東北部に位置する崇礼県を指し、19 世紀以来この地域のカトリック信者コミュニティと布教活動の中心であった。この二つの「新刊紹介」から見ると、1940 年代では、『助詞』は *Particules du dialecte du Chahar*、つまり『チャハル方言の助詞』という書名で出回っていたことが分かる。しかし、筆者が検索できた『助詞』の収蔵本はそれと異なる書名で登録されていた。著者名「Leva」で検索できたパリのコレージュ・ド・フランス（Collège de France）

---

[3] KADOC（カドック）は、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学に属する、「宗教・文化・社会ドキュメンテーション・研究センター」（英文名は Documentation and Research Centre on Religion, Culture and Society）の略称。

[4] 紹介全文は以下の通り：“This work is arranged according to European grammatical categories, and is actually a comprehensive grammar of the spoken language of this district, the result of some 40 years of field-work. (On sale at the Scheut Language School, 2 T'ai-ping tsang, Peiping.)” (Wright 1947: 353)。Wright によるこの貴重な紹介文は橋本（1975）で知った。「T'ai-ping tsang」は「太平倉」のことを指す（Zheng 2026 : 128-135 参照)。

の中国学研究図書館（Bibliothèque d’études chinoises）所蔵の『助詞』は、「Etude sur les particules – Dialecte du nord du Shansi」（助詞の研究　山西北部方言）という書名で登録されていた。一方、ルーヴェン・カトリック大学（KU Leuven）の検索サイトで検索できた大学図書館とカドック資料館の 2 種とも「Particules - Notes grammaticales du P. Leva. Dialecte de la Mongolie Centrale, 1941-1942」（助詞　ルヴァ神父の文法ノート　中部モンゴル方言　1941-1942）という書名になっていた。

『助詞』の戦後の新刊紹介の「チャハル方言」と、パリ所蔵本の「山西北部方言」と、ルーヴェン所蔵本の「中部モンゴル方言」の記載を見ると、記述している方言が別物ではないかと思いがちだが、実はそうではない。1940 年代の中国地図では、チャハル（Chahar 察哈爾）省は張家口を省都としており、東には承徳を省都とする熱河省、西には帰綏（現在の呼和浩特市）を省都とする綏遠省、そして南には河北省と山西省が隣接していた。グロータース神父の方言調査報告（1950）のタイトルも「チャハル省」を用いる。本発表のタイトルに用いた「チャハル方言」は以上取り上げた、販売先の店舗情報も含む 1947 年と 1950 年の同時代の新刊紹介を重んじたことによる選択であるが、現在の漢語方言研究界の習慣を考慮すればむしろ『張家口方言助詞』というタイトルが好ましいかもしれない。一方、ルーヴェン所蔵本のタイトルにおける「Mongolie centrale 中部モンゴル」は、カトリック教会の宣教区の区分に基づく表現だと思われる。本来のモンゴル大牧区は 1883 年に東モンゴル、中部モンゴルと西南部モンゴルの三つの代牧区[5]に再区分された。東モンゴル代牧区は 1924 年に「熱河大牧区」（Apostolic Vicariate of Jehol）に名前変更され。著名な言語学者でおなじく淳心会宣教神父であった Jozef Mullie が活躍した地区であった。西南部モンゴル代牧区はオルドス、甘粛省、寧夏省などの地域に対応し、淳心会宣教師の言語学才能はむしろモンゴル語の記述に発揮された。結論として、大学図書館検索システムが示す Dialecte de la Mongolie Centrale はその「中部蒙古代牧区」の漢語方言、つまり西湾子（Siwantze、Siwantse とも書く）近辺のことばを指し、それはすなわち『語彙集』のタイトルにある「山西北部方言」と『通報』、Wright （1947）にある「チャハル方言」と同じく張家口地区の漢語方言を指すと解釈するのが妥当である。

筆者が閲覧した『助詞』の 3 種のテキストはいずれも同じ手書きの原稿のガリ版刷りを製本したものである。ちなみに、資料館で閲覧できたルヴァ神父の手紙と日誌の筆跡からすると、『助詞』は確かにルヴァ神父の手による写本のガリ版刷りであると判断できる。『助詞』は、四つ折り判（22 x 33 cm）というやや大きな判で、導入文の 2 ページに 343 ページの本文が続くという充実した分量である（17 x 22 cm 判の『語彙集』よりも判が大きい）。3 種とも製本されていたがハードカバーには全く書誌データが記されていない。しかしパリのコレージュ・ド・フランスの中国学研究図書館所蔵の『助詞』は、ルーヴェン本と違って中表紙があり、そこには本体よりずっと鮮明な黒インクで、「Etude sur les particules – Dialecte du nord du Shansi – 1941 – par le R. P. Leva, missionnaire de Scheut」（助詞の研究　山西北部方言　1941　スクート会レネ・ルヴァ神父）という手書きの書誌データが記されている。筆者が閲覧したルーヴェンの 2 種のテキストのいずれにも中表紙がなく、初ページ

[5] 代牧区（使徒座代理区 apostolic vicariate）はカトリック教会で正規の教区がまだ設置されていない宣教地域に設けられる暫定的な管轄区域のことである。

の上部に「Particules」（助詞）というタイトルがあるだけであったが、どちらにもそのタイトルの横に、別人の筆跡で追加情報が書かれている：大学図書館の方には「Notes grammaticales du P. Leva. Dialecte de la Mongolie Centrale（ルヴァ神父の文法ノート。中部モンゴル方言）」と、資料館の方には「Par le R. P. Léva, CICM, Siwantze, 1941-1942（淳心会西湾子レヴァ神父著。1941－1942）」とある。

ルヴァ神父の記述する方言を特定するのに最も役立つのは、パリの中国学研究図書館所蔵の『助詞』のハードカバーの裏に貼られている、タイプされた 12 行の附箋である。これには、該書がどの地域の方言を記述しているかという地名付きの説明があり、そこに見える地名は、現河北省の崇礼と沽源、そして河北に隣接する現内モンゴルの興和、商都、集宁にあたる。『中国語言地図集・漢語方言巻』第二版（熊正輝等 2012）の地図 B2－13「晋語」によると、これらの地区の方言は張家口地区の方言（狭義の張家口市、崇礼県、尚義県、沽源県、宣化県など）と同じく晋語張呼片（張家口・フフホト片）に属す。この説明文にはさらにその方言は大体山西北部全般で通用するとあることから、『語彙集』の書名の「山西北部方言」という表現も納得が行く。

（三）ルヴァ著『Particules」（助詞）』の構成と内容

『助詞』は Wright（1947 : 353）の紹介にあるように、記述がタイトルの「助詞」から想像される範囲に限定されるものではなく、実際には 40 年間のフィールドワークに基づくチャハル省の話し言葉の総合的な文法書である。解説と例文訳は基本的にフランス語で書かれているが、オランダ語も散見する（動補式動詞の訳など、対応する表現がオランダ語にぴったり合う場合に限定か）。単語と例文は発音のローマ字表記に漢字が続く形で示されている。橋本先生は 1975 年の論文でルヴァ神父の『語彙集』の労に敬意を示したものの、その音声表記にはやや不満であったようで、グロータース神父がより精密な音声表記をつけてくれたおかげで「学問的な使用にたえるものとなった」と述べている。『助詞』のローマ字表記はたしかにフランス式のローマ字表記に慣れていない読者にはやや分かりづらい（Lamarre 2017 参照）。本節は表記の問題をさておき、文法記述の側面に焦点を当てる。

序文はまず該書のいう「助詞」の範囲について説明する：これは副詞、代名詞や接続詞など、広範囲に「機能語」を拾っていることが分かる。ただし意外なことに、テンス・アスペクトを表す動詞接尾辞と文末助詞は例文に現れるが、体系的には記述されていない。これはフランス語の語句を軸に編んだやり方に起因するのであろう。本体は十三章と二つの付録そして索引から成る。章番号は第一章と第二章にしか振られていないが、筆者が改ページとタイトルの体例に即して、III 以降についても仮の章番号を振って示す。解説項目はフランス語の単語を軸に組織されている。例えば第一章の「空間を表す助詞」の項目「§33. Partout（‘everywhere’）」には、“到處”、“眾到處”のほかに、動詞後に“遍”を付ける表現、“沒個不……的地方”、そして“愛去那裡，那裡又……”のような言い回しも例文付きで挙がっている。『助詞』で解釈されている語のうち、一部は使用頻度や文体に関する注釈がついている。以下は『助詞』の各章を紹介するとともに、数例を示す。

序文（タイトル Particules に続く２ページ、ページ数なし）

I. Particules indiquant les rapports de lieu (1-41)（空間位置関係を示す助詞）

空間関係を表す前置詞：在、離、隔、朝、往、打、隔、跟、靠、挨……

“在、往”は動詞後には“的”に変わるという規則を述べる。
後置詞（方位詞を postposition と呼ぶ）裡（頭）、上、跟前、地下、兩面兒……

II. Particules indiquant les rapports de temps (43-106) （時間関係を示す助詞）
那不前、先、会儿、多会儿、多咎、一……就、這一陣兒、啁（=都）……

III. Particules exprimant ordre et succession (107-151) （順序と前後関係を表す助詞）

IV. Particules exprimant l’union et son contraire (152-181) （統合と分離を表す助詞）
合、跟、連……都、以外、再說、正反兒、沒、少不了、按、順、隨……

V. Particules exprimant les rapports de relation – cause - fin (182-205) （関連、因果、目的関係を表す助詞）對、向、跟前、問（……要）、為（的）、好、因為、怎……

VI. Particules exprimant les rapports de condition (pp. 206-214) （条件後関係を表す助詞）
要（是）、如果、要不、也似的、不老、就是、只是、不怕、要看……

VII. Particules exprimant le moyen, l’instrument, la matière (215-219) （方法、道具、材料を表す助詞）用、拿（動詞付き 50 例以上）、使喚、叫（受け身）……

VIII. Particules exprimant l’avantage (pp. 220-221) （受益を示す助詞）給（給你、给偺、說給……）

IX. Particules exprimant la quantité (pp. 222-242) （量を表す助詞）助数詞と数量表現
一點兒、沒的、好幾個、那們些、只、淨、不夠、一摞……

X. Particules exprimant assentiment, doute, dissentiment (pp. 243-259) （賛成、懐疑、反対を表す助詞）多一半、准是、大概、管保、恐怕、是不是、感青、不聽的、當想……

XI. Termes de la comparaison (pp. 260-278) （比較の表現）不差甚、一般、一樣……

XII. Particules et termes de l’intensité (pp. 279-294) 取り立てと強化の助詞と表現
……的很、最、頂、再沒喇、不知多們、挺、很、不太、那們、正……
そこに「光流流的」のような形容詞の派生形百個余りが三ページ分に亙りリストアップされている。特有の変調パターンの記述も見られる。

XIII. Quelques adverbes de manière (pp. 295-303) （様態副詞挙例）這們、朝那們、怎麼樣、那們個兒、來不來、使上、背地裡、慌裡慌張的、本來、底根兒……

Appendice I : Sens et usage de quelques particules (pp. 304-307) （付録一：いくつかの助詞の意味と用法）これはフランス語の単語から調べる索引で、解説があるページ数を示す。

Appendice II : Les verbes modificateurs dans notre dialecte (pp. 308-328) （付録 II：我が方言における結果補語）（注 : verbes modificateurs という表現は 1895 年の Wieger の『漢語入門』（Rudiments de parler chinois）に見られる用語で結果補語を指す）

Table des matières (pp. 329-343) （目次）

（四）結果補語にかかわる分析の例

『助詞』を閲覧できてまだ半年も経っておらず、晋語の文法記述としての資料価値を評価するには時期尚早であるため、ここではとりあえず結果補語に関わる数例を取り挙げるにとどめる。

一、“上”の文法化を伴う音便

晋語では“上”は方向動詞の時と文法化した方位詞、結果補語などの時は発音が異なる

という報告がある。以下の表の大同方言のデータは马文忠等（1986：16）に拠る。『助詞』のローマ字表記の右の国際音声表記は筆者が『語彙集』を参考して加えた。

“上”の各用法と発音の対応関係

	大同方言		『助詞』（例）	
動詞用法	[ʂɑ^{24}]	上去、上学	cháng [ʃɑ̃]	上樓、上車、上去
方位詞	[ʂəʔ^{32}]	天上、地上、桌子上	chě [ʃə̃]	台上、街上、身上
補語用法	[ʂəʔ^{32}]	装上、拿上、带上	chě [ʃə̃]	騎上馬、買上喇、抓上走

chě は“石、實、食”などの入声字に用いられている表記である。これは文法化を伴う音弱化が促音化の形をとるという晋語や呉語特有の現象だと考えられる。ただし『助詞』では補語用法の“上”にも cháng を当てる例が多くみられる（付録 II :“爬上坡”、“鎖上”）ことを指摘しておく。

二、“VP+動”が「～する時」の時間節を作る接続助詞化

『助詞』（付録 II 322 頁）は結果補語の“動”に“舁不動 yiû poǔ toúng”「持ち運ぶことができない（力不足で）」の用法に加えて、「～する時」（au moment de）の用法を記している。これは山西方言の早い研究では“顿”と表記されることもあった（例えば『大同方言志』では“V+顿儿 [tuar^{24}]”となっている）が、最近の研究では語源は“動”であるという説が有力になっている（邢向东 2006：179-183）。『助詞』第二章の §48 pendant（英語 while）の記述（55-57 頁）では、“動”は“的時候”と違って名詞には付かないと述べられており、結果補語の“動”との関連を裏付ける記述が見られる。更に、動詞に目的語が付く場合、山西省の晋方言では目的語の位置が方言によって異なり、「V 動 O」と「VO 動」の両方の語順が報告されているが、『助詞』では“說動話”「しゃべるとき」、“念動經”「祈りながら」のように「V 動 O」となっている。大同方言でも同様（马文忠等 1986 : 103）：

（1） 吃顿儿——吃的时候、吃顿儿饭—— 吃饭的时候

また『助詞』の同節で、“～動”時間節の典型的な用法としては「～するときは～してはいけない」という不特定の状況を想定したもの及び未然の出来事の例が挙がっている。すなわち、「非現実」事象を指す時間節である。

（2）走動我來叫你。 Tseòu toúng woùo laî tsiáo nì.「出る時には呼びに来る。」（57 頁）

山西方言の“V 動”時間節を論じる研究も（田希诚 1996、吴建生 2002）、これが未然と不特定の事象に限る傾向を示し、「～した時」には使えないと指摘している。なお「～したとき」という時間節に『助詞』では“……的時候”や“……那會兒”などが用いられる。

三、「往+結果補語+V」と「V+結果補語」の対立

ルヴァ神父は『助詞』（36-37 頁）で 、「往 X+V」型の連用修飾付きの動詞句と「VX」型の動補構造の違いについて詳細に解説している。これは「X」が方向補語、結果補語の場合もあれば、形容詞の場合もある（後者の場合は「往～裡」の形をとることがある）。『語彙集』（555-558 頁）でもこの「往 X+V」型の動詞句を「V+補語 X」の「ひっくり返した」パターンとみなして、その高い生産性を示すために常用の語句を大量に挙げている。例えば：

（3）往過扭身、往開放（贼）、往回要東西、往倒推、往起站、往開走……
（4）往深裡剜、往好裡辦、往斷裡鋸、往大裡長、往白裡洗、往光裡磨……

『助詞』（58 頁）の説明では、「V+補語 X」と比べて、「往+X+V」型の表現は過去の出来事に使えず、意図性を際立てる義務モダリティ表現や禁止文などに使うという鋭い指摘がある。これは張家口晋語の研究に携わっている宗守云（宗守云、张素玲 2013、宗守云 2014）の同現象の分析と重なるところが少なくないことに驚く（北方語における「往+補語+V」と「V+補語」については Lamarre 2013 も参照されたい）。

終わりに

筆者が参考にした各資料でルヴァ神父の経歴を追うと、1924 年から 1936 年までの承徳と天津に滞在した十数年間を除けば、『助詞』と『語彙集』が対象としている方言が話されている張家口地区で過ごした。ルヴァ神父の残した『日誌』と 1943 年の語学学習エッセイ「傾聴せよ」によると、氏は 1903 年の中国赴任直後にまず西湾子（現在の崇礼県）で、Wieger などの教科書を使って中国語を自習しながら、現地の中国人カトリック教徒から発音と作文を学んだ。そしてルヴァ神父は 1923 年の一時帰国の後 1924 年に上海に戻った際に上司の指示に従い、官話（la langue mandarine）を学ぶために熱河へ赴任した。承徳で官話をある程度マスターし、宣教活動と中国人生徒向けの授業に使えるようになったものの、その「官話」は、20 年間滞在した張家口の「山西方言」と、声調の発音やストレス（accent tonique）の置かれる箇所が異なることもあって、終始馴染むことができなかったという（『日誌』111 ページ）。『語彙集』の序文で、地域の口語を記録するという目標を明記する文言からも、氏の張家口地区のことばに対する親しみと愛着が読み取れる。

近年来、淳心会の宣教師による中国語学への貢献を明らかにする研究が目立つ（Jozef Mullie については鄭永君 2025、Zheng 2026 を、Willem Grootaers については Söderblom Saarela 2026 を参照）。ルヴァ神父は、40 年間にわたって操ったチャハルの晋方言について、『助詞』と『語彙集』を合わせると一千ページ弱にわたる念入りの記述研究を著した。この著作もまた、改めて評価されるべき時期が来たのではないだろうか。

参考文献

（日本語による文献）

遠藤光暁 1995 北京からパリへ：ヨーロッパ中国語学の旅（８）、『月刊中国図書』11 月号 、 7-9 頁。東京：内山書店。

橋本萬太郎 1975 「中国語崇禮・尚義方言音字彙」、『アジア・アフリカ言語文化研究』10 号、144-164 頁.

（中国語による文献）

马文忠、梁述中 1986《大同方言志》，北京：语文出版社。

田希诚 1996 晋中方言的时态助词“动了”和“时”，载于陈庆延、文琴、沈慧云、乔全生主编《首届晋方言国际学术研讨会论文集》，240-244 页。太原：山西高校联合出版社。

吴建生 2002 山西方言的助词“动”，载戴昭铭主编、周磊副主编《汉语方言语法研究和探索 首届国际汉语方言语法学术研讨会论文集》，306-311 页。哈尔滨：黑龙江人民出版社。

熊正辉、张振兴主编 2012《中国语言地图集（第 2 版）汉语方言卷》，北京：商务印书馆。
邢向東 2006《陕北晋语语法比较研究》，北京：商务印书馆。
郑永君 2025《比利时来华圣母圣心会及其荷语汉学家闵宣化（1886—1976）研究》，上海：上海古籍出版社。
宗守云 2014 晋语中的“往 DV”结构，《语言研究集刊》第 1 期 124-133 页。
宗守云、张素玲 2013 晋语中的“往 CV”结构，《语文研究》第 3 期 46-50 页。
（その他の言語による文献）
Grootaers, W.A. 1950. Une courte exploration linguistique dans le Chahar (Chine du nord) avec un projet de questionnaire dialectal. *Bulletin de la Société Linguistique de Paris* 46-1, pp. 123-143.
Lamarre, Christine. 2013. When Lexicalization Meets Grammaticalization: The Development of ‘*wang* + path’ Adverbials in Northern Chinese. In Cao, Guangshun, Chappell, Hilary, Djamouri, Redouane, Wiebusch, Theckla (eds.): *Breaking down the Barriers: Interdisciplinary Studies in Chinese Linguistics and Beyond, Vol. 2*, pp. 887-909. Taipei: Academia Sinica.
Lamarre, Christine. 2017. Romanizations -- EFEO System. In Sybesma, Rint et al. (eds.), *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics*, pp. 404-407. Leiden/Boston: Brill.
Leva, René. 1943. Ouvrez les oreilles! （傾聴せよ）. *Collectanea commissionis synodalis* 9-12 (Linguistica), pp. 659-666.
Leva, René. Souvenirs d'un vieux missionnaire en Chine - 1903-1946（『老宣教師の中国記——1903-1946 年』、『日誌』と略す）、カドック資料館死蔵手書きノート帳。
Livres reçus. 1950. *T'oung Pao*, Second Series, Vol. 39, Livr. 4/5, pp. 375-386.
Söderblom Saarela, Mårten. 2026. Willem A. Grootaers’s Training in Chinese Language and Linguistics, with a Brief Discussion of his Early Publications on Chinese Dialectology. *Histoire Épistémologie Langage* 48/1, pp. 189-220.
Wieger, Léon. 1895. *Rudiments de parler chinois. Dialecte du* 河間府. *Premier volume : Introduction, mécanisme, phraséologie*. 河間府 [Hejianfu]: Imprimerie de la Mission catholique.
Wright, Arthur. 1947. Sinology in Peiping 1941-1945. *Harvard Journal of Asiatic Studies* Vol. 9, No. 3/4, pp. 315-372.
Zheng, Simon Yongjun. 2026. *Bringing China home : Fr. Jozef Mullie. A Flemish Scheutist, Educator and Sinologist*. Leuven : Leuven University Press (Leuven Chinese Studies XLIX).

謝辞　大学図書館とフェルディナント・フェルビースト学院（Ferdinand Verbiest Institute、Verbiest の漢名は南懐仁）の資料室には 2026 年 3 月末 4 月初に、カドック資料館には 2026 年 8 月と 9 月に訪れた。その際、フェルビースト学院の鄭永君研究員と同学院創立者の Jeroom Heyndrickx 神父、大学図書館の中国コレクション担当の Benedicte Vaerman 氏及びカドック資料室のスタッフにとりわけお世話になった。ここに特記して感謝したい。その準備段階では、日本側の遠藤光暁氏と太田斎氏の資料提供にお礼を申し上げる。

東南方言の有標ヴォイス構文と文法化

佐々木勲人
筑波大学 教授

1. はじめに

ヴォイス（態）：同内容のことを違った声(形)で表すこと
能動形と受動形の対立が考察の中心
ヴォイスの対立は一般に動詞の形態の違いとして現れる

柴谷 2000「第３章：ヴォイス」,『日本語の文法：第１巻 文の骨格』
行為が動作主によって意図的にもたらされたのかどうか，そしてそれが他に及んでいるのか，それともその帰結が動作者に影響を及ぼしているのかといった，行為の発生とその展開のあり方を対象とした文法現象

木村 2000「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」『中国語学』247
名詞表現の意味役割と格表示の対応関係の変更が言語形式の上に何らかのかたちで明示的かつ規則的に反映される現象

有標ヴォイス構文：受身文や使役文，処置文のように，動作の主体や対象が特定の標識によって有標化(marking)される形式

文法化(grammaticalization)：Hopper & Traugott 2003 *Grammaticalization: Second Edition*.

(i) A research framework for studying the relationships between lexical, constructional, and grammatical material in language, diachronically and synchronically, both in particular languages and cross-linguistically.

(ii) A term referring to the change whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions.

形態変化という手段を持たない中国語において，受動文や使役文，処置文といった有標ヴォイス構文がどのように成立するのか，またそれらが相互にどのようなネットワークを形成しているのかについて，授与動詞が有標化を担う東南方言の構文に焦点をあてて，文法化の観点から検討する。

2. 授与から受益への文法化

標準語の授与動詞“给”は「受益者」を導く前置詞に文法化している

(1) 我给他买了一本书。

(2) 我给孩子洗衣服。

東南方言の授与動詞に標準語の“给”ような文法化は見られない

(3) a. 我拨侬一只苹果。(我给你一个苹果。) [吴语・宁波]
b. *我拨侬买衣裳。(我给你买衣服。) [吴语・宁波]
(4) a. 我乞汝蜀粒苹果。(我给你一个苹果。) [闽语・福州]
b. *我乞汝画蜀张图。(我给你画张地图。) [闽语・福州]
(5) a. 偃分你一粒苹果。(我给你一个苹果。) [客家语・桃园]
b. *偃分你买一领襯衫。(我给你买一件衬衫。) [客家语・桃园]
(6) a. 佢畀本书我。(他给我一本书。) [粤语・广州]
b. *佢畀我买书。(他给我买书。) [粤语・广州]

※呉語の一部には例外も観察される

(7) 伊拨我送过来八只月饼。(他给我送过来八个月饼。) [吴语・上海] 钱乃荣 1997
(8) 哥哥，拨我买啥西来哉？(哥哥，给我买什么东西来了？) [吴语・绍兴]
《翠姐姐回娘家》

3. 授与から使役への文法化

モノの受取手である「受給者」を表示する標準的な形式：授与動詞を用いて文末に表示

V + Theme + GIVE + Recipient

(9) 我买了一本书给他。
(10) 我削苹果给你。

「受給者」を文末に表示する形式は東南方言においてもほぼ例外なく成立する

A: V + Theme + GIVE + Recipient

(11) 其拕照相拨我。(他拿照片给我。) [吴语・宁波]
(12) 我削苹果互你。(我削苹果给你。) [闽语・厦门]
(13) 偃送一粒蘋果分你。(我送一个苹果给你。) [客家语・桃园]
(14) 我攞一张凳畀你。(我拿一个凳子给你。) [粤语・广州]

この形式に動詞を付加することで使役的状況を表す

B: V + Theme + GIVE + Recipient/Agent + V

(15) 其拕照相拨我相相。(他拿照片给我看看。) [吴语・宁波]
(16) 我削苹果互你食。(我削苹果给你吃。) [闽语・厦门]
(17) 偃送一粒蘋果分你食。(我送一个苹果给你吃。) [客家语・桃园]
(18) 我攞一張凳畀你坐。(我拿一个凳子给你坐。) [粤语・广州]

授与に関わる具体的な行為を省略することで授与動詞による「授与使役」が成立

C: (V + Theme +) GIVE + Recipient/Agent + V

(19) 其（拕照相）拨我相相。(他（拿照片）给我看看。) [吴语・宁波]
(20) 我（削苹果）互你食。(我（削苹果）给你吃。) [闽语・厦门]
(21) 偃（送一粒蘋果）分你食。(我（送一个苹果）给你吃。) [客家语・桃园]
(22) 我（攞一張凳）畀你坐。(我（拿一个凳子）给你坐。) [粤语・广州]

※福州(闽语)では具体的行為の省略が許されない

(23) 伊*(掏相片）乞我看。(他拿照片给我看。) [闽语・福州]

(24) 我*(削苹果）乞汝食。(我削苹果给你吃。) [闽语・福州]

否定文にこの種の制約は見られない

(25) 伊无乞我看。(他不给我看。) [闽语・福州]

(26) 我无乞你吃。(他不给你吃。) [闽语・福州]

東南方言の授与動詞は「授与使役」に限定されない。「許容使役」も成立可能

(27) 格末船头脑拨伊先上岸。(那么船长让他先上岸。) [吴语・绍兴]

(28) 我无乞伊转厝。(我不让他回家。) [闽语・福州]

(29) 偃分佢早點子轉屋家去。(我让他早点儿回家。) [客家语・桃园]

(30) 佢唔畀我去机场。(他不让我去机场。) [粤语・广州]

☞東南方言には標準語の“让”にあたる「許容使役」のための標識がない

(31) 「授与」⇒「授与使役」⇒「許容使役」

※苏州(吴语)は“让”を持つが，授与動詞の“拨”は「許容使役」を表す

(32) 让侬等仔长远哉。(让你等了好久了。) [吴语・苏州]

(33) 爹爹勿拨俚去白相。(爸爸不让他去玩儿。) [吴语・苏州]

4. 授与から受動への文法化

李珊 1994：就方言看，大多数南方方言至今仍是“给”类动词兼表被动。现代语言材料显示“给”字用来直接表示被动，多出于南方人的笔下，确有地域性的倾向。今年来个别的北方作家也见单用“给”表被动

太田 1956：こういう用法(受身)は北京語にはない。しかし中国語としては十分ありうる。

(34) 我的金鱼給猫吃了。

山田 1999：北京語作品である老舎作品および〈兒女英雄傳〉についても調査したが、そこでも受け身の“给”はほとんど用いられていなかった。

木村 2004：授与動詞に由来する前置詞形式が受動文の AM として機能する方言は、地理的分布に粗密の差こそあれ、中国南北の広範囲に亘ってその存在が確認されている。

(35) a. 我拨仔俚一本书。(我给了他一本书。) [吴语・苏州]

b. 我拨俚吓仔一跳。(我被他吓了一跳。)

(36) a. 拨我一眼浆糊。(给我一点儿浆糊。) [吴语・上海]

b. 写辣黑板浪个字拨伊拉揩脱了。(写在黑板上的字被他擦掉了。)

(37) a. 我苹果拨偌个。（我给你一个苹果。） ［吴语・绍兴］
b. 我要拨阿哥骂咯。（我要被哥哥骂了。）
(38) a. 我拨偌一只苹果。（我给你一个苹果。） ［吴语・宁波］
b. 眼镜拨小人拷破嘭。（眼镜被孩子打破了。）
(39) a. 伊乞我几本书。（他给我几本书。） ［闽语・福州］
b. 钱乞我使光咯。（钱被我用光了。）
(40) a. 伊互我一本新册。（他给我一本新书。） ［闽语・厦门］
b. 伊互人拍一下。（他被人打了。）
(41) a. 你明天买来，我就得钱你。（明天你买来了，我就给你钱。）［湘语・衡阳］
b. 茅草刚盖好，就得风刮跑咯哒。（茅草刚盖好，就被风刮跑了。）
(42) a. 偃分一本书佢。（我给他一本书。） ［客家语・梅县］
b. 偃分佢打e一拳。（我被他打了一拳。）
(43) a. 偃分你一粒苹果。（我给你一个苹果。） ［客家语・桃园］
b. 佢分人打哩。（他被人打了。）
(44) a. 佢畀本书我。（他给我一本书。） ［粤语・广州］
b. 佢畀狗咬亲。（他被狗咬了。）

RQ: 授与動詞を用いた受動文はなぜ東南方言に多く観察されるのか

蒋绍愚 2002：我认为“给”从表示“给予”到表示被动是这样一种发展：“给$_1$（给予）”→“给$_2$（让，叫）”→“给$_3$（被）”；
(45) 千万别给老太太、太太知道。（红楼梦五二回） 蒋绍愚 2002

杨凯荣 2015：我们认为上海话的使役中“叫”“让”“拨”的分工不同，它们分别标示不同的使役语义。“叫”的主要功能是指示使役和强制使役，“让”主要为许可使役和放任使役以及自发使役，“拨”则表示给予使役和“不许可使役”。“拨”是经由否定的使役（即不许可）扩展为被动的，而并不是经由肯定形式扩展的。
(46) 耐阿敢勿拨我吃？（你为什么不给我吃？）《海上花列传》 杨凯荣 2015
(47) 耐快点去罢，勠拨耐阿哥说。（你快点儿去吧，不要被你哥哥说。）《海上花列传》

木村 2000：放任使役的事態と受影文(受動文)の連続性
“老王”が、“孩子”が“吵”するがままに任せた結果、その影響がわが身に降り懸かり、“老王”自身が「目が覚める」状況に至るという事態を表している。
(48) a. 老王让他孩子乱吵（，也不管）。
b. 老王被他孩子吵醒了。 木村 2000

木村 2004，木村・楊 2007：＜授与＞と＜受動＞のネットワーク形成のパタン
(49) 香港粤語タイプ：＜授与＞—＜許容使役＞—＜受動＞
北京語タイプ：＜授与＞—＜受益＞—＜受動＞
上海語タイプ：＜授与＞—＜不許容使役＞—＜受動＞ 木村・楊 2007

(50)　「授与」⇒「授与使役」⇒「許容使役」➡「受動」

・授与動詞を用いた受動文は動作主の省略不可：使役文の構造的特徴を継承

(51)　a.　*我咯书拨 ø 拎走嘭。（我的书被拿走了。）　［吴语・宁波］
　　b.　*我的册互 ø 拿去也。（同上）　［闽语・厦门］
　　c.　*偃个书分 ø 拿走哩。（同上）　［客家语・桃园］
　　d.　*我本书畀 ø 攞走咗。（同上）　［粤语・广州］
(52)　a.　*茶杯拨 ø 敲破哉。（茶杯被打破了。）　［吴语・绍兴上虞］
　　b.　*茶杯乞 ø 拍破了。（同上）　［闽语・潮州］
　　c.　*茶杯分 ø 打破 e。（同上）　［客家语・梅县］

(53)　我其书乞 ø 掏去咯。（我的书被拿走了。）　［闽语・福州］
(54)　眼镜乞 ø 做破咯。（眼镜被弄破了。）　［闽语・福州］

5. 授与から処置への文法化

・東南方言における処置文の類型：
　①　「手にもつ」という意味の動詞を用いる地域：
　　苏州（吴语），上海（吴语），杭州（吴语），衡阳（湘语）
　②　授与動詞を用いる地域：
　　杭州（吴语），绍兴（吴语），宁波（吴语），黎川（赣语），抚州（赣语），
　　休宁（徽语），黟县（徽语），祁门（徽语），长沙（湘语）
　③　受益者や随伴者を導く前置詞を用いる地域：
　　绍兴（吴语），宁波（吴语），福州（闽语），桃园（客家语），大埔（客家语）
　④　処置文をあまり使わないが，強いて挙げれば“将”を用いる地域：
　　梅县（客家语），连城（客家语），大埔（客家语），广州（粤语）

佐々木 1999，遠藤 2004

・授与動詞を用いる処置文は東南方言北部に帯状に分布する

(55)　a.　拨我回音号！（给我回音吧！）　［吴语・杭州］
　　b.　你拨桌子揩揩它号。（你把桌子擦一擦吧。）
(56)　a.　我苹果拨偌个。（我给你一个苹果。）　［吴语・绍兴］
　　b.　偌拨小王个棉被晒晒。（你把小王的棉被晒一晒。）
(57)　a.　我拨偌一只苹果。（我给你一个苹果。）　［吴语・宁波］
　　b.　你拨房间打扫打扫。（你把房间打扫打扫。）
(58)　a.　我提小李一本书。（我给小李一本书。）　［徽语・休宁］
　　b.　提老鼠洞□出来（把老鼠洞塞出来）
(59)　a.　渠畀我一个桃。（他给我一个桃。）　［徽语・黟县］
　　b.　尔畀门关起来。（你把门关起来。）
(60)　a.　尔分晓〓一把剪刀。（你给我一把剪刀。）　［徽语・祁门］
　　b.　尔分钱摆好。（你把钱收好。）

(61) a. 把本书我。（给我一本书。） ［赣语・黎川］
b. 莫把茶碗打破了。（别把茶碗打破了。）
(62) a. 寡居真个拿出十七八万两银子摆渠， ［赣语・抚州］
（寡妇真的拿出十七八万两银子给他。）
b. 你摆钱拿出来，（你把钱拿出来，）
(63) a. 把本书你。（给你一本书。） ［湘语・长沙］
b. 把□碗饭吃完哒！（把这碗饭吃完了！）

・二つの授与動詞を用いる文

$GIVE_1$ + Theme + $GIVE_2$ + Recipient

(64) 拨张年历片拨辣他。（给了他一张年历。） ［吴语・杭州］
(65) 渠畀一本书畀我。（他给我一本书。） ［徽语・黟县］
(66) 把本书把我。（给我一本书。） ［赣语・黎川］
(67) 你不把半个工钱把我，（你不给我半个工钱，） ［湘语・长沙］

・授与から処置への文法化

A: $GIVE_1$ + Theme + $GIVE_2$ + Recipient
(68) 渠畀一本书畀我。（他给我一本书。） ［徽语・黟县］
(69) 把本书把我。（给我一本书。） ［赣语・黎川］

B: $GIVE_1$ + Theme + V + $GIVE_2$ + Recipient
(70) 我把□只宝贝送把你哒啦。（我把这个宝贝送给你吧。） ［湘语・长沙］
(71) 把□个东西拿把我。（把这个东西拿给我。） ［赣语・黎川］

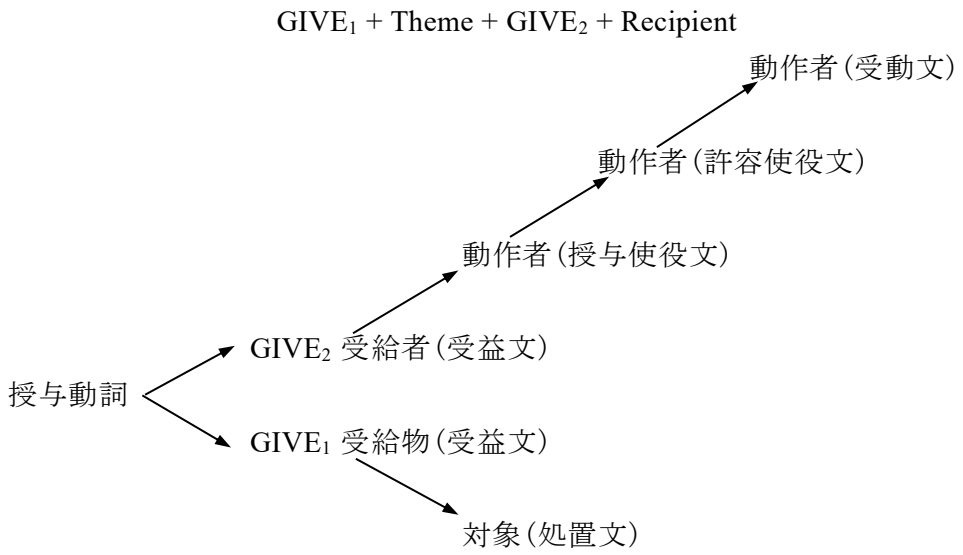
C: $GIVE_1$ + Theme + V + Result (Directional)
(72) 你摆钱拿出来，（你把钱拿出来，） ［赣语・抚州］
(73) 把她们拖到船上。（把她们拖到船上。） ［湘语・长沙］

D: $GIVE_1$ + Theme + V + Result (Stative)
(74) 把□碗饭吃完哒！（把这碗饭吃完了！） ［湘语・长沙］
(75) 莫把茶碗打破了。（别把茶碗打破了。） ［赣语・黎川］

・授与動詞由来の 処置標識とモノとの親和性
(76) 你{搭/拨}房间打扫打扫。（你把房间打扫一下。） ［吴语・宁波］
(77) {搭/拨}其咯棉被晒一晒。（把他的棉被晒一晒。） ［吴语・宁波］

(78) 我{搭/*拨}其打勒半死半活。（我把他打了半死半活。） ［吴语・宁波］
(79) 其{搭/*拨}我狠勒一顿。（他把我骂了一顿。） ［吴语・宁波］

6. 授与動詞と有標ヴォイス構文のネットワーク



参考文献

太田辰夫 1956「給」について,『神戸外大論叢』7 巻 1-3 号，177-197 頁。

木津祐子 2012「官話」の現地化―長崎通事書の二重他動詞「把」と琉球通事書の処置文―,『京都大學文學部研究紀要』第 51 号，129-147 頁。

木村英樹 2000 中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化,『中国語学』247 号，19-39 頁。

木村英樹 2004 授与から受動への文法化―北京語授与動詞の前置詞化をめぐって―,『言語』33-4，58-65 頁。

木村英樹・楊凱栄 2008 授与と受動の構文ネットワーク―中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論―,『ヴォイスの対照研究―東アジア諸語からの視点―』くろしお出版，65-91 頁。

佐々木勲人1999 南方方言におけるGIVEの処置文,『中国語学』246号，207-216頁。

柴谷方良 2000 第 3 章:ヴォイス,『日本語の文法:第 1 巻 文の骨格』岩波書店, 117-186 頁。

山田忠司 1999《儒林外史》における“給”の用法―北京語資料との比較から,『中国語学』246 号，22-30 頁。

蒋绍愚 2002“给”字句、“教”字句表被动的来源－兼谈语法化、类推和功能扩张,《语言学论丛》26，159-177 页。

李珊 1994《现代汉语被字句研究》北京：北京大学出版社。

钱乃荣 1997《上海话语法》上海：上海人民出版社。

桥本万太郎 1987 汉语被动式的历史・区域发展,《中国语文》第 1 期，36-49 页。

石毓智 2006《语法化的动因与机制》北京：北京大学出版社。

杨凯荣 2015 论上海话的使役，被动标记,《华东师范大学学报（哲学社会科学版）》第 1 期，96-103 页。

遠藤雅裕 2004 漢語方言處置標誌的地理分布與幾種處置句,『中国語学』251 号，56-73 頁。

Hopper, Paul J., and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization: Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

臺灣閩南語「了」、「甲」與「著」的三種因果關係[1]

潘俞翔[1]　申堯燮[2]
國立清華大學 博士班研究生[1]，博士候選人[2]

1. 臺灣閩南語的三種助詞

（1）為三種臺灣閩南語結構助詞（structural particle），即「了（liau2）」、「甲（kah4）」與「著（tioh8）」的例子。 鄭良偉 （1989），Lin（2017）與 Yu（2011）說明，這些結構助詞，如（2），大致對應於華語的「得」，並能夠互換。

（1）　a. 彼隻馬走了真緊。（臺灣閩南語）
　　b. 彼隻馬走甲真緊。
　　c. 彼隻馬走著真緊。
　　‘那匹馬跑得很快。’

（2）　a. 媽媽把衣服洗得很乾净。（華語）
　　b. 他把馬騎得什麼都不能吃。

然而，如 Lau（2024）說明，這種說明方式似乎過於簡化此三種助詞之間的異同，因爲，如果它們確實是相同的成分的話， 它們在所有相關例句中應該要麼同時合法，要麼同時不合法。但是，如（3）（Lau 2024: 157-158）所示，在一些例子當中，它們各自呈現不一樣的接受度。

（3）　a. 志明食甲肥腩腩。（臺灣閩南語）
　　b.?? 志明食了肥腩腩。
　　c.* 志明食著肥腩腩。

有些先行研究指出這些助詞彼此不同。譬如，盧廣誠（2003）說明「著」與「了」為兩個不同的結構助詞，以（4）爲例。

（4）　a. 坐著真爽。（臺灣閩南語）
　　b. 食著酸 ngiuh-ngiuh。
　　c. 洗了真清氣。
　　d. 講了毋著。

具體而言，盧廣誠說明（4a）與（4b）中的「著」表達動詞「坐」與「食」的進行貌，「了」表達動詞「洗」與「講」的完成貌。然而，這種說明方式似乎也有疑點。（4a）的意思為，在沙發上坐下的行動結束之後，說話者發現沙發讓人感覺舒服。（4b）也是。其意為：說話者吃了一口檸檬之類的東西後，說話者則發現該東西有很重的酸味。此并不代表說話者還在做坐沙發的動作或吃檸檬的動作。回到（1），楊秀芳（1991）說明，「了」才是結果補語助詞，「甲」表達主語動作的方法與方式，「著」表示能夠跑得快的主語的性質。然而，如 Lau（2024:157）說明，（5）所表達的結果在華語中可用「得」字結果補語助詞表達，然而「了」卻無法如此。反而，「甲」才是最接近「得」字結果補語助詞的成分，因爲（6）中的「真清氣」為賓語「衫」的結果狀態。

（5）　*志明食了攏無賭。（臺灣閩南語）
（6）　伊共衫洗甲真清氣。（臺灣閩南語）

[1] 本項研究由國家科學及技術委員會補助（NSTC 113-2410-H-007-043-MY3）。

換句話說，對臺灣閩南語此三種結構助詞的分析分歧甚大，也沒有一個統一性的說明方式。

2. 「著」與「甲」

Frey （2016 及其後續研究）說明，德語至少有四種不同的因果句型，即 *weil* 句（7a），*da* 句（7b），動詞首位因果句 （verb-first causal clause；亦稱 V1-CC；參見 7c），與 *weshalb* 句（7d）。

（7） a. Max hat gewonnen, weil er sehr gut gespielt hat.
Max has won because he very well played has

b. Max hat gewonnen, da er sehr gut gespielt hat.
Max has won since he very well played has

c. Max hat gewonnen, hat er doch sehr gut gespielt.
Max has won has he MP very well played

d. Max hat sehr gut gespielt, weshalb er gewonnen hat.
Max has very well played which.is.why he won has
‘由於他做得很好，Max 結果贏了。’

雖然這四種句型皆與因果關係有關，然而在句法分佈與語義詮釋上各不相同。與被分類成中心狀語子句（Central Adverbial Clauses；CACs；參見 Haegeman 2003, 2006, 2012a, 2012b）的 *weil* 句不同，被分類成邊緣狀語子句（Peripheral Adverbial Clauses；PACs）的 *da* 句顯示下面幾項特徵：一，子句的主語不能被主句的主語約束，如（8）；二，其語義上的轄域比否定詞還大，如（9）；三，當出現在 *denken*‘想’等動詞的賓語子句中的時候，為主句主語的判斷提供根據，如（10）；四，強式根句現象（Strong Root Phenomena）無法出現在其裏面，如（11）。

（8） * Keiner$_1$ hat sich beschwert, da er$_1$ unterbrochen wurde.
no.one has REFL complained since he interrupted was
‘沒有人因為自己被打斷而抱怨。’

（9） Max ist nicht gegangen, da Maria kam,
Max is NEG gone because Maria came
sondern da die Musik schlecht wurde.
but because the Music bad became
‘Max 沒有離開不是因爲 Maria 來了，而是因爲音樂很不好聽。’
（*da* > NEG / *NEG > *da*）

（10） Hans denkt, [dass Maria schnell promovieren wird,
Hans thinks [that Maria quickly graduate will
da sie sehr begabt ist]
since she very talented is]
‘Hans 覺得 Maria 很快就會畢業，因爲她有天分。’

（11） ?? [Da Maria sehr begabt ist, hab ich recht?],
[since Maria very talented is have I right]
wird sie schnell promovieren.
will she quickly graduate

‘Maria 很快就會畢業，因爲[她很有天分，不是嗎？]’

有趣的是，臺灣閩南語的「著」字句也顯示類似特徵。一，子句的主語不能被主句的主語約束，如（12）；二，其語義上的轄域比否定詞還大，如（13）；三，當出現在「感覺」等動詞的賓語子句中的時候，表達其主句主語判斷上的根據，如（14）；四，強式根句現象無法出現在其後面，如（15）。

（12） a. 這領衫，逐家穿著攏真好看。

b.*這領衫，穿著逐家攏真好看。

（13） a. 彼領衫，阿美穿著無好看。

b. *彼領衫，無阿美穿著好看。（*NEG > Tioh8）

（14） 這領衫，阿明感覺阿美穿著真好看。

（15） a. 這領衫穿著真好看，是無？

b. *這領衫穿著是無真好看？

與此相反，最類似華語「得」字句的「甲」字句則顯示相反的特徵。一，其主語可以被主句主語約束，如（16）；二，可以出現在否定詞的轄域裏面，如（17）；三，只表達賓語子句中事件的結果，并不代表主語的判斷根據，如（18）；四，與（15b）不同，強式根句現象可以出現在其後面，如（19）。

（16） 阿美笑甲真好看。

（17） 阿明無共飯食甲真清氣。

（18） 阿明感覺阿美共飯食甲真清氣。

（19） 阿明共飯食甲真清氣，是無？

因而，依循 Frey 對德語的分析，本文將「著」字句理解成表達内外説話者（internal/external logophoric center）的判斷根據的 CP 領域中判斷詞組（Judgement Phrase；JP；參見 Krifka 2023）的指定語，並將「甲」字句看成與華語「得」字句類似的結果補語子句 。

3. 「了」與「甲」

除此之外，尚有一項區別需要討論，即「甲」與「了」之間的對比。第一節已經指出，這兩個助詞在不同例句中呈現不同的接受度。問題在於，究竟是什麼因素造成這項差異。為了解釋此一現象，本文援引一項跨語言概括，即使動標記可以表達不同類型的因果關係。例如，Lyutikova 與 Tatevosov（2014；以下簡稱 L&T）指出，在屬於突厥語族的卡拉恰伊－巴爾卡爾語（Karachay-Balkar）中，使動標記會依其出現環境而產生兩種不同的因果關係解讀，參見（20）與（21）。根據 L&T，與非賓格動詞結合的使動標記，如（20），僅允許 Alim 的行為直接造成主任死亡的解讀；相對而言，與及物動詞或非作格動詞結合的使動標記，如（21），則同時允許教師直接（21a）或間接（21b）促成 Alim 參加跑步比賽的解讀。依循 Ginet（1990）與 Kratzer（2005），L&T 將前一種僅允許直接因果的關係稱為 CAUSING，而將後一種同時允許直接與間接因果的關係稱為 CAUSE。

（20） Alim direktor-nu öl-dür-dü.

Alim director-ACC die-CAUS-PST.3SG

a. 「Alim 殺死了主任。」

b.* 「Alim 付給殺手一萬美元，安排了對主任的刺殺行動。」

（21） Ustaz alim-ni erišiü-le-de cap-tır-dı.

teacher Alim-ACC competition-PL-LOC run-CAUS-PST.3SG

a. 「老師讓 Alim 在比賽中跑步，例如將他推上跑道。」

b.「老師說服教練相信 Alim 是一名優秀的跑者，從而促成 Alim 參加跑步比賽。」

為了捕捉上述區別，L&T 主張，使動標記所表達的關係，即 CAUSING 或 CAUSE，是由其所在使動結構的句法環境決定的。具體而言，在他們的分析中，由情狀類型中心語（Aktionsart head）所編碼的 CAUSING 關係只能與 VP 補語共現；CAUSE 關係則與大於 VP 的結構（如 *v*P）共現。由於非賓格動詞只包含 V 而不投射 *v*，因此在（20）中使用的是 CAUSING 關係。相對而言，當使動標記所結合的補語具有更大的結構，如及物動詞或非作格動詞所投射的 *v*P 時，則只能採用 CAUSE 關係。

本文主張，臺灣閩南語「了」與「甲」之間的區別也可以獲得類似的分析。兩者皆為結果補語助詞，但在語義上分別編碼 CAUSING 與 CAUSE 關係。首先，（22a）顯示，「甲」可以與包含焦點敏感助詞「攏」的結果子句共現。相對而言，將同一例句中的「甲」替換為「了」後，所得的（22b）則不合法，顯示兩個助詞所能選擇的補語大小並不相同。更重要的是，（22a）所表達的是間接因果，因為阿明的笑並不能直接控制房間裡所有人一起笑這一最終結果（Wunderlich 1997）。（22b）的不合法因此顯示，「了」不能表達間接因果，這也解釋了它為何在語義上無法與該結果子句共現。另一方面，（23）顯示，「甲」也能表達直接因果，而「了」同樣可以出現在這種環境中。

（22） a. 阿明笑甲房間內底的人攏鬥陣笑。

b.* 阿明笑了房間內底的人攏鬥陣笑。

（23） a. 阿明共遐的菜煮甲真好食。

b. 阿明共遐的菜煮了真好食。

根據上述對比，本文將「甲」視為編碼 CAUSE 關係的結果補語助詞，並將「了」視為編碼 CAUSING 關係的另一個結果補語助詞。與卡拉恰伊－巴爾卡爾語相似，臺灣閩南語的結果補語助詞也選擇兩種不同大小的補語：「了」選擇 VP，而「甲」則可以選擇大於 VP 的結構，如 CP。這項分析也能解釋為何「肥腖腖」（3b）等形容詞表達式不能與「了」共現。這些表達式在語用上與「了」不相容，因為非常肥胖的狀態無法由單一次進食事件直接達成，而需要一連串相關事件。據此，本文主張「了」與「甲」皆為臺灣閩南語的結果補語助詞，但兩者所編碼的是不同類型的因果關係。

4. 結論

本文比較臺灣閩南語「著」、「甲」與「了」三種表面分布相近的結構助詞，主張三者並非同一功能範疇的交替形式。「著」小句在句法與語義上與德語 *da* 因果句平行，位於 CP 域中的 Spec,JP，為外部或內部判斷者提供命題成立的認知根據。相對而言，「甲」與「了」皆為 *v*P 域中的結果標記，但「甲」編碼可包含直接與間接因果的 CAUSE 關係，並選擇較大的補語；「了」則編碼僅允許直接因果的 CAUSING 關係，並選擇較小的 VP 補語。

參考文獻

鄭良偉（主編）. 1989. 《國語常用虛詞及其臺語對應詞釋例》. 臺北：文鶴出版有限公司。

盧廣誠. 2003. 《臺灣閩南語概要》. 臺北：南天書局有限公司。

楊秀芳. 1991. 《臺灣閩南語語法稿》. 臺北：大安出版社。

Frey, Werner. 2016. On some correlations between formal and interpretative properties of causal clauses. In Ingo Reich and Augustin Speyer （eds.）, *Co- and subordination in German and other languages*, 153-179. Hamburg: Buske.
Frey, Werner. 2018. Root clause phenomena may depend on a private act or on a public act. Paper presented at *SLE* 2018, Tallinn.
Frey, Werner. 2020. German concessives as TPs, JPs and ActPs. *Glossa: A Journal of General Linguistics* 5（1）: 1-31.
Frey, Werner. 2023. Types of German causal clauses and their syntactic-semantic layers. In Łukasz Jędrzejowski and Constanze Fleczoreck （eds.）, *Micro- and macro-variation of causal clauses: Synchronic and diachronic insights*, 51-100. Amsterdam: John Benjamins.
Ginet, Carl. 1990. *On action*. Cambridge: Cambridge University Press.
Haegeman, Liliane. 2003. Conditional clauses: External and internal syntax. *Mind & Language* 18（4）: 317-339.
Haegeman, Liliane. 2006. Conditionals, factives and the left periphery. *Lingua* 116（10）: 1651-1669.
Haegeman, Liliane. 2012a. *Adverbial clauses, main clause phenomena, and the composition of the left periphery*. Oxford: Oxford University Press.
Haegeman, Liliane. 2012b. The syntax of main clause phenomena: Deriving the truncation account. In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman, and Rachel Nye （eds.）, *Main clause phenomena: New horizons*, 113-134. Amsterdam: John Benjamins.
Kratzer, Angelika. 2005. Building resultatives. In Claudia Maienborn and Angelika Wöllstein （eds.）, *Event arguments: Foundations and applications*, 177-212. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
Krifka, Manfred. 2023. Layers of assertive clauses: Propositions, judgements, commitments, acts. In Jutta M. Hartmann and Angelika Wöllstein （eds.）, *Propositional arguments in cross-linguistic research*, 115-181. Tübingen: Narr Francke Attempto.
Lau, Seng-hian. 2024. On the uses and restrictions of postverbal markers *kah*, *liáu*, and *tio̍h* in Taiwanese. *Concentric: Studies in Linguistics* 50（2）: 145-200.
Lin, Huei-Ling. 2017. Syntax and semantics of postverbal secondary predicates in Taiwan Southern Min. *Journal of Chinese Linguistics* 45（1）: 68-103.
Lyutikova, Ekaterina and Sergei Tatevosov. 2014. Causativization and event structure. In Bridget Copley and Fabienne Martin （eds.）, *Causation in grammatical structures*, 279-327. Oxford: Oxford University Press.
Wunderlich, Dieter. 1997. Cause and the structure of verbs. *Linguistic Inquiry* 28（1）: 27-68.
Yu, Szu-I Sylvia. 2011. Post-verbal markers in Taiwanese Southern Min and Fuzhounese. *Concentric: Studies in Linguistics* 37（2）: 241-258.

温泉方言入声舒化的结构机制

孙雪婷
同志社大学大学院生

1.研究背景

我们将音段层面韵尾具备[+爆破性]特征，超音段层面声调具有短促性，这样的音节定义为入声音节。在现代汉语方言中，入声韵尾普遍处于从弱化到消失的演变进程中，当[-ʔ]消失时，意味着入声不再短促，即发生了入声舒化的现象。

基于上述对入声音节的分析，“入声舒化”的概念我们也需要从音段层与超音段层两个维度加以界定。入声舒声化涉及韵尾特征与声调时长特征的协同变化：就韵尾为[-ʔ]的入声音节而言，音段层面上，具备[+爆破性，+声门性]特征的塞音韵尾发生脱落；超音段层面上，声调时长延长，不再表现短促特征，二者协同变化，共同构成入声舒化现象(参照：平山久雄2012、王力2014等)。

2.问题提起

入声舒化后的去向可分为两类：或归并至既有舒声调类，或独立成调。本研究关心的问题在于：何种因素决定了入声舒化后的声调归属？

3.先行研究

既往研究普遍认为：入声舒化遵循“调型调值相似性”原则——入声调若与某一舒声调类在调型调值上相近，则归并至该调类；若与各舒声调类均不相近，则独立成调。例如，豫北晋语淇县方言的入声为24ʔ，舒化后归并至同为升调的阴平35调（支建刚2020）；湘南官话白牙市方言的舒声体系中无降调，入声舒化后的42调遂成为独立调。然而，下述两类现象提示，仅凭调型调值相似性，尚不足以解释入声舒化的全部去向。

第一类是入声调与舒声调的调型调值相似，舒化后却仍独立成调。对此，蒋平、谢留文（2004）指出，“语音构造对声调能否合并具有制约作用”，即音段特征可能阻碍声调归并。例如，赣语星子方言的阳平为声母送气的24调，舒化后的入声为声母不送气的35调。二者虽同属升调，后者却因不满足该方言“阳平字声母须为送气音”的条件而保持独立。

第二类是入声调与舒声调的调型调值不相似，舒化后却归入舒声调。对于这类现象，部分研究将其归因于周边强势方言的影响，即横向传播的作用(曹志耘2002等)。然而，强势方言影响弱势方言的具体机制何在、证据为何，先行研究均未论及。

4.提案

先行研究多从超音段层面入手，依据声调的相似性考察入声舒化的去向，对舒化过程中音段层面的表现、以及音段与超音段之间的对应关系，则较少论及。有鉴于此，本研究转换考察视点：将视点置于入声一侧，考察入声自身的声调与音段特征如何影响其舒化去向。

本研究在调查豫北晋语温县温泉方言时发现，该方言的入声字今读恰好可为上述视点提供证据。经整理，温泉方言入声字的今读形式可归纳为三类（每类各举4个代表字）：

（1）①骨[kuəʔ^{3ʔ}] 鳖[piæʔ^{3ʔ}] 脚[tɕiʌʔ^{32ʔ}] 药[øiʌʔ^{32ʔ}]

②集[tɕiə^{22}] 猎[liæ^{22}] 国[kuæ^{32}] 廓[kʻuʌ^{32}]

③屈[tɕʻy^{44}] 贼[tsei^{412}] 尺[tʃʻɿ^{52}] 幕[mu^{23}]

①组保留可感知的喉塞韵尾，读入声调；②组与③组均无可感知的喉塞韵尾，但二者的主元音与声调表现不同。②组与①组具有相同的主元音类别，声调在调型调值上也相近，舒化后独立成调；③组则不保留上述主元音类别，声调归并至既有的舒声调类。可见，同样失去可感知的喉塞韵尾，并不意味着其音段与超音段结构发生了相同的变化。

为解释上述差异，本文提出[-ʔ]的“隐性存在”阶段及入声舒化双路径假说。

第一，[-ʔ]的“隐性存在”阶段：

本文假设，喉塞韵尾的语音实现与其音系槽位并不必然同步消失。[-ʔ]弱化至无法直接感知时，相关音系槽位仍可能保留，本文将这一状态记作[-ø]。据此，可区分三种结构状态；在渐进性弱化的情况下，它们可排列为：“显性存在”（overt realization，[-ʔ]）→“隐性存在”（covert realization，[-ø]）→“结构缺失”（structural absence，ø）。

本文进一步假定，[-ø]是[-ʔ]弱化后的结构性残留：它不再具有可感知的语音实现，失去[+爆破性]特征，但仍保留[+声门性]特征。在本假说中，这一残留特征的作用表现为：音段层面上，限制前置元音为非高元音；超音段层面上，使声调与原入声调保持相似性。

因此，“隐性存在”（[-ø]）与“结构缺失”（ø）须严格区分：前者保留韵尾的音系槽位及相关特征，只是不再具有可感知的语音实现；后者则意味着该韵尾槽位已不再保留。

第二，入声舒化双路径：

以韵尾的音系槽位是否保留为标准，本文区分两条舒化路径。二者均以保留可感知喉塞韵尾的“显性存在”状态为起点，但所呈现的结构保留程度不同。

路径 1：[-ø]形式保留，即不完全脱落。当[-ʔ]失去语音感知后，仍以[-ø]的形式占据音系槽位，即进入“隐性存在”阶段。在本假说中，[-ø]的制约作用使主元音仍然保持同[-ʔ]前的主元音一致，声调与入声调保持相似性。在温泉方言中，这类形式表现为独立成调。

路径 2：[-ø]形式缺失，即完全脱落。[-ʔ]彻底脱落，不占据音系槽位，即“结构缺失”。因[-ø]的制约作用不复存在，主元音变为 β，声调归并至舒声调类。

两条路径不是时间上的先后阶段，而是舒化可以选择的两条出路：一个方言可以只行其一，也可以两路并行。就温泉方言而言，第 2 组对应路径 1，第 3 组对应路径 2。两条路径可形式化为：“$\alpha ʔ^{Tʔ} \rightarrow \alpha ø^{Tʔ'}$” 、“$\alpha ʔ^{Tʔ} \rightarrow \beta^{T}$”。其中，α 表示与[-ʔ]或假定的[-ø]具有同现制约关系的主元音类别，β 表示不受该项制约的主元音类别；^{Tʔ} 为入声调，$^{Tʔ'}$为与入声调相近的声调，^{T} 为舒声调。

下文首先考察温泉方言中支持“隐性存在”假说的音段与超音段证据，进而分析其舒化路径，最后结合清化、磨头方言，讨论这一分析的适用范围。

5. 温泉方言数据分析

5.1 温泉方言的地理位置

温泉方言分布于河南省焦作市温县中部的温泉镇一带，属晋语邯新片获济小片。

5.2 温泉方言“隐性存在”阶段的证据

本节从音段分布、声调表现及二者的共变考察“隐性存在”假说的解释力。

证据 1(音段分布)：

[ə、æ、ʌ]三个元音出现的语音环境有二：或带韵尾，或不带韵尾,带韵尾时，该韵尾只能是[-ʔ]。这三个单音是音素，还是某音位的变体，难以判定。值得注意的是，[ə、æ、ʌ]与[-ʔ]之间存在很强的选择关系，据此可作如下假设：只要[ə、æ、ʌ]出现，韵尾位置就有保持语音感知的[-ʔ]形式出现，或者以失去语音感知、但仍占据音系槽位的[-ø]形式出现。

在这一假设下，温泉方言五个元音音素/i、y、u、ɤ、a/与[ə、æ、ʌ]在韵尾环境中呈互补分布，且[ə、æ、ʌ]均具有[-tense]这一区别特征。由此可以确认：[ə、æ、ʌ]是[-ʔ]前的音位变体。变体条件如下：

ɤ→ə、ʌ/____C[+爆破性，+声门性] 、a→æ/____C[+爆破性，+声门性]

反之，若不假设[-ø]形式占据该音系槽位，[ə、æ、ʌ]的性质便无法判定。这从反面说明，“隐性存在”阶段是存在的。

证据 2(声调表现)：

通过 praat 语音实验，确认出温泉方言共有 8 个声调：44、412、52、23、22、32、3ʔ、32ʔ。其中，22 调与 32 调虽读于无喉塞韵尾的舒声调，但对应古入声字，并且语音实验图显示，二者与清入 3ʔ、浊入 32ʔ在调型调值上相似，据此判定：22 调与 32 调分别为清入 3ʔ、浊入 32ʔ的独立调。

以 22 调为例：它与清入 3ʔ同属低调域的平调；舒声调类中虽有平板型的阴平 44 调，22 调却未归并其中，而是与入声调保持更高的相似性。需要说明的是，32 调与 22 调是保留 α 主元音的声调。若假设[-ø]作为[-ʔ]的残留形式仍然存在，并对声调保持制约作用，则 32 调、22 调与入声调的相似性即可得到解释。因此，这种声调上的相似性，为[-ø]形式的存在提供了超音段层面的证据。

证据 3(音段-超音段共变)：

上述[ə、æ、ʌ]仅见于古入声字的今读，是前文界定的与[-ʔ]、[-ø]有同现制约关系的 α 主元音。本文按声调类别，将温泉方言 561 个古入声字的今读整理为三类（每类列举 10 字，余字从略）：

(2)①骨[kuəʔ^{32}] 突[tʻuəʔ^{32}] 鳖[piæʔ^{32}] 泽[tsæʔ^{32}] 搁[kʌʔ^{32}]
俗[ɕyəʔ^{32ʔ}] 褥[ʒuʌəʔ^{32ʔ}] 虱[sæʔ^{32ʔ}] 脚[tɕiʌʔ^{32ʔ}] 药[øiʌʔ^{32ʔ}] （共 23 字）

②六[luə^{22}] 日[ʒɿə^{22}] 铁[tʻiæ^{22}] 雪[ɕyæ^{22}] 八[pʌ^{22}]
族[tsuə^{32}] 国[kuæ^{32}] 墨[mæ^{32}] 窄[tsæ^{32}] 扩[kʻuʌ^{32}] （共 199 字）

③粥[tʃou^{44}] 贼[tsei^{412}] 尺[tʃʻɿ^{52}] 眨[tʃa^{52}] 辣[la^{23}]
只[tʃɿ^{44}] 毒[tu^{412}] 匹[pʻi^{52}] 玉[øy^{23}] 幕[mu^{23}] （共 339 字）

①组读入声调，②组读独立调，③组读舒声调。②组的主元音都有[ə、æ、ʌ]，声调和入声调相似，③组没有主元音[ə、æ、ʌ]，声调就和入声调没有对应关系了。这说明[ə、æ、ʌ]的出现肯定是有条件的，此时若不假设[-ø]，就无法解释[ə、æ、ʌ]的存在。 [-ø]是[-ʔ]弱化情况下的变体，[+声门性]特征要求前置元音是非高元音，所以同它绑定的[ə、æ、ʌ]三个主元音还在，声调也和①组的入声调相似，这两点说明假设[-ø]形式是合理的。三类语音形式的抽象模型记作：$\alpha ʔ^{T_ʔ}$ 、$\alpha ø^{T_{ʔ'}}$、β^{T}。

5.3 温泉方言入声舒化路径分析

第 2 组例字，入声调舒化后独立成调，对应“[-ø]形式保留”的路径（路径 1：$\alpha ʔ^{T_ʔ} \rightarrow \alpha ø^{T_{ʔ'}}$）。

[-ʔ]在音系槽位上保留为[-ø]，在[-ø]对声调的制约作用下，声调与入声调保持相似，从而独立成调。

第3组例字，入声调舒化后归并至舒声调类，对应“[-ø]形式缺失”的路径（路径2：$\alpha ʔ^{T?} \rightarrow \beta^{T}$）。[-ʔ]完全脱落，音系槽位亦不保留，失去韵尾制约的声调遂归并至舒声调类。

6. 其他方言旁证

6.1 清化、磨头方言的地理位置

清化方言和磨头方言均属晋语邯新片获济小片，分布于河南省焦作市博爱县。其中，清化方言位于县境中部，磨头方言位于县境西部。

6.2 清化方言的旁证

6.2.1“隐性存在”阶段的证据

证据4：清化方言音段与声调的对应关系

音段层面上，清化方言也存在α主元音，为[ə、æ、ɑ]。超音段层面上，praat语音实验确认出7个声调：阴平54、阳平312、上声52、去声232、清入独立调32、清入3ʔ、浊入232ʔ。本文将清化方言564个古入声字的今读形式整理如下：

(3) a.十[səʔ^{3ʔ}]　七[tɕʻiəʔ^{3ʔ}]　色[sæʔ^{3ʔ}]　削[ɕyæʔ^{3ʔ}]　瞎[ɕiɑʔ^{3ʔ}]
级[tɕiəʔ^{232ʔ}]　热[ʒɿəʔ^{232ʔ}]　虐[ɳ̩yæʔ^{232ʔ}]　八[pɑʔ^{232ʔ}]　药[øiɑʔ^{232ʔ}]　（共74字）

b.德[tə^{32}]　一[øiə^{32}]　蛰[tsæ^{32}]　窄[tsæ^{32}]　脚[tɕiɑ^{32}]
福[fə^{32}]　吃[tsʻɿə^{32}]　北[pæ^{32}]　法[fɑ^{32}]　夹[tɕiɑ^{32}]　（共123字）

c.蜜[miə^{232}]　绿[lyə^{232}]　月[øyə^{232}]　脉[mæ^{232}]　猎[liæ^{232}]
鹿[luə^{232}]　力[liə^{232}]　密[miə^{232}]　麦[mæ^{232}]　铁[tʻiæ^{232}]　（共37字）
（突[tʻuə^{54}]　极[tɕiə^{54}] ）（共5字）

d. 叔[fu^{54}]　急[tɕi^{312}]　匹[pi^{52}]　捋[ly^{52}]　剔[tʻi^{232}]
鸭[øia^{54}]　乏[fa^{312}]　塔[tʻa^{52}]　错[tsʻuo^{232}]　六[liou^{232}]　（共325字）

与温泉方言相比，清化方言多出c组这一类型。c组声调有232和54，d组也有，但因为c组和d组的主元音不同，所以二者不属同一类别。c组是α主元音，b组也是α主元音，有α在的音节，其声调都和入声调具有相似性，且声调是限定性的，说明[-ø]形式在清化方言音系结构中是存在且起作用的。那么c组和d组有一致的声调该如何解释？我们可以假设可能最初舒声调和入声调就是一致的，这样一来入声舒化后就直接归并至相似的舒声调类。既有研究把该类情况看成是完全舒化，音段情况均未提及，但在本研究中因为关注到了韵尾的[-ø]形式，所以并不把c组看做是完全舒化的字。

6.2.2 清化方言入声舒化路径分析

清化方言的材料提示，韵尾的结构变化与声调归属的变化需要分别考察，并结合具体的调型调值关系加以解释。

浊入232ʔ与去声232的对应提示：在本文假说中，当入声调与某一舒声调在调型调值上一致时，舒化形式即使仍保留[-ø]，也可能归并至该舒声调类。因此，保留[-ø]不必然导致独立成调，声调归并舒声调也不必然意味着韵尾槽位完全消失。

6.3 磨头方言的旁证

6.3.1“隐性存在”阶段的证据

证据 5：磨头方言音段与声调的对应关系

音段层面上，磨头方言也存在 α 主元音，为[ə、æ、ʌ]。超音段层面上，Praat 语音实验区分出 4 个声调：阴平 55、阳平 313、上声 51、去声 25。本文整理了磨头方言 570 个古入声字的今读形式。为便于与清化方言比较，以下沿用 a—d 的分组标记；其中 a、b 两类在磨头方言中均无对应形式。

(4) a. －

b. －

c.舌[ʃə^{313}]　极[tɕiə^{313}]　叠[tiæ^{313}]　灭[miæ^{313}]　杀[sʌ^{313}]

骨[kuə^{25}]　七[tɕʻiə^{25}]　北[pæ^{25}]　虱[sʌ^{25}]　客[kʻʌ^{25}]　（共 263 字）

d.鸭[øia^{55}]　毒[tu^{313}]　哕[øyɛ^{51}]　眨[tʃa^{51}]　孽[ȵiɛ^{25}]

叔[ʃu^{55}]　局[tɕy^{313}]　给[kei^{51}]　轧[øia^{25}]　恶[øɤ^{25}]　（共 307 字）

磨头方言的共时音系中已无入声调，但 c 组的[ə、æ、ʌ]仍仅见于古入声来源的音节，并集中对应阳平 313 与去声 25。这种“音段有标记、分布受限制”的状态说明：[-ø]在音系中的制约效力仍在生效，从而为“隐性存在”阶段提供旁证。

6.3.2 反推磨头方言入声调

磨头方言已经不存在入声调了，根据清化方言 c 组的情况“音段层保留[-ø]的形式，超音段层与入声调保持相似性，与舒声调调值一致”的特征，我们可以暂且推测磨头方言历史上可能存在分别接近曲折调与升调的两类入声调。入声舒化时，按调型的相似性归入了 313 和 25 这两个调类。

7. 结论

本文以温泉方言为中心，结合清化、磨头方言的材料，提出喉塞韵尾[-ʔ]在失去可感知的语音实现后，其音系槽位仍可能以[-ø]的形式保留。在这一假说中，韵尾的结构性残留通过主元音类别与声调对应体现出来：音段层面上，α 主元音得以保留；超音段层面上，与原入声调保持一定的相似性。温泉方言呈现了保留槽位与不保留槽位的两类舒化结果，而清化、磨头方言进一步提示：入声调归并至舒声调类，并不必然意味着韵尾槽位已完全消失。因此，解释入声舒化的去向，须同时考察韵尾的音系槽位是否保留，以及入声调与既有舒声调之间的调型调值关系，并区分“声调归并”与“音系结构上的完全脱落”，本研究为上述联系提供了结构性解释。

参考文献

曹志耘. 吴徽语入声演变的方式[J]. 中国语文，2002，(5).

平山久雄. 汉语语音史探索[M]. 北京：北京大学出版社，2012:131.

蒋平，谢留文. 古入声在赣、客方言中的演变[J]. 语言研究, 2004，24(4).

王力. 汉语语音史[M]. 北京：中华书局，2014.

支建刚. 豫北晋语语音研究[M]. 上海:中西书局，2020.

再論閩南語*tʃ-組聲母的擬測

鄭曉峯
國立中央大學副教授

前言

自羅杰瑞教授仙逝後十數年間，學界的老幹新枝踵繼前賢，比較閩語的工作得到更深入的發展。但其中一些成果的理論前提與論證是否恰當，需要檢證。首先需要釐清的是，討論閩語的共性時，如何看待福建內陸方言（狹義的閩北方言、閩西北方言、閩中方言、大田尤溪兩縣，範圍可擴及連城鄉間、龍巖萬安等地區）反映的特徵。以下陳述，見於歷年綜論福建省內方言情況的大要：

(1) 就福建省境內而言，東部沿海地帶平常認為是閩語的中心，西部地帶是客家話，中部地帶是具有某些客家話性質的閩語地區。從東望西，閩語的成分逐漸減少，客家話的成分逐漸增多。

—《中國語言地圖集》B12 圖的說明

(2) 八、邵將區　　本區兼具閩語、贛語的特點，包括福建省西北角富屯溪流域的四個市縣。

— 李榮 1989，柒，漢語方言分區分片一覽表，256 頁

(3) 邵武、光澤、建寧、泰寧歸為「閩贛方言」，順昌、將樂定為閩方言和客贛方言過渡區。

— 李如龍 1997《福建方言》

(4) 從沿海往內陸望去，越近武夷山，客贛方言色彩越濃。

— 張光宇 2014，什麼是閩南話？

上述概括雖然大體無誤，但吾人已知福建內陸方言具有一些未見於沿海閩語、浙南吳語、粵東客語、撫州片贛語的語音、詞彙等特徵（Cheng 2012），這些語音和詞彙特徵在閩語從沿海往內陸擴散之前，已經棲息於八閩內陸。在執行閩語內部的比較時，什麼樣的音系成份及詞彙能夠上溯至共同閩語，需要細心檢視，不能機械地一體適用：

(5)

編號	內陸	閩東	閩南	性質	例	共同閩語之特徵
1	＋	＋	＋	特徵詞	囝兒子	是
2	－	＋	＋	特徵詞	[t^hiaŋ5]痛	是
3	－	－	＋	特徵詞	芳香	否
4	＋	－	－	特徵詞	疾痛	否
5	＋	＋	－	韻母特殊	去[k^ho5]	?
6	＋	＋	－	韻母特殊	厝[ts^hio5]房子	?
7	＋	－	－	聲母特殊	弱化聲母	?
8	＋	－	－(?)	聲母保守	*tʃ- (章組)	可能是

從上表可知，暗默的潛規律是（[1,2]，即三區俱全或沿海兩區皆有）屬共同閩語的成份無疑，而只限閩南區存在的[3]和僅限內陸閩方言存在的[4]，在詞彙上一律剔除。音韻上[7]若能解釋

成僅於內陸區產生，也應排除（鄭曉峯 2004）；[5,6]閩南似乎是較新的層次，但北部兩區的一致形式是否可直接視為共同起點仍有可商。[8]承襲了 Norman (1974) 以降的看法，秋谷裕幸（如秋谷 2019, 2022, 2025）凸顯了內陸閩方言聲母 ts-,tʃ-系二分的態勢是保守的現象，各地反映雖有參差，應該承認部份可以上溯至共同閩語。但以下秋谷（2023）討論閩南西北邊區之大田、漳平永福、龍巖三地章組字無-i-的現象時認為是共同閩語*tʃ-系聲母使其脫落；曾南逸（2022）推而廣之，主張閩南漳系有-i-、泉系無-i-之分野同樣為*tʃ-系聲母所致。然則此說和秋谷教授上述情況（龍巖韻母基本是漳系，但章系白讀字介音脫落）正好相反。以下將分兩節闡述，這幾篇論文牽涉到閩南方言的論斷是否成立。

一、內陸閩語精組字讀如章組的現象

秋谷裕幸（2019）以豐富的田野材料，加上陳筱琪（2013）對「笑、蓆」的觀察，歸納出在全閩語的範圍內六個讀如章組的精組字「笑、像、惜疼愛、蓆、粟稻穀、筅」，產生了 tsi- > tɕi-> tʃi > tʃ-) 的顎化零星音變，而-i-介音後的主要元音，多源自後圓唇元音。以下不處理閩北讀*t^h-的「筅」字，在「笑、像、惜、蓆、粟」後面添增古章組字「少、石、尺」以及'吃'、'穿衣'納入比較。'穿衣'本字不明，光澤讀如邪母，而邵武ɕ-、順昌ʃ-、閩中型 tʃ-（沙縣蓋竹）則讀如章組。連城姑田、龍巖萬安不屬於客家方言，而是閩南、閩中、客家之間的過渡方言。龍巖前五字除「惜」外、後五字均丟失-i-介音（比較廈門 ts^hio5、ts^hiũ6、ts^hioʔ8、siɔk7[漳浦，ts^h- > s-]、tsio3、tsioʔ8、ts^hioʔ7、tsiaʔ8、siɔŋ6[漳浦 ts^h- > s-]）；稻穀表中三地已說「穀」不說「粟」。（有[]者取自秋谷 2019 一文）

(6)

	順昌	蓋竹	光澤	姑田中堡	萬安松洋	龍巖	漳平雙洋
笑	ts^hau5 [$tʃ^h$au5]	$tʃ^h$ɯ5	siau5	---	$tʃ^h$ɯ5	ts^ho5	ts^hɤ5
像	[ts^hiɔ̃6]	$tʃ^h$õ4	$tɕ^h$iɔŋ3	ts^hiaŋ6	ts^hioŋ6	ts^hõ4 象	ts^hŋ6
惜	[ts^hio2]	$tʃ^h$iɯ7	---	---	siɯ6	sio7B	(seʔ7)
蓆	ʃioʔ7	$tʃ^h$ɯ4	---	tsiɔʔ8	---	ts^ho4	ts^hɤ6
粟	$tʃ^h$u2	$tʃ^h$y7	---	---	---	ts^hok7	ts^hoʔ7
少	ʃau3	ʃɯ3	ɕiau3	ʃao3	ʃɯ3	tso3	tsɤ3
石	ʃioʔ7	ʃiɯ4	ɕyɔ8	ʃɔʔ8	ʃaʔ8 (<*o_1)	tso4	tsɤ6
尺	$tʃ^h$o2	$tʃ^h$ɯ7	$tɕ^h$yɔ7	---	$tʃ^h$a6 (<*o_1)	ts^ho7B	ts^hɯ7
'吃'	ʃiɛʔ7	ʃe4 (乞~)	ɕie8	ʃiʔ8	ʃiʔ8	tsa4	tsa6
'穿衣'	ʃuŋ6	tʃœŋ5	t^hiuŋ6(<ts^h-)	tʃɔŋ6	tʃaŋ6 (<*uŋ)	ts^hoŋ1	---

(7) (6)以外之內陸方言點反映上述現象者：

笑　泰寧 ts^hu5、明溪 ts^hau5

惜　光澤寨里[$tʃ^h$ɔ7]

粟　泰寧 ts^hu3、將樂 ts^ho3、尤溪 ts^hø7、大田 ts^hoʔ7

'吃'　尤溪 ɕia1

'穿衣'　邵武 ɕiuŋ6、將樂 ʃɤŋ6、明溪 sɤŋ6、永安 tʃiam5、大田 tsoŋ1

光看後五字，筆者早先的想法和陳筱琪雷同，會認為龍巖方言丟失-i-介音是因語言接觸或語言轉移（客方言話者講閩南語時的母語干擾）造成的，不能逕認為源自原始閩語*tʃ-系聲母互動的結果。但「肇因於客方言的語言接觸」不能解釋包括非章組字「笑象蒂粟」等亦丟失-i-介音的現象。秋谷（2019）的假說補上了這一塊，又提出兩點反問，是歸諸於和客家話接觸不能圓滿回答的疑點：一是-i-介音的丟失並未貫徹到龍巖、漳平鄉間及大田方言其他韻類，二是大田方言周邊無客家話，而龍巖方言周邊並無閩中區方言分布。但筆者會倒過來解讀，這仍然可以解釋為後到此區的閩南方言接觸到業已分布在大田到龍巖間的 substratum，即「早期福建內陸方言」的話者掌握閩南方言時所留下的母語干擾。這個「早期福建內陸方言」在音系上的一個特點就是古章組字（已合併古精組「笑像惜蒂粟」等字）有保留*tʃ-，所以在解釋上沒有問題；再者我們看到像龍巖方言失去-i-介音的全屬白讀層，不牽涉文讀層（文讀層丟失-i-蒙受的可能是官話系統的影響，此處不論），表示語音干擾的程度範圍有限；且下一節我們會談到在共時層面，閩南核心區內部古章組字除極少數轄字外，漳泉在-i-介音的保留上沒有分別，龍巖-i-介音的丟失筆者不認為是原本共同閩語*tʃ-系聲母發動音變的結果。下表為古章組其他字的情形，這可視為「早期福建內陸方言」和後至的閩西南客家話加強鞏固的結果。

(8)

	照	樟	上	尚	燭	叔	隻	聲
漳州（漳浦）	tsio5	tsiõ1	tsiõ6	siõ6	(tsiɔk7	tsiɔk7)	tsiaʔ7	siã1
龍巖	tso5	tsõ1	tsõ1	sõ1	tsok7	tsok7	tsa7B	sã1
四堡	tʃo5	tʃɔŋ1	ʃɔŋ1	ʃɔŋ6	tʃəu7	ʃəu7	tʃɔ7	ʃaŋ1

二、漳泉閩南方言古莊、章組字的洪細對應

依照上一節的分析，-i-介音的丟失①發生區域在大田、漳平鄉間至龍巖一帶閩南方言跟其他內陸方言接壤的過渡地帶，②範圍僅限閩南白讀層讀音，屬於早期有限接觸，並非音系內部的驅動力導致的全局音變，故曾南逸（2022）一文中表一古章組字「泉漳潮-i-：龍-Ø-」的論據筆者認為不能成立。同理，表二莊組字（如下列(9)）不具-i-介音的成因似乎較為單純：客方言或福建內陸方言的干擾。「澀」客方言讀如 sep7，「數帳」萬安松洋 si5 本來就沒有介音。

(9) 澀　龍巖 sap7 ≠ 泉漳 siap7、潮 siəp7
　　數　龍巖 sau5 ≠ 泉漳 siau5、潮 sieu5

曾文的觀察唯一可能成立的是表四「漳龍-i-：泉潮-Ø-」的三個詞彙，本字均不明，這也是調查閩南語方言差的時候必問的詞項：

(10) ‘均勻’　漳龍 tsiau2 ≠ 泉潮 tsau2
　　‘調整、挪移’　漳龍 ts^{h}iau2 ≠ 泉潮 ts^{h}au2
　　‘摔’　漳 siak7 ≠ 泉 sak7

若表四的閩南內部對應看做來自共同閩南語*ts-以外的另一組滋嘶音(sibilant)*tʃ-，則漳龍保留-i-介音，而泉潮則丟失之。以此音韻對應為尺度，曾文表三列出例字，認為龍巖或漳州有-i-介音，而泉潮無之者，也來自共同閩南語的*tʃ-。表三九個例字「臭、針、汁、十、蝨（~

母）、蝨（木~）、瘖瘦、銼銹、雙」，以下分四組討論之：

① 「針、雙」兩字，② 深攝諸字，③「蝨、瘖」，④「臭、銼」等字。

2.1「針、雙」　表面上是單純的-i-之有無，但參照洪惟仁（2023），兩字的擬測分別是*tsiam 及*syaŋ，有極保守的新竹市香山蚵寮方言讀為 tsɯam1, sɯaŋ1，以及南管鷓鴣音 tsiam 可以佐證。泉潮、漳之別的音變過程為：「針」*tsiam > tsam, *tsiam > tsiam，「雙」*syaŋ > siaŋ > saŋ, *syaŋ > siaŋ。若順曾文的理路，則「雙」字也可能來自*ʃ-。而(10)的三例就個人所知，沒有帶-i-的報導。

2.2「針汁十」等深攝諸字，跟泉漳廈有所差異。在龍巖、漳平鄉間及永定孔夫，漳廈讀-im/p 的往往讀為-iam/p。「針汁深十」屬章組字，但僅「深」丟失-i-介音。

(11)	林	心	沉	針	汁	深	十	入	金
龍巖	lim2	sim1	tim2	tsiam1	tsiap7	ts^{h}am1	tsiap8	liap8	kim1
龍巖適中	liam2	siam1	tiam2	tsiam1	tsiap7	ts^{h}am1	tsiap8	liap8	kiam1
漳平雙洋	liaŋ2	siaŋ1	tiaŋ2	tsiaŋ1	tsiaʔ7	ts^{h}aŋ1	tsiaʔ8	liaʔ8	kiaŋ1
永定孔夫	liaŋ2	siaŋ1	tiaŋ2	tsiaŋ1	tsiaʔ7	ts^{h}aŋ1	tsiaʔ8	----	kiaŋ1

2.3「蝨、瘖」兩字增生介音，前者在不同詞彙讀音有些地點有別：「蝨母」往往因後字雙唇塞音聲母而產生逆同化 (sat > sap)，「木蝨」則無變化。「蝨(~母)」讀 siap7 的只零星見於兩處，很難說是共同閩南語章組聲母所引起的。龍巖「蝨(木~)、瘖」平行增生-i-介音，成因不詳，也許不見得跟章組聲母能扯上關係。

(12)	漳州(林)	漳州(市志)	長泰	平和南勝	龍巖
蝨（~母）	sat7	sap7,siap7	siap7	sat7	sap7
蝨（木~）	sat7	sat7	sak7	sat7	siet7
瘖	san3	san3	san3	san3	sian3

2.4「臭、銼」

「臭」帶-i-介音也是一個區域現象，同樣見於龍巖、漳平（包括城關）和永定孔夫（君讀 ts^{h}iau5）及大田（ts^{h}iɔ5）。而「銼」（方言志裡常寫做「銑」）跟「雙」平行，同屬莊組字，龍巖無-i-介音，道理應該與(9)相侔。

(13)	漳州(林)	漳州(市志)	長泰	平和南勝	龍巖
銼	---	sian1	sian1	sien1	san1
雙	siaŋ1	siaŋ1	siaŋ1	siaŋ1	saŋ1

三、結論

總結以上討論，我們認為可以上溯至共同閩南語*tʃ- 系聲母的有：‘均勻’、‘調整、挪移’、‘摔’、「針、雙」五個詞素，其餘的恐怕不能成立。

參考文獻 (摘錄)

縣市志：漳州、三明、永安、順昌
筆者調查：光澤、龍巖（張屏生補充）、連城四堡、漳浦、平和南勝
秋谷裕幸 2019〈閩語中讀如章組的精組字〉,《聲韻論叢》23: 77-98
秋谷裕幸 2022〈原始閩語中的舌葉塞音聲母及其相關問題〉,《語言學論叢》1: 58-86
秋谷裕幸 2023〈原始閩南區方言的*iuk 和*iok 及其相關問題〉,《臺灣語文研究》18.3: 323-345
秋谷裕幸 2025〈原始閩北區方言的舌葉音聲母〉,《語言研究集刊》第三十六輯 49-79
洪惟仁 2023《閩南地區方言地圖集》，台北：臺灣語文學會
陳筱琪 2013《閩南西片方言音韻研究》，國立台灣大學中國文學研究所博士論文
李如龍 2001《福建縣市方言志十二種》，福州：福建教育
林寶卿 1992〈漳州方言詞彙(一)~(三)〉,《方言》151-160, 230-240, 310-312
項夢冰 2004〈閩語古精莊知章組字今讀的分合（描寫篇）〉,《閩西方言調查研究（第一輯）》，321-344 頁，Seoul：新星出版社
徐睿淵 2018〈福建長泰方言同音字匯〉,《方言》3: 317-335
曾南逸 2022〈原始閩語中的*tš-組聲母字在閩南方言中的兩類洪細對應〉,《中國語文》6: 717-720
鄭曉峯 2004〈閩北弱化聲母的來源〉，香港科技大學人文學部報告

Branner, David Prager. 1995. A Gutyan Jongbao dialect notebook. *Yuen Ren Society Treasury of Chinese Dialect Data* 1: 243-338
Branner, David Prager. 2000. *Problems in Comparative Chinese Dialectology -- the Classification of Miin and Hakka*. Berlin: Mouton de Gruyter
Cheng, Hsiao-feng. 2012. The linguistic geography of Inland dialects of Fujian. Paper presented at the ICAG-1, Aoyama Gakuin University, Tokyo.
Norman, Jerry. 1973. The initials of Proto-Min. *JCL* 2.1: 27-36

吳語裡中古以、云、匣母讀擦音現象再探——兼論吳閩語「類與類」的對應

徐愷遠
京都大學 大學院生

1.吳語中的「云匣歸曉」與「清化返濁」理論

吳語中，古匣母字一般讀零聲母，聲調歸派一般與古次濁聲母相同。如：

	紅	閒	後	壞	泥	冷	漏
富陽徐家井	ŋ̍2	ã2	ei6	ua5	n̩i2	lã6	lei5
溫州	ɦoŋ2	ɦa2	ɦau4	va6	n̩i2	liɛ4	lau6
玉山	ɦoŋ2	ɦã2	u4	uai6	n̩ie2	læ̃4	lu6

李榮（1982）提到，一部分古匣母字在吳語裡普遍讀清擦音聲母、陰調類，和古曉母字變化一致，可以總結為「匣母歸曉」。如：

	蝦	蟹	下動詞	莧	花	喜	漢
新登	hɒ1	ha3	hɒ3	hɛ5	huɒ1	ɕi3	hæ̃5
溫州	ho1	ha3	ho3	ɕi5	ho1	sɿ3	ɕy5
玉山	xɑ1	xai3	xo3	xã5	xuɑ1	xi3	xɒ̃5

處衢吳語中，部分古云母字也能看到同樣的現象：

	遠	園	雄
開化	xoŋ3	xoŋ1	xoŋ1
玉山	xoŋ3	kʰoŋ1	-
慶元	xuəŋ3	xuəŋ5	xoŋ5

閩語中，許多古云、匣母字也讀擦音聲母。陳章太、李如龍（1991）將這種現象總結為「云母歸匣」。如：

	遠	園	雨	雲
廈門	hŋ̍3	hŋ̍2	hɔ6	hun2
沙縣	xuĩ3	(yĩ2)	xu4	(yɛiŋ2)
光澤	fien3	fien7	xy3	(vin2)

因此，過去的學者都將處衢吳語中的「云母歸曉」視為「與閩語相近的特徵」。例如羅杰瑞（1990）認為這是江山話「古代與福建屬於同一個大方言區，後來……吳語的特徵漸漸取代了閩語的特徵」後所殘留的閩語成分；鄭張尚芳（1999）則認為這是吳語和閩語「歷史上都是由古江東方言發展出來的」的證據。不過，兩位都只關注了吳閩語之間在聲母上的共性，鄭張尚芳雖然指出二者在聲調陰陽上有別，但未作進一步解釋。此外，鄭張尚芳提出，吳語的「云母歸曉」和「匣母歸曉」相互關聯，反映了同樣的音韻現象，正式將這一系列音韻現象聯繫了起來。

陶寰（2018）更詳細地說明了吳語的這批云、匣母字和閩語之間的關係。除了讀如群母的層次以外，閩語中的古匣母至少還有三個層次，h_1、∅和 h_2，其中讀 h_1 層次的往往是口語常

用詞，而讀 h_2 的則為更晚近來自通語的借詞。在吳語中讀陰調清擦音聲母的古匣母字正好也與閩語中古匣母讀 h_1 層次的字高度一致，因此可以判斷二者有共同的歷史來源。結合吳語與閩語就可以判斷，有「云母歸匣」或「云母歸曉」現象的古云母字歸入的就是匣母的這一層次。如：

	h_1		Ø		h_2	
	蝦	下動詞	紅	閒	紅	閒
玉山	xɑ1	xo3	ɦoŋ2	ɦã2	-	-
廈門	he2	he6	aŋ2	iŋ2	hɔŋ2	han2

為瞭解釋吳、閩語中的這一現象，陶寰（2018）進而提出「清化返濁」說，將這一現象與閩語古全濁聲母讀送氣清音的現象聯繫起來，認為二者屬於同一音變。陶文認為，吳語和閩語曾經存在一個共祖——共同吳閩語，而古全濁聲母在共同吳閩語中發生了系統的清化音變，統統轉變成了清送氣或清擦音聲母，而這批詞在閩語中仍讀陽調，在吳語中讀陰調，稱「共同吳閩語第一次濁音清化」。因此，吳閩語中屬於更早一層的送氣聲母來自共同吳閩語，而不送氣清聲母（閩語）或濁聲母（吳語）則是中古北方方言滲透的結果。他進一步用蒼南蠻話的例子說明在「他控音變」的作用下「返濁」的可能性，猜想吳語中大部分詞都受到「中古北方方言」的影響，透過「返濁」的機制變回了濁音聲母，只有這批讀清擦音的古云匣母字保留清聲母。

「清化返濁」理論存在以下三點困難。第一，聲調陰陽分化和共同吳閩語濁聲母清化的時間順序是什麼，為什麼這批詞在吳語讀陰調卻在閩語讀陽調？第二，蒼南蠻話中只有不送氣聲母會「返濁」，而送氣聲母則不變。而且蒼南蠻話中發生「返濁」現象的詞均讀陽調，存在明確的音變條件，因此可以通過條件音變的形式簡單完成。但是從上述來看，共同吳閩語中清化的結果應該是清送氣聲母，相對更難「返濁」。而且吳語中「第一次濁音清化」的結果讀陰調，與同部位的清聲母完全混同。因此吳語的「清化返濁」的機制是無法像蒼南蠻話那樣用一條條件音變就解釋清楚的。在這種情況下，這一「清化返濁」的他控音變只能是受到「中古北方方言」的影響而發生，凡是在「中古北方方言」中讀濁音的字就「返濁」，反之則不然。但第三，這樣一來就無法解釋為什麼吳語中現在有許多不透明語素甚至有音無字語素讀陽調、濁聲母。如果真的發生過「第一次濁音清化」，那這些語素理應經歷這一音變變為陰調、清聲母，並且無法透過這一他控音變「返濁」。

2.破解「云匣歸曉」——從「蠅」說起

本文認為，事實上「云匣歸曉」這一提法本身就是有問題的。在一些方言點，屬於古平聲的云母字讀清擦音，但是其聲調卻不和曉母平聲字相同，如江山、遂昌、松陽、慶元等地，平聲字「園」等都歸入陰去調，如遂昌/xəŋ5/、慶元/xuəŋ5/等，而不像曉母平聲字那樣歸入陰平調。可以看出，吳語中讀清擦音的云母並不是簡單地「歸曉」了。如果認為「匣母歸曉」與「云母歸曉」是同一個現象的話，那麼同樣也不應該認為匣母讀清擦音的現象是單純地歸入曉母那麼簡單。事實上，能夠看出本調的江山方言的匣母平聲字「蝦」也和「園」一樣讀陰去調而非陰平調。

那麼該如何解釋這一現象呢？其實，吳語中還有一個表現類似的語素——「蠅」。早有學者指出，處衢吳語中，「蠅」也普遍讀清擦音聲母。和云母讀清擦音聲母一樣，以母的「蠅」讀清擦音聲母也被認為是處衢吳語中「閩語的特徵」，羅杰瑞（1990）、鄭張尚芳（1999）都持

這種觀點；而陶寰（2018）也將其作為「第一次濁音清化」的例證。這種觀察無疑是正確的，但是卻鮮有學者論及其在聲調上與古云匣母讀清擦音這一現象之間的特殊關係。不過，可以發現，只要同樣是古平聲字的「蠅」讀清擦音，那麼其在該方言點的聲調歸派就與「園」一致：

	園	蝦	蠅	花
開化	xoŋ1	xo1	ɕiŋ1	xuɔ1
玉山	kʰoŋ1	xɑ1	sɪŋ1	xuɑ1
江山	kʰoŋ5	xɒ5	ɕiɛ̃5	xua1
慶元	xuəŋ5	xɔ̃ 小稱調	ɕieŋ5	xo1

這樣看來，「蠅」與「園」的這類讀音應該可以視為反映了平行的現象，存在平行演變的對應關係。對這一現象有兩種可能的解釋方法——要麼它們在原始吳語中有一組語音性質類似的聲母，要麼它們在原始吳語中有一種特殊的聲調。鑒於古云匣母讀清擦音的現象不止古平聲字有，且古上、去聲字在今天的演變與「園」並不相同，為了不特殊化古平聲的演變，或許採取前一種方法來解釋為宜，即原始吳語中存在一組語音性質特殊的擦音聲母，其搭配平聲時在不同後代方言中至少分別派入了陰平和陰去調；這組聲母不只有一個，因為「蠅」和「園」的聲母顯然不同，但它們都屬於同一組聲母，具有某種共同的特殊語音性質。

「蠅」不按古以母的一般規律讀零聲母，這在吳語中比比皆是，其中「蠅」讀清擦音的現象更是幾乎覆蓋整個內陸吳語，如原始新登/*sɪŋX/、分水/ɕiŋX/、蘭溪諸葛/ɕĩ1/、東陽巍山/xən1/、龍游/ɕiŋ1/等。不過，值得注意的是，除了讀陰調、清擦音的點外，「蠅」讀擦音聲母的方言點中還存在部分點讀陽調，如於潛/zeŋ2/、桐廬窄溪/ʑiŋ2/、新登下港/ʑiŋ2/、淳安/sen2/、遂安/ɕin2/等。這些讀陽調的方言點同樣不能用零聲母的規則演變解釋，同樣應該屬於前述特殊擦音聲母演變的結果。因此，不止「云匣歸曉」的說法並不嚴謹，甚至「以、云、匣母讀清擦音」這一說法都不能很好概括這一現象。不能只稱這組聲母為「清擦音」，而應是由詞彙對應關係確定的聲母類；清、濁只是這一類聲母在不同方言中的今讀形式。

3.吳語裡特殊擦音聲母與閩語「類與類」的對應

目前能夠建立可靠吳閩對應的核心語素，在閩語中均對應擦音聲母；另有若干吳語語素尚找不到可靠的閩語對應。從能夠建立對應關係的語素數量來看，不太可能認為吳語裡的這組特殊擦音聲母與閩語無關。有必要羅列吳語中所有讀這組特殊擦音聲母的語素，並將之與閩語中對應的語素做對比。其中原始閩語的形式參照羅杰瑞的《THE INITIALS OF PROTO-MIN》（Norman 1974）及其手稿《Proto-Min Lexicon》。

對應原始閩語*z聲母的例詞	對應原始閩語*ɣ 聲母的例詞	閩語中找不到對應關係的例詞	讀擦音，但可能不是特殊擦音聲母的例詞
蠅、游	園、遠、雄、緯、蝦、蟹、莧、鱟、下動詞	疣、蹊、猴、候、瘊、黃	回、鮭、胰、{彩虹}、{魚鰓}

礙於篇幅，無法在此一一展開詳細討論所有語素。不過可以看出，吳語這組特殊擦音聲母和原始閩語的*z、*ɣ 兩個聲母存在高度對應關係。在羅杰瑞（Norman 1974）的體系中，*z、*ɣ 兩個聲母都屬於「第 III 類聲母」，同屬此列的還有濁送氣聲母*bh、*dh、*dzh、*džh、*gh和清鼻音聲母*mh、*nh、*ŋh。

本文認為，吳語的特殊擦音聲母與閩語第 III 類聲母的對應關係並非單純的「音與音」的對

應，而是下轄語素都相當一致的「類與類」的對應。

本文所謂「類與類對應」，是指由一組穩定重合的詞彙成員所界定的音類之間的對應；所謂「音與音對應」，則僅指依據今音的清濁、送氣等表面語音特徵建立的對應。陶寰（2018）在論述「清化返濁」理論時，就以處衢吳語中存在部分其他吳語讀濁音聲母的字讀送氣清聲母的現象出發，論證這種清化與閩語古全濁聲母今讀清送氣聲母的現象是對應的。例如筆者調查的新登剪家塢江山話中，就有「病毛~」讀 p^h聲母、「猴」讀 k^h聲母；江山方言還有「槌棒~」讀 ts^h聲母等現象。這種根據語音特徵，如「清送氣」建立起來的對應關係，就是「音與音」的對應關係。但是，各個方言點之間今讀清送氣聲母的古全濁聲母的語素都零星而各不相同，而且這些語素在閩語中都並不讀清送氣聲母。要認為吳語的這一現象與閩語有關相當困難。其原因在於只看到「音與音」的對應，而忽視了「類與類」的對應。在歷史語言學中論及對應關係時，「類與類」的對應關係往往比「音與音」的對應關係更能反映語言之間的音韻史聯繫。同樣地，過去針對吳閩語的這一音韻現象的研究都只關注「云、匣母讀清擦音聲母」這一表層的語音特徵，既沒有注意到它與「蠅」等以母字在方言內部的平行關係，也沒有注意到它與讀濁擦音的吳語方言（如富陽徐家爿：園/ʑyɛ̃2/等）之間的跨方言對應。相比之下，本文提出的吳語的這組特殊擦音聲母與原始閩語第 III 類聲母的對應關係，雖然語音形式有所差異，但所轄語素卻高度一致，才屬於所謂「類與類」的對應關係，更有音韻史價值。

4.吳語特殊擦音聲母的構擬

原始閩語的第 III 類聲母與「濁送氣」相關。然而，如果要在原始吳語音系中導入「濁送氣」類的話，現行的原始吳語聲母體系是很難接受的。

本文認為，這組特殊擦音聲母在原始吳語中可以直接構擬為常態濁擦音聲母*ʑ（對應以母）和*ɣ（對應云、匣母），而且是原始吳語聲母體系中僅有的兩個濁擦音聲母，而其顯得「特殊」只是因為聲母體系中只存在這兩個濁擦音，因此其演變和聲調歸派不與其他聲母平行。在各地吳語中，濁擦音聲母發生了各不相同的演變，在淳安、於潛等方言中保留濁擦音讀法，其聲調也與濁塞音聲母一樣進入對應的陽調；在開化、玉山等方言中清化為清擦音聲母，其聲調和其他清擦音聲母一樣進入對應的陰調；在江山、慶元等方言中也清化為清擦音聲母，但只有上、去聲和其他清擦音聲母一樣進入對應的陰調，平聲則進入陰去調，與清擦音聲母平聲進入陰平調不同。如：

原始吳語	淳安、於潛等	開化、玉山等	江山、慶元等
*ʑ	ʑ	ɕ（平聲進入陰平）	ɕ（平聲進入陰去）
*ɣ	(ɣ)	h/x（平聲進入陰平）	h/x（平聲進入陰去）

但如果這樣認為原始吳語聲母體系只存在這兩個濁擦音聲母，就要解釋對應古從、邪、崇、船、禪母，在現在大多數吳語中讀濁擦音的那些聲母在原始語中該怎麼構擬。陳忠敏（2020）認為，吳語對應古從、邪、崇、船、禪母本土層次的聲母就應該構擬為濁擦音聲母，即*z/*ʑ。這種看法無疑是與本文的構擬衝突的。

其實陳忠敏（2020）已經提供了化解這一衝突的線索。陳文承認，以處衢片、婺州片為代表的一部分內陸吳語對應古船、禪母的聲母都存在讀塞擦音的白讀層。他認為這是與閩語共通的更早期層次。如：

	樹	舌	石	熟
開化	dʑiɯ6	dʑiɛʔ8	dʑiɛʔ8	(ʑyoʔ8)

玉山	dzəɯ6	dʑiɐʔ8	dʑiɐʔ8	dʑiʌʔ8
江山	dʑiɯ6	dʑiɛʔ8	dʑiaʔ8	dʑiɒʔ8
廈門	tsʰiu6	tsiʔ8	tsioʔ8	(sik8)

因此，本文認為這批對應古從、邪、崇、船、禪母的聲母不妨構擬為濁塞擦音聲母*dz/*dʑ，其中*dz 在所有吳語中都已經演變成了擦音 z，而*dʑ 在大部分吳語中演變成了擦音，而在部分內陸吳語中仍然是塞擦音。這一音變應該非常早，因為南北朝時《顏氏家訓·音辭》中就已經有「南人以錢為涎，以石為射，以賤為羨，以是為舐」這樣針對吳人把通語中的塞擦音聲母讀成擦音聲母的批評了。

當然，這種構擬仍然面臨若干尚待解決的問題，如「事」「柿」等古崇母字在發音部位上似乎更接近*dʑ 這組聲母，但在處衢方言中今讀都為擦音而非塞擦音；古船、禪母字也有「船」這樣不太可能是晚近替換的讀擦音的反例。這些語素是否屬於另一歷史層次或原本也是塞擦音、但是由於特定條件引發的擦化，將留待嶝音系統專文來進一步論證。

5.結論

本文以「蠅」為突破口，找到了吳語中傳統上稱為「云匣歸曉」的音韻現象與之存在聯繫，並進一步發現其涉及的一系列語素的聲母在吳語和閩語之間存在「類與類」的對應關係。本文認為，這種對應關係反映了吳語和閩語之間密切的音韻史聯繫。最後，本文認為其反映了原始吳語中濁擦音的分化結果，並為其構擬了原始吳語的形式。

參考文獻

李如龍，2001，《福建縣市方言志 12 種》，福州：福建教育出版社。

周長楫，1991，〈廈門方言同音字彙〉，《方言》1991.2: 99-118。

秋谷裕幸，2003，《吳語江山廣豐方言研究》，東京：好文出版。

秋谷裕幸、趙日新、太田齋、王正剛，2002，《吳語蘭溪東陽方言調查報告》，神戶：神戶外國語大學外國語學部。

徐愷遠，2024a，〈吳語新登方言語音研究〉，復旦大學碩士學位論文。

徐愷遠，2024b，〈吳語新登（下港）方言音系〉，收錄於陳忠敏主編，《吳語研究（第十一輯）》，上海：上海教育出版社。

曹志耘，1996，《嚴州方言研究》，東京：好文出版。

曹志耘、秋谷裕幸、太田齋、趙日新，2017，《吳語處衢方言研究》，東京：好文出版。

陳忠敏，2020，〈再論吳語從邪崇澄船禪母今讀塞擦音/擦音現象〉，《中國語文》2020.2: 131-139。

陳章太、李如龍，1991，《閩語研究》，北京：語文出版社。

陶寰，2018，〈吳閩語云、匣母的讀音和閩語全濁聲母的清化〉，《方言》2018.3: 335-350。

潘悟雲，1998，《溫州話音檔》，上海：上海教育出版社。

鄭張尚芳，1999，〈閩語與浙南吳語的深層聯繫〉，發表于香港科技大學 1999 年 6 月主辦之「第六屆閩方言國際研討會」。

鄭曉峰，2002，〈福建光澤方言〉，國立清華大學博士學位論文。

羅杰瑞，1990，〈江山方言中類似閩語的成分〉，《方言》1990.4: 245-248。

廖如妍，2021，〈臨安地區方言語音研究〉，復旦大學碩士學位論文。

顏之推著，王利器校注：《顏氏家訓集解》，北京：中華書局，2024 年。

李榮，1982，〈從現代方言論古群母一、二、四等〉，收錄《音韻存稿》，北京：商務印書館。

Norman, Jerry. (1974). THE INITIALS OF PROTO-MIN. *Journal of Chinese Linguistics*, 2(1), 27-36.

呉語常州方言における有声破擦音[dz, dʑ]と有声摩擦音[z, ʑ]

楊文錦
大阪大学（大学院生）

現代常州方言は呉語太湖片毘陵小片の代表方言で、呉語の一方言として古代の全濁声母を保存している。本研究は常州方言における有声破擦音（dz と dʑ、以下 dz 類と称す）と有声摩擦音（z と ʑ、以下 z 類と称す）が対立し（1 節）、かつ中古音の声母とも体系的に対応していることを述べ（2.1）、併せてその例外についても論じる（2.2）。

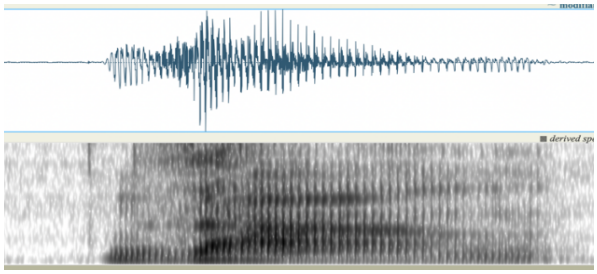
1　有声破擦音（dz 類）と有声摩擦音（z 類）との対立

筆者は常州地域で 46 名の常州方言母語話者に対して方言調査を行い[1]、「**长** /dz-/〔長い〕」と「**尝** /z-/〔味見する〕」[2]、「**操场** /dz-/〔グラウンド〕」と「超**常** /z-/〔通常のレベルをこえる〕」[3]の最小対二組について聞き取り実験を行った。

具体的には、「长」と「尝」について、まず被調査者に朗読させ、次に「长」と「尝」の発音が同じかどうかを尋ねた。その後、筆者が「长」と「尝」のうち任意の一つを選んで当地の発音で読んで聞かせ、被調査者にそれがどちらの語彙であるかを指で指してもらい、その作業を十回繰り返した。「操场」と「超常」についても同じ手順で実験を行った。

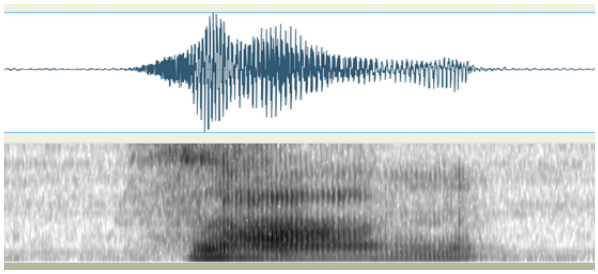
実験の結果、すべての被調査者が「长」と「尝」、「操场」と「超常」の発音は異なると答え、かつ 10 回の聞き取りにおいて被調査者は常に筆者が発音した語彙を正確に判断できた。以上より、**常州方言では dz 類と z 類とは確実に対立している**ことが確認された。

聞き取り実験の結果をさらに分析するため、被調査者の発音を praat で観察し、その結果を以下の図 1 から図 4 に示す（各図は表 1 の 41 番目の被調査者のものによる）。



| dz | ɑŋ |

図 1　「**长**」/dz-/ [dz-]



| s | z | ɑŋ |

図 2　「**尝**」/z-/ [ʐ̊-]

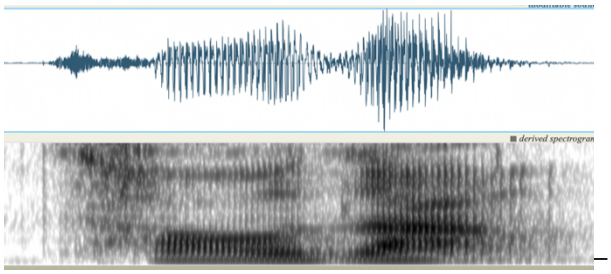
図 1 の波形より、「长」の声母は有声破擦音[dz]だと判断される。また、図 2 の波形より「尝」の声母は有声摩擦音だが、語頭が顕著に無声化していることが観察される。このため、このような単音節語の最小対のみでは、/dz/ と /z/ が果たして破擦音と摩擦音によって区別されているのか、それとも語頭における無声音化の有無で区別されているのか暫時決めがたい。そこで次に、二音節語の組を見てみる。

---

[1] 常州方言の共通特徴を把握するため、調査は常州地域の 23 地点で行い、地点ごとに男女それぞれ一名を調査対象とした。被調査者はいずれも 1965 年以前に生まれ、長期にわたり地元で暮らしている者である。

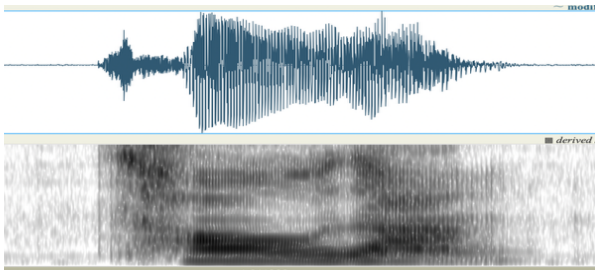
[2] この 2 字は韻母および声調がいずれも同じで、声母のみ異なる最小対であり、かつ単音節語として用いられる。

[3] 「长」、「尝」が第二音節に現れる二音節語の最小対（「…长：…尝」）が見出せないため、いま「操场：超常」を最小対として用いた。「操」と「超」、「场」と「长」、「常」と「尝」はそれぞれ同音である。



| tsʰ | ɑɔ | dz | ɑŋ |

図 3　「操**场**」/dz-/ [dz-]



| tsʰ | ɑɔ | z | ɑŋ |

図 4　「超**常**」/z-/ [z-]

図 3 では「操场」の「场」の声母は有声破擦音[dz]であることが観察される[4]一方で、図 4 では「超常」の「常」の声母は有声摩擦音[z]であることが観察される（ただし無声音化は生じない）。このことより、常州方言の dz 類と z 類の対立は音韻論的にはやはり破擦音と摩擦音の対立であると解釈すべきである。

2　有声破擦音（dz 類）と有声摩擦音（z 類）の歴史由来

2.1　現代常州方言における澄群$_{拗音}$従邪崇常船日$_{文言音}$母の合流先——破擦音か摩擦音か

現代常州方言における有声破擦音[dz, dʑ]と有声摩擦音[z, ʑ]は中古の澄母、群母$_{拗音}$、従母、邪母、崇母、常母、船母、日母$_{文言音}$の八つの声母に由来している。その通時的な対応関係を解明するため、中国社会科学院語言研究所 1981 の『方言調査字表』を参考とし、日常会話から調査用字[5]をできるだけ多く選び、被調査者に一字ずつ朗読してもらい、その合流先について（dz 類か z 類か）統計し、その結果を表 1 に示す。

表 1　現代常州方言における澄母、群母$_{拗音}$、従母、邪母、崇母、常母、船母、日母$_{文言音}$の合流先（dz 類、z 類）

被調	澄母 25 字		群母 10 字		従母 29 字		邪母 12 字		崇母 13 字		常母 20 字		船母 13 字		日母 6 字	
查者	dz 類	z 類	dz 類	z 類	dz 類	z 類	dz 類	z 類	dz 類	z 類	dz 類	z 類	dz 類	z 類	dz 類	z 類
1	15	0	6	0	1	23	0	10	2	9	3	16	1	10	0	4
2	25	0	10	0	2	26	0	12	5	8	3	17	0	12	0	6
3	22	1	10	0	1	27	0	11	4	9	3	17	1	12	0	6
4	23	0	9	1	8	16	0	10	4	9	4	15	1	12	0	6
5	22	0	10	0	2	26	0	12	4	9	2	18	1	12	0	6
6	21	1	10	0	2	23	0	12	4	9	4	15	1	12	0	6
7	25	0	10	0	2	27	0	12	5	7	2	18	1	12	0	6
8	21	0	10	0	1	27	0	12	4	9	1	19	0	12	0	6
9	22	0	10	0	2	22	0	12	3	9	2	15	1	12	0	6
10	23	0	9	0	3	26	0	11	2	10	2	18	0	12	0	6
11	22	3	10	0	0	26	0	12	4	8	3	16	1	12	0	6
12	15	1	8	0	2	24	0	11	4	9	1	19	1	10	0	5
13	23	1	9	0	1	28	0	12	2	10	3	16	1	12	0	6
14	22	0	10	0	0	27	0	12	4	9	1	18	1	12	0	6
15	24	0	10	0	1	28	0	12	4	9	2	18	1	12	0	6
16	22	2	10	0	1	27	0	12	4	9	2	18	0	12	0	6
17	25	0	9	0	1	27	0	12	2	11	2	18	0	12	0	6
18	23	2	10	0	1	28	0	12	4	9	1	18	0	12	0	6
19	24	0	10	0	1	28	0	12	4	9	3	17	1	12	0	6
20	22	1	10	0	2	27	0	12	3	8	3	17	1	12	0	6
21	24	0	10	0	1	28	0	12	3	10	1	19	1	12	0	6

[4] 図 3 上（波形図）において「场」の声母部分が極小化しているため破擦音（[dz]）であると判断できる。図 4「常」の声母部分（[z]）と比較されたい。

[5] 澄母　澄 茶 除 储 厨 柱 住 池 遲 持 治 重 潮 趙 绸 站 沉 传 陈 侄 长 场 丈 撞 郑
群母　技 近 渠 骑 旗 桥 旧 求 琴 穷
従母　从 坐 造 聚 财 在 齐 瓷 自 曹 就 蚕 杂 潜 集 钱 前 截 全 绝 尽 存 昨 墙 匠 嚼 贼 族 暂
邪母　徐 续 词 袖 寻 象 像 随 俗 谢 斜 习
崇母　崇 柴 床 愁 锄 状 查 助 士 事 柿 炸 闸
常母　常 时 垂 纯 尝 是 上 受 石 竖 辰 成 承 社 绍 善 市 视 十 熟
船母　船 射 唇 顺 神 乘 赎 实 舌 食 蛇 绳 示
日母　如 入 惹 任 然 弱

22	23	0	10	0	1	26	0	11	4	9	3	17	1	12	0	6
23	24	0	9	0	1	28	0	12	3	10	3	16	1	12	0	6
24	19	1	7	0	2	23	0	9	3	9	4	16	1	12	0	5
25	25	0	10	0	2	27	0	11	4	9	2	17	0	12	0	6
26	25	0	9	0	1	26	0	11	3	10	2	18	1	12	0	6
27	22	0	10	0	1	28	0	11	3	10	3	17	1	12	0	6
28	23	0	10	0	2	25	0	12	3	9	1	19	0	12	0	6
29	23	2	10	0	1	28	0	12	3	10	2	18	1	12	0	6
30	24	1	10	0	1	28	0	12	3	10	2	18	1	12	0	6
31	25	0	9	0	1	28	0	12	2	11	2	18	1	12	0	6
32	23	0	9	0	2	27	0	12	4	9	3	17	1	12	0	6
33	23	0	10	0	1	27	0	12	2	11	2	18	1	12	0	6
34	24	0	10	0	1	27	0	12	4	9	2	18	0	13	0	6
35	24	1	10	0	2	26	0	11	3	10	2	17	1	12	0	6
36	25	0	10	0	1	28	0	12	6	7	2	18	0	12	0	6
37	23	1	10	0	1	26	0	12	1	12	1	19	0	12	0	6
38	23	0	10	0	1	28	0	12	3	10	2	18	1	12	0	6
39	25	0	10	0	2	25	0	10	4	9	3	16	1	12	0	6
40	24	0	10	0	1	27	0	11	3	10	2	18	0	13	0	6
41	25	0	10	0	1	28	0	12	3	10	3	17	1	12	0	6
42	25	0	10	0	1	28	0	12	3	10	3	17	1	12	0	6
43	25	0	10	0	2	26	0	12	6	7	2	18	1	11	0	6
44	25	0	10	0	2	26	0	12	6	7	3	17	2	11	0	6
45	25	0	10	0	1	28	0	12	4	9	2	18	1	12	0	6
46	25	0	10	0	1	28	0	12	5	8	2	17	1	12	0	6
総数	1062	18	443	1	68	1213	0	534	163	424	106	799	35	548	0	272
割合	98.33%	1.67%	99.77%	0.23%	5.31%	94.69%	0.00%	100.00%	27.77%	72.23%	11.71%	88.29%	6.00%	94.00%	0.00%	100.00%

統計結果によると、群母拗音および澄母が dz 類、その他が z 類に合流する傾向が観察される（一部例外については 2.2 で述べる）。

中古音において、澄母、群母は破裂音*[d̡], *[g]、従母、崇母、常母は破擦音*[dz], *[dʐ], *[dʑ]、邪母、船母は摩擦音*[z], *[ʐ]、日母は*[ɳʐ]とされる（李方桂 1980）。ただし、6 世紀末、顔之推は『顔氏家訓・音辞篇』において以下のように述べる。

南人以錢爲涎，以石爲射，以賤爲羨，以是爲舐。

〔南人は、「錢」を「涎」、「石」を「射」、「賤」を「羨」、「是」を「舐」と発音する。〕

「銭」「賤」は従母字、「石」「是」は常母字であり、中古音での声母は破擦音*[dz], *[dʑ]であった。また、「涎」「羨」は邪母字、「射」「舐」は船母字であり、中古音での声母は摩擦音*[z], *[ʐ]であった。しかし、顔之推の記述によると、「南人[6]」の発音では従母、常母（有声破擦音）が、邪母、船母（有声摩擦音）に合流しているという[7]。その特徴は表 1 のように現代常州方言でも同様である（一部ほかの呉語方言も同様（→表 2））。

また、澄母の音価については、周徳清『中原音韻』による呉人の知組字の音価に関する記載が注目される。

吳人（中略）切珍爲丁心之類，正音豈不誤哉！

〔呉人が「珍」の反切を「丁心」などとするようなことは、「正音」において誤りではないだろうか。〕

「丁」は中古の端母字で、声母は破裂音であった。「珍」は中古の知母字で、『中原音韻』に反映する元代北方官話ではすでに照母に合流し、破擦音に変化していた。しかしながら、周徳清によると、呉人はなおそれを端母のように、つまり破裂音で読んでいたという。つまり、呉語において知組が破擦音化した時代は元代以降であると推測される。

また群母について、呉語が話されている永康、黄岩、太平、周浦、松江などでは、見

[6] 当時南方で人口密度が最も高かった地域は長江の下流域に位置する太湖平原、すなわち現在の北部呉語の分布地域であるため、顔之推の言う「南人」は主に現代北部呉語の分布地域に住んでいた人々を指していると考えられる。

[7] 顔之推は崇母*[dʐ]について言及していないが、崇母と対応する摩擦音声母である俟母（*[ʐ]）は字数が僅かであるため、たとえ南人が崇母を摩擦音*[ʐ]として読んでいたとしても、崇母字と俟母字とでは最小対も少なく、言及がなくても不自然ではない。体系的に考えて崇母も従母と同じく有声摩擦音に合流していた可能性が高いと思われる。

組拗音は現在でも硬口蓋破裂音（[c-]類）で発音されているという（銭乃栄 1992）。このことより、呉語における群母拗音の破擦音化はより現代に近い時期であったと考えられる。

以上をまとめると、中古音から現代常州方言に至る通時的変化を推測すると、有声破擦音（*dz 類）と有声摩擦音（*z 類）の対立は 6 世紀末の段階は存在せず、すべて*z 類に合流していたと考えられる。一方、澄母、群母拗音は中古以来、有声破裂音で発音され、早くとも近世以降になってから次第に破擦音化し、有声摩擦音と新たな対立を成したと考えられる。対立を形成して以降の音価は*[dz : z], *[dʑ : ʑ][8]と推定される。この変化の過程は連鎖推移（Chain Shift）として解釈できると考えられる。以上の変化過程を図 5 に示す。

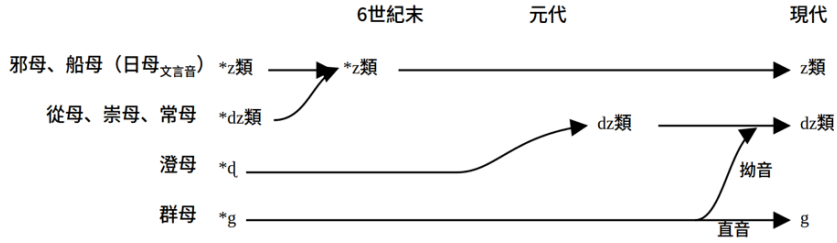


図 5　変化過程

現代常州方言はまさにこのような体系を反映しているが、先行研究によると、このような状況は常州以外の呉語方言や中国共通語（北京）にはいずれも見られない（表 2）。例えば、蘇州では群母拗音のみが dz 類となり、澄母を含むその他の声母は z 類となっている。一方湖州では群母拗音のみが dz 類となる一方で、その他の声母は字によって dz 類・z 類の 2 通りがあり、規則性を見出せない。また杭州では群母拗音および澄母が dz 類となることは常州と同じであるが、その他の声母は湖州と同様に規則性を見出せない。さらに高淳にはそもそも dz 類が存在しない。**中古有声破裂音（澄群拗音）が dz 類に、中古有声破擦音・摩擦音（従邪崇常船[9]）が z 類にそれぞれ変化していることは常州方言の重要な音韻特徴**だと言える。

表 2　常州、蘇州、湖州、杭州、高淳、北京方言における澄母、群母拗音、従母、邪母、崇母、常母、船母

中古音		常州	蘇州	湖州双林	杭州	高淳	北京
破裂音	群*[g]	[dz]非-j- [dʑ]-j-	[dʑ]	[dʑ]	[dz]非-j- [dʑ]-j-	[z]非-j- [ɕ]-j-	[tɕʰ, tɕ]
	澄*[ɖ]		[z]	[dz, z]非-j- [dʑ, ʑ]-j-			[tʂʰ, tʂ]
破擦音・摩擦音	従*[dz]	[z]非-j- [ʑ]-j-			[dz, z]非-j- [dʑ]-j-		[tsʰ, ts]非-j- [tɕʰ, tɕ]-j-
	邪*[z]						[s]非-j- [ɕ] -j-
	崇*[dʐ]						[tʂʰ, ʂ]
	常*[dʑ]						
	船*[ʑ]						

※ -j- は口蓋化音節（斉歯呼、撮口呼）を指す。声母の口蓋化は破擦音・摩擦音の分類とは関わらない。

2.2　例外の解釈

上で述べた常州方言の音韻特徴は、先行研究では明確には指摘されていない。以下代表として趙元任 1928 および銭乃栄 1992 の記述を表 3、4 に整理して示す。

趙元任 1928 および銭乃栄 1992 はいずれも常州方言における澄母、従母、邪母、崇母、常母、船母、日母文言音の合流先（dz 類か z 類か）を記す際に「;」という記号を用いている。「;」の意味について、趙元任 1928 は「知照精兩系的變法在吳語最不一致。（中略）那些濁音…既與古音的分法不同，又與國音不同，所以表當中只得暫把幾種混起來用“;”號表示有些字這末念有些字那末念（例如[dz‘; z]）。〔「知照精」の二系列の変化は呉語において

[8] 地域によって*[dʐ : ʐ]もあり得ると推測されるが、本調査ではそのような対立は見られなかった。
[9] 日母は現代常州方言において、白話音は鼻音で読まれ、文言音は有声摩擦音（＝常母、船母字）で読まれる。ここでの文言音はほかの権威方言から借用した字音で、常州方言自らの音韻変化には関わらないと思われる。

最も一致性を見ない。（中略）それらの濁音は…古音の区分とも異なり、また国音の区分とも異なる。そのため、表では暫定的に数種を併記し、「;」を用いて、字によっていずれかで読まれることを示すにとどめる（例えば[dz‘; z]のように）。〕」と説明している[10]。一方、銭乃栄 1992 は「“澄、崇、船、禅、从、邪”六母几乎毎一个音韵地位的现今声母，都有表示或读的“;”。〔澄、崇、船、禅、従、邪の 6 つの声母は、それらに対応する現代声母のほとんどすべてに異読を示す「;」が付いている。〕」と述べている。つまり、同じ中古声母でも、字によってその合流先が dz 類か z 類かで規則性がないということである。

表 3　趙元任 1928 の常州方言の dz 類、z 類と中古音との対応関係

群拗音	澄、床、禅、日文言音	従、邪
[dʑ]	[dz‘; z]	[dz‘少; z]

表 4　銭乃栄 1992 の常州方言の dz 類、z 類と中古音との対応関係

中古音声母	群斉撮	澄、船、禅、崇、日文言音	従開合、邪開合	従斉撮、邪斉撮
老派の音価	[dʑ]	[dz; z]	[z; dz 少]	
中新派の音価	[dʑ]	[dz; z]	[z; dz 少]	[ʑ]

表 1 を見ると、先行研究が述べるように、確かに同じ中古声母に由来する字が dz 類あるいは z 類ときれいに対応してはいない。ただし、それらには一定の傾向が見て取れ、例外はごく少ないことが分かる。いま、それらの例外字について検討する。

表 1 で例外発音で読まれる割合の高い上位 7 字を表 5 で示す。それらの割合は 75%以上に達する一方で、それに次ぐ「鋤」は 37.78%、その他の 31 字では 25%以下となり、結果は明らかに二極化している。

「鋤」以降の字は例外の割合が低いため、誤読によるものと考えておく。調査字表の字は任意の順に並んでおり、破擦音と摩擦音が不規則に出現し、実際に一部の被調査者は前後の字に影響されて一部の字を誤読してしまった可能性が高いと考えられるためである。

一方、上位 7 字は文言音として解釈できると考える。表 5 には、常州方言の文言音に影響しうる呉語の権威方言[11]である杭州、上海、蘇州方言におけるこれらの字の声母を合わせて示す。常州方言と対照した結果、上位 7 字の「例外」は杭州方言から dz 類の字音を文言音として借用したと推定される[12]。

表 5　上位 7 字の杭州、上海、蘇州方言における声母

字	例外発音およびその割合	杭州	上海	蘇州
査崇母	dz (100.00%)	dz	z	z
成常母	dz (97.83%)	dz	z	z
暫従母	dz (97.67%)	dz	z	z
乗船母	dz (94.12%)	dz	z	z
狀崇母	dz/dʑ (92.86%)	dz	z	z
助崇母	dz/dʑ (90.70%)	dz	z	z
承常母	dz (76.09%)	-	-	-

参考文献　趙元任 1928.《現代呉語的研究》。北京：清華学校研究院。／李方桂 1980.《上古音研究》。北京：商務印書館。／中国社会科学院語言研究所 1981.《方言調査字表》。北京：商務印書館。／李栄、鮑士杰 1998.《杭州方言詞典》。南京：江蘇教育出版社。／李栄、許宝華、陶寰 1998.《上海方言詞典》。南京：江蘇教育出版社。／李栄、葉祥苓 1998.《蘇州方言詞典》。南京：江蘇教育出版社。／銭乃栄 1992.《当代呉語研究》。上海：上海教育出版社。／陳忠敏 2015.〈論 160 年前上海話声母[dz]/[z]的変異——兼論北部呉語从邪澄崇船禅等母読音変異現象〉,《方言》第 4 期：340-345 頁。／銭乃栄 2016.〈論北部呉語从邪澄崇船禅母音変中的詞彙拡散——答陳忠敏先生〉,《方言》第 3 期：309-315 頁。

[10] 加えて趙元任 1928 は「古音的牀禪跟今音的‘dj’,‘zh’都是一筆糊塗賬…這筆糊塗賬並不是不值得算，是因爲一時不容易算出来，等算出来了關於古今方音的異同上可以有一種有趣的比較。〔古音の牀母、禅母と現代音の dj（dz‘）、zh（ʑ）との関係はどんぶり勘定（対応関係が未整理）である…しかしこれは決して整理する価値がないというわけではなく、ただすぐには簡単に整理できないだけであって、一旦整理ができれば、古今や方言音の異同について興味深い比較ができるはずである。〕」とも述べ、dz 類と z 類の問題、その規則性の整理については以降の研究を待つ態度を示している。

[11] 今回の被調査者は全員年配層であり、彼らの幼小期に共通語（普通話）はそれほど普及していなかったため、共通語をうまく話せない人も多くいた。したがって、権威方言として共通語の影響は排除できると考えられる。

[12] 陳忠敏 2015 は鄭張尚芳 2007 の観点を援用して以下のように述べている。「北部吴语从、邪、澄、崇、船、禅等六母读浊塞擦音这种文读的来源是早期的杭州话。〔北部呉語における従、邪、澄、崇、船、禅母の六声母が有声破擦音で読まれるという文言音の来源は、早期の杭州方言である。〕」ただし、銭乃栄 2016 は文言音ではなく、「詞彙拡散」として解釈した。本稿は前者の解釈を取る。

呉語杭州方言における「量詞＋名詞」構造の定性[1]について[2]

王槿云
東京外国語大学 大学院生

1. はじめに

中国語共通語の「量詞＋名詞」構造は一般に動詞の後の目的語位置に限定され、不定の個体を指示する。朱德熙(1982：52)は、「数量詞からなる修飾構造が目的語の位置にあるとき、数詞が『一』であれば省略することが可能であり、このとき量詞は軽く発音され、ストレスは後ろの名詞に置かれる」と指摘している。例：

(1) a. 说句话。 b. 写个信。 c. 买了本儿书。
（日本語：a.（一言）話す。b. 手紙を（一通）書く。c. 本を（一冊）買った。）

これに対し、陈玉洁(2007)、王健(2013)、盛益民(2017)らによる横断的な考察では、多くの中国語南方方言（主に呉語や粤語）において、共通語の同構造が不定のみを表すのに対して、不定だけでなく定を表すことも可能であり、その出現位置も動詞の後の目的語位置に限定されないことが指摘されている。このような「量詞＋名詞」構造が定の個体を指示する用法は「量詞の定指示用法」と呼ばれ、Li, Xuping (2013)はこの種の量詞を「定指示量詞(definite classifiers)」と称している。

呉語杭州方言の「量詞＋名詞」構造にも、このような定を表す用法が存在する。例：

(2) 万事通，帮他瓶腐乳撬撬开。（小红书/杭州潮手儿 2024/06/28）
（共通語：万事通，帮他把那瓶腐乳打开。）
（日本語：万事通、彼のかわりにあの腐乳の瓶を開けてあげて。）

本例の“瓶腐乳”は「量詞＋名詞」構造である。この発話のコンテクストは、話し手がロボットの“万事通”に対して指令を出し、指定された腐乳の瓶を開けるよう要求する場面である。本例の「量詞＋名詞」構造が指し示す対象“瓶腐乳”は、話し手と聞き手の双方が理解可能であり、現時点の発話環境において双方が共通の認識を持っている対象である。

本発表では、呉語杭州方言の「量詞＋名詞」構造が定または不定の個体を表すことができるという現象に焦点を当て、同構造が主語、目的語、連体修飾語、“有”構文の“有”の後続位置といった各統語位置に現れる場合をそれぞれ考察する。[3]

2. 各統語位置における出現状況の考察

2.1 主語位置

赵元任(1968)は、中国語の主語は定の傾向があると指摘している。共通語と同様に、杭州

[1] 相原(2015: 158)によれば、「定性は、名詞句の指示対象が同定可能かどうかによって名詞句を区別する概念であり、聞き手が指示対象を同定できると話し手が同定している名詞句は定(definite)であり、同定できないと想定している名詞句は不定(indefinite)である」とされる。

[2] 本発表における方言の文字転写、共通語訳、日本語訳、および下線等の記号は、すべて発表者によるものである。

[3] 分析に用いる用例はインターネット上から収集したものであり、小红书(RED)の杭州方言ブロガーの投稿や、杭州方言ビデオポッドキャスト『超级吴语』などを主な出典としている。なお、杭州方言における指示詞の“这”、構造助詞の“的”、および量詞の“个”は発音が極めて類似しており、判別が困難な場合が多いため、本発表で提示する用例は“个”以外の量詞を含む用例を中心に扱う。

方言における主語位置も定を表す文法位置である。杭州方言では、単独の「量詞＋名詞」構造が主語位置に出現することが可能であり、その中の量詞には個体量詞や容器量詞などが含まれる。主語位置に立つ「量詞＋名詞」構造は、話し手と聞き手の双方が同定している物体を表し、その指示対象は発話現場の共通の文脈に存在することが多く、最も典型的なケースとしては眼前の事物を指し示す場合が挙げられる。例：

(3) 地板高头张啥花头？家敬老院装潢了蛮好的么。（小红书/杭州潮手儿 2024/06/01）

（共通語：地板上这张纸是什么？这家敬老院装修得挺好的呀。）

（日本語：床の上のこの紙は何だろう？この老人ホーム、内装がかなりいい。）

本例は話し手の独り言である。本例には 2 箇所の「量詞＋名詞」構造が出現しており、1 箇所目は“张啥花头”である。話し手が床の上に落ちているチラシを目にし、ここでの「量詞＋名詞」構造は話し手の眼前にあるそのチラシを指している。その後、話し手がそのチラシを拾い上げ、そこに掲載された老人ホームの画像を目にする。2 箇所目の“家敬老院”における“家”は個体量詞である。ここでの「量詞＋名詞」構造は話し手がチラシで見たその老人ホームを指している。いずれの「量詞＋名詞」構造も、その場面における定の対象を指し示している。

(4) 老头儿，你有不有啥家生好开罐儿的？瓶腐乳撬不开喱。（小红书/杭州潮手儿 2024/06/28）

（共通語：爸，你有没有什么能开罐头的工具？这瓶腐乳打不开了。）

（日本語：親父、缶を開ける何か道具はある？この腐乳の瓶が開かないんだ。）

本例のコンテクストは、息子が父親に話しかけている場面である。「量詞＋名詞」構造は“瓶腐乳”であり、ここでの“瓶腐乳”は息子（話し手）が手に持っているその腐乳の瓶を指しており、話し手と聞き手の双方が理解可能な定の対象である。

しかしながら、姜淑珍(2025)は、単独の「量詞＋名詞」構造が持つ定の意味は語用論的な推論を要するため、杭州方言における容認度は人によってばらつきが見られるのに対し、修飾成分を伴う「量詞＋名詞」構造は修飾語による限定を受けるため、より定の解釈が得られやすいと指摘している。本発表においても同様の見解をとる。例：

(5) 木头部电瓶车比走路还要慢啦。（小红书/悟空小碎嘴 2026/02/28）

（共通語：木头的那台电瓶车比走路还慢呢。）

（日本語：木頭のあの電動スクーターは、歩くのよりも遅いよ。）

本例の「量詞＋名詞」構造は“部电瓶车”であり、「量詞＋名詞」構造の前にある修飾語の“木头”が領属関係を示し、対象が“木头”という人物の電動スクーターであることを具体的に明示している。

2.2 目的語位置

杭州方言において、「量詞＋名詞」構造が動詞の後の目的語位置に出現する場合、定と不定の 2 通りの解釈が存在し、文脈やその他の語用論的要因によって区別する必要がある。

「量詞＋名詞」構造が定を表す場合、ストレスは量詞に置かれる。例：

(6) 我头毛看到件羽绒衣，毛适合你嘞。（小红书/悟空小碎嘴 2025/10/03）

（共通語：我刚才看到了那件羽绒服，非常适合你哦。）

（日本語：さっきあのダウンジャケットを見かけたんだけど、すごく似合いそうだよ。）

本例の「量詞＋名詞」構造は“件羽绒服”である。本例では量詞“件”にストレスが置かれており、指示対象が定のダウンジャケットであることが強調されている。ストレスを伴わ

ない場合は、定の意味を表すことができない。

「量詞＋名詞」構造が不定を表す場合、量詞は軽く発音され、ストレスは名詞に置かれる。この場合は共通語の例(1)と類似している。例：

(7) 我也想买只手机。（小红书/悟空小碎嘴 2025/10/26）

（共通語：我也想买个手机。）

（日本語：私もスマホ（を 1 台）買いたいな。）

本例の「量詞＋名詞」構造は“只手机”である。話し手はスマホを買いたいと考えているが、まだどのスマホを買うか決定しておらず、ここでのスマホは定の対象ではない。

また、本発表の分析により、不定の意味を表す際には量詞と名詞が離れて出現することが可能であるのに対し、定を表す際には両者が常に隣接していなければならず、離れて現れることはできないことが明らかになった。例：

(8) 给你藤椅子弄张。（小红书/杭州佬安峰 2026/06/12）

（共通語：给你拿一把藤椅子吧。）

（日本語：籐の椅子（を 1 脚）持ってきてあげるよ。）

ここでの“藤椅子”は定の対象ではない。本例の意味は、「動詞＋目的語」という語順を持つ“给你弄张藤椅子”に相当するが、名詞の“藤椅子”を前置させ、句末に量詞のみを単独で残すことが可能である。一方、この場面における“藤椅子”が「定」の対象である場合は、“张藤椅子给你弄来”あるいは“给你张藤椅子弄来”と言うことができ、いずれの表現においても「量詞＋名詞」構造は常に隣接して一体をなす必要があり、両者が離れて出現することはできない。

さらに、2.1 で述べた主語位置の場合と同様に、目的語位置にある「量詞＋名詞」構造の前に修飾成分を付加すると、定の解釈が得られやすくなり、「修飾成分＋『量詞＋名詞』構造」となって動詞の後に現れ、定の対象を表す。例：

(9) 我骑我们老头儿部 125。（小红书/悟空小碎嘴 2025/10/26）

（共通語：我骑我爸那台 125 摩托车。）

（日本語：親父のあの 125cc のバイクに乗っていくよ。）

本例の「量詞＋名詞」構造は“部 125”であり、「量詞＋名詞」構造の前にある修飾成分の“我们老头儿”が領属関係を示し、対象が話し手の父親の 125cc バイクであることを具体的に明示している。

2.3 連体修飾語位置

杭州方言において、「量詞＋名詞」構造が連体修飾語として機能する場合も定の対象を表し、一般に不定の対象を表すことはない。この場合、「量詞＋名詞」構造は統語レベルでは連体修飾語であり、談話レベルでは話題として機能している。

李旭平・申屠婷婷(2020)は、呉語東陽方言に関する議論の中で、呉語は共通語よりも話題化が顕著な「話題顕著型(topic-prominent)」の言語であり、その主語は通常、デフォルトの話題となると指摘している。しかし、文の主語と話題が一致しない場合も多く見られ、その際、「量詞＋名詞」構造が主語の前に出現して文の話題として機能することができる。さらに、「量詞＋名詞」構造と主語との間に連体標識（構造助詞）の“个的”を挿入することで、この「話題-主語」の関係がより明確な「修飾語-中心語」の関係へと転換する。例：

(10)（東陽方言）双鞋质量还好。（李旭平・申屠婷婷 2020: 26）

（共通語：这双鞋质量还不错。）
（日本語：この靴は品質がまあまあ良い。）
本例の「量詞＋名詞」構造は“双鞋”であり、談話レベルでは文の話題、統語レベルでは主語“质量”を修飾する連体修飾語として機能している。構造助詞“个的”を加えて“双鞋个的质量还好”と書き換えることができる。
本発表では、杭州方言にも同様の現象が存在し、話題と主語が一致しない場合において、「量詞＋名詞」構造が主語の前で連体修飾語および話題として機能すると考える。例：
(11) 只油墩儿味道好滴哎。（小红书/螳螂君 2025/03/01）
（共通語：这个油墩儿味道真好啊。）
（日本語訳：この油墩儿（揚げ菓子）は本当に味が良いね。）
本例における「量詞＋名詞」構造は“只油墩儿”であり、文全体の話題として機能している。ここで指し示されている“油墩儿”は、発話現場で共有されている食べものを指しており、明確に定の解釈が得られる。一方、主語は“味道”である。本例も例(10)と同様に、構造助詞の“个的”を挿入して“只油墩儿个的味道好滴哎”と書き換えることができる。
2.4 “有”構文の“有”の後続位置
陈平(2016: 11)によると、共通語において“有”構文の“有”の後続位置は「不定」の傾向を持つ位置である。共通語と同様に、杭州方言における“有”構文の“有”の後続位置も不定の傾向を示す文法位置であり、一般に定の事物を表すことはできない。“有”構文における出現状況は、大きく「前景情報」と「背景情報」の 2 つに大別する。
前景情報となるケースでは、まず“有”構文によって指示対象（談話の中心）を導入し、その後の談話においてその対象について言及し続ける。例：
(12) 我有个朋友毛正规，而且他还毛发厾。（杭州话播客/超级吴语 2026/09/05）
（共通語：我有个朋友很正经，而且他还很有趣。）
（日本語訳：私にはかなり真面目な友達（が 1 人）いるのだが、その上彼はとても面白い。）
本例では、“有”構文を用いて「量詞＋名詞」構造である“个朋友”を導入している。ここで初めて記述の中心となる“朋友”が提示され、その後の談話においても、この“朋友”が三人称代名詞の“他”などによって指示され、談話の中心であり続ける。
背景情報となるケースでは、“有”によって導入される指示対象は談話の中心ではなく、補助的な説明情報にとどまる。例：
(13) 我们江城中学应该是出名的，我们门口有只花园圈的。（杭州话播客/超级吴语 2026/08/25）
（共通語：我们江城中学应该是很有名的，我们学校门口有个环形的花园。）
（日本語訳：私たちの江城中学校はきっと有名なはずだ、学校の正門のところに円形花壇（が 1 つ）あるし。）
本例における談話の中心は“江城中学”であり、“有”構文によって「量詞＋名詞」構造である“只花园圈”が導入されている。「量詞＋名詞」構造が指し示す対象である“花园圈”は、あくまで補足的な説明情報にすぎない。

3. まとめ
本発表では、「量詞＋名詞」構造が主語、目的語、連体修飾語、“有”構文の“有”の後続位

置といった各統語位置に出現する場合について考察を行った。分析を行った結果、「量詞＋名詞」構造は現れる文法位置によって「定」「不定」の性質が異なることが明らかになった。これを整理すると、表 1 のようになる。

表 1 呉語杭州方言における「量詞＋名詞」構造の定性

	主語位置	目的語位置	連体修飾語位置	“有”構文の“有”の後続位置
定	+	+	+	-
不定	-	+	-	+

表 1 およびこれまでの分析に基づき、呉語杭州方言における「量詞＋名詞」構造の分布規則について、3 点を結論として導き出すことができる。

第一に、杭州方言の「量詞＋名詞」構造は、出現する環境に応じて定と不定の両方を表し得るという点である。

第二に、定と不定の決定には動詞との位置関係、すなわち語順による明確な制約が存在する点である。主語や連体修飾語のように動詞の左側に現れる場合は原則として定を表すのに対し、目的語や“有”構文の後ろのように動詞の右側に現れる場合は原則として不定を表す。

第三に、本来は不定を表す動詞の右側において定の解釈を得るためには、ストレスや修飾成分を伴う有標形式が必要だという点である。通常は無標のままで不定を表すが、定を表す際には量詞にストレスを置くか、または量詞の前に修飾成分を付加しなければならない。また、不定のときは量詞と名詞を離して配置できるのに対し、定のときは両者を離して出現させることができないという点も、この有標性と関連している。

以上の結果は、杭州方言における「量詞＋名詞」構造の定性解釈が、語順といった統語的な位置だけでなく、ストレスや修飾成分、さらには発話の文脈が複合的に作用して決まることを示している。

なお、補足すべき点として、姜淑珍(2025)が指摘するように、杭州方言における定を表す「量詞＋名詞」構造は決して優先的に用いられる形式ではない点が挙げられる。紹興や東陽といった杭州周辺の呉語においてこの構造が広く発達しているのとは対照的に、杭州方言ではすでに衰退傾向が見られ、定を表す際の第一選択肢とはならないことが多い。実際の言語運用においては、「量詞＋名詞」構造の前に修飾成分や指示詞を付加して用いられるのが一般的である。

【参考文献】Li, Xuping 2013. *Numeral Classifiers in Chinese: The Syntax-Semantics Interface*. Berlin /New York: Mouton de Gruyter．/相原まり子 2015「定性」斎藤純男・田口喜久・西村義樹(編)『明解言語学辞典』東京: 三省堂 p.158 /陈平 2016〈汉语定指范畴和语法化问题〉《当代修辞学》第 4 期 pp.1-13 /陈玉洁 2007〈量名结构与量词的定语标记功能〉《中国语文》第 6 期 pp.516-530 /姜淑珍 2025〈杭州方言表定指的“量名”与“一量名”结构〉《语言研究》第 45 卷第 4 期 pp.127-134 /李旭平・申屠婷婷 2020〈吴语东阳话量词的定指和不定指功能——兼论“准指示词类型”的再分化〉《常熟理工学院学报（哲学社会科学）》第 4 期 pp.24-49 /盛益民 2017〈汉语方言定指“量名”结构的类型差异与共性表现〉《当代语言学》第 2 期 pp.181-206 /王健 2013〈类型学视野下的汉语方言“量名”结构研究〉《语言科学》第 4 期 pp.383-393 /赵元任 1968 丁邦新译《中国话的文法》香港: 香港中文大学出版社 /朱德熙 1982《语法讲义》北京: 商务印书馆

近代上海方言中的“啥”及其相关形式考察*

王 一萍
福冈大学 外国语讲师

1. 引言

“啥”是相当于“什么”的疑问指代词，来自“什么”的合音（吕叔湘著、江蓝生补 2017：136）。“啥”也是上海及苏南、浙北等吴语区常用的疑问代词（颜逸明 1994：236）。相比现代上海方言，近代上海方言中的“啥”在组合形式、语法功能上更为丰富。本文拟以 9 种近代上海方言文献为主要研究资料，考察“啥”及其相关形式的若干特殊用法，并讨论原因问“啥（哚）”的功能扩展，以及句末“哚啥”“呢啥”中“啥”的语法功能。

2. 先行研究及问题的提出

关于吴语中“啥”的用法，石汝杰、宫田一郎（2005：528）将其分为两类：一是代词，表“什么”“为什么；怎么”；二是语气词，表疑问、肯定、祈使等语气。盛益民（2025）、曹兴隆（2025）分别对吴语中“啥”的来源及“啥”类句末助词作了系统考察。

在现代上海方言中，“啥”单念时读阴去调［sɑ^{35}］（许宝华、陶寰 1997：68）。“啥”不仅可单独用作主语、宾语，也能与其他成分结合成复合疑问代词或短语，如“啥人$_{谁}$”“啥物事$_{什么东西}$”“啥辰光$_{什么时候}$”“啥地方$_{什么地方}$”“做啥$_{干什么；为什么}$”“为啥$_{为什么}$”，分别用来问人、问事物、问时间、问处所、问原因等（许宝华、汤珍珠 1988：421-422；钱乃荣 1997：118-121）。“啥”也可表否定、虚指、列举等，具有疑问代词普遍具备的扩展功能。徐烈炯、邵敬敏（1998）对上海方言与北京话的疑问代词进行了比较，指出二者在形式上具有较为规律的对应关系，同时在适用范围、语体风格等方面存在差异。

上述研究多集中在现代上海方言“啥”的用法及其与普通话“什么”的异同，对于近代上海方言中“啥”及其相关形式的实际使用情况，尚缺乏系统的考察。钱乃荣（1997、2014）已经注意到近代上海方言文献中“啥”在组合形式和功能上的多样化，但部分特殊用法及其与现代上海方言的差异仍有进一步讨论的余地。

3. 主要研究资料

本文以 19 世纪中叶至 20 世纪前半叶刊行的 9 种上海方言文献为主要研究资料（见表 1），考察“啥”及其相关形式的若干特殊用法。下文引用时均使用文献简称；引文中的汉字均改为现在通用的简化字；引用对话时，以“/”隔开；所引例句均加括号附上普通话译文[1]，必要时保留英、法语原释；“啥”又作“甚”“哈”“撒”，除引文外，均作“啥”[2]。

表 1　本文所引文献资料

序号	文献名	作者 / 译者	出版时间	简称
1	*A Grammar of Colloquial Chinese, as Exhibited in the Shanghai Dialect*（《上海方言口语语法》）	艾约瑟（J. Edkins）	1868（初版 1853）	语法
2	*A Vocabulary of the Shanghai Dialect*（《上海方言	艾约瑟	1869	词汇

* 本文为福冈大学令和 7 年度「若手・女性研究基盤構築支援事業」（课题编号：GW2521）资助的阶段性研究成果。

[1]《土话》的译文参考《官话指南》（郑永邦、吴启太编著，1900），《中日》的译文参考原书，均略作调整；其他译文为笔者自译。

[2] “甚”字见于《便商》《津梁》；“哈”“撒”见于《便商》，分别为问人的“哈人”（2 例）及问处所的“撒场化”（1 例）。

	词汇集》）	（J. Edkins）		
3	*Leçons ou Exercices de langue Chinoise, Dialecte de Song-Kiang*（《松江方言练习课本》）	应儒望（P. Rabouin）	1883	松江
4	*Petit Dictionnaire Français-chinois, dialecte de Chang-hai* 〔《法华字汇》（上海土话）〕	C. Pétillon	1905	法华
5	《沪语津梁》	御幡雅文	1907	津梁
6	《沪语便商一名上海语》	御幡雅文	1908	便商
7	《土话指南》*T'ou-wo Tse-né*	师中董 译注	1908	土话
8	*Lessons in the Shanghai Dialect* （《沪语汇编》）	R. A. Parker	1923	汇编
9	《中日会话集》	丁卓	1942（初版 1936）	中日

4. 近代上海方言中的“啥”及其相关形式的特殊用法

4.1 由“啥”派生的复合疑问代词及“啥（星）+N”

与现代上海方言相比，近代上海方言中由“啥”构成的复合疑问代词，尤其是问时间和问处所的形式非常丰富。问时间有“啥日脚”“啥日子” “啥时辰”“啥模样”等，如：

（1）想起来，啥模样我好来者？ / 我算起来，侬老爷月底里□转来个者。（您想，我可以多咱来好呢？/我算计着，我们老爷总得月底才能回来了。）（《土话》官商吐属 18 章）

上例（1）中的“啥模样”对应的译文为“多咱”，即“什么时候”，表明该形式在此用于询问时间，而非询问情况或性状。另外，问处所的复合疑问代词主要有“啥户堂/啥户荡”“啥场化”“啥所”“啥所头/啥所堂”“啥须”“啥须块”等[3]，如：

（2）打啥户堂来？Whence do you come? （您从哪里来？）（《语法》77 页）

“啥”还可与不定量词“星”（即“些”）结合，构成“啥星+N”，表示“哪些+N”，如：

（3）啥星人拉吵？（哪些个人在吵嚷？） （《中日》42.11）

“啥”可以直接限制非固定搭配的名词，构成“啥＋N”的组合，如：

（4）格末，地头两爿报关行家管点甚正经呢？（那么，这里的两家报关行都管些什么生意呢？）（《津梁》商贾问答 28 章）

近代上海方言中“啥”与名词的组合限制较为宽松，而现代上海方言中“啥”作定语时，多带结构助词“个”（相当于“的”）构成“啥个＋N”，如“啥个物事”“啥个动机”（许、汤 1988：422），类似的组合限制也见于苏州、吴江等北部吴语地区（刘丹青 2023：61）。

4.2 “无啥/唔啥”

“啥”与否定动词“无”（又作“唔”）搭配[4]，构成较固定的短语“无啥”，可表虚指，也可表许可或一般的评价，如“过得去；（还）可以”“无所谓”等义，如：

（5）a. 上一回個酒也无啥。（上回的酒也不错。） （《中日》26.14）

b. 让日头歪西之，阴凉点咾出门罢。/固亦无啥。（等太阳斜过去凉快些儿，再出门去吧。/也好。）（《土话》应对须知）

与普通话“没（有）什么”不同的是，“无啥”不仅可以单独用或后接名词，还可放在

3 “啥须”的“须”为记音字，表处所义。“头”“荡/堂”“块”均为后缀。“荡”为“这儿”或中性的“那儿”，其来源可能是处所词常用后缀“搭”的儿化（钱乃荣 2014：275）。

4 “无”，现上海方言里常作“呒”［fiṁ^{13}］（许宝华、陶寰 1997：211）。

程度副词或疑问代词前，表示程度不及或数量不足。如：

（6）a. 无啥那能好。Tant bien que mal. （没有那么好；勉强过得去。）（《法华》73 页）

b. 唔啥几许。Not many. （没有多少。）（《语法》106 页）

4.3 表示程度的“忒啥”与“啥能”

副词“忒”［t‘əʔ］与“啥”结合成程度副词“忒啥”，置于形容词、动词前，表示程度过高，明清吴语中亦作“忒啥”“忒杀”“忒煞”“忒甚”（石、宫田 2005：595），如：

（7）a. 忒啥过分。（太过分。） b. 忒啥做来凶者。（做得太凶了。）（《松江》9 课）

“啥”与“能”结合成“啥能”，用作程度补语，置于形容词或表心理活动、感觉的动词后，用助词“来”（相当于“得”）连接，表示程度高，义为“…得不得了”，如：

（8）a. 路远来啥能。（路远得不得了。）（《松江》6 课）

b. 怕来啥能。Fear greatly. （怕得不得了。） （《词汇》46 页）

“啥”既可构成前置的程度副词“忒啥+X”，也可构成后置的程度补语“X＋来＋啥能”，参与不同类型的程度表达，但这两种用法都主要见于 19 世纪中后期的文献资料，到 20 世纪初期逐渐减少，现代上海方言中已基本不用。

4.4 询问原因的“啥”及其相关形式

询问原因或目的时，除了现在常用的“为啥”“做啥”“啥事体”“啥缘故”“啥讲究”等以外，近代上海方言中的“啥”还可由介词（如“为之”）或动词（如“有”“想”）等介引，一般放在连谓结构前，中间可插入表因果关系的连词“咾”［lɔ］（又作“咯”），如：

（9）a. 是为之甚咯勿拨俚住呢？/是为之我侬勿曾带行李。（是因为什么不让你们住呢？/是因为我们没带行李。）（《便商》问答 25.19-25.20）

b. 昨日想啥咾勿来？Why did you not come yesterday? （昨天为什么没来？）（《语法》152 页）

“啥”还可不经介词或动词的介引，与连词“咾”结合成“啥咾”，用来询问原因，今苏州、吴江等地仍有保留（石汝杰 1999；刘丹青 2023）。如：

（10）阿妈啥咾勿来？/无工夫咾。（您母亲为什么没来？/因为没有时间。）（《松江》27 课）

上例（10）中“啥咾”的功能主要用来询问原因和理由，说话人对所问之事可能有自己的看法，也可能没有看法。“啥（咾）”有时出现在反问句中，句中多包含能愿动词“肯”“要”或程度副词，“啥（咾）”的主要功能在于表示困惑、诧异或不满等态度。如：

（11）a. 箇只猫，啥咾总勿肯管事个？屋里老鼠多来死，终勿肯捉个。（这个猫怎么总不管闲事，满地的耗子他也不拿。）（《土话》应对须知）

b. 勿敢当，乃我要归去者。/啥多化忙耶？坐个坐咾□者。（不敢当，我也要回去了。/您忙甚么了，再坐一坐儿吧。）（《土话》官商吐属 9 章）

上例（11）a、b 中的“啥（咾）”并不以获得对方的回答为主要目的，实际是无疑而问，主要表达说话人对当前事态偏离其原有预期的诧异、意外、不满等主观态度，其功能大致相当于普通话的“怎么”，具有较明显的反预期功能。所谓反预期，是表示一个陈述在某种方式上与特定语境中说话人所认为的常规情形相背离（刘炎、黄丹丹 2015：182）。刘丹青（2023：62）也指出，“为什么”是中性的原因疑问代词，发问时可以对命题不带预期；而“怎么”不同于“为什么”，在发问时总带有反预期含义。Chang（2015）也从历时语用学角度讨论了疑问形式向反预期功能发展的现象，指出疑问所引发的惊讶等语用推论可在使用中得到强化。

上述功能分化也见于“做啥（咾）”“啥事体”等相关形式，如：

（12）a. 侬做啥咾拉眼泪出？/因为难过咾。（你为什么在哭？/因为难过。）（《松江》13 课）

b. 老爷，做甚咯还要拨铜钱？（老爷，干什么还要给我钱？）（《便商》问答 34.19）

（13）a. 侬去啥事体？（你去干什么？）（《中日》39.02）

b. 叫侬去，啥事体勿去？（叫你去，为什么不去？）（《中日》63.11）

上例（12）a 的“做啥咾”用于询问原因，而（12）b 中的“做甚咯”则表示说话人对超出预期的行为感到诧异。上例（13）a、b 中，“啥事体”的功能分化还表现为语序上的差异：（13）a 中的“啥事体”位于动词之后，用于询问原因或目的；（13）b 中的“啥事体”位于动词之前，带有说话人责难的语气，具有更强的主观性。

由上可见，“啥（咾）”“做啥（咾）”“啥事体”不仅可用于询问原因，也具有向反预期功能扩展的倾向。刘丹青（2023）认为，原因疑问词“啥”可能由“啥事体 / 啥体”逐步缩减而来，也可能与“则啥（做啥）”等形式的脱落有关。然而，本文考察的近代上海方言文献中，“啥（咾）”在《语法》《松江》等早期文献中已较常见，“做啥”“为啥”并未表现出明显的历时先行性，而“啥事体”的原因询问用法出现较晚。因此，本文考察的近代上海方言文献较难支持“啥事体＞啥体＞啥”的线性缩减路径，其形成机制仍有待进一步考察。

4.5 用于句末的“咾啥”“呢啥”

4.5.1 “咾啥”

语气助词“咾”与“啥”连用，在现代上海方言中表示列举未尽，并列连接的事项可以是词、词组或句子，进入句式非常灵活，相当于普通话“……什么的”“等等”（许、汤 1988：473；许、陶 1997：157）。这一用法早在艾约瑟的《语法》中已有记录。如：

（14）戏咾戏法咾啥勿看。（不看戏、戏法等。）（《语法》189 页）

近代上海方言中，“咾啥”置于句末，除上述用法外，还可强调肯定语气，此时“啥”一般重读。如：

（15）箇回日脚，倒去得勿少。/ 倒勿是咾啥，去之两个多月。（您去了日子不少了吧？/可不是么，我去了有俩多月了。）（《土话》官商吐属第 12 章）

“啥”也可单独用于句末，带有强调语气的功能，如：

（16）勿受人劝，第个人勿会成功啥。（不听别人的劝说，这个人不会成功。）（《汇编》111 课）

上例（15）中句末的“咾”表“事实如此”“理应如此”的语气（许、陶 1997：157；钱乃荣 2014：221），与“啥”连用后，表示的当然语气进一步增强。例（16）表明“啥”也可单独用于句末，强调事实，因此本文认为，句末用来强调肯定语气的“咾啥”，是语气助词“咾”与“啥”结合而成的复合语气助词。

4.5.2 “呢啥”

“呢”（文读作［ȵi^{13}］）与“啥”连用，放在句末，在老派上海话中多用来表示带猜测的询问（许、汤 1988：468）。钱乃荣（2014：345）认为“呢啥”为表确认问的语气助词；曹兴隆（2025：172）则认为“呢啥”为复合助词，是句末助词“呢”跟“啥”的结合；邵敬敏等（2010：298–299）指出“VP 呢啥”在形式上类似选择问。在本文考察的文献中，“呢啥”在形式上可用于是非问、选择问及特指问等疑问句式。如：

（17）a. 是非问：要紧呢啥？/要紧个。（要紧吗？/要紧的。）（《法华》403 页）

b. 选择问：是打算列拉京裏向寻人家呢，还是出门去呢甚？（您是打算在京里找人家呢，还是出去找呢？）（《便商》问答 18.20）

c. 特指问：老弟，我一向勿看见侬，到啥地方出去之呢啥？ / 一眼勿错，外势出去之一时。（老弟，偺们这一向没见，是上甚么地方去了么？/可不是么，我是出了荡外。）（《土话》官商吐属 8 章）

上例中，是非问的“呢啥”去掉“啥”后不能成立（要紧呢啥？→＊要紧呢？）；而特指问和选择问去掉“啥”后，仅保留“呢”，疑问句仍可成立，这与疑问语气助词“呢”在上海方言中一般用于特指问和选择问的语法特点相吻合（许、汤 1988：468）。同时，这一差异也表明，“呢”与“啥”在功能上具有一定的独立性，并非始终作为不可分割的整体发挥疑问功能。《语法》130 页将“要打呢啥”译作 D*o you want to fight, or what is it you want to do?*，也为这一分析提供了旁证。Park & Kim（2025）对英语疑问词构式的研究也表明，疑问词与句内句法成分之间并非总是呈现简单的一一对应关系。就“要打呢啥”而言，“啥”虽然在句内没有明确的对应成分，也不要求听话人直接回答“什么”，但仍可理解为在“要打”这一内容之外追加一个开放的选择，即“还是要做什么”。因此，本文认为“呢啥”并非是一个凝固的复合语气助词，“呢”和“啥”分别承担了不同的功能，“呢”为疑问语气助词，而“啥”仍保留疑问代词“什么”的性质，“呢啥”可理解为“……呢，（还是）什么”。

5. 结语

本文考察了近代上海方言文献中“啥”及其相关形式的用法，发现“啥”的组合形式较为丰富，“啥（哚）”具有向反预期功能扩展的倾向，而“哚啥”“呢啥”中的“啥”承担不同的语法功能。

【参考文献】

曹兴隆 2025.〈明清吴语中的“啥”类句末助词〉.《语言与文化论丛》第 12 辑，158–175 页。

冯春田 2000.《近代汉语语法研究》. 山东教育出版社。

刘丹青 2023.〈“啥”的原因问用法及预期性三分法——吴江方言及苏州方言的个案〉.《语言研究》43（1），60–67 页。

刘炎、黄丹丹 2015.〈反预期话语标记“怎么”〉.《语言科学》第 2 期，181–193 页。

刘月华 1985.〈“怎么”与“为什么”〉.《语言教学与研究》第 4 期，130–139 页。

吕叔湘主编 1999.《现代汉语八百词》（增订本）. 商务印书馆。

吕叔湘著、江蓝生补 2017.《近代汉语指代词》. 商务印书馆。

钱乃荣 1997.《上海话语法》. 上海人民出版社。

钱乃荣 2014.《西方传教士上海方言著作研究：1847—1950 年的上海话》. 上海大学出版社。

邵敬敏等 2010.《汉语方言疑问范畴比较研究》. 暨南大学出版社。

盛益民 2025.〈从方言接触看疑问代词“啥”从官话到吴语的扩散〉.《中国语言学报》2025（1），223–255 页。

石汝杰 1999.〈苏州方言的代词系统〉.《代词》，85–101 页. 暨南大学出版社。

石汝杰、宫田一郎 2005.《明清吴语词典》. 上海辞书出版社。

徐烈炯、邵敬敏 1998.〈上海方言与北京方言疑问代词比较研究〉.《上海方言语法研究》，64–78 页. 华东师范大学出版社。

许宝华、汤珍珠主编 1988.《上海市区方言志》. 上海教育出版社。

许宝华、陶寰 1997.《上海方言词典》. 江苏教育出版社。

颜逸明 1994.《吴语概说》. 华东师范大学出版社。

Chang, Miao-Hsia 2015. “Two Counter-expectation Markers in Chinese.” In Javier E. Díaz-Vera (ed.), *Metaphor and Metonymy across Time and Cultures*, 141–170. De Gruyter Mouton.

Park, Youn-Gyu & Jong-Bok Kim 2025. “Coordinated Wh-Questions in English: A Corpus-Based Perspective.” *Korean Journal of Linguistics* 50(1): 1–32.

漢語泰興方言（河失鎮）の直接疑問文について

丁秀
神戸市外国語大学大学院博士課程

要旨

本発表では、漢語泰興方言（江淮官話；江蘇省泰興市河失鎮）の口語資料に基づき、疑問文の体系を記述・分析する。泰興方言は「个 VP」疑問文については先行研究（顧 2016 など）が存在するが、直接疑問文の全体を対象とした体系的な分析はこれまで行われていない。本発表では、泰興方言の直接疑問文のうち、極性疑問文・内容疑問文・選択疑問文の三種類を取り扱う。具体的には、極性疑問文は「个 X＋(a)/ɛ/əʔ」および「陳述文+ la/lɛ」、内容疑問文は「疑問詞を含む節+(a)」及び「疑問詞を省略した節+ ləʔ/pəʔ」、選択疑問文は「是 A+(a)还是 B+(a)」という構造が見られる。

キーワード：通泰方言、泰興方言、直接疑問文

1. はじめに

本発表では、漢語泰興方言（江淮官話；江蘇省泰興市河失鎮）の口語資料に基づき、疑問文の体系を記述・分析する。本節では本方言の言語的背景とデータについて述べる。

1.1 泰興市及び泰興方言の概況

泰興市は江蘇省泰州市に位置する県級市である。泰興市統計局のデータによると、2025 年末の時点で、泰興の常住人口は 97.73 万人である[1]。

泰興方言は江淮官话-泰如片に属している[2]。図 1 泰興方言概況[3]を見られたい。

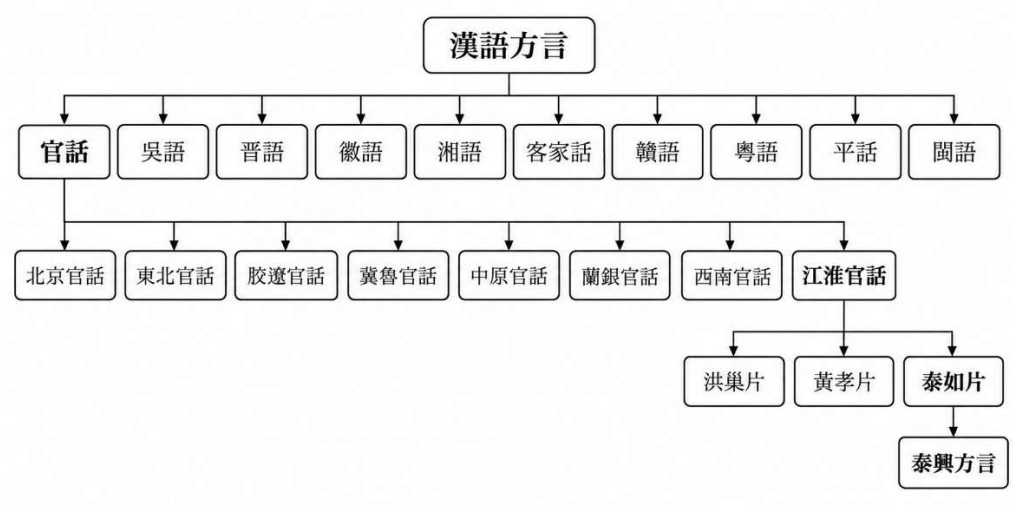


図 1 泰興方言概況

[1] https://www.taixing.gov.cn/zwgk/xxgk/tjxx/art/2026/art_525864885a8b432082bb7bcc90f3da7d.html
泰興市人民政府ウェブサイト[2026 年 09 月 20 日最終閲覧]

[2] 『中国语言地图集(第 2 版)』による。

[3] 本図は侯精一(2002)『現代漢語方言概論』の記述に基づき、筆者が作成した概略図をもとに、ChatGPT を用いて図のレイアウトを整えたものである。

1.2 研究対象

本研究は、江蘇省泰興市河失鎮を中心とする泰興方言を対象とし、筆者自身（母語話者）およびその家族から収集した自然発話データを分析資料とする。

2. 先行研究

まず、疑問文とは何かを説明する。黄伯荣 (1984) は「質問的な語調や語調を持つ文はすべて疑問文に属す」としている。

2.1 疑問文の分類に関する先行研究

現代中国語の疑問文の基本的な分類について、様々な研究がこれまでに行われている（太田 1958、Li & Thompson1981、黄伯荣 1984、吕叔湘 1985、邵敬敏 1996 など）。朱德熙 (1985)などをはじめ、中国語方言についても同様に多様な研究がなされてきた。構造に基づく分類としては、「是非疑問、特指疑問、選択疑問、反復疑問」の四種が最も頻繁に取り上げられる。一方で、承前疑問（太田 1958）や付加疑問（Li & Thompson1981）などのほかの分類も存在する。疑問文の類型は研究者によって異なる。

本研究では、以下で「是非疑問」を「極性疑問」、「特指疑問」を「内容疑問」と呼ぶ。

2.2 漢語方言の疑問文に関する先行研究

現代中国語における疑問文の分類については前節で述べたが、方言ではどのような状況にあるのだろうか。中国の諸方言を概観すると、多くの方言において“可/个/格+VP”（以下、“K+VP”と略記する）形式の疑問文が存在することが確認される。例えば、本発表で取り上げる泰興方言でも“个[kɤɯ⁴²]+VP”疑問文が見られる（例：“恁个去？”「行くの？/行きますか」）。このような“K+VP”疑問文を疑問文体系の中でどのように位置づけるべきかについては、多くの研究者によって議論が行われてきた（朱德熙 1985、刘丹青 1991、丁治民 2003、顾黔 2016、江婷婷 2020、吴莹莹 2016 など）。

また、朱德熙 (1985) は《汉语方言里的两种反复问句》において、漢語方言の反復疑問文には“VP 不 VP”型と“可 VP”型の二種類が存在すると指摘している。さらに、これら二種類の反復疑問文は相互に排他的であり、同一方言の中には共存しないと主張している。刘丹青 (1991) は蘇州方言における“可+VP”構文を分析した上で、朱 (1985)が提唱した「K+VP は反復疑問文に分類される」という見解に異議を唱え、“K+VP”はむしろ是非疑問文に属すると論じている。

2.3 泰興方言の疑問文に関する先行研究

朱琳 (2011)は、泰興方言の ADV+VP 疑問文を主に既然相と未然相の二種類に分類し、この疑問文末の助詞は主として a 系と əʔ系の二つの体系から成ることを指摘している。

また、顾黔 (2016)は、泰興方言の疑問文の体系を特指疑問文・選択疑問文・「个 VP」疑問文の三種類に分類している。さらに、泰興方言の「个 VP」疑問文は、現代中国語の反復疑問文および是非疑問文に対応すると述べている。

3. 泰興方言（河失鎮）の直接疑問文

これから泰興方言の直接疑問文について例に基づき、記述を進める。結論を先取りすると、以下の表 1 のように A-E の 5 つの構文として整理される。順次、記述を行う。

表 1 泰興方言における直接疑問文の分類

疑問の類型		構文
極性疑問文	A	个 X＋(a)/ɛ/əʔ
	B	陳述文+ la/lɛ
内容疑問文	C	疑問詞を含む節+(a)
	D	疑問詞を省略した節+ ləʔ/pəʔ
選択疑問文	E	是 A+(a)还是 B+(a)

3.1 極性疑問文

泰興方言の直接疑問文における極性疑問文には、主に二つの構文が見られる。一つは「个 X＋(a/ɛ/əʔ)」の構文（以下、A 型）であり、もう一つは「陳述文＋la/a/lɛ」の構文（以下、B 型）である。

3.1.1 (A)「个 X＋(a/ɛ/əʔ)」

A 型は泰興方言の疑問文において適用範囲が極めて広い。A 型において、疑問標識“个”が存在するため、文末助詞 a(声門閉鎖音の後:ka 鼻音の後:ŋa)は省略可能だが、省略時には場合によってはぞんざいな印象を与える。一方、文末助詞 ɛ(声門閉鎖音の後:kɛ 鼻音の後:ŋɛ)および əʔはそれぞれ未来・過去の事態に関する解釈に関与するため、省略できない。文末助詞 ɛ が用いられる場合、未来の事態に関する問いとして解釈される傾向がある。例えば、例(1)は「食べるか（食べるかどうか)」を尋ねるものであるのに対し、例(2)は「まだ食べるか」という意味を表す。一方、文末助詞 əʔは必ず“曾”と共起する。ただし、kɤɯ^{42}ʈʂ^{h}əŋ^{0}“个曾”の後には əʔだけでなく、a も用いることができる。例(3)では“个曾……əʔ”、例(4)では“个曾……a”という形式が用いられている。

(1) nəŋ **kɤɯ^{42}** tshəʔ^{4} ka^{0} “你吃吗？”「食べますか。」
　　恁 **个** 吃 a^{0}?

(2) nəŋ **kɤɯ^{42}** tshəʔ^{4} kɛ^{0} “你还吃吗/你还吃不吃了？”「まだ食べる？」
　　恁 **个** 吃 ɛ^{0}?

(3) t^{h}a^{21} **kɤɯ^{42}ʈʂ^{h}əŋ^{0}** lɛ^{45} ɛ^{45} ləʔ^{4} “他来了吗？”「彼はもう着いたか。」
　　他 个曾 来 □$_{ɛ}$ ləʔ^{4}?

(4) t^{h}a^{21} **kɤɯ^{42}ʈʂ^{h}əŋ^{0}** lɛ^{45} a^{0} “他有没有来？”「彼は結局来ましたか。」
　　他 个曾 来 a^{0} ?

3.1.2 (B)「陳述文＋la/lɛ」

B 型「陳述文＋la/lɛ」は、確認を表す傾向があり、文末助詞 la/lɛ は省略できない。la は主にこれから生じる事態についての確認に用いられるのに対し、lɛ はすでに生じた事態についての確認にも用いられる。例えば、例(5)“出去 la？”と例(6)“走 la？”は、それぞれ「これから出かけるのか」「これから行く（帰る）のか」のように、相手のこれからの行動を確認するものである。一方、lɛ が用いられる例(7)“从东□□$_{mɔŋ^{21}ŋei^{0}}$来的 lɛ^{45}？”は、「(あ

の人は）東から来たんでしょう」という意味であり、その人物がすでに来ていることを前提として、東の方から来たのか、それとも別の方向から来たのかを確認している。

(5) ʈʂʰuəʔ⁴tsʰu⁴² la⁴² “出门啦？”「行くの？/これから出かけるのか。」
出去 la⁴²?

(6) ʈʂɤɯ²¹³ la ⁴² “走啦？”「もう行くの？/これから行く（帰る）のか。」
走 la⁴²?

(7) ʈʂʰɔŋ⁴⁵ tɔŋ²¹mɔŋ²¹ŋei⁰ lɛ⁴⁵ tə⁴⁵ lɛ⁴⁵
从 东□□ 来 的 lɛ⁴⁵?
“从东边来的吧？”「東から来たんでしょう。」

3.2 内容疑問文

内容疑問文では、(C)「疑問詞を含んだ節(+a)」型及び(D)「疑問詞を省略した節+ləʔ/pəʔ」型という構造が見られる。

3.2.1 (C)「疑問詞を含む節+(a)」

C 型では、原因・時間・場所・数量など幅広い内容を問うことができる。疑問詞が存在するため、文末助詞 a は省略可能である。

(8) nəŋ⁴⁵ saŋ²¹ **la⁴⁵xɛ²¹³** a⁴⁵ “你去哪里啊？”「どこへ行くのですか。」
恁 上 **哪□** a?
2sg 行く **Q** SFP

(9) nəŋ²¹³ sɿ⁴⁵ **la²¹³kɤɯ⁴⁵** a⁴⁵ “你是谁？”「あなたは誰ですか。」
恁 是 **哪个** a?
2sg cop **Q** SFP

(10) kəʔ⁴tɛɤɯ²¹ŋɤɯ²¹ **tsɿ⁴⁵** tiĩ²¹³ ŋa⁴⁵ “现在几点啊？”「今何時ですか。」
这□□ **几** 点 a⁴⁵?
今 **Q** 時 SFP

(11) kəʔ⁴ sɿ⁴² **səŋ⁴⁵ʈʂɻ⁴⁵** kɔ²¹³ʈʂɻ⁴⁵ a⁴⁵
这 是 **什子** 杲昃 a⁴⁵?
これ COP **Q** もの SFP
“这是什么东西啊？”「これは何ですか。」

3.2.2 (D)「疑問詞を省略した節+ ləʔ/pəʔ」

D 型の使用範囲は限定されている。事物の所在および事態の処理についてしか尋ねることができない。D 型では、事物の所在を尋ねる場合には ləʔ（声門閉鎖音の後:kəʔ、鼻音の後:ŋəʔ)、事態の処理を尋ねる場合には pəʔ（鼻音の後:məʔ）が用いられる。いずれも省略できない。

例えば、例(12)の“伢儿 ləʔ⁰？”と例(14)の“他人 ŋəʔ⁰？”(“他 ləʔ⁰？”とも言える）は、それぞれ「子どもはどこにいる／どこへ行ったのか」「彼はどこにいる／どこへ行ったのか」のように、所在や行き先を尋ねる場合に用いられる。一方、例(13)の“伢儿 pəʔ⁰？”は、ある前提条件のもとで、対象をどうするかを尋ねる場合に用いられる。例えば、「離婚するなら、子どもはどうするのか」のような場合である。

(12) ŋa^{42}əɻ^{0} **ləʔ^{0}** “孩子呢？”「こどもはどこ？」
侬儿 **ləʔ^{0}**？
こども **疑問詞+ SFP？**

(13) ŋa^{42}əɻ^{0} **pəʔ^{0}** “（……，）孩子呢？”「（じゃあ、）こどもは？」
侬儿 **pəʔ^{0}**？
こども **疑問詞+ SFP？**

(14) t^{h}a^{21} ɻəŋ^{45} **ŋəʔ^{5}** “他人呢？”「彼はどこですか。」
他 人 **ləʔ^{0}**？
3SG 人 **疑問詞+ SFP？**

3.3 選択疑問文 (E)是 A+(a)还是 B+(a)

選択疑問文には、 (E)「是 A+(a)还是 B+(a)」という形式が見られる。文頭の“是”は省略可能であり、文末助詞 a も省略できる。その基本的な構造は、現代中国語の選択疑問文とほぼ同様である。なお、文末に a ではなく ləʔ(省略不可)が現れる場合は、直接疑問文ではなく反語文として解釈されるため、本研究の考察対象には含めず、別の機会に論じる。

(15) nəŋ^{213} sɿ^{45} kəŋ^{21}t̪ʂɔ^{21}ts^{h}ʉ^{42} a xa^{45}sɿ^{45} məŋ^{42}t̪ʂɔ^{21} ts^{h}ʉ^{42} a
恁 **是** 今朝 去 a **还是** 明朝 去 a
2SG COP 今日 行く SFP **それとも**明日 行く SFP
“你是今天去啊还是明天去啊？”「今日行くのですか。それとも明日行くのですか。」

おわりに

本研究では泰興方言における直接疑問文を観察した。今後はさらに踏み込み、間接疑問文や反語疑問文を含め、泰興方言の疑問文体系における全容の解明を目指したい。

参考文献

丁治民 (2003) 《东台话的疑问副词“个”》《语文研究》3:60-61
顾　黔 (2016) 《江苏泰兴方言“个VP”问句研究》《语文研究》1:47-51
刘丹青 (1991) 《苏州方言的发问句与“可 VP”句式》《中国语文》1:27-33
刘彦哲 (2016) 《江苏境内方言“可 VP”句式比较研究》南京大学研究生毕业论文
黄伯荣 (1984) 《陈述句、疑问句、祈使句、感叹句》上海：上海教育出版社
吕叔湘 (1985) 《疑问・否定・肯定》《中国语文》4 :241－250.
江婷婷 (2020) 《全椒方言疑问句研究》南昌大学硕士研究生学位论文
邵敬敏 (1996) 《现代汉语疑问句研究》上海：华东师范大学出版社
吴莹莹 (2016) 《东台方言“个 VP”问句研究》扬州大学硕士学位论文
邢福义 (2002) 《汉语语法三百问》北京：商务印书馆
朱德熙 (1989) 《汉语方言里两种反复问句》《语法丛稿》96-113，上海：上海教育出版社
朱　琳 (2011)《泰兴话的 ADV＋VP 问句》《语言研究》Vol. 31 No. 3 pp113-118
太田辰夫 (2013[1958])『中国語歴史文法』朋友書店
Charles N. Li & Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar.* Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

山東半島東部方言における非疑問詞疑問文の地理的概観

滕　暁程
大東文化大学　大学院生

1 研究対象と分類

本発表は、2024 年から 2025 年にかけて山東半島東部で実施した方言調査に基づき、18 の調査地点における非疑問詞疑問文のうち､比較的特徴的な形式の地理的分布を概観する。

普通話研究における術語との混同を避けるため、本発表では、疑問詞疑問文以外の疑問文を「非疑問詞疑問文」と呼び、これを選択疑問文と極性疑問文に分ける。極性疑問文とは、意味的に対立する肯定回答と否定回答によって答えることのできる疑問文を指す。これに対し、選択疑問文とは、回答候補を列挙し、聞き手にその中から選択することを求める疑問文を指す。両者の関係については研究によって異なる定義が採られているが、本発表では形式上の区別に従い、機能上の重なりについては扱わない。

極性疑問文は、中立極性疑問文と偏向極性疑問文に分けられる（日本語の偏向疑問文いついては安達太郎 1999 を参照)。両者の違いは、話者の認識および談話中の根拠が、いずれかの回答を支持する方向性をもつか否かにある。認識または根拠が肯定回答を支持する場合を正方向の傾き、否定回答を支持する場合を負方向の傾きとする。さらに、①談話の進行における質問の位置、②関連する情報の談話上の位置に関する話者の判断、③質問の内容と動機を考慮し、偏向極性疑問文を質疑、困惑、推測、確認の四類に分ける。

質疑とは、一般に、話者が情報を共通基盤に取り込むことを拒否する場合、または当該情報が共通基盤に属することを認めない場合に生じる疑問を指す。困惑は、認識傾きと根拠傾きが一致しない場合に生じる疑問である。推測は、話者が一定の認識をもつものの、それを支える根拠がない場合、または根拠がその認識を支持しない場合に生じる疑問である。確認は、情報の談話上の位置、または現在の議題を明確にするための疑問である。

以下では、これらをそれぞれ選択疑問文、中立極性疑問文、質疑類極性疑問文、困惑類極性疑問文、推測類極性疑問文、確認類極性疑問文と呼ぶ。

2 選択疑問文

調査結果では、山東半島東部における選択疑問文として、主に「A，是 B」式、「A，还是 B」式、「AB」式の三形式が確認された。「A，是 B」式は全域に分布するのに対し、残る二形式の用例は散発的に得られ、明瞭な地理的規則性は認められなかった。ただし、調査後の理解度確認では、調査地域全体を通じて三形式の理解度に差は認められなかった。「A，还是 B」式は普通話の影響によって用いられるようになった可能性があり、他の二形式は当地に従来から存在する疑問形式であると考えられる。

3 中立極性疑問文

山東半島東部の中立極性疑問文は、形式上、主に反復形式、F-VP 式、および「VP 么」式に分けられる。反復形式には、肯定・否定の組み合わせによる形式と、最初の音節のみを反復する「VV」式がある。F-VP 式の下位形式には、「F-VP」式、「F-Neg-VP」式、および「Neg-VP」式がある。

肯定・否定の組み合わせによる反復形式は、肯定項と否定項の並列を基礎とするものであり、現代中国語研究で一般に「反復疑問文」と呼ばれる形式に相当する。未然体では、

「VP 不 VP」式が煙台、蓬莱北、蓬莱南、龍口、招遠、棲霞、海陽、莱陽、莱西、平度、莱州に分布する。その省略形式のうち、「V 不 VP」式は全域、「VP 不 V」式は棲霞、招遠、平度、「VP 不」式は莱州で確認された。莱西では、存在・所有を表す動詞「有」の反復形式として「有不有」が用いられる（例えば「家里有不有苹果？（家にりんごがありますか？）」）。また、蓬莱南と招遠では、連動構造の後項動詞を反復する例がそれぞれ一例（例えば「你们去吃不吃饭？（あなたたちは、ご飯を食べにいきますか？）」）、長島では、助動詞構造内の動詞を反復する例が一例得られた（例えば「你想买不买桃子（桃を買いたいですか？）」）。

已然体では、「VP 没 VP」式およびその省略形式「V 没 VP」式が莱陽、煙台、棲霞、蓬莱南、蓬莱北、長島、龍口、招遠に分布する。「VP 没有」式は平度、莱西、莱陽、海陽、招遠、莱州に分布し、煙台でも確認されている。調査地域では「VP 没有 VP」式の用例が得られていないため、本発表では「VP 没有」式を「VP 没 VP」式の省略形式とはみなさない。一方、招遠では「VP 没」式も確認された。当地では「VP 没有」式から「VP 没」式に至る中間的な音声形式が観察されるため、「VP 没」式は「VP 没有」式の省略形式として扱う。

「VV」式とは、疑問操作の対象となる構造の最初の音節を反復する形式である。この形式には、肯定項と否定項の対立はない。主として龍口、招遠、莱西に分布し、棲霞では命題標識「是」の反復形式のみが確認された。莱西では、裸形容詞、助動詞「会」「能」、および命題標識「是」の反復形式に用例が限られる。長島でも類似の音節反復が確認されたが、付加疑問形式にのみ現れ、独立した疑問文を構成する一般的な「VV」式とは異なるため、本発表では詳細な検討を行わない。

「F-VP」式は、主として調査地域の北西部、すなわち黄県、龍口、長島、蓬莱南、蓬莱北に分布する。これらの地点で用いられる F は、当地のコピュラ「是」と音声形式が異なり、先行研究では「実」と表記されてきた。本発表では、借字による意味上の先入観を避けるため、これを F_1 と表記する。F_1 の音声形式には地域差があり、龍口・黄県では[ɕʃɻ̩ l̩]、蓬莱南では[ɕʃʒ̃ l̩]または[ɕʃɻ̩ l̩]、蓬莱北・長島では[ʃɻ̩ l̩]または[θɻ̩ l̩]として実現する。「F_1VP」式自体には、未然体と已然体による明瞭な形式上の区別は認められない。

「Neg-VP」式は、表面的には否定形式のみを伴う疑問文である。未然体の「不 VP」式は、平度、莱州、莱西、莱陽、乳山、文登、栄成、環翠に分布する。已然体の「没 VP」式は、栄成、文登、乳山、莱西、莱陽、海陽、莱州、平度、牟平で確認された。

「F-Neg-VP」式は、「F_1 没 VP」式、「F_2-Neg-VP」式、「F_3-Neg-VP」式に分けられる。先行研究では F_2 は「是」、F_3 は「可」と表記されてきたが、F_1 と同様の理由から、本発表では漢字による表記を用いない。

「F_1 没 VP」式は蓬莱南に分布する。「没」と表記する成分は[m̩]として実現し、当該形式はほぼすべて已然の命題に用いられるため、ここでは便宜上「没」と表記する。

「F_2-Neg-VP」式は、牟平、環翠、文登、栄成、乳山に分布し、未然体では「F_2 不 VP」式、已然体では「F_2 没 VP」式となる。「F_3-Neg-VP」式が確認されたのは牟平と環翠のみであり、用例数も少ない。未然体は三例で、それぞれ裸形容詞、裸動詞、可能補語に用いられている。已然体は環翠で得られた一例のみで、動目構造に用いられている。

中立極性疑問を表す「VP 么」式は、平度、莱州、莱西、莱陽、海陽、招遠、棲霞、煙台に分布する。統語的には、助動詞「能」「会」「想」、および存在を表す動詞「有」「在」を

含む用例のみが確認された。ただし、山東半島東部方言の「VP么」式は主として偏向極性疑問を表す。その機能と分布については次節で述べる。

中立極性疑問形式の分布を図 1・図 2 に示す。標識の大きさは、調査で得られた用例と母語話者への確認に基づく相対的な優勢度の目安である。

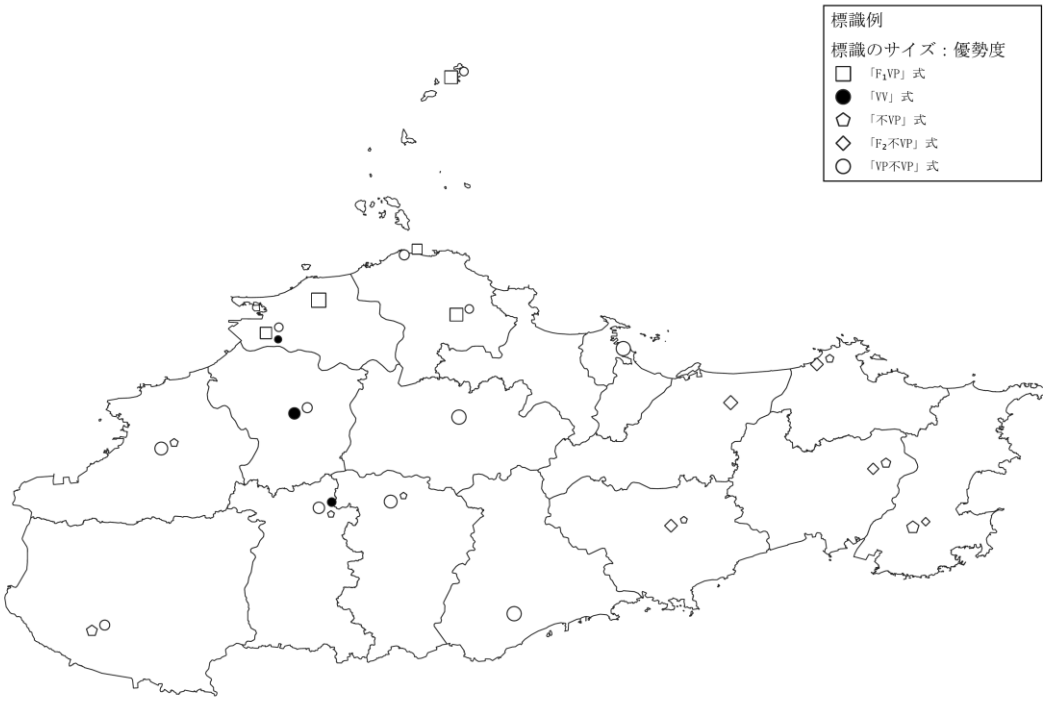


図 1　未然体の中立極性疑問に用いられる形式の地理的分布

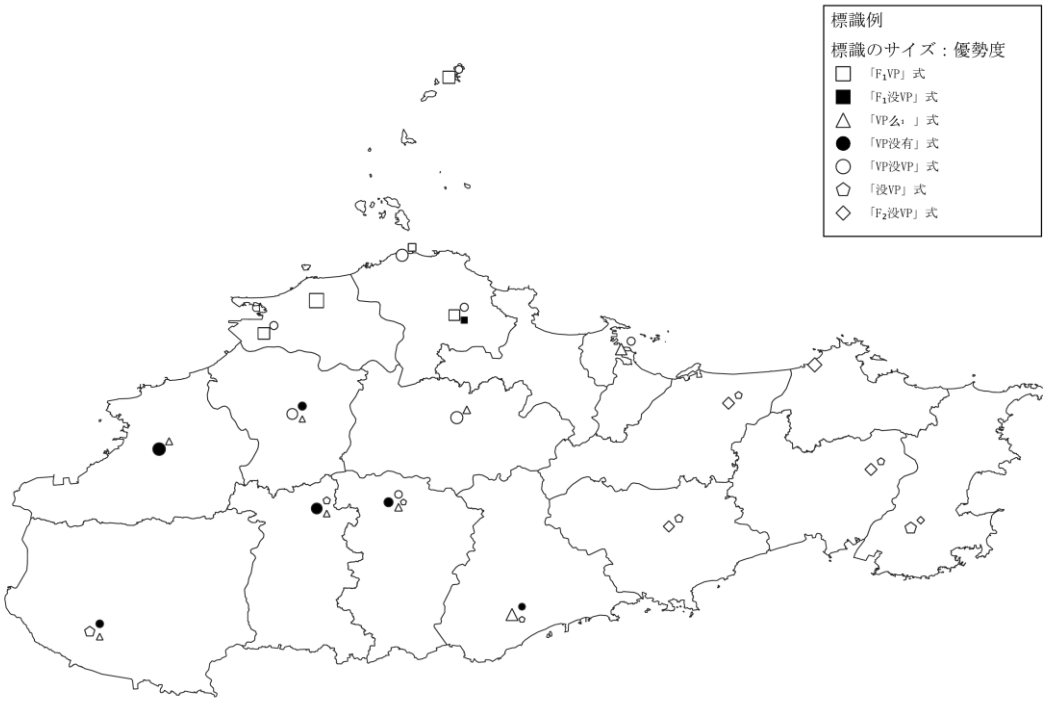


図 2　已然体の中立極性疑問に用いられる形式の地理的分布

未然体では、招遠・棲霞・海陽・煙台を結ぶ Y 字型の中軸に反復形式が集中する。この軸を取り巻く北部では「F_1VP」式、東部では「F_2 不 VP」式が主要な形式となり、西南部では反復形式と「不 VP」式が併存する。「不 VP」式は東西の両側に分布する一方、中部では分布が途切れる。

已然体では、「VP 没 VP」式と「没 VP」式が、招遠・莱陽・海陽を結ぶ線を境として、東西におおむね相補的な分布を示す。また、F_1関連形式は北部に、F_2関連形式は東部に集中し、それぞれ比較的まとまりのある分布域を形成している。一方、「VP 么」式の中立用法は主として西南部から中部にかけて分布し、「没 VP」式は調査地域の南部に広く分布する。これらの分布域には部分的な重なりも認められ、同一地点で複数の形式が併存する。したがって、已然体の中立極性疑問の地理的特徴は、各形式の地域的な集中と、分布域の重なりの両面から捉えることができる。

以上のように、未然体と已然体では、中立極性疑問を担う形式の組み合わせと、その地理的なまとまりが異なる。両者の分布は単純には対応せず、同一地点でも、未然体と已然体とで主要な形式が異なる場合がある。中立極性疑問の地域差は、個々の形式の有無だけでなく、複数の形式の併存と優勢度、さらに未然体・已然体の違いを併せて捉えることで、より明確になる。

4 偏向極性疑問文

各種の偏向極性疑問文は、形式および地理的分布に重なりが見られるため、以下では形式を出発点とし、同一形式が担う異なる機能の分布を検討する。

偏向極性疑問文として比較的多く確認されたのは、「VP 哈」式、「VP 啊」式、「VP 么」式、および無標識疑問文である。このうち「VP 哈」式は調査地域の全域に分布し、確認類極性疑問のみを表す。

「VP 啊」式も全域に分布する。この形式は、「VP 哈」式とは異なる確認類極性疑問を表すほか、推測類極性疑問にも用いられる。両機能とも、調査地域の全域で確認された。

無標識疑問文は、明示的な疑問標識を伴わず、イントネーションによって疑問を表す形式であり、全域で困惑類極性疑問に用いられる。また、環翠、牟平、煙台、棲霞、蓬莱南、蓬莱北、長島、黄県、龍口、招遠では、推測類極性疑問としての使用も確認された。

「VP 么」式は、前節で述べた中立極性疑問のほか、推測類極性疑問と困惑類極性疑問を表す。推測類の用法は海陽、乳山、文登、栄成、環翠、牟平、煙台、棲霞、招遠、龍口、蓬莱南、蓬莱北、黄県、長島に分布する。困惑類の用法は、莱陽、平度、莱西、栄成、文登で確認された。なお、文末の「么」の出現には、先行する文の内部構造との共起上の制約も認められる。「VP 么」式には全域においてモダリティ要素との義務的共起を要求する。ここでいうモダリティ要素には、助動詞、存在動詞、否定辞、および「还」「偏」などの特定の副詞が含まれ、無意味的記号とする場合もある。例えば、反語文の「你还拿钱包了么？你得结账（財布持ってないのに、払うつもり？）」の中、「还」は字義通り意味を持たず、省略不可である。

「VP 么」式の機能別の分布を図 3 に示す。

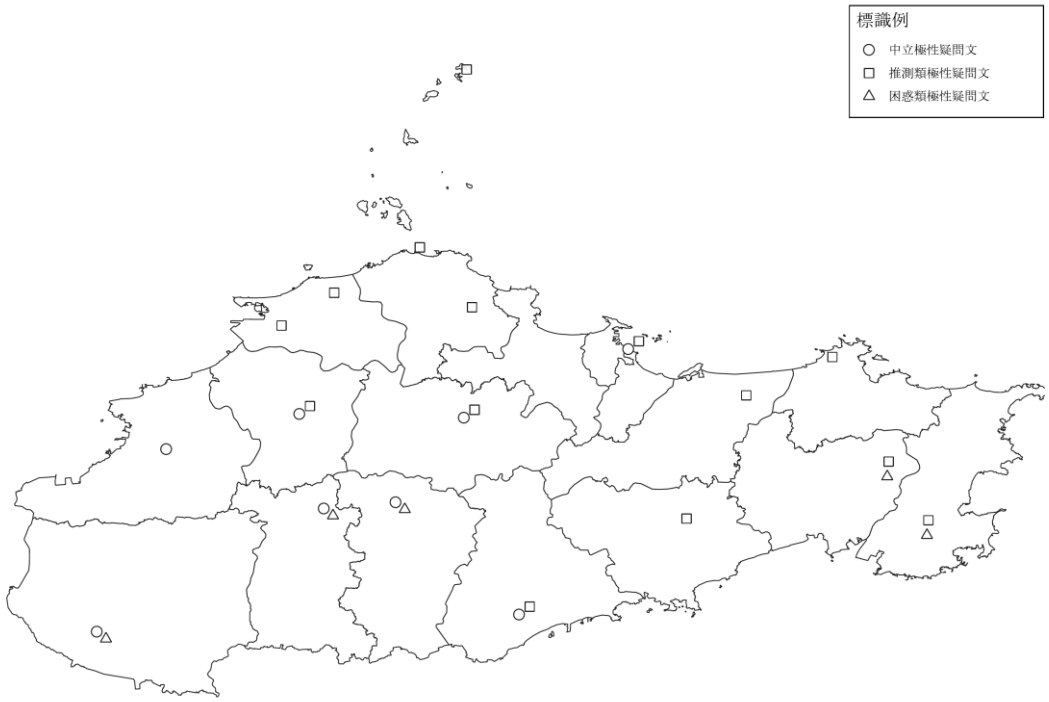


図 3　「VP 么」式の機能別地理的分布

図 3 に示すように、「VP 么」式の機能分布には、主に三つの地域的なパターンが認められる。第一に、西南部の平度・莱西・莱陽では、困惑類極性疑問と中立極性疑問の用法が併存する。第二に、中部の招遠・棲霞・煙台・海陽では、中立極性疑問と推測類極性疑問の用法が併存し、「VP 不 VP」式の同じような Y 字型の分布軸を形成している。第三に、北部および東部では、F_1・F_2関連形式が中立極性疑問を担う地域を中心に、「VP 么」式は推測類極性疑問のみに用いられる。

ただし、莱州では中立極性疑問の用法のみが確認され、東端部の文登・栄成では推測類極性疑問と困惑類極性疑問の用法が併存する。このように、「VP 么」式は地域によって担う機能の組み合わせが異なり、その分布は一様ではない。

5 まとめ

本発表では、山東半島東部の 18 地点を対象に、非疑問詞疑問文の形式と機能の地理的分布を概観した。その結果、同一の機能を担う形式に地域差があるとともに、「VP 么」式のように、同一形式が担う機能の組み合わせにも地域差が認められた。

ただし、調査範囲および規模の制約から、本研究にはなお課題が残る。とりわけ「VP 么」式の機能の判定は、調査後の理解度確認や母語話者の語感に基づく補足に大きく依存しており、確かな結論を得るには追加調査が必要である。また、調査では多様な付加疑問形式も得られたが、これらを対象とする調査項目をあらかじめ設けていなかったため、用例数や分布、機能を十分に把握するための資料が不足している。付加疑問形式に焦点を当てた別途の調査も、今後の課題としたい。

参考文献

安達太郎 1999 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版.
滕晓程 2025 山东半岛东部四区市非特指问考察, 《中国言語文化学研究》, 14:55–74 .

「様」の様子―客家語山口洋方言における「个様」の文法化―[1]

張祁凱　　Klara Gorgonia
東京大学　大学院生　　東京大学　研究生

1. はじめに

「見た目」を表す形式が、推論を表す形式へと発展する現象は、複数の言語で報告されている (普通話 : Jiang 2013、日本語 : Narrog 2009、韓国語 : Song 2010、ビルマ語・韓国語 : 萬年・林・長屋 2026、タガログ語 : Nagaya and Hayashi 2026)。客家語山口洋方言にも、これと類似する現象がみられる。本稿では、客家語山口洋方言において、「見た目」およびそれに関連する意味を表す名詞「様 (dʒoŋ^{11})」が体言化標識「个 (kaj^{31})」と結びつき、「个様 (kaj^{31} dʒoŋ^{11})」という証拠性標識へと文法化している現象を記述する。

本稿では、まず普通名詞としての「様」の用法を記述する。「様」は「外見」「様態」「方式」を表し、基本的には体言化標識「个」と合わせて名詞句「X 个様」を形成し、「X の様子」を表す。次に、再分析 (reanalysis)、脱範疇化 (decategorization)、意味の抽象化などの観点から「个様」が文法化している証拠を提示する。最後に、文法化した「个様」を機能的に広義の証拠性標識として位置づけ、その特徴として視覚的証拠への依存を指摘する。

本稿で扱う客家語山口洋方言の例文は、主に母語話者である発表者 (Gorgonia) の内省に基づくものである。容認性判断については数名の母語話者に確認した。

2. 「様」の意味と用法

客家語山口洋方言の「様」は、「外見」「様態」「方式」などを表す名詞である。基本的には (1) と (2) のように、[[X [个]NMLZ]NP 様]NP というような名詞句構造を形成し、「X の様子」を表す。

(1) ŋaj^{34} ŋ^{34} njen^{31} gja^{55} kaj^{31} **dʒoŋ^{11}**
1SG NEG like 3SG.POSS NMLZ appearance
「私は彼／彼女の様子が好きではない。」

(2) ŋa^{55} kjen^{55}tu^{11} kaj^{31} **dʒoŋ^{11}** pjen^{31} het^{3} ljaw^{34}
1SG.POSS room NMLZ appearance change away PFV
「私の部屋の様子が変わった。」

このほか、「這様 (li^{34} dʒoŋ^{11})」「該様 (kaj^{34} dʒoŋ^{11})」「別様 (pʰet^{4} dʒoŋ^{11})」など、一定程度固定化した表現にも用いられる。

3. 証拠性標識としての「个様」

客家語山口洋方言には、2 節で見た名詞句の一部としての「个」「様」とは異なり、(3) お

[1] 本稿の内容についてコメントをくださった長屋尚典先生、石川さくらさん、林真衣さん、萬年容さん、ともに客家語山口洋方言を研究している周杜海さん、上野瞭太さん、髙橋翼さんに感謝します。

よび (4) のような「个様」の用法も存在する。

(3) oj^{31} lo?^{4} suj^{11} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
PROSP fall water 个様
「雨が降りそうだ。」

(4) gi^{34} an^{55} hot^{4} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
3SG very tired 个様
「彼はとても疲れているようだ。」

第 3 節で示すように、この用法においては、「様」は名詞句の主要部として機能しておらず、 [[X [个]NMLZ]NP 様]NP という構造を形成しているわけではない。むしろ、[[文]CLAUSE [个様]EVID]S のような構造を形成し、「个様」は一つのまとまりとして機能し、話し手の推量を示す。以下では、このような「个様」を文法化した形式として分析し、それが視覚的証拠に基づく推論証拠性標識として機能することを主張する。

3.1. 「个様」の文法化の証拠

文法化の定義は、研究者や理論的立場によって異なる (Narrog and Heine 2011)。本稿では、文法化を、ある形式が語彙的な用法から文法的な用法へ、またはより文法性の高い用法へ発展する過程として捉える。

客家語山口洋方言における普通名詞「様」から証拠性標識「个様」への変化は、形式面と意味面の両方に文法化の特徴が認められる。形式面では、「个」と「様」が再分析され、一つのまとまりとなっている。この過程において、「様」は名詞としての統語的性質を失い、名詞句の主要部として機能しにくくなっている。意味面では、「様」の語彙的意味が弱まり、推論を表す、より抽象的な意味へと変化している。

3.1.1. 再分析

再分析は、文法化における重要なメカニズムの一つである (Traugott 2011)。証拠性標識「个様」の場合、もともと体言化標識「个」と普通名詞「様」からなるものが、一つの形式として再分析されたと考えられる。その根拠として、「个様」の可分析性の低下が挙げられる。文法化していない「个様」では、「个」と「様」の間に他の成分を挿入することができるが、文法化している「个様」にはそれができない。例えば、「gi^{34} ŋi^{11} sip^{4} soj^{31} **kaj^{31} dʒoŋ^{11}**」という文は (5) のように普通名詞「様」を主要部とする名詞句としても、(6) のように外見に基づく推量を表す文としても解釈できる。

(5) gi^{34} ŋi^{11}sip^{4}soj^{31} **kaj^{31} dʒoŋ^{11}**
3SG twenty year.old NMLZ appearance
「彼の二十歳の様子」

(6) gi^{34} ŋi^{11}sip^{4}soj^{31} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
3SG twenty year.old 个様
「彼は二十歳のようだ。」

しかし、(7) のように「个」と「様」の間に修飾成分を挿入すると、推量の解釈は成立せず、「様」は普通名詞としてのみ解釈される。

(7) gi^{34} ŋi^{11}sip^{4}soj^{31} **kaj^{31}** hoʔ^{4}saŋ^{55} **dʒoŋ^{11}**
3SG twenty year.old NMLZ student appearance
「彼の二十歳の学生姿」

このことから、文法化した「个様」では内部構造の可分析性が低下し、「个様」全体が一つのまとまりとして機能していると考えられる。

3.1.2. 脱範疇化

脱範疇化とは、元のカテゴリーに典型的な形態統語的特徴を喪失することでり、文法化の程度を判断するための主要なパラメータの一つとされる (Lamiroy and De Mulder 2011, Bybee et al. 1994)。

証拠性標識「个様」における「様」は、名詞範疇からの脱範疇化が見られる。例えば、(8) における文法化していない「个様」は、普通の名詞句を形成し、主語や目的語などの典型的な名詞句の位置に現れることができる。

(8) ŋi^{34} sit^{4}fon^{11} **kaj^{31}** **dʒoŋ^{11}** k^{h}on^{31}to^{11} law^{55} an^{55} ki^{55} kaj^{31}dʒoŋ^{11}
2SG eat NMLZ appearance seem.like like very starve 个様
「あなたの食べる様子は、とてもお腹が空いているように見える。」

これに対して、文法化した「个様」は名詞句を形成せず、主語や目的語などの位置には現れない。例えば、(9) では「个様」が推量を表している。しかし、この「个様」を含む形式をそのまま名詞句として用いると、(10) のように不自然な文になる。つまり、この「个様」では、「様」の名詞性が弱まっており、脱範疇化が生じていると考えられる。

(9) mun^{34}poj^{31} dʒiw^{55} njin^{34} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
outside exist person 个様
「外に人がいるようだ。」
(10) ?? mun^{34}poj^{31} dʒiw^{55} njin^{34} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}** haʔ^{3} to^{11} ŋaj^{34}
outside exist person 个様 scare RES 1SG
「外に人がいるようだということが私を驚かせた。」

3.1.3. 意味の抽象化

普通名詞である「様」は指示対象を持つのに対して、証拠性標識「个様」においては、「様」は指示性を失い、その語彙的な意味も弱まり、より抽象的な意味を表すようになっている。例えば、 (11) では「事故が起きた様子」を指しているのではなく、「事故が起きたようだ」という推論を表している。

(11) a^{11}un^{34} an^{55}tʃʰjoŋ^{31} dʒiw^{55} njin^{34} tʃʰoŋ^{11} to^{11} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
there seem exist person hit RES 个様
「(人だかりやパトカーなどを見て) あそこで交通事故が起きたようだ。」

3.2. 「个様」の機能

3.2.1. 証拠性標識

本稿では、Tournadre and LaPolla (2014) による広義の証拠性の定義に基づき、「个様」を証拠性標識として分析する。

Tournadre and LaPolla (2014) は証拠性を詳しく分類し、情報源とアクセスを区別して捉えている。この分類に基づくと、まず、「个様」は間接情報源、すなわち伝聞を表すことができない。例えば、前節の (11) のように、視覚的手がかりに基づいて「あそこで事故が起きた」と推測する場合には「个様」を自然に用いることができる。これに対して、(12) のように、同じ内容であっても、他者から聞いた情報に基づいて推量する場合には「个様」の使用が不自然になる。

(12) ?? a^{11}un^{34} an^{55}tʃʰjoŋ^{31} dʒiw^{55} njin^{34} tʃʰoŋ^{11} to^{11} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
there seem exist person hit RES 个様
「(人から事故が起きたと聞いて) あそこで事故が起きたようだ。」

次に、直接情報源の場合、「个様」が表すのは直接アクセスではなく、観察可能な手がかりを介して間接的なアクセスである。例えば、(13) のように話し手自身の知覚を述べる場合や、(14) のように話し手が事態を直接経験している場合には、「个様」は用いにくい。

(13) ?? ŋaj^{34} mo^{34} maj^{31} khoj^{55} sim^{55} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
1SG NEG DEG happy 个様
「私はあまり嬉しくないようだ。」

(14) ?? mun^{34} poj^{31} loʔ^{4}-hen^{11} suj^{11} **kaj^{31} dʒoŋ^{11}**, ŋaj^{34} dʒit^{3} sin^{55} sip^{3} tʃʰiw^{55}
outside fall-PROG water 个様 1SG whole body wet all
「外は雨が降っているようだ。私は全身びしょ濡れになった。」

以上の分析に基づき、「个様」が表しうる証拠性のタイプを図 1 に示す。

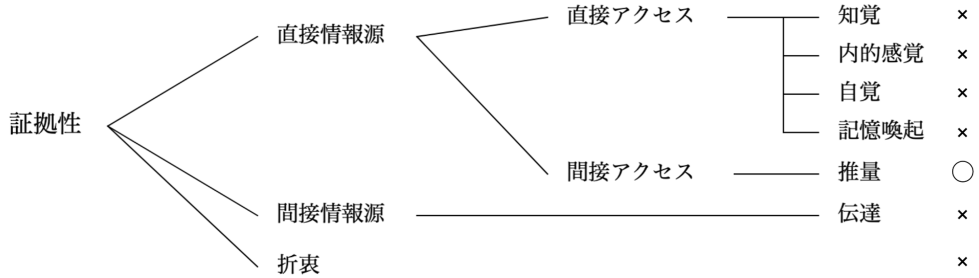


図 1 「个様」が表しうる証拠性のタイプ

3.2.2. 視覚証拠への依存

推量証拠性標識としての「个様」は、その使用が視覚証拠に依存するという特徴を持つ。非視覚的情報に基づく推論では「个様」の使用が好まれない。例えば、(15) と (16) のように聴覚的証拠のみに基づいて推論する場合、「个様」を用いると不自然になる。

(15) ?? a^{11}un^{34} an^{55}tʃʰjoŋ^{31} dʒiw^{55} njin^{34} tʃʰoŋ^{11} to^{11} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
there seem exist person hit RES 个様
「(サイレンの音が聞こえて) あそこで事故が起きたようだ。」

(16) ?? gi^{34} kjen^{55}tu^{11} kaj^{34} tɕit^{3} hen^{11} koŋ^{31}kʰim^{34} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
3SG room there press PROG piano 个様
「(ピアノの音が聞こえて) 彼が部屋でピアノを弾いているようだ。」

また、(17) のように、推論の根拠となる証拠が与えられない文脈でも、「个様」の使用が不自然になる。

(17) ??an^{55}tʃʰjoŋ^{31} ŋ^{34} ki^{31}tet^{3} dʒiu^{55} maj^{31} saŋ^{55}se^{31} **kaj^{31}dʒoŋ^{11}**
seem NEG remember exist what matter 个様
「何かを忘れているようだ。」

Tournadre and LaPolla (2014) は、証拠性を単一カテゴリーとして分類するだけでは不十分であり、実際の発話場面では感覚的アクセスと推論が密接に関わり合うことを指摘している。客家語山口洋方言における「个様」は、このような複合的な証拠性を示している。

4. 結論

本稿は、客家語山口洋方言における「个様」の文法化について記述した。「見た目」を表す名詞「様」と体言化標識「个」が、再分析によって一つのまとまりとなり、証拠性標識「个様」へと文法化したと考えられる。機能的には広義の証拠性標識として位置づけられ、視覚的証拠に基づく推論に用いられる点に特徴がある。

参考文献

萬年容・林真衣・長屋尚典 (2026)「日本語・韓国語・ビルマ語の証拠性表現: コーパスに基づく対照研究」韓國日本語學會第 54 回國際學術發表大會.

Bybee, Joan L., Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World. Chicago: University of Chicago Press.

Jiang, Haowen (2013) Appearances are not skin deep: On the status of de yangzi as an inferential marker in colloquial Mandarin discourse. Chinese Language and Discourse. An International and Interdisciplinary Journal 4(1): 35-73.

Lamiroy, Béatrice and Walter De Mulder (2011) Degrees of grammaticalization across languages. In: Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.) Oxford Handbook of Grammaticalization, 302-317. Oxford: Oxford University Press.

Nagaya, Naonori and Mai Hayashi. Under review. Many faces of Tagalog mukha 'face'.

Narrog, Heiko (2009) Modality in Japanese: The layered structure of the clause and hierarchies of functional categories. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Narrog, Heiko and Bernd Heine (2011) The Oxford handbook of grammaticalization. Oxford; New York: Oxford University Press.

Song, Kyung An (2010) Various Evidentials in Korean. In: Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation.

Tournadre, Nicolas and Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. Linguistics of the Tibeto-Burman Area 37(2): 240-263.

Traugott, Elizabeth Closs (2012) Grammaticalization and mechanisms of change. In: Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.) The Oxford Handbook of Grammaticalization, 19-30. Oxford University Press.

從客觀條件到主觀評價：客語句末「正得」的語法化

葉瑞娟　　黃漢君
國立清華大學教授　　國立清華大學副教授

1. 引言

本文聚焦於台灣客語句末「正得」的語法和語意特點，並透過與早期客語比較，勾勒其語法化路徑。「正」為等級(scalar)副詞，大致可對應華語的副詞「才」(柯理思 2002、葉瑞娟 2011)，如(1)；「得」是情態詞，通常出現在動詞之後，可表潛能或允許等可能情態義(Chiang 2009)，如(2)。值得注意的是，當「正得」共現於句末時，常見兩種解讀：第一是情態義「……才可以」，如(3)，「正」與表可能性的「得」結合時，使前述命題(P)成為達成某一結果(Q)的必要條件，即「P 才行/非 P 不可」；第二是表說話者主觀評價的「真是……」，也就是「真是 P」如(4)，這種用法在文獻中較少受關注(cf. 王毅力 2025)。本文結合早期傳教士、日治時期與現代台灣客語語料，探討「正得」由情態發展為句末評價標記的動因與機制。

(1) 英語愛日日練習正講得到。 ‘英語要天天練習才能說。’ (柯理思 2002: 346, ex. 4)
(2) 佢來得 ‘他可以來 (能力/條件或許可)’
(3) 日日搵到屋下，像麼个？敢講就愛監吾俫仔畜正得？(MH 102)
‘每天待在家裡，像什麼？難道說硬要我兒子養才可以？’
(4) 知知佢借錢自從毋識還，你還煞猛啊揷錢畀，牙爹正得！(教育部臺灣客語辭典(= MOE))
‘明知他借錢從來不曾還，你還猛塞錢給他，真是愚蠢！’

2. 文獻回顧

客語「正」有各種不同的用法(參見柯理思 2022、葉瑞娟 2011、盧惠惠 2020)，跟本文討論較為相關的是副詞用法。根據葉瑞娟(2011)，台灣客語「正」的連接(linking)用法主要表示偏離背景命題，以(5)為例，「正」主要用來排斥說話者和聽話者之間原本共同接受的假設(即背景命題「隨便都有人疼」)，如果要得到疼愛，必須要跟奶奶長得像(「像阿婆，有人疼」)才可以。盧惠惠(2020)則主張，江西南康客家話「正」的關聯副詞用法出現在複句，可連結條件與結果關係小句，用來表示條件之下出現的結果，如(6a)，另外，語氣副詞「正」可傳遞「辯駁、感嘆」語氣，如(6b)將「今天」變為對比焦點，強調其唯一性。

(5) 該有像阿婆正有人惜哩 ‘那有像奶奶，才有人疼呢’ (葉瑞娟 2011: 208, ex. 26b)
(6) a. 只有你去請佢正會來 ‘只有你去請他才肯來’ (盧惠惠 2020: 259, ex. 22)
b. 今日正(喺)大年三十晡，唔喺明朝 (盧惠惠 2020: 259, ex. 26)
‘今天才是大年三十，不是明天’

此外，先前文獻也討論了客語句末「正」(如柯理思 2022、盧惠惠 2020)，如(7)。柯理思(2002)主張客語句末「正」源於「VP1＋ 正 ＋VP2」的結構，主要功能是表示「暫時 VP/先 VP 再說」，因 VP2 所傳達的訊息是說話者與聽話者共有的訊息，為不言而喻的預設訊息，因此可以被省略，使得原本位於句中的「正」出現在句末，此外，此類句子帶有明顯的情態意義，表說話者對聽話者的命令、勸告、請求等，這種情態意義的形式在漢語裡常常出現在句末。

(7) [孩子要買一部車，父母告訴他]愛考到大學正 ‘你要先考上大學啊’ (柯理思 2002, ex. 16)

客語「得」原意為「獲得、取得」，根據鍾叡逸(2013)，「得」可在「V-得-C」結構中充當表能力的能願情態(8a)或在「V-得」結構中充當表允許的義務情態(8b)，不同於其他情態詞，這些用法的「得」必須出現在動詞之後。Chiang (2009: 96)則指出「V-得」可同時有潛在可能義(potentiality)和允許義，如(9)具有歧義，在潛能解讀中，此句表示休閒鞋因其舒適性而適合或可以穿去上班，在允許解讀中，則表示休閒鞋因其正式程度尚可，而獲准穿去上班。

(8) a. 阿明食得落五碗飯 ‘阿明吃得下五碗飯’ (鍾叡逸 2013: 714, ex. 3a)
b. 阿明食得五碗飯 ‘阿明可以吃五碗飯’ (鍾叡逸 2013: 714, ex. 2a)
(9) 休閒鞋上班乜著得 ‘休閒鞋上班也可以穿’ (Chiang 2009: 96, ex. 2-64)

儘管先前文獻對「正」和「得」都有一定的論述，但卻少有針對兩個詞共現的結構進一步研究。其中一個例外是 Chiang (2009: 106-107)，她認為客語的肯定潛能補語構式(「V-得-C」)前面都出現「正」，「正」常用於條件句，表示只有在第一個子句所描述的條件達成後，第二個子句中的行為才具有實現的可能性，如(10)。但這種結構並非本文所研究的句末「正得」用法。另外一個例外是徐兆泉(2009)所編纂的辭典，他主張「正得」置於詞後，表示「真是...」，又作「得似...」(p. 1473)。然而，這僅是辭典提供的定義，並未深入分析此結構之特點。因此本文想要補足目前這個研究上的缺口。

(10) 著獎券無恁該，運氣好个人正著得著 (Chiang 2009: 107, 2-73)
‘中獎券沒這麼容易，運氣好的人才中得到’

3. 「正得」的語法和語意特點

在進入句末主觀評價「正得」結構產生機制的分析前，我們先討論其語法和語意特點。

首先，句末「正得」句法靈活性高，可以出現在動詞組、形容詞組、名詞組、感嘆詞或句子之後，分別如(11)的「發夢 ‘作夢’」、(12) 的「恁夭壽 ‘這麼可惡’」、(13) 的「豺牯 ‘貪吃鬼’」、 (14)的「阿姆哀 ‘我的媽啊’」和(15) 的「鬼愛信 ‘鬼會相信’」所示。這個特點跟先前文獻主張「得」都出現在動詞之後的限制不同(鍾叡逸 2013)。實際上，根據語料庫例句，「得」也可以出現在句子之後，如(16)的「得」是出現在雙賓句「你愛分偃幾多錢 ‘你要給我多少錢’」之後；雖然此一用法未必與句末「正得」具有直接的歷時關係，但至少顯示「得」的句法分布並非嚴格限於動詞之後。

(11) 毋去做頭路就想等愛賺大錢，發夢正得！(MOE)
‘不去工作就想著要發財，真是空想！’
(12) 恁夭壽正得！盲好食个柑仔哩！摎人摘摘下來，搵到歸地泥！(徐兆泉 2009:1400)
‘真是可惡，還不能吃的橘子啊，(就)把人摘摘下來，丟到滿地(都是)’
(13) 食盲得个柑仔就摘來食，豺牯正得 (114 客語認證中級暨中高級詞彙四縣腔: 9-242)
‘還不能吃的橘子就摘來吃，真是貪吃鬼’

(14) 阿姆哀正得，人講天上大雷公，人間母舅公 (臺灣客語語料庫)
‘真是我的媽啊！人家說天上最大(的是)雷公，人間(最大的是)母舅公’
(15) 佢講佢腳搵著，鬼愛信正得，你看佢哪！還毋係驫上驫下 (徐兆泉 2009: 461)
‘他說他腳扭到，鬼才會相信，你看他啊！還不是跳上跳下’
(16) 你係有中意，人就嫁分你，你愛分偃幾多錢得 (苗栗縣客語故事集: 102)
‘你若是滿意，人就嫁給你，你可以給我多少錢’

我們認為，這種結構的「正得」為主觀(subjectivity)標記，反映說話者對所述內容之信念、態度或評價的程度(Traugott 1995)，表說話者強烈的斷言，而非程度副詞。證據如下：首先，(12)的「恁夭壽正得」中的形容詞「夭壽」已受到程度副詞「恁」的修飾，形成「恁夭壽」的程度結構，「正得」則位於整個形容詞組「恁夭壽」之後，其功能較接近對「恁夭壽」所描述的事態加以強調與評價，而非進一步提高「夭壽」的程度。換句話說，「正得」的語意轄域高於形容詞組，主要表達說話者對相關事態的主觀評價。其次，「正得」並不限於出現在等級(gradable)形容詞之後，以(11)為例，「發夢」本身並無程度高低之分，因此難以將「正得」解讀為「作夢到極點」之類的程度修飾；整句較自然的解讀應該是「根本就是作夢」或「真是在作夢」，表達說話者對前述想法的強烈否定與評價。由此可見，「正得」的主要功能並非修飾程度，而是對前述內容或事態進行主觀評價，因此具有較高的語意轄域。這也可以解釋「正得」何以能出現在不同類型的句法結構之後，包括形容詞組、動詞組、名詞組，亦可接於(14)「阿姆哀」這類感嘆詞之後，甚至出現在(15)「鬼愛信」這類完整子句之後。換言之，「正得」所評價的並非特定詞類本身的程度，而是前述內容及其所涉及的事態，上述所討論的句法分布進一步支持將其分析為表達說話者主觀評價的句末標記。

4. 「正得」的演變路徑

在這一節，我們將進一步探討此結構產生的動因、機制和演變路徑，並透過歷時語料說明「正得」如何由原有的情態用法逐漸發展出句末主觀評價功能。

本文假設傳教士文獻、日治時期及現代台灣客語中的「正得」具有歷時上的延續關係。在此前提下，我們主張現代台灣客語句末「正得」的主觀評價功能源自等級副詞「正」與情態詞「得」原有的組合義。「正」具有「才、僅」的限制與排他功能，而「得」則表可能性，兩者結合後，「正」對「得」所表達的可能性加以限制，使某一條件 P 被理解為後續事態 Q 得以實現的必要條件，形成「只有 P，Q 才可能成立」的解讀。此一組合關係在早期傳教士客語文獻中相當清楚，如(17a)和(17b)，前者表示在滿足「鼻子吸氣」這個前述條件後，「得自然安樂」才有實現的可能，後者則以「經過好多手續」作為「清楚」得以達成的必要條件。因此，早期「正得」可分析為「P 正得 Q」的結構，「得」後面表示可能實現的事態 Q，而「正」所引入的限制義則排除其他可能條件，形成「只有 P 才能 Q」的必要條件解讀。也就是說，此階段的必要性並非「得」本身所表達的情態意義，而是「正」的限制排他義與「得」的可能義組合後所產生的結果。此一組合性用法至今仍可見於現代台灣客語中，如(18)，母親所設定的規範「寫好字」是獲得「吃點心」許可的必要條件。

(17) a. 鼻公就係人箇抖氣竈、因為佢時時都愛口束口兜清氣落、人正得得自然安樂倒
(啟蒙淺學 81)

‘鼻子就是人的呼吸孔洞，因為它時時都要吸些空氣進去，人才得以得到自然安樂’

b. 你哩件事，內容十分複雜，愛經過好多手續，正得清楚 (客家社會生活對話(下):494)

‘你這件事，內容十分複雜，要經過很多手續，才能清楚’

(18) 今晡日隔壁个阿叔來吾屋下搞，吾姆講字寫好後，正得食點心 (臺灣客語語料庫)

‘今天隔壁的叔叔來我家玩，我媽媽說作業寫好後，才能吃點心’

「正得」後續結構的省略可能是此結構進一步發展的重要轉折。早期傳教士客語中的「正得」後通常仍有明確的謂語或結果成分；然而，日治時期的《語苑》已可見「正得」直接出現在句末的例子，如(19)，雖然「正得」後面未明示其所涉及的事態，但相關內容可由前文「學到像你接噲講」得知，亦即不知道要學到什麼時候，才可以「達到像你這麼會說的程度」。現代台灣客語也有這樣的例子，如(3)。這種結構提供了由「P 正得 Q」向「P 正得 Ø」發展的結構條件，這與柯理思(2002)討論客語句末「正」產生的途徑相似。

(19) 愛學到像你接噲講，唔知愛學到幾時正得哩。(語苑 1934, 27. 9: 56)

‘要學到像你這麼會說，不知道要學到什麼時候才可以呢。’

不過，值得注意的是，後續 Q 的省略並不直接意謂「正得」已經具有新的主觀評價解讀。句末的結構環境使原本具有高度組合性的「正」與「得」之間的結構關係變得不透明，為兩者被重新分析為一個整體的「正得」提供了結構上的發展條件。另一方面，「正」原有的限制與排他功能則為「正得」後續的語意發展提供了基礎，說話者利用「除此之外別無其他可能或解釋」(nothing else) 的語用邏輯(Xiang 2011)，排除其他可能的選項，使原先「沒有其他可行條件」的排他關係進一步發展為「沒有其他合理解釋」的認知(epistemic)推論，此時，被排除的不再是其他使 Q 成立的外在條件，而是說話者認知領域中的其他可能解釋，因而形成「只能是 P」或「P 才對」的解讀，如(20)所示。此一變化顯示「正得」的功能由客觀情境逐漸擴展至說話者的認知領域(Traugott 1989)，這有利後續主觀評價功能的發展。

(20) 出差世！食到恁醉，毋食忒幾下罐高粱正得！(113 客語認證高級詞彙四縣腔: 10-79)

‘真是糟糕！怎麼喝得這麼醉，不知道喝了多少罐高粱！’

當「沒有其他合理解釋」進一步發展為說話者對某一判斷的高度確定時，「正得」便可能由認知推論進一步發展為強烈斷言與主觀評價。以(21)-(22)為例，說話者認為在拮据的經濟條件下還想環遊世界是不切實際的，「發夢正得」表面上仍可由「除了作夢之外，沒有其他合理解釋」理解為「只能是在作夢」，但此處的「發夢」顯然並非對客觀狀態的字面判斷，而是說話者對對方想法的強烈否定，因此，「只能是 P」所表達的高度確定性進一步帶來說話者對 P 的高度承諾，使原來的「只能是 P」或「P 才對」發展為「根本就是 P」，事實上，這個語境可以同時容許「只有這個判斷才合理」與「說話者對此事態具有強烈態度」兩種解讀，可視為是由認知推論功能向主觀評價功能發展的橋接語境。當前述這種例子經常使用，此結構便進一步產生純粹表達「真是 P」之類的主觀評價，如(4)或(23)，此時，「正得」主要是用來表達說話者對前述命題或事態的強烈立場，這立場未必都是負面的，也可以正面的，如(23b)。

(21) 阿嫂講佢做細妹仔時節當刁蠻，怕係講笑正得，係無大家都阿腦佢溫柔又凝家 (MOE)
‘嫂嫂說她還是姑娘家的時候很刁鑽蠻橫，應該是開玩笑才是，要不然大家怎麼稱讚她溫柔又會持家’

(22) 你又買屋、又開店，侬仔又愛去外國留學，搣到苦煎煎仔，還想環遊世界，發夢正得 (MOE)
‘你又買房、又開店，兒子又要去外國留學，弄得窮不拉幾的，還想環遊世界，是作夢吧。’

(23) a. 衰過正得，人老欸就恁樣，這痛該痛！(臺灣客語語料庫)
‘真是可憐，人老了就這樣，這裡痛那裏痛！’

b. 該載正得，手伸得出來，毋過，手指嗄夾著一支毛蟹夾 (臺灣客語語料庫)
‘真是幸運，手伸得出來，不過，手指卻夾著一隻螃蟹的螯’

5. 結論

綜上所述，現代台灣客語「正得」的主觀評價義與「正」原有的限制排他義及「得」的可能情態義息息相關。結構上，隨著後續事態 Q 可由語境復原而省略，「正得」開始出現在句末，原有的內部結構逐漸變得不透明，並被重新分析為一個整體單位；語意上，其「排除其他可能性」的核心語意持續保留，但排除的對象由外在的可能條件轉向說話者認知領域中的可能解釋，形成「只能是 P」或「P 才對」的推論義，之後再進一步發展為說話者對命題的高度承諾，以及「根本就是 P」或「真是 P」的主觀評價。簡言之，「正得」的發展過程涉及後續成分省略、句末化、重新分析與主觀化等可能的歷時變化。

引用文獻

Chiang, Shu-mei. 2009. *Event Conception and Argument Realization of Hakka Potential Complement Constructions: Integration of Cognitive-Constructional Models*. Taipei: National Chengchi University doctoral dissertation.

Traugott, Elizabeth Closs. 1989. On the rise of epistemic meaning: An example of subjectification in semantic change. *Language* 65: 31–55.

Traugott, Elizabeth Closs. 1995. Subjectification in grammaticalisation. *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, eds. by Dieter Stein and Susan Wright, 31–54. Cambridge: Cambridge University Press.

Xiang, Xuehua. 2011. Constraint reality: Linguistic expressions of restrictivity and emotive stances. A discourse-pragmatic study of utterance-final lãh in Shishan (Hainan Island, China). *Lingua* 121: 1377–1400.

王毅力. 2025.〈廣州方言“才”義副詞的歷時替換及地理擴散〉,《中國語文通訊》104.2: 679–701.

柯理思. 2002.〈客家話裡表示“暫時 VP 吧”、“先 VP 再說”的句末形式“正”〉，謝棟元主編《客家方言研究—第四屆客家方言研討會論文集》，344–357。廣州：暨南大學出版社。

葉瑞娟. 2011.〈客家話的等級副詞「正」〉，鍾榮富、蔡維天、鄭縈、蕭素英、劉秀雪編《語言多樣性：曹逢甫教授榮退論文集》，197–215。台北：文鶴。

盧惠惠. 2020.〈江西南康客家話多功能詞“正 tsã^{5}”的意義、功能及其來源〉,《語言研究集刊》1:255–267.

鍾叡逸. 2013.〈談動後模態結構：從客語模態「得」字句談起〉,《清華學報》新 43.4: 711–746.

論臺灣海陸客語的非完整體標記「nen^{35} 等」與達成情狀動詞

遠藤雅裕
中央大學・教授

1. 前言

本文根據遠藤雅裕(2025)進一步討論臺灣海陸客語的非完整體標記「nen^{35} 等」與達成(achievement)情狀動詞的共現情況。透過調查與分析發現，句子表達的體貌性質是由達成情狀動詞的次類與句法條件的互動所決定的。這是先行研究較少討論的議題。

「等」具有與漢語共通語的非完整體標記「著」平行的句法特點和功能，置於活動(activity)與結束(accomplishment)情狀動詞之後，表達該事件正在進行（例 01）或其結果狀態還在持續（例 02），亦可構成連動式「V_1 等(O_1)V_2(O_2)」，用以表示 V_1 和 V_2 所示的動作行為同時進行（例 03）。

01)a. ki^{55} ʃit^{32} nen$^{35(-33)}$ pʰon^{33}
　　佢食吃等飯。（他正在吃飯。）
　b. ki^{55} ʧok$^{5-32}$ nen$^{35-33}$ sam^{53} fu^{21}
　　佢著穿等衫褲衣服。（他在穿衣服呢。）

02) ki^{55} ʧok$^{5-32}$ nen$^{35-33}$ ʒit$^{5-32}$ ʃin^{53} sin^{53} sam^{53} fu^{21}
　　佢著等一身新衫褲。（他穿著一身新衣服。）

03) tai^{21} nen$^{35-33}$ mo^{33} ə^{55} tsʰim^{55} mo^{33} ə^{55}
　　戴等帽仔帽子尋找帽仔。（戴著帽子找帽子。）

而「等」與「著」的不同點有二，即：

第一，「等」可構成「V 等+趨向詞(來/去)」式（例 04）。江敏華(2013:852)指出此句式中的「等」仍保留著描述事件正在進行的性質。例如，例(04)後分句的「泅過去」（游過去）為具有一段過程的位移動作。前分句的「飛等去」亦是與此成對的位移動作。非完整體的視點聚焦於沒有終結點而具有幅度的過程(Smith 1997:62)。因此，此句式自然具有過程性。

04) ki^{55} teu^{53} hioŋ^{21} ŋit^{5} tʰeu^{55} kai^{21} foŋ^{53} hioŋ^{21} pui^{53} nen^{35} hi^{21}, ki^{55} me^{21} hioŋ^{21} ŋit^{5} tʰeu^{55} kai^{55} pʰien^{35} tsʰiu^{55} ko^{21} hi^{21}
　　佢兜他們向日頭個的方向飛等去，佢他乜也向日頭該片那邊泅游過去。（他們向太陽那邊飛了過去，他也向太陽那邊游過去。）《語料庫》

現在為了方便起見，根據遠藤雅裕(2026)，將沒有趨向詞等成分的「V 等(O)」式稱為甲式，這個句式相當於 Smith (1997)的基本層面動詞組(basic-level verb constellation)。而將帶趨向詞等成分的「V 等+趨向詞」、「漸變性狀語（如，「慢慢仔」）+V 等」、「漸變性狀語+V 等+趨向詞」式、「複數性成分（如，「逐日」(每天)）+V 等」等句式分別稱為乙 a 式、乙 b 式、乙 c 式、乙 d 式，這些相當於 Smith(1997)的派生層面動詞組(derived-level verb constellation)。

第二，「等」可與「大、高」等狀態(stative)情狀動詞共現，表達所指狀態的持續或漸變（例 05），亦可與「到、來」等達成情狀動詞共現，表達所指事件趨於實現（例 06）。

05) se^{21} ŋin^{55} nə^{55} tʰai^{33} nen^{35}
　　細人仔小孩子大等。（小孩子正在長大。）

06) ki^{55} lia^{55} ha^{33} to^{21} nen$^{35-33}$ sin^{53} ʧuk^{5} , han^{55} maŋ^{55} to^{21}

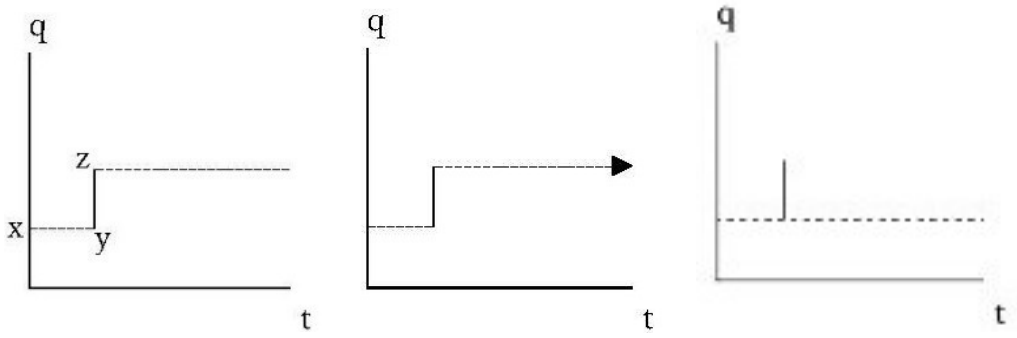
佢他這下現在到等新竹，還旨未到。（他現在正往新竹去，還沒到。）

本文的例句來源有二，一種為透過田野調查蒐集而來的第一手資料，另一種為《臺灣客語語料庫》（簡稱《語料庫》）(https://corpus.hakka.gov.tw/#/)。例句是由 IPA、漢字、小字的詞語註釋以及括號內的漢語共通語譯組成的。本文除 1.前言外，由以下四個部分構成：2.達成情狀、3.非完整體標記「等」與達成情狀動詞的共現情況、4.其他語言的情況以及 5.小結。

2. 達成情狀

開始討論之前，先確認一下情狀體(situation aspect)的情況。情狀體為動詞（組）內部的時間結構。達成、狀態、活動、結束等情狀均屬於四大情狀體類型（Vendler 1957）。其中達成情狀具有[+終結性(telic)]・[+動態性(dynamic)]・[ϕ 持續性(durative)]的語義特徵（陳前瑞 2008）。Croft(2012)則對於四大類型進行了更詳細的分類，並以圖解模式來表示。圖表 1 是達成情狀的模式，圖中的 q 軸為性質，t 軸為時間，實線為事件之中的前景部分，虛線則為背景部分。達成情狀的特點為性質突變，如，圖表 1(a)中的 y-z 部分。根據動詞短語的語義，分為(a)可逆轉(reversible)（如，The door opened. (門開了)）、(b)不可逆轉(irreversible)（如，The window shattered.(窗戶碎了)）、(c)循環(cyclic=semelfactive(單次))（如，The mouse squeaked.(老鼠吱地叫了一聲)）等三種。下面討論時，暫且將圖表 1(a)當作達成情狀的代表性圖解來解釋。

圖表 1 (a) 可逆轉　　(b) 不可逆轉　　(c) 循環



3. 非完整體標記「等」與達成情狀動詞的共現情況

現在主要根據 Smith(1997)、劉綺紋(2006)、片岡新(2010)以及 Croft(2012)等先行研究，將達成情狀動詞分為[A]位置變化動詞、[B]狀態變化動詞、[C]姿勢變化動詞、[D]單次動作動詞等四類來加以分析。A 類動詞有「來、去、轉回、到、出國」等位移動詞。B 類動詞可分為消失、停止義的「死、熄、當機死機、倒店倒閉、停、結束」以及狀態起始義的「贏、結婚、開始」。AB 類動詞隱含事件實現之前的階段（圖表 1(a)x-y 階段）。C 類動詞有「坐、企站、睡躺」等、D 類動詞有「搉敲、嗽咳嗽」。CD 類動詞的 x-y 階段不明顯。而 C 類動詞一般凸顯圖表 1(a)z 之後的階段，其靜態性相對明顯（如，戴耀晶 1997:14）。

透過調查與分析發現，「等」不但可用於 CD 類動詞，而且亦可用於 AB 類動詞。CD 類動詞與「等」共現，就會表達與漢語共通語的「著」基本上平行的語義。C 類動詞用於甲式，表達動作實現之後的〔狀態持續〕義（例 07, 08），而 D 類動詞則表達同一個事件的〔連續實現〕義（例 09, 10）。

07) ki^{55} ʦ^{h}o^{53} vuk$^{5-32}$ ʒam^{55} ha^{53} k^{h}i^{53} nen^{35}

佢他在屋簷下企站等。（他在屋簷下站著呢。）

08) ki^{55} tsʰo^{53} tʰi^{33} nai^{55} ha^{53} tsʰo^{53} nen^{35}, m^{55} hen$^{35\text{-}33}$ kʰi^{53} hoŋ^{21} hi^{35} loi^{55}

佢他在地泥下地面上坐等，唔不肯企站跕起身起來。（他在地上坐著，不肯站起來。）

09) ki^{55} kʰok^{32} nen^{35} mun^{55}

佢他搉敲等門。（他在敲門。）

10) ki^{55} tsʰuk^{5} nen^{35}

佢他嗽咳嗽等。（他在咳嗽。）

大部分 C 類動詞不能用於乙式，因而無法表達該事件即將實現（簡稱〔趨於實現〕義）（如「睡」，例 11）。而「企」則可用於乙 c 式，將動作實現之前的背景階段（圖表 1(a)x-y）前景化，表達〔趨於實現〕義（例 12）。這種特點是在漢語共通語裡見不到的。

11) *ki^{55} to^{21} min^{55} tsʰoŋ^{55} taŋ^{35} (tsʰiam^{33} tsʰiam^{33}) ʃoi^{33} nen^{35} loi^{55}

佢他在眠床床頂上（漸漸）睡躺等來。（他在床上漸漸躺下來。）

12) kai^{55} kai^{21} lo$^{35\text{-}33}$ ŋin^{55} ka^{53} man^{33} man^{33} nə^{55} kʰi^{53} nen^{35} loi^{55} le^{53}

該個那個老人家老先生慢慢仔企站等來了。（那個老先生慢慢站起來了。）

如下所示的 AB 類動詞的情況也是在漢語共通語裡見不到的。A 類動詞（例 13～15）以及 B 類動詞（例 16～18）用於甲式也表達〔趨於實現〕義。

13) ki^{55} loi^{55} nen$^{35\text{-}33}$ sin^{53} ʧuk^{5}

佢他來等新竹。（他正在來新竹的途中。）

14) ki^{55} ʒiu^{53} ʧon$^{35\text{-}33}$ vuk$^{5\text{-}32}$ ha^{53} maŋ^{55} – ki^{55} ʧon$^{35\text{-}33}$ nen$^{35\text{-}33}$ vuk$^{5\text{-}32}$ ha^{5}

佢他有[實現情態標記]轉回屋下家旨未？－ 佢轉等屋下。（他回家了嗎？－他還在路上。）

15) ki^{55} lia^{55} ha^{33} ʧʰut^{5} kuet^{5} nen^{35}

佢他這下現在出國等。（他正在辦理出國手續。）

16) ŋai^{55} kai^{21} tʰien^{33} no^{35} toŋ^{21} nen$^{35\text{-}33}$ ki^{53}

我個的電腦當等機。（我的電腦快要當機了。）

17) kʰiun^{53} loi^{55} kin$^{35\text{-}33}$ hi^{21} m^{55} ho^{35} kai^{55} kien^{53} tiam^{21} mer^{55} to$^{35\text{-}33}$ tiam^{21} nen^{35}

近來景氣唔不好，該那間店仔倒店倒閉等。（近來景氣不好，那家店快要倒閉了。）

18) ki^{55} ket$^{5\text{-}32}$ nen$^{35\text{-}33}$ fun^{53}

佢他結等婚。（他正在舉行結婚儀式。）

這些動詞與「等」共現，就會產生明顯的非完整性（具有幅度的過程性、沒有終結點）。例(19)就與例(03)一樣，表達兩個平行事件中的背景事件。前分句所指的事件具有過程性。例(20)的前分句沒有表達該事件到達終結點（新竹），因此能接受後分句的事件尚未實現（例 20a），而不能接受後分句表達該事件業已實現（例 20b）。

19) ŋai^{55} tsʰa^{53} pu^{53} ŋit^{5} loi^{55} nen$^{35\text{-}33}$ sin^{53} ʧuk^{5} tu^{55} to$^{35\text{-}33}$ ŋai^{55} kai^{21} pʰen^{55} ʒiu^{53}

我昨晡日昨天來等新竹堵倒遇見我個的朋友。（我昨天在來新竹的途中遇見我的朋友。）

20) a. ki^{55} man^{33} man^{33} nə^{55} hi^{21} nen^{35} sin^{53} ʧuk^{5}, han^{55} maŋ^{55} to^{21}.

佢他慢慢仔去等新竹，還旨未到。（他慢慢地去新竹的途中，還沒到。）

b. *ki^{55} man^{33} man^{33} nə^{55} hi^{21} nen^{35} sin^{53} ʧuk^{5}, ʒi$^{35\text{-}33}$ kin^{53} to^{21} le^{53}

佢他慢慢仔去等新竹，已經到了。（他在慢慢地去新竹的途中，已經到了。）

AB 類動詞，如同 D 類動詞，可以派生層面動詞組的形式表達〔連續實現〕義。A 類動詞（例 21）和 B 類動詞（例 22）用於乙 d 式均表達事件實現的連續性。

21) toŋ^{53} to^{53} ŋin^{55} tak$^{5\text{-}32}$ ŋit^{5} ʧʰut^{5} kuet^{5} nen^{35}

當很多人逐日每天出國等。（有很多人每天準備出國。）

22) kʰiun^{53} loi^{55} kin$^{35\text{-}33}$ hi^{21} m^{55} ho^{35} toŋ^{53} to^{53} tiam^{21} mə^{55} ʒit$^{5\text{-}32}$ kien^{53} ʒit$^{5\text{-}32}$ kien^{53} to$^{35\text{-}33}$ tiam^{21} nen^{35}

近來景氣唔不好，當很多店仔一間一間倒店倒閉等。（近來景氣不好，很多商店一間一間地停業。）

A 和 B 類的每個動詞之間有些詞義上的差異。A 類動詞一般很少用於乙 a 式。其中「到」可用於乙 a 式。另外，筆者在《語料庫》中還查到了「上等來」「落等來」兩例。

就 B 類動詞而言，亦有內部差異。下面介紹一下「死」、「當機」以及「停工」的情況。「死」與其他 B 類動詞相比，與「等」共現的條件有所限制。「死」用於甲式不能表達〔趨於實現〕義（例 23a），而用於乙 a 式（例 23b）或用於乙 b 式（例 23c）才能表達此義。根據這樣的句法語義特點，可以認為「死」的 x-y 階段不如其他 B 類動詞明顯。例(23b,c)表達一次性的事件，而例(23d)則表達〔連續實現〕義。

23) a. *ŋai^{55} kʰon^{21} to$^{35\text{-}33}$ ki^{55} ʦʰo^{53} kai^{55} si$^{35\text{-}33}$ nen^{35}

我看倒到佢在該那裡死等。（我看到他在那裡漸漸死掉。）

b. ki^{55} ʃit^{32} tʰuk^{32} ʒok^{32} lia^{55} ha^{33} si$^{35\text{-}33}$ nen^{35} hi^{21}

佢他食吃毒藥這下現在死等去。（他吃了毒藥，現在快要死了。）

c. ki^{55} ʒi$^{35\text{-}33}$ kin^{53} ʃit^{32} lia^{55} ʧuŋ^{35} ʒok^{32} gə^{55} lia^{55} ha^{33} man^{33} man^{33} nə^{55} si$^{35\text{-}33}$ nen^{35}

佢他已經食這種藥仔這下慢慢仔死等。（他已經服下這種藥，現在正慢慢等待死亡。）

d. tak$^{5\text{-}32}$ ŋit^{5} toŋ^{53} to^{53} ŋin^{55} ʒin^{53} vui^{33} pʰin^{55} kʰiuŋ^{55} si$^{35\text{-}33}$ nen^{35}

逐日每天當很多人因為貧窮死等。（每天有很多人因為貧窮而死。）

「當機」和「停工」為動賓結構的離合詞。這種動詞組之中，「等」的位置有兩種，即，「V 等 O」與「VO 等」。就「當機」而言，其體貌語義因其詞序而異。「當等機」表達〔趨於實現〕義（例 16），而「當機等」則表達〔狀態持續〕義，表示該電腦還沒修理好（例 24）。

24) ŋai^{55} kai^{21} tʰien^{33} no^{35} han^{55} toŋ^{21} ki^{53} nen^{35}, toŋ^{53} to^{53} sɨ^{33} ʦʰin^{55} tʰuŋ^{53} tʰuŋ^{53} ʦo^{21} m^{55} tet^{5} ʦo^{21}

我個的電腦還當機等，當很多事情通通全部做唔得不能做。（我的電腦還當機，很多事都做不了。）

就「停工」而言，「停等工」「停工等」兩種詞序均表達〔狀態持續〕義。

25) kʰiun^{53} loi^{55} kin$^{35\text{-}33}$ hi^{21} m^{55} ho^{35} kai^{55} kien^{53} kuŋ^{53} ʧʰoŋ^{55} tʰin^{55} {nen$^{35\text{-}33}$ kuŋ^{53} / kuŋ^{53} nen^{35}}

近來景氣唔好，該那間工廠停{等工/工等}。（近來景氣不好，那間工廠已經停工。）

如上所討論的內容可總結為圖表二（乙 b 式、乙 c 式從略、「—」表示無此說法、空格表示還不確定或尚未調查）。從表中可了解到次類之間有一種體貌性質的連續性，即，事件實現之前的階段（圖表 1(a)x-y 階段）由 A 類到 C 類依次淡薄，到了 D 類完全消失。

圖表二 「等」與達成情狀動詞共現情況

達成情狀		例子	基本層面	派生層面	
			甲式	乙 a 式	乙 d 式
A	位置	到	趨於實現	趨於實現	連續實現
		來、去、出國	趨於實現	—	
B	狀態	停、結束、開始	趨於實現	趨於實現	連續實現

		倒店、當機	趨於實現		(連續實現)
		結婚	趨於實現	—	
		死	—	趨於實現	連續實現
		當機、停工	結果狀態		連續實現
C	姿勢	企、坐	結果狀態	趨於實現	
		睡	結果狀態	—	
D	單次	嗽、打	連續實現		

4. 其他語言的情況

如上所討論的情形亦可在其他語言當中看到。比如，英語（例 26）、法語、俄語、納瓦荷(Navajo)語等語言(Smith 1997: 75)。

26) Helen was reaching the top. (Smith 1997: 172)

客語以外的漢語族語言(Sinitic languages)之中亦可看到類似的例子。例(26)和(27)分別是粵語和臺灣閩南語的。可見，這種特點應是由閩客粵語等南方漢語分享的。

27) 而家現在嚟來緊[非完整體標記]㗎啦，就到㗎啦！（現在要來啦，就到啦！）《東方廣東語辭典》

28) 伊他咧[非完整體標記]（欲要）來矣了。（他快來了）

5. 結語

海陸客語的非完整體標記「等」可以表達動態性和靜態性。在句法方面，可以與活動、結束、狀態、達成情狀動詞共現。就達成情狀動詞而言，其句子表達的體貌性質因其次類而異。在基本層面動態性最明顯的是位置變化動詞，其次是狀態變化動詞。姿勢變化動詞在派生層面才會產生動態性。單次動作動詞則在基本層面表達連續性的動態性。

類似的情況可以在閩粵語之中觀察到，應是閩客粵語等分享的特點。南方漢語的非完整體標記的句法功能應比漢語共通語的標記「著」相對廣泛。這個問題擬留待後日討論。

【參考文獻】

陳前瑞.2008.《漢語體貌研究的類型學視野》。北京：商務印書館。

戴耀晶.1997.《現代漢語時體系統研究》。杭州：浙江教育出版社。

遠藤雅裕.2025.《臺灣海陸客家語のアスペクト體系研究》（東京外國語大學博士論文）。

遠藤雅裕.2026.〈論臺灣海陸客語的非完整體標記「nen35 等」與狀態類動詞〉,《國際中國語言學學會第 32 屆年會(IACL-32)會議手冊》。75-76。

片岡新.2010.《粵語體貌詞尾「緊」的演變和發展》（香港中文大學中國語言及文學課程博士論文）。

江敏華.2013.〈臺灣客家話動趨結構中與體貌有關的成分〉,《語言暨語言學》14.5:837-873。

劉綺紋.2006.『中國語のアスペクトとモダリティ』。大阪：大阪大學出版會。

Croft, William. 2012. *Verbs: Aspect and Causal Structure*. Oxford:Oxford Univesity Press.

Smith, Carlota S. 1997. *The Parameter of Aspect* (Second Edition). Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Vendler, Zeno. 1957. Verbs and Times. *The Philosophical Review*, 66-2. 143-160.

台湾華語における「Q」を含む二音節語

――アンケート調査と言語景観の分析を中心に

日高　知恵実
明治学院大学（助教）

１．はじめに

台湾では、台湾語由来の「Q」が台湾華語に借用されて広まり、台湾華語としての商品名や広告文などで広く用いられている（図 1）。「Q」とは、「形容食物軟而有彈性」（食べ物が柔らかく、歯ごたえや弾力があることの形容）（董忠司 2010 : 302）であり、台湾語 khiu の音をアルファベット一文字で表記したものである(1)(2)。本字は定説がなく、辞書によって「飯」「餿」「糗」など複数の表記が見られる。「Q」は単音節語としても用いられるが、「Q」を含む二音節語の使用も確認されている。本研究では、言語景観において見られる商品名や広告文の用例、およびアンケート調査の分析を中心としながら、台湾における「Q」を含む二音節語の使用実態を明らかにし、その形成過程を検討する。



図 1　広告に見られる「Q」の使用（発表者撮影）

２．「Q」の語義

まず「Q」の本来の語義について確認する。臺灣總統府（1931=1983 : 279）は、「餿」と表記して「(餅などの) 粘い。粘り強い。ねちゃねちゃ。」と記している。村上（1981 : 229）は、「飯」と表記して、「ねばっこい」という意味を持つ「形容詞」としており、「蘇糍眞飯，咬沒斷／もちはとても粘っこくてかみきれない」という例文を挙げている。これらの資料から、「Q」は本来、「もちの食感」を表す限定的な語であったことがわかる。

しかし冒頭で挙げた董忠司 (2010 : 302) が「形容食物軟而有彈性」と記しているように、その後、語義が拡大している。筆者が現地で調査したところ、「Q 圓」（湯圓）、「Q 蝦堡」（エビカツバーガー）、「QQ 糖」（グミ）、「雞 Q 丸」（鶏肉団子）、「QQ 香腸」（ソーセージ）など、実に様々な食べ物の商品名に「Q」が採用されていた。さらには「食べ物」の枠を超える用例も散見された。例えば、クッション性の高いサンダルを「軟 Q 拖鞋」と説明したり、掛け布団の手触りのよさを「Q 軟感」と表現したりする広告もあった。つまり、もともと「もちの食感」として使われていた「Q」が、現在ではやわらかくてちょうどよい弾力があることを示す、プラスのイメージを持つ語として機能しているのである。これは日本語のオノマトペ表現である「もちもち」と類似した事例と見ることができる。

---

(1)小さくデフォルメしたキャラクターを、英語 cute にかけて「Q 版」と呼ぶが、本研究の対象とはしない。
(2)客家語にも弾力や歯ごたえを表す kiu 系の語が存在する。ただし、本発表では台湾華語の「Q」の直接の借用元を台湾語として扱う。両言語の kiu 系の語の歴史的関係は、今後の課題とする。

３.「Q」に関するアンケート調査

3.1　調査概要

商品名や広告文などでは、単音節の「Q」や重ね型の「QQ」だけでなく、「Q」と別の形態素から構成される二音節語の使用が確認される。例えば、2025 年に彰化で開催された「台湾デザイン展」では、5 つのグルメマップの 1 つとして「Q 彈之路」が設定された[(3)]。これは、豚肉料理や肉圓、碗粿、米苔目、麻糬などに共通する弾力ある食感を「Q 彈」と表現し、彰化の食文化を象徴する特徴として位置づけたものである。「Q」を含む二音節語は他にもバリエーションが存在するが、その使用状況や定着率には偏りがあることが推測される。また上述した「軟 Q」「Q 軟」のように、同じ 2 つの形態素から構成される、配列を逆にした 2 つの形式が、併存する場合も見受けられる。

そこで 2025 年 8 月 8 日から 2026 年 6 月 16 日にかけて、台湾出身者を対象にオンライン上で「Q」に関するアンケート調査を実施した。調査にあたっては、国立台湾師範大学の蔡恵名氏、国立虎尾科技大学の陳怡君氏の協力を得た。被調査者数は 208 名であり、出生年代別に基づく内訳は、1960 年代が 14 名、1970 年代が 46 名、1980 年代が 25 名、1990 年代が 8 名、2000 年代が 115 名である。なお 2000 年代生まれの 115 名は全員が学生である。

調査では、「Q 彈／彈 Q」「Q 軟／軟 Q」「Q 香／香 Q」の各組について、どちらが自然か、あるいはどちらも自然またはどちらも不自然と判断するかを質問した（表 1～表 3）。また各形式について、被調査者自身の使用頻度と、他人の発話やメディアで見聞きする頻度を 4 段階で質問した。「よく～」を 3 ポイント、「時々～」を 2 ポイント、「あまり～ない」を 1 ポイント、「まったく～ない」を 0 ポイントとして換算し、その合計を表 4 にまとめた。全 208 名が「よく使う」または「よく見聞きする」と回答した場合は、満点が 624 ポイントとなる。使用頻度と見聞きする頻度についても同時に調査したのは、自然度の判断が実際の言語使用や接触経験とどの程度対応しているかを確認するためである。自然だと判断される語形が必ずしも本人によって頻繁に使用されるとは限らないため、自然度に加え、自己使用と見聞きの状況についても補助的に検討する。

3.2　調査結果

表 1　「Q 彈／彈 Q」

出生年代	「Q 彈」が自然 実数（%）	「彈 Q」が自然 実数（%）	どちらも自然 実数（%）	どちらも不自然 実数（%）
1960 年代（14 名）	13（92.85%）	1（7.14%）	0（0.00%）	0（0.00%）
1970 年代（46 名）	42（91.30%）	1（2.17%）	0（0.00%）	3（6.52%）
1980 年代（25 名）	24（96.00%）	0（0.00%）	0（0.00%）	1（4.00%）
1990 年代（8 名）	8　（100%）	0（0.00%）	0（0.00%）	0（0.00%）
2000 年代（115 名）	108（93.91%）	1（0.86%）	2（1.73%）	4（3.47%）
計　208 名	195（93.75%）	3（1.44%）	2（0.96%）	8（3.84%）

(3)「2025 台灣設計展在彰化即將開展！跟隨「彰旅行」和「天地味」地圖，帶你通達彰化百景！」https://today.line.me/tw/v3/article/OpgBjxB（2026 年 9 月 24 日最終閲覧）

表 2　「Q 軟／軟 Q」

出生年代	「Q 軟」が自然 実数（%）	「軟 Q」が自然 実数（%）	どちらも自然 実数（%）	どちらも不自然 実数（%）
1960 年代（14 名）	6（42.85%）	5（35.71%）	3（21.42%）	0（0.00%）
1970 年代（46 名）	8（17.39%）	30（65.21%）	7（15.21%）	1（2.17%）
1980 年代（25 名）	2　（8.00%）	21（84.00%）	1　（4.00%）	1（4.00%）
1990 年代（8 名）	1（12.50%）	7（87.50%）	0　（0.00%）	0（0.00%）
2000 年代（115 名）	8　（6.95%）	94（81.73%）	6　（5.21%）	7（6.08%）
計　208 名	25（12.01%）	157（75.48%）	17　（8.17%）	9（4.32%）

表 3　「Q 香／香 Q」

出生年代	「Q 香」が自然 実数（%）	「香 Q」が自然 実数（%）	どちらも自然 実数（%）	どちらも不自然 実数（%）
1960 年代（14 名）	1（7.14%）	11（78.57%）	0（0.00%）	2（14.28%）
1970 年代（46 名）	3（6.52%）	36（78.26%）	0（0.00%）	7（15.21%）
1980 年代（25 名）	0（0.00%）	19（76.00%）	0（0.00%）	6（24.00%）
1990 年代（8 名）	0（0.00%）	6（75.00%）	0（0.00%）	2（25.00%）
2000 年代（115 名）	6（5.21%）	46（40.00%）	3（2.60%）	60（52.17%）
計　208 名	10（4.80%）	118（56.73%）	3（1.44%）	77（37.01%）

表 4　各語形の使用頻度と見聞きする頻度

	Q 彈	彈 Q	Q 軟	軟 Q	Q 香	香 Q
自身の使用頻度	324p	125p	158p	337p	68p	169p
見聞きする頻度	400p	146p	191p	373p	98p	215p

４．アンケート調査の分析と考察

4.1　「Q」＋「彈」

「Q」と「彈」から成る二音節語では、195 名（93.75%）が「Q 彈」を自然だと回答し、世代差も見られなかった（表 1)。「Q 彈之路」のように名称の一部として用いられる例もあるように、「Q 彈」は配列がかなり固定化し、語彙化が進んでいると見られる。ただし「彈 Q」も少数ながら使用実態があり、その存在を否定することはできない。

発表者は、「Q」と「彈」から成る二音節語について、意味的に類似する 2 つの形態素が並列的に結合したものと考える。現代中国語における「彈」(tán) は、本来「弾む、はねる」という動作を表す動詞であるが、食感を表す場合には「弾力がある」という形容詞的な性質を帯びる。董忠司（2010：302）や陳修（2000：1027）の説明にも「形容……有彈性」という記述が見られる。つまり「彈」は、「Q」の語義に内包される弾力性という意味的特徴を取り出し、明示する役割を担っていると考えられる。

単音節語の「Q」が他の形態素と結合して二音節化する背景には、上述した意味的要因に加え、中国語の韻律的特徴も関係している可能性がある。冯胜利（1996）は、二音節から

成る「音歩」（foot）が中国語の標準的な韻律単位であると指摘している。「Q」は単独の語としても使用できるが、他の一音節成分と結合することで、韻律的にも標準的な二音節音歩を形成することになる。

一方、「Q」と「彈」の配列については、丁邦新（1969）が指摘した二音節並列形式の声調の傾向から説明できる可能性がある。丁邦新（1969）は、意味的に序列が存在するものを除き、並列関係にある二成分の配列には、複合語と連語（語組・詞組）のいずれにおいても声調が同様に作用し、陰平が前、去声が後に位置しやすいと指摘した。台湾語の「飯」は陽去に属し、単字調は［33］で実現される（董忠司 2010：302, 894）。台湾華語に借用された「Q」は、台湾語の調類を引き継ぐのではなく、その調値を反映し、おおむね［33］ないし［44］の平調として実現される。この平調が陰平に相当するものとして認識されるのであれば、「彈 Q」より「Q 彈」という配列が選択されやすいということになる。

4.2 「Q」＋「軟」

「Q」と「軟」から成る二音節語では、157 名（75.48%）が「軟 Q」を自然だと回答した（表 2）。自己使用の頻度に関して言えば、「軟 Q」は 337 ポイントと、語彙化が進む「Q 彈」の 324 ポイントを上回っている。一方、世代別に見ると、1960 年代生まれでは「Q 軟」と「軟 Q」を選択した回答者がほぼ同数であり、1970 年代生まれでも「軟 Q」を自然だと回答した割合は約 65%にとどまるなど、両形式の間に揺れが観察される。

「軟 Q」の内部構造については、少なくとも 2 つの可能性が考えられる。一つは、「軟」と「Q」がそれぞれ食感の性質を表す並列構造で、「又軟又 Q」に近い関係とみるものである。この場合、湯廷池（1988：25）が指摘した、「軟」が「硬」に先行するという語義的制約との関連が考えられる。もう一つは、「軟」が「Q」を修飾し、「軟らかめの Q」を表す修飾構造とみるものである。ウェブ上の用例では、「軟 Q」に対応するように「硬 Q」という形式も確認できる。発表者が収集した用例にも「嫩 Q」「黏 Q」「脆 Q」「鬆 Q」などの「XQ」型が複数見られ、さらに「Q 度」「Q 感」といった、「Q」が食感を表す一つの概念として扱われる例も多数存在する。これらを踏まえると、「Q」が食感を表す中心成分となり、その前に置かれる修飾成分によって性質が限定されている可能性がある。

一方、逆の配列である「Q 軟」は中年層で一定数選択されているが、この層における「Q 軟」の使用頻度や見聞きの頻度は低い。このことから、「Q 軟」という形式には、すでに定着しつつある「Q 彈」の「QX」という配列からの類推が働いたとも考えられる。ただし、ある母語話者からは、「Q 軟」という配列は弾力のある状態から軟らかい状態への変化を想起させるため、2 つの性質を同時に備えた食感を表すには「軟 Q」のほうが自然に感じられるとの内省も得られた。こうした意味解釈が配列の選択に影響し、「軟 Q」が選択されやすくなる一因となっている可能性もある。

4.3 「Q」＋「香」

「Q」と「香」から成る二音節語では、118 名（56.73%）が「香 Q」を自然だと回答した一方、77 名（37.01%）が「どちらも不自然」と回答しており、特に 2000 年代生まれの若年層では「どちらも不自然」が最多である（表 3）。実際の使用頻度や見聞きする頻度を見ても、「Q 彈」や「軟 Q」の割合には及ばず（表 4）、また収集した用例でも、米や麺類など

を形容する例が多かったことから、限定的な使用にとどまるものと思われる。

「香 Q」という形式については、中国語で既存の「香 X」型からの類推が関係している可能性がある。「香 X」型には「香甜」「香脆」などがあり、両語は台湾教育部『重編國語辭典修訂本』(4)にも収録されている。「香甜」には『紅楼夢』で「十分香甜可口」という用例が見られ、またハンバーガー店の「香辣雞腿堡」のような商品名にも「香 X」型が用いられており、「香」に味覚や食感などの性質を表す成分を組み合わせる形式は珍しいものではない。このように「香 X」型という配列になるのは、食べ物の香りを感じた後に味覚や食感を知覚するという、時間的順序が関係しているのだろう。すなわち、「香 Q」は「香」と「Q」という 2 つの性質を組み合わせた並列型を取りながら、その構成要素の配列には、時間的・認知的順序が反映されていると考えられる。

５．おわりに

本研究で取り上げた「Q」を含む二音節語の広がりには、冒頭でも述べた「Q」そのものの語義拡大が関係している。近年、食に関する情報発信は、グルメ記事や広告に加え、SNS や動画配信などにも広がり、食感を具体的かつ詳細に説明する機会が増えている。「Q 彈」「軟 Q」「香 Q」などの二音節語は、そうした背景のもと、「Q」に味覚や食感を表す成分を加え、「どのような Q か」を具体化する動きと考えられる。

「軟 Q／Q 軟」に見られた世代差は、二音節語の成立過程を考えるうえでも興味深い。二音節語は当初から配列が固定しているとは限らず、複数の配列が併存しながら、実際の使用を通して一方へ収斂していくと考えられる。ここでは「Q」についてその過程の一端を同時代的に観察することができた。

湯廷池（1988 : 27）は、中国語の語構造や語形成の規則には「心理的な実在性」があり、母語話者はそれに基づいて、未知の語の意味や用法を理解し、新たな語を作り出すこともできるとしている。本調査でも、自然度の判断は必ずしも実際の使用や見聞きの頻度と一致しなかった。このことは、「Q」を含む新たな形式についても、話者が自らのもつ知識や感覚に基づいて、その自然度や意味を判断していることを示唆すると言えるだろう。

参考文献

臺灣總統府（1931）『臺日大辭典』（『台湾語大辞典』国書刊行会影印 1983 年）
村上嘉英（1981）『現代閩南語辞典』天理大学おやさと研究所 天理大学出版部
陳修（2000）『台灣話大詞典』遠流出版
丁邦新（1969）「國語中雙音節並列語兩成分間的聲調關係」『中央研究院歷史語言研究所集刊』39 本下冊
董忠司主編（2010）『簡明台灣語字典』五南圖書
冯胜利（1996）「论汉语的“韵律词”」『中国社会科学』第 1 期，pp.161-176
湯廷池（1988）『漢語詞法句法論集』臺灣學生書局

(4) 台湾教育部『重編國語辭典修訂本』https://dict.revised.moe.edu.tw/（2026 年 9 月 24 日最終閲覧）

台湾華語における特殊用法の「幫」の意味と統語的特徴*

葉晨傑・王馨由
大阪大学 講師・京都大学 博士後期課程大学院生

1 はじめに

台湾華語では、(1) や (2) のような文が接客などの特定の場面で頻繁に用いられる。一方、このような用法は普通話では一般的に見られない。永江 (2018) は、台湾華語の「幫」には、本来の「受益者が行うべき動作を動作主が代わりに行う」という意味から離脱した用法が存在することを指摘している。しかし、この用法の使用条件や統語的特徴については十分に検討されていない。そこで、本稿では、台湾華語に見られるこの特殊用法の「幫」(以下、「特殊用法の『幫』」と呼ぶ) について、普通話における容認度を確認するとともに、その使用条件と統語的特徴を検討し、それらを踏まえて「幫我」の機能について考察する。

(1)　幫我在這邊坐一下好嗎？　　(2)　(司機對乘客說) 幫我繫一下安全帶。

本稿ではまず、「幫」に関する先行研究を検討する。次に、普通話母語話者を対象としたアンケート調査により、特殊用法の「幫」の普通話における容認度を検討する。さらに、台湾華語母語話者を対象とした予備調査から、その使用条件と統語的特徴を検討する。最後に、以上の結果を踏まえ、特殊用法における「幫我」の機能について考察する。

2 先行研究

台湾華語の「幫」に関する研究は多くない。王他 (2013) は、「幫」「幫助」「幫忙」の使い分けを論じ、「幫助」では動作主が補助的な役割を担うのに対し、「幫」では動作主がより積極的に行為の完遂に関与するとしている。Chan (2020) も三者の統語的特徴を比較しているが、いずれも (1) のような特殊用法については論じていない。普通話の「幫」に関する研究は台湾華語に比べて多いが、特殊用法の「幫」についてはいずれの研究でも記述されていない (cf. 唐 2020；王 2024；黄 2025)。

一方、永江 (2018) は、台湾華語における「幫」の意味拡張について論じている。永江 (2018) によれば、「幫」の基本的な意味機能は「受益者が行うべき動作を動作主が代わりに行う」ことであるが、台湾華語では、(3) のようにこの意味から離脱した用法が観察される。(3) では、「サインする」のは話し手ではなく「李先生」自身であるにもかかわらず、「幫我」が用いられている。この点で、聞き手自身が「座る」「シートベルトを着用する」(1) (2) と共通している。

(3)　李先生，您能帮我签个名吗?

永江 (2018) の調査では、(3) のような一方的に相手に行為を求める例についても、普通話話者の一部が「幫我」を選択している。永江 (2018) はさらに、台湾華語と普通話を対象とした調査から、「幫我」が依頼・要求におけるポライトネスに関わる形式として用い

*本研究は、JSPS 科研費 26K15999 の助成を受けたものである。

られることを指摘している。永江（2020）もこの議論を発展させ、「幫」の実質的な動作義が薄れ、「～のために…する」という機能語的な用法が広がっている可能性を論じている。ただし、永江（2018, 2020）では、本稿が対象とする特殊用法の使用条件や統語的特徴については十分に検討されていない。また、普通話において（1）や（2）のような用法がどの程度許容されるかも明らかでない。そこで本稿では、普通話母語話者を対象としたアンケート調査によってこの用法の容認度を検討するとともに、台湾華語母語話者を対象とした予備調査から、その使用条件と統語的特徴を検討する。さらに、これらの結果を踏まえ、特殊用法における「幫我」の機能について考察する。

3　普通話における特殊用法の「幫」の容認度

永江（2018）は普通話と台湾華語における「幫我」と「給我」の選択について調査し、普通話でも「幫我」がポライトネスに関わる依頼形式として用いられることを指摘している。ただし、普通話の調査対象は中国大陸北方および北京の話者に限られており、（1）や（2）のような台湾華語の特殊用法そのものの容認度は十分に検討されていない。そこで、本稿では、出身地域を限定せず、学校教育を普通話で受けた普通話母語話者を対象として、台湾華語では用いられるが普通話では不自然と考えられる文を含むアンケート調査を実施した。回答者は 103 名で、20 代 58 名、30 代 31 名、40 代 7 名、50 代 6 名、60 代 1 名である。出身地は 24 省（市・自治区）にわたり、最も多い浙江省が 16 名であった。調査では、各文について「自然」「少し不自然」「非常に不自然」「非文法的」の 4 段階で判断を求めた。結果を表 1 に示す。

表 1　アンケート調査の容認度判断の結果

提示文	自然	少し不自然	とても不自然	非文	とても不自然と非文の割合
i. 女儿帮妈妈洗衣服。	62	37	2	2	3.88%
ii. 帮我在这边坐一下好吗？	3	13	39	48	84.47%
iii. 帮我到第一间试衣间好吗？	4	14	41	44	86.41%
iv.（ア）请帮我系上安全带。	88	12	2	1	2.91%
v.（イ）请帮我系上安全带。	11	22	28	42	67.96%

（i）は本来の用法の「幫」を含む文であり、「非常に不自然」「非文法的」とした回答は計 4 名（3.88%）にとどまった。一方、特殊用法の「幫」を含む（ii）と（iii）では、それぞれ 87 名（84.47%）、89 名（86.41%）が「非常に不自然」または「非文法的」と回答した。（iv）と（v）では同じ文を用い、異なる文脈を設定した。（iv）では、客がスタッフに自分のシートベルトを締めるよう求める文脈であるのに対し、（v）では、スタッフが客に、客自身でシートベルトを締めるよう求める文脈である。その結果、「非常に不自然」または「非文法的」とした回答は、（iv）では 3 名（2.91%）であったのに対し、（v）では 70 名（67.96%）であった。この結果は、「幫我」の容認度が、誰が当該動作を行うべき参与者であり、実際に誰がその動作を行うのかという文脈上の関係と密接に関わることを示している。また、「我」の指示対象を確認するため、（iv）（v）に先立って（4）の選択問題を設けた。「我」が安全確認を担当するスタッフを指し、客が自分でシートベルトを着用するという特殊用

法に相当する解釈（選択肢 B）を選んだ回答者は 2 名（1.94%）にとどまった。一方、「我」が客とスタッフのいずれをも指しうるとした回答（選択肢 C）も 15 名（14.56%）見られた。このことから、特殊用法に相当する解釈が普通話において完全に排除されるとは言えないものの、「我」をスタッフと解釈し、客自身がシートベルトを着用するという解釈は受け入れられにくいことが分かる。

（4）　（背景：游乐园的过山车准备出发之前）“请帮我系上安全带。”
这里的“我”有可能是谁？

表 2　アンケート調査における問題（4）の結果

選択肢	人数	比率
A. 坐过山车的顾客	85	82.52%
B. 负责检查安全的工作人员	2	1.94%
C. 既有可能是顾客，也有可能是工作人员	15	14.56%
D. 两者都不可能	1	0.97%

以上の結果から、本稿で対象とした、聞き手自身が行う動作に「幫我」を用いる用法は、普通話母語話者には受け入れられにくいことが分かる。ただし、（3）のように、要求された動作を聞き手自身が行う場合でも「幫我」が普通話で用いられる例が存在する。（3）と（1）（2）の違いが何に由来するのかについては、今回の調査から明らかにできない。一つの可能性として、普通話ではポライトネスへの配慮から「給」に代えて「幫」が用いられる一方、「給」自体が不自然となる環境では「幫」も用いられにくいことが考えられる（cf. 永江 2018）。この点については、今後さらに検討する必要がある。

4　特殊用法の「幫」の使用条件と統語的特徴

ここからは、台湾華語における特殊用法の「幫」の使用条件と統語的特徴について検討する。永江（2018）は、この用法が依頼・要求に用いられることを指摘しているが、その具体的な使用条件や統語的特徴については十分に検討していない。例えば、これまでに観察した用例では、いずれも話し手を指す「我」が「幫」の目的語として「幫」に後続しているが、話し手以外を指す名詞句が「幫」の目的語として後続する場合にも成立するかは明らかでない。また、受益者マーカーとして用いられる「給」は、「他给我烤了一个蛋糕」を「他烤了一个蛋糕给我」のように言い換えることができるが、特殊用法の「幫」についても「幫＋目的語」を動詞句の右側に置くことが可能かは不明である。さらに、本来の用法の「幫」では、「今天女儿帮着洗了衣服的是妈妈」のような分裂文による受益者の焦点化が一部の話者に容認されるが、特殊用法でも同様の焦点化が可能かは明らかでない。

そこで、特殊用法の「幫」を含む三つの文をもとに、文脈と統語操作を加えた文を作成し、台湾華語母語話者を対象にアンケート調査を行った。今回は予備調査として 5 名を対象とし、その内訳は 20 代 3 名、30 代 1 名、60 代 1 名である。いずれも小学校入学前から台湾華語を使用してきた話者である。統語操作を加えた文に対する容認度判断は、1 文を除いて回答が一致したため、ここでは「幫我在這邊坐一下好嗎？」をもとにした結果を表 3 に示す。

表 3　台湾華語における特殊用法の「幫」の統語的特徴

提示文	自然	少し不自然	とても不自然	非文
i. 小豪幫我在這邊坐了十分鐘。	0	0	3	2
ii. 小豪幫店員在這邊坐了十分鐘。	0	0	1	4
iii. 在這邊坐一下幫我好嗎？	0	0	0	5
iv. 在這邊坐一下好嗎，幫我？	0	0	1	4
v. 小豪幫著在這邊坐了十分鐘的是店員。	0	0	0	5

表 3 から分かるように、(i) のように平叙文に変更した文、(ii) のように「我」を話し手以外の参与者に置き換えた文、(iii) (iv) のように「幫＋目的語」を右方に移動させた文、(v) のように「幫」の目的語に相当する参与者を分裂文によって焦点化した文は、いずれも受け入れられにくい。以上の結果から、特殊用法の「幫」には、使用条件として、(I) 基本的に聞き手に何らかの行為を求める発話において用いられること、(II)「幫」の目的語が話し手を指す一人称に限られること、統語的特徴として、(III)「幫＋目的語」の右方移動が許されないこと、(IV)「幫」の目的語に相当する参与者の分裂文による焦点化が許されないこと、という傾向が認められた。これらの結果は、特殊用法の「幫」が本来の用法とは異なる使用条件と統語的特徴を持つ可能性を示している。この点を踏まえ、第 5 章では特殊用法における「幫我」の機能について検討する。

ただし、今回の予備調査はネット上のフォームを用いたため、書き言葉による判断しか得られていない。日常会話で用いられるこの用法については、実際の使用感を十分に捉えられない可能性がある。実際、「幫我在這邊坐一下好嗎？」のような実例についても「少し不自然」とする回答が見られた。今後は、調査協力者を増やすとともに、より適切な文脈を設定し、口頭による調査も実施する必要がある。

5　特殊用法の「幫我」の機能

以上の調査結果を踏まえ、本節では、特殊用法における「幫我」の機能について考察する。永江（2018, 2020）は、要求表現における「幫我」をポライトネスと関連づけて分析している。特に永江（2020）は、「幫」の実質的な動作義が薄れた用法について、その動作を相手のために行うものとして提示することがポライトネスに関わると指摘している。本稿の（1）(2) は、その中でも、要求される動作を聞き手自身が行う点で特徴的である。例えば、永江（2020）が挙げる「帮我做杯咖啡」では、聞き手がコーヒーを作ることによって話し手が利益を受けるという関係を比較的捉えやすい。これに対して、(1) で「座る」のも、(2) で「シートベルトを着用する」のも聞き手自身である。すなわち、これらの文が表す事態は、「聞き手が行うべき、あるいは行ったほうがよい動作を聞き手自身が行う」というものであり、「我」をその動作の直接的な受益者とみなすことは難しい。このことから、このような特殊用法では、本来の「幫」が表す具体的な受益関係が希薄化していると考えられる。

さらに、第 4 章の予備調査では、(II)「幫」の目的語が話し手を指す一人称に限られる、(III)「幫＋目的語」の右方移動が許されない、(IV)「幫」の目的語に相当する参与者の分裂文による焦点化が許されない、という傾向が見られた。特に（II）からは、特殊用法では

「幫」が自由に受益者を導入しているのではなく、「幫我」が一まとまりの形式として機能している可能性が考えられる。(III)(IV)に示した統語的制約も、特殊用法の「幫」が本来の用法とは異なる振る舞いを示すことを示唆している。

以上を踏まえると、(1)(2)における「幫我」は、聞き手自身が行うべき、あるいは行ったほうがよい動作を、あえて「話し手のために行う」ものとして提示することによって、聞き手に対する直接的な命令・要求を和らげる機能を果たしていると考えられる。この分析は、永江(2018, 2020)のポライトネスに関する指摘を、(1)(2)のような用法にも適用したものと位置づけられる。ただし、「幫我」の一まとまり性については、今後さらに検証する必要がある。

6 おわりに

本稿では、台湾華語に見られる特殊用法の「幫」について、普通話における容認度、台湾華語における使用条件と統語的特徴、および「幫我」の機能を検討した。まず、普通話母語話者を対象としたアンケート調査から、本稿で対象とした、聞き手自身が行う動作に「幫我」を用いる用法は、普通話では受け入れられにくいことが確認された。次に、台湾華語母語話者を対象とした予備調査から、(I) 基本的に聞き手に何らかの行為を求める発話において用いられること、(II)「幫」の目的語が話し手を指す一人称に限られること、(III)「幫＋目的語」の右方移動が許されないこと、(IV)「幫」の目的語に相当する参与者の分裂文による焦点化が許されないこと、という傾向が認められた。

さらに、これらの結果と永江(2018, 2020)の議論を踏まえ、特殊用法では本来の「幫」が表す具体的な受益関係が希薄化し、「幫我」が一まとまりの形式として機能している可能性を指摘した。(1)(2)における「幫我」は、聞き手自身が行うべき、あるいは行ったほうがよい動作を「話し手のために行う」ものとして提示することによって、聞き手に対する直接的な命令・要求を和らげる機能を果たしていると考えられる。

ただし、台湾華語母語話者を対象とした調査は予備調査にとどまっている。今後は調査協力者を増やすとともに口頭による調査を実施し、本稿で示した使用条件と統語的特徴、特に「幫我」の一まとまり性についてさらに検証する必要がある。

【参考文献】

Chan, Fang-Wei (2020) Syntactic differences between *bang*, *bang-zhu* and *bang-mang* in Mandarin Chinese. Master thesis, National Chiao Tung University.

黄钾议(2025)「"N_1+帮+N_2+X"的构式特征及语义呈现」『常州工学院学报(社科版)』43(1): 90–94.

唐青海(2020)「单双音节动词"帮""帮助"对比分析」『湘南学院学报』41(6): 77–82.

王鼎馨(2024)「"A+帮+B+VP"多义句式考察——兼论动词"帮"的介词化可能」『汉字文化』2024(14): 7–9.

永江貴子(2018)「祈使句中的"帮"和"给"的选择——从台湾华语和普通话的比较来看」『島津幸子教授追悼論集 ことばとそのひろがり(6)』461–478/

永江貴子(2020)「"帮"を用いた文のポライトネス性について」『拓殖大学語学研究』143: 25–41.

電白地域の黎話・白話・涯話における「了」標識の比較研究

王凌志
神戸市外国語大学大学院生

要旨　本稿は、広東省電白地域の黎話・白話・涯話を対象に、標準中国語および関連方言の「了」が担う完了・実現機能に対応する表現形式を比較する。母語話者 8 名への聞き取り調査の結果、三方言には「了$_1$」や香港粤語の「咗」に相当する生産的な動詞後完了標識は認められなかった。動作の完了は主として無標形式や有界的構文によって、事態の成立・状態変化は文末成分によって、結果の達成は結果補語によって表される。以上から、三方言では完了・実現の機能が複数の形式に分担され、多方言接触による地域的収斂の可能性が示される。

キーワード　電白方言、完了アスペクト、事態実現、文末標識、多方言接触

1. はじめに

電白地域は、広東省茂名市沿岸部に位置する多方言接触地域であり、閩南語系の黎話、粤語系の白話、客家語系の涯話が長期にわたって併存している。こうした言語環境では、各方言が固有の特徴を保持する一方、接触を通じて構造的な類似が生じる可能性がある。そのため、電白地域は、系統の異なる漢語方言の接触によってアスペクト表現がどのように保持・変容されるかを考察する上で重要である。これまで「了」に関する研究は、主として標準中国語や閩南語・粤語・客家語など個別の方言体系を対象としてきた。しかし、長期的な方言接触地域において、複数方言を同一の枠組みで比較した研究は限られている。

とりわけ、電白地域の黎話・白話・涯話について、標準中国語の「了」が担う複数の機能がどのように表されるかを体系的に比較した研究は少ない。そこで本稿では、標準中国語の「了$_1$」「了$_2$」および閩南語で指摘されている「了$_3$」に相当する機能が三方言でどのように表されるかを記述し、閩南語・粤語・客家語の関連形式と比較した上で、三方言に共通する特徴を多方言接触との関係から検討する。

2. 先行研究

標準中国語の「了」には、一般に、動詞後に現れて事態の実現・完結に関わる「了$_1$」と、文末に現れて新たな事態の成立や状態変化を表す「了$_2$」が区別される（呂叔湘 1980、朱徳熙 1982）。劉勲寧（2002）は、「了」を単なる過去時制標識ではなく、事態の実現・成立に関わる形式として捉えている。この観点からみれば、標準中国語の「了」が担う機能は、他方言では一つの形式に対応せず、動詞後成分、結果補語、文末成分などに分担される可能性がある。閩南語について、施其生（2023）は、動詞後の「了$_1$」、文末の「了$_2$」に加え、動賓構造の後に現れて先行事態の実現を示す形式を「了$_3$」として区別している。「了$_1$」は動詞後に現れ、事態の実現・完結に関わる機能を、「了$_2$」は文末で新たな事態の成立や状態変化を、「了$_3$」は先行事態の実現を表す。本稿では、この三分法を比較のための機能的枠組みとして用いる。粤語では、香港粤語・広州話の「咗」が代表的な動詞後完了標識であり、「了$_1$」と統語的位置・機能の点で類似する一方、文末の「喇」などは新たな事態の成立や状態変

化を表す（張洪年 2007、范曉蕾・陳健榮 2022）。ただし、粤西地域では「逋」「休」なども報告されており（甘于恩・許潔紅 2013、甘于恩・趙越 2013）、粤語内部には地域差がある。客家語でも、完了・実現・状態変化の機能は単一の形式ではなく、複数の形式によって担われる（宋彩仙 2008、遠藤雅裕 2010, 2021）。

以上から、標準中国語・閩南語・粤語・客家語では、完了・実現に関わる機能が動詞後標識、結果性成分、文末成分などに分担されることがわかる。本稿では、この枠組みに基づいて電白地域の三方言を比較する。

3. 調査方法

本研究では、電白地域出身の母語話者 8 名（黎話 4 名、白話 2 名、涯話 2 名）を対象に聞き取り調査を行い、標準中国語の「了」に対応する各方言の表現を収集した。また、筆者自身も電白地域三方言の話者であり、内省判断を補助的に用いた。なお、本稿の記述は限られた調査例に基づく予備的なものである。

4. 調査結果と分析

4.1 黎話と閩南語の比較

本調査の範囲では、電白黎話に標準中国語の「了$_1$」に相当する生産的な動詞後完了標識は確認されなかった。閩南語諸方言では、汕頭方言のように動詞後に「了」「掉」を用いる場合がある一方、泉州・遂溪などでは無標形式や結果性成分が用いられる（施其生 2023）。電白黎話でも一般目的語や方向補語を伴う構文では動詞後が無標となり、完了・実現は構文の有界性、方向補語、結果補語、文末成分によって表される。

また、数量・時量・程度成分の前には a^{21} が現れる。

（1）a. 我买 a^{21}三本书。
　　b. 我住 a^{21}三年。
　　c. 我胖 a^{21}三斤。

（筆者調査）

a^{21} は動詞だけでなく形容詞述語にも後接し、後続する数量・時量・程度成分との結び付きが強い。これらの成分が事態に境界を与えることから、「述語＋a^{21}＋有界成分」という構文全体が完了の解釈をもつ。したがって、a^{21} は標準中国語の「了$_1$」に直接対応する完了標識ではなく、述語と有界成分を結ぶ連結成分と考えられる。

一方、標準中国語の「了$_2$」に対応する新たな事態の成立や状態変化は、主として文末の o^{33} によって表される。

（2）a. 人多 o^{33}。
　　b. 天黑 o^{33}。

（筆者調査）

o^{33} は動作内部の完了ではなく、命題全体に作用し、新たな状態が成立したことを示す。黎話には a^{33}、ya^{31} などの文末形式もみられるが、本調査では o^{33} が最も広く用いられた。

さらに、施其生（2023）が「了$_3$」によって表されるとする先行事態の実現に相当する意味は、電白黎話では「完」「好」などの結果補語によって表される場合がある。

（3）a. 標準中国語：吃了饭再去。
b. 電白黎話：食完饭再去。
c. 電白黎話：门关好 o^{33}。

（筆者調査）

例（3b）の「完」、例（3c）の「好」は動作の終点・結果への到達を表し、文末の o^{33}はその結果状態が発話時に成立していることを示す。したがって、黎話では、標準中国語の「了」が担う完了・実現の機能が単一の標識に集中せず、有界的構文、結果補語、文末成分に分担されている。

4.2 電白白話と粤語の比較

電白白話は粤語に属するが、本調査では、香港粤語・広州話の「咗」に相当する生産的な動詞後完了標識は確認されなかった。香港粤語では「V＋咗＋O」の形式が一般的であるのに対し、電白白話では動詞と目的語が直接結び付き、文末成分が事態の成立を表す。

（4）a. 香港粤語：你食咗饭未呀？
b. 電白白話：食饭 a^{33}哇？

（a は范暁蕾・陳健榮 2022、b は筆者調査）

例（4b）では、動詞「食」と目的語「飯」の間は無標であり、a^{33}などの文末成分が命題全体に作用する。

一方、数量・時量・程度構文では、黎話と同様に a^{21}が述語と後続成分の間に現れる。

（5）a. 我买 a^{21}三本书。
b. 我住 a^{21}三年。
c. 佢肥 a^{21}三斤。

（筆者調査）

これらの後続成分が事態に境界を与えるため、完了の解釈は a^{21}単独ではなく構文全体の有界性から生じる。

また、結果の達成には「完」「好」「到」「齊」「淨」などの結果補語が用いられ、文末の e、「得」「嗰」などが結果状態の成立を示す。

（6）a. 食完饭先睇戏。
b. 我买到今晚嘅票得。
c. 人都走净 e。

（筆者調査）

結果補語は述語内部で終点・結果への到達を表し、文末成分はその結果状態が発話時に成立していることを示す。したがって、電白白話では、香港粤語の「咗」のような動詞後完了標識を中心とするのではなく、有界的構文、結果補語、文末成分が機能を分担している。この点は電白黎話と共通する。

4.3 電白涯話と客家語の比較

電白涯話では、一部の客家語方言にみられる「了」「嘞」などに相当する生産的な動詞後完了標識は確認されなかった。一般目的語構文では動詞後が無標となり、文末の e が事態の成立を表す。

（7）a. 台湾客家語：佢食了饭。
　　b. 電白涯話：佢食饭 e。

（a は房子欽 2015、b は筆者調査）

数量・時量構文では、e または「吔」が述語と後続成分の間に現れ、述語と有界成分を結ぶ連結成分とみられる。

（8）a. 佢食 e 三碗饭。
　　b. 佢欠 e 咁久。

（筆者調査）

また、「好」「飽」「完」などの結果補語が結果への到達を表し、「食饱饭 e」のように文末 e がその結果状態の成立を示す。以上から、涯話でも、有界的構文、結果補語、文末成分が完了・実現の機能を分担しており、この点は黎話・白話と共通する。

5. 電白三方言の横断的比較

黎話・白話・涯話には、①生産的な動詞後完了標識を欠く、②有界的構文に連結成分が現れる、③結果補語が結果への到達を表す、④文末成分が事態・状態の成立を表す、という共通点が認められる。すなわち、三方言では、完了・実現に関わる機能が有界的構文、結果補語、文末成分に分担されており、本稿ではこれを「分散型」の体系として捉える。

このような共通した機能配置は、電白地域における長期的な多方言接触と関係する可能性がある。三方言は系統的には閩南語・粤語・客家語に属するものの、同一地域で長期にわたって使用されており、完了・実現を表す手段の配置に共通した傾向が認められる。

文法化研究では、結果性を表す形式が完了・完結相の標識へと発達する経路が広く指摘されている（Bybee et al. 1994; Hopper & Traugott 2003）。電白三方言では、結果補語と文末成分の機能分担が明瞭であり、少なくとも本調査の範囲では、香港粤語の「咗」のような生産的な動詞後完了標識への集中はみられない。

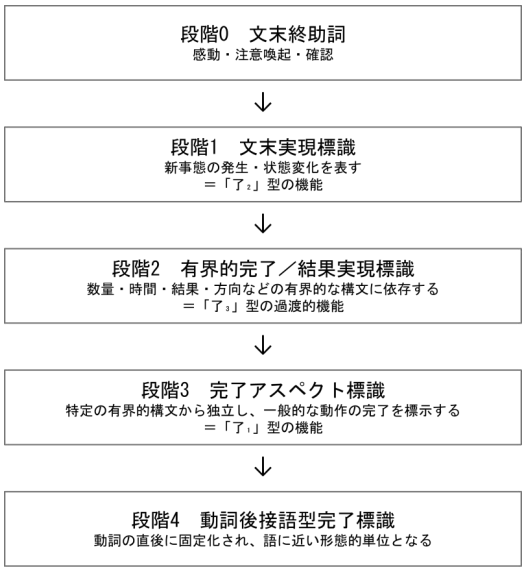


図 1　電白三方言における完了・実現表現の機能配置（模式図）

図 1 は、電白三方言における完了・実現表現の共時的な機能配置を模式的に整理したものである。三方言では、文末成分が事態・状態の成立を表し、有界的構文や結果補語が完了・結果への到達を担っている。

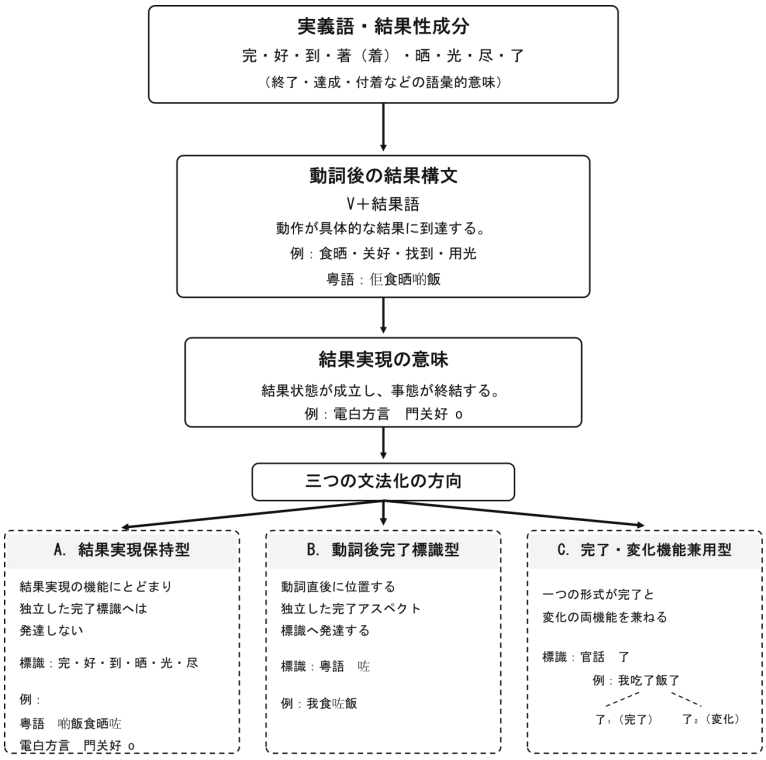


図 2　結果成分から完了標識への文法化過程（模式図）

図 2 は、結果性成分から完了標識への一般的な文法化経路を模式的に示したものである。結果性成分は、具体的な結果を表す段階から使用範囲を拡大し、完了・完結相を表す形式へ発達することがある。電白三方言におけるその発達過程については、今後さらに検討する必要がある。

6. 結論

本稿では、電白地域の黎話・白話・涯話における完了・実現表現を比較した。その結果、本調査の範囲では、三方言に共通して、生産的な動詞後完了標識を欠き、完了・実現の機能を有界的構文、結果補語、文末成分が分担する傾向が認められた。この共通性は、多方言接触による地域的収斂の可能性を示唆する。今後は、話者数や調査地点を拡大するとともに、歴史資料や自然談話資料を用いて、各形式の分布と機能、およびその発達過程をさらに検討する必要がある。

参考文献

范曉蕾・陳健榮（2022）「香港粵語「咗」的語法特點：與北京話「了₁」的比較」『Language and Linguistics』23(3), 371-410；房子欽（2015）『臺灣客家語動後體標記語法化研究』国立新竹教育大学博士論文；甘于恩・許潔紅（2013）「一种新发现的完成体标记—广东粤方言的“逋”」『学术研究』2013(3), 154-156；甘于恩・趙越（2013）「粤方言的完成体标记“休”及相关形式」『中国语文』2013(6), 546-549；劉勳寧（2002）「现代汉语句尾“了”的语法意义及其解说」『世界汉语教学』2002(3), 70-79；呂叔湘（主編）（1980）『现代汉语八百词』商務印書館；施其生（2023）『闽南方言语法比较研究』中山大学出版社；宋彩仙（2008）『客家話體標記的研究』国立中央大学修士論文；張洪年（2007）『香港粵語語法的研究（増訂版）』香港中文大学出版社；朱德熙（1982）『语法讲义』商務印書館；遠藤雅裕（2010）「台湾海陸客家語のアスペクト体系」『現代中国文化の光芒』25-64；遠藤雅裕（2021）「事態アスペクトと台湾海陸客家語の完了相について」『中央大学論集』42, 35-48；Bybee, J., Perkins, R. & Pagliuca, W. (1994) The Evolution of Grammar. University of Chicago Press；Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (2003) Grammaticalization, 2nd ed. Cambridge University Press.

日本中国語学会 全国大会予稿集からの引用について

日本中国語学会
2026 年 10 月 1 日

本大会の予稿集は、会誌『中国語学』とは異なり、全国大会当日の発表資料という位置づけです。したがって、以下の点にご留意ください。

1. 予稿集原稿の学術的登録

予稿集に掲載された原稿には、DOI（デジタルオブジェクト識別子）や ISBN（国際標準図書番号)、ISSN（国際標準逐次刊行物番号）は付与されていません。

2. 予稿集と発表内容との関係

発表当日に発表者から予稿集の修正や補足説明が行われる場合があり、予稿集は発表内容と完全に同一であることを保証しません。

3. 引用に関して

予稿集に掲載された内容を引用する場合は著者名、発行年、日本中国語学会大会運営委員会『日本中国語学会第 76 回全国大会予稿集』など出典を明示してください。

4. 予稿集原稿の著作権

予稿集の原稿の著作権は当該原稿の著者に属します。著者が自らの原稿を転載する際、本会の許諾を必要としません。

第 76 回全国大会準備会

代表　　石井　友美（岡山大学）

大会運営委員会

委員長	石崎博志	（関西大学）		
委員	池田　晋	（大阪大学）	丸尾　誠	（名古屋大学）
	加納希美	（金沢大学）	澤田達也	（京都産業大学）
	張　恒悦	（早稲田大学）	張　　玥	（お茶の水女子大学）
	三木夏華	（鹿児島大学）	石井友美	（岡山大学）
	望月雄介	（松山大学）	八木堅二	（大阪大学）

（敬称略）

日本中国語学会　第 76 回　全国大会予稿集

◆発行日　　2026 年 10 月 25 日

◆編集　　日本中国語学会全国大会運営委員会
〒564-8680　吹田市山手町 3-3-35
関西大学文学部　石崎博志 研究室

◆発行　　日本中国語学会全国大会運営委員会
〒564-8680　吹田市山手町 3-3-35
関西大学文学部　石崎博志 研究室

◆助成　　公益社団法人おかやま観光コンベンション協会

◆後援　　公益社団法人おかやま観光コンベンション協会

表紙 写真提供：岡山県観光連盟